-d r a w-

かっぱ同盟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
－ｄｒａｗ－

【Ｎコード】
Ｎ８４６８Ｘ

【作者名】
かっぱ同盟

【あらすじ】
不思議な老女に出会ったオノダ・キクマサは、その出会いによって美術の道を極めようとルネ・ヴィルトン美術学校に入学する。ルネ・ヴィルトン美術学校にはルネ・ヴィライアーと言う特殊な特待制度があり、キクマサもそれを目指すが……。個性豊かなヴィライアーを中心に、世界の文化、遺産、神話を交え、美術と言う視点からそれぞれの問題と向き合っていくリアル＆ファンタジー。

プロローグ

一生涯において、出会える美しい物の数って決まっているのだろうか
人によって、差があるのだろうか

美を極めた者にしかたどり着けない場所ってあるのだろうか
そういう人にしか見えない物ってあるのだろうか

世界って広い

僕らが思ってる以上に奥深く

僕らが思ってる以上に美しい

「それなら君にとって、美術って何だい？」

細かい金の細工のイスが、またギシッと音を立てる。５０代前半ほどの男の教授が、長い机の向こう側から聞いた。

最後の質問であった。

彼はこの質問を、３年前に聞かれたことがあるけど、その時は答えられなかった。

向かい側、教授の座っている金のイスが、再びギシッと音を立てる。

「…それは……世界の美しいものを、ちゃんと見つけられる力だと……」

彼の目の前の紅茶が、イスがギシギシ鳴くたびに、少しゆらぐ。でも、それで現れた水の模様だって、彼には美しく見えた。

教授はダリのような髭を撫で、

「…よろしい……的を得ていて」

満足そうに笑う。そして、付け加えるようにさりげなく。

「そうですな。君にはなかなか、どうにも良ろしい天性のものがあるようで。それは、沢山の美術品を見ることで、更に良ろしくなるもので」

「…はぁ…、“良ろし”ですか…」

彼は、どうにもこの教授の言い回しについていけずに反復してみた。
教授は、片眉根を上げて、彼の書類に印を刻んだ。

「ようこそ、ルネ・ヴィルトン美術学校へ。それならばきみがここで……」

「世界の美しいものを、見極められますよう」

教授が立ち上がったことで、また金のイスが鳴いた。

―ｄｒａｗ

＊シーズン１の登場人物

＜ｄｒａｗシーズン１の登場人物＞
シーズン１のキャラクターを大雑把に説明します。読んでいる途中に「こいつ誰だっけ……」となったら見てみてください。気になった時に覗いていただけると嬉しいです。

＞ｉ１７０４４―４８８＜

～絵画科ルネ・ヴィライアー～

＊オノダ・キクマサ（ルネ・アメジスト）／二年生
主人公。クールそうに見えて案外天然。記憶力が病的に無い。

＊ルナシー・ミディエム（ルネ・トパーズ）／二年生
ヒロイン。金髪美少女。いつも笑顔でおっとりしているように見えるが……

＊フォルテ・ゴットバルト（推ルネ・クリスタル）／二年生
キクマサのルームメイト。雑学が多い。考古学オタク。

＊レイデル・リローズ（推ルネ・ペトリファイウッド）／二年生
二年生一の天才。フォルテの幼なじみ。感情的。

＊ハク・リュオン（ルネ・テクタイト）／五年生
みんなの団長。恐い事で有名だがそうでもない。可哀想なくらい運が無い。

＊メルベリー・セレネーム（ルネ・パール）／五年生
副団長。メルベリー嬢と呼ばれている。ミス・絵画科

＊ティアン・レーゼス（ルネ・ターコイズ）／五年生
団長補佐。実際はこいつの天下。鬼畜メガネ。

＊サイオンジ・ナギ（ルネ・ダイアモンド）／五年生
日本画留学生。アトリエが腐海の森。ミーハーである。

＊レッドリー・ヘッドバーン（ルネ・ルビー）／五年生
貧乏だがイケメンの男子寮長。人気者。ウインクが癖。

＊シャンデリー・リオール（ルネ・ガーネット）／四年生
ルネ美新聞による学園ランキングで、全てにおいて一番輝いている男子部門一位。

＊シルフィーダ・ケイド（ルネ・カーネリアン）／四年生
リオの彼女。メンバーにお母さんとも言われる。世話焼き。

＊フレイ・レステヴァン（ルネ・エメラルド）／四年生
プレイボーイ。不真面目そうで、意外と仲間思い。

＊シャルロ・グレディア（ルネ・アンバー）／四年生
賞金女王。女王様気質で、勝負事に強い。

＊スノーフリーク・ロズベルト（ルネ・オパール）／四年生
絵画科きっての天才。基本ローテンション。

＊カイ・ヴォストン（ルネ・ハウライト）／三年生
ヨーロッパの鑑定王子。学校にいるよりテレビに映ってる事が多い。

＊ジェイル・クオーシャン（ルネ・サファイア）／三年生
男嫌いで有名。強がっているが案外臆病者。

＊クレハ・ドルフォード（ルネ・コーラル）／一年生
野生児系電波少年。なぜか会話が通じない。チョコレート中毒。

＊ヘルクロウ・ラヴィーニ（ルネ・アクアマリン）／一年生
名家のおぼっちゃま。小心者でクレハに振り回されている。

《イメージボード》

＞ｉ１４３６９―４８８＜

＞ｉ１４３７２―４８８＜

～彫刻科ヴィライアー～

＊パリス・ヴァレリー（ルネ・ゴールドロッド）／五年生
彫刻科団長。表は優しそうだが、絵画科の研修地などを裏で操る。
鍵を探している。

＊ロードルーン・アイスキネス（ルネ・シルバーロッド）／五年生
彫刻科副団長。淡々とした青年。

＊エマ・ベリル（ルネ・プラチナロッド）／五年生

よくパリスに意見する。タロット占いを得意とする。

＊アルマ・カイザード（ルネ・アイアンロッド）／四年生
気の短い青年。パリスには忠実。

＊フィル・レグール（ルネ・ブロンズロッド）四年生
知的で落ち着いた青年。

＊ブリジット・バルーン（ルネ・スチールロッド）三年生
太ったおかっぱ娘。おしゃべり。

＊シャトー・オークラン（推ルネ・ウッドロッド）二年生
穏やかな天然少年。いつもニコニコしてる。

＊スカーレッド・マリーニ（ルネ・グラスロッド）一年生
無口な少女。言うときは言う。

～他学科団長～

＊リーベル・キルマー（ルネ・ＸＩＩ）／五年生
デザイン科団長にして、団長総会長。さわやかぶっているが腹黒そう。

＊オペリア・フォード（ルネ・ミカエル）／五年生
ファッションデザイン科団長。モデルでもある。高飛車。

＊ジーク・ウィリアムズ（ルネ・シリウス）／五年生
映像科団長。ハリウッド俳優を両親に持つ。アホ故のカリスマ性を持つ。

＊レクサ・ホープキンス（ルネ・サンフラワー）／五年生
建築ガーデン科団長。団長の中で基本空気。しかし人は良い。

～教師陣～

＊エリック・オーディール（理事長）
ルネ・ヴィルトン理事長。この職にストレスを感じている。

＊エリーゼ・オーディール（絵画科ヴィライアー主任）
カトレアの娘。やり手の教師。厳格で、無表情。

＊ネイリー・ドールマン（二年生担当教師）
キクマサ達の担任。基本優しい。

＊ガイル・アンドリュー（絵画総主任）
ですぞ口調のおじいちゃん先生。変人。

＊ヴィンセント・フレジール（彫刻科ヴィライアー主任）
名前だけ。詳細は不明。

～エジプトプラン編～

＊セティさん
観光案内人だったはずだが、謎多いまま消える。

＊ツタンカーメン
悲劇の少年王。キクマサと仲良くなる。

＊アンケセナーメン
ツタンカーメンの妻。夫を強く愛する。

＊アクエンアテン
ツタンカーメンの前のファラオ。アマルナ改革を強行する。

＊ネフェルティティ
アクエンアテンの妻。現代で有名な“ネフェルティティの胸像”のモデルである。

＊宰相アイ

アクエンアテン、ツタンカーメンと仕えてきた老宰相。ツタンカーメンの次のファラオである。

＊ホルエムヘブ
若き将軍。宰相アイの次のファラオである。

＊タハール
ラーの神官。勇ましい若者であったが、後に呪いの化身となる。

＊タハール少年
タハールの息子。

＊カーロン
ラーの神官団の長。タハールの父。黄金のマスクの隠し場所を知っている。

＊セト神
黒い神官とされていたが、後に神だと分かる。タハールを呪いの化身に変える。

～その他～

＊カトレア・オーディール
　キクマサに絵を教えた師匠。

＊ジェシカ・バーナード
　キクマサ達の同級生。レイにコンプレックスを抱いている。

＊レミオ
　キクマサ達の同級生。情報通。

＊マクナスさん
　学校内の画材屋の老人。

＊ミハエル先生
　大御所鑑定士。カイの力を認めている。

＊マルティン

評論家。ルネ・ヴィライアーを嫌っている。

＊オノダ・キクジ
キクマサの父。日本の外務省大臣。

＊カツキ・サキコ
キクマサの母。画家であったが自殺した。

＊オノダ・ミチコ
父の再婚相手。

＊オノダ・キヨシ
父の隠し子。ミチコの子供。

０１：色の無い時代

人生に色ってあるのだろうか

例えば、バラ色の人生とかって言うし、画家のピカソには、青の時代とか、あったって言う。

意味合いが違うかもしれないけど、人々はきっと、時代時代によって、彩られて生きている。

何と美しいこと。

ガタン…ガタン…

木製のイスの趣のある汽車。「世界の車窓から」とかでよく見るあれに近いと思う。

オノダ・キクマサは１６歳の日本人だった。茶髪に焦げ茶の瞳、い

かにも今時な輝かしい年頃を王道に楽しんでいるような、ちょうどいいくらいに垢抜けた少年。この髪と目の色は母親譲りで、日本人にしては少々華のある顔立ちである。

彼は今、とても虚ろな顔で窓から外を見ていた。
見渡す限りの小麦畑。青い空、広大なプスタ。

ちょうど、ハンガリーくらいだろうか。

『全くあの人は、一体何を考えているのだろうか。ギリシアへ行かないといけないのに、オーストリア行きの航空チケットしかくれなかったじゃないか。おかげでそこからギリシアまで、長い長い列車の旅だ』

キクマサは淡々とそんな事を考えていた。文句のような、不満事のような、しかしどことなく異国の空気に気を取られながら、何だかんだ言ったって楽しんでいるようにも見えた。

突然黄金のプスタが途切れ、暗いトンネルに入った。入ったと思ったら、再び青い空。
しかし、小麦畑は淡い金色から姿を変えていた。

何とまぁ広大な、どこまでもどこまでも続くヒマワリの畑。

太陽の花だ。

虚ろだった瞳が、一変して色を得る。

「…うそだろ……」

ポツリと呟いた。
だって今は3月中ほど。
日本でも、今年は桜さえ見ないで出てきたというのに。

桜を待たずに、飛び出したというのに。

やっぱり世界って広い。

広大な太陽の花は、地平線の遥か彼方まで広がっていて境なんてわからない。
やっぱり気候が違うのか。はたまた土が違うのか。

日本だったら、この時期にこんな景色見られるはずがない。

キクマサは、じわじわと心の中の焦燥感に気がついた。

あぁ、まただ。
またしても、あの人にしてやられた。

敬愛する、カトレア・オーディール先生。
あなたはこれを見せたかったのですね。

世界には美しいものが沢山ある。

あなたはいつも、そう言っていたから。

列車の汽笛の音がする。

あれは、3年前の雨の日のことだった。

そうだ。あの日こそ、自分にとって幸せだった日はない。

人生の色を塗り変えたあの日。

あのアトリエを見つけたあの日。
美しい世界に足を踏み入れた日。

あのころの自分はただ弱くて、滑稽なほどに愚かだったから、今は思い出すだけでも恥ずかしい。
世界の美しいものを見たこともないくせに、見ようともしなかったくせに、
勝手に世界は真っ黒だと思い込んでいた。

真っ黒でも何でもなかったのに。
ただ、色の無いつまらない、くだらない時代だっただけなのに。

雨の止まない一日だったと思う。
キクマサは体中傷だらけで、とにかく奴らから逃げていた。

とにかく奴らから逃げていた。

中学生になって、そうそうのことだった。

学校なんてほとんど行かなかった。
不良の中でさえ有名な、手に負えない不良だった。

今となっては、かなり馬鹿げたことだと思うけど、
ちょっとしたことで、本当に地獄を見るような、そんな暗い世界だった。
言えない様な悪事もしてきたし、

他人が傷つくのを見て、嘲笑っていた。

そんな、色の無い時代だった。

こんな抗争よくあることだったけど、とにかく今日はひどいものだ。

雨の音が、やけに耳に付く。

キクマサは街角のビルの、灰色の壁に手を当て、息を整えた。
壁に血が付くけど、すぐに雨に流される。

まるで、自分たちみたいだ。自分たちみたいにあっけなく跡も残ら

ない程意味の無い存在。

足音が聞こえる。
早くここから立ち去らなければ、奴らに見つかる。

血が落ちる。
足がふらつく。

ああ・・・だめだ。目がかすむ。

あちこちで耳障りな争いの声。まだ子供であるくせに、粋がって強がって、くだらない事ばかりやっている。
金属バットを引きずるような、叩き付けるような音。

誰かがキクマサを見つけたようで、何人もが追いかけてくる。キクマサは舌打ちをして、痛む足を引きずって逃げた。

捕まってたまるものか。
あんな奴らに。あんな奴らに。

自分もあんな奴らと何も変わらないくせに。

ビルの隙間をぬって、行く当ても無く逃げた。

ふと、目の前の色が変わる瞬間をキクマサは見抜いた。
暗いビルが立ち並ぶ通りを抜けたら、そこには、不思議なくらいに

場違いなレンガの壁。なぜだかそれにハッとさせられる。
ひび割れたところから、庭が見える。
何とも異様な空気の。
でも、不思議と吸い込まれるような。
洋風の庭、静かな霧。呼ばれているような、ぬるい雨。
誘いの風。

ここが、誰かの家で、誰かの庭だなんて考えてなかった。
キクマサはレンガをよじ登る。
その小さな庭に降り立ったとき、無意識に深呼吸した。
レンガの道と、雨にぬれた花々。
道に沿った木々と、不思議な霧。
こんな空気初めてだ。

しんとした、たった数秒の沈黙。
音の無い存在感。

あまりにも不思議な感覚に、キクマサは傷の痛みや、奴らから逃げていたことを忘れていたが、急に目の前がふらついてひざまずいた。
息が荒れている。やっぱり、傷は酷いのか。

その時だった。
空気の流れが変わったように思えたのは、きっと勘違いなんかじゃない。
目の前に誰かが現れた。
「……誰だい？」
長いスカートに、長い長い銀の髪。
誰だ……？
意識は途切れた。
暗い闇に、銀の粉がチラチラ降り始めた。
綺麗で胸騒ぎがする。
切ないくらいに美しい。美しくて苦しい。

いったい自分は何を求めていたのだろうか。

砂を手に取った。

「……」

息を荒げ、キクマサはソファから飛び起きた。

「おや、起きたのかい。ああ、まだ動いちゃいけないよ、酷い傷なんだから」

「……」

その人は、髪がすべて真っ白になった老女だったが、とても不思議なムードを持った人で、キクマサはいまいち自分の状況が読めずにバツの悪そうな顔をしていた。

「あんた、私の家の庭で倒れていたんだよ。いったい何だってそんな傷を負って。血だらけだったんだもの、驚いたよ」

老女はポットで、ティーカップにお茶を入れ、キクマサの前に置い

た。
ふわりと、濃いハーブの香りがする。
キクマサは相変わらず、顔も上げずに黙りこくっていた。
「…私の名前は、カトレア・オーディール」
キクマサはドキッとして顔を上げた。異国の名前だったからだ。
初めてしっかりと、そのカトレア・オーディールの顔を見た。やはり外人のはっきりした顔立ちであった。
すらっとした体に、長く緩やかな白髪。
カトレアはゆっくりと笑った。
「不良少年達と喧嘩でもしたのかい？　オノダ・キクマサ君」
「……！？　何で俺の名前…」
キクマサは顔をしかめる。
カトレアはくすくす笑うと、エプロンのポケットから黒い財布を取り出した。
「……！！？」
それは、キクマサの財布だった。カトレアはニヤァと愉快そうに笑うと、財布の中から１つのカードを取り出し読み上げた。
「オノダ・キクマサ……ふーん、この歳でカードをもっているとはけったいな。今は学校の時間じゃないのかい？　…まあいいか」
カトレアはカードを財布の中に戻して、キクマサのほうへ投げ返し

た。
キクマサはとても複雑な顔でそれを受け取り、そしてまた、その女を見上げた。

ここから出て行きたい。
こんな所に居たくない。

それなのに、体中が痛くてどうしようもない、そんな自分に腹が立つ。
自分はいったい何をしているのだろうか。こんな見ず知らずの外人の所に居たって、何にも得な事は無い。

「…私、あんたの名前が好きだねえ。“キクマサ”って、この国でも珍しいだろ」

「……」

「この国、日本の美しい花だ。菊の花から付いているのなら、なおさら…」

キクマサは、冷めた目でカトレアを見上げた。その視線は今までの会話の中で一番鋭かった。

「あんた、この花がいったい何なのか知ってんのかよ」

「……」

「…菊の花が美しいもんか」

キクマサは、声を絞り出すように言った。

カトレアは、最初は驚いたように目をぱちぱちとさせたが、その後はなんだか落ち着いた瞳でキクマサを見つめる。

「…どうして？」

「死んだときに、捧げる花だからだ」

キクマサは、もうそれ以上に答えなんて無いんだ、というように断言した。
カトレアは一時、じっとキクマサを見ていたが、視線をそらす。

「…なんだ。あんた死が美しくないとか、言うのかい？」

「……」

「死は人生の終わり。締めくくり。自分のすべてを白紙にもどす。綺麗じゃないか」

カトレアの物言いに、キクマサは睨む様に彼女を見る。

「死んだら終わり。何もかもだ」

「そうだ。でも死んで、残るものだってある」

カトレアはそう言うと、ぼろぼろのエプロンから何かを取り出した。
それはバラバラと音を立て、テーブルの上に色とりどり美しく散らばっては、規則な形で静止した。

ただの絵の具のチューブだったのに。もうほとんど絞り出したようなものまで。

「人々に植え付けられた、鮮明で色鮮やかな記憶」

そして彼女は立ち上がった。

「…まるで絵のような」

キクマサは言葉に詰まった。まさかそのように言い返されるとは思っても見なかったから。

自分の状況に翻弄されてあまり意識していなかったが、この部屋はオイルの匂いで満ちている。

しかしまあ、なんと懐かしい匂いがするものだ。

油の古い、その香り。

キクマサは、部屋のその奥を見た。そこには、先ほどのような、絵の具や油、筆などが雑においてある。

後ろ向きに立ちぼうけのイーゼル。

物言わぬキャンバス。

「あんた、油絵を描くのか…？」

キクマサは不意に尋ねた。

「ああ…よくわかったねえ。あんたみたいなのが油絵だって」

カトレアは少し驚いたように。

キクマサは、なんだかよく解らない焦燥感にせかされ、立ち上がっ

た。彼の視線は一直線に、背を向けたキャンバスの方へ向いている。
体は痛いのに、わざわざ堪えて引きずって、それでも、その絵を見たいと思ったのだ。

「……」

それは、Ｆ５０のサイズ。割と大きなキャンバスである。
青の色を基調として、菊の花が描かれていた。

“青菊”

死してなお、生き続ける花よ。

私をいつか、彼の国へと。そしていつか、この国へと。

それを繰り返し、何度この花を軽蔑したか。

再び、戻れる日まで。

／以下省略

キクマサの頭の中で、何かが途切れた。

まるで、急にテレビが壊れたみたいに。

コンセントを抜いたみたいに。

何だったんだ、今のは。

絵を見て引き込まれたのだ。その世界に。

何とも言えぬ衝撃にクラクラしたキクマサは、その場に座り込んだ。
座り込んだまま、それでも目の前の絵から視線を逸らす事が出来なかった。

訳も分からず涙が出た。ただ、目の前の絵を見ただけなのに、押し寄せる感情は嘘をつけない。

これが、感動というだけで終わらせられるものなら苦労はしないのに。

「あんた…もしかして……」

カトレアは、キクマサに駆け寄ってから、その様子をジッと見た。
そして、その先の言葉に詰まった。

それくらい、彼は泣いていた。
ただ、その絵を見ただけ。それだけで心の中は乱され暴かれたのだ。

そういう絵だったのだ。

今思えば、そう言った“感動”という名の物語を直に見れたことは、この上なく幸せで稀なことだったのかもしれない。

そういう絵と出会えたということ。

キクマサは、“絵”をみるのが初めてではない。
彼の実の母は、昔日本で名の知れた画家であった。

母の絵が、キクマサにとって唯一の“絵”であった。
今までは。

| draw

02：情熱を知っている

絵を描きたい、描かなければと願っていた自分が居る

自分は情熱を知ってたはずだ

「へぇ、あんたあの“カツキ・サキコ”の息子かい？」

キクマサがようやく落ち着いて、自分の話をポツポツと言い出した。
カトレアは、有名な画家の息子だと言う彼に驚く。
彼女は長い外国の葉巻を吸いながら、そんな彼をまじまじと見ていた。

「それは何とも奇運なことだ。私も一応あちらでは名の知れた画家だったんだよ。それで、あんたは絵を描くのかい？」

「もう…とっくの昔にやめたよ。……見たらわかるだろ、今じゃ喧嘩ばかりの不良だよ」

「そりゃそうだ」

カトレアは大声で笑った。彼女は何だかとても御機嫌で、一方的にキクマサと馴染んでいる。

「それならもう、絵を描く気は無いのかい？」

「……」

キクマサはハッとして、一瞬目をそらし、

「描くわけないだろ…絵なんて…。母さんは絵にのめり込みすぎて…あの男に捨てられたんだ…。絵って残酷だよな…」

どこかを酷く睨んでいる。過去の向こう側を。

「母さん…自殺したんだよ」

美術は時として、人を惑わす。
そういう力を持っている。

カトレアはキクマサ向かって静かに、でも意味深な笑みを浮かべるとテーブル越しに身を乗り出し、キクマサにとって、きっと一生ついてくるであろう質問をした。

「それなら…あんたにとって、美術って何だい…？」

「……は？」

「怖いかい、美術が…」

カトレアの声音はよく響く。痛いくらいに。

キクマサは言葉が出ずに、ただ、その質問への驚きに瞳を揺らしていた。

「…何だって？」

「怖いかいって聞いたんだ。美術は時として残酷。お前の言っていることは正しいよ、キクマサ。私はそれをよく知っているのだから。お前は母を殺した美術が怖いかい？　だから絵をやめたのかい？　お前も父親に捨てられるのがこわかったんだろう？」

カトレアは、まるでわざとキクマサの心の奥を引きずり出そうと、ズバズバ言いたい放題だった。

しかし、キクマサは何だか疲れきったように、少しだけカトレアを睨むと、

「だったら何だって言うんだ。お前に何の関係があんだよ」

声を低めてそう言った。

目の前の彼女は口元に妖しい笑みを浮かべ、「ほお」と満足げにしている。

「あれだけチクチク言ったのに、熱くならないねお前は」

「おあいにく様、俺はもう父親には捨てられたも同然でね。今や一人で他のマンションに住まされているからな。…あいつはさっさと新しい家庭作って、幸せにやってる」

キクマサはいたって冷静だった。
でもその分、落ち着いた声で自分の現状を口に出すと、何だか少しだけ胸が痛かった。

キクマサは次の日もここにいた。何だかこの場所から離れられないのだ。
きっと、懐かしい。懐かしすぎるから。

母と同じ香りが、絵画を描く空間の匂いが、このアトリエには溢れている。

カトレアもキクマサを追い出さなかった。この外国の老女は不思議な人だ。キクマサは今まで、こんな人に会ったことがない。

彼女はよく、自分の庭を散歩してスケッチして回ることが多かったから、キクマサはその間に、この家のアトリエをこっそり見て回った。

白い石膏像が並ぶ部屋。油まみれの古臭い部屋。
ガラス張りの日当たりの良い部屋。

この家の中はどんな場所でも不思議な力を帯びている。

キクマサは油絵の道具が沢山置いてある部屋の、あるキャンバスの前で立ち止まった。それは白い、無のキャンバス。
変な衝動にかられるのを、自分自身良く分かっていた。

久しく絵など描いてないし、長い間描きたいとも思わなかったのに、昔の、絵が好きで好きでたまらなかったころをどうしても思い返してしまうのだ。

母はキクマサに絵を教え、彼が絵を好きになるのを見守ってくれていた。
しかしそれだけでなく、外で自然と触れあったり、様々な生き物を見たり、音楽を聞いたり、そういうことも一緒にしてくれる人だった。

キクマサは絵が好きだ。
本当は今でも。

キクマサにとって、絵とは母だったから。そして、母とは憧れだったから。

だからこそ母が死ぬと、自分の中の絵だって消えてしまう。
絵を描く意味も、理由も目標も無くなったのだ。

「……」

彼は、ただその白いキャンバスを手でなぞった。
手触り、こすれる音、それは今も昔も変わってなどいない。

そして、その場に転がっている筆を取る。
もう、筆を取る意味などなかったのに。

ただ、がむしゃらに、ただ自分の思うままに、
絵を描く怖さに負けたくなくて、

油の光、色の魔力に翻弄されながら、彼はただ夢中で色を乗せた。
その白いキャンバスに。

神様
美術の神様

どうか、絵を描かせて下さい

カトレアはスケッチから帰ってきて、そのキャンバスを見た瞬間に息をのんだ。手に持つスケッチブックを落としてしまうくらいに、力が抜けていった。
何も描かれてないはずのキャンバスに、見知らぬ色がのっている。しかし、それは到底無視出来るようなものではない。

それは言葉より確かな、訴えだったから。

“罪”

僕が再び筆を手にしたことをお許し下さい。

母さん

彼女はその絵から目をそらすことなく、頭に強く響く訴えを直で感じ取り、へなへなと座り込む。

『……何と…』

震える手を握りしめ、ニヤリと笑うと、胸に湧くザワザワとした感覚に鳥肌を立てた。

『素人の絵で、“イマジン・ストーリー”を見ることになるとは…』

それは、歓喜の歌。驚きと裏表の喜び。

ただの色をざんばらにのせただけの、デタラメな絵だ。
なのに。

「…なのに…あんた……本当に絵が好きなんだねぇ…」

疲れきって、ソファで眠るキクマサに向かってそうつぶやいた。
技術とか、上手い下手とか、そういうレベルの話ではない。

そうではないのに、他人に訴えかける絵が描けるのだという事。
カトレアは原石を見た。

この、良くも悪くも、強い絵への執着心。

これがどれだけ、この少年の感性と才能への大きな武器となることか。

キクマサはソファーで静かに涙を流した。眠りの中で涙した。
やはり、自分は絵を忘れてはいなかった。

体が覚えていて、今か今かと待っていたのだ。

ごめん。

ごめんね、母さん。

あなたを殺した絵を、俺は諦められなかった。
あれだけ、落ちるだけ落ちて、色の無い時代を生きてきたというのに。

次の日の朝、カトレアはキクマサに言うことになる。

「…絵を描きな、キクマサ。あんたは絵を描かなきゃだめだ。…ここで絵を教えてあげる」

彼女の視線は、彼を一心に捕えている。

「私があんたに、絵を教えて、そしてその先を示してあげる」

教えてあげる。
世界には、美しいものが沢山あるのだと言うこと。

「…見せてあげる、世界の広さを」

君のような子こそ知らなければいけない。
見極められなければいけない。

この世界の、あらゆる姿を。

後に彼は彼女の手を取り、美術という紙一重の世界に足を踏み入れることになる。
この出会いから約三年間、キクマサは彼女の元で、彼女の弟子として、絵画の技術や美術の精神を叩き込まれる。

時は彼を待っていたのかもしれない。

彼の力が目覚めるのを。

キクマサは１６歳になる。

ある日の朝、カトレアは二人で過ごしたテーブルに、一通の手紙を残してアトリエから消えて居なくなった。それは前触れも無く突然の事で、キクマサはどうと言う気持ちにもなれなかった。

彼はこの空虚な空間で、彼女の手紙を読んだ。

“キクマサへ”

私はもう、次の場所へ行かなくてはいけません。
私の旅は、まだまだ続くのですから。

あなたはこれから知るでしょう。美術の本当の意味を。

あなたにとって、美術とは何なのか。
今なら答えられますか？

私はあなたに、次の舞台を用意します。
もう手続きは済ませているので、心配せずに、世界の広さ、美しさを知りに行きなさい。

カトレア・オーディールより

弟子　キクマサに、私の全てを込めて

次の紙は、ある美術学校への入学手続きであった。

汽車の音がキクマサを現実の世界へと戻す。

キクマサは窓から、その目映いばかりの白と青を。ギリシアの海を見て、絶句した。

「……エーゲ海って、こんなに青いんだ」

世界って広い。
だからきっと、あらゆる姿の中に、美しいものがあるって信じたい。

世界には、沢山の美しいものがある。
あなたはいつもそう言っていたから。

それの本当の意味を知るために、ここまで来たのだから。

―ｄｒａｗ

03：ルネ・ヴィルトン美術学校〈上〉～ルームメイト～

様々な歴史、因縁を掲げた
我が偉大なるルネ・ヴィルトンよ

＞i334831365＜

キクマサはアテネにいた。
何とか、あの言い様の無い旅を終え、この場所に着いた次第である。

「すごいなぁ…これが学校と言えるものなのか……」

都心外れの丘の上に、その学校はあった。広大な敷地であると言うのは、校門の大きさから既に伺える。レンガ造りの小道の向こうに、白い大きな建物が覗く。
とにかくその学校は、学校と言うよりは古い城のようでヨーロッパの情緒を思わせる。

キクマサは初めての空気に胸が躍った。

静かだ。

校門から本館までは遠く、長い広い道が続く。両側はきれいに手入れされた庭で、芝が光に照って美しいグリーンを彩る。そして芝生のさらに向こうは、ずっと森のようであった。緑とレンガの赤と、城の白い色がとても良い調和を作っている。

そして、ふと思う。ここにはやたら噴水が多い。

形は様々、いたるところに噴水があるのだ。常に耳には水の流れる音が聞こえる。

道の途中、今まで見たのよりそれは大きく立派な噴水を目の前にした。

道の分かれる、開けた中央広場のようになっている所に、その噴水はがんとして佇んでいるのだ。

しかし、キクマサが息を飲んだのはその噴水のせいではない。

「……」

噴水の外に漏れる微かな水しぶきを、ただひたすら見つめる少女がいた。

ブロンドの緩やかに波打った髪が、その景色に見事に映えるのだ。

ポロン…
銀色の高い音が胸の底に落ちた。

ふと、少女はキクマサの方を向いた。キクマサはあまりに凝視していたので、慌てて目をそらしたのだが、彼の動揺は見て取れただろう。彼はそのまま通り過ぎる。

二人のすれ違い際に、何かとても不思議な空気が、ふわりと無色のミストを天に放った。
その時の時間の流れは、やけにゆっくりで、印象的であった。

中央棟のガラス張りの玄関の前に、一人の女性が立っていた。キクマサはその女性にペコリと頭を下げる。
女性は上品に、にこりと笑う。

「ルネ・ヴィルトンへようこそ。歓迎致しますわ、オノダ・キクマサさん。私は絵画科の教師をしているネイリー・ドールマンです。あなたの担任というわけです」

ネイリー先生はキクマサを招いて、2人で校内へ入った。入ったとたんに、パイプオルガンでも聞こえてきそうなほど、厳かで、神聖な空気。中央ホールと言ったような、最上階まで筒抜けのバロック

調の建築。

キクマサが呆気にとられているのを、ネイリー先生は頷くと、

「今はまだ春休み中だから、新学期まで人は少ないでしょう。新入生は、入学式一週間前から、寮に入るのを許されるので、これから次々と寮入りするわね。あなたのルームメイトも今日来るのよ。仲良くなれると良いですね」

見知らぬ土地、見知らぬ世界に戸惑った様子のキクマサに優しく語る。

その後も彼女は、その校内を案内しながら、これから先のことを話してくれた。

「まだ新学期は始まっていないけれど、新入生は別として、生徒たちはきっと作品づくりに取りかかっているでしょうね。もうすぐ大きなイベントがありますからね」

「……大きなイベント…ですか？」

「えぇ…そうですとも」

ネイリー先生はキクマサをチラッと横目で見ると、

「この学校はね、新学期早々大きなコンテストが開かれるのです。そうね…、キクマサさん、あなたも出して見てはいかが？1年生で出す人も少なくはないわ。あなたはあの方が推薦してきたのだから、大きな期待がかかっているのですよ」

さりげなく、でも嫌みに聞こえないよう心がけた様子だった。

「あなたは一応、推薦入学という形でこの学校の入学を許されています。明日、少しばかり面接をしますね」

「はい…」

キクマサは、ふむと思ったくらいで、興味はむしろ校内のあちこちの美術品に向いていた。

ふと、その中でもひときは目を引く大きな絵があった。

キクマサには、その絵が誰のものであるか見ただけで分かったから。

「……カトレアさんの絵…」

それは、柔らかいタッチと優しい色あいの風景画。雰囲気はまさしくカトレアのものである。この学校の庭…あの噴水を描いた絵。

違うな…と思う。やはり高見の人物なのである、あの人は。

「……分かるのですね。その通り、これはオーディール夫人の描いた絵画」

「オーディール夫人…？　カトレアさんのことですか？」

「えぇ。この学校の旧理事長の奥様でいらっしゃいますわ、あの御方は」

キクマサは、これにはやはり驚いた。

しかし、なるほどと納得したのも事実、そうであるからこそのキクマサの推薦入学なのである。

「ネイリー先生！！」

その時、廊下の向こう側から、先生を呼ぶ声が聞こえた。キクマサとネイリー先生は、同時にその方向を見る。

「まぁ…“ルネ・ルビー”……ご機嫌いかが？」

「ご機嫌は良いですよ、先生。それよりも、さっき教頭先生がネイリー先生を探していました。…何か急ぎの用事っぽかったけどなぁ…」

キクマサは、目の前にやって来た、“ルネ・ルビー”と呼ばれた男を見上げた。
長身で、スタイルの良いかなりの男前で、彼はキクマサに気付くと、愛想良く笑いかけてきた。

「まぁ、どうしましょう…。今からオノダさんを寮へ連れていかなければならないというのに。そうですね…ルネ・ルビー、あなたにお任せしてもいいかしら。一応、絵画男子寮の副寮長ですものね」

ネイリー先生はその男子にお願いすると、慌てた様子でチラッとキクマサを見る。、

「彼は、絵画科の四年生、レッドリー・ヘッドバーンです。…一応“ルネ・ヴィライアー”の1人でもありますので、分からない事があったら聞いて下さい。さて、ルネ・ルビー…新入生のオノダ・キクマサさんを、男子寮に連れて行って下さい。先輩らしく、親切に…。まぁ…あなたには言うまでもないですけど」

レッドはネイリー先生の顔色を伺うように、ニコリと笑った。

「わかりましたよ、先生。…てか、先生僕について“一応”多すぎますって」

ネイリー先生は眉を上げ、粋に笑うと、クルリと姿勢良く立ち去ってしまった。

この場所には今やキクマサとレッドリー・ヘッドバーンだけで、それ以外は静かな廊下の日の光だけだ。

「…さて……」

レッドリー・ヘッドバーンはキクマサのほうに向き直ると、

「オレはレッドリー・ヘッドバーン…ってさっきも言ったけどね。レッドでいいよ。この絵画科の寮のことなら、知らないことは無いから」

「……よろしくお願いします。オノダ・キクマサです」

キクマサはレッドを探るように見上げ、当たり障りの無いあいさつをした。

彼とは４つ差となるが、とても大人のように見える。

二人は並んで、男子寮まで歩きながらいろいろな話をした。

というより、レッドが上手い具合に話を運んでくれているのだが。

この先輩は、人に好かれやすいだろうなと、キクマサは密かに心で思っていた。

「キクマサ君は日本人かい…？」

「……分かるんですか」

レッドの唐突な質問に、キクマサは多少面食らった。

「うーん……名前の響きから何となくね。俺の友達にも日本人がいるから」

キクマサは隣のレッドを見上げた。

彼は相変わらずだが、視線はやはり大人びていて、片耳についている十字架のピアスが印象的であった。

「ありがとうございました。…先輩」

キクマサは、レッドに導かれるまま部屋の前に着いた。

レッドは顔の前でひらひら手を振って、陽気で爽やかな空気を壊さない。

「いやいや、これも先輩の役目の一つだよ。俺、四階の一番端の部屋だから、わかんない事があったらいつでも聞きにおいで」

彼の溌剌とした笑顔は、とても清々しい。

キクマサは正面きって、やっと気づいたことがある。

「……」

彼の胸には、赤い美しい宝石のついたブローチが。
それはとても目を奪われるような。

見ていると、変な魔力に包まれてしまう…。

「おーい、キクマサ君」

レッドの呼び声で、ハッと我に返った。
今のはいったい何だったのだろうか。

「大丈夫？」

「あ……っすいません…」

キクマサは少し頭を叩いた。不思議な感覚はいまだ体に残っているのに。

彼は知る由もなかったのだ。今感じたものへの圧倒的違和感を。
美術品の本当の意味も、恐ろしさも。

レッドの胸に付けていた、赤いルビーのブローチ。
この学校の象徴。

歴代の“ルネ・ヴィライアー”の意志を含んでいる、我々の誇りと因縁の印よ。

キクマサは部屋に入ろうとして、ふと名前の標識に目が止まった。

「……フォルテ・ゴッドバルト……？」

キクマサの名前の下に、もう一つ名前があったのだ。ルーム・メイトという事だろうか。

部屋を開けると、温かい空気が溢れてきた。日当たりのよく、簡単な作りだがとても清々しい部屋だ。白くて窓の大きなせいで、ギリシアの青い空がそのまま部屋を飾る絵画になっている。

静かで、窓から差し込む光に乗って、キクマサは何だか胸の奥の温

かい物を感じた。

新しい世界
新しい環境

カトレアのアトリエを見つけた時と、同じ何かを感じる。このワクワクはとても気分の良いもので、それでいて落ち着いている。
キクマサはカバンをベットの脇に置いて、自分の机の表面をそっと撫でた。

その時、扉の外でガタガタと物音がしたので、キクマサはその方を見た。
ガタガタ音はするものの、なかなか開かないのでもしかしたらと思って、中からキクマサが開ける。

「……あ…」

扉の外には、黄色に近い茶髪の少年が、重そうな荷物を両脇に抱えて立っていた。
額には太いバンダナをしていて、背が高い。

「うわ…ごめん。荷物とかスゴくて、俺。ごめん、ありがとう」

「え、いや……どうぞ」

キクマサは扉を全開にしてあげた。
ズルズル入ってくるその少年を見流しながら、なるほど、彼がルームメイトかと心で頷いた。彼は「やあやあありがとう」とばかり言っている。

彼こそが、フォルテ・ゴッドバルト。

この先、キクマサと共に美術の道を歩んでいく、無二の大親友となる男であった。

「そうか……君は日本人なのか。あ、俺はベルギーから来たんだよ」

フォルテという男は、特に臆することなく、キクマサに色々話しかけてくる。

「へぇ…ベルギーか…」

キクマサは、『ベルギーってドコだっけ…』とか、実は心の中で思っていたけれど、そんな事とてもじゃないけど言えなかった。

フォルテは、自分のベットの上に気楽に座り、何だか楽しげにあちこちを見渡している。

「いや～、俺まさか、このルネ・ヴィルトンに現役で受かるなんて思っちゃいなかったからさぁ。これで“ルネ・ヴィライアー”になれたら最高なのになぁ」

「ルネ・ヴィライアー…？」

先ほどからチラホラ聞く言葉であった。ネイリー先生もレッド先輩もごく普通にその言葉を使っていたけれど、キクマサにとっては未知なる言葉でしかない。

「…え？　知らないのかい？　ルネ・ヴィライアー制度さ。このルネ・ヴィルトンの最大の特徴！！」

フォルテはベットから身を乗り出し、キクマサに訴えかけるように。キクマサは慌てて頷く。

フォルテは口をあんぐりさせていたから、キクマサは気まずそうに視線を斜め下に向けた。
これを知らないのは、かなり有り得ないのだろうな。

「…この学校はね、全５学年で、絵画科だけでも１０００人以上はいるんだ。その中の絵画科トップ１６人を“ルネ・ヴィライアー”って呼ぶんだよ。要するに特待生だ。“ルネ・ヴィライアーになると学費が免除されるし、進路の幅も広がるし、何より世界中の研修に行ける。この学校の生徒は皆、この枠を目指しているんだ」

「……へぇ」

キクマサは、いまいちピンとこない様子で、他人ごとのような反応であった。フォルテは顎を支えていた腕をズルッと滑らせ、呆れた顔でキクマサを見る。

「本当に何も知らないの？？」

「……うん。」

「じ、じゃあ逆に聞くけど、何でこの学校を選んだの？　大抵はルネ・ヴィライアーを目指してやって来てるのに！！」

フォルテの信じられないというような顔を前に、キクマサはフムと腕を組んで、堂々と無知をさらす。

「…日本で絵を教えてくれた人が、ここの旧理事長の奥さんだったらしくて。まぁ俺もさっき知ったんだけど……いつの間にか入学手続きされてたんだよ」

「まじ？　それってスゴくない？　…旧夫人ってカトレア・オーディールだろ？？」

「…知ってるんだ」

キクマサは顔を上げた。

「知ってるも何も、このギリシアでは超有名な画家じゃないか。なんか世界中回ってるって聞いてたけど、…日本でお前に絵教えてたんだな。いいなぁ…」

「……」

確かにあの人は、どれくらい高見にいるのか分からないくらい絵が上手かったし、自分でも画家だって言っていた。

だけど、あのアトリエでは自分とあの人だけで、それ以外はなかったから実感が無かったんだ。

あの人は、やはり世界を舞台に立ち振る舞っていた人。

世界を震撼させた画家であったと。

「……ま、いいか」

フォルテはコロッと気を直すと、

「話を戻すけどね、とりあえずルネ・ヴィライアーになるのって本当に難しい」

憂いを込めるように、ハァと溜め息をついた。

「もうすぐ、この選抜の“ルネ・ヴィライアー・コンテスト”があるけど。略してルネ・コンね。今年は…何枠だっけな。毎年枠数は去年のヴィライアー卒業者の数で決まるからね…。ほとんど上学年が取っていくしなぁ…」

フォルテの話で、キクマサは、さっきネイリー先生が言っていたコンテストの意味を、やっと理解した。

「ルネ・ヴィライアーとは、言わばこの学校の象徴。みんな憧れてるんだよ。絵画科のルネ・ヴィライアーは宝石の異名をもらえるんだ。…主な１６色を基盤にしてね」

「……宝石の異名…？」

キクマサは待てよと思った。宝石と言えば、思い当たる節がある気がする。

「そう。宝石。…確かルネ・ダイアモンドって日本人じゃなかったっけな。初の日本画特待生で話題になってたから…」

フォルテは斜め上を向きながら記憶をまさぐっていた。キクマサは探るような口調で、

「…じゃ、ルネ・ルビー…っていうのもその一種？」

「え？…うん。何だ知ってんじゃん」

「知ってるっていうか…、さっき会ったっていうか」

あの長身で、ハンサムだった、レッドリー・ヘッドバーン。確かにルネ・ルビーって呼ばれていた。

そうか、あの人はこの学校の象徴である“ルネ・ヴィライアー”の一人だったのか。

やっと色々なことが繋がりだしたキクマサ。

「へぇ！！　凄いな、会ったんだ！！」

フォルテは、この例の“ルネ・ヴィライアー”というのにとても憧れているようで、反応に熱がこもっている。

キクマサでさえ、確かにこの制度は面白いなと思ったし、何よりそんな、この学校の代表のような人たちの絵を見たら、きっとどんなに凄いのだろうと思う。

“ルネ・ヴィライアー”か…。

高い音を立て、心の奥底に、一つの鍵が落とされた。

見てみたい。

見てみたい。
手が届かないと思いたくもないのに、そのくらいの衝動を絵に求めている自分もいるから。

鍵が落とされた音がした。

draw

04：ルネ・ヴィルトン美術学校〈下〉～美しきものの世界～

落とされた鍵を、そのまま触れずに沈めておくのも、水から引き上げ、鍵穴を求めるのも自分次第。

キクマサとフォルテは一時談話した後、このルネ・ヴィルトンの校内を見て回る事にした。入学式はまだ5日後だとはいえ、早々に、この広く複雑な学校を覚えてしまわなければ。

絵画科の寮は絵画棟の隣だ。

「ルネ・ヴィルトンは全部で7つの棟に別れているんだ。中央棟と…六つの科だね。…六つの科があることだって今知ったんだろ、お前は。へぇーそうなんだー、とか思ってんだろ、どうせ」

「うん」

キクマサは平然とした顔で、当然のごとく頷いた。

フォルテは「しょうがないな…」とか言いながら、少し嬉しそうに、

「いいかな、キクマサ君。この学校は主に六つの科から成り立っている。その中で選択別に分かれたりするけどね。…例えば…」

フォルテは廊下をキョロキョロと見て回ると、実技室と書かれた表札の前で立ち止まり、それを指差した。

キクマサも、彼の指先に視線を移し、その表札を見た。

それは、実に見事に造られた、金属と木を用いた素晴らしい彫刻であることは一目瞭然であった。

「こういう表札は、確か彫刻科の奴が創ったはずだよ。凝ってるよなぁ…」

「…彫刻科…か…」

キクマサはゆっくり頷いた。

なるほど、美術は決して一つではない。絵画だけではないのだ、と納得する。

「他には、ファッションデザイン科とか、映像科とか。珍しいのが建築ガーデン科だな。“庭”を扱うのはうちの学校くらいだよ…。あとは、絵画科と並ぶほど規模の大きいデザイン科だね。デザインも幅が広いからなぁ」

フォルテとキクマサは校内を歩きながら。

「それでもやっぱり、ルネ・ヴィルトンって言えばファイン系だけど」

二人は廊下を抜け、絵画科の中央ホールに出た。

広々高々と筒抜けていて、バロック調の造りが厳かで、やはり校内にも噴水があった。その噴水の中心に立つブロンズ像の女性が、黒く艶かしい光沢を内々に秘めているように謎めかしく、ゾクッとする。

水の、ザァァと流れる音に、キクマサとフォルテは一度立ち止る。

これが、ルネ・ヴィルトンなのだ。

学校とはいえ、空間や空気を全てを材料に美術品を作り出している。

その時、フォルテが急に噴水の向こう側に駆け出した。何かに気がついたように。

「え…、おい！！」

キクマサは少し驚いて、彼の後を追った。

「……」

フォルテは、三枚の絵の前で立っていた。
その絵は真ん中のものを一番高見に、左のものを二番目に、右のものを三番目に掲げ、それは堂々として、とても目を引きつけられた。

「…これ……」

キクマサはその3つの絵を見上げた。

「今年の受験者トップ3の絵だ。…毎年ここに飾られるらしいんだ。……凄いや」

フォルテは三枚の絵に釘付けだった。
特に、真ん中の一番高くにある絵に。

「…凄いや、レイ……トップ入学だったんだ」

「……レイ？」

「うん、あの中央の絵。あれはレイデル・リローズっていう子の絵だ。俺、同じ美術学院出身だからわかるんだ…。あいつはいつか、ルネ・ヴィライアーになるよ…」

フォルテの表情からは、何というか、悔しさや後込み以上に、尊敬のまざった喜びに近いものを感じた。

「……」

キクマサは再び絵を見上げる。例の中央の絵を。
それは、キクマサが今まで見たことも無いような絵。

一瞬で目に焼き付き、離れない。
何だこれは…。

たくさんの子供が一人の大人の女性を囲み、本を読んでもらっている（ようにみえる）絵。
なんと美しい色、優しいタッチと強いタッチの絶妙なバランス。

なんと焦がれる絵であろうか。

“夢の話ー前夜ー”

孤児院を出たいかい？

いいえ、ミセス・リローズ。私はもう帰るところはございません。

孤児院を出たいかい？

いいえ、ミセス・リローズ。僕はもうあんな寒い夜を、一人で耐えたくありません。

それなら望みは何なのだい？

（少年と少女は顔を見合わせる。）

ずっとここにいたいのです。

（ミセス・リローズは困ったように笑う。）

それは無理だよ。大人になるのは出ていくということだから。あなたたちが戦争を終わらせなくちゃ。

／以下省略

呆然とした。
頭の中に、鮮明なイメージが叩きつけられたからだ。

イマジン・ストーリーだ。

イマジン・ストーリーとは、美術品から展開する物語のことで、ある種の想像、妄想、そうせざるを得ない魔力である。
描き手と鑑賞者の両方に、美術の力を必要とする。

感性だ。

フォルテはその絵を見つめながら、呟いた。

「…凄いよなぁ…、相手に訴えかける絵が、もう書けるんだから…」

キクマサはまさにそのとおりだと思う。
技術があるとか、よもやそういう所の評価じゃなくて、いかに相手に語りかけてくる絵なのかという事。ダイレクトに印象強く、はたまた心にじわじわ来るような水の水面のような衝撃でも。

それが、どんなに感動を生むのかという事。

「ほら、レイの絵があるわ」

「ちょっと、待ちなさいよ、ルナシー」

その時、中央噴水越しに、二人の女の子の声がした。
キクマサとフォルテが振り返る。

「…あ、レイだ…」

フォルテは少し後ずさるような態度で顔をしかめたから、キクマサは不思議に思った。
二人の少女が、フォルテとキクマサに気づく。

「……あら、フォルテ・ゴッドバルト。ご機嫌いかが」

黒髪ショートカットで猫目の少女は、フォルテを見つけるやいなや、少し間をあけわざとらしく挨拶をした。

「やぁ…、レイデル・リローズ」

フォルテは相変わらずたじろいでいる。
キクマサはフムと思った。

そうか。
この子があの絵を描いた子。

ふと、レイの隣の子が目に入った。

フワフワの金髪で、肌は透けるように白く、まるで西洋人形のような絵本に出てくるお姫様を地で表しているような美しい少女。

「……あ……」

見覚えがある。
さっき、外の大きな噴水の前にいた子だ。

金髪の少女はキクマサを見ると、やはりキクマサと同じような反応をして、そのままふわりと微笑んだ。

「レイ、この人たちどなた?」

金髪の少女は、背の高いレイを見上げて尋ねた。

「…あぁ、このバンダナの奴は、フォルテ・ゴットバルトっていう、幼なじみよ。家が隣なのよ、やんなっちゃう」

「……」

キクマサはフォルテを見上げた。
フォルテは何か言いたげで、でも何も言えなそうにして、口をつぐ

んでいる。

「それと……、そっちの茶髪の彼は、あんたのルームメイト？　へぇ、あんたと違ってハンサムね。紹介してよ」

レイはニヤリと笑うと、猫目でキクマサを見上げる。

「オノダ・キクマサだよ。日本人だから、キクマサが名前ね。お前の言うとおり、俺のルームメイトだ」

フォルテはしらじらした顔で、キクマサを紹介した。
キクマサは「どおも」と頭を下げる。

「そう、よろしくね。私、レイデル・リローズっていうの。こっちの子はルナシー・ミディエム。私のルームメイトよ」

レイは隣のルナシーを紹介した。

「へぇ、君と違って超美人だね」

フォルテは先ほどの事を言い返すように逆手に取った。
レイは右頬をひくつかせたが、フンと鼻で笑うと、

「さ、行きましょう、ルナシー。こんな所で足止め食らってる時間が惜しいわ」

彼女はフォルテを睨み流し、ルナシーを連れそこから立ち去ろうとした。

「あ、待ってレイ」

ルナシーは少しばかり振り返ると、

「ねえ、キクマサ君…私さっきあなたに会ったわ。そうよね」

鈴のような声でキクマサに聞いた。
キクマサは驚いたが、そのまま頷く。

「…あぁ、噴水の所でだろ?」

さっきの、あのゆっくりした時間。
何とも印象的な空気は、今でも覚えているから。

君は、美術品のようだった。

ルナシーは、何だか嬉しそうに顔を輝かせ、一度笑うとレイを追って行ってしまった。
金髪が揺れて、空気に光を落としていく。

感嘆の声を、心で呟くしかなかった。
フォルテは口笛を一つ吹いていたし。

「あんな子、実際いるんだな…」

物語から抜け出したような、人離れした不思議な美しさが、あの子にはあった。

あの噴水での出会いは、決して偶然ではなかったと思う。

世界には美しいものが沢山ある。
それは、とらえ方次第で、なんとでも言えるのだから。

この４人の出会いは、彼ら自身にとってとても大きな財産である。
後のキクマサにとって、なくしては有り得ない出会いだったに違いない。

彼らが踏み入れる世界は、万華鏡のように色鮮やかで、何万何千と見方を変えていく。

妖しく際どい、美術の世界。

歳が近く、絵のレベルも近く、または遠く、それでもそういう人たちの絵を見て、

期待、不安、喜びを心に秘め、

微かな焦燥感を感じ、

今、美しきものの、未知なる世界への扉を開いたのだ。

ｌｄｒａｗ

05：セレネの祝福〈上〉

月の女神セレネよ

今日の良き日を、我々の未来に繋いでください。

キクマサはベッドから飛び起きた。

昨日はひどく寝つきが悪かったから、何だかいまだに眠いけれど。

長い夢を見ていた。

一年前、この学校へ来た時の夢だ。

向こう側のベットで、フォルテがいびきをかいて寝ている。

「おい、起きろってフォルテ。今日は“新一年生”の入学式だぞ。レッド先輩に言われたじゃないか、今夜の歓迎会の準備は、俺ら“二年生”に任せるって」

キクマサは寝起きの頭のままで、フォルテを揺さぶった。

彼は布団にくるまったまま、小さな声で唸っている。

キクマサは溜め息をついた。

こいつとルームメイトになって一年たつけれど、朝起こすのにはいまだに苦労する。

一年前に、出会ったあの時の事を、俺は夢で見た。

噴水の隙間、合間からのぞく、色鮮やかな記憶。

そう。あれから一年たったのだ。

俺たちは今日から二年生だ。

窓の向こうから、朝日が見える。

一年前から続く、今日も何と、美しい朝。

このような朝が、いつまでも続きますように。

「見てみろよ、キク。新入生がたくさんいるぜ」

「そりゃそうだろ。入学式だからな、去年だってそうだった」

キクマサは、薄黄色と青の、ななめボーダーのネクタイを結びながら、フォルテの背中越しに下界を見た。

寮の部屋の窓からは、ルネ・ヴィルトンの正門あたりがよく見える。

いつもは静かで厳かな学校も、今日は打って変わってにぎやかで華やか。

「俺らもやっと先輩か。いいね、今年はどんなやつらが入ってくるかな」

フォルテはバンダナをつける前に、ワックスを手のひらで伸ばし、髪を立てたり飛ばしたりしていた。キクマサも当然、こういった作業は髪を洗う並に必要事項である。

「あらー、やっぱダメか。ねえ、キク。お前の貸してくれよ。日本製の味を知ってしまったら、その他なんてただのでんぷんだよね、でんぷん」

「…でんぷんねえ」

キクマサはベット越しに、ポイと投げた。

「ところでキク。今年のルネ・コン、一次審査用の絵どう？　良い感じ？」

「…どうかな、あと二週間あるし何とかなるんじゃない。去年よりましだよ」

「去年なぁ～…、あの時は無知だったよ。よもや入学して、たったの二週間で、一次通過できる絵が描けると思ってたこと事態が間違いだった。道理で歴代ルネ・ヴィライアーに一年生がいなかったわけだよ」

去年のことを、フォルテはしらじらと思い出していた。
確かにあの時は、本当に無知だったと思う。

上の学年は、もうずっと前からルネ・コン一次審査用の絵を用意していたのだから、一年生が入学して、たったの二週間でどうにかなるようなものでもない。

一次審査では、約三分の二が切り捨てられる。
たとえ一次で残っても、二次ではより強い先輩と競うのだから、なかなか生き残れない。

ルネ・コンは全部で四次までである。最後までとてつもない根気と集中力を要する。

ルネ・ヴィライアーになれるのは、本当に選ばれた人だけだ。
去年はそれがよくわかった。

「まあ、今年は二年生だけの推薦ヴィライアー枠も2つあるし。これ狙いしかねーだろ、実際」

「…推薦ヴィライアー枠？　何それ」

キクマサは、一年たった今でも、分かっていないことがたくさんあった。

フォルテはもう慣れたというように、平然と説明する。

「基本的に、ルネ・ヴィライアーになれるのは16人だけど、＋2人分、推薦ヴィライアー枠ってのがある。なかなかチャンスの巡ってこない二年生の中で2人、一年契約のルネ・ヴィライアー見習いさ。これは一次の通過作品の中から選ばれる。だから二年生はとにかく、一次に命をかける。推薦ヴィライアーになれば、次の年でのルネ・コンは、そのままストレートで正規ルネ・ヴィライアーになれるのがほとんどだよ」

「…へえ……いいね、それ」

キクマサは、今始めて知った、なかなかおいしいシステムに感動した。

でも、冷静に考えてみて、2年生だけでも200人はいるから、その中で2人っていうのも、なかなかの確立である。

「2年生で普通にルネ・ヴィライアーになった人っているの？」

「そりゃあ、稀にはいるさ。四年生にルネ・ガーネットがいるだろ、リオ先輩。あの人確か二年生でなってたはずだよ。5年に1人って言われてんだぞ、二年生がルネ・ヴィライアーになれる確率は」

いったい5年間に何人、ルネ・ヴィライアーが入れ替わっての一人なのか、あまり知りたくないなと思った。

シビアな世界だ。

一年生の入学式があっている間、二年生は男子寮の広間で、歓迎会の用意をしていた。

さすがは天下のルネ・ヴィルトン。

豪華なご馳走も目を輝かせるばかりにあるし、装飾だって妙にこだわっている。

キクマサはテーブルの向こう側で、ルネ・ルビーことレッドリー・ヘッドバーンが行き来しているのが見えた。

「さすがは今年の男子寮長。忙しそうだね、レッド先輩」

隣でフォルテが顔をのぞかせる。

その通り。去年四年生だったレッドは、今年五年生となり、しかも絵画科男子寮長となったのだ。

人望のある人は、肩書きも多いこと。

忙しそうではあったものの、彼は相変わらずにこやかで、周りにはたくさんの人がいて、

キクマサにとって、去年から憧れのまなざしは変わりようも無い。

新入生とは初々しいものだ。

去年の自分たちって、こんなだったのだろうか。絵画科の男子寮の寮入りは、やはり大いに男子寮であった。

「えー、新入生の諸君。入学おめでとう。俺は、絵画の男子寮長のレッドリー・ヘッドバーンです」

レッド先輩のあいさつに、周りの男子は無意味に歓声を上げている。

「こら、男うるさい。…えーっと、何言おうとしたんだっけ…、まあ、堅苦しい挨拶は抜きにして、それじゃあ始めー…っと、っと、っと」

レッド先輩が、うるさい男子をなだめながら、緩い挨拶を終えようとしたその時だった。

横から、黒髪で切れ長の瞳の、なんだか怖そうな五年生が、レッド先輩のスピーカーをもぎ取った。

胸には、黒い宝石。

「かりるぞ、レッド」

「ーーっだ、団長！！？　ま、まあいいや。…はい！　皆さん、静粛に。絵画科ルネ・ヴィライアーの“団長”から挨拶です。団長は短気で怖いから、言うことは聞いといたほうがいいと、俺は思うね」

スピーカーの無いレッドは、できるだけ大きな声で言った。

キクマサでさえ、あの黒髪の男は知っている。

絵画科じゃ、レッド先輩並みに有名人だ。

「うおー、リュオン先輩だ。やっぱルネ・ヴィライアーの団長ともなると、オーラがすごいね」

フォルテはオーバーにのけぞって、キクマサに向かってつぶやいた。

いや、でもそうとしか言いようが無い。

彼は、黒のテクタイト。

絵画科ルネ・ヴィライアーを統べる、団長なのだから。

鋭い瞳は、会場を見渡した。

「俺は、絵画科ルネ・ヴィライアー団長のハク・リュオンだ。基本

的に、俺が今から言うことは絶対に守れ。最低限のルールだからな。守れなかった奴は、即、パルテノン神殿からバンジージャンプさせるからな」

その言葉に、会場中が、ざわざわしている。
これは嘘じゃないぞと、高学年ほど知っていた。

一年生は脅えている。

「一つ、規則は守れ。二つ、校内及び校外で問題を起こすな。三つ、他科ともめたら死んでも負けるな。以上」

リュオンは「ん」とスピーカーをレッドにおしつける。
レッドは小刻みに頷いて、苦笑いでそれを持つ。

「…はい。団長の言うことはちゃんと聞いてね。じゃないと団長が先生に、俺が先生と団長に怒られるから。まぁ寮の細かい規則はパンフレットに書いてあるし、後で説明もするから、とにかく歓迎会を始めようか」

いつもは厳かな広間が、今日はいつになく騒がしかった。男子って何でこう、バカにド派手な演出が好きなのだろうか。
コークやシャンパンを新入生に振りまいている。

皆が通る道なのだろうけど、（去年されたけど）ちょっとしたイビリだよな、とキクマサはしみじみ思っていた。
全5学年だから、歳の差もかなりあるし、五年生から見たら一年生なんてかわいいもんなんだろうな。

二年生は、去年のうっぷんを晴らすがごとく、飲み食いに一生懸命だった。

「おい、二年生！！　ちょっと蔵からシャンパン持ってこい！！いくらあっても足りねーから！！！」

４年生のとある先輩が向こうから叫んでいた。
キクマサとフォルテは顔を見合わせると、

「俺らもまだまだ下っ端だな。取りに行こうか」

口をもごもごさせながら、フォルテは言う。

「……そうだなぁ」

キクマサも“ノンアルコール”のシャンパンを飲み干した。

蔵は、会場から、少しだけ離れたところにあった。ほこりっぽくて、ひんやりしたところだ。

「それにしても、リュオン先輩は恐ーよな。見た目もだけど、雰囲気も」

フォルテはシャンパンのビンが入った箱を持ち上げようとして、重かったのか2、3本抜いてから、もう一度持ち上げた。

キクマサは目を光らせ、2、3本のビンを彼の箱に再び入れ直す。

「……おい」

「ま、あれだな。恐いけどオーラは確かにあるだろ。圧倒されるもんな……レッド先輩とは真逆だけど。陰と陽って感じで」

キクマサはしらっと話を流して、自らも一箱シャンパンをもちあげる。

その時だった。

バタバタとした足音と、悲鳴が聞こえて、2人は驚いた。

「助けてーー!!!」

甲高い少年の声。

ヒーヒー言って、泣きながら逃げている新入生が、蔵に駆け込んできてキクマサとフォルテの後ろに隠れてしまった。

「待て待てーー!!」

向こうで三、四年生くらいの男子生徒が、テンションＭＡＸｈｉｇ

h☆で新入生を追いかけている。彼らは頬を輝かせながら、こちらに気づかず通り過ぎていった。

「……」

三人は多少の沈黙を守っていたが、フォルテがピンときたように、

「あ、そっか。…儀式だ」

「儀式…？」

「ほら、去年されたじゃん。この寮の伝統行事。新入生は先輩に追いかけられて、捕まったら、めちゃくちゃ高く胴上げされる。お前、超平気そうだったけどな。オレは恐かったよ、やっぱ」

キクマサは一年前の今日を思い出して、苦笑いをした。

「あぁ……あれか」

後ろでガタガタしていた、その一年生は、頭を抱えていまだにしゃがみ込んでいる。

「おい、大丈夫か？　もう先輩たちは行ってしまったぞ」

「あ…、ありがとうございます」

少年はスクッと立ち上がると、かぶっていた黒のベレー帽を取って、ぶかぶかと何度もお礼を言った。

銀の細かい、フワフワした髪をしている。

「俺、ヘルクロウ・ラヴィーニって言います。お世話になります」

その少年は、相変わらず丁寧に挨拶をした。しかし、その名前を聞いた瞬間、フォルテはとても驚いたように、

「えぇ!!　ラ、ラヴィーニって、あのイタリア名家の!!?」

ヘルクロウ・ラヴィーニは「えっ」と気まずそうに顔を背けると、

「まぁ…自分の家なんであれですけど…、そうですね一応」

フワフワの髪を掻きながら、呟くように言った。

「名家なの?」

キクマサは相変わらずのテンポだが、フォルテはかなり興奮気味に、熱弁する。

「そりゃ!!!　だってラヴィーニ家っていったら、イタリアフィレンツェの名門中の名門だよ。芸術に事関しては当然!!!」

「……」

なるほど、その少年は、多少決まりの悪そうな顔をしていたものの、やはりどことなく高貴な雰囲気があった。

芸術の縁がいくつもいくつも絡み合う、名門ラヴィーニ。

我々を巡り合わせた月の周期。

ldraw

06：セレネの祝福〈下〉

月の光

それは神様が産んだ美術品

それは、魔力を秘めた美術品

「もう大丈夫だよ、ヘル。儀式はとっくに終わったみたいだ」

フォルテは、キクマサの後ろに隠れている、ヘルクロウ・ラヴィーニを呼んだ。

「ほ、本当ですか？　大丈夫かな…」

ヘルは多少ビクつきながら、小動物のように顔を出して、あたりを

見渡した。
会場では騒ぎ立てている先輩たちと、儀式によりぐったりした一年生だけが、過激な温度差の中に存在している。

『…地獄絵……』

キクマサは持ってきたシャンペンの箱を目の前のテーブルに置くと、周りの様子を見て素直にそう思った。

「一年生の歓迎会なのに……現実って厳しいね」

フォルテは何とも言えない表情で、ため息をついた。
歓迎の時間は刻々と過ぎていき、夜も更けてきたようだった。

「さぁ、みんな。明日からは新学期だ。休みボケは今日で抜けたと信じているから、気を引き締めて臨むんだぞ。二週間後にはルネ・コンだって始まる。いくらはしゃぎすぎて疲れたからって、さぼる余裕はないんだからな。はい、お開き！！　散れ散れ～！！」

レッド先輩の締めの言葉で、会場の人々はリズミカルに散り始めた。
新入生はげっそりと、高学年はガヤガヤと会場を後にする。
あんなに騒がしかった広間は、こうしていとも簡単に静かになってしまうのだ。

ただ、あらゆる散らかり様だけを残して。

「何で二年生が片付けかな。準備もそうだったけど、ある意味で一番キツい学年かもね。あーもー眠いんだけど」

フォルテはぶちぶち文句を言いながら、何か必要に、しつこい汚れ

を見つけては、生真面目に磨いている。
なんだかんだ言って、やっぱりフォルテはA型だな。

「俺、ゴミ捨ててくる」

キクマサがそういうと、フォルテは熱心に床を拭く手を止めることも無く、「ん」とだけ言った。

ゴミ捨て場は寮の外にあった。キクマサはゴミ袋をせっせと持ってきては、投げ入れた。

背中に感じる、ルネ・ヴィルトンの森のざわめき。

今夜は、それがやけに響いてくる。

キクマサは振り返って、その木々のさわさわ動く様子やモノトーンを見渡した。
夜の空は、月明かりでとても明るく、雲の形がくっきり見える。

幻想的な空だ。

「……」

キクマサはとても不思議な感覚におそわれた。
絵を描くようになって、周りの物事や流動、すべてに目を向けるようになってやっとわかった、この感覚。
色の無い世界にいたときは気づかなかった、この世界の美しさ。脆さ、儚さ。

風は、世界を行き来する。
大地のにおい、季節の香りを乗せていく。
あの、運命を変えた出会いから４年たった。
カトレア・オーディール師匠。

俺は、変わったのでしょうか。
世界の美しさに気づけるようになったのでしょうか。

今夜は白い満月だ。

「……あれ？　キク…？」

その時、風に乗って、きらきらした鈴のような声がした。横に目を向けると、少し先で、ルナシーがゴミ袋を引きづりながらやって来ていた。

「……ルナ」

キクマサは彼女に駆け寄ると、重そうなゴミ袋を持っていってやった。

「女子も、もう終わったの？」

「ええ……そうよ。みんな楽しくやっていたわ。男子は凄いんでしょうね」

「……うん、まあね」

キクマサとルナシーは、入学当初からの友人だ。ルナシーのルームメイトであるレイは、フォルテと幼なじみである繋がりから、４人は程なくして仲良くなった。

彼女のブロンドの髪は、ウェーブの波を作っては月の光を浴びて実に見事に美しい。

「ねぇ、見て、キク」

ルナシーは急に立ち止まった。森の少し向こうを見ている。

２人が廊下をあるいているときだった。

「あのような所にも、噴水ってあるのね」

彼女が指差す方向を見てみると、学校裏だというのに、確かに噴水があった。

２人は顔を見合わせ、そそくさとそちらに足を向ける。

それは、ブロンズで造られた古い噴水だった。
中央にある噴水ほどの大きさ、派手さはないが、忘れられた産物という雰囲気が何とも言えない。

今日の強い月の光に照らされて、何かの象徴的な姿が、目から離れないのだ。

「…凄いわ…。この学校って、いったいいくつの噴水を持っているのかしら…。それも全部…何て……」

何て、吸い込まれそう。
まるで、魔力みたいに不思議を取り巻いて。

キクマサは、彼女の言わんとしていることが分かっていた。

確かに、この学校には噴水が多いのだ。絵画科内でもこうやって、いまだに知らない噴水があるのだから、他科まで行くといくつになるやら。

月の光の演出。

キクマサは急に、一年前のことがフラッシュバックされた。初めてこの学校に来た時、初めて君に会った時の事。

「…ねぇ、ルナ。君は去年も噴水の前にいたよね。俺たちは、初めてそこで出会ったんだ」

きらきらと、水しぶきを浴びながら。
あの時俺は、もっとも美しい絵を見ているような気分だった。

「覚えているわ。中央の大噴水の前でしょう？」

ルナシーはキクマサを見上げると、ニコリと笑う。

「私、この学校に来て、あの噴水を始めてみたとき凄いなって思ったわ。…感動して、ずっと見ていたかったの。……時間が止まった気がした……」

美しい物の魔力は計り知れない。
我々は知り得ない。

ザアァと、風が、木々の枝葉を巡る。
ルナシーの髪も、その方向へと流れて、空へと向かう。

月へと。

「でもね、キクが来てハッと気づいたのよ。だからよく覚えてるの、あの時の空気は印象的だったから」

空間、色彩、時間をすべて飲み込んで、美しい物は極みへと昇る。
あの時の空気は、普通ではなかった。

「…そうだな。確かに印象的だったよ…」

キクマサは目を細めた。
あれは何だったのだろうか。

君と俺を巻き込んで、あの瞬間、美しき姿は確かにそこにあったのだから。

一年生のヘルクロウ・ラヴィーニは、早々に自分の部屋に戻って、そのまま寝てしまいたいと思っていた。
彼にとっては、とても心臓に悪い歓迎会であったので、疲れきってしまっていたのだ。

部屋に入るやいなや、ソファーに深く座り込み、黒いベレー帽をすべるように取った。

その時だった。

「よぉ」

二段ベットの上から、ひょこっと赤毛の少年が顔をのぞかせ、ソフ

ァーの上のヘルを見下ろしていた。
ヘルは同室の人がいたのをすっかり忘れていたのか、驚きで口をあんぐりさせている。

「俺、同室のクレハ・ドルフォード。よろしく」

クレハは、屈託のない笑顔で挨拶をしてきた。
ヘルはクレハを探るように見上げ、おずおずと、

「俺は…ヘルクロウ・ラヴィーニ…」

クレハは目を見開いた。口をまん丸くして。ヘルは、またしても名門攻撃か、と息を飲んで構えていたが、

「……ラヴィーニ…？　お前変な名前してんのな」

「……」

はて、彼はラヴィーニ家を知らないのか、知っているからこそなのか、真意のほどは理解できなかった。

「ヘルでいいよな、なっ！！」

「え…う、うん」

ヘルは、クレハの勢いに押され、小刻みにうなずく。
クレハの笑顔は混ざり気無く無邪気で、ヘルにとっては非常に新鮮であった。

ラヴィーニ家という鎖が、彼にはコンプレックスであるから。

「おい、ヘル。お前もシャワー浴びてこいよ。俺もう入ったから」

「……そうだな、そうしよっか……」

よく見たら、クレハの赤毛が濡れていた。ヘルは、忘れかけていた疲れをやっと思い出したように、ズルズルとシャワー室へ向かった。

ルームメイトがああいうやつで、良かったなと思った。

今までは、自分＝ラヴィーニ家として見る奴ばかりで、あのように、1対1で接してくれる人なんていなかったから。

ヘルはシャワーを浴び終え、タオルで雑に、そのままふわふわの銀の髪をふいていた。

「……」

体が温かくなって、何だか眠たい。

シャワー室を出て、やはりまず二段ベットの上のクレハを見上げた。

彼はヘルが上がったのに気づくと、パッと表情を変えて、

「おっ、やっと上がったな。」

奴はなんと、二段ベットの上から、「とぅ！！」と飛び降り、

「１０．００！！」

スタッと着地した。かなり見事だ。

ヘルには考えられなかった行動だが、そのありえなさが、やはり彼には魅力で、瞳を輝かせた。

「す、すげぇぇえ！！！」

パチパチ手を打って感心する。クレハはたいそう自慢げに腰に手を当て、気取っている。

「俺、ドイツの森ん中で育ったからな。典型的な野生児だから」

自分で言うのも何だかなと思ったが、やはりヘルにとって、正反対の香りに興味を持たずにはいられなかった。

クレハには、温室育ちの自分には無い、何だか強いものを感じる。

二人の部屋の窓からは、まっすぐに、今夜の満月が見えていた。

美術は魔力を秘めている。

月だって。

クレハはちょうどその時見てしまった。目を逸らすことができなかった。
今夜の満月を。

ガチャン――

「！！！」

ヘルとクレハの背後の花瓶が、何の前ぶれもなく急に割れたのだ。
砕けた花瓶は、机の上から床に落ち、水が線を描く。

「な、ななな何で…っ！！？」

ヘルは明らかに動揺していた。クレハは顔をしかめ、花瓶の破片と、水がゆっくりこちらへ流れてくる様子をじっと見ている。
目の前の惨状は、意識よりも遅くにやってくるから。

しかし急にクレハは、複雑そうだった顔をくるっと変え、驚いたように、

「あれ！！？　何で急に花瓶が割れちゃったんだろ！！　恐！！」

彼らしさを装い、焦る心を抑えていた。

落ち着け。
たかが月を見たくらいで。

「なぁヘル！！　俺ここのガラスとか片づけとくからさぁ、モップと箒を　借りてきてよ」

「えっっ！！　わ、わかった…」

ヘルは大慌てで、バタバタと部屋の外に出ていった。
足音が遠のいていく。

「……」

クレハは開けっ放しのドアを、ゆっくり閉め、そのまま背をつけた。
額に手を当て、崩れるようにしゃがみ込む。

「……ダメだ…こんなのじゃ……」

額の手が震えて仕方がない。
唇をきつくかみ、心の中でせめぎたてる何かを、必死で抑えつけていた。

「……隠して…いかなきゃ……」

誰にも知られてはいけない。
見られてもいけない。

花瓶の水が、クレハのもとまで伝っては、月の光を導いていた。
その水を見て、花瓶の残骸を見て、そして、自分の手を見つめる。
一時その手を見ては、何かをずっと思いめぐらせていた。

月は、美しさの中に、秘密めいた力を宿している。
時には祝福を、時には残酷さをもたらすから。

クレハには、誰にも言えない秘密がある。後にそれがこの物語に、
どんな色を添えるのかは、本人すらも知り得ない。

白い孤独の月夜。
それはいったい何を暗示しているのか。

draw

07：ルネ・ヴィライアー・コンテスト1～遠い人～

絵を描く楽しさを忘れそうになる事だってある

だからこそ

思い出した時、きっとそれ以上に絵を愛していける

絵画棟の中央ホール、室内噴水の前で、小柄だが表情の凛とした女子学生が、腕を組んで立っていた。
今年の入学生の、優秀者3名の絵を見上げながら。

流れるようなバロックの空気の中、1人の男子学生が、彼女に気付く。

「……シャルロ…」

彼は淡い髪と、淡々とした表情を持つ青年であった。
シャルロと呼ばれた女子学生は、深い色の巻き毛を揺らして振り返った。

「……スノー」

「何してるの？　そんな所で……」

スノーと呼ばれた青年は、シャルロの隣に並んで、彼女の見上げていたものを知る。
シャルロは、背の高い彼を横目で見上げ、

「ねぇ見て。今年の優秀者よ…素敵よね…」

意味深に、赤めのルージュが弧を描く。

「…懐かしいな」

「へぇ、あんたでも覚えてるのね。四年前は、一番上にあんたが、次に私が、三番目にフレイのが掲げられていたものね」

シャルロの言葉に、スノーは彼女を見下ろした。

スノーフリーク・ロズベルト（４年生）、現ルネ・オパール。
シャルロ・グレディア（４年生）、現ルネ・アンバー。

共に現役ルネ・ヴィライアーであり、“激動の学年”と呼ばれた四年生の中でも特に、天才と言われた二人である。

「私、あの時あんたの絵を見て、凄く衝撃を受けたもの。初めてだったわ、私が絵であんなに動揺したの」

「…僕もそうだよ…。だって君の絵、普通じゃなかったから」

「…どういう意味よ」

シャルロは苦笑いで、淡々と述べる彼を見上げた。しかしスノーは相変わらずマイペースで、

「普通じゃなかったよ。僕にとってはね」

確かに、貴重に、微笑んだ。
シャルロは鼻で笑った。

5年生から、ルネ・ヴィライアーになろうと思う人は、思いの外に少ないけれど、全くいないわけではない。
4年生は今年が勝負だと思ってるだろうし。
3年生からルネ・ヴィライアーになる人は歴代でも多く、2年生はもっぱら推薦枠狙いである。
1年生は何事も経験という感じだ。

「わかるかね、キクマサ君。2年生には一次こそが大切なのだよ」

「わかってるよ、黙れよフォルテ。気が散るだろ」

キクマサは一次の絵の期限に間に合うかどうかという点で、せっぱ詰まっていた。取りかかりは、フォルテ、レイ、ルナシーと共に早かったというのに、終わりは皆一緒というわけにはいかないのだから。

一次の締め切りまで、あと3日。

終わらないというよりかは何かが足りない気がして、それを気にしながら描き続けるのが、心に変な色の沈殿物を落とし続けるのだ。

フォルテの絵も、ルナシーの絵も悪くないし、レイのにいたっては脱帽だ。技術も表現力も構成も、やはり2年生の中ではトップだと思う。

一年もたっていたら、誰かが彼女を抜いてもおかしくはないのに、彼女は、あの一番上の、高みに掲げられた絵のまま。さらにその上へ。誰にも王座を譲ってはいない。

キクマサは、誰かに勝ちたいなんて思ったことはないけど、誰よりも良い絵を描きたいと思ったことは何度もあるのだ。

フォルテは、実技室の端にある小さな台所で、お湯を沸かしていた。ここは寮のすぐ隣の、自由に使える実技室だ。

キクマサたち４人は、一年生の時からずっとこの４４４号室を使ってる。

フォルテはインスタントコーヒーを作っていた。

「キクはブラック？　シュガー？　ミルク？　ちなみに俺はシュガ

ー&ミルクで」

「ちなみに俺はそれと同じで」

キクマサは、彼の言い回しを利用して早口で言った。こんな時に苦いコーヒーは飲めない。

その時だった。ドアの開く音と共に、四月の涼やかな風が流れ込む。フォルテとキクマサは、ドアの方に目をやる。

「やぁ諸君。はかどってるかい？」

モデルのようにスラッと背が高く、男前な五年生が、愛想の良い笑顔で現れた。
この男子寮を統べる、レッドリー・ヘッドバーン寮長であった。

「あ、レ、レッド先輩！！！」

二人は立ち上がると、軽くおじぎをした。一年間男子寮にいるし、キクマサにいたっては、ルネ・ヴィルトンで最初に出会った先輩だ。面識くらいはある。

それでも今はまだ、彼らにとってこの人は、遠い雲の上のような人だった。
レッドリー・ヘッドバーンは“ルネ・ルビー”でもある。

彼の胸には、それの象徴である、ルビーの埋め込まれたペンダントが淡くきらめいている。

「な、何か用でしょうか」

フォルテはたじろきながら、コーヒーを他のマグカップに入れ、レッドに手渡した。

彼は

「どうも」と、嬉しそうに取ると、

「うん。ねぇ、確かキクマサ君は日本人だったね」

「…はい。そうですけど…」

キクマサは不意に“日本人”という、懐かしい単語を言われ、多少面食らった。

「俺ね、知人に君の話をしたんだ。その人も日本人なんだけど。そしたらキクマサ君連れてこいってさ。ねぇ、今時間ある？」

「……えっ」

キクマサは言葉に詰まった。時間は、どうしたって無い。

フォルテは空気を読んで、

「あ、レッド先輩。こいつ、ルネ・コンの一次に出す絵、まだ出来てないんですよ。俺はもうこれでも良いんじゃないかと思ってるんですけど。どうも本人から見たら、何かが足りないらしくて」

レッドは目を丸くして、「へぇ」と顎をなでると、ズンズンキクマサのキャンバスの前にやって来た。

キクマサは緊張した。先輩に絵を見られるなんて、嫌な汗以外何も出てこない。

「へっえー、なかなか良いじゃん。構成も良いし、青の色なんて凄く綺麗だよ。…でもまぁ、本人が何か足りないって言うんなら、何か足りないんだろうけど」

レッドの言葉に、心半ばキクマサは頷く。

「…はい。俺にも、何が足りないのかわからないんです」

何かが足りないという事だけが分かる。それがこの絵にとって、一番大切であることも。
レッドはにっこり笑うと、

「やっぱり君は、あの人に会いに行くべきだ。こういう時は、少し違うものを見るといいよ」

さぁさぁと、手でキクマサの背を押し、慌てふためくキクマサを実技室から出した。
フォルテが中から、何ともいえない顔で、彼に手を振っていた。

キクマサが連れてこられたのは、彼らの実技室から少し離れた、五年生用の実技室の並ぶ階であった。

更にその奥には、噂でしか聞いたことのない伝説のルネ・ヴィライアー専用のアトリエがあった。

「5年生のルネ・ヴィライアーはね、一人一部屋アトリエが貰えるんだ。リッチでしょ…」

「…凄いですね」

キクマサは呆気に取られた。みんながこぞってルネ・ヴィライアーになりたがる理由がよく分かる。

レッドは、自らの“ルネ・ルビー”と表示された部屋ではなく、その隣の、“ルネ・ダイヤモンド”と記されている部屋をノックも無しに開けた。

「入るよ、ナギさん」

キクマサは驚いてレッドを見上げた。キクマサだって新入生じゃない。今のルネ・ヴィライアーの名前くらい知っている。彼らは有名人だから。

ルネ・ダイヤモンドの事だって、勿論知っている。
日本画専攻の日本人。サイオンジ・ナギ先輩だ。

でも、彼女は女性だ。こうも気安く部屋に入るほど、この2人は親しいのだろうか。
何より驚いたのは、その部屋の在りようだった。キクマサはバッと

レッドの方を向いて、青ざめる。

「勝手に入っちゃっていいんですか！？」

「…え？　うん。いつものことだし」

“ここ”は部屋ですか！？」

「え？うん。すごい物置みたいだけどね」

レッドの言葉は適切だった。入った側から、道はどこだと言った感じで、落ち着く場所もないし、部屋の大きさもわからない。

「おーい、ナギさん、どこだい」

レッドは“それら”を慣れたように分け入って、彼女を呼ぶ。キクマサは顔をしかめながらも、レッドの後ろについていった。カトレアさんのアトリエですら、これほどひどくはないけれど。一応中央にはスペースがあって、レッドはそこで周りをキョロキョロしていた。

「あっれ～、おかしいな。さっきまでここにいたのに」

彼は、頭の後ろに手を回し、眉根を寄せる。

キクマサは、その部屋を見回した。

油の香りはないけれど、所々に点々とある顔彩の器が、音も無くそこに静止している。

油画とはまた別の、緊張感のある空間だ。
そんな風に、キクマサが視線を移しているとき、ふと、奥の大きなパネルに気がついた。

「……」

吸い込まれる。

吸い込まれるかと思った。
もはやそれは、自分の知っている絵画ではなかった。

油とは違う色、光、深み、あらゆる空間性。

細かく複雑な味付け。

それは見事に美しい赤と白の花。
日本画でしかあり得ない透明感。

“紅白”

私たちは共に“あの人”の病状を告知されました。

その時私はあなたを見ることができなかったのです。

それでもあなたは“あの人”の前ではいつも笑顔で

いつものように白い花を手渡しました。

あなたには紅が

“あの人”には白がとても似合う

／以下省略

キクマサは息を飲んで、それでも動けずにいた。

不意に訪れた衝撃に、それでも守られた静寂の時間に、彼の心は乱された。

イマジン・ストーリーだ。

ルネ・ヴィライアーとは、こうも次元の違うものなのか。

そう思わざるをえないような質の高さ。

さざ波のように静かなのに、じんじん染み込んで、なんて、

なんて遠い。

―ｄｒａｗ

08：ルネ・ヴィライアー・コンテスト2～ルビー&ダイアモンド～

一生で一番の奇跡は、俺が再び絵に出会えたこと

その情熱を、もう一度思い出さなければ

「どうかした？　キクマサ君」

レッドの呼びかけに、キクマサは我に返った。
あの一瞬は、とても長く感じられた。

「い、いえ…何でも…」

何でもないわけではないが、今はこうとしか言えなかった。レッドは何て事無く、「そうかい」と答えた。

その時だった。

ドアを開ける音と共に、一人の女子学生が姿を現した。
彼女はとても優雅な身のこなしの、上品で美しい日本人女性だった。

長い黒髪に、淡く赤い唇。
遠くから見たことは何度かあるし、噂でも聞いたこともあったから、美人だとは知っていたけれど、実物は圧倒される。

キクマサにとっては、同じ国の人なのだから、受け入れやすい美しさなのに、実際に日本で、ここまで和風美人をお目にかかったことはない。

「やぁ、ナギさん。どこへ行っていたんだい」

「花瓶の水をくんできただけよ」

ナギは顔を上げ、手に持つ細長いビンをレッドに見せた。

「さっき廊下で、メルベリーに会ったわ。何か、今団長たちとエリーゼ先生で、会議してたみたい。どうやら次はエジプトのようね」

「次って…ヴィライアーの研修かい？」

「そうよ。今年のメンバーが決まり次第、エジプト研修よ」

ナギは、ごまごました道を分け入りながら、中央のテーブルに花瓶を置く。
その時やっと、キクマサの存在に気がついた。

彼女はキクマサを見て、一瞬驚いていたが、再び彼をじっと食い入るように見て、一人勝手にうなずいた。

「なるほど、君が例の日本人か」

微笑みながら言うから、こちらにとっては心臓が痛い。

彼女は艶っぽい。

「ごめんなさいね、キクマサ君。レッドに無理やり連れてこられたのでしょう？　まったくこの男はお調子者だから」

ナギは長い黒髪を結い上げ、制服をすっかり着替えて、部屋では薄手の浴衣だった。

レッドはニヤリと笑うと、紅茶のカップを差し出しながら、わざとらしい口調でもの申す。

「おや、お気に召さなかったかい？　お姫様」

「いいえ。有り難いですけれどね、王子様」

ナギも負けずに嫌みを返す。
キクマサは当初から、この二人の関係がとてもとても気になっていた。

ルネ・ヴィライアー同士というだけにしては、親密すぎる。
それに二人は美男美女で、とても絵になる。

「ねぇ、キクマサ君。あなた今年ルネ・コンに出るの？」

「あ…まぁ……はい」

不意に質問され、紅茶のカップを前のテーブルに置くと、キクマサはなんとも言えない返事をした。

「…でもまだ、一次の作品できてないんですよ」

「そ。でも俺が引っ張ってここに連れてきたという展開」

キクマサの言葉に、レッドが付け足す。
ナギはいかがわしげにレッドを見ながら、でも彼には何も言わずにキクマサの方を優しく見た。

「……ちょっと、行き詰まっている感じかしら」

「……はい」

キクマサは苦笑いで頷いた。そこにすかさずレッドが割って入る。

「だいたい行き詰まっているときは何もしないのが一番なんだって。俺なんて二年生のルネ・コン、時季はずれのインフルエンザで間に

合わなかったからね」

「ふふ、そんな事もあったわね。こいつね、一応トップ入学してるのよ。二年生では推薦枠は確実だろうって言われていたにも関わらず、一週間ドクターストップよ。運がなかったのよ」

ナギはつんとして、レッドの痛い所をつつく。しかしレッドは相変わらずにこにこして、平気そうだった。

「ねぇ、キクマサ君は、ルネ・ヴィライアーになりたいのかしら…？」

ナギはテーブルに肘を立て、その手の上に顎を添え、赤い唇に弧を描いた。

キクマサは少し考えると、

「……どうなんでしょうか。…本当の所、よく分からないですね。……実際この学校に入る前まで、ルネ・ヴィライアーについて知らなかったですし」

「へぇ。予備校とか、美術学院とか行ってなかったのかい？」

「はい…話せば長くなるのであれですけど、俺、ここへ入学できたのは半分コネなので…」

苦笑いで、多少皮肉っぽく言ったつもりだったが、ナギはパッと黒い瞳を大きくすると、

「あら、私もそうよ。推薦入学だもの。新しくなった理事長が日本

画びいきでね。うちの父と知り合いなのよ」

臆することなく、笑顔で言った。

ルネ・ヴィライアーだから言えることなのか、はたまた元々そういうものだと受け入れているのか。

その余裕が羨ましかった。

「そもそも、絵に順番や点数なんてつけられないのよ。見る人によっていくらでも変わるんだから。ただ、やっぱり受験やコンクールでは、しょうがない…」

ナギは紅茶の水面を揺らした。

「この世界で生きていきたいなら、自分の表現を、相手に認めてもらわないと…」

自己満足を芸術とは呼べない。

かといって、真似や流行り、一般受けの良い表現に流されたって、何の意味もない。

常に新しいものを追い求め、それが認められるか認められないかで立場の変わる、紙一重で難しい世界。

「ちょうどいいじゃない。ルネ・ヴィライアーになる事にこだわらないのならば、思いっきりやれるわよ。何を描きたかったのか、もう一度考え直してごらんなさい。何か足りないって言うのなら、そ

れは、あなたの表現したいものへの思いじゃないかしら。忘れてしまいそうになるもの、いまだに私だって」

キクマサは、顔を上げた。
目から鱗というか、衝撃というか、難しいパズルの解き方に気付いたように。

何を表現したかったのか。
なぜ、絵を描いているのか。

もう一度思い出さなければ。

「よく言うよね。ナギさん、あれでもルネ・ヴィライアーなる気なんてまったくなかったんだよ。三年生の時まで」

「……そうなんですか？」

ナギの研究室からの帰り道、レッドとキクマサは並んで歩いていた。

「うん。彼女も君と同じ。ルネ・ヴィライアーについてほとんど知らなかったし。ましてや日本画で、ヨーロッパに留学に来てるわけだしね。ルネ・ヴィライアー否定派だったよ」

「…否定派？　そんな人いるんですか…？」

「いるよぉ～、実力あっても最後までコンテスト出ない人だっているし。嫌なんだよ、そういった“格付け”が…。まぁ…分からなくもないけどね」

キクマサはレッドを見上げた。

「でも、ナギさんの場合、俺が説得して、ルネ・コンに出させて…無欲の強みというか、結果的になっちゃったんだけどね」

レッドは少し、昔を思い出すように目を細めた。その表情が、とても大人っぽくて印象的だ。

キクマサは少し戸惑いながらも、一番気になっていた質問をした。

「あの……その、お二人ってどういう関係なんですか？　…何というか、前から仲良さそうなので」

「……ハハッ、何？　お付き合いしてますか？　ってこと」

「…はぁ。まぁそうです」

レッドは少しおどけたように首をかしげると、

「よく聞かれるけどね。俺たちは親友だよ。そんな色っぽい関係じゃない」

キクマサは多少ショックだった。二人はとてもお似合いだと思うのに。

男女を親友と呼べるのは、外国ならではだろうとしみじみ思った。

それにしても、何だか心が晴れやかだ。

「ありがとうございました。レッド先輩。…言われた通り、今日は行って良かったです」

「そうかい。お役に立てたなら何より。ナギさんも喜んでいたしね」

４４４号室の前で、２人は別れ際に話していた。キクマサはレッドの背を見送った。

不意にレッドが振り返る。

「そうそう。無欲の強みとか何とか言ってたけどね、でも俺は、ルネ・ヴィライアーになって損は無いと思うね」

「……」

夕方の窓のシルエット。

立ちぼうけの人影。

レッドの笑みはオレンジに溶けていた。

「世界の美しいものを見に行ける」

言葉を残し、足音が遠ざかっていくのを聞いていた。
キクマサは思い出す。

カトレアさんの言葉を。

４４４号室に入って、人のいないその空間の中で、キクマサは自分の絵と向き合った。

自分は何を描きたかったのか。
それは、かつてカトレアさんに教えてもらった、あのアトリエから見上げた空だった。

カトレアさんの教えを、言葉を、きっと絵に託せるだろうと思って描き始めた。
いつしか焦燥感の中で見失っていたもの。

あの日、あのアトリエで、一生で一番大切なものを見つけた瞬間。

一生できっと、一番幸福な瞬間。

世界の美しいものを見せてあげる。

あなたはそう言って俺を、この世界へと突き落とした。

―ｄｒａｗ

０９：ルネ・ヴィライアー・コンテスト３～基礎について～

僕と君は、違う星の元で生まれてきた

同じように、絵を描いていたって

「……なんだ、レイか」

フォルテは少し目を細め、不満そうにつぶやいた。視線は４４４号室の入り口に立つ、黒髪でショートカットの少女だ。

「何よ、それ」

レイは拗ねた口調でフォルテを睨みながら、４４４号室に入る。

「私が来ると、いつも嫌そうにするわね、あんたは」

「嫌そうじゃない。嫌なんです」

フォルテの口調はさっぱりしたものだった。

「何よ…」

レイは、今度は少し大人しい口調で言った。顔を複雑そうに歪めて、フォルテを見下ろしている。
フォルテは彼女を見もせずに、鉛筆をナイフで削っている。

「何の用だい、レイデル・リローズ」

彼は改めて聞く。

「別に…、ただ…。私もルナシーも、あんたもキクも、四人とも一次受かったって聞いたから、どうしてるかなって思って」

「キクマサは売店だ、速乾剤を買いに行っている。二次は受験と同じように時間が短いからな。一次は作品提出だったけど。…推薦組には不利だよな」

フォルテはいつもの明るい調子ではなく、淡々と流れるように話した。そんな彼の態度に、レイは難しそうな顔をしている。

「ねぇ……あんたは今年、ルネ・ヴィライアーを目指してるの？」

「……」

フォルテは鉛筆を削ぐ手を止め、じっとレイを見上げる。優しくでも睨むでも無い、嫌に冷めた視線である。それはレイにとって痛いものだ。

「今年は絶対にならないよ。推薦ヴィライアーは別として」

「……」

はっきりした彼の強い口調に、レイは口をつぐんだ。
彼は視線を手元に戻すと、それ以降彼女を見なかった。

「ただ、来年は絶対になる。来年を逃せば、“ルネ・テクタイト”にはなれないかもしれない」

「……あんたは“テクタイト”にこだわるのね」

「そうだ。そうでないなら、俺がこのルネ・ヴィルトンに来た意味がまるで無い」

フォルテはいつになく重い口調だった。
彼がこの学校に来た、一番の目的。その理由は、全て、ルネ・テクタイトという称号の中にある。

「…レイ、君とは所詮、目的が違うんだ。君は絵に生きなくちゃいけない」

フォルテは再び、手元のナイフと鉛筆に視線を落とした。
レイはうつむきがちに、

「ルネ・ヴィライアーになりたいっていうのは同じじゃない…」

彼に聞こえるか聞こえないか程度の声で言った。

「……いったい何を言いたいんだ、君は」

「……」

一時して、フォルテが冷めた口調でそう呟いた。

いつからか、こうだ。

幼なじみで、家も隣でいつも一緒にいたのに、彼は急に冷たくなった。

レイは一度口を開いたが、思い直したように口をつぐんだ。

何が言いたいか、だって。

あんたはそんな事も分からないのね。

「……もういいわ」

レイは４４４号室を早足で出て行った。

彼女が出ていった後に、フォルテはやっと顔を上げ、さっきまで彼女の居た場所を、ため息混じりに見ていた。

レイは唇をぎゅっと結んで、押し寄せる胸の痛みを押さえていた。

あいつは私が邪魔なのだ。“目的”を果たすために。

私はただ、一次に受かって、あいつの喜ぶ顔が見たかっただけなの

に。

一緒に頑張ろうって、言いたかった、ただそれだけなのに。

「フォルテのバカ」

歯を食いしばって、怒りと悔しさを絞り出すように言った。

彼女の早い足音は、カツカツと長い廊下に響いていた。フォルテはその足音が遠ざかるのをじっと聞きながら、天井を見上げた。

キクマサは売店で速乾剤を買おうとしていた。

二次は、その場でお題が出され、６時間で描くといういわゆる受験風で、そのような特訓をしてきていないキクマサには、何とも未知数な領域であり、試練であった。

とてもじゃないけど、六時間で一枚の油絵を描くなんて考えられない。

でも、この競争率の高いルネ・ヴィルトンを受かってきた人たちには、慣れた分野なのだろう。

「…さぁて…、速乾剤って言っても色々あるんだな…」

キクマサは、顎に手を添え、フムと思った。

メディウム状、液体状、溶き油状と、形は様々。

どれをどう使うのが一番良いのだろう。

「何かお探しかね」

その時、背後からふと声がした。
しわがれた、落ち着きのある声主は、キクマサたち、ルネ・ヴィルトンの生徒には、よく知られた人だった。

「あ…、マクナスさん。こんにちは」

キクマサは小さくあいさつをした。

マクナス・ベンシー（71）は、このルネ美の画材販店の主人で、どういう時にどういう画材を使うのが良いか、生徒に教えてくれる、親切なおじいさんだ。

薄くなった白髪の上から、今日みたいな肌寒い日は、よくニット帽を被っている。
彼に話しかけられると、とても落ち着く。

「速乾メディウムとシッカチーフか…。一番妥当な所だね。マクナ

スさんいた？」

「うん。よくわかんなかったから、選んでもらったよ」

キクマサは買ってきた画材を見比べながら、

「で、どうやって使うの？」

いつものようにフォルテに説明をもとめた。

フォルテもまた、ハイハイと。いつもの事ですね、と。

「速乾メディウムは、油絵の具にダイレクトに混ぜて使う。量に気をつけてね。…シッカチーフは油の一種だから、溶き油に混ぜるだけ。あんまり入れすぎないようにね」

彼は速乾メディウムとシッカチーフを片手ずつに持ち上げた。フォルテの説明に、キクマサは何度も頷きながら、試しにメディウムを油に混ぜてみた。

油絵の具をナイフで練る感触がいつもと少し違う。

「キャンバスのきれっぱしにでも塗ってみなよ。完璧に乾くのは時間がかかるけど、2時間後には違いが分かると思うよ。速乾って言ってもね、アクリル絵の具ほど速くは乾かないから」

そういうものなのか、とキクマサは半分納得したように頷く。メディウム入りの絵の具を筆につけて、キャンバスの切れ端にスッと走らせた。

鮮やかなカーマイン。

教官たちが腕時計を見ながらうろうろしている。
生徒たちも、木の丸イスに座って、油絵の具や下地用のアクリル絵の具を準備している。

あぁ、なるほど。

このソワソワした空気や、ピリピリした空間が、緊張感を誘う受験と言うものか。
キクマサは初めての経験に、一度深呼吸した。

昨日まで練習していたメディウムとの相性は思いの外によく、速く描くというのには、そんなに嫌気は感じなかった。

あとは、自分の感性と努力を信じるだけ。

１０時を知らせる、ルネ・ヴィルトンの鐘の音。
先生が黒板を隠していた布をバッとめくった。

お題は、“過去、現在、未来”

このお題をどのように受け取るかは、自分次第。

「出来たと思う？」

「まぁ…、やるだけはやったかな。ここで落ちたって未練は無いよ」

試験が終わって、さっそく学食を食べに行った2人。集中した後って、なんでこんなにお腹が空くのか。

「“過去、現在、未来”か…、こりゃ技術を見るよりも、発想力や構成力重視だろうな。このお題なら、１００人いたら１００通りの

絵ができるよ」

「それで差って出来るものなの？」

キクマサは落ち着いた口調で、パンをちぎりながら聞いた。

「あとは先生次第さ。ルネ・ヴィライアーとなり得る個性が有るかどうか…。ただし、変な絵を描きゃいいってものでもない。基礎だって大切だよ。三次は石膏デッサンだしね」

フォルテはミネストローネのスプーンを持ったまま、オーバーに言って見せた。

キクマサはミネストローネをふきだしそうになり、驚いた口調で聞き返す。

「…石膏デッサン？　今更？」

「そ、今更。でも山場。意外と出来ないやつついるよ～。ルネ・ヴィルトンの入試には無かったから、今まで個性で押してきた奴なんて、特に落とし穴。俺を含めて」

キクマサはポカンとしていた。散々絵画をさせてきたのに、今更石膏デッサンとは。

でも待てよ、とキクマサは思った。

昔カトレアさんのアトリエで、石膏デッサンは散々やらされた。

あのアトリエには、なぜか一通りの石膏像があったから。

キクマサはその日の夜、今日の二次がどうだったか、とかより、昔カトレアさんに言われた言葉が頭から離れなかった。

「基礎があっての個性だよ」

キクマサは、嫌というほどのデッサンをさせられてきた。石膏像だってそうだ。
近寄って、触って、空間を計って。

「たとえ最終的に、正確に描くような絵画じゃなくたって、デッサン力があってのそれを越えた“表現”なんだからね。どんなに才能があったって、基礎があるか無いかは思いの外に大きいよ」

「……」

ベッドの中で一度寝返りをうった。窓の外からは、月の光に照らされた雲が、くっきり見える。

あの頃俺は絵の具を使いたくてたまらなかった。
なんでこんな、誰だかわからないような、マルスやらジョルジュやらを描かなきゃいけないのかって、本気で思っていた。

しかし、カトレアさんは分かっていたのだ。これがいつか役に立つこと。基礎がある者が、最後にはどうしたって強い事。
あの人がしつこく基礎をやらせたおかげで、俺のデッサン力は、一年生最後の評価で5だった。レイですら4だったのに。

なんだか、三次に出れたらいいなと思った。

あの、白くて美しい像を描きたい。

キクマサは、二段ベットの上で眠るフォルテの寝息が聞こえてくるのも気にしないで、とにかく二次が受かっていますようにと思った。
だんだん欲が出てきてしまう。

ダメだよ。
“ここまで”で満足しちゃ。

カトレアの言葉が聞こえた気がした。

―draw

10：ルネ・ヴィライアー・コンテスト4～筋違い～

どうしても

分かり合えない価値観に、我々は価値を見いだすのか

「凄いや、俺達まだ残ってるよ！！」

中央掲示板を見て、まるで受験生のように自分の名前を探す。フォルテは、自分とキクマサの名前が残っていたのに興奮して叫んだ。周りもざわざわしてどうも落ち着きがない。喜びの声や嘆きの声が一気に耳に入ってくる。

「あ、レイもルナシーも残ってる…。あの2人もやるもんだね」

「……ほんとだ」

キクマサが、ズボンのポケットに手を突っ込んだまま、ほうと視線を掲示板に戻した時だった。

「なぁにが“やるもんだね”よ。私達よりよっぽど、あなたたちが残ってる方がびっくりよ」

「……」

聞き覚えのある溌剌とした声。振り返るのが恐いくらい。

「ダメよ、レイ。そんなこと言っちゃ」

威勢の良いレイと、それを中和するかのように、柔らかい声のルナシーが、いつの間にかキクマサ達の後ろにいた。フォルテは一度ため息をつくと、

「あのな、お前がここまで残るのは、ルネ・コンが始まる前から予想済みだったさ」

「あら、じゃあ予想外だったのは私の方かしら」

ルナシーはクスクス笑いながら、フォルテを覗き込んだ。金の長い髪が肩から流れる。

「…そんなことはないさ、ルナシー」

フォルテは少し困ったように頭をかいた。キクマサは笑いそうになる。

側を通る男子学生は、必ずといっていいほどルナシーに目を止める。
彼女は学年のマドンナだ。

「大体何だよ…何の用だ…。嫌みを言いに来ただけだろ」

フォルテはそっけなく、少し冷めた声で言った。レイは顔をしかめ、フンとそっぽむくと、

「…ええ、そうよ。…どうせ次はあんたの苦手な石膏デッサンよ。一緒に最終試験に行けないのが残念だわ！！」

いつも以上にきつい口調で、フォルテを睨みながら言った。キクマサはレイとフォルテを交互に見比べる。

なんだか、いつもの感じと違わないか？

ルナシーもそれは感じているようだった。
レイは腕を組んだまま、早歩きで立ち去った。慌ててルナシーが後を追う。

「……レイと何かあったの？」

キクマサは意味もなく小声になる。

「別に……俺最近嫌われてるから」

彼は笑ってそうは言うけど。

キクマサは、そうだろうかと疑問を持った。どちらかと言うとフォ

ルテがレイを避けてる気がする。彼女が近づこうとすると、一線を引く。
仲が良いのか悪いのか、いまだに分からない。

「レイ…、どうしたの急に」

カツカツ足音をたて早歩きのレイに、小柄なルナシーは小走りで追いついた。
レイはむっとして、心配なくらい沈んでいた。

「……あいつ、今日も私を見なかったわ」

「……フォルテ？　どうしたの、喧嘩でもしたの？」

ルナシーはさっきのフォルテとレイの態度で、何かを悟ったようだ。

「ちょっとレイ？　大丈夫なの？　明日は三次があるのよ…。彼には悪いけど…フォルテのことなんて忘れちゃいなさい」

ルナシーはかわいらしい声で、なんとも思い切ったことを言う。
でも、そうでなければ、彼女がせっかくの実力を出せないのではないかと不安に思ったから。

「……そうね。あんなやつ落ちちゃえ」

レイはぽつりと呟く。

その時だった。

前から2、3人の女子学生が、なんだか恐い顔でこちらに歩いて来た。

ルナシーは眉間を寄せ、困ったようにしている。

「やだわ……ジェシカよ。あの子何かとレイを敵視しているじゃない…」

ルナシーがそう言うので、レイはそちらをめんどくさそうに見る。

「何か言われる前に、無視して立ち去ればいいのよ」

肩ほどの巻き毛をハーフアップにした、同じ学年のジェシカ・バーナード。一年前の入試で三番目だったのが彼女だ。お嬢様なのだろうが、わがままで、自分が一番でないと嫌なタイプ。

常にトップのレイを、異常に敵視しているのは皆知っている。

廊下を渡る、その気取った足音といったら。

ジェシカが何人かの取り巻きと共に、レイとルナシーの進行方向に立ちふさがった。

「あら…レイデル・リロ―ズ。ごきげんよう…ルナシーも」

ジェシカは意地悪そうなつり眉を、片方だけ上げた。

「…何の用？　ジェシカ、邪魔よ」

レイは機嫌が悪いのもあって、最初から手厳しい。ルナシーは隣でハラハラしている。

ジェシカは少し目を細めると、顎を上げどうにもレイを見おろしたいらしい。

「あら…せっかくおめでとうって言いに来たのに。あなたも私も三次に進めるのだから。それに…」

ジェシカはチラッとルナシーを見た。

「ルナシーさんは分からないけれど、私とあなたは最終に残れるでしょうね…。私今ね…特別にプロの講師に最終の対策をしてもらっているのよ。歴代の課題から、どのような絵が受かっているのか…。それを知っているか知らないかって大きいと思わない…？」

ジェシカの余裕な口振りに、ルナシーはむっとして、「嫌みな人ね」と呟いた。

「…何が言いたいの？」

「……バカね、少しは焦ったら？　一年前に付いた“一番”の称号もそろそろ期限切れよ」

ジェシカがクスクス笑いながら言うことに、レイはまるで呆れかえっている。その態度が、彼女の全身から出ていた。

「ちょっとあなた…受験じゃないのよ。一番の称号？　何それ…私以上にあなたがそれにこだわってどうするの…？」

「…何ですって…？」

ジェシカは声音を低めた。表情が、先ほどの薄ら笑いから、一変して堅くなる。

「だってそうじゃない。笑わせないでよ。講師って何よ。受かりやすい絵って？？　それで、ルネ・ヴィライアーになれると思っているの！？　そんな心構えだからあなたは私に勝てないのよ！！！」

レイは何かのネジが外れたように、ズバズバと言いたい事が溢れたようだった。ジェシカは口をパクパクさせて、驚きで目を見開いている。

「ちょっと…レイ。あなた無視するんじゃなかったの！！」

「いいでしょう！　こいつには一度言わないと気が済まなかったのよ」

彼女は人差し指をジェシカの制服のリボンに突きつけた。

「あなたの技術は模範的よ。まるで教科書のよう。でもね、あなたの絵には先が無い。自分の力で自分の新天地を開拓していかない限り、あなたは成功しないわよ。いいこと…っ、筋違いちゃん！！」

レイの勢いは止まらなかった。ジェシカは「何てことを…」と半分放心状態で聞いていたが。ジェシカの取り巻きも、反論する余地がない。

あまりに的を得ているから。

レイは、「フン」とジェシカを尻目に、腕を組んで立ち去る。ルナシーは渋い顔で、わたわたしながらジェシカたちを見る。少し居たたまれないなと思ったが、

「…あなたたちが悪いのよ。“今”のレイにつっかかるから…」

あーあと何度も首を振りながら、彼女たちに言い聞かせた。そして、遠くのレイを追う。

しばらくして、向こうからジェシカの甲高い声が響いた。

「レイ、どうしたのよ、あなたらしくもない。」

ルナシーは、部屋のソファーに深く座り込んだレイを覗き込んだ。

「ルナシー……私ジェシカにひどいこと言っちゃった。先が無いなんて、絶対に言っちゃいけないことだったのに…」

レイは頭を抱えて、大きくため息をついた。ルナシーはレイの肩を抱く。

彼女は唇を噛んだ。

「私、ただ単に、フォルテへのイラつきをジェシカにぶつけただけだわ…。最低…」

「仕方がないわよ。いつもあなたにつっかかるジェシカも悪いもの。でも今度会ったら謝るといいわ」

「……そうね」

レイはやっと顔を上げた。小さく泣きそうに笑うと、ルナシーを見てコクンと頷いた。

優しい風が、出窓から流れ込む。

これが“あの悲劇”を生むとも知らずに。

「スゴいな、レイ。さっきレミオに聞いたけど、レイ、あのジェシカに“筋違い”って言ったらしいぜ」

キクマサは練り消しを買って、部屋に戻ってきた所だった。
フォルテは「は？」と、今まで読んでいた雑誌を閉じると、帰ってきたばかりのキクマサの言葉を気にした。

「いつになくキツいな。モテないはずだよ。…まぁジェシカが筋違いってのもわからんでも無いけど」

フォルテは立ち上がって背伸びをした。キクマサは机のイスに座ると足を組んで、じっと探るようにフォルテの方を向く。

「お前が怒らせたからだ。最近レイを避けてるだろ」

「……」

フォルテは無言だった。
キクマサはデッサン用具を確認しながら、丸くなった鉛筆をナイフで削ぎ始めた。

「レイは二年生でルネ・ヴィライアーに最も近いんだ。変な態度で、彼女を困らせるなよ。試験に集中出来なかったら可哀想だろ」

キクマサの淡々とした正論。
フォルテは少し黙っていたが、小さくため息をついたのが分かる。

「……だからだよ、キクマサ。レイは絵に生きなきゃいけない。だから……俺から離れなきゃ」

「……？」

キクマサは、ゆっくり顔を上げる。フォルテはそっと出窓に近寄り、薄く淡い夕暮れを眺めた。
ルネ・ヴィルトンからの夕暮れは絶景で、心を引き出して写すようで。

フォルテの表情は落ち着いていた。
まるで、いつもの彼じゃないように。

ジェシカ・バーナードのご立腹様は、すさまじいものだった。
部屋に帰ってからと言うもの、ソファーのクッションは引きちぎるし、植木鉢は壁に投げつけるし、

彼女の髪なんて乱れて、息も荒い。

「あの女…っ、私に向かって“先がない”ですって…っよくも……」

出窓の花瓶を落とす。ガラスの破片が、暗い部屋の中で怪しく光る。

彼女にルームメイトは居ない。いびりすぎて退学したのだ。

「……許せないっ！！　あの女…っ！！！」

机の上の物を、片っ端から床に落としまくる。

叩きつけては息を荒げて次を探す。

その時だった。

机の上に、古くて、でも装飾がとても美しい箱があった。

何とも妖しい空気。

ジェシカにはまるで見覚えが無かったが、吸い込まれるように箱を開いた。

「……何よこれ…」

箱の中には、一本のナイフ。外の箱と同様に美しい装飾が施されている。

彼女は顔をしかめた。

“鉛筆でも削って下さい”

ナイフと共に入っていた手紙には、一言そうとだけ書かれていた。

ジェシカはナイフをそっと手に取った。

宙にかざすと、組み込まれた石が淡く光ったように見える。

何て美しいの。

ジェシカはただただそのナイフを見つめた。

冷たい石の感触。

誰がくれたのかも分からないのに、手放せなくなる。

妖しい月明かり。

美術品の魔力。

変な気持ちが、フツフツと湧き上がって、何だか気分が良い。

これが、我々の最初に触れた、魔力を秘めた美術品。

美しさなんて、恐ろしさと同じ事。

我々はまだそれを知らなかった。

―ｄｒａｗ

11：ルネ・ヴィライアー・コンテスト5～失明～

僕の右目を

君にあげられたら良かった

その日の夜は、窓を明けて寝ても暖かくて、だからきっと胸騒ぎがするんだ。
シンとしているのに、どこか騒がしく感じる。

月も遠いのに、目の前にあるみたいだ。

キクマサはそっとベットから出た。
今日は何だか、眠りたいのに眠れない。よく分からないけれど、別に明日の三次が気になるわけでも無いのに。

どうしてだろう。

キクマサの予感は、もしかしたら当たっていたのかもしれない。
でも、まさかこんなことになるなんて、誰が思っただろう。

全ては、三次試験が始まろうとしていたときの事だった。ここまで残った生徒が、静かに鉛筆や木炭を削っている音がする。
目の前の石膏像が、静かに布を被って試験を待っている。何の石膏像か分からないのに、静止した存在感、物としての造形から、音の無い息づかいが聞こえてきそうだ。

そう。それは、そんな静かな時間だった。
どうして、こんな事が起こったのだろう。

今更何を思っても遅すぎるけれど。

キクマサもフォルテも、ルナシーもレイも、それぞれがそれぞれの席で、周りの人達と同じように、試験が始まる時間を待っていた。

時計の、チクタクという音。
その静寂を破ったのは、一人の女子学生。

「……どうかしましたか…？　ジェシカ・バーナード」

試験監督のネイリー先生が、まず、彼女の異変に気が付いた。

ジェシカが急に立ち上がったのだ。
先生が再び声をかけたが、返事をしない。

「……」

ジェシカは無言で、スタスタとある人の元へ行った。

レイのもとへ。

「……？　ちょっとあんた、もうすぐ試験よ」

レイは不信に思って眉根を潜めた。
他の生徒だってそうだ。

その時、悲劇が起こった。

「きゃあぁあああ！！！！」

女子学生の甲高い叫び声。連鎖して起こる悲鳴と、席から逃げる人の音。

彼女がイスからガタンと落ちて、床に倒れ込んだ事実。

右目を震える手で抑えながら。

血が、指の隙間から流れて、流れて、落ちる。

「レイっ！！！！」

「―っジェシカ、止めなさい！！！」

硬直しきった空間を斬るような声。ネイリー先生は目を見開いて、ジェシカの前に立った。他の監督の先生も、彼女の腕を取り押さえ、手から例のナイフを奪う。

ジェシカは訳の分からないことを叫びながら、暴れまわる。ルナシーは半分泣きそうになりながら、レイに駆け寄った。

「誰か…っ!!　誰か医者を!!!!　早く!!!!」

ルナシーの声で、周りの何人かの生徒が教室を出て行った。一気にざわざわし始める教室。

キクマサはもう何が起こったのか分からずに、右目から血を流すレイに駆け寄り、青い顔でレイの名を呼ぶルナシーを見た。

そして、フォルテを探した。

「……」

キクマサは時間が止まったかと思った。

だってフォルテが、驚きと、絶望を確信したような瞳で、

一筋涙を流したから。

ジェシカは狂ったのだろうか。

地に伏せるレイを見下ろしながら、イカレたように笑っている。

「様はないわね、レイデル・リローズ。…あなたさえ居なければ、私は一番になれるのよ。…あなたさえ居なければっ!!!!!!」

「止めなさい！！！　ジェシカっ！！！」

先生達も息を荒げて、彼女を止める。バタバタと、他の部屋からも、ルネ・ヴィルトンの教師たちが駆けつけてくる。

座ったまま、泣きじゃくっている女子生徒もいるし、震えが止まらない人だっているようだ。

当然だ。

ナイフで他人の目に切りかかるなんて正気じゃない。

ジェシカは天を仰いで、小気味よく笑った。

「…あ―あ、目が無けりゃ、いくら天才様でも絵は描けないわ」

「黙りなさいジェシカ。あなたもただじゃ済まなくてよ」

ネイリ―先生は、怒りに震える瞳で、それでも平常心を保とうとしていた。信じられない、信じたくない事実。何度も首を振っていた。

「まさか……こんな事をしてしまうなんて……。あなたにだって素質が合ったのに……っ、誰よりも努力してたじゃない…ジェシカ！！！」

先生の言葉は痛切で、その言葉に、ジェシカは笑うのを止めた。

何だか、何かがプツンと切れたかのように、抵抗する力すら無くして。

「…だって先生……それでも天才には叶わないでしょう……？　私よりも上に誰かがいる限り、誰も私の絵を見てくれないじゃない！

！！」

ジェシカは張り詰めていたものを、涙をこぼした。
彼女はレイへのコンプレックスが、きっと誰より大きかったに違いない。キクマサは複雑な思いに、拳を握った。

その時、

「だから、レイの目を刺したっていうのか！！！　ふざけるなよ！！！！」

フォルテは、今まで見たこともないくらい、憎しみに溢れた形相で、ジェシカ・バーナードに向かってつかみかかろうとした。
キクマサは、マズいと思ってフォルテの前に立ち、彼の胸ぐらをつかんで止める。

「止めろ…っ、フォルテ！！！」

「離せキクマサ！！！…レイが……っ！！！」

レイが。

フォルテの言いたいことは、痛いほどわかる。
キクマサは涙をこらえて何度も頷いた。フォルテは怒りと憎しみに、涙をにじませながら、ゆっくりとレイを見た。

「世界が…っ、彼女を待っていたのに」

彼女の絵を待っていたのに。

やがて、バタバタした足音と共に、何人かの医者がやって来て、レイを担架に載せて連れ去った。
ただ、血の跡を残して。何て量だ。

そしてすぐに警察がやって来た。
ジェシカ・バーナードは抵抗する事もなく、素直に連れていかれた。
と言うよりも、生気が無くなったように、ぼんやりしていたと言った方がいいかもしれない。

いったい何が、こんな悲劇を生んだのか。

こんな悲劇を。

当然、その日あるはずだった三次試験は、一週間後に延期された。
生徒の中には、ルネ・コンを辞退したり、カウンセラーが必要な人もいて、色々なことが後に尾を引きそうだ。

メディアもメディアで、この報道は世界を揺るがせた。

あれから2日がたった。レイの容態も分からないし、ジェシカがどうなったのかも分からない。
誰もが、その話題に触れたそうにしながらも、触れようとしない。

フォルテはあれから物凄く静かだ。無理も無い。

今日は雨だった。
フォルテは静かに本を読んでいた。さっきから一向に進んでいないけれど。

「大丈夫か…フォルテ…」

「……大丈夫じゃない」

そりゃそうだ。キクマサは顔をしかめた。
フォルテは本を閉じ、いつになくぼんやりとしていて、何を見ているのか何も見ていないのか。

「何で…こんな事になったんだろう…。全部俺のせいだ」

雨の音がうるさい。フォルテの声がかき消されてしまいそうだ。

「…何でお前のせいになるんだ」

「俺のせいだよ。俺がレイにあんな態度を取らなければ、こんな事にはならなかった。……こんな事を望んでいたわけじゃないのに…」

「……」

フォルテの気持ちは痛いほど分かる。キクマサだって、この一年、ずっとフォルテとレイを見てきたんだ。
いくら文句を言い合っていたって、彼らはお互いを大切にしていた。
それだけは分かっている。

レイの目はもう戻らない。

あの時、あの事件があった時、たとえそれを予感していたって、真実を知るのは辛すぎる。

「……どういうことですか…ネイリ―先生……」

ルナシーは震える声で、聞き返した。先生の言った言葉を信じたくなくて。

キクマサも、フォルテも言葉を失った。

「……レイデル・リローズの右目は…もう見えることは無いでしょう。……残念ですが」

ネイリ―先生の目が赤く腫れていた。きっと誰もが悔しくて悲しいのだ。

「……レイは…これからどうなるんですか…？　絵は……」

絵は、描けるのだろうか。

フォルテの声は、恐いくらいに落ち着いていた。

キクマサもルナシーも、その先が知りたくて、でも知りたくなくて。

不安な面持ちで先生を見上げた。

「……後は、彼女次第です…」

ネイリ―先生は、曖昧な表現をした。でもそうとしか言えない。
後は、レイの選択次第。

でも、今までと同じようにいかないのは紛れもない事実。
絵を描いていく者として、片目を失うのは大きすぎるリスクである。

「フォルテの奴…っ、どこ行ったんだ…」

それは、延期された三次試験の日の事だった。

朝起きたら、フォルテが居なくなっていた。ケータイにいくら電話しても繋がらない。
もうすぐ三次試験が始まるというのに。

「キク…っ、フォルテいた?」

「いや……どこにも居ない」

ルナシーも、この校内中フォルテを探し回っていた。

「…あのバカっ!!　一体何を考えてるんだ!!!」

キクマサが、よく分からない怒りで、セットしたばかりの髪をかきむしっているときだった。

ケータイが鳴るのをポケットの振動で気がつく。

それがフォルテであることは、表示を見てすぐにわかった。

キクマサはすぐに繋いで、

「フォルテ!!!　お前何やってんだよ!!!」

彼が何か言うより前に、一度怒鳴らないと気がおさまらなかった。

『おぉぅ……キクにしちゃ威勢がいいな……怒ってる?』

ケータイの向こうの声は、紛れもなくフォルテであった。

「当たり前だろ!!　俺とルナがどれだけ探したと思ってるんだ…っ!!!　もうすぐ三次試験が始まるのに、間に合わないぞ!!!」

『……』

少しの沈黙の後、フッと笑うような吐息がケータイ越しに聞こえた。

『俺、ここでルネ・コン辞退するよ……』

「……え…」

キクマサは、今フォルテが言ったことが、少しの間理解出来なかった。

「……な、何で…せっかくここまできたのに……」

キクマサの動揺に、ルナシーは心配そうに様子を伺っている。
電話の向こうのフォルテは、大人びた声で、やけになっていると言う様でも無い。だからこそいっそうこちらが戸惑うのだ。

「…今、レイの病院に来てるんだ…。俺はレイと…来年頑張ろうと思う……」

「……」

キクマサは一つ息を付いた。

「……それで、お前がいいなら……」

来年、ここまで残れるかも分からない。
レイが、戻ってくるかも分からないけれど。

それでもキクマサには、こうとしか言えなかった。

『……レイは、絵をあきらめない…。俺は、それをちゃんと見届けなきゃ』

フォルテらしくもない。
でも、それで良いと思った。
彼の選んだ選択は、きっと正しかった。

レイは、暗い病室で、たった片方になった目を虚ろにさせていた。
結局自分は、人生で最も失ってはいけないものを失った。しかも、
自分が招いた惨事だ。

「……」

今や痛みさえ感じない。
半分になった視界。

不意に、病室のドアを叩く音がした。
どうせ、看護士さんが、包帯でも替えに来たのだろうと思っていた。

「……やぁ…レイ」

「……」

レイは絶句した。

どうして。

なんであいつがここにいるの。

フォルテが…。

「……あ…あんた…、何で…」

だって今日は三次試験の日なのに。私には、もう手の届かない場所。

フォルテは、ただじっとレイを見ていた。イスに座るでもなく。暗い部屋で確かめる彼女の右目を、何とも言えない面持ちで見ている。

「……痛い…？」

「……」

レイは首を振った。

「痛みすら感じないの…。バカみたい…」

バカみたい。

こんな姿、フォルテにだけは見られたく無かったのに。

バカみたい。

「……もう、分からないの。両目だったころの視野の広さも。……あなたまでの距離だって…」

片目を失うリスクの大きさは、失ってみて分かるもの。

レイは、片目の包帯を抑えた。

バカみたい。

私には絵しかないのに。

「……まだ、終わった訳じゃないだろ。レイ…」

その時フォルテが、静かな空間を破った。

「……フォルテ…」

「許さないからな…。お前が絵をやめるなんて…」

レイはフォルテを見上げ、彼の真剣な表情に、突然胸が苦しくなるのを感じる。カーテンすら開けてない病室の暗がりに、フォルテとレイは見つめたっていた。

彼女は、泣きそうなのを我慢できなかった。

何度も首をふりながら、希望を見いだせない自分のそのままを口にする。

「……無理よ。前のように描ける訳がないわ…」

そう。

こんな風にあっけなく、私の時代は終わる。フォルテにだって分かっているはず。

数秒の静寂が、痛いくらいに長く感じた。

「……なぁ……覚えてるか……？」

ふいに、フォルテがレイに問いかけた。

「どっちが先に絵を描き始めたのか」

「……」

レイも、フォルテもただ黙って見つめ合っていた。

「最初に始めたのは…あなたよ…。だから私はあなたと一緒に絵画教室に通いたくて……」

「そうだ。でもお前はすぐに俺を出し抜いた。才能があったんだ……。どんどん高みへ行ってしまった」

悔しさが無かったと言ったら嘘になる。

でも、悔しさ以上に、憧れの方が大きくて、ずっと、世界は彼女を待っていると思っていた。

彼女の絵がいつか、この世界にセンセーションを巻き起こすと、それを見たいと思っていたのだ。

「一番最初に、お前の絵を見つけたんだ……俺が……っ」

フォルテは、泣きそうに笑った。
レイは、ふらつく距離感の計れない手で、必死に彼の頬に触れた。

そう。
あなたが私を、この世界に導いてくれたの。

「……えぇ。あなたが私を、連れてきてくれたの……こんな所まで……っ」

はまりにはまっていった。
あなたのせいよ。

カーテンの隙間から、わずかに光が差し込んで、

泣きながら抱きしめ合う二人を照らしていた。

draw

12：魔術師の弟子

この世の美術の理を
この世の美術の役割を

いったい誰が知っているのか

「絵画科のエリーゼ先生が、僕らをお呼びになるなんて珍しい…」

淡い、アプリコットブラウンの髪の男子学生が、静かに微笑んだ。
彼の後ろには、黒髪で長身の青年が控えている。
二人は絵画科とは違う制服を着ていた。茶色いブレザーに、赤く細い、紐のリボン。

絵画棟の中の、生徒たちから離れた部屋で彼らを待っていたのは、眼鏡をかけた厳格そうな女性だった。

「…お座りなさい、ルネ・ゴールドロッド。ルネ・シルバーロッド

…」

彼女はニコリともしないで、淡々と彼らを呼んだ。

ルネ・ゴールドロッドと呼ばれた手前の学生は、アプリコットブラウンの髪を耳にかけると、何かを悟ったように再び微笑んだ。クスクス笑いながらイスに腰掛ける。後ろの青年も、後から彼の隣に座った。

「…わざわざ、あなた方彫刻科のヴィライアーを呼び出したのは、先日我が校で起こった事件について知りたいことがあるからです…。」

エリーゼ先生と呼ばれた女性は、目の前のテーブルに数枚の写真を並べた。
それは全て、あのジェシカが持っていたナイフの写真だった。

「…これは……」

ルネ・ゴールドロッドは一枚を手にとって、宙に掲げる。
たった一瞬だけ、彼の瞳が淡く金色を得た気がした。

「我が校で先日起こった事件については、語る必要は無いでしょう…。ひどい出来事でした」

エリーゼ先生は感情の読めない表情で。それでもやはり、この出来事に憤りを感じていると思わせる口調だった。

ルネ・ゴールドロッドと呼ばれた、割と小柄な青年は、彫刻科のルネ・ヴィライアー団長。
名を、パリス・ヴァレリーといった。

「……なるほど。先日の痛ましい事件は、このナイフが原因ではないかと…。エリーゼ先生はそうお考えなのですね」

パリスは相変わらず読めない笑みで、写真をそっと机に置いた。

「…えぇ。ジェシカ・バーナードに非がなかったとは言いませんが、普通の人間ならあのようなことは出来ません…」

「……どうでしょうかね」

エリーゼ先生が言い切った事に、パリスは少し間を置いて、

「でも、あなたのお考えは正しい。このナイフは魔力を秘めた美術品“アール・カーヴァ”。…まぁ、ランクGといった程度でしょうが。それでも弱い心はつけ込まれる…。」

パリスは写真に指を突きつけた。彼の穏やかな表情は、裏腹に謎めかしい。
エリーゼ先生は瞳を細めた。

「…ジェシカは、美術品に呑まれたと…？」

「そうでしょう。美術品とは美しくて恐ろしいもの。特に“アール・カーヴァ”になってしまったら」

そしてパリスは、ふと視線を斜めに移す。

空気がヒヤリとした気がした。

「…それにしても、彼女はどうやってそのナイフを手に入れたのでしょう……」

そっと顎に手を添え、彼は眉根を潜める。エリーゼ先生はふと顔を上げた。

「アール・カーヴァとはそうそう手には入るものではありません。しかし…どうも最近……これらの流動が著しい」

パリスの言葉にエリーゼ先生は静かに頷いた。

「…えぇ。“誰が”彼女にナイフを渡したのか…。それが問題でしょう」

「そうなるでしょうね。基本的に、“いかがわしい”者はルネ・ヴィルトンには侵入できない。…ルネ・ヴィルトンの生徒と考えるのが妥当でしょうね。」

パリスは特に表情を変えずに、見解を述べる。それは、とんでもなく大きな問題だったのに。

エリーゼ先生は、視線を彼に向けた。

「あなた方以外にアール・カーヴァの存在を知る者が、この学校にいると…？」

「……それはそうでしょう…。美術品に近しい者なら、たどり着く可能性はありますから…。きっと、少なくないと思いますよ…」

「……」

エリーゼ先生は無言で、何かを思い巡らしている。それは、美術品に対しての不安か、人間に対しての不満か。
その時、パリスの隣に座っていた黒髪の青年が、貫いていた沈黙を破った。

「…パリス…そろそろ時間だ…」

彼は、パリスの方を向くと、切れ長の瞳を流す。
淡々とした、落ち着いた低い声音。

「ルーン…もうそんな時間ですか。そろそろ行かないと、ヴィンセント先生に怒られますね」

パリスは立ち上がった。エリーゼ先生と目を合わせると、また意味深に微笑んでいる。

「…わざわざ僕らに聞かなくても、絵画科のヴィライアーには優秀な鑑定士がいらっしゃるではないですか。彼はどうしたんです？」

「…カイ・ヴォストンは今、急な仕事で居ません。それに…魔力のある美術品については、あなた方に聞いた方が」

「……そうですか」

エリーゼ先生は軽く眼鏡を押し上げ立ち上がった。

「ご苦労様でした。ルネ・ゴールドロッド。ルネ・シルバーロッド。

あなた方もお忙しいところを…。ヴィンセント先生によろしくお伝え下さい」

彼女は軽く頭を下げた。パリスとルーンも立ち上がり、それに合わせてお辞儀をする。

彼らの長いローブが、緩やかに波打った。

「いえ…アール・カーヴァの問題ともなれば、我々に無関係な話ではありません。寧ろありがたい」

「……」

エリーゼ先生は、パリスを見た。
彼の背負っているものを見越した。

「…あなた方…彫刻科のヴィライアーは、どの科のヴィライアーとも違う。…目的も……役割も」

「それはそうです。こういう言い方は僕もあまり好きではありませんが、ルネ・ヴィルトンとは、我々彫刻科のヴィライアーのために出来たようなもの…」

そして彼はローブを翻した。

「ではご機嫌よう。エリーゼ先生…」

エリーゼは一人で部屋に佇んでいた。一秒前まではあの2人がいたと言っても良い空間が、ふと静かになった。
もともと、そこには誰もいなかったのではないか。そう思わせる程、静かな空間。

あの二人がいなくなって、分かったことがある。

空間が緊張していたこと。
一瞬で、空気が緩やかなものになったのを肌で感じる。

彫刻科のルネ・ヴィライアー

この世の美術の理を、

この世の美術の役割を、

最もよく知る者たち。

「……魔術師の弟子…」

エリーゼは、彼らの居なくなった、その一点を見つめ、ぽつりと呟いた。

彼らの事を語れば、いずれ、ルネ・ヴィルトンの真実にたどり着く。
ジハードという名のもう一つの物語。

避けては通れない、神話を巡る物語。

いずれ、時は満ちる。
全ての物語は繋がっているから。

l
d
r
a
w

13：ルネ・ヴィライアー・コンテスト6～黄金期～

僕らが真摯に絵と向き合えたのは、

きっと、彼と彼女のおかげだろう。

「どうだい、キクマサ。最終試験の絵は」

「自信は無いよ。でも満足だ」

淡いスポットライトに照らされた、自分の絵を、こういう大きな舞台に掲げられるのは不思議な気分だった。

キクマサとルナシーは、２人して最終試験に残れた。あの、レイの事件と、フォルテの決意。二人の覚悟。

それを目の当たりにしてから、僕らは絵に向かう態度が変わった気がする。

今日は最終審査の日だ。残った２０人が、約二週間で、自由に絵を描く。
それの展示の準備が今終わった。

「ここまで来ちゃったら、もうやることなんて無いな。あとは待つだけだ」

「…うん。俺は全然満足だ」

キクマサは、フォルテに手伝ってもらって、すでに展示を終えていた。

今日の午後から審査が始まる。

よもやここまで来るとは。

自分の絵が、こんなふうに光を浴びるようになるなんて。

ここに残れただけで、キクマサには十分だった。

幸せだ。

「…キク…」

背後から静かに、ささやくような鈴の声。

淡暗いギャラリーの、薄い光。

「そろそろここから出なきゃ…審査が始まるわ」

「…ルナ…、もう終わったの？」

「ええ…。ジェイル先輩に手伝ってもらったから。」

ルナシーは軽く笑った。彼女の言うジェイル先輩とは、去年の推薦ヴィライアー。

今年、ルネ・ヴィライアーになるであろうと言う候補の一人だ。

キクマサも名前くらいは知っていた。

「もう…なるようにしかしかないわ。」

ルナシーも、満足そうだ。

僕らはいわゆるダークホース。

所詮は新人。

だからこそ、欲も無く落ち着いて、描きたいものを描けたから。

「あ、キクマサ先輩！！　フォルテ先輩！！」

ギャラリーから出た時だった。

聞き覚えのある声音。

白いふわふわのくせっ毛。

黒のベレー帽。

「あ……」

キクマサとフォルテは同時にその方を振り返った。そして彼を見つけ、記憶を巻き戻した。

「あぁ～…、この前のベレー帽君。」

フォルテはハイハイといったように頷いた。キクマサは片方の手をズボンのポケットから出すと、「よう…」と手をあげた。

ルナシーは首を傾げ、キクマサを見上げて、

「…どなた?」

と尋ねた。

しかしキクマサは、はてと固まる。

視線をフォルテに流す。

フォルテは「おいおい」と小声で呟いてから、目の前までやってきた彼に、

「えーと……、ヘルクロウ・ラヴィーニ!!!」

と、まるで問題を答えるかのように人差し指を突きつけた。

ヘルはびっくりして、

「は、はい！！　な、な何ですか！？」

背筋をピシッとさせて、大きな目をさらに見開いた。
キクマサはやっと名前がわかったところで、何事もなかったかのように、

「…何やってるんだ　？こんな所で。」

ヘルを見下ろした。彼は笑顔で、

「あ、俺、残ったんです！！　最終審査！！！」

驚くべきことを言ってのけた。

2年生三人はもちろん度肝を抜かれた。あんぐりと口を開け、「はい？」と言った感じだ。

だって、1年生でここまで来るのって、そうそうないことだから。

ヘルは、多分一番そういうのに疎い。
高学年になるにつれ、きっとここまで来る難しさが分かるから。

「マジで？？それって超凄くない？？ほんとに超」

フォルテは真面目にそう思った。
キクマサは、多少面食らったが、共に高学年に立ち向かう下級生が増えて、そういう意味では嬉しくなった。

「まぁ…お互いどうなるか分かんないけど、頑張ろうな」

「は、はい！！ありがとうございます！！キクマサ先輩」

ヘルは嬉しそうににっこり笑って、目をきらきらさせた。
しかし、ふと宙を仰ぐと、何かを思い出したように、

「あ、でも…1年生でここまで来たのって、俺だけじゃないんですよ。もう一人、クレハ・ドルフォードっていうやつがいるんです。」

「……」

今年の1年生は侮れない。

3人は顔を見合わせた。

「……入ります」

軽いノックの後、彼はその部屋に入った。
標識は理事長室。

彼は絵画科ルネ・ヴィライアー団長

ハク・リュオンだった。
黒髪に、切れ長の瞳が、彼の存在感を象徴している。

「よく来たね。リュオン」

部屋の奥の机に腰掛けた、一人の中年の男性。
机に肘をついて、指をくんでいる。

黒とまではいかない短い焦げ茶の髪を、紳士的に整えてある、優男の風貌。

彼が、このルネ・ヴィルトンの理事長

エリック・オーディールだった。

他にも、理事長の妹のエリーゼ先生。
教頭のガイル・アンドリュー先生が、理事長の側に立っていた。

「…まぁ、座りたまえ」

理事長の一声で、三人は金の細工の、高級そうなイスに、それぞれ

腰掛けた。

「本題に入ろうか。…まぁ、今日の午後から、今年のルネ・コンが始まるわけだが」

理事長は広いこの部屋の、わずか三人を見下ろして、

「現ルネ・ヴィライアーと絵画科の教員による採点が、例年通りおこなわれるわけだ。…リュオン、ヴィライアーの統率は君の責だよ」

「……分かってます」

リュオンは腕を組んで答えた。

「しかしまぁ…今年は低学年の層が厚いですなぁ。例年ならば、最終審査まで、二年生が一人いれば良い方だというのに…」

ガイル先生は丸い眼鏡を鼻に押し当て、そのリストの紙を見つめた。

「…えぇ…、今年はある事件によって、コンテストに参加する生徒が大幅に減りました。しかも、最有力候補だった４年生のユリウス・デニスが、最終審査の直前に胃腸炎で入院。３年生のハルト・ウィリアムズはスイスのファームステイから帰ってきていませんので、このコンテストに参加していません」

「……」

リュオンは頭痛がする思いだった。

理事長も低くうなると、

「…ユリウスはもう何年も前から、ルネ・コンの有力候補なんだけどなぁ…。精神力が問題だね、彼は。……ハルトは何というか、自由人だよなぁ…」

「大問題ですよ。実力の無い者にヴィライアーになられると…俺が困る」

リュオンは「どうなさるおつもりです」と言わんばかりに、理事長の方を向いた。

「いえ…デメリットばかりではありませんよ。低学年から選ばれる者が増えれば、長い間ヴィライアーでいるものが増えるということ。そういった、ヴィライアー経験の長い者が卒業したとき、どういった表現者になるのか…楽しみではあります」

エリーゼ先生はクールにそう答えると、目の前の紅茶のカップを手に取った。

「エリーゼ先生の言うことは一理ありますぞ。心配なさるな、ルネ・テクタイト。今年はむしろ豊作ですぞ」

ガイル先生は、ダリのような髭をなでた。

「かの有名なラヴィーニ家の長男も最終審査に残ってますし。いえ…贔屓など致しませんよ。…それに…」

ガイル先生は理事長室に掲げれた、歴代理事長の写真をゆっくり眺め流した。

そして、端のひとりの男性を見た。

「旧理事長の奥様の弟子も残っているとか…。ここまで残ったのだから、やはりカトレア夫人は相当な教育者ですな」

「…そうだな。贔屓する気はないが、お母様が、どういった者に目を付け、その者がどういった絵を描くのか、興味があるよ。……あの人の目にかなう者など、そうそう居ないはずだ」

理事長は瞳を細めた。遠い何かを思い出すように。

リュオンは黙って聞いていた。しかめっ面なのは元々だが、この話に興味を持たなかったわけではない。理事長から目を背けると、

「…期待はずれだったら許しませんよ」

「はは。リュオン…大丈夫さ。ルネ・ヴィライアーに導かれる者、何かしら持っているのだから」

ルネ・ヴィライアー・コンテストは平等を保つために匿名制。

全ては紙一重な絵の審査。

ここまで残ったものならば、誰が選ばれたっておかしくはない。

誰が落ちたっておかしくはない。

全ては紙一重な一枚の絵によって、運命が分かれる。

天使も悪魔もそこにいる。

わかっているはず。

絵を描くというのは、そういった意味で難しい。

枠はたったの七石。

リュオンはルネ・ヴィライアーの集まっている部屋まで、一直線で帰ってきた。
部屋の外の廊下で、ひとりの男子学生が窓の外を見ている。

ふと、リュオンに気がついた。

「…おかえり、リュオン」

「…ティアン…」

眼鏡をかけた、その青年は5年生のルネ・ターコイズ。
団長補佐のティアン・レーゼスだった。

「今年は豊作だよ」

「お前も先生達と同じことを言うんだな」

リュオンはティアンに並んで、窓から外を見た。

悠大ともいえるルネ・ヴィルトンの敷地。
ギリシャの青い空の色。

「…ジェイルとカイは去年の推薦ヴィライアーというのを抜きにしても、今年確実になれるだろうね。あの二人には、ヴィライアーでいてもらわなくちゃ…」

ティアンは眼鏡の奥で、ほくそ笑んだ。
彼は優秀な補佐だ。
リュオンを幼い頃から支えてきた。

「…ルネ・ヴィライアーになることは、このルネ・ヴィルトンを象徴すること。…想像以上に過酷なことだ。俺たちが一番わかってる」

リュオンは切れ長の瞳を、さらに細め、低い声でつぶやくように言った。

「…でも、美術界にどれだけ必要な存在か…。世界の美しいものを見に行ける…その舞台に上がれる」

自分の表現者としての、

一番大切な物を、知りに行ける。

「俺たちは今年が最後だ。…俺にとって……一生できっと、最後の自由」

「……」

未来の決められた者の、最後の時間。

「……心配しないで。間違い無く、今はルネ・ヴィライアーの黄金期だよ…」

ルネ・ヴィルトンの歴史の数だけ、ルネ・ヴィライアーの存在がある。

もちろんそれが、この学校の全てではないけれど。

それでもヴィライアーの存在が、歴史を左右してきたのは言うまでもない。

今までも、これからも、沢山のヴィライアーがいる。

でも、この代のヴィライアーが、後に、

黄金期と言われ、長く語り継がれることになるのは、

全ては、この代のヴィライアーによって、大きく何かが動くことになるから。

リュオンは穏やかな窓辺から現実へと戻った。

そして、ヴィライアーたちのいる、その部屋の扉を開ける。

彼の、

彼らの選択が、

きっと、世界を変えた。

l
d
r
a
w

１４：ルネ・ヴィライアー・コンテスト７～最後の審判～

それは、

最後の審判

“青底”

海辺を歩いていたら、波に乗って、一つの小瓶が転がってきた。

何だろう?

僕は、そっとその小瓶を拾い上げた。

おや?

ビンの中に紙があるぞ。

僕はその紙を取り出して広げた。

「はじめまして。そしてさようなら。

この星はもうダメです。

今夜、最後の水を飲みました。

僕はこの手紙をコロニーの前の沼に投げます。

いつか、いつの日に
いつかの過去や未来で、
誰かがこの手紙を拾ってくれますように。

３００５／５／１０」

海が泣いている。
この手紙は海の底に沈んだ、未来からの手紙だった。

風が僕のそばを通り抜けた。

誰かに呼ばれた気がして、振り返った。

／以下省略

「海をこんな風に表現するのか。恐れ入ったな…」

美術館ばりの展示ギャラリー。

ルネ・ヴィライアーの一人、４年生のルネ・ガーネットであるシャンデリー・リオールが、青い海の絵の前で佇んだまま、その絵のイマジンストーリーに身を委ねていた。

シャンデリー・リオールとは、金髪壁眼の、ルネ・ヴィルトンでも非常に有名な人物である。
ここ１０年で、唯一の２年生からのヴィライアーだ。

見目麗しい所もあって、彼は一躍学園の王子と称えられた。

そんな彼が見ていた絵は、細かい技術の光る、隙のない海の絵。

「リオ…！」

彼の腕に抱きついた一人の女子学生がいた。

「シーダ…、どこに行ってたの？」

「シャルロとちょっとね。…リオこそ、立ち止まっちゃって」

シーダと呼ばれた、その女子学生。

４年生ルネ・カーネリアンの、シルフィーダ・ケイドである。

「見てごらんシーダ。この絵…」

「……」

リオに促されて、シーダはその絵を見上げた。

青と白と。

見えない海底に隠された物語。

シーダの目の色が変わった。

「……素敵……。美しい海なのに…、美しさを描いてるわけじゃないのね」

美しさとは

綺麗なものだけではないから。

＊シャンデリー・リオール（ルネ・ガーネット）

＊シルフィーダ・ケイド（ルネ・カーネリアン）

「……」

みんながあっけに取られた絵がある。

スノーフリーク・ロズベルトは、ぽかんとした群衆の中で、相変わらず無表情だったのだが、

内心その絵に思うところがあった。

“地下迷宮”

土を踏む。

埋もれる。

キラキラ。

ドカンゴン。
ドカンガンゴン。

キラキラ。

落ちたと言うか滑ったと言うか

キラキラ

上を見る。

手を伸ばす。

チカチカ。
土が光る。

砂の妖精。
優しい怪物。

一番恐いのは、自分自身。

赤の色。

／続く。

「……連載物？」

スノーは一人顔をしかめた。
彼にとって、この絵を描いた人物はよく知っている人であり、また、絵があまりに強烈かつ野性的で、いかにもアカデミックとはほど遠い自由気ままなものなので、すぐに分かる。

「すっげーな…とうとうルネ・ヴィルトンもこういうのに手を出すような時代になったんだな…」

“斜め前の人”が、小声でそんな事を言っていた。
確かに今までは、こういう絵の種類の人がルネ・ヴィライアーになることは無かったから。

何を描いているのか、ハッキリとは分からない絵。
ビビッドの絶妙な駆け引き。

メインは自ずとわかる、そんな色との会話。

何も考えていないようで、数ある正解を導き出す、ある意味で物凄い絵画。

「凄いわね。デタラメそうで、でも間違ってないもの」

スノーの隣に、いつの間にかシャルロがいた。

彼女は、スノーとは裏腹に、アーモンド型の瞳に驚きの色を浮かべ

ていた。

“斜め前の人”は、「お、来たね小さいお姉様」とか、よけいなことを言ったので、彼女はそいつをにらむと、「…後で見てなさい。フレイ」と、小声だが、怖い口調だった。“斜め前の人”は、そそくさと逃げる。

「全く…」

彼女はブツブツ言いながらも、その絵を見上げた。
スノーも再び、視線を絵に戻す。

「これって…もの凄く計算されているわね…」

「……まぁ、本人はわかってないかもしれないけどね」

「……知ってるの？」

シャルロは顔をしかめた。不思議そうというか、胡散臭そうにスノーを見上げる。

「……多分ね」

スノーはシャルロと視線を合わせずに、眉根を潜めた。

「花の絵って、スタンダードだけど、それ故に難しいわ」

「…コスモスかな…凄いや、極端に細い筆で仕上げてるね。…良い表現だ」

レッドはまじまじと、驚くべきそのタッチを見つめた。

「……待って…」

ナギはその絵から遠ざかり、振り返る。
その時の、何ともいえない静かな驚き。
爽やかな空気。

「驚いた…。花と花の間に人がいるわ」

「…何だって？」

レッドは小声で聞き返し、小走りでナギのところまで下がった。
何て遠近感。

人物は不確かなタッチなのに、確かな存在感だった。

“憧れ”

私とあなたには、この花畑分の距離がある。

私は花の隙間から、

遠いあなたを目で追った。

私とあなたには、

この花畑分だけ距離がある。

ある日あなたは居なかった。

私はいつものように、あなたを覗いていたのに。

ドコにいるの？

私は花をかき分けた。

コスモスが散る。

向こうがわに出たとき、

日差しの眩しさに目を覆った。

太陽の恩恵が、

あなたの視力を奪ってしまっていた。

／以下省略

静かに、厳かに、審査は続けられた。

絵に答えは無い。

「……大らかそうで、どこか強い。…人物像がわかる気がするよ」

理事長はある絵の前で、落ち着いた声で言った。

エリーゼ先生はその時の理事長の顔を、いつまでも忘れないだろう。

宝物を見つけた、少年のような顔だった。

“生き恥”

過去の罪も、忘れたわけじゃ無かった。

忘れていいわけない。

雨とラベンダー

霧とクロッカス

雲のような、私の憧れ

風のような私の恩師

私は生き恥をさらして、あなたを追います。

私の人生を変えてくれた人よ。

私は生まれ変わったりしません。
このまま、過去のしがらみを背負ったまま、
明るい世界を歩みたい。

／以下省略

エリーゼにも、理事長にも、絵には描かれていない、誰かを見た。
それは、人物すら居ない、抽象画だったのに。

でも、それはよく知っている人のような、

よく知っている感情のような気がした。

「お母様は凄い人ね…。偉大だわ」

「おや…エリーゼ。君もこれは、お母様だと思うかい…？」

理事長は横目でエリーゼを見た。微笑む目元に、小さなシワをつくる。

エリーゼは、メガネの奥の瞳を、その絵画から離すことなく、

「少なくとも、私にとっては、お母様よ…。」

絵から読みとる物語。

正解は無く、

また、一人一人あると言ってもいい。

彼らはキクマサの絵に深い感動を覚えた。

目の肥えたこの二人すら、心を動かされたのだ。

それは、キクマサがきっと、絵を描く楽しさを一心に込めていたから。

欲もなく、ただ、絵を描ける喜びと感謝を

奇跡的なものを描いていたから。

最終審査に残ったのは２０人。

審査員は絵画科のルネ・ヴィライアーと、６０人余りの教授たちだった。

投票は採点制。

その合計点で、すべては決まる。

リュオンは相変わらずしかめっ面で、自分の採点用紙を見ていた。

自分の中で、答えは出ている。

絵から読みとれる、その人間性や、あふれる個性。

ルネ・ヴィライアーとして欲しい人材。

今年は思いの外に面白い。

イマジンストーリーを通して、訴えかける絵が多い。
もちろん全てがそうではないけれど。

去年の、優秀な先輩方の抜けた穴を、埋めるだけの人材は居そうだ。

ボールペンが、番号を刻む。

点数を示す。

赤い絨毯。
大理石の壁。

そうやって、世界に導かれるように、

歴史に名を残す者は運命的に出会う。

リュオンは投票用紙を二度折って、
白い箱に入れた。

最後の審判は下された。

いよいよだった。

新生ヴィライアーの誕生。

六つの玉座に

誰かが座る。

draw

15：新生ルネ・ヴィライアー

新たに玉座は与えられ、

宝石の王冠を授けられるだろう。

‡掲示板‡

＞ルネ・サファイア＜
ジェイル・クオーシャン（3年）

＞ルネ・ハウライト＜
カイ・ヴォストン（３年）

＞ルネ・アメジスト＜
オノダ・キクマサ（２年）

＞ルネ・トパーズ＜
ルナシー・ミディエム（２年）

＞ルネ・アクアマリン＜
ヘルクロウ・ラヴィーニ（１年）

＞ルネ・コーラル＜
クレハ・ドルフォード（１年）

以上六名を新ヴィライアーとする。

確かにそう書いてあった。

あの最終選考から約三日。

キクマサとルナシーは、掲示板の前でお互い顔を見合わせた。

周りでは、ザワザワ騒がしい。

とにかく1年生と2年生が四人もいる、歴代でも例のないことに、驚いているやら憤慨しているやら、苦笑いやらで。

キクマサとルナシーはそそくさとその場を去った。

とにかく、人目のつかないところに行かないと、上学年のプライドに火をつけかねない。

バン！！

勢いよく４４４号室の扉を閉めた。

「…見た…？」

「見たわ。どういう事？」

ルナシーは口元に手を当て、何がなんだかわからないようだった。

キクマサも腕を組んで、その場をウロウロしながら、

「…棚からぼた餅ってこういう事かな…」

「何ですって…？」

「いや、日本のことわざなんだけどね…」

まさかというか、とんでもないというか

恐れ多いというか。

「…アメジストと…トパーズか…」

紫と黄の宝石。

栄誉ある称号。

「夢のようだわ。嬉しいけれど、なんだか怖い…」

「……」

誰もいないその部屋で、埃が光に透けて散る。

静かな日溜まりに、

とんでもない事態に僕らは戸惑いを隠せなかった。

その日、フォルテは寝坊した。
起きたらキクマサが居なかったから、あいつ一人で合否を見に行ったんだな、と、多少ばつが悪かった。

急いで掲示板を見に行ったときの、

「えええええ!!!」

と、とんでもない驚きようだったので、やはりキクマサと共に居なくて良かったかな、といったところだった。

「だってお前起きなかったんだから」

「嘘だ。そこまで本気で起こしにこなかったくせに」

「当たり前だろ。その場でお前に慰められるのは御免だったんだよ」

当然キクマサは受かってるとは思っていなかったので。

ルナシーとは、掲示板前で落ち合ったけど。

「見たかったなぁ。お前等のビックリしてるところ」

フォルテは何を想像しているのか。

宙を見てため息をついた。

４４４号室に、相変わらず籠城していたキクマサとルナシーの所に、先ほど凄い勢いでやってきたのが、このフォルテだった。

「…レイへのみやげ話が出来たなぁ」

「……」

キクマサとルナシーは、ふと顔を上げた。

「…今日、お見舞いに行くのね」

「うん。まぁ、あんまり心配すんなよ。あいつ、もうすぐ退院出来るんだから…。大丈夫さ」

フォルテの口調は、とても信頼できそうなほどに、落ち着いた物だった。

この二人なら、きっと大丈夫だ。

ルネ・ヴィライアーの会議室が、いったいどこに存在するのかわからないのに、ルネ・ヴィライアーになってしまった。

「おめでとうキクマサ君!!!」

運がいいことに、レッド先輩が、たまたま目の前を通ったけれど。

「レッド先輩。どうも。…あの、ヴィライアーの会議室って何処ですか??」

キクマサはそこら辺をさまよっていた焦りから、いきなり聞いてみた。

レッド先輩は相変わらずにこやかに、

「絵画棟の最上階だよ。いいね、その誰もが知ってる常識を知らないところが」

「……スイマセン」

キクマサは、冷や汗ながらに、斜め下を見た。

レッド先輩とエレベーターに乗り込む。
彼に偶然会えて本当に良かった。

「今日の会議は戴冠式だよ」

「た、戴冠式!?」

キクマサは聞き返した。

「そう。宝石をね、貰えるんだよ。君も」

レッドは自らの胸のブローチを指差した。

その、深い煌めきを秘めた、ルビーのブローチを。

「君はアメジストだったね」

「…はい。…確か」

キクマサは多少控えめだ。レッドはそんなきキクマサを、きょとんとした目で見ると、

「もっと自信を持ったほうがいい。運だけでなれるものじゃないんだから」

「……はぁ」

キクマサはゆっくり頷いた。自信がないというより確信がないのだ。

と、その時だった。
エレベーターが、最上階に行く前に止まった。
誰か乗るのかなと、単純に思っていた。

「あ、団長」

レッドは、乗り込んできたその男に、当たり前にそうは言えたけど。
キクマサにとってはいきなりすぎる。

ルネ・ヴィライアーの団長である、ハク・リュオンである。
彼は、レッドには目もくれずに、鋭い瞳で、キクマサを見た。

「……わかった。ちょっと待て」

団長は、キクマサが何か言う前に、ストップをかけた。

「お前、オノダ・キクマサだろ!!」

「は、はい…。え…何で…」

キクマサは戸惑った。
リュオンは腕を組んで、

「俺が新メンバーの名前をチェックしてないと思うか?そして珍し

く唯一のアジア系だったから」

ぶっきらぼうな言い方だが、思いの外な事を言う。

「今年は1年生が二人もいるね、団長」

「そーだ。頭抱えるぜ、今年は」

リュオンはエレベーターの壁に背をつけ、眉間にシワを寄せた。

その時、再びエレベーターが止まった。

ドアが開いた時の、リュオンの嫌そうな顔と、乗ってくるその人のうんざりした顔。

「うーわ。頭痛い原因がここにも」

団長は、乗り込んできた女子学生に向かってそんな事を言う。

深い色の綺麗な巻き毛と、スミレ色の瞳。小柄だけど、かなり気が強そうだ。

知ってる。

ルネ・アンバーのシャルロ・グレディアだ。確か4年生の。

彼女はこの学園の賞金女王で有名だ。

「嫌だ。変なのとぶつかっちゃった」

彼女は片腕を腰に当て、団長を見て鼻で笑った。

「何だとてめぇ。相変わらず生意気だなシャルロ」

「団長こそ、相変わらずの単細胞具合ね。と言うより、どうしてあなたが団長に抜擢されたのか、未だにわからないわぁ」

シャルロは、印象的な瞳を、クールに流した。赤いルージュが、驚くほどよく似合う。

「何だと～！？」

団長は、大層お冠状態に近かったが、彼女はツーンとしていた。リュオンは上から彼女にメンチを切る。

しかしシャルロは、

「あ、ご機嫌ようレッド先輩」

「や、やぁシャルロちゃん」

団長を無視してレッドに愛想よく挨拶。

その視線がキクマサを捉えた。すぐにピンときたようだ

「あら～、もしかして新メンバー？」

「あ、はい。オノダ・キクマサです」

キクマサは背筋を伸ばして、早口で挨拶した。

シャルロは、キクマサをじっと見つめ、そして横目で団長を冷ややかに見ると、

「ヴィライアーには常識の無い先輩が多いから、君はそうならないようにね」

「お前を含めてな」

団長のツッコミに、シャルロは１０センチはあろうかという、黒いヒールで、彼の足を思いっきり踏んだ。

「痛ってぇえ！！！」

鈍い音と、悲鳴が、エレベーターに響き渡った。

最上階とは思いの他に遠い。

少なくともキクマサにはそう感じた。

エレベーターの扉が、やっと目的地で開いた。

相変わらず言い争っている、団長とシャルロがまず出て、レッドが出て、げっそりしたキクマサが出た。

「あの二人、とんでもなく仲悪いから気をつけて」

レッドが軽く耳打ちする。

確かに。

見てわかるほどの仲の悪さだ。

何でかは分からないけれど。

最上階は、素晴らしい空間だった。

まるで空中庭園のようだ。

中心部には噴水がある。

歩くたびに、靴の音が響きわたった。

団長たちについていきながら、ガラス張りの壁から透けて見える青い空を眺めた。

白い鳩が、斜めに横切ったのが、印象的だった。

会議室は一番奥に有るそうだ。

木の大きな扉が、彼らの称号を物語る。

リュオンが、その扉を開けた。

「……」

半円を描く机。

それぞれの席に着いているヴィライアー達。

彼らの視線が、こちらに一心に向かった。

「…お座りなさい。もうすぐ会議が始まりますよ」

前にいる女性の教授。

エリーゼ先生だ。

「エリーゼ先生はヴィライアーの主任なんだよ」

再びレッドが耳打ちしてくれた。

部屋を見渡して、ルナシーを見つけた。彼女が手招きをし、その隣の席に座る。

まだ全員が揃ったわけではなさそうだが、やはりルネ・ヴィライアーの集い。

何というか凄みがある。

その中に、自分が居るという、

この不思議な感覚を何と言ったらいいのか。

この学校の、

誇りと期待を一心に受ける

ルネ・ヴィライアー。

宝石の玉座。

キクマサは一つ深呼吸した。

今、ここに居る俺を、

カトレアさんはどう思うだろう。

夢のような事態に困惑して、忘れかけていた事がある。

カトレアさんは、

世界の美しい物を見てこいと言っていた。

ここで満足したら負けだ。

やっと、ここまで来た。

世界への切符を手に入れたのだ。

美術に、

芸術に、

あらゆる名誉と称号に、翻弄されないように。

今座っている椅子から、転がり落ちてしまわないように。

ldraw

16：戒めのアメジスト

未知と想像の象徴

ギリシアの神々による戴冠の儀式

幻想的なアメジスト

「遅れてすいません！！！」

仰々しい空気を裂くように、大きな声で扉を開けた者がいた。

ヘルクロウ・ラヴィーニ（1年）とクレハ・ドルフォード（1年）だった。

キクマサは、白いフワフワの髪のヘルは知っていたけれど、その隣の、赤毛の少年は知らない。

二人は、唖然としている面前で、息を整えながら、

「ヘルがいけないんだ!!体力がないもんだから!!」

「な、なにぃ!?　あれだけ道に迷って、あげくに根拠の無い君の直感に振り回されたんだよ!!　君みたいな野生児とは違うんだ!!」

勇気ある少年達だ。

先輩たちの前で、遅れてきたというのに喧嘩を始めたわけだから。

バチバチにらみ合っている2人の前に、ご立腹な団長が現れた。そして…

ガン

人差し指を、何かちょっと立てた、あの痛いげんこつが投下されたのだ。

二人は、ギャアと、悲鳴を上げてうずくまった。特にヘルなんて、親にも殴られたこと無いのに、と言ってもおかしくはない。

「てめぇらいい度胸だな。遅れた挙げ句に、こっち丸無視で喧嘩しやがって…」

団長は、二人より遥かに身長が高いので、より一層凄い迫力だろうなと思った。

ヘルなんて、血統書付きの白いチワワみたいになってる。

「だって先輩、ここ分かんなかったんだもん」

赤毛の方は、頭をいまだにさすりながら、なんと反論してきた。キクマサはあんぐりして、手に汗握った。

確かにそうだけど。

泣く子も黙る、団長様だぞ!!

少なくとも、今のキクマサの団長へのイメージは、これだった。

しかし団長は、

「……確かにまあな」

顔は相変わらず怒ってそうに見えたのに、意外とすんなり認めた。

キクマサは、ほっとしたような、拍子抜けのような気もして、息をつく。

それまで、沈黙を貫いていたエリーゼ先生が、

「…早くお座りなさい、ルネ・アクアマリン、ルネ・コーラル。…ルネ・テクタイト、あなたもですよ」

無表情が、むしろ恐ろしい。ヘルとクレハは、二つ名に慣れていないので、ピンとこなかったのか一時キョトンとしていた。

全員が、この場に揃ったことは、感極まりない事なのだろう。

新生ルネ・ヴィライアー。

エリーゼ先生は、一番前の大きな教卓から、この集結を確認していた。

「…今年も、こうやってルネ・ヴィライアーが選ばれ、集められるのです。今年の新メンバーの方は、ようこそ…この場所にやって来ました。歓迎いたします…」

エリーゼ先生の言葉は、小難しいことは何一つ言っていなかったのに、とても響く。

「栄光に、溺れてはいけません…。あなた達は、その身を持って、芸術家の生き様を、この学校の生徒に示さなければならないのですから」

万人に、理解されなくても、

芸術とは、いつも歴史の一部として、目に見える形で後世に残るのだ。

エリーゼ先生は、赤い宝石箱を教卓の上に置いた。

鍵穴と、鍵の行方。

それは、本当に宝石箱だから。

その箱が開けられたら、全てが始まる。

全てが。

戴冠式とは、よく言ったものだ。

栄光の証し。

役目を忘れないための鎖。

キクマサは、紫の称号。アメジストの恩恵を受けたから。

エリーゼ先生は、宝石箱から、紫水晶の埋め込まれたブローチを取り出した。

その、謎めかしい輝きを。

「ルネ・アメジスト…未知と想像の象徴…。あなたの才能をかっているのは、きっと私達だけではないでしょう。精進なさい」

「……はい…」

キクマサは、その言葉の意味がよく分からなかったが、頷くしかなかった。

手渡された、そのアメジストが、冷たくて、重たくて。

軽いけど、重たくて。

恐いくらいに綺麗で。

新しいヴィライアーが、与えられた宝石の美しさに、

どうか、押しつぶされませんように。

一通り、戴冠式が終わった後の事だった。

宝石を身につけ、不思議な感覚に陥っていた新メンバー達と、それを興味津々に見ている先輩方。

エリーゼ先生は、宝石箱を厳重に鍵かけた。

すでに中身は無いというのに。

「申し送れました。私は、ルネ・ヴィライアー主任の、エリーゼ・オーディールです。基本的には、絵画科四年生の担当です。そして…」

エリーゼ先生は、部屋の横の長机に座っている、若い男性教師に視線を向けた。

「今年の副任は、リース・ラヴィーニ先生です。研修は、私達2人が引率します」

エリーゼ先生に紹介され、リース先生が立ち上がった。

若くて、ジーンズのよく似合う先生だ。キクマサは余り関わったことはなかったが、絵画科教員の中では、一番若いのではないかと思う。

「え―…、先ほど紹介されました、リース・ラヴィーニです。主に、絵画科一年生担当で…、ぁ～…お気づきの方いると思うけど、めでたくルネ・アクアマリンになったそこのベレー帽の彼は、僕の甥っ子です」

何と。

なるほどラヴィーニ家の名を持つもの、やはり侮れない。

ヘルは恥ずかしそうにうつむいていた。

「今年の幹部を紹介いたしましょう。絵画科ルネ・ヴィライアー団長が、テクタイトのハク・リュオン…。副団長が、パールのメルベ

リー・セレネームです…。」

エリーゼ先生に視線で促され、五年生の2人が前に出てきた。一人はおなじみの団長だったが、もう一人の女性は、長いプラチナブロンドの髪の、柔らかく清楚な雰囲気を持つ、有名なメルベリー嬢であった。

彼女は、絵に描いたような、美しいお嬢様だ。

団長は、今更挨拶なんかする気はさらさらなくて、天井からモニターを下ろした。

そこには、いきなりピラミッドの写真が映された。

「さっそくで悪いが、ルネ・コンが長引いたせいで時間が無いからな。今年最初の研修は…」

団長は赤いポイントレーザーで、ピラミッドを無駄にグルグル囲んだ。

「想像できるだろうが、“エジプト”だ。見てみろ、このピラミッドを……。まぁ…エジプトを知るのは、美術を知る上で、基盤的に大切な事だ。無駄な研修にするなよ…」

団長はそう言い終わると、メルベリーに目配りした。メルベリーは

軽く微笑むと、目の前のホワイトのノートパソコンを操作する。

モニターはすぐに変わった。

「研修は来週には出発する。カイロと、アブシンベル大神殿…そしてギザの三大ピラミッド…」

団長が名を出す都市や遺産を、追うようにモニターが移る。

キクマサは、勿論エジプトになんか行ったことはない。それでも、想像をかき立てる写真を食い入るように見ていた。

実際は、きっとこんなものじゃない。

こんな、想像なんてすぐに越えていく。

隣のルナシーも、同じように黙ってモニターを見つめていた。

「研修期間は約一週間。パンフレットを配布するから、目を通すように。……あと、カイは今日居るのか…？　居ないか」

団長はヴィライアーを眺めた。どうやら一人居ないらしい。

キクマサは多少拍子抜けた。さっき、ヴィライアーが全員揃ってるのかと思って、あんなに胸が熱くなったのに。

恥ずかしいじゃないか。

「カイは今日も仕事か…ったく…、研修だけでも参加させるぞ。ティアン…手配してくれ。」

「…わかってるよ」

ティアンと呼ばれた、メガネの五年生は、その読めない表情でうなづいた。

我々新人から見たら、いまいちよくわからないやりとりであった。

「売れっ子の鑑定士さんは、いつも忙しいねぇ～。」

レッドが、机に肘をついて、かなりマッタリとした口調で言った。

「売れっ子だろうが、鑑定士だろうが、ヴィライアーである以上は、義務をはたしてもらわないとな。いくら世間があいつを“鑑定王子”とはやし立てようとな」

キクマサは目が点になった。しかし、ルナシーは何だか分かったように小さく声を上げ、瞳を大きくさせる。

団長は、例の“鑑定王子”の話にウンザリしたように、

「あんな不登校野郎の話は無駄だ。本題に戻るぞ…。ぇ〜…」

団長は、背後のモニターを振り返った。

「研修は、ただの旅行じゃない。しっかりと目に焼き付けろ。いいか…新人ども…。絵だけ描いていても、絵は描けない」

団長は、前の机に手をついた。

彼は、とても確信的な事を言っていた。

「絵は、内容が必要だ。内容は、どうやって思いつくんだ…。発想は、どこからやってくるんだ…。それは、経験だ」

生まれてきて、今まで生きてきた、その経験。

同じ世界を見ていたって、何通りもの見方に気づく。

世界の美しさ、面白さに気がつく。

「絵だけ描いてればいいと思うな…。技術だけが先走る絵は最低だ。…長い人生の中で、いつまでも絵を描くためには、ここで、この時代に、あらゆるものを見に行くんだ。いづれ、どれだけ大切なことだったか思い知る…」

芸術家にとって、これほど大切で、
これほど気付きにくいことはないけれど。

団長は、前のめりだった上体を起こした。
彼の言ったことは、もっともだ。

キクマサは、雷にうたれたようにビリビリきた。

そうだ。

「……」

カトレアさんが言っていたことは、この事なんだ。

「ここにいる奴らは、実際稀な経歴の奴ばかりだ。芸術において、
どんな人生を送っていようと、それら全てが大きな武器になる。や

ること成すこと、無駄なんてないぞ…。全部吸収しろ。ヴィライアーの研修は、そのための大きなチャンスだ」

団長は、鷹のような瞳で、一同を見渡す。

「ヴィライアーとしての役割を果たせよ。おまえらのゴールはヴィライアーじゃないんだ…」

ゴールなんて無い。

あえて言うならば千年も二千年も後にやってくるから。

芸術は、いつまでも歴史に残る。

研究される。

時代を示せる。

今残っている、歴史上の絵画は、いつまでも語られている。

そうだ。

それは、これからやってくる未来だって。

キクマサは、重くのしかかる何かに負けたくなくて、胸につけた、紫のブローチを握りしめた。

その、象徴を。

このブローチは、戒めだった。

今の歴史を刻む義務が、我々にはあるのだ。

―ｄｒａｗ

17：トパーズの仮面

我々が、絵画を通して今の時代を刻むと言うのなら、

どうして“ここ”に彼女が居ないのだろうか。

ルナシーは、団長の言葉を聞きながら、ぼんやりとそんな事を考えていた。

そんな、大それた義務を持っている人はなかなか居るものじゃない。

でも、彼女はそうだった。

そうなるべき人だったのに。

ならばなぜ、神様は彼女から宿命を奪ったのか。

「……ルナ…、どうした…？」

それは、会議のちょっとした休憩時間であった。五年生は慌ただしいが、それ以外は割とリラックスしている時間。

隣に座っていたキクマサに声をかけられた。

どうやら、私のもやもやした葛藤が面に出ていたらしい。

「…ちょっと…考えごとをしていたの…。ごめんなさい」

「……何であやまるの」

キクマサは顔をしかめた。

ルナシーは伏し目がちに瞳を細める。

だって、こんな事言えるわけない。

少なくとも、私はルネ・トパーズになったのだ。

それでも私はレイを諦められない。

私よりもずっとふさわしい。それは、一年前にあの子と会った日から、

あの子の絵を始めてみたときから、分かっていたことだ。

「……びっくりした…部屋にお姫様が居たかと思った」

初めて出会った時のことだった。彼女は私にそう言って驚いたけれど。

私はきっと、もっと驚いた。あの一番上に掲げられた衝撃的な絵画を前に。

どうしてこんな絵が描けるのだろう。

鳥肌がたった。

「……レイのこと考えてるだろう」

不意にキクマサが呟くように言った。
ルナシーは顔を上げる。
ザワザワ、会議室の中はそれぞれの話題で騒がしいのに、ここだけいやに静かな気がした。
「考えても仕方がないのに…」
「……そうね」
ルナシーはこういう考えが、今や意味のないものだとちゃんとわかっていた。
キクマサもわかっていた。
ルナシーはキクマサを見ることができなかった。
彼は、ちゃんと受け止めているのに。
自分はいまだにトパーズを直視できなかった。
「レイに悪いと思ってるの?」
「…そうじゃないわ。ただ、レイならきっと、未来に残る絵を描けると思っていたから…」

ルナシーは、先ほどの団長の言葉を意識せずにはいられなかった。
キクマサは、少し間を置いて、

「……それは…ルナにはできないの？」

「……」

単刀直入で、ダイレクトな切り返し。
ルナシーはハッとしたように、キクマサを見上げた。

「……レイがいなかったとはいえ、ルナはヴィライアーになったのに…」

「……キク…。私を見損なった…？」

ルナシーは、少しだけ悲しそうに笑った。
キクマサは、その言葉に多少ヒヤッとしたが、

「いや…、俺にもその気持ちは…よくわかるよ…。ルナを見損なうなんてあり得ない。でもさ…、もしレイが、この世界に必要だったら……きっと帰ってくるよ」

根拠もないのにそう言ってしまった。

ルナシーは、とても驚いたような顔をしていた。

再び会議が始まった。

今度は、エジプト研修についての細かい説明だった。

ルナシーは多少上の空で、モニターの向こうの世界よりもっともっと遠くを見ていた。

キクは凄い。

先ほどのちょっとのやり取りで、ルナシーは本気でそう思った。

前々から、彼は多少、そう言うところがあるなとは思っていた。

私の一歩前を歩くところが。

何だかクールそうで、でも意外と抜けてて、そう言うところが実に面白い人だと思っていた。

ただ、彼の過去に何があったのかはわからないが、ここぞという時には本当に冷静だ。

彼も、私と同じようにレイの絵を見ていたと思う。

悔しさすら通り過ぎてしまう、先に立つ憧れを。

あなたの、レイの絵をみる瞳は違った。

私の絵なんて、気にもかけていなかったくせに。

キクマサと初めて会った日の事は、今でも覚えてる。
私とあなたは、きっととても印象的な出会いをした。

だから、私たちが仲良くなるのに時間はかからなかった。
彼は私をルナと呼び、私は彼を、キクと呼ぶ。

そして、あなたの絵を、初めて見た。

「……」

他の誰もが気付かなくったって、私はわかった。

レイとは違うタイプの天才。

恐ろしいまでの将来性。

彼自身がそれに気付いてなかったけれど。

私だけは気付いてたの。

あなたは、ルネ・ヴィライアーに成るべくして成ったのよ。

何で、こんな人たちが居るんだろうと思っていた。

絵を描くのが大好きなのに、私はたまにわからなくなる。

フォルテは多少私と境遇が似ていたかもしれない。
でも彼は、絵よりも大切なものがある上での絵画科のように思う。
それが何かはわからないけれど。

一度だけ、フォルテに聞いたことがある。

「レイの絵を…ずっと見てきたのでしょう。…自信を無くす時ってない？」

フォルテは、暇さえあれば鉛筆を削っていたから、その手を止めて、

「……そりゃあ…昔はあったよ。でも…多分俺って相当なファンなんだよね。レイの絵の」

レイに絶対言わないでって言われたから、誰にも言ってないけれど、

とても素敵な考え方だと思った。
この時ほど、レイを羨ましいと思ったことはない。

レイが大好きだった。
彼女は自分の才能を、全く鼻にかけない。私とは正反対で、常に前向きだ。

羨ましくて、眩しくて、
眩しくて苦しかった。

何で、こんな人が居るんだろう。
そんなことを考える時もあった。

なのに

あの日、私たちの秩序は崩れ去った。

レイが、片目を失ったあの日。

頭が真っ白になった。

私は彼女を恨めしく思っていたくせに。

あんなに悔しい思いをしたのは初めてだ。
彼女がもう、絵を描けないなんて。

自分すらわからなくなった。

私は彼女に、絵を描いてほしかったのか、そうじゃないのか。

モニターが、スフィンクスを映していた。

視界は正直だ。

嫉妬心が悪いものだとは思わない。

私はそういう女だ。

誰も知らない。
キクマサだって。レイだって。

フォルテは、ちょっと気付いていたかもしれない。
表ではあっけらかんとしているくせに、あの人は本当は凄く賢い。
多少読めないところがあるし、割と客観的に人間を観察している。

でも、それも多分私しか気付いていない。

自分で言うのもあれだけど、みんなからの私のイメージって、きっと、

やさしくて、かわいくて、いつもにこやかなルナシー。
女の子らしくて、気が利いて、学年のマドンナ。

そう言ってくれるのは実にうれしいけれど、

なんて意味がなくて、つまらなくて、

なんてばかばかしいの。

誰にも、私の仮面は外せない。
外させやしない。

「…ルナ…大丈夫？」

いつの間にか、モニターの画像を見るために暗かった部屋が明るくなっていた。
隣のキクマサが小声で聞いてくる。
ルナシーは、何てことないように微笑んで頷いた。
そろそろ切り替えなくては。

突然、会議室の扉が開いた。

ネイリー先生だ。

「推薦ヴィライアーが決まりましたわ…」

彼女は確かにそう言って、エリーゼ先生に目配りをした。

エリーゼ先生は軽く頷くと、

「いったん会議を止めましょう。今年の推薦ヴィライアーが決まったようです…」

キクマサとルナシーは目を合わせた。

そう言えば、そんなものがあったな、と。

自分達は二年生だから、これを目指していたのに、いつの間にか忘

れていた。

一瞬部屋中がザワザワしたかと思ったら、みんなの視線が扉に集中した。

ネイリー先生は、扉から少し離れて、

「大丈夫ですか…？」

その“誰か”を呼んでいた。

キクマサとルナシーは、それが誰だかわかると、

驚きと、興奮と、押し寄せる胸の鼓動に声が出なかった。

どうしたって、声が出なかった。

扉の元には、フォルテがレイを支えながらやってきた。

レイは片目に眼帯を巻いて、いつもの彼女のように凛と立っている。

ルナシーは、口を手で覆った。

小刻みに震えながら、目を見開いて、彼女を見ていた。

その瞳から、ゆっくりと涙がこぼれた。

「……ルナ…」

キクマサは、ルナシーを見て、レイとフォルテを見て、そして再びルナシーを見た。

ルナシーは、立ち上がってレイに駆け寄った。

幻でも見ているのかと思った。

レイが居る。

考えすぎて、きっと夢でも見てるんだわ。

「推薦ヴィライアーは、二年生の、フォルテ・ゴッドバルトと、レイデル・リローズです。」

ネイリー先生は、確かにそう言うと、そっとルナシーの方を見た。

彼女もまた、ネイリー先生と目を合わせた。

信じられないという、ルナシーに向かって、先生はやさしく微笑んで頷く。

胸が苦しい。
信じられなくて、うれしいなんてものじゃない。

先ほどまでの葛藤に、この瞬間答えを出した。

レイは、きっとこの世界の歴史に残る。
神様は、彼女に障害を与え、そしてきっと、

それすら乗り越えた伝説を与えるのだろう。

そして、レイは私にも必要だったのだ。

彼女が居たからこそ、今の私がルネ・ヴィライアーとして存在するのであり、

キクマサが同じように、ここに居るのであり、

そして、フォルテが居たからこそ、レイがここに居るのだ。

誰一人、欠けずに、必要な存在だったのだ。

私はレイに駆け寄った。
何も考えてはいなかった。

あなたが再び、絵を描くために筆を取る。

私はそれを、望んでいたのだろうから。

「ルナ……！！！」

レイは、おぼつかない足取りで、駆け寄るルナシーを受け止めた。
ルナシーは、しっかりとレイを抱きしめると、

「お帰り…レイ…」

涙声でそう言った。
レイは、片目を潤ませながら、

「わ…私ね……絵を諦められないの…」

「ええ…、そうに決まってるわ…」

ルナシーは、レイの顔をしっかりと見た。
その眼帯を。

「こんな所で終わる、あなたじゃないもの」

今にわかるだろう。

彼女が帰ってくるか来ないかで、私たち四人の運命が、きっと変わってしまったであろうことを。

キクマサはさりげなくフォルテを見た。
フォルテは、キクマサの視線に気がつくと、

『説得するの、けっこう大変だったんだぜ』

と言わんばかりに、肩をすくめた。

静まり返った、他のヴィライアーをよそに、

これだけは、この四人にしかわからないドラマだった。

l
d
r
a
w

＊ｄｒａｗコラム　～絵画科ルネ・ヴィライアー～

～絵画科ルネ・ヴィライアー～
ルネ・ヴィルトン美術学校の中で最も多いヴィライアー数である。称号は全て宝石から成り立っていて、どういう基準で割り当てられるのかは、いろいろな説が立てられているものの、はっきりとはわかっていない。今の所、最も活躍しているのは四年生組である。基本的に、天才肌の変わり者が多い。

＜五年生＞

＊ハク・リュオン…［ルネ・テクタイト］／団長
＊メルベリー・セレネーム…［ルネ・パール］／副団長
＊ティアン・レーゼス…［ルネ・ターコイズ］
＊レッドリー・ヘッドバーン…［ルネ・ルビー］／男子寮長
＊サイオンジ・ナギ…［ルネ・ダイアモンド］

＜四年生＞

＊シャンデリー・リオール…［ルネ・ガーネット］
＊シルフィーダ・ケイド…［ルネ・カーネリアン］
＊フレイ・レステヴァン…［ルネ・エメラルド］
＊スノーフリーク・ロズベルト…［ルネ・オパール］
＊シャルロ・グレディア…［ルネ・アンバー］

＜三年生＞

＊カイ・ヴォストン…［ルネ・ハウライト］／国際鑑定士
＊ジェイル・クオーシャン…［ルネ・サファイア］

＜二年生＞

＊オノダ・キクマサ…［ルネ・アメジスト］↑主人公
＊ルナシー・ミディエム…［ルネ・トパーズ］↑ヒロイン
＊フォルテ・ゴッドバルト…［ルネ・クリスタル］
＊レイデル・リローズ…［ルネ・ペトリファイウッド］

＜一年生＞

＊ヘルクロウ・ラヴィーニ…［ルネ・アクアマリン］
＊クレハ・ドルフォード…［ルネ・コーラル］

／以上１８名

主任／エリーゼ・オーディール（３６）
副任／リース・ラヴィーニ（２４）

次回のセミナーは＜二年生＞です。

ｌｄｒａｗ

18：エジプトプラン1～暗雲～

世界遺産と呼ばれるものがある
なぜ、それが生まれたのか

人間が、やっとその重要性に気付いたからだ

根本的な、この地球にとっての

エジプトプラン

「ねえ…何だか今年、いやに研修早いと思わない？　去年ってこんなにすぐあったかしら」

「…そういえばそうだなあ…」

廊下がザワザワしている。

四年生のルネ・ヴィライアーが、その威光を放ちながら闊歩しているからだ。

彼らほど、カリスマ性に富んだ学年はない。

「考えすぎなんじゃねえの。たまたまだろ…深読みし過ぎなんだよ、シャルロ様は」

その中の一人、フレイ・レステヴァン（エメラルド）は、気怠そうにあくびをした。

彼は、アッシュブラウンの髪の、多少チャラっとした風貌の男だ。

シャルロは彼を冷ややかに睨んだ。

フレイのあくびにつられたのか、スノーまでもが眠そうだ。

「……でも…シャルロの深読みって、基本外れないけどね」

「スノー、たまには俺の味方もしろよ。ルームメイトだろうが」

フレイは、隣のスノーを、期待度の低そうな、諦めかかった目で見る。
スノーは気にも留めずに、もう一度あくびをした。

「まあまあ、喧嘩なんかしないで…。みんな見てるよ」

リオは、火花の散りかねないこの場をおさめようと、必死だった。
それでなくても目立つのだから。

「……」

でも、実際問題、一番目立つのはリオだった。
彼は、ルネ・ヴィルトンきっての美男子だったから。

しかし今更、この学校の女子たちは、彼をどうすることもできなかった。

「……ところで、シーダがどこに居るか、シャルロ、君知らない？」

「……先生の所よ」

彼にはすでに、彼女のためなら地獄にだって行ける、と豪語できるくらい大切な人が居た。
同じく、四年生のヴィライアー、シルフィーダ・ケイド（カーネリアン）だ。

今彼女は、先生に呼び出されていていないけど。

リオは「そうか…」と、微かに微笑んだ。

金髪碧眼の、まさしく王子様。性格も非のつけようがないくらい完璧、と言われている。

でも、彼が最も輝いて見えるのは、シーダのことを見ているとき。
シーダのことを話しているときだった。
それは、彼を慕う女性から見れば、複雑なことだろうけれど。

しかし、四年生ヴィライアーにとってこの二人のバカップルぶりは、いつものことであった。

「よくあんなうるせえ母親みたいな女と、長続きするよな」

フレイの嫌味もいつものことだった。

シーダは、ツヤツヤの髪を二つに結って、背筋を伸ばして、エリーゼ先生の元を訪れていた。

「入ります、先生…」

彼女は、扉をノックして、先生からの返事を待って、それから部屋に入る。

「呼び出したりしてすいませんでしたね…、ルネ・カーネリアン…」

エリーゼ先生は、机の上に山積みになった資料を横にずらすと、眼鏡を押し上げた。

「いえ…なんかいけない事したかなって、ヒヤッとしましたが」

「あら…あなたのようなしっかりした生徒は、他に居ませんよ…。このルネ・ヴィライアーに、あなたのような人が居て安心している所なのですから」

「はあ……問題児ばかりですからね…」

シーダは、四年生全員の顔を思い出して、大きくため息をついた。私がしっかりしなくてはって、普通の人なら思う。

「本題に入りますが、あさってのエジプト研修についてです…。今現在、エジプト流行している感染症はあるでしょうか。今だけでなく、過去にはやった病や、気をつけた方がいい事…」

「それは…たくさんありますよ。水にも気をつけないといけませんし…。砂漠に行くのならサソリにも気をつけないと…。というか、行きませんよね。そんな所」

シーダは、おそるおそる聞いてみた。しかしエリーゼ先生は、心配になるくらい涼しい顔だ。

「それはわかりません。この研修…なにが起こってもおかしくないですよ。状況によっては、医者もガイドも呼ぶ事ができなくなる事

もあるでしょう。この私にも、エジプト研修がどうなるのか、予想もつかないのですよ」

「それは、一体全体どういう事ですか。そんな事…、今まで一回もなかったじゃないですか」

シーダは、先生の言葉に、理解が示せなかった。
いったいどういう事だ。

「ここでその答えを言う事はできません。言ってしまえば、答えを想像する事もできない」

「答え…？　想像……？？　何の話ですか」

わからない事ばかり言うものだ。
シーダは眉根を潜めた。

しかしエリーゼ先生は、平然とした顔で、

「この研修は、今までのものとは大きく違います。とある人物から、依頼されて行くものだからです。ただ、事がおこったとき、最悪な事態は避けなければいけません。だから、あなたにだけ少しお話をしました」

「……」

シーダは、とにかく、先生が何を悟らせたいのか、必死につかもうとしていた。

「…納得は行きませんが、わかりました。…何がおこるのかは教え

られないけど、あらゆるパターンを見越して、内密に対策しておけと言う事ですね」

シーダは、説明口調だ。
エリーゼ先生は、正解と言うようにほくそ笑んだ。

「やはりあなたは賢い。こればかりは、団長および副団長には任せられない。幼い頃から医療を学んできたあなたですから。そして今も…」

「先生……私の事は誰にも言わないでくださいね。特に、リオには…」

彼女は、少し視線を落として、自分の腕を握る力を強める。
知られたくない。
特にリオには。

「…ええ。わかっています。あなたがこの学校に居る理由を、私たちは理解しているつもりですよ」

先生は、机の上に再び資料を置きながら、彼女に語りかけた。

「…すみません先生。私…ルネ・ヴィライアーで居るの、おこがましいとは思っているんです。リオや…シャルロみたいに、才能がある訳でもないし、将来画家になる訳でもない…」

シーダは、窓から、ルネ・ヴィルトンの空を見た。
絵を描くのは大好きだけど、これは私の生きるべき道ではない。

なのに、ヴィライアーでいる事の矛盾を、考えない事はない。誰もが、絵を描きたくて、ヴィライアーになりたいと思っているのに。

「…なにも、芸術家だけが、ヴィライアーのとるべき道とは限りません。絵を学び、世界を知った人が、他の分野で斬新な発想を生み、歴史を作る事だって必要なのです…。それに、私たちは、実力の無い者をヴィライアーにしたりしません」

「…はい」

シーダはゆっくり頷いた。

先生の言葉は、いつも力強い。口調は淡々としているのに、その内容が。

「わかりました。内々に引き受けましょう。……赤十字の名の下に」

私には、彼らを守る義務がある。

「ねえ…わかってる？　研修って遠足と違うんだよ」

ヘルは、さっきからリュックサックにチョコレートばかり詰め込んでいるクレハにいよいよ突っ込んだ。

「…俺にとっちゃ大事なアイテムなんだよ。三時間に一回は食べないと、ヤバいんだって。俺、チョコラーだから」

「何だよ……チョコラーって」

ヘルは、相変わらずマイペースを貫くクレハに、頭を抱えた。

「懐中電灯いるかな。だって、ピラミッドとか見るんだろ。」

「あのねえ…俺たちが見るのって、観光客が見るのと同じようなものだよ。…発掘しに行くんじゃないんだから」

「え～そうなの！！？」

クレハは、非常に残念そうに、変な声を上げるとカクんとうなだれる。

それでもちゃっかり、懐中電灯をリュックに詰めていたけど。ヘルは、育ちのいいおぼっちゃまらしく、着替えの衣類をカバンに詰めていた。

「なあヘル、エジプトって近いのか」

「何言ってんの。目と鼻の先じゃない」

「ドイツより近い？」

「……？　うん、そりゃあ…海を越えなきゃいけないけどね」

クレハは、下唇を出して、眉根を寄せた。非常に真似できない顔だ。

「あ～あ、何て顔だよ」

ヘルが突っ込むと、その顔をこちらに向けたから、たまらなく吹き出した。

「どう思います？　リュオン…今回の研修、今までと何か違いませんん…？」

メルベリーは、団長の腰掛ける向かい側から、お茶を持ってきた。

不意打ちだったので、驚いた。

リュオンは、今回の研修のプランを、くまなくチェックしている所

だった。

一度咳払いをして、メルベリーの持ってきたオレンジペコーを一口飲むと、

「今回は、あらかじめ、指定された研修だ…。エリーゼ先生は何か隠しているな…」

無理矢理口調を落ち着かせて言った。

「大変な事にならなければいいのですが」

「…どうかな。ルネ・ヴィライアーの教員は容赦ないぜ。…多少の危険は何とかなると思ってる」

団長は、しらじらと答えた。実際、奴らは、ヴィライアーをあからさまに過保護に扱わない。

多少無茶しないと、つかめない事があると、知っているからだ。

メルベリーは、自らのティーカップの淵に手を添えると、揺れる飴色の水面を眺めた。

色素の薄い、プラチナブロンドのまつげが、頬に陰を落とす。

リュオンは、メルベリーを横目で見た。彼女が来ると、空気が澄む気がする。

今まで、色んな美人を見てきたけれど、ここまで儚げな、慎ましやかな女性は、今の所彼女しか知らない。すこく気が利くし、献身的だし、文句のつけようの無い、完璧なお嬢さんだ。

さすがのリュオンも、彼女をむげに扱いはしなかった。

「…？　どうかしましたか？」

「いや……別に」

団長は視線を逸らすと、再びプランの紙を見た。

何かが起こる予感がしてならなかった。

エジプトの歴史は深く遠い。

いまだに暗い、混沌とした謎に包まれている。

これは、我々が初めて触れた、世界の真実の一つ。

物語を終わらせ、結末を創造する。

答えを想像する。

過去も、今も、未来も、本当は行ったり来たりして、歴史を作っているのかもしれない。

美術品とは、

いったい何のために作られたのか。

何が、始まりだったのか。

ｌｄｒａｗ

19：エジプトプラン2～フライト～

ヨーロッパの文明に、大きく影響した、エジプト美術。

ナイルの賜物。

我々は、失いかけた重要な遺産を、守るための、法を定めた。

「世界遺産の始まりって、エジプトなんだよ」

「……そうなの？」

キクマサは目を丸くさせた。

ここは、既に飛行機の中。我々は、ギリシアからエジプトまで、短い空の旅を満喫していた。

「エジプトに“アブシンベル大神殿”って言うのがあるんだけど、…まあ、お前が知っているとは思っちゃいないさ。それが、世界遺産の始まりだ」

フォルテは、飛行機の中で、サービスで配られたレモネードを飲みながら、いつものように説明係になっていた。

「１９６０年、世界遺産誕生のきっかけになった、事件が起こる。…アブシンベル大神殿っていうのは、もともとナイル川上流のヌビア地方ってところにあったんだけど…そこにダムを造ろうってってことになったわけよ」

フォルテは、持ってきていた、エジプトのガイドブックをキクマサによこした。

そこには、四体の巨大な像が守る神殿が載っていた。

「“アブシンベル大神殿”や、ヌビアの遺跡群は、貴重な文化財にも関わらず、水没の危機にさらされた。…でもな、ダムを造る事自体を責められやしない。エジプトに住む人たちにとっては、必要不可欠のものだったから…。ま、確かにそうだよ。裕福な国にすむ俺たちが、ダムを作るなっつたって、説得力無いよ。現地の人たちには生活がかかってんだから」

「……なるほど」

キクマサは大きく頷いた。

ダムを造るせいで遺産が沈むなんて言ったら、裕福な国のやつに限って、それは駄目だとかって反対するけれど。

ものの見方次第で、見える景色は違うのだ。

「実際、こういうのって、すっごく難しい話なんだけどね。確かに、遺産とかって、これからの時代に残さなきゃいけないんだから。“アブシンベル大神殿”は沈みかけたけど、救済キャンペーンでダム湖よりも高い丘の上に移設された。これがきっかけなんだ。世界中が注目して、見守った事で、各国の文化財はその国だけの問題じゃなくて、“人類共通の遺産”っていう認識が生まれた。これが、一番凄い事だよ」

「助かったのか…その神殿」

キクマサは、少し安心した。てっきり今は湖の中なのかと思った。フォル手は苦笑いする。

「まあね…かろうじてかな。ブロック状に切り取られて運ばれたから、元のままとはいかなかったけどね」

「うわ……超耳痛いんですけど…」

フレイはとても不機嫌そうな顔をしていた。

「あんた…いっつも駄目よねえ。飛行機」

シャルロは彼を見て、馬鹿にしたように笑う。
はなからフレイを助ける気はないようだ。

しかしシーダはほっとけないように、身を乗り出すと、

「いつも言ってるでしょう。耳抜きしなさい。ほら鼻つまむ！！」

容赦なくフレイの鼻をつまんだ。

「痛ってえ！！」

「鼻から息を出そうとして。耳がパチンって言ったら、成功よ」

フレイはもはや言われるがままに行動するしかなかった。
どうやら成功したようで、シーダは彼の鼻を離した。

フレイの隣で、スノーが無言で、その一部始終を観察していた。そしてどうでもよくなったようで、寝返りを打つ。

「…母親と不良息子のようねえ」

シャルロは、呆れたように、足を組み直す。
シーダはやっと自分の席に正しく着いた。

「シーダは、困った人を放っておけないんだよ」

「あんたがそんな調子だから…、まあいいけど」

ニコニコしているリオにも、大概呆れるけれど。
スノーは、一人マイペースを保ち、アイマスクをつけて夢の中だった。

エジプトとギリシャは近く、歴史上深く関わり合った国だ。

青い海を越えると、見えてくる砂漠と、異国の空気。最初に降り立ったのは、首都カイロだった。
もちろんキクマサにとっては初めての地で、体中で感じるエジプトの空気に、圧倒されたのは言うまでもない。

「え～、いよいよエジプトに着いた訳だが……、おいそこの一年！！　俺の話を聞け！！　次浮かれてたら、ピラミットに閉じ込めるからな！！！」

団長は移動バスの前方で、“研修のしおり”をメガホンのようにして、はしゃぐ一年をしかる。
ヘルは、ピラミッドに閉じ込めると言うフレーズにびくついたが、クレハはおかまいなしで、窓から見えるあらゆるエジプトを叫んで

いた。

いよいよ団長は、丸まったしおりで、スコーンと、勢いよくクレハの頭を叩いた。

「だ～ま～れ～！！　小猿野郎～！！！」

「痛ったあ！！　何すんだよう団長！！」

「そりゃ、こっちの台詞だ。営業妨害で訴えるぞ」

団長の恐ろしい顔の前で、クレハは何事も無いかのようにきょとんとしていた。
どうやら、クレハには常識が通用しないらしい。

レッドはさわやかに笑うと、

「すごいねえ、リュオンと渡り合えるなんて。君大物になるよ」

前の座席を何度か叩いている。
団長は、眉根を寄せた状態で、困り果てたようにダンと足踏みする。
バスの中でそんな事したら危ないけれど。

「いい加減な事言うな。そしていい加減、俺の話を聞いてくれ」

切実に聞こえて、キクマサは自分だけでもちゃんと聞いてあげようと思った。
個性豊かなメンバーをまとめるのだから、団長って言うのも楽じゃない。

カイロの中心部にある、大きな大きな、それは立派なホテルが、我々の、エジプト研修の拠点だった。

「何てこった。こんなホテル泊まった事なんか無いよ」

「……同じく」

キクマサとフォルテは部屋を開けたとたん、一度絶句して、よくよく見渡して唾を飲み込んだものだ。

ヴィライアーの男子を二手に分けて、大部屋に泊まるといった感じだった。

この下級生組は、キクマサ、フォルテ、ヘル、クレハ、そしてまだ見ぬ三年生のカイ・ヴォストンだった。

団長曰く、彼は今日の夜に到着するようで、

「それまでは、この幼稚園児どもの面倒はお前ら二年生が見ろよ」

ということだった。

「……カイ先輩かあ。いまだに実物と話した事無いなあ」

部屋で、やっとくつろいでいるところだった。大きなふかふかのソファにもたれかかりながら、夕食までは自由時間だと言うのだから、思う存分だらけていた。ヘルとクレハは部屋中を駆け巡り、大きな屋根付きベットをトランポリンにして遊んでいた。最近、ヘルまで元気な子だ。

「知ってるんだ…」

キクマサは、大きな液晶テレビをつけ、なんか面白い番組でもやってないかと、チャンネルをいじっている。

「知ってるもなにも、ちょー有名人だ。よく鑑定物の番組に出てるよ。あんな若いのに、国際鑑定士の資格持ってんだから」

フォルテの口調から、凄い事なんだろうとは思ったけど、いまいちピンとこなかった。

まず、鑑定士って何。

と、そのときだ。
たまたまつけたテレビのチャンネルに、一人の青年が映った。

凄くイケメンと言う訳ではないが、まじめそうで、なかなか体格の良い、好青年と言った所だ。
黒い短髪と、テレビ慣れした笑顔。

“そのおいしさ、まさに世界レヴェル”

青年は、ペットボトルの飲料を、勢いよく飲んで、何だかとてもすっきりした顔をした。
そして、その飲料を前に突き出して、

決め台詞。

「こいつは憎いですね～」

“先生も認める、この一本”

スーパー・コーク

「ルーブル美術館の旅、当たります」

「……」

「……」

テレビの光と、何も知らない一年生の無邪気な声だけが、その空間の全てだった。

「……見た？」

「……うん。まさか、あれがカイ先輩？」

フォルテは、小刻みに頷くと、あごに手を持って行って、深く唸った。

先ほどの驚きが、今更興奮に変わったようだ。

「凄いな、カイ先輩。これで５本目のＣＭだよ。先輩の決め台詞は、流行語大賞にノミネートされたんだから」

「……」

先ほどの説明ではわからなかった彼の凄さが、身にしみるほど理解できた瞬間だった。

l
d
r
a
w

２０：エジプトプラン３～お疲れの鑑定王子～

夢を見た
長らく封印していた、世界の真実に辿り着く日の事を

錆び付いた鍵が今にきっと、扉を開ける

その日夜になって、本人に会うまでに、いったい何度カイのＣＭを見たか。
彼はちょうど夕食後の、会議時にやってきた。

「すいません！！　長らくお待たせしました！！」

「やっっと来たか、この野郎！！！　お前がここに来るまでに、お

前の新作ＣＭ何回見たと思ってんだよ！！！　さっさと座れ、アホ！！」

団長は、浴びせるように暴言を吐く。カイはのけぞって、その衝動に耐えていた。
彼は今まさにやって来たばかりという格好で、大きな旅行トランクを持っていた。

そのトランクを会議室の隅に置くと、そそくさとなが机に付く。
大きくため息をつき、ひどくお疲れのようだ。

「喜べ。やっと、我々絵画科の研修着が、デザインチェンジされた。去年までの研修着を作っていた、ファッションデザイン科のメンツが、とうとう卒業して行ったからだ。今年のは、去年までの芋ジャーとは違うぜ」

団長は、前の机に、段ボール箱を置いた。

「各自、サイズにあったものを持って行くように」

先輩たちはザワザワしている。
去年のものがいったいどういう風に酷いのか気になる所ではあるが、今年のは凄く良い物であった。

「格好いいね。確かに制服より動きやすいな」

黒い上着には、沢山のポケットと、胸には銀の細長い板に、“Ｒ.

V．O”と彫られていた。（ルネ・ヴィライアーｏｆオイルの略）
腰にはベルトが付いていて、ポーチを取り外し出来るなど、何かと便利そうだ。

ただ、こんな立派な研修着が要るほどの何かをするのだろうか。
探検でもするって言うのか。

ちゃんと揃えられたブーツと、ヘルメットみたいな帽子が、かなり気懸かりだった。

「要するに、その服は“体操服”みたいなものだ。まぁ、制服で行く研修もあれば、研修着でないとマズい研修があるわけよ…。それは事前に団長が指示してくれるだろ」

リース先生が、段ボールの箱を整理しながら、我々の不安そうな顔に気付いたのだろう。
さりげなく話しかけてきてくれた。

「お前ら幸せだぜ。去年までの研修着は酷いもんだった。あれは趣味の悪いジャージに等しいぜ」

「何で、そんな研修着だったんですか？　仮にもルネ・ヴィルトン

のファッションデザイン科が作ったんでしょう？」

フォルテは、首を傾げた。

リース先生は、何だか嫌な事を思い出したような顔をすると、「あー」と曖昧に説明しだす。

「四年前のファッションの団長が、当時の絵画科の団長とすっげー仲悪かったんだよ。あげくあんな研修着作られて、嫌がらせされたって訳。俺もそのとき四年生だったからな。紛れもなく被害者だよ」

先生は苦笑いした。

部屋に戻ると、噂のカイ先輩が重たそうなトランクを引きながら、ふらふらしていた。

だいぶお疲れだった。それはそうだ、この歳であんなに働いてるんだから。

しかし、彼は二人を見つけると、

「お、ちょうど良かった。君たち二年生？」

パッと表情を変えて、その場にトランクを捨て置いた。
キクマサとフォルテは、はいと頷くと、

「初めまして先輩。俺、二年生のフォルテ・ゴッドバルトって言います」

「…オノダ・キクマサです」

ペコリと頭を下げた。
カイも釣られて頭を下げると、

「あ、ご親切に。カイ・ヴォストンです。三年生です」

「知ってます！！　だって先輩は有名人ですから。さっきもＣＭ見ました」

フォルテは何だか、有名人を前に多少テンションが高い。
カイは苦笑いで、

「え…スーパー・コークの？　参ったな…また団長にドヤされる。…ＣＭは鑑定協会の陰謀ってやつだよ。俺を利用して、鑑定ブームを巻き起こしたいらしい。馬鹿だよ全く」

照れ隠しなのか、本気なのか、謙遜気味だ。

「でも、カイ先輩の活躍で、鑑定物の番組増えましたよね。確かに」

「はは…いつまで続くかな。ブームって言うのは去るものだから」

彼は、すごく感じのいい人だと思った。
背が高くて、バスケット選手みたいな体格だ。鑑定士ですって言われても、初お目見えの人はなかなか信じられないだろう。髪も短髪で、どうみてもスポーツ選手だ。

でも、そんな彼が、誠実そうな態度で、虫眼鏡片手に鑑定していると言うギャップが、世間の方々にはたまらないのだ。
キクマサはカイを観察するように見ていたが、その視線に気づいたカイもキクマサの方を向く。

「で、君が噂のカトレアさんの弟子か」

「……カトレアさんを知ってるんですか？」

キクマサは、思いもよらない名前が出てきた事に驚いた。
カイは歯を見せて笑う。

「うん。あの人が俺を、鑑定の世界に導いてくれたんだ。もう、遠い昔の事だけどね。カトレアさんは元気かい？」

「……どうでしょう。急に居なくなりましたから。あの人の事だから元気だとは思いますけど」

あの人が、今どこで、何をしているかなんて、想像もつかない。
だって、想像がつく事を、超えて行く人だから。

心配じゃない訳じゃないけど、元気でないはずもない。殺したって死なない人だ。あの人こそまさしく。

カイも、息を吐くように頷いた。

古代エジプト文明は、紀元前４０００年にさかのぼると言う。
ナイル川を源とし、繁栄して行った王朝。
ピラミッドやスフィンクスなど、謎の多い遺産を数多く残している
のがこの国だ。

「……どういう事ですか？　エリーゼ先生。」

「ですから、そのしおりに書いてあるスケジュールは全て中止です」

リュオンは、口をぱくぱくさせながら、何と言い返せば良いのか分からなくなっていた。
緻密に練った計画を捨てて、いったい何をすると言うのか。

エリーゼ先生は、表情を一向に変えなかった。
リース先生もしらばっくれている。

メルベリーも驚いて、口元に手を添えて、瞬きをした。

「エジプトのカイロまでやってきて、“ギザの三大ピラミッド”も、“アブシンベル大神殿”も見ないで、いったいどうするんですか！！　俺たちの納得する答えがありますか!?」

「落ち着きなさい、ルネ・テクタイト。エジプト自体、毎年必ず向かう研修国です。ギザのピラミッドはいつだって見学できるでしょう。……しかし、あなたたち…まだ行った事のない所があるでしょう」

エリーゼ先生は、リュオンを諭す。
エジプトにおいて、ピラミッドにも勝るとも劣らない、世界の歴史を刻む場所。
リュオンは、何かにピンときたようで、まさかと頬に一筋の動揺が流れた。

「……そんな…まさか“王家の谷”ですか…?」

その言葉に、メルベリーは声も上げずに驚いた。
エリーゼ先生は瞳を細め、ゆっくり頷く。

「その通り。我々が明日向かうのは、エジプトのファラオの眠る、“王家の谷”……。それも、最近秘密裏に発見され、世間も知らない発掘途中の謎だらけの間……」

「そんな…いくらルネ・ヴィルトンでも、発掘権のない我々がそんな所へ行くなんて……可能なんですか?」

リュオンは相変わらず眉根を潜めていたが、いい加減落ち着こうと

していた。
エリーゼ先生に限って、いい加減な事を言う訳がないと理解していたし、今までだって突拍子のないプランを達成したこともあるのだから。

「……可能です。依頼主がいるのですよ、この研修には…」

「……」

先生は、これ以上の質問を受け付けるつもりはなかったし、リュオンもまた、これ以上は聞かなかった。
聞いた所で無駄なのだ。

“王家の谷”で我々がする事など、本当は誰にも分からない事なのだろうから。

説明された所で、ちっぽけな我々ごときが、理解出来る訳がないから。

その場に行って、リアルタイムで感じるしか無い。

l
d
r
a
w

21：エジプトプラン4～王家の谷～

学校で習う歴史って、どうしてあんなに無機質なんだろう
遺産や文献から分かる、歴史の欠片を繋いで、結んで、それでも、
唯一分からないのは、名を残す偉人たちの心の内である

出来事や、結果は分かっていても
どうしてそうなったのか
何を思ってそうなったのか
どうしても分からない事だから

ふと、キクマサは目を覚ました。

カーテンの隙間から、チラチラと見える空はまだ薄暗く、ぼんやりした頭では、今が何時なのか考えようともしなかった。
ただ、うつらうつらした頭の片隅で、先ほどまで見ていた夢のヴィジョンが繰り返されていた。

暗示的な、象徴的な、“鍵”が、水の底に沈んで行くヴィジョン。

誰かがそれを、必死に掴もうとしていたのに、決して、捕える事ができずに、暗い水底に消えていった。

「……何だったんだろう」

凄く喉が渇いた。

部屋の男子は、まだ寝ている。
決して起こさないように、とにかく外の風に当たりたくて、

バルコニーに出た。

「……」

驚いた。
そこから見える景色の、何と不思議な様。
薄くたなびく白い空に、朝の日の光。

エジプトの、ここはきっと中心地。
高層の建物も、歴史的な建物も入り交じって、その隙間から見える物。

「…すっげ、　ピラミッドじゃん……」

異次元のように、不釣り合いなのに、向こう側には世界的に有名な遺産がそびえ立っていた。
ビルの隙間から見える、その出で立ちが、

何だか切なくて、心にしみる。

古の時代には、こんな不自然な切なさは味わえないのだから。

その日、ルネ・ヴィライアーが向かったのは、有名なギザの三大ピラミッドでも、世界遺産の原点、アブシンベル大神殿でもなかった。

「な、何だって!?　王家の谷!!?」

フォルテの驚きようと、顔の輝きから、その場所の凄さは容易に想像できた。

ヴィライアー達がザワザワしている。

「そうだ。しかも、俺たちが向かうのは、最近見つかった墓だ。とある複雑な理由から、その墓の存在は世界に公表されていない」

団長は、落ち着いた口調だったが、内心その研修に疑問があったのは確かだ。

フォルテは、その言葉に何を感じたのか、少し顔を潜めた。

「あの……その墓から何か見つかったりしたんですか……?」

「……いや、その墓は、墓と言うよりも、とある墓の延長と言った方がいい。王家の谷の墓は、発掘が始まった頃には、盗賊に荒らされていてほぼ壊滅状態だった。それでもなお、ほとんど手つかずで見つかったファラオの墓」

古代エジプトの謎の中でも、最も秘密めいた、しかし最も注目されているファラオ。

「……まさか…ツタンカーメン……!?」

フォルテは瞳を見開いていた。
彼の頭の中には、様々な情報と、歴史のつながりのような糸が、しゅるしゅると動き始めている。

団長は、フォルテの方を向くと、眉を動かした。

「気になるか、ゴッドバルト。お前の親父さんは有名な考古学者だもんな。だったら、これがどういう意味か分かるだろ。ツタンカーメンの墓は、手つかずで発見されたにも関わらず、その時代や、このファラオに関する情報はいっさい出てこなかった。しかもツタンカーメンの名は、他の遺跡からもことごとく消されている。……なぜだ?」

団長は、ひっそりと静まり返っているメンバーに、その疑問を投げかける。

「しかし、先日発見された墓には、その名がしっかりと刻まれていたらしい。しかし、公表できないのには理由がある。その間には、重い扉にも見える、巨大な壁画と……」

「“鍵”だけが、見つかったんだ…」

キクマサには、いかにそれが世紀の大発見なのか分からなかったが、ただ気になったのは、“鍵”という物のフレーズ。
夢に出てきた、あの鍵は、ただの偶然だろうか。

“王家の谷”に向かうバスの中で、キクマサはその事について、少しだけ考えていた。
だって、町の隙間から見える、ピラミッドと砂漠を無視してなお、我々は、それを見に行くのだから。

フォルテは、さっきからずっと険しい顔をしていた。
キクマサは、彼がこの手の話にやけに詳しいなと思っていたけれど、有名な考古学者の父がいる事は、今日初めて知った。

「なあ…フォルテ。これって凄い事なのか？」

キクマサは、切り出した。
フォルテは、キクマサに話しかけられて、少しハッとしたようだが、軽く頷くと真面目な顔で。

「…うん。…と言うより分かんないや。ツタンカーメンの情報って、本当に少なくてね。ほとんどが考古学者達の見解と言うか、想像っていうかね。……ツタンカーメンの時代が荒れていたのか、この頃

の王の名前って、あらゆる遺跡から消されているから、何かあるんだろうけど……」

フォルテはそこで、言葉を止めた。
それ以上をキクマサに言うことは無かった。

彼には、少しだけ分かっていたのだ。

考古学、歴史の合間合間に存在する、“鍵”の存在を。
隠された真実の、神懸かり的な力を。

呪い的な、その重要性。
知ってはいけないのに、知らなければ、前に進めない矛盾した歴史。

それに手を出したら、

何を失い、何を手に入れるのか。

果たして、その真実を、僕らに受け止められるのか。

それすら、イメージできないと言うのに。

ldraw

22：エジプトプラン5～記憶の間～

記憶の間と呼ばれた部屋

扉と鍵を守っていたその部屋を作った者は誰？

なぜか夕刻を示すオレンジの空の頃、彼らは王家の谷についた。
沢山の発掘跡や番号、印の書かれた、いかにもまだ発掘中の墓であると言うその景色。数人がまだ作業中であったが、既に物静かだ。

「こちらが案内人のセティさんになります。彼は昔からこの王家の

谷の墓守をしている方であり、研究者でもあります」

エリーゼ先生が現地の案内人、セティさんを紹介する。エジプト人らしい白い服に、浅黒い濃い顔、髭の長い顎。彼はとてもにっこりと笑って、挨拶をする。

「では、まいりましょう……ルネ・ヴィライアーの皆さん。ツタンカーメンの呪いにお気をつけて……この墓を発見した者は、“偶然”にも２０人が相次いで死んでしまったと言いますから……」

「……」

行く前にその話は無いだろうと思ったが、ルネ・ヴィライアーは気まずそうにお互い目を合わせたりしている。

セティさんは「冗談ですよ」と言って、ほっほと笑っているが、なんて冗談に聞こえない冗談な事か。

彼が案内するのに導かれ、そわそわするヴィライアーは列を作って指定された墓に入る。

暗く、作りたての穴の中。どうしようもなくひやっとするような、土の色の闇の中に。

流されるままに歩いているキクマサであるが、フォルテは少々怪訝そうである。いつもの彼と違って、やたらと真面目で精悍な顔つきだ。頼りがいがありそうに見えるはずが、いつもとの違いに多少心

配になる。考古学者の親父さんがいるせいか、フォルテはその手の話に詳しく通じている。

だからこそ、思う事もあるのだろう。

「……ねえ、キク……大丈夫かしら……」

隣からルナシーの声が聞こえた。

先頭のセティさんが持つ光源の、ぼんやりとした灯が心もとないくらいに、周りがわずかに見える。

ルナシーはいつの間にかキクの隣にいて、何だか神妙に、こわごわと周りを見ている。

そりゃあ、そうだ。墓の中なんて怖いし、しかもツタンカーメンの縁の地であるからこそ、リアルに体がヒンヤリとする。

「……怖い？」

「少しね……でも、前を歩く先輩達は何て事無さそうにしているわ……研修に慣れているのね……」

「フォルテも平気そうだよ。自分の世界に浸っちゃって、全く話さないんだ。珍しいだろ？」

洞窟のようになった長い通路を歩くヴィライアーの反応は、様々であった。

一年生のヘルは、特にこういうものが苦手な小心者であるため、ガタガタして足が進まないようである。

クレハは「すっげーすっげー」と、相反した反応を見せ、動けないヘルを引っ張る。この二人は本当によく気が合うなと思う、そのくらい正反対だ。

四、五年生は流石に研修慣れしているので、怖さ半分、期待半分と言うように、少々余裕のある足取りである。

「……呪われちゃったら、どうしよっかな～」

「あんたは呪いが逃げるわよ」

五年生のナギとレッドは、相変わらず二人で笑っているし、四年生は五人仲良く固まって、普通に道を歩くようにスタスタとスムーズだ。

後ろでクレハが「ギャハハ☆」と笑えば、前から「ウルセーぞ一年！！」と怒鳴り声が飛ぶ。

その間に挟まれた二年生は最も普通の人のように、いちいち衝撃にビビったりしている。

そうこうしているうちに、どうやら目的のポイントについたようだ。セティさんは皆を振り返り、真面目そうな表情で居る。

「ここに注目してください」

彼が指差した所には、古くに掘られた壁画と、小さな暗い穴が見える。気がする。

「この壁画と鍵穴が発見され、私は古くから墓守の間に伝えられる

話を思い出しました。黒い歴史は、鍵をかけ封じられている。真実を知る事が出来るのは、その扉を開け、中に入った者だと……」

彼はフッと光源を消した。瞬間的に暗くなる墓の中、誰もがきっと恐怖を感じた。

「これから、何があっても驚かず、冷静に勇敢に、物事の真を見極めてください。あなた達ならば、きっと上手くいくでしょう」

セティさんの声だけが聞こえると思ったら、ボウと浮かび上がるように光る、鍵穴の存在を見た。
誰もが息を飲み、次に起こる事を待っている。予想すら出来ないけれど。

セティさんは鍵を懐から取り出した。
ほとんど見えなかったが、どこか古いような鍵だと思う。

彼はそれを光る鍵穴に刺し、一度ゆっくりと回した。

カチッ……

その音は、鍵を開ける音だったのか。

それとも、歴史の大時計の針が一つ、動く音だったのか。

まばゆい光と旋風が、開かれ出した扉の間から溢れ流れてくる。
ヴィライアー達はその場からどうする事も出来ずに、ただ目映い光に目をつむり、激しい衝撃に翻弄されている。

流れに身を任せるように、彼らは光の中へ、

歴史の扉の中へ吸い込まれていった。

静寂と暗闇の中、セティさんが再び光源を灯した。
しかし、そのときこの場にいたのは、エリーゼ先生とリース先生だけであった。

先ほどまでいたはずのヴィライアーは、跡形も見受けられない。

「……おっどろいた……話に聞いていたとは言え、現実に目の前で起こると、もう目を疑いますよ」

「リース先生……この事は他言無用ですよ」

「分かってますって、エリーゼ先生」

先生二人は、この状況を見越していたらしい。
エリーゼにいたっては、この研修の真意すら心に留めている。

セティは長いひげをなで、目の前に再び閉じられた扉を見上げた。

約半年前に発見されたこの扉。
それまで、誰も見つける事が出来なかったと言うのに、ある日突然、前触れも無く発見された。

扉を開く時期を、神様がそろそろだとおっしゃったのだろうか。

「……どうか、悲しい歴史に捕われたファラオをお救いください……」

セティはゆっくりと壁画に手を当て、再び開くはずの無いそれを悲しそうに見ていた。
既に鍵穴は無く、先ほどの事が嘘のようである。

ツタンカーメンの歴史は、誰もが興味深くしていながら最も謎が多い。
彼の名は、あらゆる墓から削り取られている。

歴史に真実を求めるならば、可能性はいくらでもあるし、もしかしたら真実なんて無いのかもしれない。

それでも、哀れな魂を太陽神の元へ導いてくださるのなら。

セティは、既に役目を終えた鍵を握っていた。

古い、錆び付いた鍵であったが、いつになく冷たく重かった。

| draw

23：エジプトプラン6～ヒエログリフ～

過去の全ての物事は、

良くも悪くも、全て、人類の遺産でありますように

ルナシーは目を覚ました。
日差しがじりじり暑くて、とても息苦しかったからだ。

ゆらゆらと、単発的に途切れる視界の中で、夢か現実か分からない世界を見た気がした。

「……ここは…」

ここは、一体どこなのだろう。
彼女はゆっくり立ち上がった。

柔らかい草の絨毯に、南国にあるような木々。清らかな、そして小さな湖。

ルナシーはその湖の袂で膝をつくと、理解できない状況と向き合おうとしていた。
私はさっきまで、ルネ・ヴィライアーのみんなと一緒に、王家の谷の一つの遺跡に居た。

セティさんは、何も言わなかったけど、きっとあの場所こそが、“記憶の間”であったに違いない。

とても、不思議な感覚だった。
日没の時を憂うように、たった一欠片の光が、あの空間を生み出していた。

一瞬、煌煌と輝く光の中に、浮かび上がった、古代の石盤。

その鍵穴。

不思議な感覚だった。
私は、たった一瞬の、その石盤と鍵穴を、懐かしくさえ思ったから。

古代のノスタルジーに、耐えられなかったと言うのか。

ルナシーは、淡々とそんな事を考えていた。
ここはどこだろう、と考える前に。

ルナシーは、自分の映る水面に、視線を落としたまま、周囲の空気を感じ取った。
その時だった。

「ルナ！！」

水面に、誰かが映った。
私の背後に、彼が現れたのだ。

「無事でよかった！」

「……フォルテ！！」

「話は後だ。俺たちが落ちたのは古代エジプト。鍵は封印していた歴史を開いたんだ」

フォルテは何だか焦ったように、急いでルナシーを立ち上がらせた。
彼の、言っている事は意味不明だった。

「何を言っているの、フォルテ」

「今は、説明してる場合じゃないよ。このオアシスの中に、盗賊がいる。分かるかい」

フォルテは彼女を誘導して、草むらに隠れた。すると、反対側の草むらから、大柄の男が出てきた。
色黒でガタガタの歯並び、彫りの深い顔。
手には、先の曲がった剣を持っている。

ルナシーは息をひそめた。危うく声をあげてしまいそうになる。
大男はぎょろぎょろあたりを見渡すと、再び元の場所へ帰っていった。

一時ルナシーとフォルテは物音立てずに、気配を隠していたが、フォルテが長く息を吐いて、

「もう良いんじゃないかな、ルナ」

小さくなっていた彼女の背をポンと叩いた。
ルナシーは、眉根をひそめてフォルテを見上げる。

「あれは何？　いったい私たちはどうしてしまったの？」

「落ち着いて、ルナ。気持ちは分かるけど」

フォルテは、もう一度周りを確かめた。盗賊の気配は、この辺りにはなかった。

「……ここはきっと、古代のエジプトだよ。俺たちは過去に落とされた」

「どうしてそうだと分かるの？」

「……それが、“鍵”の役目だから。……父さんの言った事は、本当だったんだ」

フォルテは立ち上がると、青い空を見上げた。エジプトの空は、青い。
感じた事のない時代の空気をこの身で感じる事に、どうしようもな

い喜びと、とりとめもない不安を感じる。

伝説は、本当だったんだ。

歴史は巻き戻る。

ルナシーは、分からないままだった。

きっと、フォルテにしか分からない事なのだろう。

「……ここが古代のエジプトだと言うなら、私たちはどうすれば良いの？　みんなは……」

ルナシーは自分の言葉にハッとした。みんなはいったいどうしたのだろうか。

私たちと同じようにこの時代に落とされたと言うのなら。

フォルテも、複雑そうにしている。

「…みんながこの時代に落とされた可能性は大きいよ。全員かどうかは分からないけれど……。とにかくもとの時代に戻らなくちゃ…」

彼は冷静だった。いつものような、おちゃらけた彼ではなく、思慮深い。

「……戻れるの？」

「……戻れるさ。……この物語を正しい結末に導く事が出来たらね」

簡単そうに言った、彼の顔は、暗く複雑である。

ルナシーは、そう言う所にすぐに気がつくから。

「盗賊に見つかったら終わりだ」

フォルテは声を潜めた。
草の間をすり抜けるのに、ちょっとの音でも立てようものならヒヤッとする。

「特に君は女の子なんだから」

フォルテは神経過敏になりながら、あたりをきょろきょろしている。

「あら、どうして。女の子だから助かる事もあるわよ」

「君は、もう少し自分の事を理解した方が良いね」

ルナシーは、くすくす笑っていた。
フォルテが何を言わんとしているのかはわかっていたが、あえてそう反応していたのだ。

「……君は美人なんだから」

「私には何て事なくそんな事が言えるのねえ、フォルテ。…レイにもそう言えたら良いのにね」

フォルテは一度固まって、複雑そうな顔でゆっくり振り向いた。

淡い、オーレオリンの髪が、葉っぱを横切る。

「君の言っている事は、意味不明だ」

ルナシーは意地悪そうに笑うと、ここぞと言ってのける。

「あら、まるでいつものあなたじゃないみたいよ。いつからそんなに賢そうになったの」

「からかわないでくれ、ルナシー。こんな非常事態に」

彼は、本気でピリピリしていた。
今の彼に冗談は通じないらしい。

ルナシーは、ため息をついた後、とても冷ややかな瞳で彼の背中を見つめた。

何て、読めない人。
感情を露わにしていそうで、冷静で分からない。

レイやキクを心配していないはずはないのに。

その時だった。ふいにフォルテが止まったから、ルナシーは彼の背中にぶつかりそうになった。

「どうしたの？」

ルナシーの質問に答えもしないで、彼は目の前の崖に駆け寄る。
近くで水の音がするから、小川があるのかもしれないけど、この岩場の切り立った崖は、あらゆるところに窪みがあって、少し湿っぽかった。フォルテはその一つの窪みに駆け寄って降りていったのだ。

「待ってよ、どうしちゃったのよ…もう」

ルナシーは眉根を潜めて、周りを確認しながらついていった。
フォルテは窪みの中の壁に手をあてて、上、下、右左を確認しながら、仕切りに何かを呟いていた。

「…凄い…壁に文字が…」

彼は、少し下がって、全体を見渡した。
ルナシーも彼の視線を追う。

「ヒエログリフだ…」

それは古代エジプトの文字で、合間合間に壁画が彫られていた。
フォルテは一時その壁を見つめた後、

「…エジプトの神話だ…太陽神ラーを奉ってるんだ」

「あなた…古代文字が読めるの？」

「ヒエログリフなら少しね。全部じゃはいけどもちろん。…ただ、大切な単語と、壁画の神様の“アトリビュート”で想像は出来るからな…」

フォルテはルナシーの目線に立って、左上を指差した。そこには、意味の分からない古代文字に囲まれた、横を向いた神の姿が描かれていた。丸い太陽を背負っている。

「あれが太陽神ラーだ。太陽のヒエログリフが見えるかい。ラーはエジプト神の主神であり、太陽の神だから。アトリビュートだよ」

「…アトリビュートって？」

ルナシーは、先ほどからでてきている謎の言葉に疑問を抱いた。フォルテは、いまだにその壁画を隅々まで見ながら、

「神々を判別する、象徴的な物さ。持ち物だったり、姿形だったりするけど」

一つ一つのヒエログリフを確かめていた。

「……サ・ラー…は、ラーの息子。ファラオの事だ。…この壁画、きっとこの時代でも古いものだ」

「どうして…？」

「だって、この時代がツタンカーメンの時代なら、ラー信仰は古くてアメン信仰とアテン信仰が盛んな時代のはずだけど……」

フォルテは相変わらず専門的で、あまりこういうものに通じていないルナシーにとっては、うさんくさいばかりであった。

「何ですって？」

「太陽の神様さ。エジプトにとっては太陽神って言うのはとても大切でね。エジプト神にも、沢山の太陽神がいるんだ。ラーをはじめ、アメン神、アテン神……」

フォルテが太陽神の説明をしようとした時だった。

気付いた時にはもう遅かったのだが、窪みの外には既に何人かの男がこちらをにやにや見ながら囲んでいる。

フォルテとルナシーは一瞬背筋が凍ったような気がした。

「動くんじゃねえぜ、異国のお方よお」

その人だかりの中から、長い上着を羽織った浅黒い肌の男が現れた。

頬に大きな傷があり、彫りの深い瞳は冷たく二人を見据えている。

きっとこいつがお頭なのだ。

今ここで殺されたら現実の世界の私はどうなるんだろう。ルナシーは既にそんな事さえ考えに至る。

「今死んだら、俺たちってどうなるんだろう……」

今まさに、同じ事を考えていたフォルテが、両手を上げた降参のポーズのまま、希望のなさそうな声音で呟いた。

ああ神様。

エジプトの神様。

我がギリシアの神様。

ここで死ぬだけの、ただそれだけのために呼んだのではないでしょう。
こんな所で、むざむざ殺されるくらいなら、どうか、

オシリスの前に祝福されし者でありますように。
カーロンの船が穏やかでありますように。

フォルテは必死になって他教色々な神に祈った。

オシリスは、死者の国の神。
カーロンは冥府への渡し守。

ヒエログリフは、まるで絵画のようだ。
そのウジャトの目は我々を見ている。

l
d
r
a
w

24：エジプトプラン7～オアシス都市“カルガ”～

我々が、この世界に呼ばれた理由はきっとある

どうか、太陽神に栄光あれ

「聞き分けの良い奴らめ。賢いのか、ただの腰抜けか……」

「……」

あっさり捕まってしまったルナシーとフォルテは、荒い縄に縛られてオアシスの崖沿いを歩かされていた。

「お頭、こいつらどうするおつもりでぃ。見た所異国者に違いねえが、見た事ない格好をしているぜ」

「珍しいだけ価値はあるだろ。…なあ、美しいお嬢ちゃん」

お頭はそう言うと、卑屈な笑みでルナシーを覗き込んだ。ルナシーは、暑いのに凄い寒気を感じた。

お頭から目を背ける。

「……お前達、一体全体どこからやってきたんだ。このオアシスは、都から遠く離れているのに。見た所“足”も無いようだ……」

お頭は、今度はフォルテの方を向いた。

「おい、小僧。お前ら何もんだ」

「ギリシア人です……」

「ギリシア人だと。何でこんな所にいる……」

「そんなの、俺たちが知りたいさ…。いったい俺たちをどうする気だ」

フォルテは、用心しながらお頭を見上げた。

お頭は、彫りの深い瞳を細めると、あざ笑うように。

「……そうだな。どうしてやろうか。奴隷にしてやろうか、いっそ殺してやろうか」

「……」

二人には今の所、深い後悔と、絶望しかなかった。

「ボサッとするな。奴隷」

崖沿いを歩かされながら、フォルテはこの国について考え込んでいたものだから、フォルテの縄を持っていた大男に後ろから蹴られた。勢い余って、フォルテは前に倒れた。

「フォルテ！！」

ルナシーはフォルテに駆け寄ろうとしたが、縄がそれを許さない。フォルテは、ルナシーに目配りすると、小さく首を振った。事を荒立てたくないと言う事だろうか。

お頭が怪訝そうに振り返った。

「何やってるんだてめえら」

「お頭、だってこの奴隷、さっきからボサッとしてるもんだから」

「下手な事するんじゃねえ。逃げられでもしたらどうする。人間極限まできたら何だって出来るんだぜ。このオアシスから、誰一人“一歩も”出したらいけねえんだ」

お頭は、大男に罵声を浴びせると、フォルテに、

「悪かったな、小僧」

と謝ってきた。

「……？」

ルナシーとフォルテは顔を見合わせる。

先頭を歩いていたお頭は、ある崖の前で立ち止まった。
そこには、先ほどのヒエログリフの書いてあった窪みとは比べ物にならないほどの、沢山の文字が記されてあった。
そして中心部には、巨大な扉が壁画として描かれていたのだ。

フォルテは息をのんだ。

「偽扉（ぎひ）だ……。バーが通る扉……」

壮大で、圧倒される重々しい壁画。ハヤブサの姿をして、頭部に太陽を掲げた神が描かれている。
ルナシーはその神の姿から目をそらせずにいた。

「お前……ギリシャ人の癖に、嫌に詳しいな」

お頭はフォルテを見下ろした。
フォルテは顎にてを当てたまま何かまだ考えている。

「でも、偽扉は基本的に墓に描かれるものだろ……。死者の魂……エジプトで言う“バー”が自由に出入りできるように。何でこんなへんぴなオアシスの中に……」

「……この偽扉は目くらましだ。」

お頭はそう言うと、その扉の前に、手をついた。

そして、一体何と言ったのだろう。

彼は何かを唱えたのだ。

「……最高神ラーよ……あなた様こそが、ただ一人の太陽の神」

ただそれだけが聞き取れたとき、お頭は懐から手に余る大きさの鍵の様な物を取り出した。

ルナシーやフォルテがひやっとしたのは言うまでもない。

まるで、セティさんが記憶の間”で使ったあの鍵を彷彿とさせたからだ。

丸い輪っかのついた、十字架にも見える。

「…アンクだ。エジプトの神器の…」

二人があっけにとられている時だった。

お頭が“アンク”をその壁画に突きつけた瞬間、羅列したヒエログリフが光を得て、開かないはずの扉が開いたのだ。

そう。
あの時のように。

「ここは、辿り着ける者にしか辿り着けないオアシス都市“カルガ”。太陽神ラーの恩恵を受ける都市だ」

フォルテは目を疑った。
開いた扉の中には、外から見ただけでは到底分からなかったのだが、何と見渡す限りの町があったのだ。人々が行き交い、とても活気が良いのに、どうして微かな声さえも扉が開く前までは分からなかったのか。

お頭につれられて、その都市に入っていった。
向こうもこっちも、もの珍しそうにじろじろ見ている。

「……どういう事なのフォルテ」

「…分からない。こんなの聞いた事も無いよ…」

ただ、分かる事と言えば、この都市はきっと“隠れ里”なのだろうということ。
あの非科学的な扉に守られているのだ。
町の人々の警戒心の視線も、いたいほど分かるから。

お頭は二人を縄で縛ったまま、重たい扉の部屋に入れた。
外には見張りをつけてまで。

お頭は、中心にある石造りのイスに腰掛けた。

「まあ、好きな所に座りな。お前達は運がいいぜ。扉をくぐるとき、太陽神ラーによって裁きが下されなかった」

「……何だって？」

フォルテは突っ立ったまま、お頭を見下ろした。
ルナシーは壁にくっついている長椅子に座って、一つ大きく息をついた所だった。

「この都市はラーによって守られている。かつての“ラーの神官団”が創った都市だ。もし、王宮のスパイが潜り込もうとしたら、あの扉で裁きを受ける仕組みになっている」

「……王宮？　どういう事だ？」

フォルテは何もかもが分からずにいた。
ただ、彼の好奇心だけがぐるぐる頭を巡っている。

「……」

お頭はフォルテをじっと見上げた。
そして、ルナシーにも視線を向け、またフォルテに戻る。

「……何を言ってるんだ。そもそも、お前達は何なんだ。どうしてこのオアシスにいた」

「……それは……」

お頭の疑問は最もだった。

でも、だからといって、未来から来たなんて言ったって、理解できないだろう。

どうすれば良い。話が一向に見えてこない。

フォルテは息をのんだ。

「俺たちは、ずっと遠くから来た。…気付いたらこのオアシスにいたんだ……。俺たち以外に、こんな格好をした奴は居なかったのか？」

「……お前達の他に……？　いいや、いなかったぜ……誰かがこのオアシスに入ると、俺たちに分かるようになっている」

何だ。

この違和感。

フォルテはお頭を睨んだ。

ただの盗賊にしては、彼からはとても不思議な凄みだけを感じる。

悪い気は到底しないのに、ただ者でない事は分かるのだ。

「俺の名前は“タハール”。このオアシス都市カルガの頭で、太陽

神ラーの神官だ」

「……」

フォルテは唐突に自己紹介してきたタハールに目を見張った。全然盗賊でも何でもなかったのだった。

タハールは、あんぐりとしている二人を、ただ見据えて、

「今や、この国のファラオに先は無い。“アテン神”だけしか認めようとしない。民は飢え苦しみ、神の定まらない混沌とした空気は、闇を生み出す」

ひやりとする視線を作り出していた。

フォルテは一度息を飲むと、自分の心の中に落とされる好奇心を抑えるのに必死であった。それでも、知りたいと言う気持ちはどんどん溢れてくる。

「……俺たちは何も知らない。分からない。…できれば、全部教えてほしい」

この国の、今のすべてを。

フォルテは、ある種の焦りと興奮を覚えていた。

ここには、本では分からない“真実”がある。知りたい事が、沢山ある。

知りたい。

全てを。

タハールは、額の中心を押さえて、ガクっと前にうなだれた。そんなジェスチャーの中でも、合間には、二人への警戒心も解いてはいなかったのだが。

「呪いだよ。“セト神の呪い”って呼ばれているけどな。神の決まらないこの国は不安定になり、やがて恨みを残した人々の“バー（魂）”は、呪いとなり、厄災となる。少し前に“セト神”を祭っていた者たちが皆殺しにされ、それから呪いはこの国に漂っている」

「今の……このエジプトのファラオは？」

フォルテはたまらなくなって聞いた。

カタールは一度瞳を閉じ、再び開けた。

その時の瞳の、憎悪に満ちていた事。

「……アクエンアテンだ……」

その名を口にした時の、憎しみのこもっていた事。

我々は、無機質な歴史しか知らない。

どうしてそうなったのか、何を思ってそうしたのか。

その決断を下すのに、どれだけ苦しんだのか。

歴史はそれを語らない。
心は分からない。

だから、よく見ておいて。

悪も、正義も、簡単に一言では済ませられないと言う事。

残酷も、失敗も、
負けも勝ちも、
愛も憎しみも、
野望も欲望も、

全て、結果だけを教える歴史の教科書を、否定しようとは思わない。

ただ、想像していこう。

それは、黒歴史の幕開け。
三柱の太陽神を巡って、繰り広げられた、隠された歴史。

エジプトの未来を左右した物語。

ldraw

25：エジプトプラン8～中庭～

どうして人々は、神を求め
神を信じ、崇め

どうして戦うのか

あれは確かに扉だった。
あの光の中で、時空を行き来する歴史の扉。

それを開いた鍵。
それを許したのは誰だったのか。

「……っわあ！！！」

静かな意識の世界から、キクマサは急に目が覚めた。
パンと、大きな音がしたのだ。

「……？？」

「あら、やっとお目覚めね」

目の前には、深い色の巻き毛の女性が、彼の目前で手を叩いたポーズのまま居た。
キクマサは状況の理解に苦しむ。

彼女は、四年生のシャルロ・グレディア先輩だ。

「……え……？　先輩……？？」

「あら、覚えていてくれて光栄だわルネ・アメジスト。あんたは二年生のオノダ・キクマサ君よね」

彼女はぽかんとしているキクマサをよそに、立ち上がると、膝をパンパンはたいた。
キクマサはあたりを見渡す。

そこは、静かで薄暗い庭のような場所だった。高い壁に囲まれ、真ん中に池がある。
パピルスが水面から伸びて、ひっそりと佇んでいる。

「どういうことですか？…みんなは……」

「分からないわ。目が覚めたら、ここに私達三人しか居なかったんだもの」

「……？……三人？？」

キクマサは、周りの景色の変化に圧倒されて、すぐそこに転がっている彼に気づきもしなかった。
黒髪の男がうつ伏せで気を失っている。

「だ、団長！！」

キクマサは慌てて彼に近づくと、肩を揺さぶった。

「やだ…。そいつ起こすの？」

シャルロはあからさまに嫌そうだった。キクマサは、どうしてわざわざこの三人なのだろうと思ったが、今は団長を起こさなければと、何度も肩を揺さぶった。
程なくして、彼は意識を取り戻す。

「……何だ……？」

完全に状況の掴めていない、曖昧な意識のまま、団長はムクリと起き上がった。

「…よかった、団長」

「……あ？……あれ、何でお前……あれ？？」

団長はキクマサを不思議そうに見て、周りの風景の異常に視線を流

した。
四角く切り立った壁に囲まれた箱庭のような場所。流石の団長もこの状況では間の抜けた表情だ。

「やっとお目覚め？　見て分かると思うけれど、この場所に、私達三人しか居ないわよ」

シャルロは腕を組んで、目の前の石ころを団長の方に蹴る。

「さっきまで、俺達は王家の谷に居たのに…」

キクマサは、ふとフォルテやルナシー、レイの事が気になった。彼らは一体どこに居るのだろう。
ズボンのポケットからケータイを取り出して開く。しかし、

「…あれ？？　ケータイが真っ暗」

充電は十分にしてきたはず。海外でも使えるやつなのに。
それを聞いたシャルロは、自分の赤いケータイを出して、一時何かしていたがため息をつくとそれを再びポケットに入れた。

「ダメだわ。まるで通じない」

「……」

団長は黙っていたが、じっと周りの様子を見て、険しい顔をしていた。そして、

「……ケータイなんて通じるはず無い……。ここは、古代エジプトだ……」

低い声でそう言った。シャルロとキクマサは彼の方に、ハッと顔を向けた。特にシャルロは眉根を寄せると、

「……本気？　なにバカな事…」

「ああ、そうだ。ばかげた話だが、多分そうなんだよ」

彼は確信めいた口調だった。表情は相変わらず強面だけど。シャルロは当然いかがわしげに腕を組んでいる。

「……根拠は？」

「別に。そんな気がするだけだ」

「嘘ね。あんた何か知ってるんでしょ…」

シャルロの鋭い視線が、団長に向いていた。キクマサは二人の先輩のやりとりを訳も分からず追っていた。
団長は、シャルロを見下ろし、ここにまたピリッとした空気が流れる。

キクマサは気が気でない。その時だ。

カツ……。

壁の方から一つの足音がして、彼らは振り返った。
出口か、入り口か。くり貫かれた口から一人の女性が現れた。白い

衣装を着た、肩までで切りそろえた黒髪の女性。
女性は三人を見つけると、瞳を大きくさせた。
女性の側にいた側近のような女官が、小さく悲鳴をあげ、青ざめている。

「…お…王妃様。こ、この者たちは…」

「静かになさい。気づかれてしまいます」

王妃と呼ばれた女性は、三人に目を向けると、

「そなたたちは…？」

ただ一言、それだけ問いかけてきた。
団長は腕を組んだまま偉そうに、

「ルネ・ヴィライアーだ！！」

と、啖呵を切る。彼はこの状況に動揺していないようだ。

「バカ！！そんな事言ったって意味ないでしょう」

「じゃあ何て言えばいいんだよ」

シャルロが団長につっかかり、二人はいつもの言い合いになってしまった。

しかし、その時、例の王妃の表情が少し変わったのを、キクマサは見落とさなかった。

口元に手をあて、

「……ルネ・ヴィライアー……」

小さく呟いている。そして、三人を探るように見ると慣れたように微笑む。

「……ここでは何ですから、よろしければ客間へお通しいたします」

「あの…」

キクマサは彼女に問いかけた。振り返る彼女から、不思議な香油の香りがする。

「ここはどこですか…？　あなたは……」

あなたは誰ですか？

分からないことだらけの状況を、教えてくれる人がいるのならば。

「……ここはルクソールの王宮です。私の名は“アンケセナーメン”……」

その名を聞いたときの、シャルロと団長の驚き様は、きっと空気に伝わった。二人は同時に顔を上げたのだ。

王妃アンケセナーメン。

キクマサは、歴史上有名なその名を、この時はまだ知らなかった。

「今夜はこの部屋でお休みください。王妃様は、明日こちらに伺うと言っておりました」

女官が通してくれた部屋は、石造りの淡白な部屋だった。

「王妃様は内密にとおっしゃっておりました。あまり物音を立てませんように」

彼女はそう言うと、そそくさと立ち去っていった。部屋の中は、三本のローソクしか光源がなく、とても薄暗い。

三人はローソクを側に置いて、固まって座った。

「……どういう事なの…？」

シャルロは冷ややかな目で団長を見る。団長はうっとうしそうな顔をしたが、

「おい、どういう事だ。新人、簡潔に述べてみよ」

キクマサに振って、その場をしのいだ。振られたキクマサはただの被害者。こういうのを無茶振りっていうのだろうか。彼は困ったが、あえて全く関係ない事を尋ねた。先程から、ひどく気になっていた事だ。

「……さっきの人…アンケセナーメンって、先輩知ってるんですか…？」

「おい、質問の答えになってねぇぞ。とんでもない新人だな」

団長はあぐらをかいて、苦笑いをした。シャルロは肩の髪を払うと、

「それでいいのよ、キクマサ君。あなた面白い子ね」

意味深に笑みを浮かべた。

「だ、だから…アンケセナーメンって……」

「気をつけろ新人。この女はマジでヤバいから。目付けられたら身ぐるみはがされるぞ。いろんな意味で」

団長はキクマサの言葉をかき消した。

「……あの……だからアンケセナーメンって…」

「何言っているの団長。誤解を生むようなこと言わないで。それに私、お金にしか興味ないもの」

「金の亡者が。モテないぜ」

「……あの…」

キクマサの入る余地がない。
二人のケンカはますますヒートアップする。

「どの口が言っているのかしら。くだらないこと言う前に、私達に説明することがあるはずよ」

シャルロ先輩の口調はあくまで冷静なものだった。団長は、「可愛くねぇの」と嫌みを残して、キクマサに向き直る。
静かな空気の中、それでも二人の先輩に隙はなかった。

「新人。え―…、ルネ・アメジストだったな…。まぁ、なんだ。最初の研修で偉く当たりだったな。よろこべ」

キクマサの肩にポンと手を置き、まるで、よろこべという名のドンマイに聞こえる。
キクマサは何のこっちゃ分からなかった。

「回りくどいのよ。核心だけ述べて」

「てめえは黙ってろ」

再び二人の先輩の間に火花が散る。どうしてこんなに仲が悪いのか。

「…アンケセナーメンっていうのは、あの有名なツタンカーメンの奥さんだ。歴史上な。さっきの女がそうとは限らないが…。ただ、服装や建物を見ても、現代ではなさそうだ」

深刻なような、でも割と落ち着いた口調の団長に、シャルロは相変わらず胡散臭い視線を向けている。キクマサは、さっきの女性を思い返していた。あっという間に部屋に案内されて、状況を把握するどころではなかった。

それに、あの人…。

「あの人…ルネ・ヴィライアーっていう言葉に聞き覚えあるのかな…」

「……何…？」

団長が顔をしかめて、小声で聞き返してきた。シャルロも視線だけキクマサに向ける。
キクマサは慌てて、

「いや…、何ていうか、あっさり受け入れてくれたじゃないですか…。俺達の事…」

「……」

シャルロは石段に座って足を組むと、

「…確かに。普通はこんな怪しい格好をした奴を、客間に招いたりしないわ…。ましてや宮殿よ。それにさっきのお付きの人…」

巻き毛を片側に流す。これは彼女の癖だ。

「……内密に、お静かにって言っていたわよね」

「…何笑ってやがる」

「いやね…あまりお静かに出来ないなあって思って。……気づいてる？」

「……？」

彼女がそう言って、顔を上げたときの、ヒヤリとするような冷たい微笑み。

キクマサは一瞬、息が止まりそうになった。

団長は一度だけ瞳を大きくさせる。そして、いかがわしそうな顔を入り口に向けたとき、きっとすでに、我々は籠の中の鳥だった。

ローソクの炎が、三人の影を作っては、幻のように揺らめかした。

見えない敵に、止まった吐息。

歴史を変えてはいけない。
でも、我々は“何か”を変えなければ、話にならなかった。

―draw

26：エジプトプラン9～ラーの使徒～

その、現代でも有名な王と王妃は
呪われた運命と共に生きた

僕らはそれを、知っていたはずだ

シャルロ先輩も団長も、偉く淡白なものだった。しかし、視線だけは隙が全くない。
キクマサだけが一人、周りの気配にドキドキしている。

これは、嫌な気配だった。殺気とでもいうのか。
ザワザワした。こんなに緊張しているのは初めてだ。

「おいおい…。はめられたんじゃねーの？　俺ら」

「それは分からないけれど…ドアの外に三人…」

シャルロは立ち上がると、腰に片手をあて瞳を閉じる。

「窓際に2人…。天井にも2人…、あら、外にはもっと沢山居るわね。でも…何かしら…」

彼女は呪文でも唱えるように呟いてた。しかし、何だか何かにしっくりこないようで。

団長は眉間にシワを寄せると、妙な警戒心を伺わせる。

「…相変わらず…殺気を読むのが得意で。……何なんだよお前」

「お黙りなさい。気にかかることがあるのよ」

シャルロは団長を相手にする事もなく、相変わらず冷たい視線をあちこちに向けていた。相手にされなかった団長は、額に怒りのマークを浮かべたが、一応落ち着いて改めて聞く。

「……どうしたんだ」

「うるっさいわね。黙ってって言ってるでしょう」

「……」

団長が不機嫌そうに、ひそひそ声で、

「どう思う？　この女…最悪じゃね？」

キクマサに何とも答えにくい質問をした。

ふわりと、ローソクの揺らめきが一瞬大きくなったその時、空気の流れが変わった。

バン！！！！

扉が激しく破られて、バタバタ足音と砂埃を巻き上げ、ターバンの男たちが剣を持って突入してきた。ぴったりシャルロの読みと同じ数だ。

「！！！！？」

キクマサにしてみればこんなの映画の世界で、自分が剣の男たちに囲まれるなんて考えたこともなかった。

団長はそいつらを一回見渡し、シャルロは相変わらず腰に手を当て、冷ややかな表情だ。

「何の真似だ。俺達を殺そうって言うのか」

団長は冷ややかな声で問う。

すると、男たちの一人が、

「我々は“厄災の再来”を見逃したりしない」

不気味な声で、確かにそう言った。

シャルロは、どういう事かと眉根をひそめたが、こちらが疑問を投げかける間も与えられず、男たちが襲いかかってきた。

「下がってろ！！」

団長はキクマサを壁際に追いやる。

「お前に下がってろとは言わないぜ。シャルロ」

「…結構。あなたに守られるくらいなら、死んだほうがましよ」

シャルロは流し目でそう言うと、襲いかかってきた男の剣撃をかわして、サラッと手首を払うと剣を奪う。団長とシャルロは一度視線を交わすと、再び目の前の敵を睨んだ。

シャルロは余裕を持った動きで敵の足をはらうと、仰向けに倒れた男を一度、底の高いヒールで踏みつけた。彼女は目の色を変え、赤いルージュは弧を描く。

その後すぐに、背後から襲ってきた男に向かって、奪った剣を投げる。まっすぐに飛んできた剣は男のわき腹を掠めると、端で小さくなっているキクマサの横の壁に突き刺さった。男はうずくまる。

「……」

キクマサは目を疑った。もう、とんでもなく驚いた。

団長は向かってくる男に真っ向から殴りかかって、男が落とした剣を拾うと、それを構える。

まあ、実際向かってくる奴らの剣撃を受け止めるだけで、基本的には蹴倒しているのだが。

とにかく、目まぐるしいほどに二人は強かった。

何なんだこの二人は。とても美学校の一生徒とは思えない。思い様も無い。

団長は分からなくもないが、シャルロ先輩は一応女性だ。小柄だし、（少し怖いけど）きれいな人なのに。

キクマサは知らなかったが、彼女は団長に唯一勝ったことのある百戦錬磨のヴィライアーであった。それは、奇しくも有名な伝説で、そういった意味でも彼女は女王様であった。

ローソクが不規則にあちこち揺れている。戦闘の衝撃が、儚い炎を脅かしているのだ。

それだけに心配だった。

だって、光はそれしかないから。この光が消えてしまったら、いったいどうなるんだろう。

キクマサは、その三本のローソクを守ろうと、そろそろ床を這った。隣でシャルロ先輩にいびられている男の悲鳴が聞こえるが、それを無理矢理気にしないようにして。

その時、キクマサは何とも不思議な事に気がついた。

地面にうつる影の数が、我々三人の分しか無かったのだ。

「……？」

薄暗い部屋の中で、不可解にもローソクの周りには、半径一メート

ルほどの空間があった。ターバンと、口元を布で覆った男たちの顔なんて見えないけれど、とにかくローソクに近寄ろうとしていないのだ。

影もない。
ローソクの光に触れたがらない。

『……どういう事だ……？』

キクマサは、目の前で繰り広げられる逆集団リンチに目を伏せ、自分なりに状況を理解しようとしていた。
壁沿いに、自分の荷物の所へ行って、あるものを取り出した。

もしかしたら。
もしかしたら、あいつらは…。

「……あった！！」

彼がそれを取り出した時だった。そちらに集中しすぎて、自分がローソクの光の守備範囲から出ていることに気がつかなかったのだ。
後ろから、ターバンの男が剣を振り上げ、今にもキクマサに切りかかろうとしていた。

「新人！！！」
「キクマサ君！！！」

団長とシャルロ先輩の呼ぶ声で、とっさにキクマサは振り返り、振り落とされんとする剣にキツく目をつむった。

そして、先ほどカバンから取り出したものを前に掲げ、男に向かってスイッチを入れた。

どうか、自分の考えが正しくありますように。

男は“それ”を見て、目をかっと見開いたかと思ったら、

「ぎぃやあぁぁあ！！！！」

おぞましい悲鳴をあげた。

キクマサの持つそれは、“懐中電灯”である。

男は、“懐中電灯”の光を真正面からあび、サラサラと崩れだしたかと思ったら、驚いたことに砂となり果てた。

カランと、剣が目の前で落ちる。

「！！？」

団長もシャルロも、意味不明だったに違いない。

キクマサだけが、ホッと胸をなで下ろしたい気分で、手に持つ懐中電灯を見つめた。

奴らは人間ではないのだ。

それは、受け入れがたい事実ではあるが、そうとしか思えない。
残った男たちは、その状況に酷くおびえだした。
ガタガタ震えながら、

「……光だ…。厄災の再来だ…」

「……再び“ラーの使徒”が現れたのだ!!」

後ずさりながら、そんな事を口走っていた。
そして、残党は慌てて逃げ出した。

バタバタと、足音が遠ざかる中、三人は呆気にとられて立ち尽くした。
しばらくして、シャルロと団長はキクマサの方を向く。

「…なんかよく分からないけど…、結局あいつらって人間じゃなかったのね」

シャルロはそのまま、キクマサの足元の砂を見下ろした。
団長はキクマサから懐中電灯を取ると、

「…どうやって気づいた…」

視線は懐中電灯に集中させて、彼に問う。キクマサは一度深呼吸すると、

「…影が…無かったんです。…奴ら、ローソクに近づいてなかったから、もしかしたらって思って…」

いまだにザワザワする心を落ち着かせた。

団長は相変わらずのしかめっ面で、懐中電灯を無造作に返した。
そして、シャルロに向かって、
「おい、どうする」
「何が」
「何が、じゃねーよ。あいつら確実に俺たちを殺そうとしてたぜ」
「……」
シャルロは片側に髪を流しながら、何かを考えていた。
なぜ、我々を殺そうとしていたのか。
その時だ。
「…お見事です」
入り口に人が立っていたのに、今まで気づいていなかった。
「…アンケセナーメン…」
団長は、低くつぶやいた。目の前の女性を探るように見る。
声の主アンケセナーメンは、
「…先ほどの刺客を滅した光こそ、“ラーの使徒”の証…。あなた方は、再び我々の前に現れてくださった」

キクマサの持つ懐中電灯を見つめる表情は、切実なものだった。

「…再び…？」

シャルロが聞き返す。すると、アンケセナーメンの後ろから、金飾りのついた、青と金のストライプのかぶりものを身につけ、付け髭をつけた若い青年が現れた。

彼が現れた瞬間、見たこともないくせに、一人のファラオの名がよぎった。

「…先ほどの刺客は、“アテン神官団”の手の者。やはり、義母上は“ラーの使徒”を葬りたいらしい…。それに、この宮殿に刺客が入り込んでいる事も疑いようが無い」

若きファラオは、アンケセナーメンの前に出て、気を許さない我々に向き合った。

歴史の流れが、どうにかなってしまいそう。
こんな状況を素直に受け入れる事が出来たらそれこそおかしい。

「私は、ファラオ“ツタンカーメン”。よくぞ再び現れた。“ラーの使徒”よ…。この、呪われた時代を、どうかその光で照らしたまえ」

若きファラオが、絞り出すような声で我々に願ったのは、
呪われたこの時代の再生である。

この時はまだ分からなかったけど、二つの時代を導いたラーの使徒。

太陽神ラー。
アメン神。
アテン神。

信仰する神を一柱に絞る、一神教を唱えたファラオと、
そのせいで起こった混乱を、たった一人で背負った、若きファラオ。
それを支えた王妃。

信仰する神が違うだけで、しかし違うからこそ、呪いは色濃くなったのだ。

伝説では、“ラーの使徒”にしか、それを救えない。

我々が成すべき事とは、何だろうか。

この先起こる、悲惨な結末を知っていても、それを変えることすら許されないというのに。

―ｄｒａｗ

27：エジプトプラン10～宗教改革～

少年王ツタンカーメンと、その妻アンケセナーメンは時代に翻弄されながらも、正しい道を選ぼうとしていた

この時代背景を説明するならば、少年王ツタンカーメンによる統治の時代であった。

しかし、問題なのは前王アクエンアテンによる大規模な宗教改革である。

強大になりすぎた“アメン神官団”の力を押さえるために、アクエンアテンは一神教の“アテン信仰”以外を許さず、逆らう者は容赦なく罰した。

人々は王家と神官団の戦いに巻き込まれ、信仰の自由も奪われた。

アクエンアテン亡き今も、王家への恨みは大きく、反乱や争いは絶えない。

人々に受け入れられなかった“アテン信仰”の時代は短く、今や再び“アメン神官団”が力を得た。

この都のあるメンフィスには、アメン神官団が、前の都のあった、テル・エル・アマルナには、今や廃れたアテン神官団が存在していた。

しかし、アテン神官団は、再び力を取り戻そうと、反乱を画策しているとと噂される。

団長とシャルロとキクマサがこの地に現れ、3日がたった。

「ここまでは、俺達が習った歴史と変わりない…。前王アクエンアテンの宗教改革は、失敗に終わったわけだ。それの尻拭いをさせられたのが…今のファラオ“ツタンカーメン”だ」

団長とキクマサは、二人で用意された部屋にいた。エジプト風の白い衣服を着て、風通しの良い場所で、時代の説明をしてもらってい

た。団長は、この時代に早くも適応している。やはりただ者じゃない。

「…団長はもう、納得しているんですか？」

「……何が」

「だって、有り得ない事じゃないですか…。要するに俺たちは過去にタイムスリップしたわけでしょう…？　まさか、ルネ・ヴィライアーの研修って、こんなのばかりなんですか？」

あまりにキクマサが真面目に聞くものだから、団長は吹き出すと、

「まさか。こんなのがあってたまるかよ。でも、ヴィライアーの研修って、たまに変なことが起きるから、まぁ…無くもないんじゃね？　って感じ」

「……はぁ」

まぁ、実際いまだに驚きまくってるのはキクマサだけだったので、共感を求めていたわけではないが。

用意された朝食は、パンと水だった。

「…それにしても固―な」

団長は顔をしかめていたけれど。

キクマサは、

「シャルロ先輩はどうしてるでしょうね」

別の部屋にいる、シャルロを思い出す。団長は白々と無関心そうに、固いパンを頬張っている。

「寝てんじゃねーの…。どうでもいいよ、あんな女」

「……」

本当に仲悪いな。

キクマサは苦笑いした。しかし、仲が悪い理由を聞くことも出来ないので、ほおっておく。

「どの道、俺たちが現代に戻るには、この物語を終わらせなきゃならないんだよ」

団長は黒髪をかきあげながらそう言って、カツンとコップを机に置くと、立ち上がる。

最初は怖かった団長だが、怖いところ含めて、それに慣れてきたキクマサだった。

シャルロは自室で女性用の白い衣服を着て、大理石のテーブルと椅子に腰掛け、金の盆に盛られたブドウを摘みながら物思いにふけっていた。

さて、何がどうなっているのだろうか。

奴らは、“厄災の再来”と言った。ということは、過去にも私たちと同じ様に、未来から来た者がいたという事だろうか。

「…考え過ぎかしら」

ブルネットの巻き毛を手櫛で片側に流す。彼女の癖である。

持ってきていたコンパクトで、軽く容姿を整えると、唇に赤いルージュをひく。

過去のエジプトに行くなんて想定外だった。

嫌な予感がしたわけだ。スノーが「この研修は長くなる」と言っていたのを思い出す。彼は本当に敏感だ。

シャルロは一粒ブドウを摘むと、足を組み直した。

その時、不意にドアを叩く音がして、誰かが訪ねてきたようだ。

「…は―い…どうぞ―…」

何とも気の抜けた、やる気のない声で答えた。どうせ、団長にパシられたキクマサ君が呼びに来たのだろう。

しかし、

「入りますよ…」

入ってきたのは、キクマサではなく、まっすぐの黒髪を切りそろえた、アンケセナーメンであった。
シャルロは驚いて立ち上がる。

「…王妃…」

「お気になさらないで、シャルロ。…私はあなたに聞きたいことがあるのです…」

アンケセナーメンは、シャルロの前に立つと、彼女を見下ろし、微笑んだ。
シャルロも軽く笑い返すと、

「私でよろしかったら。」

胸元に手を当て、頭を下げた。

かつての歴史を、少なからずシャルロは知っていたが、決してそれを変えてはいけないことも、彼女は承知していた。

「…あなた方は、きっと未来から来た。そうでしょう…？」

「よくご存知で…。その通りですわ…」

シャルロは特に何て事なく答えた。
アンケセナーメンは顎に手を添えると、

「…今から約１０年ほど前になると思うのですが…私の父アクエンアテンの時代です。…私も、ファラオも幼かったころ、最初の“ラーの使徒”が現れたのです」

「……」

シャルロは、視線だけをアンケセナーメンに向けて、黙って聞いていた。

アンケセナーメンの華やかな首飾りが、シャランと音を立てる。

「…彼らもまた、未来から来たと言っていました。私はハッキリと覚えています。彼らは…私の父の成そうとしていたことに、真っ向から異を唱えたのです」

“アマルナ改革は失敗するだけでなく、あなたの一族ごと、呪われるでしょう”

彼は確かにそう言った。未来を知っていたから。

シャルロは、目を見開いた。

「かつても、未来から来た人がいたのですか？」

「えぇ…、勇敢な若者が二人…。彼らは反乱を起こした“ラーの神官団”と共にいたために、“ラーの使徒”と呼ばれていました」

アテン神以外の信仰を禁じた大規模な改革を、現代では“アマルナ改革”と言うが、そのせいで、他神を祭っていた神官団からの反乱があいついでいた。

かつて、ラーの神官団と共に現れたのが、今で言う“ラーの使徒”。

「…しかし、私は覚えているのです。あの方たちは正しい方に導こうとなさっていた。私の父は、その助言を聞き入れようとしていたのです…。しかし……」

アンケセナーメンは膝の上の拳を握りしめた。何かに憤りを感じているようで、シャルロもそれに気づいていた。

「……私の父アクエンアテンの正妻、ネフェルティティ様は…前王妃で、私の継母となるのですが…彼女はアマルナ改革をどうしても進めたかった」

ネフェルティティは王妃でありながら、ファラオと並ぶほどの権力をもっていた。宗教改革は加速し、逆らう者は容赦なく殺された。民の心は、離れていくばかりだった。

「あの時代を見てきたからこそ、私たちは時代を元に戻そうと、アメン神官団と手を組みました。しかし、いまだに民は王家を信用していませんし、アテン神官団の残党が、ネフェルティティ様と共にいます。あの方はきっと、あなた方“ラーの使徒”を何よりも恐れているでしょう」

朝日は、もうだいぶ昇って、相変わらず青い空には、ワシが羽ばたいている。薄いカーテンから、それが透けて見えた。
シャルロは一時黙って聞いていたが、ふいに口を開いた。

「…王妃様…。私達に望むことは何ですか…？」

それは、アンケセナーメンにとっては予想外の質問のようで、しかし、ダイレクトに要件を伝えるには、きっと望ましい質問であった。シャルロは腕を組んで、後には引き返せないなと、内心鼻で笑った。

アンケセナーメンは一度深く瞳を閉じると、何かを決意したように瞳を開け、

「……私は…ファラオを支えたい…。あの方は幼い頃より、ずっと周りに翻弄され、自分を殺して生きてきた…。今こそ、あの方の望む世界を築くとき…」

砂の悪霊を見たはず。あれは、人々の遺恨が生んだ、呪いの産物であった。

呪いは、まっすぐに王家に向いている。

「呪いを解かない限り、平和な世など有り得ない…。どうか…王家にかけられた呪いを解いて下さい」

呪いを予言したのが未来人なら、それを解くのも未来人である。

それは、いにしえの伝説であり、王妃はそれを信じていた。

アンケセナーメンは思い出す。１０年前に現れた“ラーの使徒”の言葉を。

美しい金の髪を風になびかせて、あの中庭で、私は女神を見た。

幼かった私には、あの人があまりに美しくて、女神かと思ったのだ。

“…きっと、闇を照らすのは光に違いないわ。いまに真実は分かるから。”

彼女はそう言って、中庭に咲く、小さな菊の花で、花輪を編んでくれた。

今でも中庭に行くと思い出す。
かつての二人の“ラーの使徒”

あなたたちが、今でも私とファラオの道しるべ。

若かった私達の支えだったから。

アンケセナーメンが去った部屋で、シャルロは窓際に佇みながら、見える景色に瞳を細めた。

呪いを解く事。
それすなわち、この物語を終えることならば、私達のするべき事は分かったじゃない。

「……」

シャルロは、王妃が部屋を去るとき、最後に一つ質問をした。

「…かつての“ラーの使徒”は、どうなったのですか…？」

彼女は、探るように、アンケセナーメンを見上げた。
王妃は少しだけ振り返って、視線を床に落とすと、

「…一人は、アテン神官団の者に殺され、一人は光の中に消えました。それ以外は知りません」

彼女は確かにそう言った。
この物語の中で死ぬと、どうなるのだろうか。

だって、みんなが無事でいられると、誰が保証してくれる？
誰が、それを示せる？

他のヴィライアーが、まだどこかにいるかもしれないのに。
確かな答えなんて、無いかもしれないのに。呪いを解く方法なんて
無いかもしれないのに。

シャルロはエジプトの街を見下ろして、その先の砂漠を睨んだ。
的は、古代エジプト。

私達が、
歴史を動かすことになるなんて。

draw

28：エジプトプラン11～砂漠～

砂漠とともに生きた民

太陽の怖さも恩恵も、全てを受け入れていた

「……あっっつ！！！」

一年生のクレハは、さっきまで鉄板焼の上で焼かれる夢を見ていたのじゃないかと思うくらい、激しく照りつける暑さで目が覚めた。

赤毛が、汗で頬に貼り付いている。

勢いよく起き上がったのは良いものの、目の前がものすごい熱気で、もわんもわんする。

「……もわんもわんする…」

クレハは視界を平然と見ていた。その、灼熱の砂漠を。

「何でこんなとこにいるかな…」

彼はピョンと立ち上がり、キョロキョロ辺りを見回す。

すると、所々に人らしき何かが、砂漠の砂を被りながら倒れていた。

「っひゃ―、こりゃまずい」

クレハは一番近かった人の側に駆け寄った。

アッシュブラウンの髪の男。きっとクレハから見たら、覚えの無い先輩。四年生のフレイ・レステヴァンであった。

「おーい」

クレハは、フレイの肩を揺さぶって、誰だかわからないくせに、

「寝たら死ぬぞ―!!」

必死に起こそうとした。間もなくフレイが険しい顔で起き上がった。

「…何だ…」

「砂漠に落ちたよ。先輩」

クレハはそういうと、ここからまた5メートル離れた所に倒れた人影に向かった。

フレイは「はぁ?」と頭をかいて、しかし目の前に映る広大な砂漠

も無視できずに。

クレハが見つけた人物は、これまた四年生のスノーフリーク・ロズベルトであった。

「……スノー！！！」

クレハは彼が誰だか分かると、驚いて名を呼んだ。
何度も肩を揺する。

「スノーもいるのか！？」

フレイも声を聞いて駆けつけた。

「てかスノーって…。おめー先輩に呼び捨ては無いだろ。流石に…」

「だってスノーはスノーだもん。俺の兄ちゃんだ」

「あぁ…兄ちゃんなんだ…」

フレイはしゃがみこんで、小刻みに頷いた。

「……」

俺の兄ちゃんだ。

「…っええ！！！」

ワンテンポ遅れた反応。ちょっと待て、ちょっと待て、ちょっと待て。

その時、タイミングよくスノーが目覚めた。
淡い髪についた砂が、サラサラ落ちる。

「……暑い」

起き上がっての第一声。

「おいスノー！！　この一年生、お前の弟なのか！？」

フレイは、ビシッとクレハを指差した。
起きて急に唐突な質問を投げかけられたスノーは、フレイを見上げて顔をしかめる。

「……何？……急に」

「だってこのガキがお前のこと、兄ちゃんって」

「そうだよ」

スノーは起き上がって、額の汗を拭った。どうやら暑いのが苦手なようだ。

「クレハはロズベルト家の養子なんだ。兄弟っていっても、血は繋がってないよ」

隣でクレハが頷いていた。
血がつながっていなくて当然だ、彼らは全然似ていないから。それ

でも流石のフレイもこれにはたまげた。

「初耳だぜ…。お前何にも言わなかったじゃないか…」

「……どうして？」

スノーは冷ややかにフレイを見た。その、見ていたらどこかへ行ってしまいそうになる瞳で。

「どうして君に言う必要があるの？」

「……」

彼は、余りの暑さにご機嫌斜めのようだった。
さっきいた所と違う場所にいることは、別に驚いちゃいないくせに、とにかく暑い事が嫌なのだ。あんぐりしているフレイから目をそらすと、スノーは少し先の何かに気づいた。

「それより…あれいいの？」

彼は無表情でそちらを指差す。
クレハもフレイも、一緒にそちらを向く。

「……彼女、ルネ・サファイヤじゃない？」

「……」

頭に白いカチューシャを付けた、肩までの黒髪。
三年生の、ジェイル・クオーシャンだった。

彼女は暑さにうなされながら、砂漠の真ん中でコロンと倒れていた。

ジェイルは、さっきまで焼けるように暑かったのに、急に、照りつける痛い暑さが遮断されたのを感じた。

何だろう。

額にヒヤッと、冷たいものがあたった気がした。

彼女はゆっくりと目を覚ました。

「あ！！　目ぇ覚めた！？」

「……」

目の前には、赤毛の少年が、目をくりくりさせてジェイルを伺っていた。

この子は確か、一年生のクレハ・ドルフォード。天井は岩のガタガタした壁。

ジェイルはゆっくり起き上がった。ぱさりと、濡れたタオルが地面に落ちる。

「よぉ……起きたか、ルネ・サファイア」

フレイは壁際に座っていたが、ジェイルが起きたのを見ると、立ち上がって近寄る。

「お前、砂漠の中で…」

「来るな!!!」

その時だった。

フレイが、ハッと足を止めてしまったほどの凛とした声。

ジェイルはフレイを睨み上げていた。

冷たい、拒絶の瞳で。

「私に近寄るな…っ。男なんて……」

男なんて。

フレイは少し驚いて固まっていたが、つい鼻で笑うと、

「そ―だった…。男嫌いで有名だったな…」

再び彼女に近寄った。ジェイルは立ち上がると、クレハの後ろに隠

れる。フレイを睨む瞳は相変わらずだった。

「…おい、その赤毛の小猿も男だぞ」

「……お前よりマシだ！！」

「……」

クレハは訳が分かっていない様子だった。
面切って話したのは初めてだと言うのに、えらく嫌われたものだ。

フレイは何故か、少し笑っていた。

「そこら辺にしときな……フレイ」

少し離れた岩壁にもたれて、だるそうに座っていたスノーが、やっと口を開く。

「ルネ・サファイアは男嫌いなんだから…」

「しょーがねーじゃねーか。ここには男しかいねーぞ」

スノーは相変わらず無表情だった。研修着の黒い上着を脱いで、白いワイシャツ姿だ。
視線をフレイからジェイルに移すと、

「…ルネ・サファイア、よく聞いて…。僕達はさっきまで、砂漠の真ん中に倒れていたんだ。…運良く近くに岩穴があったからよかったけど…」

ジェイルは、何だか緊張した面持ちで、スノーの話を聞いていた。
クレハが突然手を挙げる。ジェイルはビクッとした。

「はいは―い！！　ここはいったいどこなの？？」

重苦しい空気の中、彼の声だけ明るかった。
ピョンと立った寝癖が、相変わらず楽しげに揺れている。

スノーは淡々とした目で、

「…それは勿論エジプトさ…」

何かを悟ったように答えた。

「でもきっと…僕らの今までいたエジプトとは違うと思うよ」

「全く、女に振られたことのない俺様が、こんなに拒否られるとは…」

「……きっと君みたいな男…生理的に受け入れないんじゃない…？」

「……今サラッとひどい事言ったよな」

フレイはため息をついた。この岩穴に籠もってから、一体どれだけ時間がたっただろうか。

相変わらずジェイルは隅っこで防御張ってるし、クレハはリュックを抱き枕に寝てしまった。

だんだん日が暮れて、涼しくなってきた。

「なぁ……お前これ、どう思うよ」

「……何が？」

スノーは、何だか疲れきった表情である。こんな所へ来ただけで疲れるのはよくわかる。

「あのオッサン…まんまと俺達をはめたのかって聞いている」

「……まぁ、セティさんに悪意があるかどうかは分からないけどね…」

スノーは、半ばうつらうつらしながら、そのまま沈没していた。

「…ありえねぇ。寝やがった…」

フレイは、気になる言葉を残して寝てしまったスノーに、頬をヒクヒクさせたが、

『…まぁ、こいつにしちゃ起きてたほうか……』

諦めてうなだれた。

しかし、その時ピンときてジェイルの方を向いた。

ジェイルは相変わらず目を光らせていたが、急にフレイに振り替えられ、ビクッと反応する。それがどうにも小動物の様で面白い。

フレイはニヤリと笑うと、

「なぁ…何で男が嫌いなの？」

唐突に質問した。

しかし、ジェイルはしらっとした表情で視線を合わせようとしない。

まるで自分に聞かれてないように無視をしている。

「おいこら」

「うるさいだまれ」

ジェイルは余裕の無い口調だった。フレイは無性に吹き出すと、立ち上がり、背伸びをする。

そして、ポケットに手を突っ込んで、彼女に歩み寄った。

そこに転がっているクレハをまたごす。

「く、来るな！！」

「静かにしろ。坊やが寝てんだから。成長期のガキは寝かしてやんねぇと…。そうだろ？」

フレイはクレハに目配りをした。ジェイルは身を小さくして、フレイを睨んでいる。

「…お話しようぜ、お嬢さん。スノーも寝ちまって、お兄さん暇だからさ。……別に取って食ったりしないから」

フレイはジェイルの目の前でしゃがみ、彼女の視線の高さに合わせた。ジェイルは、“取って食う”というフレーズに青ざめたが、すぐに持ち直すと、

「お、お前と話す事なんて無い…」

ふいとそっぽ向いた。

「残念。もったいねぇなあ、可愛いのに男嫌いなんて」

フレイは意味深に、片口上げて笑うと、不意に彼女の髪に触れた。ジェイルは驚いて一時硬直してしまった。瞳を丸くさせて、彼をやっと見た。

もう、暗い夜が近づいている。

背筋が凍るようだった。

フレイにとってはこんなの、あらゆる女の子にしてきたよくあるパターンで、基本的に、自分が狙った獲物は逃がさないがモットーであったので。彼は彼女から目をそらさなかった。それも一つの必勝スキルである。

男嫌い男嫌いって言ったって、どの程度のものか確かめてみるか。

しかし、ジェイルは、スッと表情に影を落とすと、まるで夜の訪れのような冷たい瞳をフレイに向けた。
彼女もまた、彼から瞳をそらさなかった。

逃げなかった。

その瞳は印象的で、自分への拒絶を痛いくらいに感じる。
彼女は、彼の手を断固として振り払うのだ。

「私に触れるな…私に関わるな…」

声は凛としていて、ピンと張り詰めた緊張感の中で、嫌によく響いた。

「……お前、嫌いだ」

それは、まるでギリシャ神話のアルテミスのようで。
彼女は正に、何者にも壊せない、固い意志の強さがあった。

男嫌いのくせに、ひるみもしない。

むしろ、戸惑ったのは自分。

砂漠の真ん中で、これから起こる、長い時の旅の物語。

最初の彼らの関係なんて、

こんなものだった。

―ｄｒａｗ

29：エジプトプラン12～月の石～

月と星と砂だけの、幻想的な世界を、

旅をする、僕らはキャラバン

「でね、だからね、俺は言ってやったんだ。確かに俺はヘルより背が低いけど、ヘルより大きく見えるよって。何でだか分かる？　って。え？　だって、絶対みんな俺の方が背ー高いって思ってるって。うんでもね、実は健康診断したとき分かったんだけど、俺の方が二センチ小さかったわけ」

「……」

「あのね、でも俺の方が五センチは大きく見える。何でだか分かる？　あとね、体重は俺の方が重かったんだけど。だってあいつ筋肉ないもん。おぼっちゃんだからな。あ、それでね、えーっと、何話してたんだっけ」

「……なげえよ……そして激しくどうでもいい」

フレイがいよいよ突っ込んだ。
クレハが目覚めてからというもの、やたら長くて、要領の掴めない話を、延々と語りかけてくる。
しかし、聞いていなかったと思っていたスノーが、淡々と、

「……何で背が高く見えるのかって話……」

崖の壁にもたれかかって座ったまま、ポツリと呟いた。
クレハは人差し指を立て、「そうそう！！」と頷く。こういうとき、流石兄弟だなと思う。

「それはね、何でだか俺にも分からないんだ」

フレイはあぐらをかいたまま、後ろにずっ転んだ。
どうしようこいつ、激しく会話の繋がらないタイプだ。
なぜかクレハが持って来ていたランタンを、中心において。
スノーは一時して、

「……きっと、君の態度が大きいからだよ」

ぼんやりした瞳で、淡いランタンの光を見ていた。
クレハは、

「……へ～……そっか～」

と。
本当にこいつ、分かってんのか、と。
フレイは大きくため息をついた。目の前の黄土色の小石を手に取ると、軽くスノーに投げつける。
スノーは、ものすっごく「何こいつ」みたいな顔をしていた。いつもの事だ。

ここにきて、どのくらい経ったのだろうか。時計の時間なんてあてにならないし、もう深い夜だというのに。
自分たちはここから動けないでいる。

ジェイルは、端っこで小さくなって気を張っていたが、かなりお疲れの様だった。

「……ルネ・サファイア……少し寝なよ。僕がフレイを見ておいてあげるから」

スノーはジェイルの様子に気がついていた。彼女は何も答えずにいた。
フレイは心外だというように。

「おい。どういう事だよ。まるで俺をケダモノのように」

「……違うのかい？」

平然と、冷たい深い瞳を向けられるスノーは、相変わらずのローテンションである。

それは、昼間の暑さが嘘みたいな、夜の涼しい風が吹いた時だった。
クレハがハッと顔を上げたのだ。

「……どうしたの……クレハ……」

スノーが顔をしかめた。
船をこいでいたフレイも、首を回して目を冴えさせていた。

「何かここに来てるよ」

「……は？」

フレイは寝ぼけまぶたで反応する。
クレハは立ち上がると、洞窟の入り口の、その向こうを見た。目を凝らして。

彼は目をぱちぱちさせると、急に表情を明るくさせた。

「すげー！！　ラクダだぁ！！」

砂の中を、いくつかの黒い人影。そしてラクダの影。
こちらの洞窟に向かって来ているようだ。

「うわ……どうする？」

「どうするもこうするも……」

スノーとフレイは、お互い苦笑いで、その人影を見ているしか無かった。

人が来た事は幸い。でもそいつらが良い奴らかどうか分からないし。
でもそんな事言ってたら何も変わらないし。
ていうかその前にランタンの光のせいで、もうとっくに手遅れっていうか。

色々複雑な状況で、頭がショートしそうだ。
しかし、複雑な思いなど持ち合わせていないクレハは、

「おーい、おーい！！！　ここだよー！！」

なんと洞窟から飛び出して、その人影に向かって叫んだのでした。

アーメン。

「おじいちゃん、あちらから光が見えるよ」

「…ほう。人がいるのかの…」

十にも満たない少年が、ラクダの上から淡い光を見つけた。
少年の掴まっている老人は、白い眉毛を動かす。

砂漠の真ん中を渡るキャラバン商隊。
列をなすラクダ。

老人の前のラクダに乗った男が、怪訝そうに、

「あちらには確か、休憩所の洞穴があったはず。…まさか盗賊では…」

「それもありうるのう…。砂に隠れて、夜に紛れるのじゃ。出来るだけ気づかれないように…」

その時だった。
少年は、砂の間から、風に乗って聞こえる声に気がついた。

「おじいちゃん…人が呼んでるよ」

「…なんじゃて…」

少年は指をさした。
その方向から聞こえる声は、紛れもなく我々を呼んでいた。
キャラバンはそこで、ラクダを止めたのだった。

「スノー！！！　人だよ！！！　俺たち助かるんだ！！！」
クレハは顔をキラキラ輝かせながら、洞窟に飛び込んで来た。
「……よく言うよな、別に心配してもなかったくせに」
フレイは立ち上がると、ジェイルに向かって、
「おい、起きろ。人が来るぞ」
さりげなく言ったつもりだが、彼女は眠りながらにして耳を抑えた。
「おい」

「君の声じゃ起きない。えらく嫌われちゃったもんだね……。いいじゃない、まだ寝かせてあげようよ……」

スノーは、ムカッときているフレイに向かって、淡々と事態を分析。
ジェイルは険しい顔で身を小さくさせた。

「……ふ、ふん……。まあいい。後でたっぷり嫌がらせしてやる」

「……君が言うと、何だかなあ……」

ちゃっかりショックを受けているフレイは、強がってかっこつけるが、やはり心穏やかではなかった。
スノーは、白けてしまっている。

そんなやりとりの中、洞窟の入り口から、数人の男達が現れた。無地のマントと、ターバンの男達。
彼らは、クレハに導かれ、この場所にやってきた。我々をもの珍しそうに見ている。

「……見た事の無い風貌じゃのう……。若いの……」

杖をついた老人が、男達の中から一歩踏み出した。
老人の足下には、小さな子供がピッタリついている。

クレハは口を丸くさせると、

「俺たち、いきなり砂漠に落ちたんだ。おじいさん達、ここどこか分かる？」

「……は？」

男達は意味不明というように顔を見合わせていた。
老人はぴくりと眉毛を動かす。

スノーは頭を抱えてクレハを横にやると、

「いきなり失礼しました……。僕たちは先ほどまで、ここことは違う世界に居たのですが、いきなりこのような所に来てしまったのです。……信じられないとは思いますが……何かご存じないでしょうか」

「……ほう」

老人は肩眉を上げて、奥から見える瞳をこらす。
彼らヴィライアーの風貌、出で立ちを、しっかり目に焼き付けている。

そして、ゆっくり頷いた。

「違う世界から来たとは……これも何かのご縁」

何やら老人は疑っていない様子で、不思議と彼らを受け入れている。
しわがれた声は落ち着いたもので、彼らを安心させるように優しい。

「わしはかつて、他にも違う世界から来た者と会った事がある……。力になれる事があれば、言ってくだされ」

ゆっくり、固くなったその厚い手を、スノーに差し出した。

彼らは砂漠を渡る商人、キャラバンの商隊で、あらゆる町の品物を運んで旅をしていた。
老人の名はカーロン。少年の名を、タハールと言った。

ぱちぱち、焚き火のはじける音がする。
キャラバンの一行と、我々だけが、その火を囲んでいた。洞窟の壁に、いくつもの影が大きくのびている。

端っこで、タハールとクレハが遊んでいた。
老人は、そんなタハールを見ながら、

「……あれは、１０年前の事でした。あの子、タハールは父の名を受け継いでいるのですが……あの子の父が、未来から来た者と出会ったのです。それは、運命だったのでしょう」

あの時代は、混沌とした不安定な時代。
アクエンアテン王は自らの力を絶対的な物とするため、宗教改革を行った。

民の愛した神々が、ことごとく消されていく。

像や神殿は壊され、逆らう者は容赦なく殺された。

それは、民の悲しみか、神の怒りかは分からないけれど。

「……当時、よからぬ災いが相次ぎましての……。ちょうど、“セト神”の神殿が壊された後だったので、皆“セト神の呪い”と言っておりました。いやはや、思い出したくないものです……酷い時代でしたから」

子供達二人の笑い声とは裏腹に、こちらは老人の話に息を飲んだ。

「酷い時代……？」

フレイは眉根を寄せた。
スノーは淡々と、黙ってたき火の揺れる光を見ていた。

「……王家による宗教改革で、当時はアテン神以外の神を崇める者が弾圧を受けていたのです」

老人は、どこか遠くを見ていた。
忌まわしきあの時代を、思い返すかのように。

クレハは、タハールの相手をしていた。対等に遊べるのだから、ある意味凄いけれど。

「あのね、お兄ちゃんに僕の宝物を見せてあげる」

タハールは、クレハに耳打ちをした。
何だかとても無邪気な笑顔だ。

「へえ、なになに??」

「あのね、本当は誰にも見せちゃいけないんだけど、お兄ちゃんは特別」

タハールが懐から取り出したのは古い小袋で、茶色く、かなり古いものだ。
彼は袋を開け、その小さな手の上に、何かを取り出す。

「……え……」

クレハは目を大きくさせた。
その輝かしい、黄色い宝石に。

どこかで見た事がある気がする。知っている気がする。
タハールは、再びクレハに耳打ちをした。

「これはね、父さんの形見なんだ。お守りなんだって」

月のように、黄色くて丸い宝石。金の飾りの中で、時を経てもなお美しい。

知っていて当然だった。
見た事があって、当然だった。

だって、それはルネ・トパーズの称号。

紛れもなくヴィライアーのペンダントだったのだから。

十年前の物語と、今の物語。
砂の王国に消えた、空白の時間。

繋ぐ事ができなければ、結末は訪れないよ。

l
d
r
a
w

30：魔術師の予言

鍵を閉めて、扉の向こうに閉まった物って、いったいなんだったのだろう。

誰がそんな事をしたのだろう。

「パリス……どうやら絵画科のヴィライアーが扉を開けたようだ……」

「……そうですか……」

黒いローブを羽織った青年が、錆び付いた鍵を手に、アンデスの山

の、切り立った崖から夕焼けを見ていた。

彼は、パリス・ヴァレリー。
彫刻科ヴィライアーの団長であった。

「古きインカの歴史を握る“入り口の鍵”を手に入れるために、僕らはあえて、エジプトを絵画科に任せました…。エジプトの入り口の鍵は、すでに持っていましたからね…」

パリスはローブを翻して立ち上がった。
アプリコットブラウンの髪が、夕焼けのオレンジを受けて、なおさら燃えているようだ。

彼は手に持つ古くさい鍵を見つめた。

「世界の歴史を司る鍵…入り口の鍵を見つけるのは難しい…。でも、出口の鍵を見つけるのは、違うように難しい…」

「……それでも我々は、鍵を探し続けなければならない…」

彫刻科副団長の、ロードルーン・アイスキネスが、パリスの側で、彼の行動を待っていた。

「そうです、ルーン…。出口の鍵は、その歴史の中にしか存在しない…。それを全て集めることが、僕らの使命…」

彼は振り返った。いつの間にか、音もなく全員の彫刻科ヴィライアーが、彼の元に集っていた。

八つの、茶色いローブ。

不思議な風が、彼らを取り巻いている。

その中の一人が、顔を上げた。

「パリスさん…、鍵は見つかりましたが扉は出てきませんね…」

「まだ、時期じゃないって事だよ…シャトー。時が満ちたら、扉は現れる…」

まだ、あどけなさの残る少年は、小さく微笑み頷く。

二年生のシャトー・オークラン（ルネ・ウッドロッド）であった。

「でもよ、絵ばっか描いてる絵画科のお坊ちゃんたちに、エジプト攻略なんて大仕事が務まるとは思えない…。どうなんですか？　パリスさん」

三白眼の男が、パリスを探るように見る。彼は四年生のアルマ・カイザード（ルネ・アイアンロッド）。腕を組んで、不機嫌そうな表情だ。

「あっはは。アルマ兄さんってば、エジプトに行く気満々だったもんね。拗ねてるんだ」

背が低く、太っていておかっぱの少女がお腹を抱えて笑っていた。

彼女は三年生のブリジット・バルーン（ルネ・スチールロッド）。

「止めなよ、ブリジット姉さん。アルマ兄さんはすぐ怒るんだから」

「おい…ブリジットもシャトーも、後で覚えてろよ…」

アルマは苦笑いで肩を震わしながら、三白眼をさらに釣り上げる。
二人は口を押さえて黙る。
パリスはクスクス笑いながら、

「大丈夫だよ…絵画科の人たちって意外に凄いんだから」

他のヴィライアーに笑いかける。
彼の後ろで、夕日が今にも沈みそうだ。

「お言葉ですが、パリスさん…彼らはただの人間です…。美術能力は優れているとは思いますが…しかし…」

「……そうだね。確かにフィルの言う通り、彼らは普通の人間だ。何も知らないし、“イマジン・ヒストリア”を攻略するのに時間もかかるだろう。僕らとは違う。……でもね、違うからこそ、僕らには紡げないエピソードがあるでしょう…？」

パリスは、目の前の青年、四年生のフィル・レグール（ルネ・ブロンズロッド）に語りかける。その瞬間の精霊の風に、フィルは銀の細い髪をなびかせ、ゆっくり頷く。

「……ええ。何か、お考えの事とは思っていました……」

すると、フィルの隣に居たアルマが、腕を頭の後ろに組んで、

「ま、普通の奴らって言ったって、変人だらけだけどな」

「……僕らがそんな事、言えないと思うんだけど……アルマ兄さん」

シャトーは視線を斜め下に流し、溜め息混じりに言った。
今までずっと黙っていた、五年生のエマ・ベリル（ルネ・プラチナロッド）は、茶色い肩までの髪を風に委ね、疑念の瞳でパリスを見る。

「……そんな、甘い事でいいのか、パリス……。これであいつらが帰ってこなかったらどうする……。私たちには時間がないと言うのに……」

「……エマ……」

彼女の瞳は鋭く、声は厳かだった。彼女はこの中で誰よりパリスに手厳しい。
ルーンはそんな彼女に眉根を潜めたが、パリスは口元に手を当てると、

「確かに、君が焦るのも無理は無い……僕ら五年生は今年で卒業だから……。そんなに心配なら、君の得意な占いで、彼らの未来を読みなよ、エマ。僕は彼らを信じているよ……」

「……」

彼女は相変わらず、パリスを探るように見ていた。

雲の流れが速い。
星がいくつか姿を見せ始めた。

エマは、いつの間にか、手に一枚のタロットカードを持っていた。
彼女はそのカードを見て、クスリと笑うと、その表をパリスの方向に向ける。

「……なるほど、“審判”のカード……。」

彼は瞳を細めた。

「このカードは、復活・変化・結果を意味する……絵画科が古代エジプトに行く事で、確実に何かが変わる。お前はこれを狙っていたのだろう……パリス……」

「……それはどうだか……僕に未来を読む力は無い。それは君の仕事だろう……エマ」

「……」

二人の探り合いは、この悠久の大地と、神秘的な風を呼んだ。

エマは鼻で笑うと、カードを一度見て。

「まあいい……腹黒いお前の事だ……先の事まで計算し尽くしているのだろう……？　これ以上は聞かないでおいてやる」

「……ありがとう、エマ。君のそういう所、凄く好きだよ」

パリスはニッコリ笑うと、再び空を仰いだ。

彫刻科ヴィライアー。

六大科の中で、最も歴史が古く、謎の多い科。彫刻科のヴィライア

ーが、それぞれのヴィライアーの称号であるペンダントを創ったと言われている。

彼らは、かつてインカ帝国のあったと語られる、アンデスの地に居た。彼らもまた、ヴィライアーの研修としてやって来たのだ。

パリスはクスクス笑うと、今にも沈みそうな夕日を振り返り、前から吹く向かい風に、ゆっくり瞳を閉じた。
風の匂い、その歴史、精霊の声を、全身で感じ取るように。

「世界に点在する鍵を、全て集めてしまわないとね……“夜”が奪いにくる前に……」

彼は風の中に消えそうな声で、そう呟いた。

鍵の力の、本当の意味を知る者。
それは僕らだけではないから。

ヴィライアー全員が、パリスと同じように、いずれ来る暗闇を睨んでいた。
彼らのローブが翻る。

風が、大地の精霊が、まるで彼らと共にあるように。

ふと、今まで黙りこくっていた、一年生のスカーレット・マリーニが顔をしかめた。

その表情に、パリスはすぐに気がつく。

「……どうかしたかい……？　スカーレット……」

彼女は、雪のように白く、長い髪を抑え、風に耳を澄ませる。
その声を、聞き逃さないように。

「……ヴィンセント先生が呼んでる……そろそろ戻らなければ……」

彼女は淡々とした声でそう言った。
視線だけパリスに向ける。

「……そうですか……研修とはいえ、あまりゆっくりしていられない……。絵画科のエジプト攻略も気がかりですし。僕らも、他の鍵を探しに行かなければ……」

パリスは意味深に視線を流し、訪れた暗闇を一瞥した。

その瞬間の、強い風。

彼らは、音も無くその場から消えた。

まるでもともと、そこには居なかったかのように。

彫刻科ヴィライアー。

いずれ、絵画科と深い繋がりのできる者達。
真実に、最も近い者達。

歴史を、封印しなければいけなかった者達の、その意志を継ぎ、

それを創った業として、“鍵”の結末を求められた者達。

鍵をかけてまで、扉の向こうに封印したものって、いったいなんなのだろう。

それを知った時、どうなってしまうのだろう。

ｌｄｒａｗ

＊ｄｒａｗコラム～二年生～

～二年生～

Ｎｏ．１
オノダ・キクマサ（小野田　菊正）

＊ルネ・アメジスト
＊日本人

特徴／茶髪の外ハネ　。割とあか抜けた感じ。
性格／クールそうにしているが、案外天然。頭が理系脳なため、物覚えが悪い。小学生のころ、野球をしていたため、運動神経は良いほう。元不良だが、今ではすっかり丸くなった。
絵画の特徴／基礎がしっかりしているため、バランスがよい。母親譲りのセンスと潜在能力があるが、何しろまだまだ経験不足である。

＞同級生から見たキクマサ君＜

フォルテ
「…あ～…、いいかげん俺の名字覚えて」

ルナシー
「…ちゃんと男の子」

レイ
「意外と真面目」

No. 2
ルナシー・ミディエム

＊ルネ・トパーズ
＊ギリシャ人

特徴／金髪巻き毛。瞳が大きくておとぎ話のお姫様系
性格／普段は、みんなのイメージ通り、可愛らしく振る舞っているが、心の中では計算高い思考をする。人間観察が密かな趣味。自分でもその性格を自覚している。かなり美人だが、本人はそこに、あまり価値を置いていないようだ。
絵画の特徴／点画の要領で、前後感を出す遠近法を得意とする。淡い色使いを好み、高い評価を得ているが、技術があるだけに、時として自分の殻を破る表現を求められる。

＞同級生から見たルナシーさん＜

キクマサ

「…学年のマドンナ」

フォルテ
「…あ～…その…やっぱりルナシーと言えば、ヨーロッパのお姫様的イメージ」

レイ
「私の天使」

No. 3
フォルテ・ゴッドバルト

＊ルネ・クリスタル
＊ベルギー人

特徴／イエローオーカーの髪をバンダナで上げている。長身。性格／明るく、お調子者のように振る舞っているが、実はかなり思慮深い。父親が考古学者で、本人もかなり頭が良い。見た目の割にインドア派で、運動は得意ではない。ルネ・テクタイトにこだわる。絵画の特徴／物知りで賢いため、発想力がある。応用的な技術を数

多く知っているが、基礎がなおざりになる傾向がある。厚塗りで、マットな表現を好む。

＜同級生から見たフォルテ君＞

キクマサ
「寝起きが最悪」

ルナシー
「…いつも鉛筆削ってる気がする」

レイ
「考古学オタク」

No. 4
レイデル・リローズ

＊ルネ・ペトリファイウッド
＊ベルギー人

特徴／黒髪のショートカット。猫目だが、右目を失明。眼帯をつけている。
性格／気が強く、明るく元気。第二学年きっての天才である。多少感情的な所があり、その点でルナシーとは正反対である。自分に正直で、一途。
絵画の特徴／とにかく、絵作りにおいて、ずば抜けたセンスがある。構成力があり、高い技術力もある。片目を失ったことで、今後どのような絵を描くのか注目されている。

＜同級生から見たレイさん＞

キクマサ
「何て言ったって、構成の申し子」

ルナシー
「…典型的Ｂ型」

フォルテ
「……小さい頃からストーカー」

～二年生のまとめ～
他の学年に比べて、これでも多少おとなしい方だ。
ただ、絵画においては粒ぞろいで、向上心がある。４人の結束は固いが、まだお互いにわかっていない部分も多い。
全然ヒヨっ子な学年。先輩たちに、いい影響を受けることを期待す

る。

次回のコラムは＜五年生＞です。

ｌｄｒａｗ

＊ｄｒａｗコラム～五年生～

～五年生～

Ｎｏ．１

ハク・リュオン

＊ルネ・テクタイト
＊絵画科ルネ・ヴィライアー団長
＊中国人

特徴／黒髪に、切れ長のつり目。常にしかめっ面。
性格／荒々しくて、非常に男らしい。俺様主義だが、何気にヴィライアーの事ばかり考えている心配性。なんだかんだ言って、みんな団長はこの人しかいないと思っている。かわいそうなくらい、運がない。実は中国マフィアの跡取りで、ティアンは幼い頃からの友人。
絵画の特徴／中国人のたしなみとして、水墨画もかなりの腕だが、本人は油絵の方に力を入れている。主にモノトーンを基調とした、白と黒の調和を巧く表した、割と完成度の高い絵を描く。昔は色鮮やかな絵も描いていたが、最近また、水墨画の要素を取り入れた、新たな表現を探っている。

＜同級生から見た団長＞

レッド
「……結構すぐ落ち込むよね（笑）」

ナギ
「メルベリーには優しいくせに、私には全然優しくないんですけど」

メルベリー
「最初は怖そうな人だと思ってましたけど、実は真面目で、しっかりした方だと思います」

ティアン
「君、小さい頃大切にしてたトーマスのおもちゃ…あれ僕が壊した事まだ根に持ってんの？」

「何それ!!　初耳なんですけど!!!!（一同爆笑）」

No. 2

メルベリー・セレネーム

＊ルネ・パール

＊絵画科ルネ・ヴィライアー副団長
＊イギリス人

特徴／プラチナブロンドの長い髪。清楚で、おしとやか。良家のお嬢様と言った感じ。
性格／出で立ちがまさしくお嬢様で、ヴィライアーの中でも高嶺の花である。優しくて、気が利いて、申し分の無い完璧な女性。基本的に団長を立て、自分は雑務をこなす事にしている。突っ走る団長のオアシス的存在で、彼女もまた、自分はそうあるべきだと思っている。時に鋭い意見を言うので、団長は彼女に一目置いている。
絵画の特徴／精密画を好み、こつこつ時間をかけて、レベルの高い絵を描き上げる。時に、社会に対するメッセージ性のある絵を描き、そう言う物に関心があると思われる。被写体の向こう側を、じっくり見る目があり、彼女の描く絵は良い意味でのリアル感がある。

＜同級生から見たメルベリーさん＞

レッド
「うわー、メルベリー嬢には変な事言えないなー。とにかく美しい、これに限るでしょう」

ナギ
「全てにおいて、白い！！」

団長
「良い女」

ティアン
「ぶっちゃけ、僕ら、いとこ同士だから」

No. 3

ティアン・レーゼス

＊ルネ・ターコイズ
＊イギリス人

特徴／眼鏡の優等生スタイル。基本的に腹黒そうな微笑み。
性格／実際、ヴィライアーの活動、行動はこいつが握っていると言っても過言ではない。リュオンの幼い頃からの補佐役で、リュオンもこいつには逆らえない所がある。眼鏡で、良いとこの息子さんと言った所だが、毒舌で、目的のためなら犯罪すれすれの所まで手段は選ばない。ただ、全てはリュオンと自分の会社のためである。メルベリーとは従兄弟。
絵画の特徴／実際、リュオンのために入学し、ヴィライアーになったため、元々絵が好きだった訳ではない。ただ、その分、ここまでくるのに、見えない所で非常に努力してきた。最近はもっぱら絵を描かずに、パソコンでグラフィックの作品を作る方が楽しいようだ。こちらで才能が開花し、賞も貰っている。

＜同級生から見たティアン＞

レッド

「……実際、ヴィライアーを支配しているのは彼だと思います☆」

団長
「……」（今までの記憶が脳裏をよぎり、言葉にならない様子）

メルベリー
「頼れるいとこです。私が困っていたら、すぐに助けてくれます」

ナギ
「底知れない…いかがわしさを感じるけど、こいつのおかげでヴィライアーがうまく機能しているのは事実」

No. 4

レッドリー・ヘッドバーン

＊ルネ・ルビー
＊国籍ギリシャ
＊絵画科男子寮長

特徴／赤みがかった、淡い栗色の髪。良い意味で庶民派のイケメン。
性格／父親がイギリス人。母親がギリシャ人であるが、物心ついた頃身は、両親は亡くなっていたので、記憶が無い。年の離れた姉が彼を育てたくれたが、今度はその姉が、末期のガンに冒されている。幼い頃から貧しい生活をしてきたが、その分、人の気持ちがよくわ

かり、慕われている。ナギとは親しい仲だが、男女の関係ではない様子。人間味のある、粋な性格だが、非常に寂しがりや。
絵画の特徴／五年生きっての天才で、彼は既に、注目を浴びている画家である。人物画を得意とし、彼の絵画は独特のノスタルジーを感じさせる。幼い頃から英才教育を受けていた訳では無いが、とある画家に見込まれ、絵画を学んだ。現在教員免許の取得に励み、卒業したら、ルネ・ヴィルトンの教師になるつもりである。

＜同級生から見たレッド寮長＞

ナギ
「ものすっごいマメ男。たまに部屋を片付けてくれるから、助かるわ。旦那にするにはもってこいのタイプよ」

団長
「のーてんき野郎。うっとおしい」

メルベリー
「…人望もあって、優しくて、素敵な方だと思います」

ティアン
「君のせいで、男子寮に変なお祭りできたじゃん？　あれ、経費食うからやめてもらえる？」

Ｎｏ．５

サイオンジ・ナギ（西園寺　凪）

＊ルネ・ダイアモンド

＊日本人

特徴／ストレートの黒髪。普段は結っている。大和撫子で、部屋着は着物。

性格／片付けが非常に苦手で、見た目の割に大雑把で、面倒くさがり。さっぱりした性格だが、多少ミーハー。同じ日本人であるキクマサをかわいがっている。レッドとは気の合うマブダチで、よく一緒にいるので、付き合っているのではないかと学校では噂になる事もある。家は日本でも有名な神社。

絵画の特徴／日本画おたくの理事長に頼まれ、推薦で入学したため、数少ない日本画専攻の学生。彼女の描く花鳥風月は見事で、油絵とは違う趣がある。ヨーロッパには熱心な日本画マニアが少なくないので、彼女のファンはすでに多い。日本画は時に、ヨーロッパの方が、高い価値をつけられる事がある。

＜同級生から見たナギさん＞

レッド

「あんな部屋見たら…誰もお嫁に貰ってくれないよ…」（遠い目）

団長

「日本人のくせに不器用きわまりない女」

メルベリー

「…ナギは私の憧れです」

ティアン
「……この前ファンの御曹司に求婚されたって本当？　そいつも見る目無いよね（笑）」

『……ひでぇ…；』（一同）

～五年生のまとめ～

基本的に、全員付き合いは長いため、お互いの事はよく分かっている。しかし、五人で活動する事は少なく、割と個人プレイ派が多い。最上学年なだけあって、大人びているため、やはり絵画科の憧れの的である。五人の間に今の所恋愛的発展は無く（個人の心の内は別として）、かといってヴィライアー以外の人と付き合っていたと言うような話も無い。一人一人の力は凄く、最上学年として人の上に立つ能力を持った人間が多いため、今回のヴィライアーは歴代でも例のない可能性を秘めている。

＜おまけ＞

「五年生を童話に例えるなら」

団長：泣いた赤鬼（鬼のくせに、意外と友達とか好き）

レッド：フランダースの犬（リアルフランダースの犬。最後、死なずに画家に拾われたネロ）

メルベリー：小公女（どこまでも優しく清らかな、無私の精神）

ナギ：かぐや姫（周りを振り回したあげく、帰っちゃった所）

ティアン：金の斧（最後はちゃっかり、おいしい所全部持って行きますよ）

次回のコラムは＜四年生＞です。

l
d
r
a
w

31：エジプトプラン13～歪み～

天秤を釣り合わせるためにこの世界に残された僕達

きっと、君たちが帰ってくる扉を見つけてみせる

「これはいったいどういう事ですか！！　レッド先輩！！！」

「お、お、おちつくんだシーダ君。そして、何で俺？」

シーダは、レッドの胸ぐらを掴んで、前後に大きく振っていた。レッドは後輩に吊るし上げられて、青ざめている。

今、ここには9人しかいない。
ヴィライアーは全部で18人だと言うのに。
それにしても、ここはどこだ。
激しい光の中で、あの扉が開いた時、僕らがの見たもの。
彼らは今、先ほどとは違う場所にいた。とても似ているけれど。
「ここは王家の谷なのだろうか……」
リオは額を抑えるようにして立ち上がると、周りを見渡した。
石造りの神殿のようにも、王墓のようにも見える。
「確かな事は、ここには先生もセティさんもいない。メンバーだって半分しかいないってことだ。どうやら、さっきの場所とは違うようだよ」
五年生のティアンは、眼鏡を押し上げ、なんて事なさそうに涼しい顔だ。レッドは「えっ……」と苦笑いをして、
「まさか異次元に来たとかそんな……」
人差し指を立て、冗談まじりで言うものの、心配そうに青ざめている。
「それは分からないけれど、別の所に移動したのは確かだよ、レッド。もしかしたら異次元かもしれない」
「君誰？　超現実主義人間のティアン君がそんな事言うなんて。遊び心に目覚めた？」

レッドは少しのけぞって、得体のしれない生物でも見る目でティアンを見た。
ティアンは眼鏡を光らせる。

「しかし、ここが先ほどの場所と違うというなら、残りのヴィライアーはいったいどこへ？」

メルベリーは口元に手をあて、伏し目がちに疑問を述べる。
ナギも、腰に手をあて、暗がりで不確かな周囲の様子にいささか穏やかでない。

「そうよ。それに私たち、いったいこれからどうすればいいの？分からない事だらけだわ」

「……」

ティアンは眼鏡を押し上げると、さっきから黙ったまま、何かを考え込んでいるカイの方を見た。

「だんまりかい？　カイ・ヴォストン、国際鑑定士の君なら何か分かるんじゃないの？」

「俺は考古学者ではありません。この手の話には詳しくない……むしろ、ゴットバルト教授の息子である、フォルテ・ゴットバルトの方が近しいと思います、ティアン先輩」

カイは慌てて首を振った。しかし、最後に少し視線をそらしたのが気になったけれど。
ティアンは頭をかくと、

「その頼みの綱のゴットバルトがここにはいないだろ。頼りになるのは君くらいなんだ、頼むよ？　後は凡人ばっかりだし」

はあ～、とオーバーに憂いを込めたため息をつく。他のメンバーがイラッときたのは言うまでもないが、それを誰も言う事が出来ない。

「……ただ、これは美術品の魔力である可能性が高いと思います……。絵画にも、イマジン・ストーリーと言うのがあるように、美術品、文化品、遺跡、遺産には、何らかの力が働く事があるんです」

カイは思いの外の事を口にしながらも、はっきりと確信めいた口調であった。
それでもまだ何か、大切な事は言わないまま。

ティアンは吹き出すように笑う。

「なにそれ、オカルト？」

「…信じるか信じないかは自由ですよ。でも、実際にみんな消えてしまったんです」

カイは視線を逸らすと、ここにいない残りのメンバーの事を考えた。
彼には分かっていたから。

あの鍵の意味も。
歴史の扉だって。

リオは会話の区切りを見て息をつくと、状況の打開策として一提案

する。

「とにかく、残りのメンバーを探しに行こうよ。ここに居たって何も解決しないよ」

「そ、そうね……。さすがリオだわ」

シーダは彼を見上げ、何度も頷いた。

「ここにリュオンが居ない今、リーダーはレッドになってもらおうか……。仮にも寮長だ。いいだろう？」

「な、なに！？　ティアン、君じゃなくて！？」

「僕はリーダーっていうガラじゃないよ。サポートの方が向いてるのさ」

レッドはティアンの言葉に驚き、肩からずり落ちるジャケットを戻した。そうですね。影の支配者ですもんね、と言わんばかりに。眼鏡の奥で光る、その怪しい瞳が、いつも以上に怖く感じるのは俺だけじゃないはず。

だって、団長ですら彼には頭が上がらないのだから。

「そ、そうかい……。君がそういうのなら、ここは俺に任せたまえ……」

レッドは苦笑いで決意表明。力なく拳を握る。

シーダが小声で、「レッド先輩頑張れ」と言ったのが、やけに空しく聞こえた。

ここはまるで、永遠と続く迷路のようだ。
出口の無い、閉ざされた世界に迷い込んだ。

カイは、一同の歩く少し後ろについて行きながら、険しい顔で物思いにふけっていた。

これはあの鍵の能力。
あの鍵こそが、全ての美術品の根源であり、真実であると。

我々、鑑定士にとって、最も崇高なる美術品。

この情報は、ここに居るものたちに言う事は出来ない。むやみに存在を明かしていい代物ではないのだ。

あれが本物なら大事だ。
きっと、ここに居ない人たちは、その能力によって扉の向こうの世界に行ってしまったに違いない。

イマジン・ヒストリアの世界に。

我々はきっとその物語に入れなかった。

登場人物は人数制限があるから。

ならば、ここはどこだ？

「何を考えてる？　カイ……」

「ティアン先輩……いえ……」

カイは探るような視線のティアンを出来るだけ見ないようにしていた。

この人は、警戒するべき人。

鍵の存在は、隠さなければいけないと“あの人”にきつく言われたのだから。

カツカツ、先の見えない古代遺跡の回廊を、当ても無くさまよう足音。

ティアンは相変わらず、手厳しい視線だ。

「まあいいさ。国際鑑定士の君が何も知らないわけが無い。君にも立場ってものがあるだろうしね……」

「……さっきはオカルトだと笑っていたじゃないですか……」

カイはティアンの方を見ないで、さりげなく対応しようと心がけた。この得体のしれない男がただ者でない事くらい、最初から分かっていた事だ。いったいどこまで、何まで知っているのか。

ティアンは頭の後ろで手を組んで、前を歩く残りのヴィライアーの足取りを見ていた。この回廊は、火一つすら無いのに、歩く分には苦労しないくらいの明るさはあるのだ。

「あのさー、カイ。一つだけ聞いてもいい？」

「……え、あ、……はい……」

カイは唾を飲んだ。団長すら言いくるめるこの男の巧みな話術によって、情報が引き出されたりしないように。心の中で防御態勢に入る。

しかし、ティアンは何とも言えない、彼らしくない真剣な表情で、どこか遠くを見ていた。そんな顔だった。

「……鍵の向こうにあるものって……本当は何なのかな……」

それは、歴史という時間の中に隠された、鍵をかけて、何個もかけて封印しなければならなかったもの。

「……それは、鍵をかけた者にしか分かりません……。鍵を生み出した者にしか……」

どこまでも続く迷宮は、まるで僕たちの心理の戸惑いのよう。
ここは、現実でも、イマジン・ヒストリアですらない。

でも、この時空のひずみに、もしかしたら真実は隠れているのかもしれない。

紺の空を掲げて、ローブの影が今しがた聖地にたどり着いた。

「……この時代、美術と言うものは軽視されやすいけど、美術ほど世界を象徴する物は無い。だって、どんな国の歴史や文明を知るにしても、文字よりも先に美術品が関わってくるのだから……」

歴史は、常に美術品と共にある。
美意識と言うものは、今も昔も変わらず、人間の本能として備わっているものだから。

「そうでないなら、なぜ歴史を知る事ができた。……どうやって神

を信仰した」

かつて、美術品とは、神を祀るためのものであった。
神話や、信仰、宗教と言ったものに、深く関わりすぎたから、ある時それは、不思議な力を帯びる。

神殿跡地から発見されたって、
海の底から発見されたって、

いまだにどこかに埋まって、文献にしかない幻の美術品だって。
消えそうな壁画だって。

さあ、神様の像の瞳を、じっと見てごらん。

パリス・ヴァレリーは、ギリシアのオリンピア遺跡、今は無き“ゼウス神殿跡地”に立っていた。
瓦礫の前で、寂しい風に吹かれながら、彼は胸に手を当て、片膝をついた。

西洋の美術をたどれば、必ず行き着くのが古代ギリシア。

エジプトも、ローマも、ペルシャも全ては歴史のクモの網のように、

最後に行き着くのはギリシア。

ｌｄｒａｗ

32：エジプトプラン14～嵐の前の静けさ～

文字だけの歴史に踊らされて、勝手な妄想を抱いていた
あなたを、正義だと

ファルテは青い空を流れる白い雲を、小川の水面越しに見ていた。
ぼんやり、物思いにふけって。

「あ、いた！！　どうしたの、こんな所にいるなんて……」

ルナシーが、スカートのひだに沢山の花を乗せて、金の髪を揺らしながら駆け寄ってきた。

花が道しるべのように、来た道に点々と落ちているのが微笑ましい所。

「君は適応能力が早いね。ここの生活はもう慣れた？」

「慣れてなんかないわ。でも考えてたってしょうがないじゃない。…ここの人たちは親切よ、大して不都合は無いわ」

「……たくましい限りだね。レイならきっと、イライラし始めるころだ」

フォリテはゆっくりため息をついた。ルナシーは何も考えてないわけではないのだろうけど、この状況を苦とは思っていないようだから、結局悩んでるのは俺くらいのもの。

でも、彼にとって、この古代エジプトに来た事以上にショッキングな事があるので、どうにもそればかり考えていた。

「フォルテは最近元気が無いわね。考古学大好きのあなたでも、実際歴史の舞台に立つのは身がすくんじゃうのかしら」

彼女はフォルテの隣に座って、摘んで来た花を前に並べた。

どうやら花の王冠を作るらしい。

「古代に来れた事は光栄さ。……ただ、やっぱり史実と事実って違うんだなって……」

フォルテはルナシーの並べた花を横から取ると、彼もまた花の王冠を編み始めた。

「あら、作れるの？　すっごく意外……」

「……」

ルナシーが目を丸くしているのに、フォルテは黙り込んで、再び物思いにふけってしまった。

時代背景を整理しよう。

ここは古代エジプト第１８王朝。ファラオはかの有名なアクエンアテンである。

そしてこのファラオは、あのツタンカーメンの叔父にあたる。

アクエンアテンほど特異で、大変興味深いファラオは居ないだろう。

ブレステッドという歴史家に“人類最初の個人”というあだ名を付けられたほどである。

ではなぜ、彼がこのように言われるのか。

彼が一神教を唱え、それまで祭られていた有力な神“太陽神ラー”や、“太陽神アメン”、“ハトホル女神”や“セト神”を排除して、太陽そのものを神格化した“太陽神アテン”を唯一の神と崇めた話は有名だ。

そもそも、なぜそんな事をしたのかというと、強大化したアメン神を崇拝する神官団の発言力を抑えこむためであった。どんな国の神でも、神官団とは神を背後に力を得やすいのだ。

その大規模な宗教改革を“アマルナ革命”と言うのだが、これと同時にアマルナ芸術も開花する。

“アマルナ芸術”とは、形式的な、理想化された姿を彫刻や壁画に現すような従来のものと一変して、とても写実的な、見たままの真の姿を現すような芸術であった。

代表作は“ネフェルティティの胸像”である。また、アクエンアテン自身の彫像も、今までのファラオと打って変わって、とても衝撃的なものであった。分厚い唇に、長い顎、細い肩やウエスト、大きく張った腰骨や腹は異形な姿であり、それが真実の姿であるならば、彼が先天的な病に冒されていたのではないかと考える学者も多かった。

さて、このような個性的なファラオによって巻き起こされた“アマルナ革命”であるが、民や他神官団の評判はすこぶる悪かったらしい。複数の神々を崇めることに慣れていた国民達は、唯一神というものを受け入れられず、アマルナ革命は彼の世代で挫折することになる。

と言うのが一般的に語られる歴史である。

フォルテは花の冠を全部編み上げると、再びため息をついた。

側に子供がやって来ては、花の冠を不思議そうに見ている。

「お花が輪っかになっているねえ」

「なんならあげようか。どうぞ、王様」

フォルテはかしこまったようにその花の冠を少年の頭の上に乗せた。
少年はうれしそうに冠を乗せたまま走っていった。、

「何よ、私もあげようと思ってたのに。黙々と編んじゃって、何を考えているのやら」

ルナシーは花の輪っかの端と端を繋ぐと、それをフォルテの頭に乗せた。フォルテは怪訝そうな顔をして、彼女を見る。
彼女は小さな顔を傾けて、普通なら誰しも美しいと思う笑顔を見せる。しかしフォルテは、

「……ルナってさ、見た目の割にあれだね。やな奴だよね。どうせ焦心の俺を心の中であざ笑ってるだろ……」

半分冗談のつもりで、皮肉っぽく笑ってみせた。イライラを彼女にぶつけてはいけないとは思っていたのに。
しかし彼女はきょとんとした顔を見せると、何だかもの凄く驚いた顔をした。

口をぱくぱくさせて、言葉も出ないと。
フォルテは、もしかして傷つけたかなと、多少冷や汗をかいたが、彼女はフォルテの花の冠をパッと取ると、それを自分の頭に乗せた。
その時の勢いで、花びらが散って小川の流れにさらわれた。

「酷い事言うのね、フォルテ。せっかく落ち込んでいたから慰めてあげようと思ったのに」

言葉とは裏腹に、彼女は満面の笑顔で、立ち上がるとフォルテを見下ろす。
フォルテは何だか負けた気がして、無性に悔しい気持ちでいっぱいになったが、それをどうこう言うほどのこだわりも無かった。
その時、草を踏む足音が近づいて来た。

「よお、すっかりここに馴染んじまったな。どうだ、居心地はいいだろう」

「タハールさん……」

ターバンを巻いた色黒のエジプト人。この隠れ里ならぬ、隠れオアシスで身を潜めるラーの神官団の男だ。フォルテは彼を確認すると、

「第一印象よりはずいぶんいいよ。でも、こんなオアシスが王宮側に見つからないなんて不思議だよね」

「ここは砂漠の砂嵐の壁に守られている。ちょっとやそっとじゃ辿り着けないのさ。俺たちだって町を追われて、やっとの事で辿り着いたんだ。きっとラーのお導きさ」

タハールは自信に満ちた強い表情だ。しかし、急に真面目な顔をすると、

「しかし、このまま黙っておくファラオでは無い。他神の影を見れば、どこまでも追いかけてくる。油断も隙も見せるべきではないだろう。我々も尊き神が砂漠の砂に埋もれていくのを見過ごすわけにはいかない……」

「……反乱でも起こすのか？」

フォルテは視線を少しあげて、太陽の逆光で見えないタハールの顔を見ようとした。
ルナシーが隣で、不安そうな面持ちだ。

「それは、神がお決めになる事だ。既に他の神官団と王宮側の戦いは始まっている。我々も覚悟を決めなければいけないのかもしれないな」

タハールはそう言うと、マントを翻した。去り際にルナシーを見て、
「不便は無いか？」と聞いたので、

「いいえ。人々はとても親切ですわ」

彼女は花の冠にふさわしい笑顔を見せた。

「そうか、ならばずっとここにいるといい。花飾りはとても似合っているよ。まるで女神のようだ」

当初の彼とは思えないような気の聞いたキザな台詞を、臆する事無く口にしたので、ルナシーも多少面食らったが、

「まあ、ありがとう。この花飾り、フォルテはどうも気に入らないようだから」

フォルテへの嫌味を交えつつうまく答えたものだ。
タハールは鼻で笑うと、この土手の上に登って、繋いでいた馬にまたがると去っていった。

ここエジプトの夕焼けは見事だ。同じ地球の光景なのに、時代と異国の違いが、空気となって、不思議なノスタルジーを感じさせるのだ。箱庭のようなこのオアシスでも、空だけは限りなくこの地球を包んでくれているから。

ルナシーはあれからフォルテと分かれ、自室に籠って空を見ていた。この夕方になるまで。

だんだん太陽が傾いていって、空の色が変わっていくのを見ていたから、一体何個の雲が視界から消えていったのか言う事も出来る。

昼間のフォルテは機嫌が悪かった。というかエジプトに来てから彼は神経質だ。色々知りすぎていると考える事が多くて大変ですね、と言った感じだ。今の彼にいつものノリを求めてももはや不可能だろう。

レイがいなくて、キクも居ないからかな。

二人は無事だろうか。今頃どこで何をしているのだろうか。

もしかしてあの二人も一緒なのだろうか。

今日、フォルテが私に嫌な性格をしていると言っていた。正直、まさか私が、こんな男にそう言われるなんて思っても見なかったけど、素が垣間見えていたのなら改めようと思う。
今まで隠して隠してきた私の心を誰にも触れさせたくないから。仮面はまだ外せない。

ただ、あの時の妙な高揚感もいまだに胸の奥にくすぶっている。

フォルテは私と似ているのね。だから気づき始めている。
表面上の嫌味のキャッチボールからでは無く、本質的な部分の事を。

嫌な性格と言われて少しうれしかったのも真実。
不思議な感情に、つくづく嫌な性格だなと思う。

タハールは、仲間の神官団と共に、門を出て周囲の砂漠の見回りをしていた。
いつも同じ事をしているのに、今日は妙な違和感を覚えた。

こんなに星が見える。
なんて静かな夜なんだ。

何だかぞっとしたのは、いつものように荒れ狂う砂嵐が、不思議な

くらいぴたっとやんでいたから。

「まるで、嵐の前の静けさのようだ……」

彼はたいまつが全く揺れていないのを、吸い込まれるようにじっと見て、そして、風船が割れたようにハッと振り返った。
あの、箱庭のようなオアシスを。

砂嵐はこのオアシスを守っていた。
それがやんだのは、神が我々を守っていた力そのものが打ち破られたのだと言う事。

それは、音も無くいつの間にか。

この、夜を真っ逆さまに突き落とすような、とんでもない静けさの中で。

この夜、崩落するオアシスと、火とその伸びる影と、弱者と強者の理を知った。

l
d
r
a
w

33：エジプトプラン15～紙の上の歴史～

裏切りは新たな神への忠誠と共に

太陽の下に、皆平等であると

そう言ったあなたが一番、そうである事を恐れていた

フォルテはここ最近上手に寝付けない。

こんな所にやって来て、うまく寝付ける奴もどうかと思うが。

今日はあまりに静かで、雲一つないすばらしい満月の夜。ベットの隣の岩壁の、広い窓から眺めるのだ。空だけ見ていると、ここが古代エジプトだなんて忘れてしまいそうだ。空だけは、時代に左右されるには人間の存在する時間があまりに短すぎる。

月はきっと、今も昔も変わらない。

そう。それは、こんなにも静かな夜の事。

遠くから近づいてくる悲鳴や騒音に気がついたのは、それから間もなくの事だった。一瞬耳をそばだてて、じっとベットの上で静止していたが、何かがおかしいぞとすぐに起き上がる。

胸がドキドキする。嫌な気分だ。

フォルテは窓から身を乗り出し、ただならぬ空気に眉をひそめた。

オアシスの端の方から昇るまがまがしい煙とオレンジの揺らめき。

遠くで響く鈍い金属の音。

今度はハッキリと人々の悲鳴が聞き取れた。

「ルナ！！　入るよ！！！」

フォルテは返事を待たずに彼女の部屋に入った。彼女はこの騒ぎに気づきもしないで、すやすや寝ている。

「起きて！！　このままじゃ巻き込まれるぞ！！」

彼はルナシーの肩を揺さぶって、窓から伝わる緊張感と、自らの不安に焦っていた。さっきまでの「かもしれない」とは違う。確実に近づいている。

ルナシーは目をこすりながら、何事かと起き上がった。

「何なのよ…せっかく寝てたのに」

「今はそれどころじゃないんだ！！　とにかくここから逃げよう！！」

「ど…どうしたって言うの…？」

ルナシーは、フォルテの焦りをやっと理解した。慌ててベットから出て、彼が取ってくれたマントを羽織る。

窓の外からは、悲鳴と破壊の音が、遠くもなく近くもないところで聞こえてくる。

「タハールさんは今居ないわ。見回りに出ているもの」

「そうだ。きっとその時を見計らって…」

フォルテとルナシーは、出来るだけ遠くへ逃げようと、この状況の中必死に町を駆けていた。

一体何から逃げているかも分からなかったけど。

幸いこのオアシスは町一つ分あるのだから、すぐ追いつめられるに

は広すぎる。
フォルテは背後の炎を振り返りもせずに唇を噛んだ。
敵はきっと、王宮の討伐軍だろう。どこからかこの場所を嗅ぎつけたのだ。
「私たち、どうすればいいの？」
「とにかくこのオアシスから出よう。王宮軍に捕まったら適わない」
「でも…でもこのオアシスは門を通らなければ出られないわ！！」
フォルテはルナシーの言葉に、はたと立ち止まった。
待てよ。
待てよ。
そうだ。この町は太陽神ラーの力で守られていたはずだ。ここに入る時に、タハールさんが開いた、あの門。
ならばなぜ、王宮軍はこのオアシスに突入する事が出来た。人間の力でどうこう出来る門じゃないはずだ。
彼は、黒とオレンジの混ざり合った空を、炎の匂いのする方向を振り返った。
それは、神聖な何かが、暗黒の力に飲み込まれているような、
古き神の衰退と、新しき神の勢いを現しているようだった。

二人はこのオアシスの一番端。門から一番遠くに辿り着いたようだ。

「……崖だ……。やっぱりあの門以外に外に出られないんだ……」

フォルテは崖の壁に手をあて、どうする事も出来ずにいる。悲鳴や炎、耳障りな音が聞こえてくるのを、ルナシーは不安そうに顔を歪める。

「タハールさん達は無事かしら……。町の人たちだって……」

「今は自分たちの身を守るのが先決だろう……。あの人達だって結局は歴史上の人物だ……。既に死んでいる人間なんだから…」

「……あなたって意外と冷たいのね」

ルナシーは怒っているとも、悲しんでいるとも言えない口調だった。フォルテは彼女から目を逸らして、

「よしてくれ、ルナシー。……仕様がないじゃないか……俺たちは無力だ」

強い言葉で言い切った。
その時のフォルテは、いつものようなお調子者の彼ではなく、とてもとても現実的で、どこか冷めた、距離を感じる人だった。
どっちが本当の彼なのだろう。

ルナシーは瞳を細めた。
別にそれを非難しようなんて思わないけど。

だって私にも似たような所があるから。

その時だ。

馬の蹄の音と、風の音。気がついた時には、どこからその音が向かって来ているのか分からなかった。と言うより、この崖を背に囲まれたと言った方が早いかもしれない。

二人は後ずさった。いつの間にか数人の兵士が居る。

「ほお、こんな所にまだ生き残りが居たとは……」

一番立派な黒い馬に載った、瞳の鋭い長髪の男が、影の中から前へ出た。
氷のような瞳は、二人を捕える。

「神官様、こいつらは異国者ですぜ。つい最近このオアシスに流れて来たんでやす」

黒い馬に乗った男の隣を、一人の中太りの男が腰巾着のように付い

ていた。
フォルテは眉を潜め、その男をまじまじと見た。そして、ピンと来たように、

「あああああ！！！　てめえ、あの時俺を蹴った……っ！！！！」

びしっと指をさす。そうだ、こいつは確か、このオアシスで捕まった時、俺を蹴飛ばしたあの野郎。
ルナシーも気がついた様で、信じられないと言うように瞳を潜める。

「どういう事！？　あなたはタハールさんの仲間じゃないの！？」

「どうせ裏切ったんだろ。こいつが手引きしたんだ。そうじゃない限り門が開くはず無い！！」

フォルテは、にやにや嫌らしい笑みを浮かべるこの男に向かって、吐き捨てるように言った。この男は最初からあまり良い印象ではなかったので、裏切ったからと言って納得はできるけれど。

しかし、許される事ではない。
男は片方の口の端を上げると、ムカつくような上から目線で言うのだ。

「それはちょっと違うぜ、小僧。俺は元々王宮側の人間。要するにスパイよ。ラーの神官団が都から逃げる時、俺は既に、アテン神に忠誠を誓っていた。とっくにラーへの忠誠心は無かったってわけよ。簡単なもんだぜ、ここの奴らは……特にタハールは、ラーへの忠誠を口にしただけで、そいつは仲間だと信じられる。その後に作られた門の裁きを受ける事は無い」

「……とんでもないね……神の怒りをかっても自業自得だな」

「何を恐れるって言うんだ。ラーの神官団の力は今や地に落ちたも同然だぜ？　神殿だって無いと言うのに……信仰心が神の力となるのだから、既にラーの時代は終わったんだよ！！」

男は腹を抱えて大笑いしている。何と言う卑劣な奴。
神をなんだと思ってるんだ。

その時、さっきから黙って二人を見下ろしていた黒長髪の男が、

「黙れ下僕が……自分が生き残るために神を裏切った分際で……」

今度は下僕と罵った男の方に視線を映した。彼は「ヒッ……」と言葉に詰まらせると、冷や汗を流しながら小さくなった。それ以上何も言えずに尻込みする。

彼の視線は本当に冷たい。
息が詰まりそうだ。

そして再び、フォルテとルナシーの方を向いた。

「……異国の者であるなら、なおさら生きて返すわけにはいかないな……。ここで起きた事は、誰も知らない。ラーの神官団など、元々無かったのだ……この後、この国の神は唯一アテン神だけであったと。太陽神ラーなど、もうこの国には必要ない……」

アテン神官の男は、腰から剣を抜くと、ゆっくりそれを振り上げた。
ルナシーはフォルテの背中の服を掴んだまま、一度息を飲む。背後は崖、周りには王宮軍。

もうどうしようもない。

その時、フォルテが小さく笑ったような気がした。
ルナシーは顔を上げ、フォルテを見上げる。彼はこんな状況下だと言うのに、何が面白いのか、瞳を細めて笑っていた。

「……ラーの存在が消えるって……？」

彼はくすくす笑っていたが、いよいよ手で顔を覆ってどうしたと言わんばかりに笑っている。
神官の男は顔をしかめて、

「……何を笑っている……」

いっそう瞳に強い冷たさを増す。
しかしフォルテは怯みもしないで相変わらず笑っている。

「……だっておかしいから……お前らは何を言ってるんだ……ってね。ラーの存在は永遠に無くなる事は無い……。教えてやろうか……」

彼は顔を覆っていた手を除けると、口元に読めない微笑みをいっそう増して、

「お前らの信じるアテン神の時代は、あと十年もしたら衰退する……。今のアクエンアテンこそが歴史に葬られるんだ。お前らは結局、長い長いエジプトの歴史の中で生きてきた神を……」

それは、触れてはいけない神の意志。

「……神を、怒らせたんだ……」

長い歴史を持つ神を、

その神殿を壊し、こんな風に追いつめ、信仰を奪い、人々の信じる道を照らす光を消した。

これは既に結論の出ている歴史だし、何が悪くて、何が正しかったのかなんて誰にも語れないけれど、

フォルテは可笑しくて笑って、

悲しくて笑うしか無かった。

歴史は既に決まっている。

決まっている歴史を変える事は出来ないし、この先を知っていたって自分に出来る事なんて無かった。

結局自分は、歴史上の舞台に立って、血の通った人間と触れ合っていたって、

それを紙の上の歴史としか思えない。

こいつらがオアシスを侵略し、町の人々を虐殺していようが、タハールさんを騙していようが、それが歴史上真実なら仕方が無いと思う自分に、悲しくて笑ってしまった。

それなのに、

既に未来は決まっているのに、何をそんなに怒っているんだ。

矛盾した自分の心が分からない。

自分が何をしたいのか分からない。

l
d
r
a
w

34：エジプトプラン16～風の行方～

紙の上のあなたなら

リアリティが無かったから、凄く偉大に見えたのだ

歴史にも、美術にも、大きな“革命”を与えたのだから

「許されるものか！！！許されるものか！！！」

タハールは炎に包まれた町で、悔しさに歯を食いしばった。

女子供関係なく、容赦なく虐殺された“跡”をただ走る。剣を手に、

迎え来る王宮兵を返り討ちにしながら、瞳には怒りと憎しみの色が

濃く映っている。

許されるものか。

これが国を守る王のする事か。

あちこちで王宮側と、ラーの神官側での剣の攻防が繰り広げられている。タハールは生きている人間が居ないか血眼になって探している時、悲鳴を聞いた。炎の向こう側から微かに、でも確かに聞こえた。タハールは火だるまの小屋を横切って、馬をその方向へと向かわせる。

小屋を通りすぎた時、視界に映ったのは、一人の子供が地面に叩き付けられて、剣で刺される、まさにその瞬間であった。

花の王冠が血に染まる時、ハラハラと散る花びらは、あまりにも儚い。

「！！！！！！」

タハールは昼間の事を思い出した。そうだ、この子供はあの時、異国の少年に花の冠を貰っていたあの……。

嬉しそうな笑顔だけが浮かんでくるのに。

「……っ貴様あ！！！！」

タハールはマントの中から“アンク”を取り出した。そしてそれを目の前の兵に突きつけ呪文を唱える。

太陽神ラーよ。

どうかこの罪人に裁きを与える力をお与え下さい。

一瞬目映いばかりの光があたりを包んだかと思うと、目の前の兵士は体を焼かれ、一瞬で灰となった。
タハールは馬から下りて、子供に駆け寄る。

「……おい！！！　……おい、しっかりしろ！！！」

しかし、もはや子供の瞳には生気は無く、ぐったりとした体はただの抜け殻でしかなかった。
タハールは瞳を悔しさとやるせなさに震わせ、子供の前髪を払う。

ラーよ
太陽神ラーよ

この子がいったい何をしたと言うのでしょうか。全ては我々の争いが招いた事だと言うのに。
王の言いなりになれば良かったと言うのか。

タハールは子供の脇に落ちている、崩れかけた花の王冠を見た。

「……」

子供の血の泉に半分沈んでいたのは、何かを暗示している象徴にも思える。
彼は瞳を細めた。

憎い。憎い。

神であるラーを、恐れ多くも追放しようとしたアクエンアテンが憎い。
唯一神だと、いきなり崇められたアテン神が憎い。

彼は花の冠を握りしめ、静かに立ち上がった。
その時、ふと脳裏に浮かんだのは、異国から来たというあの二人。
彼の瞳に光が戻った。急いで馬にまたがり、風を切るように走らせる。
しまった。
あの二人は何も知らない。王宮側は彼らを容赦なく殺すだろう。
我々の戦いに巻き込むべきではないのに。

フォルテとルナシーは絶対的ピンチに陥っていた。
敵に囲まれているのは愚か、どうやらフォルテの態度、言葉がお気に召さなかったようだ。
黒髪の男は馬から降り、剣を持たない方の手でフォルテの胸ぐらを掴むと乱暴に持ち上げ、その剣を突きつけた。
「…っ！！！　フォルテ！！！」

ルナシーは青ざめて、掴んでいた彼の服を離してしまった。
彼を助けようと手を伸ばすが、今度はその手ごと他の兵士に取り押さえられた。

「おっと、動かない方がいいぜ、お嬢ちゃん」

鎧を着た兵士の顔は見えなかったけど、威勢の良い、少年の声だった。

「……くっ……ルナシー……」

フォルテは横目に歯を食いしばり、頬に冷や汗を流す。
彼を持ち上げる黒髪の男は、相変わらず感情の無いような冷たい視線だ。

「……殺す前に一つ聞いてやろう。……髪の色も、瞳の色も違うお前ら異国者が、どうして我々の国を予言した。……そもそもどうしてここに居るのだ……」

「……」

フォルテは先ほどの事を思い出した。

『……あと十年もしたらアテン神の時代は終わる……』

彼は確かにそう言ったし、それは歴史上事実である。
この黒髪の男は、感情こそ読めないが、どうやらこの言葉は気になったようだ。

フォルテはフッと笑うと、

「俺の言った事は予言じゃないぜ……。俺たちは今から起こる未来を知っている。お前らがこのまま、こんな非道な事を続ければ、確実につけがやってくる。……殺すなら殺せ……！！！」

力強く、ためらい無く言った。内心、とてもじゃないけど殺されたらどうしようと思っていたが、これは賭けでしかなかった。黒髪の男は瞳を細め、フォルテを探るように見ている。

たったの数秒がえらく長く感じた。
心臓の音が体中に響いている。

その時だった。

キイイイイイイイン！！！！！！！

激しい閃光のような、鋭い金属の音と共に、フォルテは地面に落とされた。何が起こったのか分からないが、尻餅をついたのを痛いなんて言ってられない。

顔を上げるとタハールさんと黒髪の男が剣を交えていた。

「……っタハールさん！！！」

フォルテとルナシーは同時に叫んだ。
ターバンを長くなびかせ、既にマントを血で濡らした太陽神ラーの若き神官。

黒髪の男はニヤリと笑った。

「……ほお……ラーの神官のお出ましか……。もう全滅したのかと思っていたよ」

「ふざけるな！！！　貴様らの愚行は全てラーが見ている！！！呪いは避けられないぞ！！！」

タハールさんはぞっとするくらい激しい怒りに満ち満ちているようだった。

しかし、黒髪の男はどうということの無いように、軽々彼の剣を跳ね返した。

そして、情けなくも逃げずに様子を見ていたフォルテをの腕を掴んで剣を突きつけると、

「この異国者には何か貴様と縁があると見える。さぁ言え…」

彼は剣をフォルテの首に当て、鋭い瞳をタハールに向けた。

「…黄金のマスクは何処にある……っ！！」

「……！！？」

タハールは目を見開いた。フォルテだって、まさか今その言葉が出てくるなんて思っても見なかったものだから、大きく目を見張る。

「貴様等が持っているのは知っている。……取引だ…」

黒髪の男はフォルテを側の兵に押し付け、自らは馬にまたがった。

「今すぐとは言わない。しかし今から7日後の日没までだ。黄金のマスクを持って王宮に来い…持ってこなければこの二人を殺す…っ」

「ふざけるな！！！　そんなこと……っ！！？」

タハールが再び剣を構え直したちょうどその時、黒髪の男は馬の上から彼を見下ろし、懐から黒い“アンク”を取り出した。
そして、小さく呪文を唱えると、彼に向けその言葉を、ヒエログリフの羅列を解き放つ。

「！！！！！！！」

その呪文の羅列は鎖となって彼の体の自由を奪った。

「勘違いするな……お前なんて殺そうと思ったらすぐに殺せる……。こいつらも。貴様らラーの神官団が奪った“黄金のマスク”を返す。許しを請う。懺悔する。そのチャンスを与えようと言っているのだ……」

黒髪の男はアンクを握る力をいっそう強めた。その度にタハールは苦しそうな声を上げ、地でもがく。

「タハールさん！！！」

ルナシーはもう見てられなかった。どうしてこんな事になっているのか理解出来ない。
フォルテは必死で状況を理解しようとしていたのに、自分が死に近いこの場面で、何を考えればいいと言うのか。

黒髪の男は苦痛の表情のタハールに、自身は大した感情もあらわにしないで、彼の呪縛を一瞬で解いた。

「……！！？」

フォルテとルナシーは、呪縛から解かれたタハールと、黒髪の男を交互に見る。

黒髪の男は冷ややかな瞳に、一つ小さな光を灯すと、

「……ここで返事はいらない。全ては七日後に分かる事だ……」

口を動かす事の出来ないタハールを尻目に、兵士達に合図をした。

その合図で、フォルテとルナシーは乱暴に馬に引き上げられ、そのままオアシスの炎の中に引きずり込まれるように連れ去られた。

瞳は見開いたまま。

地に伏せるタハールの名を呼ぶ事も出来ずに。

崩落したオアシスを、切り捨てられた死体を直視する事も出来ずに。

いまさらやって来た恐れを、十分に実感する余裕すら無く。

特に愛着が付いたわけではないこの町を、フォルテはただ、複雑な思いで見送った。

これこそが、紙の上では語る事の出来ないリアルな光景。

惨劇と言葉だけで表す事の出来ない事実。

炎が、全てを壊していく。

歴史上の事実だからと、目の当たりにしておいて別に対した事じゃないと、これを受け入れられるのなら、自分は人間として欠落していただろう。

でも、そうじゃなかった。

怖いと思う。

許される事じゃないと思うよ。

馬が血の池を踏む度に。

ああ、これがリアルな歴史なんだって。

これを引き起こしたのがまさしく、紙の上の歴史だけで尊敬していた、あのアクエンアテンなんだって。

オアシスを抜け、自分たちが最初にこの町に入ったときの門を抜けた。

大きな大きなラーの壁画があったはずだ。

「……」

炎の隙間から見えるのは、ただの壁だけ。
神の消失した壁だけ。

自分の中でくすぶる、不思議な憤りが消える事は無かった。

止まってしまった風は、今はどこに行ってしまったのだろう。

彼らを守っていた、ラーの風。

止まってしまった、この町の風。

ｌｄｒａｗ

35：エジプトプラン17～無礼者～

年も変わらない僕たちが出会ったのは

あなたがそれを望んだからかもしれない

キクマサは、渡り廊下を渡って、団長の部屋へ向かっていた。
ここに来てからどれくらい経っただろうか。一週間くらいだろうか。
自分はそんなに几帳面でもないので、それすら覚えてないけれど。

昨日シャルロ先輩に言ったら、「それ几帳面とか言う問題と違くない……？」って、呆れた顔で言われたけれど。

そう、ここメンフィスの都にやって来て一週間が何事も無く過ぎ去った。
繊細な団長がここの水に当たったり、シャルロ先輩が日夜宴会で飲

みまくってる事以外は、何事も無く。

ここの人たちは自分たちをいかがわしげに見る者も居るけれど、基本的には親切だ。

しかし、自分たちが会っているのは、きっと王宮の一部の人間だけ。

自分たちが行動出来るのも一部だけ。

守ってくれているのだろうけれど、物事が一向に進まないので団長はイライラしているようだ。

水が合わなかった団長は、最近床に臥せっていた。

「……大丈夫ですか？」

暇なので、よくお見舞いに彼の部屋に訪れる。

団長は、いっつもキメキメの髪がたらんとしていて、そこから既に勢いがない。

彼はキクマサが来ると、顔だけを寝床の上で彼に向ける。

「今日はなんて事無いか……？」

「はい。いつも通り平和なものですよ。初日の事が嘘のように何にもありません」

「……お前も何て事なさそうだな。日本人のくせにタフだなあ」

団長はじっとキクマサを見て、はあとため息をついた。

「……あの女はどうしてる」

「……シャルロ先輩ですか？」

「そうだ。あいつ、俺がこんなに苦しんでるってのに顔一つ出しゃしねえ……。薄情な奴め」

キクマサは苦笑いで、

「シャルロ先輩が団長のお見舞い来たら、それならそれでびっくりですけどね」

「……確かに……その時は賄賂を要求するに決まってる……あいつの事だから」

「……」

弱った団長の話し相手をしながら、今日こそは聞こうと思ってた事がある。どうして団長とシャルロ先輩はそんなに仲が悪いのか。確かに二人とも頑固で怖いし、我が強いのは分かる。反発するのも分かる。

でも、二人には何かがある関係のような気がする。

シャルロ先輩だって、個人的に話せばとても常識的な頼りになるお姉さんだ。

「……シャルロ先輩は日夜宴会で逆ハーレム作って楽しんでますよ。美人ですからね」

「美人だあ？　お前何を見てるんだ？　目あるか？　あんなのメルベリーに比べたら月とスッポンじゃねーか……」

わあお、ここにシャルロ先輩居なくてよかったあ～。
キクマサは引きつり笑いで心からそう思った。というか団長はメルベリー先輩贔屓なんですね、相変わらず。

「だいたい宴会って何だよ。誰があんな奴誘うんだよ～？　悪趣味すぎるぜ、信じられんな」

「言いたい放題ですね、団長。そんなに元気なら起き上がれるんじゃないですか。仮病ですか？」

「何言ってんだ、俺様がこんなに苦しんでいるというのに」

団長は顔だけ極道面で、でも体は布団の中で、何とも言いようのない。最近この人の印象が断然変わったなと思う。
キクマサは大きくため気を付いて、

「そもそも何でそんなに仲悪いんですか、団長とシャルロ先輩……」

思い切って、でもさりげなく聞いてみた。
団長は一瞬顔をしかめると、そっぽ向いて、

「それは話せば長くなる」

「いいじゃないですか。どうせ話すことしか出来ないんだから……」

「……最近辛辣だな。シャルロの影響か？」

彼は「まあいい」と小さく答えると、何かを思い出すように高い天井の土の壁を見ていた。きっと、シャルロ先輩と仲悪くなったエピソードでも思い出してるんだろうな。

キクマサはそう思っていた。

「……分っかんねえんだよな～……お互いに最初会った時から憎らしくてさ。何でだろうな、俺の第一声が「ちっせ」だったからかな。」

「……それでしょう……」

キクマサはガクンと頭をうなだれた。なんだそれ、みたいな。もっとすごい、それこそ血なまぐさい（面白い）話が聞けると思ったのに。

「多分あれだぜ、あいつは自分の上に誰かがいるのが嫌なんだ。俺を亡き者にしたいに違いない」

団長はにやっと笑って、意味不明な冗談を言う。しかし、この面白くない冗談に、不覚にもキクマサは吹き出してしまったのだった。

団長に付き合って夕方まで話し相手をしていたが、やっと解放され

たキクマサは、ひとまず自分の部屋に帰ろうとしていた。研修着のズボンのポケットに手を突っ込んで、夕焼けに伸びる柱の影を踏みながら、とにかく部屋に帰ろうとしていた。

「キ、ク、マ、サ、君」

その時、足音を全くさせないで、背後から目隠しをされた。かなり唐突である。

「うわ……ビビりますって、シャルロ先輩……」

内心ひやっとしたと言う意味で心臓が飛び出そうになった。でも、いつもの事だ。
彼女は忍び足が得意なようだ。

「正解。あいつの所に行ってたんでしょう。どう？　実は繊細で使えないあの男の容態は」

「はあ……。いまだに弱ってます」

キクマサがそう言うと、彼女は笑いが堪えられないと言うように、

「お笑いよねえ、鬼の団長と恐れられるあいつが、水ごときであんなになっちゃうなんて。あいつは私を笑い死にさせるきなんだわ。そのくらいでなきゃ私に勝てないもの」

見ているこっちがあっけにとられるほどに高笑いをしていた。
なんて恐ろしい人だ。気持ちがいいくらい薄情だな、団長には。

「ま、うるさいのが大人しくしてくれるのは、いい事だけど……」

彼女はそう言うと、白いエジプトの衣装を翻して、キクマサとは正反対の方へ向かっていた。

「どこ行くんですか？　先輩」

「今日もお誘いがあるのよ。どうやらここの男達は相当暇なようね」

「あんまり飲み過ぎないでくださいよ……。はめ外しすぎちゃって、変な事になったら後悔しますよ……まあ、先輩は全てが強いから大丈夫だと思いますけど」

キクマサは、あれ、何で自分こんな保護者みたいな事言ってるんだろう……とか思いながらも、彼女に忠告した。
シャルロは少し振り返って、くすっと笑うと、

「あーら、心配してくれるの？　女泣かせな顔して意外と優しいんだ、キクマサ君。……大丈夫よ、私だって別に、遊んでばっかりじゃないんだから」

「……？」

気になる言葉を残した彼女に顔を上げたが、後ろ向きに手を振り去っていく姿に聞き返す事も出来なかった。

キクマサは自分の部屋に戻る途中、あんなに自室に帰りたかったくせに、シャルロに会った後はむしろ帰りたくなくなっていた。

ふと、渡り廊下の途中の庭にあるキオスクに立ち寄った。
キオスクとは、エジプトの東屋の事だ。団長がそう言っていた。

さわさわ、夕暮れの風。
昼間は暑いくせに、夕方になると少し涼しくなる。

真っ赤な夕焼けは、ギリシアよりもなお色濃く、日本よりも断然赤い。

雲の流れが速い。

綺麗な景色に心奪われるのは、創作意欲が湧くのとイコールであるが、ここに来てから絵なんて描いてないから、本当たまらない。
今では全くそんな事ないのだが、不良時代に吸っていた煙草を断つときの、あの中毒性の苦しみに少し似ている。
ほんの少しだけど。

自分ちょっと危ないのかな……。

そんな事をぼんやり考えながら、相変わらず夕焼けを見ていた時、草を踏む足音が近寄って来た気がして、その方に顔を向けた。

「……ファラオ……」

目の前には、若きファラオが、現代でもあんなに有名なツタンカーメンが、キクマサの方をまじまじと見ながら、おもむろに微笑んだ。

最近、ファラオが良くここに来て、キクマサとばったり出会った時はお話しするのが普通になっていた。
最初は緊張していたけど、実はかなりの常識人で、何気にお茶目で話しやすいと分かってからは、気軽に付き合う事が出来た。正直団長やシャルロ先輩の方がよっぽど厄介だから。

「えええ！！！　ファラオ、１７歳なんですか！！？　俺と同い年じゃないですか！！！」

キクマサは珍しく大声を上げて驚いた。なんてこった。
でも、そう言えばそう、この人は少年王と言われた人だ。今更と言えば今更の話。

でも、歴史に疎いキクマサからしてみれば、この人への先入観はあまり無かったから、第一印象が先に出てしまう。どうしても。

「どう考えたって、少なくとも俺より三つは上ですよ」

「もっと驚く事を教えてあげようか。私の妻……アンケセナーメンは、私よりも四つ年上だ」

「うっそ、姉さん女房なんですか！？」

キクマサの突っ込む所もずれてる気もするが、とにかく彼は驚いた。俺と同じ年で、既にファラオ。奥さん有り。しかも四つ上。

なんという事だ。

ツタンカーメンは浅黒い肌から白い歯を見せて笑うと、

「まあね。怒ると怖いんだよ、ああ見えてね。……でも、私にとっては唯一の家族だから」

ふと、とても寂しそうな表情を、しかしまた愛しさに満ちたような顔をした。それはとても印象深いハッとする表情で、キクマサは言葉に詰まらせる。

「……私が九つの時に、先代ファラオが亡くなってね……。それからはめまぐるしい日々だったよ。何も分からない私は、周りの大人に操られ利用され、それをどうする事も出来ずに生きて来た……。もしかしたら今でも操り人形なのかもしれない。しかし、彼女だけは私を支え、私だけを見ていてくれた。……私の理想とする世界を、共に創ろうと言ってくれたんだ……」

「……ファラオ……」

星の瞬きが空を飾る。

ゆっくりと流れる、古代の時間の中で。

寂しそうな顔をするもんだな。エジプトのファラオと言ったって、自分と同じ歳なんだ。

今までいったい、どれだけ重いものを抱えて来たか知れない。いくらキクマサだって、そのくらい感じ取れる。

大人の都合に振り回される悔しさと不安は、俺にも分かる。

「……アンケセナーメンさんが居てくれて……良かったですね」

キクマサはそう言うと、星を見上げた。ファラオはハッとして、キクマサの方を向く。

「……たった一人でも自分の側に居てくれる人がいるのは救いです。……俺にも居たんです。ファラオと違って、そんな羨ましい関係ではないけれど、俺に生き甲斐を与えてくれた人が……。あの人と出会わない人生なんて考えられない。……ファラオもそうでしょう？」

星空を見ていると、懐かしさで胸が痛くなる。

今もどこかで、時代を超えたどこかで、あの人が星空を見ている気がして。自由なあの人らしい場所で。

ファラオは一時驚いた顔をしていたが、何だか肩の力が抜けたように微笑む。

「……キクマサ、君は不思議な男だ。……君と話していると、とても気分がいい」

「それは多分、俺があまりに無礼者だからですよ。……王様相手に

命知らずだから」

「私には幸いな事だ。……そう言った友人を望んでも、私の周りには腹黒い大人が多すぎる」

二人は何だか可笑しくなって、膨らませたガムが割れるように、お腹を抱えて笑った。ファラオもこの時ばかりは、少年らしく笑っていたのだ。

残酷な時代のせいで、こういった笑いを失っていたのかもしれない。これが本来のファラオの素顔ならいいなと思った。

涙を流しながら笑う彼は、ファラオと言うよりやはり、同じ歳の友人に思えてしまう。

やっぱり自分は無礼者で、命知らずだ。

でも、この時ばかりはそれが、

無知な自分が誇らしかった。

draw

36：エジプトプラン18～毒の誘い～

銀の器に毒一雫
白い柱に毒サソリ

誘惑の香りも、魅惑の果実も
私には全く意味の無い物

私の名前はシャルロ・グレディア。

ルネ・ヴィルトン美術学校の四年生でルネ・ヴィライアーである。
称号はルネ・アンバー。そう呼ぶ人も居るし、賞金女王と呼ぶ人も

居る。

ヴィライアーの研修でエジプトにやって来たのだけれど、事故か陰謀か、分けあって古代エジプトにタイムスリップしてしまった。しかも、クソむかつく使えない団長と、新人のキクマサ君と共に。

しかし、幸いキクマサ君はなかなかイケメンだし、ぼやっとしているけど機転の効く“使える”二年生だ。

ナギ先輩が「可愛いのよ、あの子」と言っていたのも分かる。

団長は見た目アレなくせに、水に当たるとかギャグですか。片腹痛いわ。

さて、使えない団長と違って私は、この一週間ちゃんと情報収集に勤しんでいた。

女王、アンケセナーメンと協力しあって。

「……あなたに頼みたい事があります、シャルロ……」

「……？」

アンケセナーメンが初めてシャルロの部屋に訪れた時、女王はためらいがちに、でも力強くそう言った。

「……敵はテル・エル・アマルナに居るアテン神官団だけではないと言うのが、私とファラオの考えです……」

「……というのも……？」

シャルロはもたれていた椅子から身を乗り出した。
女王は口元に手をあて、瞳を細めると、彼女の意見を聞こうとした。

「先日、あなた方を襲った呪いの化身は、あまりに早く出現した。まるであなた方が未来から訪れるのを分かっていたかのように……。私たちだって、あなた方が真っ先に狙われるのは分かっていましたから、警備は万全にしていたのです。それでも……行動があまりに早すぎる……」

まさかあんなに早く手を打ってくるとは思っていなかったから、ふいをつかれたと言うのもあるけれど。
でも、これで疑念はより深まった。

シャルロは、

「……なるほど……。女王は、このメンフィスの王宮に、刺客が忍び込んでいると考えているんですね……」

「……ええ。それが誰か全く分からないのですけれど、おそらく……。もしかしたら重臣の中に居るのかもしれない。しかし、私にはどの家臣も味方に見えるし……敵にも見えるのです」

女王は、まるで言ってはいけない事を言ってしまったように、口を手で覆った。

「……幼い頃から、私もファラオも、多くの家臣と神官に囲まれ導かれ生きてきました……。私たちは幼さ故に、彼らに言われるがまま、国の政治を行って来たのです。先代が行っていたアマルナ改革を廃止して、アメン神官団と手を組み、都をメンフィスに移し……。

しかし私は、大人達に導かれたと言うよりも、いいように利用されて来たように思えて仕方が無いのです。……ファラオは、いまだに家臣達を信じていたいようですが……」

小声ではあったが、深い思念の感じられる言葉で、長い時を不安に身を焦がしながら生きて来たのが分かる。

若き女王は、膝の上の拳を握りしめた。

「ファラオは……あの人は純粋で、人を憎む事を知りません……。家臣に敵が居るなど、考えたくもないでしょう。だから私は、あの人の代わりに家臣を信じたりしない……。幼いときから側に居た者でも、心の奥ではずっと、冷めた目で見続けて来たのです。……全ては、ファラオが傷つかないように」

「……」

シャルロは、女王の苦しみと寂しさ、ファラオへの深い愛情に伴う、周囲への疑心暗鬼を、同情だとしてもかわいそうなものだなと思った。ファラオを守りたいが故に、彼女の選んだ道。

「……なるほど。だから私に、家臣達を探れと……？　要するにそう言う事でしょう？」

「……ええ。……勝手なお願いだとは分かっているのです……。しかし、最初に見た時からあなたには思う所がありました……」

女王は強い瞳でシャルロを見つめた。

「……あなたの瞳は冷たい……。表向きはそうでなくても、深い所で、暗く冷たい研ぎすまされた流水のような。……それはまる

で、死にも似た……」

「…女王」

シャルロは彼女の言葉を遮った。そんな事を言う彼女への驚きもあったが、それ以上は言われなくても自分が一番分かっている。

「……分かりました。報酬は元の世界へ帰る手伝いってことで……私はタダで働いたりはしませんよ」

どうせ、何か行動を起こさないと物語は進まない。
この人が私を利用しようとしているのは明確だけど、こういう激しい女心は嫌いじゃない。

「……探りましょう。家臣の中に敵が居るかどうか……」

もしかしたら、これ自体罠かもしれないけれど、実態を知るには渦中に入るのが一番早い。
釣られた魚は、どっちだろうか。

宴会の席には、既にアンケセナーメンの姿と、何人かの家臣の姿があった。最初の宴会にはキクマサ君も出席していたが、最近は疲れが出たのかお断りしているようだ。

「ご機嫌麗しく、ラーの使徒様。今日も一段と美しい……」

「ありがとう。……おかげさまで」

ここの奴らは、どうも私の姿は受け入れやすかったらしい。ギリシャと親交があるから当然と言えば当然なのだが、東洋人の団長とキクマサ君はいまだに胡散臭がられている。

銀の器に注がれた葡萄酒は、当然現代のものと比べたら飲みにくくてしょうがないが、仕方が無い。

せっかくのご好意だ。おいしいと言って、愛想を振りまかなくては。

「細身の体でずいぶんと酒にお強い……」

「あら、お酒に強いのに、体格は関係ありませんわよ。それに私、強いと言うよりは効かない体質なので……」

「はは、ご冗談を」

既に酔ってしまった様子の高官の一人が、酒臭い息を吐きながら彼女に言い寄る。シャルロはくすくす笑うと、

「そう……冗談よ」

再び銀の器を口に運ぶ。

視線だけは周囲を注意しながら。

女王が、全員敵に思えてしまうと言うのも納得出来る。どうにも腹黒い、欲に満ちた野心が手に取るように感じられる。

彼女は視線を斜め前の男に向けた。体格の良い雄々しい青年で、近づいてくる下心丸出しの輩と違って感じのいい男前。
彼は、軍の総司令ホルエムヘブ。金飾りの付いた白い布を頭にかぶり、非常に落ち着いた様子だ。

『……でもね、こういう奴にかぎって黒幕だったりするのよ……』

シャルロは足を組み直して、銀の器に入った葡萄酒を全部飲んでしまいながら、銀の器越しに彼を淡々と観察していた。
しかしまあ、さすがは軍の総司令。彼女の視線にすぐ気がつく。お互いニッコリ笑って返したけど、どうやら向こうも警戒し始めたようだ。体中の意識がピンと張って、まるで隙がない。

『……黒かな……？』

分からない。
決めつけるのはまだ早いし、先走ると痛い目を見そうだ。彼を注意して見るにこした事は無いけれど。

「もう一杯いかが……？」

その時、侍女らしき女性が彼女の器に追加の葡萄酒を注ぎに来た。

「……あ……ええ……ありがとう……」

将軍様に夢中になっていたせいで、少しふいではあったが、気を取り直して再び葡萄酒を口にした。

「……」

シャルロは注がれたばかりの葡萄酒を口にした瞬間、眉根を潜ませ動きを止めた。でも、騒がしい宴会の中で、彼女の異変に気がついた者はほとんど居ないだろう。

シャルロは銀の器を口から外すと、先ほど自分に酒を注ぎに来た侍女を視線で追った。

ついにかかったわね。

シャルロはルージュの唇に弧を描く。酒には毒が盛られていた。間違いない。
毒の味は違っても、今も昔も変わらない毒の気配。

彼女に毒は効かない。

侍女はシャルロが葡萄酒を口にしたのを確認すると、怪しまれないようにさりげなくその場を後にした。
シャルロはすぐにホルエムヘブの様子を確かめる。

彼もまた、侍女を目で追っている。

一週間、慎重に様子を伺ってよかった。
彼女はこみ上げる笑いに耐えきれず、銀の器を持ったまま立ち上がった。

「……どうかしましたか……？」

女王アンケセナーメンが、心配そうに声をかける。
しかしシャルロは何て事なさそうに、

「……ええ、大丈夫。……どうやら私も酔ってしまったようです。……外の空気でも吸って、酔いを醒ましてきましょう……」

視線だけで女王に笑いかけた。
ついに、奴らが動いたと。

騒がしい宴会の間をゆっくり出ると、誰も見ていないのを確認して、銀の器に入った毒の酒を、器ごと中庭の池に落とした。
透明の水が一瞬赤く揺らいで、水面に映った月を染める。

馬鹿な人たち。
毒なんかで私が死ぬはず無いのに。

「……死にはしないけど、さすがに全部飲んだら体に悪いからね……」

沸々と体の奥から沸き起こる、命のやり取りのスリルと興奮を、やはり求めてしまう自分が居る。
彼女は顔を手で覆うと、一度大きく深呼吸した。

さて。

始めようか。

きっと侍女は、私を殺そうとした真の人物に接触するはず。
計画がうまくいったと勘違いして。

最初は私に手を出すであろう事は分かっていた。
どう考えたって、私が一番公の場に出ているし、個人の部屋には厳重な結界が張ってあるらしいから。
あまり部屋から出ないキクマサ君や団長はその後だ。

シャルロは白い薄布の衣装をなびかせて走った。

黒幕は、いったい誰？

危険の真っただ中に居ると言うのに、彼女の瞳は微塵も恐れを感じていない。
むしろ、喜びにも似ている。

偽りの微笑みは、赤いルージュに彩られ、いつもの彼女からは想像

もできないくらいに冷たい瞳だった。

l
d
r
a
w

37：エジプトプラン19～団長とロウソク～

欲望と、野心のうごめくこの都で、神の名を盾に身を守る

甘い言葉に、決して惑わされないで

俺の名前はハク・リュオン

ルネ・ヴィルトン美術学校五年生で、ルネ・ヴィライアー団長だ。
称号はルネ・テクタイト。そう呼ばれるより、やはり団長と呼ばれる事の方が多い。

教員どもの陰謀によって古代エジプトにタイムスリップしてしまい、いまだに帰れずに居る。しかも、くそ生意気な後輩シャルロと、見た目の割に控えめな新人キクマサと共に。
ついでに、俺様は今訳あって病に臥せっている。

「……」

最近ずっと寝てたら、夜が思いのほかに寝付けない。
ギンギンに見開いた瞳で、相変わらずしかめっ面のまま、何も無い天井を見ていた。

実を言うと、既に元気であった。
確かに水に当たりはしたが、起き上がれないほど苦しかったのは最初の三日間くらいで、今は何て事無い。

『……それにしても、引っかかんねえな……』

こうやって大人しく弱った振りをしていれば、あの胡散臭い“呪いの化身”とやらが再び現れてくれる物と思っていたのに。
どうにも物語が進まない。

団長は起き上がると、前髪をかき上げた。
肩をぽきぽき鳴らして、ここ数日動かしていなかった体を捻る。

「あーあ……とんだ計算違いだ。……敵もぬるすぎんじゃねえのか？……俺だったら今のうちに殺りに行ってるよ」

気の短い団長にとって、いよいよ我慢出来ない状態だった。何かアクションを起こさない限り、イベントは立ち上がらない。
彼は暗闇の中、片口を上げてほくそ笑むと、どういう訳か立ち上がり部屋を抜け出す。

遠くから聞こえる宴の音楽に、人々の声。
打って変わって、ここはなんて静かな回廊。

宴会から、うまく抜け出したシャルロは、先ほど自分の器に毒を盛った侍女の後を追っていた。
侍女は挙動不審にキョロキョロしながら、何をそんなに焦っているのか、気配だだ漏れで小走り。

『……あーあ。……どうせならもっと手慣れた奴にさせればいいのに……』

見ているこっちが可哀想になってくる。
きっと、人なんて殺した事無いんだ。罪の意識と、バレたらどうしようという焦りと、言いようの無い興奮と。

彼女の心臓の音が聞こえてきそう。

侍女は震える足が何度ももつれそうになりながら、宴会場からだいぶ遠のいた、ある部屋にやって来た。
シャルロは、彼女が立ち止まった部屋の一番近くの曲がり角に身を潜めると、視線はその方向に留めたまま、彼女が部屋に入っていく

足音を聞いた。

『……きっとあの中に……』

シャルロは巻き毛を耳にかけ直すと、そっと曲がり角から顔を覗かせた。侍女はとっくに部屋に入ったようで、その前は閑散としている。

彼女はゆっくりと部屋に近づこうとした、そのとき、

「……おい！！」

「！！！！！」

叫びこそしなかったが、後ろから肩を掴まれて死ぬほど驚いた。彼女とって背中をとられる事なんて、あり得ない事だったから。

とっさに振り返り、どこのどいつだと思ったら。

「……っな……団長！！！？」

「……おい……。そんなにオーバーに驚かんでもいいだろ……。何やってんだてめえ」

「ちょっ……静かに！！」

何てこった。このタイミングで何てこった。

シャルロは計り知れないやるせなさを感じたが、今は彼を罵倒している暇はない。顔を引きつらせながら口元に指を当て、静かに！！のポーズ。団長はその凄みに押されて、声を小さくする。

「……どうしたんだ……ははーん、お前の事だからどうせ、金目の物でも探してたんだろ……」

「うるさいわね！！　あんたのせいでこの一週間が無駄になったかもしれないわ！！」

彼女は団長を睨むと、フンと顔を背けて、再び部屋を確認した。
部屋の前は相変わらず人の気配はなく、彼女は足音をさせずにその入口に近づいた。
団長はやっと事の重大さに気がついたのか、黙って彼女の後をつける。

「……」

そっと部屋を覗くと、たった一つのロウソクの揺らめきが見える。
逆光で人影は暗く、ただのシルエットで、それでも、

『……二人……？』

侍女の他に二人居るのは確認出来る。
影の形から男だろうけど。

「……殺したか……」

「……殺したんだろうな……」

低い、籠った声と、怪しい空気の中、彼らはまさにその会話をしていた。

「はい……はい！！　彼女は毒を口にしましたわ！！！」

侍女は震える声でそう言った。

「……その割には宴の間から何も感じんな……。悲鳴の一つも聞こえて良さそうな物を……」

「で、でも……あの人は何事も無く毒を口にしました。私、ちゃんと見たんです！！」

「死ぬ所は見て無いんだな、その様子なら……」

二つの影のうち、小柄な方の影の男が、怖いとも感じる口調で問いつめた。侍女は一瞬固まって、何か考える様に、

「……は……はい……」

ためらいがちに頷いた。

『……こいつら……何を言ってるんだ……？』

団長は全く状況が分からない中で、この怪しい談義と、それを険しい目で覗いているシャルロの様子にただならぬ何かを感じた。
シャルロはシャルロで、会話を一言一句聞き漏らさないように、ただ気配だけは悟られないように、彼らの会話を盗み聞きしていた。

「……まあ、あの毒を飲んで死なない奴は居ない……残りのラーの使徒はどうする……」

「大丈夫です。今にも刺客が始末しているでしょう。……結界がありましたが、既に手は打っています……」

『……！！？』

大柄な影が、小柄の影の男に畏まって言った。
シャルロは眉根を潜め、これはまずいぞと内心焦っていた。

『……キクマサ君が危ない……』

団長も眉間にしわを寄せ、だんだん状況把握が出来てきた様で、シャルロの方を横目に見る。
どうしよう。

彼女は唇を噛み、手の汗を握る。

ここまで来て、何も掴めずに引き下がるのは悔しいが、今まさにキクマサ君が危険に晒されている可能性があるのは否定出来ない。

彼女は静かに一歩下がり、目で団長に合図をすると、その場からおとなしく手を引いた。

団長は急に彼女が引き下がったので何だ?と思ったが、彼はそこから去る瞬間に、タイミング良く部屋の中の小柄な男の顔を垣間見た。

ゆらゆら、ロウソクの光が映し出したのは、彫りの深いしわだらけな老人の、それでもただならぬ野心に満ちた瞳だった。

目に焼き付いて離れない、鈍いロウソクのオレンジと、たった一瞬のコンタクト。

「おい!!!　一体何だってんだよ!!!」

団長は一目散で走る彼女に聞いた。シャルロは、

「あのねえ!!　あんたが水に当たったとかで寝込んでる間に、私はちゃんと動いてたのよ!!!　さっきの奴らはきっと、初日に襲ってきた奴らの仲間よ!!!」

「……な、なにい！？」

何も知らなかった団長は驚きを隠せず、肩眉を上げた。

「お前、何でそれを俺に言わなかった！！！」

「今はそれどころじゃないわ！！！　キクマサ君が危ないのよ！！！　あんたは運良くここに居るからまず大丈夫だろうけど、彼は部屋に居るのよ！！！！」

シャルロはキッと目の前を睨み、自分の中の焦りにいらだちを感じながら、どうか彼に何も起こっていませんようにと、祈るばかりだった。

『……この女……』

団長はシャルロを睨むように見ていた。

彼女が勝手に動いていたと言うのも死ぬほど気に入らないが、それよりも、危険な事を危険と知りながら、冷静な判断とスキルを彼女が持っていたと言う事に、何だか違和感を感じたのだ。

『……運動神経が良いとか言う問題じゃないぞ……』

団長はヴィルトンでも名の知れた、中国系マフィアの跡取りである。闇の世界で生きて来た自分だから、そう言うのに敏感すぎるのかもしれないが、この時ばかりは言いようの無い違和感を感じたのだ。

直感的に。

キクマサは先輩二人の心配をよそに、相変わらず普通に寝ていた。
彼は何と言うか、感受性は豊かなのだが、こういう所は緩いのだ。

影が、呪いが、災いが、すぐ側まで来ている。

やっと動き出した歴史の物語。

誇り高いファラオと、愛に生きた女王と、二人を翻弄した取り巻きたち。

誰もがきっと、自らの願いを神に祈り、何かを犠牲にして、

誰よりも覚悟を示した者が、世界を手に入れる。

どんな結末だとしても。

ｌｄｒａｗ

38：エジプトプラン20～動く物語～

光と闇は裏表
太陽を祭っていたのに何で
何で光を恐れる

キクマサの部屋の前には、ゆらゆらロウソクの炎が二つほど揺らめいていた。
夜になったらアンケセナーメンさんがつけにくる。
寝にくいかなと思っていたが、案外そうでも無く、特にキクマサは意識していなかった。

毎日何をするでもなく、団長やファラオとお話しして、こうやって早寝する。
電気の無い時代って、そうなんだろうな。

きっと夜が早い。

そう、それは現代で言う夜十時頃の事だった。
キクマサはとっくに深い眠りについていた。部屋の前で何か、暗い闇がうごめいている事に気づきもしない。

ドロドロと、影は人の形を成し、生命を感じさせない冷たい息をはきながら、ひたひたと部屋に忍び込もうとする。
ロウソクの火の前でもたついていたが、すぐ側の木の上に潜んでいた刺客が小言で何か呟くと、一瞬強い風が吹いて、楽々とロウソクの炎を消した。

「……！！？」

しかし、ロウソクの炎は、何て事なく再び灯ったのだ。
刺客の男は眉根を潜め、ロウソクの揺れる炎を探った。

その時、

「……無駄だ」

空気を斬るような、若い男の声がした。

「このロウソクは結界だ。そうやすやすと光を消しはしない」

声の主はいつの間にか、キクマサの部屋の前に立ちふさがっていた。

「！！！！！」

木の上の刺客は頬に一筋の汗を流し、じっと身動きが取れずに居た。
男には分かっていたから。そいつが、王宮軍の総司令、ホルエムヘブだって事が。

ホルエムヘブは剣を手に、向かってくる呪いの化身と斬り結んでいた。
金属のぶつかる音が鋭く響いて、やっとキクマサは目を覚ます。

「……！？」

彼は部屋の前で起こっている事を一時理解出来ずにいた。
何度も目をこすり、瞳を細めてみても、目の前で起こっているのは剣と剣の熾烈な争いだった。

「な、ななな、何がどうなっていったい……！！？」

彼はベットから起き上がると、部屋の中でたじろぎ、「な、ななな」と、とても言葉に出来ないでいる。
その様子に気がついたホルエムヘブは、

「……おい！！　ラーの使徒！！！」

「……え、え、はい！！？」

「お前、“ラーの光”を持っていただろう！！　それをここに持ってこい！！！」

キクマサは頭に手を置いたまま、最初はこの男が何を言っているのか分からなかったが、

「……懐中電灯……っ」

ここへ来た初日の事を思い出した。
確かこの意味不明な化身達は、懐中電灯の光に弱かった。なぜか。
それはキクマサが、ロウソクの炎に化身が近づかないのを見て気がついた事だった。

急いでカバンを漁る。が、しかし、

「そうだった！！！　団長が預かるとか言って、持って行ったんだった！！！　最悪だ！！！」

キクマサは、信じられん！と言うように両手を頭に当て、さすがにこの時ばかりは団長を呪った。
目の前で、知らない人が自分を守ってくれている。たった一人で、あんなにたくさんの化身を相手に。

ホルエムヘブは、木の上にいる刺客から意識を外さず、それでも多数の化身を相手にしていた。斬っても斬ってもキリがない。

その時だった。

「そこまでだ！！　現行犯逮捕だぞ！！」

「…逮捕って何よ」

横からハイテクな電気の光を感じた。
ロウソクの光とは質の違う、白いシャープな光。

キクマサは突然の光に部屋から出る。

「団長！！！　シャルロ先輩！！！」

案の定懐中電灯を手に、息を荒げてやって来た二人の先輩を見た。
団長は顎の汗を拭うと、

「へっ……間に合ったぜ」

懐中電灯を持ってこちらに近づいて来た。
すると、呪いの化身の様子が明らかにおかしくなり、彼らは低く唸りながら後ずさる。逃げ出す者もあれば、光をもろに受けて砂となって消滅した者も居る。

ホルエムヘブはその様子を驚いてみていたが、ハッと木の上に居たはずの刺客の気配を探った。

「……くそ……逃げたか」

舌打ちすると、もはや決着のついたその場を再び見渡し、その場にいる事の出来なくなって去る呪いの化身を確かめる。

「……何だかあっけないものね。シュールな絵だわ」

シャルロはいまいち消化不良と言うように腕を組んだ。
団長はやっと懐中電灯の電源を消すと、

「しょうがねえだろ。これがあいつらの弱点なんだから」

ぽかんと口を開けて固まっているキクマサの方に投げた。

「俺様にそれは必要なくなった。お前が持ってた方がいいな」

「は……はあ」

そもそも、俺が持って来た物なんですけどね。
キクマサは受け取った懐中電灯を見つめながら、急にハッと思い出したように、ホルエムヘブの方を向いた。

「……そうだ……あの、助けてくれてありがとうございました。
……あなたが居なかったら、俺多分……」

「……いや……」

ホルエムヘブは淡々と首を振る。
シャルロはいかがわしそうに彼を見ると、

「……ホルエムヘブさん……あなた、宴会に居ましたよね。
どうしてこんな所に……」

この人がここに居る事を、とても不審に思ったのだ。
さっきまで、私と同じように宴会に居たはず。

「女王の命令です。あなたが宴会場を抜けた事で、女王は私をここへ差し向けた。……影で動いているのはあなただけではないんですよ」

「……女王が……」

なるほど。つくずく侮れない人だ、アンケセナーメンさんは。
このホルエムヘブから感じた隙のなさは、私と同じように内を探っていたからなのか。

「……ところで、黒に辿り着きましたか？」

「……え……」

シャルロはホルエムヘブの唐突な問いに固まるしかない。とてもじゃ無いけど、何も分からなかったなんて恥ずかしくて言えない。
キクマサ君が心配だったけど、この人が彼を守ってくれてたんなら、無理にでも留まっておけば良かったのかも。

「……俺、一人なら顔を見たぜ」

その時、ふいに団長が、驚くべき事をカミングアウトした。

「……え、うそ」

「ああ。見えたんだ。最後の最後に、小せえ、老人の顔をな。……おっそろしい、じじいの面してたぜ」

彼は、思い出すだけでも身震いする、老人のあの野心に燃えた瞳を思い出した。しわだらけの顔に、瞳だけは若々しく、ギラギラしていた気がする。

ロウソクの隙間から、一瞬だけ垣間見た、あの人の顔。

「……老人……」

ホルエムヘブは顎に手を当て、考え込んだ。眉間にしわを寄せ、険しい表情だ。

「思い当たる節があるのですか……？」

「……重臣の中に、年の進んだ者など沢山居る。しかし……」

シャルロの問いに、ホルエムヘブは落ち着いて答えていたが、明らかに何かに気がついていた。

「……顔は分かってんだ。後は簡単だろ……？」

団長は頭の後ろに手を組んで、何だか自信に満ちた口調だ。

ホルエムヘブは、相変わらず何かに引っかかっているようだったが、

「女王に報告しましょう……。なかなか掴めなかった敵のしっぽが、やっと掴めたのです」

相変わらず落ち着いた姿勢で、冷静に判断しようとしている。

シャルロと団長は事情が分かっていたようだが、キクマサだけ何の

事だかさっぱり分からなかった。

「えええええ！！！　シャルロ先輩そんな事してたんですか！！！？」

キクマサは椅子から身を乗り出して、それはもう驚いた。てっきり宴で良い御身分を満喫しているのかと思っていた。

団長は腕を組んだままブスッとして、勝手な行動を取ったシャルロに対し酷くご立腹であった。

「何でそれを俺に報告しなかった。……勝手に動きやがって」

「だってあんた、水に当たってたじゃない！！　言った所で、何が出来たって言うのよ」

「……」

団長は、それを言われたら何も言い返せない。キクマサもフォローの仕様が無い。

彼女は髪を払うと、そっぽ向いた。

「……でも、よくそんな危険な事引き受けましたね……」

「何かしないと、このままだらだらエジプトに居着いちゃうかと思

ったからよ。他のメンバーがどうなったかも分からないのに、もたもたしてられないじゃない」

「……まあ、それは確かにそうだ……。こうなった以上、とことん歴史に関与してやれ。こっちから進めていかないと元の世界には帰れない」

「……元の世界……」

キクマサは、今まで出来るだけ考えないようにしていた事が、ふと頭によぎってしまった。

どうしてこんな所に来てしまったんだろうと言う事以上に、元の世界に帰れなかったらどうしよう……。

フォルテ、ルナシー……レイ……
みんなはいったいどこに居るのだろう。

ここで死んでしまったら、現実の世界の俺はどうなるのだろう。

出来るだけ考えないようにしていたのに、物語が動いた事で、それらがリアルを帯びてくるから。

どうして団長もシャルロ先輩も、こんなに強く向かい風に進む事が出来るのだろう。

歴史に関わる事を、怖いとすら思わないで。

これが、ルネ・ヴィライアーの研修だと言うのか。

ただ技術を学ぶ事だけではなく、全然もっと深く突き落とした、壮大なインパクトの記憶を植え付ける。

経験は糧となり、発想の源となる。

この歴史が俺たちに求めている物は何だ。

それを、考えずにはいられなかった。

l
d
r
a
w

＊ｄｒａｗコラム～四年生～

～四年生～

Ｎｏ．１

シャンデリー・リオール

＊ルネ・ガーネット

特徴／金髪碧眼の王子様タイプの美少年。にこやかで、物腰柔らか。性格／まるで、おとぎの国からやってきたかのような、正統派美少年。しかも、男女分け隔てなく優しく、おっとりしている。しかし彼はすでに、同じくルネ・ヴィライアーのシーダと付き合っている。リオは彼女に骨抜きなので、他の女性には興味が無い。フランスの大企業の息子だが、ここ何年も家に帰ってはおらず、何かありそうだ。

絵画の特徴／祖父の影響で、絵画を始め、絵画を純粋に愛している。才能に頼らず、とことん努力してきた秀才タイプ。

昔は抽象画も描いていたが、最近はとても現実に近い写真のような絵画を好んで描く。多少騙し絵のような、ユーモアのある事をする

ため、現実感と、非現実感を出す絵画は評価が高い。

＜同学年から見たリオ君＞

シーダ
「リオは私が守るわ！！』

「……」

フレイ
「おいリオ！！！この程度の女で満足するんじゃねえ！！世界は広いんだ！！！お前だったらもっと……！？」

（フレイ、シーダに殴られる）

シャルロ
「あんた、若いのに趣味が年寄り臭いのよ……」

「良いじゃない！！それがリオなのよ！！悪い！！」（シーダ）

「黙れシーダ……；」（フレイ）

スノー
「……リオはリオ…」

「……」

No. 2

シルフィーダ・ケイド

＊ルネ・カーネリアン

特徴／薄黄緑のまっすぐの髪を、ツインテール。瞳が大きい。
性格／かなりのしっかり者で、ルネ・ヴィライアーの母と呼ばれる。
自己中心的な四年生をまとめているのは彼女。幼い頃から、医者の
両親について、様々な国での医療活動を見てきたため、誰よりも命
に対する思いが深い。彼女自身も赤十字のメンバー。リオを愛し、
どちらかと言えば世話ばかり焼いてきた彼女が唯一甘えられるのは、
彼だけである。
絵画の特徴／彼女もまた、絵画よりも先立つ物があるので、将来画
家を目指している訳ではないが、ヴィライアーになるだけの実力者
である事は言うまでもない。特に、人物や生物の体の仕組みはよく
わかっているので、彼女の描く生物は生命感に溢れている。リオと
ともにヴィライアーになるため、かなりの努力をした。

＜同級生から見たシーダさん＞

リオ
「うん。愛してるよ。」

「……」（一同遠い目）

フレイ
「おせっかい女。俺のプライベートに口出ししないでくださーい。」

シャルロ
「シーダは一年生からの親友だし、大好きよ。ただちょっとうるさいわね。ま、それがシーダなんだけど。」

スノー
「……みんなの母」

「……」

No. 3

フレイ・レステヴァン

＊ルネ・エメラルド
＊国籍アメリカ

特徴／アッシュグレーの外ハネの髪。チャラチャラした風貌。
性格／見た目道理チャラ男で、ヴィライアーきっての問題児。不良でかなりのプレイボーイだが、シーダのおせっかいのおかげで毎年なんとか留年は間逃れているという、どうしようもないやつ。スノーとルームメイトで、彼によくちょっかいを出すが、いつも冷ややや

かな目で見られる。どうやら四年生メンバーは、彼にとって大切な様子。

絵画の特徴／モットーは“美術とエロスは紙一重”と言うほどに、裸婦画やヌードをこよなく愛する。しかし、彼のこれらの官能的絵画は非常に評価が高いため、これに限っては誰も何も言えない。よくこのモデルの女の子と変な関係になるのが最大の問題。彼もまた“激動の学年”と呼ばれた第四学年の天才の一人である。

＜同学年から見たフレイ＞

リオ

「最近ちょっと丸くなったよね（性格が）」

シーダ

「あんた、タバコ吸いながら絵描くの、いい加減やめなさい！！！」

シャルロ

「あんたこの前、首にキスマークついてて噂になってたわよ（高笑い）」

『えー……それ言っちゃう!?』（カップルのくせに、四年生の中で一番ピュアなリオとシーダには耐えられない内容）

スノー

「……」（え…誰そいつ…みたいな目）

『……存在消されつつある!?；』

Ｎｏ．４

シャルロ・グレディア

＊ルネ・アンバー（琥珀）
＊国籍ギリシャ

特徴／ブルネット（深緑）のきつい巻き毛を片方の肩に流している。小柄だがスタイル抜群。
性格／お金が大好きな賞金女王。性格も見た目道理女王様で、キツい。喧嘩で団長に勝った事のある唯一の人物。彼女の過去は明らかでないが、今はエリーゼ先生の養女。スノーとよく一緒にいるが、二人の関係はいまいち掴めない。誰も覚えていない例の研修を覚えていたり、特殊な人材である。何をやらせてもだいたいできる器用な面も。団長と違って、超強運の持ち主。
絵画の特徴／ルネ・ヴィルトンの中で、スノーと並ぶ世紀の天才。彼女の描く世界は、激しくも美しい抽象絵画。既に大きなコンテストで沢山賞も取っていて、若手画家の中で、最も注目を浴びている一人。スノーに追いつきたい一心でここまできた。

＜同級生から見たシャルロ様＞

シーダ
「ちょっと気に食わない事があると、女王様スイッチ入れるの、もうちょっと控えなさい。今までいったい何人病院送りにしたと思っ

てるの！？」

「……」（全員唖然）

リオ

「……腕組んで高笑いのイメージしか……；」

フレイ

「……エロ恐ろしい」

スノー

「……小さい」

「……；」（え、そこ！！？みたいな）

No. 5

スノーフリーク・ロズベルト

＊ルネ・オパール

＊ドイツ人

特徴／淡い細い髪に、黒目がちな瞳。常に眠そうで、淡々としている。ひょろっとしていて、背は意外と高い。

性格／淡々としていて、常にマイペース。天才肌で口数は多い方ではないが、たまに一言凄いことを言う。あまり体力がある方ではないため、隙あらばダラけている。今まで一人勝ちで、他人に興味が無かったが、シャルロには一目置いている様子。実はクレハの義理の兄。

絵画の特徴／両親ともに画家で、有名な“ロズベルト美術学院”の創設者。兄二人もヴィライアーであったが、スノーはそんな、名のある家族の中でも、最も才能があり、ずば抜けた大天才である。世界から注目を浴びている逸材だが、本人は積極的に賞を出すタイプではないため、学校側に残念がられるが、そこは個性なので諦められている。

＜同級生からみたスノーさん＞

リオ

「……あの目を見てると、どこか遠くへ行ってしまいそうになる。」

シーダ

「あんたほとんどの授業寝てるわよね！！夜何してんのよ！！」

「……あのね、シーダお母さん、夜も寝てるよ」（フレイ）

シャルロ

「ああ見えて、かわいい所もあるのよ、あの子。」

「……え；」（みんな何か言いたげ。でも何も言えない。）

フレイ

「……あいつの周りのダイアモンドダストが見えるのは俺だけでしょうか…」

「……いや…、言いたい事は分かるよ……うん…；」（一同）

～四年生まとめ～

それぞれ非常に個性的で、才能にあふれている。元々第四学年は“激動の学年”と言われるほどの黄金期で、彼らはその中でもトップメンバーである。既に画家として、多大な評価を得ている者も多く、ヴィライアーの中でも、注目度の高い学年。しかし、天才肌が多いため、結構みんな自己中心的だが、五人はとても仲が良く、常に五人でいる事が多い。しかしこの五人、昔は超仲が悪かった訳ですが……それは後に明かされるでしょう。問題児が多いため、団長も手を焼くのはこの学年である。

＜おまけ＞

「四年生に特殊装備するなら」

リオ→『王子の剣』

シーダ→『何でもなおる天使の薬』

シャルロ→『黒い鞭』

フレイ→『使えないゴッドハンド』

スノー→『何もしてないのに発動するマインドコントロール』

次回のコラムは＜三年生＞です。

ｌｄｒａｗ

39：エジプトプラン21～去年の思い出～

やる事成す事

それは生きていくと言うだけできっと、意義のあるもの

「ねえ、俺たちはいったいどこに行くの？」

クレハは自分を乗せているラクダを操縦している、頭のつるつるしている中年の男に気兼ねなく話しかけた。

「……都ですぞ」

すると、隣で並ぶようにラクダを連れて来た老人カーロンは、

「我々は今から、都のアメン神官団のもとへ行くのです。災いの多き今、他神とも手を組まなくてはなるまい。それにどうも、アテン神官団の残党も気にかかる。……あなた達はぜひ、都でファラオに助けを求めると良い……。ファラオはきっと、あなた達を助けてくれるでしょう……」

しわがれた、しかし勢いのある口調でクレハの問いに答えた。残念ながらクレハはそのほとんどを理解しきれなかったけれど、カローンの隣のラクダに乗っていたフレイは胡散臭そうにしている。

「じゃあ、そのファラオに会ったら、俺たちは元の世界に帰れるって言うのかよ」

「それはわしには何とも……。しかし、きっと何か手がかりはあるでしょう」

夕頃の、少し涼しくなって来た時の事だった。

キャラバンの一行は砂漠を横断し、都へ向かっている途中、未来から来たクレハ、フレイ、スノー、ジェイルに出会ったのだった。彼らは右も左も分からず、洞窟の中で小さくなっていた。

「都は沢山の人が居るんだ!!　すごいんだから!!」

タハールは腕を大きくのばして、沢山!!と言うのを強調してみせた。無邪気な声にクレハまで、

「おいしい物ある!?」

「うん!!　お兄ちゃんはきっと好きだよ!!」

仲良しのクレハとタハール。フレイはその様子をしらっと見て、

「よく言うぜ。オメーは何食ってもうまいしか言わないくせによ」

常々楽しそうなクレハとは対照的な態度だ。

クレハの少し後ろからついてくるラクダに、スノーが乗っていた。

「まあ、いいじゃない……。もしかしたら、都に他のヴィライアーもいるかもしれない。都は皆が集まりやすいから……」

「他にも俺たちみたいにタイムスリップなんぞした奴がいれば、な」

スノーの淡々とした言い様に、フレイは大きくため息をつく。確かに、この状況を嘆いても仕方が無いし、ヴィライアーの研修とはこういう物だから諦めもつくけれど。

こうも深刻に考えてくれない奴が多いと先が思いやられる。

フレイは後ろを振り返って、ジェイルの乗ったラクダを探した。

「おい、ルネ・サファイア……。お前はどう思う」

「……！？」

ジェイルは彼から視線を逸らし、相変わらず機嫌が悪そうに態度が良くない。

「……こんなもの、去年の“あの”研修よりずっとましだ。ヴィライアーの研修など、そう言う物だ」

「……あ、“あれ”な……。“ルネ・ヴィルトンに帰ってこ

い”研修な……」

フレイは何だか嫌な物を思い出したように、苦笑いする。さすがのスノーもこの研修の名が出ると、ビクッと反応する。

「えええ～。何なに？　ルネ・ヴィルトンに帰ってこい研修って」

クレハはさすがに一年生なので、この史上最低と名高い研修を知らない。フレイは去年の事を、嫌々ながら記憶の棚から引き出そうとした。

「あれは、去年の秋の研修だった……。俺たちはあらかじめ、くじ引きで４チームに分けられ、研修はチームごとに行うと言われていた。基本的に、歴代の秋の研修と言えば、紅葉の美しい国へ行って、写生とか雅な物なんだが、去年だけは違ってな。俺たちの期待を一瞬で地獄へ突き落とした訳だ」

フレイは、ここがこんなに暑いのに、思い出すだけでなぜかもの凄く寒気がして来た。

スノーもジェイルも、心無しかもの凄く明後日の方向を見ている気がする。

「四つに分けられたチームは、それぞれ地球のどこかに降ろされ、出された課題が“ルネ・ヴィルトンに帰ってくる事”。しかもしかも、事前にそれぞれの財布は集められていたから、皆無一文だ。俺のチームが降ろされたのは、オーストラリアの砂漠だったぜ。……あ、砂漠って言うのはここと同じか」

「お金もなくて、どうしたの？」

クレハはきょとんとして、この研修の趣旨を理解しきれないでいた。
スノーは伏し目がちに、

「……要するに、自分たちの力で、全く知らない土地で、ゼロから“衣食住”を学べっていう研修だったんだよ。ルネ・ヴィルトンにはそういう当たり前の事に疎い奴が多いからね。自分達の力でお金を稼いで、仲間で助け合って、生きて、ギリシアまで帰る。幸い、パスポートや身分証明書は持たせてくれていたからね」

今思えば、あの研修は地獄だったけれど、いかに自分たちが周りに守られていたかよくわかった痛い研修でもあった。フレイは、

「ま、チームにもよるんだけどな。例えば、シーダとシャルロ、レッド先輩がそろっていたチームはそんなに大変じゃ無かったらしいぜ。なんせ、シーダはお母さんだからな。シャルロやレッド先輩は働く事に慣れてるし。あのチームは恵まれてたぜ」

今更だが、自分のチームに団長やナギ先輩という、使えない先輩達しか居なかった事を呪った。
クレハは、分かっているのか分かっていないのか、瞳をキラキラさせる。

「何それ!!　楽しそうじゃん!!!!　……でも、それってこの研修と何か違うの??」

「……」

スノーとフレイは顔を見合わせた。

「まだ、このエジプト研修がどういったものか分からないから、何

とも言えないけれど……。多分、現実感がありすぎたんだ、あの研修は……。内容から見たら、あの研修よりもっと大変だった研修はあったよ。でも……あれは世界の醜い物も綺麗な物も、全てを見る事が出来て、何しろそれこそが、世界のほとんどなんだって思い知らされるから……」

「……」

美術館や世界遺産ばかりを巡っていたって、それは知る事が出来ない。
生きていくと言う事がいかに難しいかを。
夢の世界ではなく、現実だとよくわかったからこそ、自分の無力さが辛かった。

「……ま、あの研修が今年もあるとは思えないけど、これはまた、別の話だ」

フレイは、多分これ以上は話したくなかったのだ。
自分の中に留めておいて、そして、たまに思い出すくらいでないと、やっていけない。

あの研修は戒めだったのだろうから。
スノーもジェイルも、その事はよく分かっていた。

星と月の光が、とても強く地上に降り立つ夜更けの事。
地上に光が無いだけで、天はこんなにも輝けるものなのかと思った。
クレハは昼間も寝ていたと言うのに、今もまた、ラクダの上で操縦者に支えられながら寝ていた。

「こいつは幼児か。本当に自由気ままだな」

フレイは呆れたように首を振る。
そして、夕方から黙ってばかりのジェイルを振り返ると、

「お前、疲れてないか？」

「……疲れてなんかいない」

彼女は相変わらず、警戒の包囲網をピンと張り尽くしていた。ふいとそっぽ向いて、まるで気を許さない。

「……すっかり嫌われちゃってるね」

「フッ……本望ですよ」

フレイはなぜか嬉しそうで、スノーはそれを引き気味に見ていた。

「好き好きってこられると、逆に萎えるんだよなあ……。ほら、俺ってヴィライアーきってのプレイボーイだし」

「それ、自分で言ってて恥ずかしくないの？」

「嫌いって言ってくれる方が、何か燃えるというか」

「……」

スノーは、何か得たいの知れない生き物を見るような瞳で、何かもう、突っ込むことに飽きて星空を見る。

「……そんな事ばかり言って。シーダにまた怒られるよ」

「……なぜ奴の名が出てくる……」

眉根を寄せたフレイとは対照的に、スノーは珍しく微かに笑う。

「シーダは君を、不良息子だといつも怒ってるじゃない」

「……あいつは最初からそうだったよ。おせっかいを通り越して、うるさい母親みたいでさ。俺の事、男として、見ちゃいないんだ」

「……」

キャラバンのゆっくりした進行は、この静かな夜の砂漠にとてもぴったりだった。

昼間とは違って肌寒く、借りたマントを羽織っていなければならなかったけど、この冷たい空気もかえって清々しい。

スノーは相変わらず星を数えながら、

「……ま、そのお母さんのおかげで君は毎年留年を間逃れている訳だ。感謝しないと」

嫌味を含みつつ、彼はくすくす笑うのを止められない様子だった。フレイは「はあ？」と、決して素直に認めようとはしなかったけれど、それがまさしく、反抗期の息子のように見えて面白くて仕方が無かったのだ。

砂の上に残ったラクダの足跡は、造られた先から風に崩され、流され、我々の歩みなど消してしまう。

こんな風に、歴史なんて儚いもの。

記憶なんて曖昧なもの。

思い出なんて脆いもの。

それでも、そう言ったものをあえて目指すと言うのなら、

我々が向かう場所は、きっと誰もが知らない場所。

ldraw

40：エジプトプラン22～ナイル川～

星が瞬いている

この大地と、神の川を抱いて

それは、砂漠組が都へ向かう道中、二日目の夜の事だった。

何だか陰気な風が、砂を巻き上げ、星を隠す、そんな夜更けに、彼らは相変わらずラクダに乗って、一刻も早く都へと向かっていた。

既に砂の細かい砂漠は抜け、大地の割と固い、植物のちらほら見られる進みやすい陸地で、それでも砂が多いせいで、まともに目も開けられず、口数も少なくなる。そんな中、カーロンは、

「……おかしいな……。さっきまではおとなしかったものを……。砂が震えておるの……」

瞳を凝らして、何やら気にかかる事があるようだった。唐突にクレハが呟く。

「……ねえ……何だか、沢山の馬の翔る音がする……」

「……何だって……？」

「沢山来ているよ……。どこからだろう……。いや、どこからも……」

クレハはうまく説明出来ないでいた。それもそのはず、あたりを取り巻く風は、僕らを取り囲むようである。

馬の翔る音が近づいてくる。カーロンは瞳を凝らして、迫り来る何かを見極めようとしていた。

「逃げろ！！！！　盗賊かもしれんぞ！！！！」

彼は出来るだけ大声で、周りのキャラバンに指示を出した。

キャラバン隊は列をなして、砂塵の荒れ狂う中を身を隠しながら駆け抜ける。

砂漠とはいえ、今は既に大地の固いため、足場に気を取られる事は無いが、夜の暗闇の中、遠くからやってくる黒い影はとても恐ろしく感じる。

「盗賊なんて本当に居るんだな。おいおい、大丈夫かよ」

フレイは髪を抑えながら、後を追うその影を振り返った。
キャラバン隊が途中二手に分かれ、カーロンやタハール、ヴィライアーの４人は守られるように先頭を逃がされた。

「ねえ！！！　あの人達は！！！」

自分たちを逃がすために、まるでおとりのように敵の目くらましとなった者達が、クレハはどうしても気にかかった。カーロンは気難しい顔をしたまま、

「あなた方は気になさるな」

と、それだけ。風を切って、どこへ向かってるのかも分からない。我々にはどうしたら良いか分からないから。

「……水の音？」

ジェイルは疲れきった顔を上げた。一夜中逃げた後、日の出にも関わらず眠くて仕方が無かったが、聞こえてくる激しい流れの音に気がついた。

他のヴィライアーも顔を上げる。

「……」

目の前の崖の下には、猛々しい大きな川が、このエジプトの全ての源があった。

「……そうか……ナイル川だ」

スノーは、あまり感情を露にしない瞳を今回ばかりは驚きに染めて、あっけにとられて言葉のでないヴィライアーを現実に戻す。

「ナイルの賜物とはよく言ったものだね。この川があったから、エジプト文明は栄えたんだ」

砂漠に国に、大蛇のように横たわるナイル川。
人々はこの川を中心に町を造り、農業を発展させた。

太陽と、川の恩恵が、この国を形造ったのだ。雄大な自然の前には、人間の営みなど小さなものだ。

「……この川に沿って行きましょう。昼間になる前に、どこか町に入らなくては」

カーロンは嫌に落ち着いた口調だった。
先ほどの事が、気にならないはずが無いのに。

ナイル川の濁流の音にかき消されて、敵が近くに来ていたのにも気がつかなかったのだ。

「！！！！！！！」

突然の風を切る矢の音。
ラクダの悲鳴とともに、ジェイルの乗っていたラクダが横転した。
そのラクダを操縦したいた中年の女性と、ジェイルが投げ出される。
しかもジェイルは崖すれすれの所まで飛ばされ、体を激しく叩き付けられたようだ。

「……くっ！！」

彼女は立ち上がる事も出来ずに、その場にうずくまる。

「ルネ・サファイア！！！」

フレイは舌打ちすると、逃げ出そうとしている自らのラクダから飛び降り、恐れと興奮の現場を抜け、彼女に駆け寄った。

「おい！！　大丈夫か！！！」

フレイが彼女を抱え起こそうとすると、ジェイルはフレイの手を振り払い、彼を睨むと、

「触るな！！！」

「今はそんな事言ってる場合か、　置いて行くぞ！！！」

彼も負けじと彼女を怒鳴った。ジェイルは多少怯んだが、唇をきつく結ぶとそれ以上何も言わなかった。

「おい、　こっちだ！！！！」

カーロンが、仲間の女性を助け起こし、他のラクダに乗せていた。
助けに来たラクダにジェイルを先に乗せ、自分も後から飛び乗る。
キャラバン隊の残りの若者達が、剣を抜いて戦っていた。

既にいくつかの死体と、ラクダの死骸。
散らばった荷物を踏んで、無我夢中で敵を振り切っていた。

スノーとクレハは崖の端に追いつめられていた。
フレイ達に気を取られて、逃げ遅れてしまったのだ。

クレハは眉毛を吊り上げて、剣を持った男達に迫力の無いガンを飛ばしている。

スノーはこんな状況の中、男達の風貌に違和感を覚えていた。全員が同じような黒いマントをかぶって、盗賊と言うには生きている威勢のようなものを感じない。

言葉すら発さない。

「おい、てめえら！！　こっちくんじゃねえよしっしっ！！　ねえスノー、こいつら倒していい？？」

クレハはキーキー何かを言っていたけど、じりじり寄ってくる奴ら相手にこれ以上後退すると、崖から落ちる所まで追いつめられていたためスノーは拳を握りしめた。

クレハは奴らに今にも特攻をかけるつもりだ。
既に臨戦態勢。剣を手に持つ奴らに、素直に勝てると思っている。

「やる気の所悪いね、クレハ」

スノーはクレハの前に手をかざし、そのまま彼を崖から突き落とした。

「……え……」

クレハは一瞬の事でどうにも出来ず、驚きの表情のまま、下へ下へと落ちていく。
スノーの相変わらずの無表情が、視界に映っている。

「……君ならもしかしたら、倒せたかもしれないけどね」

沢山の敵を前に、現実を見た。あれでも一応自分の弟だから。
ナイル川に落ちたくらいで死ぬような、普通の子ではないのを知っていたから。

「スノー！！！　クレハ！！！！！」

遠ざかっていく中、フレイは目を見開いた。
クレハが崖から落ちて、スノーが奴らに捕って行く様を見ているしか無い。

「おい！！！　あいつらを見捨てる気か！！！」

「現実を見ろ！！！　今帰ったら、全員が捕まるぞ！！！！」

足を止める事は出来ない。ジェイルも瞳を揺らして、青ざめている。

「そんな……私たちだけ助かるなんて……そんな……」

こんな事、予想すらしていなかった。
逃げて逃げて、仲間を見捨てて逃げて、今も逃げ続けて、あの人達を犠牲に、敵を振り払ったようなものだ。

「あの高さから落ちて、生きているはずは無い」

カーロンは低い声でそう言うと、首を振った。
だいぶ先まで逃げ切って、もう追っ手は居ないようだった。

カーロンの腕の中で、いまだに怯えている小さなタハール。クレハ

が崖から落ちたのを目の当たりにて、相当なショックを受けているようだった。

「そんな事あるか！！　いやあるかもしれないけど……でも、あいつはただ者じゃない。　あの野生児がナイル川に落ちたくらいで死ぬかよ！！！」

自分がめちゃくちゃな事を言っているのは百も承知だ。
でも、ここで見捨てるわけにはいかない。フレイは柄にも無く熱くなっている。

ジェイルも今ばかりは彼に便乗する。

「私も同じ意見だ。彼が早々死ぬとは思えない……。万が一でも、生きている事に賭けて、彼を捜すべきだ」

先ほど地面に叩き付けられ、いまだに痛む左半身の事を気にかけるより先に、あの二人の事が気がかりだった。

「……珍しく俺に賛成してくれるのな」

「当然だ！！　二人は同じヴィライアーだぞ！！……私たちだけむざむざ助かって……」

彼女は、何だか自分に憤りを感じているようで、フレイは少し意外だった。
男嫌いなこいつの事だから、別にどうでもいいのかと。でも、やはり同じヴィライアーという事か。

カーロンは唸りながら、先ほどの黒いマントの男達を思い出す。奴

らは盗賊などではない。
何年も見なかったから、油断していた。
奴らの姿を忘れるはずが無い。

「……先ほどの奇襲は、盗賊などではなかった……。忘れるはずも無い、奴らはテル・エル・アマルナの兵士達。血も涙も無い、神に呪われたもの達……ラーの使徒の香りを、いち早く嗅ぎつけたと言う事か……」

カーロンの言葉に、生き残ったキャラバン隊はざわめき始めた。
ジェイルとフレイは何の事か分からず、顔を見合わせる。

「……お前達が彼らを心配する気持ちはよくわかる……。しかし、彼らを助けたいならば、やはり急いで都へ行くべきだ。今のファラオならば、助けてくださる。彼はラーの使徒に寛大だ。……神が授けてくれた使徒ならば、このような所で死ぬはずが無い」

彼の言葉は確信に近く、まるで喜びにも似ている。
こんな状況で、何が神様だと言いたくなったが、フレイは口をつぐんだ。

スノーとクレハを助けたいと思う反面、彼らが死んだとは到底思えない、妙な安堵感。
ジェイルはとても心配そうにしているけれど。

多分これは、この世界は、古代エジプトでありながら、美術品の魔力の延長線。
イマジンストーリーを超えた、幻想物語。

現実と非現実の狭間を、時という曖昧なものを媒介に、鍵と言う美術品に見せられた世界。

ならば、きっと物語を突破するきっかけはあるはず。

リアル感が無いのに、それでも進んで行かなければ。

リセット出来ない、やり直しの出来ないゲームみたいだ。

ｌｄｒａｗ

41：エジプトプラン23～ネフェルティティ～

芸術とは、残酷な歴史だからこそ光る作品が生まれる事がある
本当の姿が、どんな物だって、美しさが優しさを伴っている訳ではないのだから

「なあ、ルネ・サファイア。お前、何で男嫌いなの？」

「……」

フレイの突然の問いかけに、ジェイルは全く迷惑そうに、彼を睨んだ。
そして、何とも答えずにそっぽ向く。

「ちょっと～……お話ししてくれたっていいじゃん……。ガードが固いねえ……」

フレイはひょうひょうと、わざとらしく言ってみる。彼女の顔色をうかがってみるが、眉間のしわはますます深くなるばかりだった。

「……余裕そうだな。仲間が二人も居なくなったと言うのに」

「スノーとあの野生児？……まあな……」

「仮にもロズベルト先輩はお前のルームメイトだろ……。薄情だな」

彼女はラクダの上から、視線だけフレイに向けて軽蔑の口上を述べる。

しかしフレイは何て事なさそうに、

「あいつは大丈夫だろ。俺はいまだかつて、あんなに図太い奴を見た事が無いぞ」

「……先輩が？」

スノーの印象とはかけ離れた、“図太い”と言う言葉は、彼女の表情を驚きに変えた。

「ああ。……パッと見、つつけば倒れそうな顔してるけどな。ああ見えて図太いぞ。……多分考えるのもめんどくさいんだろうな。基本ローテンションだし」

「……」

ジェイルは少し、眉間のしわを緩めた。
フレイはそう言う所を見逃さない。

「なんだ……。この話になったらやけに食いつきいいな。……ま、まさかスノーに惚れてるのか？　……や、やめとけあいつは……相手にされねえぞ……」

フレイは、まさかと焦って、わざとらしく顔の前に手を持って来て全力で振った。「あっちゃー、可哀想に！」と話を膨張させる。これはもうわざとの演出である。
ジェイルは頬をひくつかせて、再び彼を睨むと、そのウザたらしいフレイ相手に無駄と分かっていても反論する。

「……違う！！　どうしてお前はそうくだらないんだ！！　……ただ、少し……仲間の事はよくわかってるんだなと思っただけで……」

彼女はため息をつくと、どうにもこの男と会話をする事に疲れたのか、その先は言わなかった。
しかしフレイは彼女を覗き込むと、

「あれ～…？　もしかして俺に惚れた？　惚れちゃった？？」

俺は競争率高いぞ～、と。
ジェイルは、このしつこくテンションの高い勘違い男に、イライラを募らせていた。

「……その口を縫ってやろうか。私の前で一生、そのつまらない冗談を言えなくしてやる」

「おー恐！！　恐いなールネ・サファイア。他の男にもそんな風な

のか？」

フレイのチャラチャラした態度は、彼女にはどうも良くないようだ。
というよりむしろ最悪。
穏やかなキャラバンの道を、商隊の歩みに任せたまま進む。
自分たちでは何もしようがない中で、フレイは彼女にちょっかいを出す以外に、気を紛らせる事を知らなかった。

その時、前の方に居たタハールが振り返って、

「お兄ちゃん！！　お姉ちゃん！！　都が見えてるよ！！！」

小さな手の指差す方を、いつの間にかやって来た丘の下の営みを見下ろした。

「……」

今まで砂漠ばかり見て来たから、言葉に詰まった。
こんな、生命を感じない砂の王国の中で、彼らはたくましく生きていく。

土の家を造り、灌漑農業を行い、川の氾濫と、太陽の周期を見極めて。

彼らは今でも、世界に誇る文明を発達させたのだ。

再び栄華を取り戻したばかりの生き生きした都、メンフィスであった。

一方、テル・エル・アマルナという、短い栄華を誇った、忘れかけられた古都がある。
いまや重々しい空気と、かつての大きな革命の因果から、その呪いをじかに受けた都市だった。

スノーは冷たい石造りの牢屋で目を覚ました。

「……」

彼は一時、自分の置かれている状況を理解出来なかったが、記憶のはしばしから自分が捕まってしまった事だけは分かった。
ため息をつく。

「……」

軽くあたりを見渡して、再びため息。
ごろんと横になって、静寂の冷たさを身に浴びる。

「……何て事無い。……快適なものじゃないか」

ここは静かで、何より動かなくていいのだ。
砂漠の暑い中を動き回るより、涼しい静かな場所で好きなだけだらだら出来るとは。

敵も親切なものだな。
彼はそのまま、自分の置かれている状況すら、何ら気にせず、再び眠りについた。

「……おい！！　起きろ！！……おい！！！」

乱暴に呼ばれる声で目を覚ました。うつろな瞳をこすって、不機嫌そうな表情だ。
スノーは牢屋の格子から覗く、彫りの深い男の顔を見た。

「ネフェルティティ様がお呼びだ！！……さあ、出ろ！！！」

「……？」

スノーはその男に、乱暴に牢屋から引っ張りだされると、手に縄をかけられそのまま連れて行かれた。
特に抵抗も見せず、いまだに眠気が取れない様で、うつらうつらとしている。

「全く、のんきなものだな。……今からお前は確実に殺されると言うのに」

手に槍を持った看守が、わざとらしくニヤニヤ笑う。しかしスノーはあくびを返すだけだった。
そしてスッと、温かみを感じない視線を向けると、

「……ていうか、あんた誰」

「……」

相変わらずのマイペースっぷりである。

立派な宮殿にしては、味気ないというか、暗いというか。
全体的に空気が暗いのだ。

縄に繋がれたまま、長い長い回廊を歩いて、いつしか広間に通された。それはとても広々とした。

ゆらゆら、まっすぐに並んだ火の器。
影を落とす数人の男達。多分お偉い様方の視線を浴びている。

オレンジに照らされる広間の中で、スノーは呆然と立ち尽くしていた。
目の前の、人のいない玉座を超えた壁に、大きく描かれている、クラゲのようなイソギンチャクのような図。
膨大なヒエログリフ。

どこかで見た事がある気がする。
普通に授業とかで。

でも、いったいなんだったか思い出せないのだ。

「！！！」

不意に、頭を掴まれて跪かされた。看守の男がスノーの頭を強引に床へ押し付けたのだ。

「ネフェルティティ様の前で、何たる無礼な！！」

スノーは壁画に気を取られて、先ほどまで誰もいなかった玉座に、いつの間にか座っていた女性に気がつかなかったのだ。
看守の力に反発して、少しだけ顔を上げた。そいつの顔を見てやるために。

ネフェルティティと言う名前はよく知っていた。

「……そなたは未来から来た異邦人。“ラーの使徒”に間違いは無かろう。……妾はその風貌を、よく覚えておるからのお……」

妙齢の女性の声。

威厳に満ちた、よく響く声だ。

頭に長い金飾りの帽子をかぶった、敵ながらに美しい女性だ。

首筋のスッと長い、女性らしいしなやかさは、やはり歴史に名を残すだけはあると。

この女性こそ、後に残る胸像で有名な、アクエンアテンの王妃ネフェルティティ。

「……」

スノーは彼女をじっと見た。感情の読めない瞳で。

「……憎きラーの使徒が再び現れるとは思っても見なかった……。十年前の恨みは、今でもこの胸の底で煮えたぎっておるわ。……お前達は私の……私たちの理想を打ち砕いたのだ。おかげであの方は“理想”を叶える事無く死んでしまった……」

「……？」

ネフェルティティという女性は、玉座から立ち上がると、ゆっくりスノーに近づいた。

手に持つ王錫の、床を打つ音が大きくなる。

彼女は眉間にしわを寄せ、先ほどまでの穏やかな口調とは裏腹に、スノーを見下ろす眼差しは鋭く恐ろしかった。

「おかげで妾は呪いを受けた……。崇めるアテン神は封じられ、この地に残され……我々の成すべくして成してきたあらゆる改革が無に帰して行くのを見ていた……。それもこれも、貴様らラーの使徒が来たからだ……」

女王は王錫の先でスノーの顔を上げた。

彼女の憎しみは、全身に鳥肌が立つほど凄まじく、禍々しい。

「……」

「……妾は知っている……。お前達が隠した黄金のマスクが、この呪いを解く唯一の手段だという事を……。十年前、お前達が隠した、黄金のマスクだ！！！」

彼女はまるで、魔女のような恐ろしい顔をしていた。

あの美しい、古代エジプト芸術品の最高峰と言われている、ネフェルティティの胸像のモデルとなった人物だと言うのに。

スノーは息を飲んだ。

「……命が惜しくば言うがよい。……黄金のマスクはどこにある……」

「……？」

スノーは相変わらず何も言わずにいた。と言うよりも、話が全く見えてこないのだ。

だんまりのスノーに、前女王は眉をぴくりと震わせて、手に持つ王錫に、いっそう力を込める。王錫の先についた丸い飾りで、思い切り彼の頬をぶったのだ。それは見事に、痛々しい音をたてて。

「……気に入らぬのお……その何を考えているのか分からない瞳が……。十年前のラーの使徒は、もう少し威勢が良かったと思うが……」

彼女は体勢を崩したスノーを相変わらず冷たい視線で見下ろしながら、カン！と王錫を地面に打ち立てた。

スノーは一時顔を下げていたが、ゆっくりと、視線だけを彼女に向ける。

「……美しき者来る……」

スノーは初めて、ネフェルティティの前で口を開いた。

彼女はその言葉に、ぴくりと反応する。

「……ネフェルティティって……そういう意味だったよね。授業であなたのレポートを書いた事があるから、よく覚えてる。……あなたの胸像を見た時、ぴったりな名前だって思ったんだよ……。きっと、いつまでだって、あの胸像は愛され、傑作だって言われ続けるよ……」

芸術品に衰退は無い。

時が経てば経つ程、傑作はより威光を放つ。

「……あなたは美しいって……」

スノーは、彼女が気に入らないと言った瞳で、その人を見つめていた。
まるで、心の中を暴かれそうな、美しい茶色の瞳で。

淡々とした視線は、この状況の恐れ以上に、雪のようなしんとした冷たさを感じる。
落胆の悲しみを。

王妃ネフェルティティの胸像。
美術に通じる者なら一度は見てみたいと思うだろう。

以前、イギリスの研修に行った時、美術館で目にした。

写実性を重んじたアマルナ美術の最高傑作。片目を失った沈黙の胸像。不完全故の芸術。
美しき者来ると、そのような名で呼ばれるほどの美貌は、その美術品に語られるように現代ですら名高いと言うのに。

初めて見た時、心震わせるほどの傑作に、あなたは名を残していると言うのに。

「……そのような目で見るな……っ」

ネフェルティティは、少なからず感じ取っていたのだろう。スノーが向ける、視線の意味を。

憎しみや恨みなんかより、よっぽど心に刺さる、落胆と呆れ。期待はずれと言うようなとんでもない喪失感を。

その、無の眼差しを。

「見るな！！！」

女王は身を震わせ、再び王錫の先で彼をぶった。

耐えられなかったのだ。その眼差しに。

十年前もそうだった。

“こいつら”は、私を知っている。そして、とても悲しそうな、残念そうな、そんな顔をする。

だから憎いのだ。

全てを否定されているような気がする。

私と“あの方”が行ってきた全てが、間違っていたと。

「……でも……この治世に苦しんできた人には悪いけど……僕は一つだけあなたを尊敬している……」

スノーは急に口を開いた。
殴られたって、相変わらず淡々とした口調で。まるで痛みなど無いかのように。

「……短い繁栄だったからアマルナ美術とは、より貴重で尊くて、美しい物となった。皮肉にも、美術品とはそういう物だからね……。時代が残酷であればこそ、その価値は高くなる……。それを作り出してくれた事は、正しかったと思ってるよ……」

「……」

ネフェルティティは、驚きと、言葉にならない感情に、一時何も言えなかった。
しんと、広間が静まり返る時、呪いを受ける者の哀れな姿を知る。

玉座の後ろから、そっと覗く壁画。

あのクラゲみたいなマークは、恐れ多くもアテン神。
太陽の光を意味した姿であった。太陽そのものを神格化した姿。

その光は手となっていて、全ての人々に慈愛を与えると。

いまや、呪いの対象になってしまった、悲しい神様。

ldraw

４２：エジプトプラン２４～宰相アイ～

折り返しを迎えた物語

散らばったパズルのピースを集めるように、答えを導いていく

太陽の日差しの強い、午前中の事。
キクマサはいつものキオスクでうつらうつらしていた。

昨日はあまり眠れなかったのだ。
きっと今、団長が、ホルエムヘブさんやアンケセナーメンさんの計らいで、昨日顔を見た老人と言うのを確認しに行っている。

「俺がちゃんと、その男を見て、誰だか分からないと何も始まらないだろ」

「そ、それはそうだけど……」

団長の言葉に、シャルロ先輩はいささか心配そうだった。
それもそのはず。

基本的に、高官達の中には我々ラーの使徒と言うのを警戒している者は沢山居るし、再び現れたのは厄災だと言う者もいるらしい。偉い人ほど宴会にはもちろん出ないし、むしろ宴会こそ、我々の様子を伺うための当て馬とも言える。

きっと、ファラオもなかなか意見しづらい様な高官が集まる議会。
それが今朝行われるらしい。

団長はこっそり広間を見るという。

「大した事ないさ。俺は影から確認するだけなんだから」

団長はいつものように偉そうに腕を組む。
キクマサも、まあそんなに難しい事じゃないかなと思っていたが、シャルロ先輩だけは相変わらず気難しそうな表情だった。

キオスクでうつらうつらしていたら、急に視界が真っ暗になった。
目隠しをされて、ドキッとしたせいで目が覚めた。

「もう……先輩……」

「あら、そんなに驚かなくなったわね。……残念だわ」

パッと視界が明るくなった。

急に手を離されると、目がシパシパする。シャルロはキオスクの柱を手でなぞって、つまらなそうにキクマサの側にやってきた。

「眠そうね、キクマサ君」

「あ、……はい。昨日あんまり眠れなかったんで」

「……あいつが心配？」

シャルロはキクマサの向かい側のベンチに座ると、足を組んだ。

「心配っていうか……俺はむしろ、シャルロ先輩が団長を心配しているように見えましたけどね……」

「……私が？　何であんな俺様至上主義の奴を！」

彼女は、まさか！と言うように苦笑いで手を振った。

キクマサは眉根を寄せると、

「だって昨日、団長が確認しに行くって言ったら、先輩少し戸惑ってたじゃないですか。俺はあれが凄く気になっていたんです」

「……」

いつになくハキハキした口調で、シャルロを驚かせた。彼女は少し

視線を逸らすと、

「……何て言うのかしら……。例えば、銃って強いじゃない。人間なんかすぐに殺せるでしょう？」

「……？」

「でも、一つの銃より、何も持ってない人間が何百人、何十人って集まった方が強いのよ。結局、女王や将軍が内密に援護していたって、私たちは圧倒的にアウェイなのよ」

キクマサは彼女の言葉にぽかんとしていた。

何を言っているのか分かりづらいと言うより、理解するにはキクマサは経験不足と言うのか。

彼女はそんなキクマサの表情にくすくす笑う。

「まあ、私は疑り深いのよ。思い過ごしなら良いわ。……ただ、考えるのは自由でしょう？」

「……先輩は凄いですね」

「あはは。私は何もしていないわ。凄いのは団長の根拠のない自信よ。私はアレのようにはなれないわ」

キクマサは、なんだかんだ言ってシャルロは団長をちゃんと信頼しているんだなと思った。仲は悪くとも、仲間意識はあるのか。

それともただの嫌味か。

どっちにしろ、団長が成果を上げてくれるのを待つしかなかった。

「絶対に、人に見つかってはいけませんよ」

若き将軍、ホルエムヘブはそう言った。
団長は一番隅の柱に身を隠しながら、こんな所しかなかったのかよと文句を言いたくなった。

大きな広間の玉座。
そこにはファラオ、ツタンカーメンが。その隣に女王アンケセナーメンが。

そして、ファラオの前には深々と頭を下げた家臣達がずらりと並んでいた。

「……どんだけ頭下げてんだよ。これじゃ顔を見るどころじゃねーぞ……」

団長はイライラしながら、舌打ちをした。
しかもあれだけの人数を、どこから確認したら良いんだか。
思っていたよりかなり面倒そうだ。

川の氾濫がどうとか、太陽のなんたら、民の生活が云々など、様々な事が議題に上がる中、団長から見てもやはり、高官達の権限は強いなと思った。ファラオもやはり、古株の高官や神官達の意見は無視出来ないらしい。

「先代が我々に残した物は、王家を信じなくなった民と、混乱したままの国だけだ」

「最近は先代の墓を荒らす者も多い。先代の名を、墓から消し去ろうとするのだ」

「それだけ呪われていると言う事よ…。名が無ければ、魂は復活する事は無い」

話題はやはり、荒れた国政についてと、先代の残した傷跡について。死んだ後の方が大切だと考えられていた古代エジプトの思想さながら、アクエンアテンが死去した後も、民は彼を許す事無く、あらゆる遺跡や墓から彼の名を消した。

名前が無くては蘇る事は無いと言うのだ。

「ときにファラオ、例の“ラーの使徒”はどうしておられるか？」

その時、とても落ち着いた、柔らかい老人の声がした。

「……アイ……」

ファラオは玉座で、彼の唐突な質問に戸惑っていた。
老人は背が低く、金の杖をついている。彼は宰相アイ。アクエンアテンの時代からファラオに仕え、国を導いてきた者。今では間違いなく国を動かしてきた第一人者であった。

団長は顔をしかめた。こちらからは顔が見えず、後ろ姿しか見えないのだが、その背格好は見覚えがある。

アイは優しそうな口調から一変して、

「ラーの使徒は我々に幸運をもたらす者。十年前のラーの使徒の事は、私アイもよく覚えております。彼らのおかげで、この国は救われたのです。……しかし……先代の行いは神々の怒りをかい、とうとうこの国は呪われてしまいました。呪いの化身や、行き場を失った“バー”が、現世をさまよっております。しかも最近では、テル・エル・アマルナの残党共が、密かに動き始めているとか……。奴らは呪いを作った現況の分際で、逆に呪いを利用する術を身につけている様です。魂を愚弄する、許されざる行い……」

「それは重々に承知している。いったい何が言いたい……アイよ」

ファラオは眉根を潜めて、アイの長い話に対して質問をする。

「私めは前から言っております。テル・エル・アマルナの残党をこのまま野放しには出来ませんぞ。彼らは再びこの国を手に入れようとしているのです。生かしておけば、この荒れた時代に、ますます火種を撒く事になります。ここは一つ、ラーの使徒のお力をお借りするのが良いかと」

アイは深々と頭を下げつつ、言葉には勢いがあった。
ファラオやアンケセナーメンは驚いて、急いで彼に反論を示す。

「何を言っておるのか！　彼らは尊ぶべきラーの使徒なのだぞ！！」

「だからこそなのです！！　彼らは伝承通り、この国の呪いを解く者達。きっとテル・エル・アマルナの残党をお裁きくださる」

「彼らを戦場に出せと言うのか！？」

今まで黙っていたアンケセナーメンも、これには口を挟まずに居られなかった。
宰相アイは当然と言うように、

「当然です。彼らは救世主と成るべくしてここに現れたのです。そうでないならば、いったいラーの使徒とは何なのですか、王妃よ」

「……そ、それは……」

厳かな広間で、威厳のある声がこだまする。団長も柱の影に身を潜め、息を飲んだ。
何だかとんでもない話をしている。

若きファラオは一度小さく深呼吸をすると、ゆっくり拳を握って、

「……テル・エル・アマルナにいるアメン神官団の残党は、確かに厄介だ。国を思うなら、討伐も他ならない……。しかし、ラーの使徒をいったいどうしろと……」

「……それは簡単な事です……」

アイはファラオに向かって、相変わらず達者な口上で、再び口を開こうとした時だった。

急に広間の端の通路側が、ざわめき始めた。
跪いている者達も、何事かと顔を上げ、それに伴い団長はより柱の影に身を潜めた。

『……何だ……？』

ファラオやアンケセナーメンも顔を上げ、

「いったい何事だ」

ざわめきの大きくなる向かい泡の通路に向かって、疑問の声を投げかけた。
ざわめきの先頭には、集会に参加していなかったホルエムヘブが。

そして、旅人の様な格好をした老人。

何より団長が驚いたのは、その後ろに、同じヴィライアーであるフレイとジェイルが居た事だった。
それは、大声を上げてしまいそうなほどに。

「……」

広間は一瞬しんとなった。
ファラオも王妃も、宰相アイも、その他の高官まで、皆が驚きの瞳で彼らを見ていた。

「……ホルエムヘブよ……、いったい何事なのだ。そこに居るもの達は……」

「ファラオ。このような時に申し訳ございません。……しかし、時は一刻を争うという事で。私も幼き頃の恩がある身。どうかお許しください。」

「……？」

ファラオはその言葉に理解を示せなかった。
ホルエムヘブの言っている事がまるで理解出来なかったのだ。

宰相アイはとてもいぶかしげに、

「ホルエムヘブよ。そなたいったい何をしているか分かっているのか。この玉座の間に、そのような薄汚い民を入れるとは」

「……ほお。お前も偉くなったものだな……」

そのとき、ホルエムヘブの後ろで顔を下げていた老人が顔を上げた。
低い、それでも存在感のある声で、老人はまっすぐに宰相アイを見抜く。

「私の顔を忘れたか！この、太陽神ラーの最高神官であったカーロンを！！！」

「！！！！！」

老人がそう声を張って言い切った時の、宰相アイや、その他の高官の反応。

動揺を隠せないと言うより、あり得ない事に言葉が出ないと言った方が良いだろう。

カーロンはファラオを見上げた。

「ファラオよ。このようなご無礼をお許しください。しかし事態は一刻を争う事なのです。どうかその慈悲深い心で、我々に力をお貸しください」

「い、一体何なのだ……。そなたは何者だと言うのか……」

「ファラオはきっと、私めを覚えてはいらっしゃらないでしょう。私はかつて、先代ファラオの改革によって都を追われた“太陽神ラー”の最高神官を務めていたものです。かつては太陽神アメン、太陽神ラーの二つの大きな神官団が王家を囲んでいたのです。しかし、改革によりアテン神の台頭著しく、我々アメンとラーの神官団は力を失ったのです。先代への反乱を企てた我々ラーの神官団は、先代亡き後はほぼ壊滅状態に陥り、力を失っておりました。そこに居るアメン神の神官団共は、事が収まるまで行動を起こさず、おそれながら先代が亡くなってからはここぞとばかりに、幼かったファラオにすり寄ったのです」

カーロンは、言葉のでない高官達や、ファラオに鋭い瞳を向け、そして再び頭を下げた。

「無礼をお許しください。このような事はすぎた事。我々とて、今

となってはどうしようもない事。時代の流れなのです。……しかし、ここからの話は、これからの国政に多いに関わりのある事」

カーロンは振り返り、フレイとジェイルをファラオの前に出した。二人は顔を見合わせ、何が何だか分からないと言った様子だった。

「この二人は、かつて国を救ったあの“ラーの使徒”と同じく、未来から来た者達。しかし、本当はここにいる二人だけでなく、まだあと二人居たのです」

カーロンは、今までのキャラバン隊の長老であった雰囲気から一変して、威厳のある、まさしく最高神官の風格であった。

「我々はここへ来る途中、テル・エル・アマルナの軍勢に襲われました。そのせいで、仲間の半分は犠牲となった。ラーの使徒である少年一人が奴らに捕えられ、もう一人が争いの中ナイル川に落とされ流されてしまった。国を救うはずのラーの使徒を、我々は守れなかったのです」

拳を握りしめ、悔しさに歯を食いしばりながら、カーロンはかつての威厳ある声を張った。

「ファラオよ、ラーの使徒の大いなる力を、私もあなたも、よく知っているはずだ！！　テル・エル・アマルナに捕えられた少年をどうかお救いください。奴らは十年前の事から、ラーの使徒を深く恨んでおります！！！」

カーロンは深々と地に頭をつけた。
柱に隠れていた団長も、とんでもない事態にあっけにとられるばかりであった。

ファラオは眼下のカーロンと、二人のラーの使徒を見つめ、押し寄せる事態に困惑している。

その中でただ一人、宰相アイだけは冷たい瞳で彼らを見下ろしていた。
その時、一瞬だけ、ぎらりと瞳が光ったのを、団長は偶然目にした。

「……」

ごくりと唾を飲み込んで、こみ上げるしてやったりと言う感情に、口に弧を描くばかり。
そうか。見覚えがあるぜ。

あの、ロウソクの隙間からみた、野心に燃える老人の薄気味悪い顔。

なるほど。
お前が裏切り者だったのか。

宰相アイ。

ldraw

43：エジプトプラン25～再会～

我々の再会が示すものは、

十年の時を経て始まる、新たな戦いの幕開け

「ジェイル……！！！！！」

「シャルロ先輩！！！！」

二人は中庭のキオスクを駆け抜け、抱き合った。久しぶりの再会の嬉しさに、心震わせながら。

「ああ、先輩！！　私、ここ一週間ほど、生きた心地がしませんでした。良かったシャルロ先輩が居てくれて……」

「ジェイル、あなたもこの世界に来ていたのね……」

泣きそうなジェイルの髪を撫でながら、シャルロは可愛い後輩を心配した。

「どうやってここへ来たの？　あなただけなの？」

「おい、シャルロ。目の前に俺が居るのにそれは無いだろ」

シャルロはその声に顔を上げた。

懐かしい声はよく知っている者で、同じ四年生の仲間ならなおさら。

「……フレイ！！」

「よお、元気そうだな」

シャルロはフレイを見つけると顔を明るくさせ、彼の肩をぽんぽん叩いた。

「フレイじゃない！　たった二週間会わないだけで、こんなにも懐かしいものかしら」

「ふっ……相変わらずだな。お前はどこに行ったって生きてそうだもんな」

何だか二人は仲良さげで、お互い再会が嬉しいようだ。ジェイルはフレイを相変わらず睨んでいる。

今しがたこのフレイとジェイルは、シャルロ達の居る中庭に連れてこられたのだった。同じ、“ラーの使徒”として。

その時、たまたまその場から居なくなっていたキクマサが戻って来て、いつの間にやらそこに居た二人に驚くやら焦るやらで。

「……！？　え……何で！？」

ジェイルとフレイも、キクマサを確認する。

「お……ここに居たのはお前だけじゃねーんだ……。そいつは？」

「何言ってるのよ。二年生のキクマサ君よ。ちなみに団長も居るわ。会ってないの？」

「ああ……。そっか……団長が居るのか……変な事できないな……」

フレイは顎に手をあて、ううぬと考え込む。
シャルロはしらけた瞳で彼から目を背けると、再びジェイルに目を向け、意外であると言うように彼女とフレイを交互に見た。

「でも、よくあんた達一緒に居られたわね……最悪の組み合わせじゃない」

「一緒になんて居られません！！！！」

ジェイルはここぞとばかりに声を張り上げる。早くこの屈辱を言いたくて仕方が無かったと言うように。
シャルロもキクマサもぽかんとしてしまっている。

「こんな男とずっと一緒に居なくてはいけなかった私の苦労が分かりますか！？　こんな、ちゃらんぽらんな男と！！！！」

キクマサはジェイルのもの凄い怒りっぷりに、シャルロとは違う恐さを感じて、そそくさとシャルロの背中に隠れた。ジェイルからはもの凄い威嚇を感じる。なぜか自分にも。

シャルロはゆっくりフレイの方を向いて、小声で、

「ちょっと……もしかしてあんた、手ぇ出したんじゃないでしょうね」

「まーさーかー。同意の元ならともかく、嫌がってるのにそんなー……」

「うわ……信用出来ない、なにその顔」

しらばっくれているフレイは、話をずらそうとキクマサに目を付け、気軽に絡んでくる。

「よお、新入り。シャルロ先輩に色々教えてもらったか？　そう、色々……」

「？……はあ……色々教えてもらいました」

「ほうほう。それはいったい……」

バッシイイイイイィ！！！！

鈍いえぐるような張り手がフレイをキクマサから引き離した。

キクマサは青ざめて、その吹っ飛んだフレイの行方を見守る。

しかしフレイも凄いというか、頬を抑えながらすぐに立ち上がり、

「良いパンチだったぜ……」

とか言ってる。なんてタフな人だ。

シャルロは腕を組んで彼の前にデンと立って、フレイを見おろしている。その目がとても怖い。

「キクマサ君にあんたの卑猥感を持ち込まないでくれる？　彼はねえ、クールそうな見た目の割にイノセントという属性なのよ。そこが可愛いのよ。いたいけな二年生をあんたサイドに引きずり込まれたらたまらないわ」

「何だと!?　俺だってクールそうだとか言われますけど!!」

「何言ってるのよ。あんたはそう見える、ただの変態よ」

なんか勝手にむちゃくちゃな事を言ってる気がする。キクマサはとりあえずそっと、キオスクのベンチに座る。あまり話した事の無い先輩を前に萎縮しているのかもしれないが、初めて団長がここに居てくれたらなと思った。

そのとき、少しだけジェイルと目が合ったので、ぺこりと挨拶したが、きつく睨まれてそっぽ向かれたので、軽くショックを受けた。

「……そうだ。こんな話をしている暇はないぞ、シャルロ。実は、ここに来る途中、スノーが捕まってしまったんだ。テル・エル・アマルナの残党とかいうのに」

フレイはさっきまでのテンションと裏腹に、急に真面目な口調で報告する。
忘れていた訳ではない。ただ、あまりにも考えたくない事実だから。

「……何ですって！！！？」

シャルロは瞳を大きく開け、捕まってしまったスノーを思う。二人は非常に仲が良かったから。

「まずいぜ。あれから数日がたった。今すぐにでも助け出さないと、あいつ殺されるかも……」

「……そんな……まさか」

シャルロは驚きと、一抹の不安から視線を斜め下に降ろし、歯を食いしばっていた。
そのとき、フレイとジェイルを連れて来たホルエムヘブが、割り込んで説明をする。

「それについては、ちょうど今ファラオと王妃が話し合っています。リュオン様もそこにいらっしゃいます。……しかし、私が考えても、捕まってしまったお仲間はもう……」

「やめてよ！！　そんなはず無いわ！！！」

ホルエムヘブは口をつぐんだ。
シャルロは強い口調で言いきると、キクマサの向かい側のベンチに座って、瞳を細めて何やら考え込んでいた。
キクマサはスノーを知っている。彼とシャルロ先輩は、エジプトに来る前にも二人で居るのを見かけたほどだ。深い関係なら、心配な

のも当たり前か。

こんなに焦っているシャルロ先輩を見たのは初めてだ。

「おい。忘れているぞ、ルネ・エメラルド。一年生のクレハ・ドルフォードもナイル川に突き落とされた。消息不明のはずだ」

ジェイルは厳しい瞳で、もう一人居なくなった、クレハについて言及した。

彼はいまだにどうなったのか分からない。

「……クレハが……？」

キクマサは、彼とは多少面識があるので、驚くべき事態に胸がザワザワかき立てられるのを感じた。

あんなに無邪気で騒がしい一年生が、そんな事になっているなんて。

自分がここに居たから、外の世界の恐ろしさを知らなかったんだ。

もしかしたら、フォルテやレイ、ルナシーも、そんな危険な目にあっているかもしれないなんて。

「……助けに行かなくちゃ……」

「でも、どうやって……。俺たちの力なんてたかが知れているぞ」

フレイはいやに冷静で、冷静と言うより現場にいた者として、考える時間が多かったというか。

キクマサは、先ほどから黙ってしまったホルエムヘブに、

「ホルエムヘブさん……ファラオやアンケセナーメンさんに、二人

を助けてもらう事は出来ませんか？」

「……ご安心ください。ただいまナイル川の捜索隊が出ていますし、きっとお力をかしてくださるでしょう……。しかし、もし我々王宮軍が動けば、テル・エル・アマルナとの戦いは避けられないでしょう。あなた達も、戦場に立つ事になる。高官達は、ラーの使徒奪還という名目で、戦いを起こすつもりです」

「仲間を助けられるなら、裏の事情なんてどうでもいいわ」

シャルロは立ち上がり、前を見据える。

睨む視線の先はきっと、遥か彼方のテル・エル・アマルナ。

「助けに行きましょう……団長だってきっとそう言うわ」

「どう言う事だ！！！」

団長は、ファラオやアンケセナーメン、そしてカーロンと宰相アイの前で、大きく石台を叩いた。

「スノーを助けに行くのは無理だと言うのか!!　この一刻を争う時に!!!」

「控えよ。ファラオの御前であるぞ」

「うるせえ!!　てめえは黙ってろ!!!」

宰相アイの言葉には、敏感に反発してしまう団長。それもそのはず、宰相アイが敵だという疑いが彼にはあったから。しかし、これをここで暴いてはいけない事も、団長には分かっていた。

「リュオン……そなたの気持ちも分かるが、テル・エル・アマルナの者が、ラーの使徒を生かしておくはずも無い。助けに行った所で無駄だ」

ファラオは心苦しそうに、彼とは視線を合わせずに語った。

「そんなの分からねえだろ!!　俺は仲間を見殺しにはしねえぞ……お前達が手を貸さないと言うのなら、俺たちだけで行ってやる!!!」

「そんな事はさせません。あなた様はラーの使徒なのです。私たちを救ってもらわねば……」

アンケセナーメンは慌てて首を振った。このような事態予想もしていなかったと言うように、頭を抱えている。

「ここで俺たちを人形のように庇護していたって、何にも変わらないぞ！！　お前達の国は救われない。呪いなんて解けるもんか！！！……行動を起こさない限り、何も得られはしないんだ！！！」

団長は声を上げ、ここに閉じこもったままの憤りを爆発させた。
そうだ。ファラオと王妃は、我々ラーの使徒を、いつか呪いを解いてくれる都合の良いコウノトリのように思っている。失うのが恐いと、箱庭に閉じ込めて、守っている。

しかしそれはエゴだ。
俺たちはそんな、特別な人間じゃない。ただのきっかけにすぎないのだ。

「……」

ファラオやアンケセナーメンは、痛い所をつかれたように、顔を伏せていた。
そのとき、行方を見守っていたカーロンが、冷静さを失っていない口調で、会話の隙を見つける。

「……もしかしたら、捕えられたラーの使徒は、まだ殺されていないかもしれません。むしろ、我々をおびき寄せる、人質として生かしている可能性が高い……。」

「……それはどう言う事だ……カーロン……」

ファラオは顔を上げる。

「……黄金のマスクの噂を、ファラオならば一度は聞いた事がある

でしょう……」

「……あ、ああ……。しかし、あれは伝説のマスクだ。……それを身につけ死の床についた者は、神として蘇ると言われている……」

その話題が出たとき、宰相アイの表情が変わったのを、団長は決して見逃さなかった。

「……そう。伝説と言われている産物です。……しかし、あれは実在するのです。テル・エル・アマルナの残党はそれを血眼になって探している……」

「……いったい……どう言う事だ……。お前は何を知っているんだ……」

ファラオは、カーロンの突然の話題に、息を飲んだ。
何だかただならぬ物の、怪しくも強大な力を感じる。

黄金のマスク。それは現代となっては、誰もが知っているエジプトの遺産。

「これについては、まず、十年前の“ラーの使徒”について、語らなければならないでしょう。彼らが何をして、何を守り、何を残したのか」

カーロンは淡々と、静かな口調で語り始めた。
自らも、十年前の物語を思い返すように。

ゆらゆら、ロウソクの揺らめきと、皆の眼差しを浴びて、

やっと解け始めた、難しいパズルゲーム。

ｌｄｒａｗ

＊ｄｒａｗコラム～三年生～

～三年生～

Ｎｏ．１
カイ・ヴォストン

＊ルネ・ハウライト
＊国籍アメリカ

特徴／黒髪短髪。バスケット選手のような体型。
性格／真面目で好青年。すでに国際鑑定士で、世間では“鑑定王子”と非常に人気。ＣＭを五本持っていて、多忙なためなかなか学校に来れないことがある。しかし、ルネ・ヴィライアーの研修にはちゃんと来るように団長に脅されているので、遅れてでもやって来る。体力があり、スポーツ万能。テレビ前での口達者。
絵画の特徴／全ての絵画の技法や、構成を知り尽くしているため、基礎力、応用力、発想力共にバランスが良い。特にずば抜けた物の無い器用貧乏タイプ。彼は三年生からの専攻選択で、芸術文化を選んだため、絵画だけを描く事はあまり無いだろう。やはり優れているのは、他人の作品を見る目である。

＞同学年から見た鑑定王子＜

ジェイル
「……カイはいい人。」

ついでに団長
「不登校！不登校！不登校！不登校！不登校！…」

『……哀れ…。』（五年生・Ｓ）

ついでに寮長
「まあね。彼は俺らとは違うからね…。お仕事忙しいんだから多めに見よう…？ね？…団長☆」

「お前がそんなユルユル寮長だから！！！（以下省略）」

Ｎｏ．２

ジェイル・クオーシャン

＊ルネ・サファイア
＊スイス人

特徴／深い紺色のセミロングの髪。カチューシャをつけている。ク

ールビューティー。
性格／有名なほどに男嫌いで、半径1メートルに男がいるのを許さない。なかなか笑顔をくださらず、常に表情は険しい。特にフレイは最強に嫌いなタイプ。クールな割りに、乙女な面もある。同じ学年のカイには心許しているようだが、理由は謎。
絵画の特徴／ポップな色合いの現代絵画。蛍光色をワンポイントに取り入れた絵画構成は斬新で、女性らしい表現として高い評価を受けている。切り絵や貼り絵も得意とする。

＞同学年からみたジェイルさん＜

カイ
「……いや……、クールっていうか、人見知りが激しいのかと。」

ついでにシャルロ様
「……いわゆるツンデレ。ほとんどツンの、たまにデレ！！」

ついでにルナちゃん
「ジェイル先輩かっこいい…」（後輩からは憧れの視線）

おまけにフレイ
「……そんなに俺が嫌い…？」（なぜか嬉しそう）

～三年生まとめ～

四年生が輝かしい時代を築いた分、特に光るものが無いと言われた、トップ層の少ない学年。
その中でカイとジェイルが唯一ずば抜けて素晴らしいと評価された。
もう一人、飛び抜けた人材がいるのだが、今の所ルネ・コンに参加していない。
カイが国際鑑定士でほとんど居ないため、カイとジェイルの二人で行動することはほとんど無いが、仲が悪いわけではなく、むしろ親密。男嫌いのジェイルだが、カイには気を許しているようだ。しかし、その事を知るものは数少ない。二人とも人気があり、カリスマ性に富んでいる特殊な人材。だが、問題の多い二人でもある。まとまりとか、そういう次元に無い学年。

＞おまけ＜

「三年生二人の、人には言えない悩み」

＊カイ

有名すぎるだけに、アンチも存在し、影で「ウニ」と呼ばれていること。

最近ゲスト出演した健康番組で、寿命が４２歳とか、リアル診断されたこと。しかも死因は過労死。

＊ジェイル

最近行ったエジプトで、某チャラ男に絡まれた事。許すまじ悲劇。

最近行ったエジプトで、某チャラ男を亡きものにしようと試みたが、あっさり失敗して、むしろ鼻で笑われた事。耐え難い悲劇。

次回のコラムは＞一年生＜です。

―draw

＊ｄｒａｗコラム～一年生～

～一年生講座～

Ｎｏ．１
ヘルクロウ・ラヴィーニ

＊ルネ・アクアマリン
＊イタリア人

特徴／白いふわふわした髪に、黒のベレー帽。お坊ちゃんな風貌。
性格／いつも自信なさげで、怖がり。美術界では名門中の名門であるラヴィーニ家というのが、ある意味でのコンプレックスになっている。ルームメイトのクレハは、自分の事をラヴィーニ家無しで見てくれた初めての友達。
自分と正反対の彼に魅力を感じている。歓迎会の時に自分を助けてくれたキクマサを尊敬し、密かに憧れている。強い男になりたいという願望が強い。リース先生は父親の末の弟。いわゆる叔父である。
絵画の特徴／名門ラヴィーニの才能を色濃く受け継いでいて、ラヴィー二家の奥義と言われる幻の画法を習得している。海の側で育ったため、海の絵を好んで描く。一年生のうちからヴィライアーになったのは、彼の実力である。

〈同級生から見たヘルちゃん〉

クレハ
「ヘルってさ、どうしてそんなにヘタレなの（笑）」

ついでにリース先生
「暴露します!!こいつには許嫁がいます!!」
「……!!?」（一同驚愕の事実に戦意喪失）

団長
「……生まれたての子鹿。」
「……」（否定できない自分がいる皆）

No.2
クレハ・ドルフォード

＊ルネ・コーラル
＊ドイツ人

特徴／常にアホ毛が立っている赤毛。純粋無垢な笑顔。
性格／とにかく破天荒で、好奇心旺盛。団長の悩みの種の一つで、トラブルメーカー。ドイツの森で育ったため、運動能力はずば抜けている。みんなに野生児といわれる。会話の成り立たないタイプ。
ロズベルト家の養子で、スノーとは義理の兄弟らしいが、詳しい事は謎。怖いもの知らずに見えるが、実は血と満月が嫌い。意外と謎の多い子。ヘルと仲良しで、彼を振り回す。
絵画の特徴／かなりの印象派。今までに見た事の無い絵画を展開できる、天性の才能を持っている。一応、天下のロズベルトで絵画を学んでいたため、基礎も出来ている。写実的な表現は苦手。頭がダメなため、絵画知識はほとんど無い。本能で描いている。

〈同級生から見たクレハ〉

ヘル
「ああ見えて、意外と器用だよね……。授業中木で筆箱彫ってたし……。」

ついでにお兄さん（スノー）
「……とんちんかん……」
「……（（（（。д。;））））」

どこかのドイツ人
「あれは、俺が森の中で狩りをしていた時の事だ。俺は見たんだ。木から木を、飛ぶように渡る子供を。奴は動物と会話し、こちらが

何を言っても聞こえていないようだった。……俺も、子供の言葉が理解できなかった。……俺は見たんだ、そうきっとあれは、伝説の生物、ドワーフに違いない！！ファンタスティック！！！！」

注：彼は人の話を聞きません
注：基本的に言ってる事が意味不明☆

～おまけ～

「ヘルちゃんの、誰にも見せたくない日記」

○月×日～曜日

『今日もまた、同級生に呼び出された。お前の席ねえから、と言われた。帽子を取られた。窓から投げられそうになった所を、クレハが飛び蹴りして助けてくれた。ついでに吹っ飛んだジャイアンに巻き込まれて、自分も吹っ飛んだ。クレハは凄いなあ、僕もああなりたいなあ。だって、このままだったらティアラーゼに嫌われてしまう。』

「クレハ坊やの、誰も理解できない日記」

○月×日～曜日

『チョッコレイト～、チョッコレイト～、チョコレイト～は～☆？

×@：／／＊♪（＊-　－＾）－☆その日はこんな感じ。』

この先、一ヶ月は日記空白。

次回のセミナーは、彫刻科ルネ・ヴィライアーのメンバーです。

l
d
r
a
w

44：エジプトプラン26～アクエンアテン～

老人の記憶の残像は

どうしたって虚しい絵ばかり

崩落したオアシスの片隅で、タハールはただ悔しさに身を任せ、オレンジに揺らめく大地を拳で殴った。
何度も何度も。

いつかこんな事になるのではないかという、嫌な胸騒ぎは昔からあったのに。

「……」

彼はいつまでもここで座り込んでいる訳にはいかなかった。
悔しさと、抑えきれない憎悪は、実感が無いほどに激しく沸き立っているのに。

タハールは立ち上がり、向かう場所はもう分かっていると言うように、重い足取りでゆっくり歩き始めた。
と、そのとき、偶然目の端に映る輝きに足を止めた。いや、それは偶然なんかじゃなかったのかもしれない。

「……これは……」

彼は小さく輝くその“ブローチ”を拾い上げた。黄色の、月のような宝石が、怪しい煌めきを宿している、そのブローチ。
たしか、あの少女がつけていた物だ。

「……」

トパーズの輝きは、彼に逃げる事を許さないと言うように、怪しい輝きはまるで呪いのよう。
偶然目の端に入った訳じゃない。

この宝石が、そうさせたんだ。

「ご無事でしたか！！　長よ！！」

「……タハールか……」

オアシスの大地の下に、隠れた空間があった。神官団の生き残りは、ここで戦火がおさまるのを息を潜めて待っていた訳だ。

タハールは足を引きずりながら、まずそこに向かい、ラーの神官団の長である“カーロン”の無事を確認した。

「こんなに早く、ここが見つかるとは思わなかったな。アテン神官団の力が、それほどに強大化しているということか…」

「長よ。敵は“黄金のマスク”を欲しております。長……あなたはそれがどこにあるのか、ご存知なのですか！？」

「……」

タハールは、長の前に向き合うや否や、本題である“黄金のマスク”の名を出した。

彼だって、まともにその産物について知らない。伝説の中にしか存在しないマスクだと思って、気にもしていなかった。

カーロンは一瞬言葉に詰まって、妙な顔をする。

「……アテン神官が、その名を出したのか……？」

「はい。……アテン神官と思われる男が、あの二人をさらって……

取引だと。黄金のマスクを渡せと言ってきました」

「……あの二人？」

カーロンはピクッと、眉根を潜めた。

「ええ。あの異邦人です。肌の白い、少年と少女の……。私の家に置いていたのですから、長も噂くらいは聞いているのではないですか？」

「……」

タハールは多少早口で、事のあらましを説明した。フォルテとルナシーが急に現れた事。二人をかくまっていた事。その二人が、あの男にさらわれた事。

「黄金のマスクを渡せば、あの二人は解放されるのです！！　長よ……どうか、黄金のマスクの在処を教えてください！！」

「……タハールよ……貴様、何を言っているんだ……。その異邦人が殺されようが、我々ラーの神官団にとって何の痛手もない。仮に、我々が黄金のマスクの在処を知っていても、助ける必要なんて無いじゃないか。」

長の隣に居た神官が、口を挟んできた。周りの神官達も、いかがわしい瞳で彼を見ている。

「……そ……それは……」

「もしかしたら、その二人は王宮側の手下ってこともある。我々を

おびき出して、殲滅する気なんだ！！」

反論の声は高々に、タハールは口を紡ぐほか無かった。確かにそうだ。

俺は、あの二人の事を何一つ知らないじゃないか。

「……タハールよ……」

突然、長が口を開いた。彼の瞳は強く、まっすぐにタハールを見ている。

暗い地下の、ほんの狭い空間の暗がりで、彼の声はよく響いた。

「黄金のマスクを奴らに渡すわけにはいかない……。何があったとしても。ラーの神官団は、その秘密を守るために王宮から離れたのだ」

「……」

長の瞳は、この惨劇の後だと言うのに、ひどく落ち着いた物である。

この町を犠牲にしたって、守りたい物があると言う事か。

黄金のマスクとは、一体何だというのか。

歴史の偉大さを知る者は、けしてその波に抗ってはいけない。
遥かな時の渦の、そのゆりかごの中で、俺たちが刻む歴史はあまりにも少ない。

「……うっわああっ！！！！」

フォルテとルナシーは、手錠をかけられたまま、乱暴に馬から下ろされた。

「着いたぜ小僧……王宮だ」

裏切り者の男が、ニヤニヤ嫌みな表情で、地面に座り込んでいる二人を見下ろす。
ここは、あのオアシスからだいぶ離れた、でも思っていたほど遠くはなかった場所で、このエジプトの王宮があるテル・エル・アマルナであった。

荘厳な佇まいと同じくらい漂う、陰気な空気。

「……フォルテ……」

ルナシーが心配そうな瞳で、力無く彼に問いかけた。

「……私たち、どうなってしまうのかしら……」

「ルナシー……心配するな。……きっとこれは、一種のゲームだ。鍵を見つけたら、あるいは……」

「……鍵……？」

ルナシーは、神妙な面持ちのフォルテに疑問を持ったが、何しろひどく疲れていたので、訳の分からない事を考える余裕なんて無かった。

フォルテだけが、こんな状況下でも絶えずに考え続けていたのだ。この物語に招待された、自分たちの意義を。

考えるんだ。

この時代の特徴、宗教観、治世……。“アマルナ改革”の時代を示す鍵は、一体何なんだ。

数人の兵士と、あの黒髪の神官と共に、大きな門をくぐり、長い階段を上る。

神殿の中に入るのをこれほど憂鬱に思った事は無い。

「……おい……」

突然、彼らをここに連れてきた張本人とも言える、黒髪のアテン神官が、フォルテを見下ろし口を開いた。

「今からファラオにお目通りがかなうぞ。……お前達がいったい何者なのか、それ次第でこの先の運命が決るだろう。せいぜい、下手な事は言わない事だな」

「……」

フォルテは無言でその男を睨み、歯を食いしばった。
長い回廊を抜け、薄暗い広間に、引きずられるように連れていかれた。手錠がキリキリ痛いのに、ヒンヤリとした空間の方が身にしみる。

フォルテは、その高見の人物を、一度深呼吸して見上げた。王座の前に辿り着くのは、彼の思考が繰り返されていた為か早く感じる。

「……」

じっと、その歴史に名高いファラオを見上げた。
自分が今まで、文字の上でしか知り得なかったファラオが、今この目の前に居るのだ。

皮肉な事に、そのファラオは自分を殺す者になるかもしれないけれど。

「……あ……」

と、その時、フォルテは声を上げてしまった。ファラオの隣に居る女性に、もの凄く衝撃を受けたのだ。
そうだった。

そうだった。アクエンアテンの奥さんも有名人じゃないか。すっかり忘れていた。
今まさに殺されそうな状況なのに、さすがの考古学オタク。ふいうちの情報に、不覚にもときめきに似た感情が湧いてしまう。

ルナシーは驚きと不安でいっぱいの表情で、フォルテを見ている。
目の前に居るのは、歴史上最も“個性的”と言われたファラオ・アクエンアテン。
そして、クレオパトラに並ぶほど美しいと言われた王妃・ネフェルティティ。

「そこのお前……。何をそんなにじろじろ見ている。そんなに余の姿が珍しいか」

「……えっ……あ、いや……」

フォルテは指をさされ、しかも予想外の事を言われて少し不意打ちであった。
姿って……。

フォルテはその姿を、あまりにも意識していなかった。だって、とても“壁画”の彼の姿に似ていたから。
受け入れてしまっていたのだ。その異形な姿を。
普通の人間にしては、締まったウエストと、ポッコリと出た下腹。
まさしく“アクエンアテン”であった。

「そなた……いったいどこから来た者だ」

「本人達はギリシャと申しております。しかし、どうやって来たのかは……」

「余はそこの小僧に聞いておるのだ」

アクエンアテンは黒髪の神官の言葉を遮ると、再びフォルテを見つめ、問いただした。

「そなた達は、いったい何者なのだ。その服装、その姿は見覚えの無い物だ。なぜラーの神官団のもとに居た……」

「……」

ファラオは一時の沈黙に目を細めた。

隣に居るネフェルティティは意味深な微笑みを絶やさない。その美しさが逆に恐いくらいに。

「答えよ!!!」

ファラオの声に、ルナシーは縮こまって怯えている。無理も無い。さすが、一国のファラオとだけあって、存在感とプレッシャーが半端無い。押しつぶされそうな声だ。

しかし、フォルテは沈黙の中顔を上げ、そのファラオを睨んだ。

もう、何もかもが分からなくなっていた。何をすべきとか、何をしてはいけないとか、どうだってよかった。

ファラオの質問だってくだらない。答えなんかあるはず無い。

「……アクエンアテン……。アマルナ改革を行ったファラオ。アテ

ン信仰を唯一とし、他の神々を弾圧した」

フォルテは、焼き付いて離れない、あの崩落したオアシスを思い返していた。
悲鳴と、血と絶望。紙の上でははかれない真実。

「俺たちは、今からずっと先の未来から来た!!　だから、この先に何が起こるか知っている!!」

その先の言葉を止められなかった。
言ってはいけないと、心の奥で何かが止めるのも無視して。

「“アマルナ改革”はこの先十年もしたら終わる。民の反乱は止められないんだ!!　あんなに……あんなに殺しといて、終わりはあっけなくやって来る。そのつけは、一気に王家が背負う事になるんだ、アクエンアテン!!!」

歴史を解き明かす事の罪を、神様が見ている気がする。
殺されるのは必然かもしれない。

でも、このやるせなさを、言葉にする以外見つからなかったんだ。

落胆と、絶望感。
本当は、今までの形式を変えようとしていたあなたに、憧れを感じていたんだ。
今までにない事を成し遂げようとする、その発想があなたにはあった。

本の中だけのあなたなら、一番好きなファラオだったのに。

「俺は……あんたが一番のファラオだと……思っていたよ……」

アクエンアテン。

ldraw

45：エジプトプラン27～フォルテの選択～

時の神様が見ていたのは、俺の罪か

それとも俺自身か

「……何だと……」

一時の沈黙を破るかのように、アクエンアテンが口を開いた。
そこに居た誰もが、フォルテの言葉に度肝を抜かれ、言葉が出なかったから。

「きっ…貴様、何たる無礼な！！　その者を捕えよ！！！」

高官の一人が、やっと反応出来たくらいだ。フォルテはしまったと

思いながらも、心の奥でくすぶるやるせなさは、いまだに消えない。
数人の兵士に取り押さえられ、地面に押しつけられた。

「やめよ!!　その者を離すのだ!!」

しかし、アクエンアテンはフォルテを拘束する兵士達に命令し、その手を離させたのだ。
兵士や高官達は、戸惑いの表情である。

「小僧……おぬし、未来から来たと言ったな……。この先が分かると……」

「……？」

アクエンアテンはニヤリと笑って、フォルテを見おろしている。

「それが本当なら、この先の未来だって変える事が出来ると言う事だ。お前が居れば。そうだろう？」

「……!!？」

フォルテを見下ろした。この言葉にはフォルテも驚いたが、もっと驚いたのはその周りの官達。そして、王妃ネフェルティティである。

「ファラオ!!何を言っておられるのですか!!もしや、この異邦人達の言葉を信じると言うのですか？」

彼女はさっきまでの怪しい微笑みから一転して、驚きを隠せずにいる。

「なあに。こやつが嘘を言っているか本当の事を言っているか、全てはこいつの行動次第だ。信じている訳ではない。ただ、面白いと思わんかね？ネフェルティティよ……」

アクエンアテンの表情は、まるでわくわくした子供のような、しかしまた、悪知恵の働く大人の様でもあった。
フォルテはその表情を見て、心の奥で何かが繋がるのを感じる。

やはりこいつは、“アクエンアテン”であると。

「小僧……。お前があくまで“アマルナ改革”が滅ぶと言うのなら、滅ばないようにしてもらおうか。未来から来たのだろう？　余が見定めてやる……お前が生き残る方法は、これしかない……」

「……そんな……」

そんなのありかよ。
ここで歴史を変えてしまったら、後々の歴史にどう影響してくるかなんて分かったものじゃない。
アクエンアテンはその厚い唇で笑うと、今度はルナシーの方を見た。

「そこの女も未来から来た者か？　美しい娘だ。まあ、ネフェルティティには劣るけどな」

「……」

アクエンアテンの笑い声は、その空間によく響く。フォルテは手錠で繋がれた拳を握りしめ。

「彼女に手を出すな……」

「そう言う訳にもいかない。その娘は人質だ。お前が下手をうてば、その娘の命はない。全てはお前次第だ」

「!?……待て、それは……っ!!」

フォルテは前のめりになって、高見にいるアクエンアテンを見上げた。
それは駄目だ。そんなこと、俺に出来るはずがない。

「お前に選択肢はない。あるとすれば、ここで、二人して死ぬかだ」

アクエンアテンは、彼に口答えを許さなかった。
なんてファラオだ。歴代のファラオと一線を越えたその興味深さ。
それが、この国を狂わせてしまったと言うのか。
ルナシーはもう、顔を上げてはいない。そんな気力すらないと言うほどに。

どうしたらいい。
俺は、どうしたらいいんだ。

「……その娘を、牢に入れよ」

アクエンアテンの隣に居たネフェルティティが、彼女を見下すような視線を向け、静かに命令した。
しかし、フォルテはとっさに、ピンと来たのだ。

「やめろ!!　彼女を牢に入れたら、改革は滅ぶぞ!!」

「……そう来たか」

フォルテはふらつく足で立ち上がり、ファラオと対峙する。
アクエンアテンも、薄ら笑いを浮かべ、彼の言葉の先を、興味津々で待っていた。

「アクエンアテン……お前の娘に、アンケセナーメンと、甥にツタンカーメンが居るだろう……。ルナシーをその二人の教育係につけるんだ……」

「……なんだって……？」

アクエンアテンも、ネフェルティティも、そこに居た誰もが眉根を潜めた。当のルナシーは、驚きのあまり顔を上げたほどだ。不安そうな瞳でフォルテを見ている。

フォルテは、一度深呼吸をして、瞳に力を込めた。

「……それが唯一の、王家が生き残る術だ！！！」

何の根拠もない、ただのとっさのひらめきを、俺は迷いなく口にした。混沌とした時代のただ中で、俺がやろうとしている事は、罪なのか。
時代を左右する恐ろしさの中で、ほんの少しだけ、興奮に似た喜びを感じている自分が居た。

自分自身が、それを否定しようとしていたけれど、心の奥のその感情は小さく火を灯し続ける事になる。

まさか、自分がこんな目に遭うなんて思っても見なかった。

足を、幅のある鎖でつながれ、走る事も出来ない。
唯一の救いは、牢に入れられなかった事だろう。

「入れ。ここがお前の部屋だ」

兵士に乱暴に入れられた部屋は、簡素なものだったが、きっと牢屋よりましだろう。
その兵士は、自分と年端の変わらない、少年兵のようだ。オアシスで私を捕えた、あの兵士。

ルナシーは暗い面持ちをどうする事も出来なかったが、静かに寝床に腰を下ろした。
部屋の前では、兵士が常に監視している。

「……」

自分がどれほど疲れていたかを思い知る。足はまるで、石のように

固くて動かないし、腰は重い。ゆっくり寝床に横たわって、疲れに涙しそうだった。体の痛みより、よっぽど心が疲れていたのだ。

足の鎖が、チャリ…と小さな音を立てる。沈黙の部屋では、その鎖の音だけが全てだった。

フォルテ……とっさの判断で私を救ってくれた。

凄いと言う以前に、あの度胸に感服せざるをえない。

私が、もう何もかもを諦めた時でさえ、彼は絶えずに考え続けていたのだ。普通の人間が出来る事ではない。

彼はそのせいで、これからいったいどんな目に遭うのだろう。

「……心配するな、ルナシー。……俺の言う通りに動くんだ……」

別れ際に、彼がそう呟いて、静かに笑った。

結局、全てを背負う事になったのは彼だ。それは間違いない。

「……ごめんなさい……フォルテ……」

彼女は悔しさと、悲しさと、申し訳ない胸の痛みに、顔を手のひらで覆って必死に涙を堪えていた。

ごめんなさい、フォルテ。

結局私は、何も出来ない。あなたの重荷になる事しか出来ない。

役に立たない。

ごめんなさい、レイ。
もし、彼に何かあったら、私はあなたに申し訳ない。

ふとよぎったレイの顔に、ルナシーはたまらず涙が溢れてきた。
身を震わせながら、でも、声は出さずに。

どうしてこんなことになったんだろう。なんでこんな所に居るんだろう。
私がここに呼ばれた意義は、一つだって無い気がするのに。

それでも私はここに居る。
この物語から、いつまでたっても逃げられない。

私は、ただの美術学生。
ルネ・ヴィライアーであったはずなのに。

「……」

その時、ルナシーはある違和感に気がついた。
研修着の胸の当たりについているはずの、ヴィライアーの“ブローチ”の感覚がない。

ひやりと、全身を駆け巡る焦り。

おそるおそる、胸元に手をやるが、当然そこにはあるはずの印が無

かった訳だ。

「……そんな……どうしよう……」

謎めかしい、あのトパーズの輝きが無いと言うだけで、私の心はぽっかり穴が空いたようだった。
いつもは、枷のように感じてしまう印なのに。

どこを探しても見つからないブローチは、いったいどこにいったのだろう。オアシスの戦乱の中で落としてきてしまったのだろうか。

彼女は、もう何もかもが嫌だった。
泣いたって何も変わらないのは分かっているけれど、こんな感情の時、他にどうすればいいって言うの。

何だか、どんどん悪い方向へ向かっている気がしてならない。

全てが、悪い方向へ向かっている気がしてならない。

l
d
r
a
w

４６：エジプトプラン２８～運命の子供達～

過酷な運命を約束された二人の子供

私たちは、その運命を知りながらも、それを変えてあげる事はできない

このエジプトに来て、一体何度朝を迎えただろう。もうそれすら分からない。

ルナシーが目を覚ましたのは、早朝の涼しい時間帯だった。目が覚めた所で、現実は何も変わらないけれど。

部屋の外には相変わらず見張りが居る。今となっては、それはもう、どうでもいい事だったが。

「……起きたか……。疲れているんだったら、もう少し寝ていればいいのに……」

そのとき、見張りの少年兵がルナシーに気がついて声をかけてきた。ぶっきらぼうな口調だったが、若々しい、敵意を感じない声であった。

「……いいえ。……もう一度寝るには、考える事が多すぎるわ……」

「……そうか」

彼はそれだけ言って、再び見張りに徹した。
こんなに若い子でも、立派に働いているのね。

ルナシーはそれこそ、彼の顔つきや体つき、使命感というものから、若いのに一人前なのねと、素直に感心したものだ。

太陽がだいぶ高く現れ、空の青みが濃くなってきた午前中、ルナシーの所にフォルテがやってきた。フォルテは何人もの兵士に囲まれ、自分と比べたらだいぶ警戒されているようだ。

「大丈夫かい、ルナシー」

「ええ。それより、あなたこそ大丈夫なの？」

ルナシーは彼の腕を掴んで、顔色をうかがった。
日頃はあんなに元気で、お調子者の彼が、今はこんなにピンとした空気を纏っている。気を緩めたらいけないんだと言うように。

「俺は大丈夫だ。それよりも、ルナシーにやってもらいたい事がある。昨日言った通り、ツタンカーメンとアンケセナーメンの事について」

「わ、私、どうしたらいいの？」

「大丈夫だ。安心して」

フォルテは不安な表情を隠しきれないルナシーの肩を掴んで、

「君はただ、アンケセナーメンとツタンカーメンに“花の王冠”の作り方を教えてあげるんだ。オアシスでやってたろ？」

「……なんですって？」

ルナシーは意味が分からず、ただ彼の言葉を待った。

「いいかい、ルナシー……」

フォルテはルナシーの手を取って、周りの兵士に気がつかれないように小さく折り畳んだ紙切れを握らせた。

「大丈夫……君は俺の言った通りに動くだけでいいから」

彼はそう言うと彼女の手を一度強く握って、気の抜けない表情はそのまま、兵士達に連れられて出て行った。
緊張感が、常に彼を蝕んでいる様で、ルナシーは心が痛かった。

そっと、見張りの隙を見て、彼女はフォルテに手渡された紙切れを開いた。
きっと彼も、急いでこのメッセージを書いたのだと思う。字が歪んでいる。

『ツタンカーメンとアンケセナーメンはいずれ結婚するけど、ツタンカーメンは今から十年後に殺される。それを、決して誰にも言わないように。花輪の作り方を、絶対“アンケセナーメン”には教える様に』

紙には、たったそれだけが書かれていた。

「……？」

そんなに大切そうな事は書かれていないが、気になる内容ではある。
彼は、「俺の言う通りに動いてくれ」と言っていた。私は何も知ら

ない身なのだから、ここは彼に従った方がいいだろう。

彼女はその紙を強く握りしめた。

ここでは、彼だけが頼りであり、唯一の温もりであった。

「出ろ……」

少年兵はぶっきらぼうに彼女を部屋から出し、どこに行くのかも言わずにいた。

「……私は、どこへ行くのかしら……？」

「どこって……王女の所だ。他にも王家の方がいらっしゃるが、フアラオはなぜかどうして、お前に好きなようにやらせろと言う」

「……」

薄暗い回廊を抜け、急に眩しい中庭に出た。重苦しい神殿とは違い、キラキラした太陽の光と、子供達の笑い声が飛び交う。幻想の中に居るように、今までとは打って変わった光の光景だった。

中庭で、その子供達は笑って、遊んでいた。

ため池に草の船を浮かべたり、実のなっている木に登ったり、それはとても微笑ましい。

そのとき、子供達の中で、一際上品で落ち着いた少女が、こちらに気がついたようだった。

「ホルエムヘブ……っ！！　お久しぶりね……」

「王女、お日柄もよく」

“ホルエムヘブ”と呼ばれた少年兵は、今までぶっきらぼうだった表情を一転させ、優しい顔でその少女にあいさつした。

そうか……この少女がアンケセナーメン……

少女はルナシーをじっと見上げていた。彼女はとても不思議そうにルナシーをまじまじと見ていたが、頬を染め手を合わせる。

「この方だあれ？　まるで女神様だわ！！」

「……」

ルナシーは驚いた。私はどう見たって胡散臭いだろうに。

「今日から、王女様のお世話に当たる者です。……名を名乗れ。」

ホルエムヘブは視線をルナシーに流す。

ルナシーは少し緊張したが、息を飲んで心を落ち着かせると、跪いて王女の視線の位置に会わせる。

「私はルナシーと言います。王女様」

優しく微笑んだ。
きっとそれは、誰もがうっとりするような、柔らかい木漏れ日のような微笑みだった。

王女はとても瞳を輝かせて、ルナシーの手を握る。その笑顔は無垢である。

「あなたみたいに綺麗な人が居るのね。こっちへ来てちょうだい、ルナシー」

「……えっ……あっ……」

ルナシーは彼女に手を引かれ、中庭の子供達の輪の中に連れて行かれた。
ホルエムヘブはその様子をじっと見ている。

「ねえ、ルナシー。一緒にお花を摘みましょう。キオスクの円卓を、このお花でいっぱいにするの」

王女はあどけなさの残る大きな瞳で、あって間もないルナシーに笑いかける。
恐れ多くもかわいらしいその小さな手で、常にルナシーを引っ張って、あっちへ行ったりこっちへ行ったりするので、ここ最近久しぶりに心が安らいだ。

「あ、こらっ…ツタンカーメン。その花はまだ咲いてないわ。摘んじゃダメよ」

王女は、いくつか年下に見える少年を見て、軽く叱っていた。
叱られた少年はきょとんとしていたけれど。

「……」

そうか、この子がツタンカーメン。
いずれ、誰もがその名を知る事になるファラオ。

王女の方が頭一つ分大きいから、兄弟のように見える。この二人がいずれ夫婦になるなんて、この子達はきっと知らないわね。

「ねえ…王女様。三人でお花の冠を作りませんか？」

「お花の冠？」

「ええ。作り方を知っていますか？」

ルナシーは先ほど摘んだ沢山の花から、冠に良さそうなものを手に取った。そして、その場にしゃがみ込んで、花の冠を編み始めた。

「……王冠が出来るの？」

その様子を見ていたツタンカーメン少年も、興味津々にルナシーの手先を見ている。
王女はわくわくした様子で、スカートを折ってその場に座り込んだ。

「ええ。王冠が出来たら、王女にも、あなたにも差し上げます。良かったら後で作り方を教えましょう」

「本当ルナシー！？」

王女は手を合わせて、たまらず明るい声を上げた。
微笑ましいと言うか、子供は無邪気と言うか。昨日までの事が、まるで嘘のような穏やかさだ。

ルナシーは花の冠を編むのがとても早い。それでいて崩れず綺麗に作れるので、大したものだ。

「きっと、あなた方にはお似合いです」

ルナシーはそう言うと、編み上げたばかりの二つの花の冠を、そっと、この子供達にかぶせた。
小花で明るい色の冠を王女に。大きな花が目立つ王冠をツタンカーメンに。

二人はその冠を嬉しそうに見合って、キオスクの周りを駆け回っていた。

「その冠は、花で出来ているので明日には枯れてしまいますよ…」

あまりにうれしがっているので、前もって言っておこうと思った時、彼女はふとフォルテのメッセージを思い出した。

『ツタンカーメンは十年後に死ぬ』

今、あの子がいったい何歳だとしても、これから十年後が若い青年である事は間違いないだろう。
悲劇の少年王と、今の時代ですら煽り立てられる彼なのだから。

そして王女は、その妻なのだ。

「……」

彼らのあどけない顔が、現実を知り得ない幼さが、無邪気な好奇心が胸を刺すかのようだ。
王冠が、一日しか持たない花の王冠が、まるで儚い彼らの運命を象徴している様で。

それは、変えようの無い未来。

ｌｄｒａｗ

47：エジプトプラン29～ノイズ～

俺はこの日、何よりも大切なものを得て
知り得ない何かを失った

「アメン神官団を解体するだって？　そんなのダメだ！！」

フォルテはアクエンアテンの前で、断固として意見を変えなかった。

「ほお。それは何でだ？」

「アメン神官団だけじゃない。他の神々への弾圧もやめるべきだ。ラーの神官団にしたような、あんな非道な事を続ければ、いづれ反乱が起こる」

「反乱がこの改革を滅ぼすと言うのか？」

アクエンアテンは半ば冗談を聞いているかのような反応だ。
まともにフォルテの話を聞いているとは思えない。しかし、彼の発言に興味を持っているのも確かであった。

「…今でも十分にアメン神官団は弱っている。これ以上は必要ないと言っているだけだ」

フォルテは落ち着いた口調で、出来るだけ威勢よく言う。
相手のプレッシャーに流されないように。

俺は、未来を変える気などさらさらない。アメン神官団を滅ぼされてしまったら、この先の未来に関わる。
アマルナ改革が衰退した後、やはり台頭してくるのは“アメン神官団”であるはずだから。

ただ、俺はこの先の未来を変える“振り”をしなければならないのだ。
幸い、アクエンアテンは思っていたほど残虐な奴ではない。好奇心旺盛で外道ではあるが、アマルナ改革なんて事をやってのけようとした人物なのだから、変わり者であるはずだ。

「ファラオ！！この者の言いなりになってはいけません。我々の大いなる計画の遂行に、あの“アメン神官団”は邪魔なのです！！」

その時、隣で常にいかがわしそうに俺を睨んでいた王妃ネフェルティティが、ついに口を出してきた。この人が問題である。
さすがは政治に大きく関与してきたと、名高い王妃なだけはある。

「そうですぞ、ファラオ。いかんせん、この者が本当に未来から来たとも限りません。……もしやラーの神官団の間者かもしれません」

王妃に続いて口を出してきたのは、宰相である“アイ”だ。
もし、しがらみや敵意無しで出会ったならば、サインをもらいたいほどの歴史的重要人物ばかりである。

しかし、こいつらはどうにも俺に警戒心がある。無理も無いが。

「……まあ待て。別に、この改革をやめろとは言ってないんだ、この小僧は。我々には何の問題も無い。ラーの神官団に何の利益があると言うんだ。そもそも、あいつらはまだ生きているのか？」

「……ファラオ……」

ネフェルティティが小さく拳を握りしめているのが見えた。この人、本当に気が強いんだなと、思い描いていたイメージとぴったりで恐ろしい。
宰相アイはそれきり何にも言わなくなったが、冷めたその瞳がこれまた逆に恐ろしい。

それにしても、なんて手の汗握る状況なんだ。ここで“アマルナ改革”をやめてもらっても困るし、激しさを増して、あらゆる歴史的神殿や、宗教的遺産を壊してもらっても困る。

歴史を、変えられてしまったら困る。
思いのほかにこのファラオは、俺の言う事に興味を示している。

と、そのとき、ふとある人物が思い浮かんできた。それは、アマルナ芸術に置いて、とても重要な人物。

「……そう言えば、彫刻師のトトメスはここに居るのか？」

「……！？…お前、トトメスを知っているのか？」

「そ、そりゃあ……歴史に残る彫刻科だから……」

トトメスとは、この時代の優れた彫刻家として有名な人物だ。フォルテはそっと、王妃“ネフェルティティ”の顔を見た。今から３５００年後、俺たちの時代で最も有名なアマルナ芸術品は、あなたの胸像だから。

アクエンアテンはニヤリと笑うと、何だか誇らし気にしている。

「ほお。我々が見込んだ彫刻師に間違いは無かったと言う事か」

「……あの……もしよかったら、トトメスに会わせてもらえないか？」

フォルテはダメ元で聞いてみた。もし、ここで彼に会えたらえらい事だぞ。彼の芸術品の本来の姿を見る事が出来るかもしれない。

「……トトメスに？」

アクエンアテンは顔をしかめて、不審そうにしている。無理も無い。宰相アイは意地悪そうな顔を歪めている。

「そのような事、お聞き入れになりますな、ファラオ。そもそも、囚われの身だと言うのに図々しいのです」

『……おっと……』

フォルテは、さすがにこれは無理かと、内心苦笑いであった。それにしても、宰相アイはイメージ以上に小うるさいじいさんだ。俺を警戒しているんだろうけれど。

アクエンアテンは、あご髭の飾りを撫でて、一時宙を見て考え込むと、

「……まあ、良かろう。トトメスに会わせるくらい何の問題も無いだろ」

「ファラオ!!」

その時、大声を上げたのは王妃ネフェルティティ。さすがのファラオも一瞬ビクッとしていた。

「な、何だネフェルティティ……。声がでかいぞ」

「ですから、この者の言う事など、信じられますな!!それも、たかが彫刻師に会わせろなどと、茶番もいい所です」

「……」

彼女の憤慨っぷりは、恐ろしいと言うよりむしろ、「変わり者のファラオの奥さんって大変だな…。」という印象を受けた。

アクエンアテンは高らかに笑って、

「なあに、心配するな。誰もが否定する我々のアマルナ芸術を、こやつは評価しておるのだ。見る目があるじゃないか」

「……」

エジプトの歴史に置いて、アマルナ芸術の時代は、ほんの一瞬であったが異例なものであった。
それまでの芸術仕様は、様式化された表現思考の、しきたりに則ったものであったが、アマルナ芸術は違う。

どちらかと言うと写実的で、瞬間の動きを現したものが多い。
この時代に既に、現代に近しい芸術を試みていたのだ。

『……トトメスに会えるんだ……』

それが、どんなに奇跡的で、価値のある事なのか、フォルテになら分かる。

手と足を、幅のある鎖で繋がれて、彼は兵士に連れられて王宮の端にある工房に連れて行かれた。

願っても無いチャンスに、不謹慎にも胸が躍る。こんな状況だと言うのに。

『……困った奴だな……俺もつくづく……』

自分がこれほどどうしようもない奴だと思った事は無い。
好奇心を何よりも優先させてしまうのが自分だ。他の事が見えなくなってしまうくらいに。

渡り廊下から、久々に太陽の日差しを浴びたように感じた。
穏やかな空気は王宮内とはまるで違う。

アクエンアテン。
あいつがやっていた事は許したくないが、思いの外に面白いファラオだ。

いや、思っていた通りと言うべきか。

人間としては魅力的なのだが、王に向いている性格ではなかったと言う事か。

「着いたぞ。入れ」

兵士の一人が、工房の前で振り返る。
いよいよだった。

『トトメスだトトメスだトトメスだあああああ！！！！』

フォルテは内心泣きそうなほどに感極まっていた。
トトメスは兵に軽く事情を説明され、一人勝手に浮かれ回っているフォルテを不思議そうに見ていた。

トトメスは優しそうな表情の、中年の男であった。

「……ここの作品を見たいって……？　変わった子だなあ……」

彼はそう言うと、フォルテを連れて、工房内を案内し始めた。

「私の作品をどこかで見たのかい？」

「……はい。……今からずっと先の未来で」

「……？」

トトメスは振り返り、とても不思議そうに彼を見ていたが、

「はは……。面白い事を言うな、君は」

「……」

彼はきっと冗談だと思ったんだろう。

フォルテは少し緊張していた。ファラオや王妃にはあんなに威勢が良かったのに。

彼の作品は、主に王宮を飾ったり、アテン神殿の彫像などであったが、フォルテが期待していたのは、やはり名高い“ネフェルティティの胸像”である。

「……あの……あの、王妃の胸像ってありますか？」

フォルテがその名を口にした時、一瞬トトメスの表情が硬くなった気がした。

「……？」

「……きみ……それをどこで聞いたんだい？」

彼は急に小声になって、入口で見張っている兵士をチラチラ気にしていた。

「だ、だから俺は未来から来たんですって。俺はあなたの像を、何度も博物館で見たんだ」

「……」

フォルテは、彼の小声に習う。どう見ても様子がおかしかったから。

トトメスは信じられないと言うように、一度息を飲んだ。

「……こちらへおいで……」

彼は隣の部屋にフォルテを促した。兵士が不審そうに見ていたが、トトメスは何て事なさそうに振る舞っていた。

隣の工房は、作りかけの作品があちこちに置かれていて、静かな鼓動を脈打ってるかのような存在感である。

トトメスは声が漏れないようにして、

「……王妃の胸像の事は、私しか知らないはずだ。君はそれを知っているんだね」

「……はい。俺はそれが見たくて……」

フォルテの言葉を待たずに、トトメスは一番隅の麻布のかかった作品の前に向かっていた。フォルテは息を飲んで、体を強ばらせる。

「……それが……王妃の胸像ですか？」

「いかにも。人に見せるのは初めてだから、少し心配だけどね」

彼は小さく笑って、そっとその麻布を剥いだ。

ゆっくり現れたその胸像は、滑らかに布を滑らせて、

我々に何を問うのか。

「……」

きっとそれは、今は見る事の出来ない両眼の王妃。つややかな色は、
この瞬間に命を得る。
瞳にはめ込まれた玉眼は、まっすぐにフォルテを見ていた。

“ネフェルティティの胸像”

美しきもの来たる

その瞳は、遥か砂漠を眺めている。

その首筋は、母なるナイルの……

キィーーーーーーーーーン

「！！！！！！！！！」

それは本当に突然襲いかかってきた。
まるで、頭の中の大切な糸が切れたような鋭い痛みとともに、脳内を響き渡るノイズ。

中断された物語。

「っな……うわあああ！！！！」

フォルテは頭を抑えてその場にしゃがみ込んだ。何だこれは。
こんなの初めてだ。いままで、こんな事は一度も無かったのに。

「ど、どうしたんだ！？」

トトメスは驚いて彼に駆け寄った。
フォルテは脳内に響き渡るノイズを、とても嫌だと思った。

黒い、テレビの砂嵐のようなイメージの中に、何か居る。

誰か居る。

脳裏に映るヴィジョンは、判断出来ないほどビリビリしているのに、隙間から見える何百という色の螺旋。

彼は痛みに耐えながら、必死になって胸像を見上げた。
ちらちらした埃と、静かな光の狭間で、その像は沈黙を守っていたはずだった。

「……！！？」

プチン。

その時、彼の中で一度切れた糸が、再び音を立てて繋がった。

「……鍵だ……」

何かが、やっと繋がった。

彼がそう呟いた時、ネフェルティティの胸像の左目、その玉眼が、まるで涙を零すように「コトン…」と落ち、跪く彼の元に転がってくる。

「……」

きっと俺は今、

誰もが解き明かす事の出来ない、美術の心理を垣間見た。

l
d
r
a
w

48：エジプトプラン30～強制終了～

沈黙の左目は、

全てが終わるのを待っていた

フォルテの心臓の高鳴りは、自分の部屋に戻った後でもおさまらなかった。

トトメスの工房で味わった、理解出来ない現象。

ネフェルティティの胸像の左目。

彼は、トトメスにもらったその左目をじっと見つめた。
現代では、あの左目が埋め込まれていない理由を、あらゆる学者が憶測していたけれど、誰がこんな事だって想像出来る？

「……こんなの学会に発表したって、誰も信じないよなあ……」

自分だけが知っている歴史の謎。
昨日のノイズが教えてくれた。この左目は“鍵”であると。

理屈ではない。あれは一種のお告げに近い。

「帰れるかもしれない……ルナシーに会いに行こう……」

ルナシーは、アンケセナーメン王女と、ツタンカーメン少年に花輪の作り方を教えていた。
彼らは覚えが早く、一日であらゆる編み方を覚えてしまった。

「凄いですね。もう、どんなお花だって冠になるわ」

ルナシーが手を合わせて、素直に喜んでいた時、アンケセナーメンがふと彼女の足を繋ぐ鎖を見た。

「……」

「……どうかしましたか？」

「……その鎖痛くない？　私、お父様に言って取ってあげる」

「……王女様……」

アンケセナーメンは幼いながら、何だか険しい顔をしていた。そして、今作ったばかりの花冠をルナシーの頭にのせて、

「……ルナシーってやっぱり、女神様みたいね」

彼女の顔をうっとり見ていた。
彼女はどこへ行くにもルナシーを連れて行き、側に居る事を望んだ。
そんなアンケセナーメンにくっついていたのがツタンカーメン少年で、その光景は微笑ましかった。

王女様は優しい心を持っている。

花畑ではしゃぐ二人の子供を目の前に、ルナシーは瞳を細めながら、小さく手を握った。

王家の業を背負う事になるのが、どうしてあの子達なのだろうか。悪い事をした覚えも無く、ただ、流されるままに。

「……」

「……おい、ルナシー！！！」

その時、中庭の端から、ルナシーを呼ぶよく知った声がしたので、彼女は呼ばれるがままに振り返った。
振り返った時にはこちらに走ってきているフォルテを見つける。
たった何日間か会わなかっただけなのに、懐かしい気さえする。

「フォルテ！！」

彼女は慌てて立ち上がった。
フォルテは、やはり足や手を鎖で拘束されていたが、最初の頃に比べるとずいぶん自由が利くようになったようだ。

「ルナシー。調子はどうだい？……花の王冠なんか乗せちゃってさ」

「ふふ。あなたがこれを教えろって言ったんじゃない。…それより、どうかしたの？」

「……ああ……」

フォルテは急に真剣な顔になると、ズボンのポケットから小さな麻

布に包まれた“何か”を取り出した。
それは、小さな布に包まれていると言うのに、見た瞬間に感じる禍々しさをルナシーは恐いとさえ思う。
いったい何が恐ろしいのかも分からないのに。

「……ファラオ。一刻も早く、あの者達を始末するべきです」
宰相アイは、相変わらず融通の効かなそうな顔で、ファラオに言い迫っていた。

「そもそも、あの者は身分もわきまえずに、言いたい放題。ファラオに対して、無礼にもほどがあります。それをお許しになるファラオもファラオです。きっとラーの神官団の刺客ですわ」

ネフェルティティは美しい顔を引きつらせて、溜め込んでいる不満を言わずにはいられなかった。
しかしファラオは、側に居る二人の助言には聞く耳持たず、

「そこまであの者を毛嫌いしなくてもいいだろう。私は面白い男だ

と思っているよ。さしずめ、“ラーの使徒”ってとこだな」

「それならそれで、問題です！！　我々はアテン神を崇拝しているのですよ！！！」

ネフェルティティは頭を抱え、宰相アイは黙っていた。
ファラオは「好きにやらせろ」と、相変わらず物好きで、宰相アイにはそれが不安でもあった。

「……ラーの使徒……か……」

その時、彼の心に生まれたわずかな歪みが、この先の十年間、彼の中でくすぶり続けるとは。
この王家の悲劇に一枚噛んでいる老人の陰謀を、
今更誰にも止める事は出来ないのだ。

ルナシーはフォルテの手の内にあるその瞳を見て、息を飲んだ。
圧倒的な威圧感を感じて、萎縮してしまう。

「そ、それは……何？」

“鍵”さ。…ネフェルティティの胸像の左目が鍵だったんだ…」

「……鍵？」

鍵、鍵と、今までにも同じフレーズを聞いてきたが、いまいちピンとこない。鍵と言うよりかは、不気味なオカルト品に見える。
瞳は造られた物だと言うのに、滑らかな玉の表面は生々しく、美しくも感じる。

「ああ。…これがあれば帰れる。……ルナシーは知らないかもしれないけど、“鍵”って言うのは……」

その時であった。
それは本当に突然で、風を切る音と、背後に迫る影に気づけなかったのが、より一層我々をどん底へと突き落とした。
生々しい肉を貫く音が、フォルテに言葉の先を言わせなかった。

「！！！！！」

ルナシーが目にした物は、前方から勢いよくフォルテが倒れかかってきたのと、彼の、驚きを通り越したような瞳の色。
フォルテの背中から彼の横腹を貫通した槍は、血の流れよりも速く姿を現し、やがて赤い血で染まっていった。

それでも彼は歯を食いしばり、後ろを振り向いた。倒れてきた彼を支えながら座り込んだルナシーは、何が起こったか理解出来ずに、彼の視線を追った。

フォルテの背後には、ただ一人の見知らぬ兵士が立っている。

「……強制終了だ。お前は知りすぎた」

フォルテにだけ、そう聞こえた。それは死人のような表情の兵士が口にしたのか、その向こうの誰かの言葉なのか分からなかったけれど。

ルナシーが叫んでいる。
兵士が取り押さえられている。

でも、この物語の何もかもがまるで夢であったかのように、彼の視界が揺らいでいった。どうせ死ぬんだったら、もっと思い切った行動に出れば良かったなと、今更後悔したって遅いのに。

痛みを超えて行く、現実との離別。

「フォルテ！！！」

ルナシーはいまだかつて無いくらい、心の奥がひやりとしていた。
彼が背中から刺されて、倒れて、そして今はどうなっているの。

「フォルテ！！！　何で……っ！！！」

何がどうなっているの。
嫌だ。嫌だ！！こんな所で一人にしないで。
あなたが死んだら、レイはどうするの！！　キクだってどれだけ悲しむか。
彼の血がルナシーの膝を染め、いつしか彼女の手を染めた。

「こんなのって無いわ。私たちが何をしたって言うのよ！！　私たちはこんな事がしたくてルネ・ヴィルトンへ来た訳じゃない。ルネ・ヴィライアーを目指していた訳じゃないわよ！！」

彼女の声はその場に居た全ての者を静まりかえらせた。もちろんその光景は、王女と、後のフォラオも見ていた。記憶に焼き付けられた。

動かない彼の手が膝を滑り落ちた。その時開いた彼の手のひらから、自らを主張したように姿を見せたのが玉眼。
彼女はその瞳を見つけた時、抑えきれずに目の端にたまる涙をこぼした。玉眼を拾って、一度握りしめた後、歯を食いしばってそれを

高々と掲げた。

「こんな物……こんな物、今となっては何の役にも立たないわ！！！　終わってしまった歴史のせいで、私たちの未来はめちゃくちゃにされたんだわ！！！　ファルテのバカ！！　大バカよ！！！　こんな物が、あなたの命に比べたらどれだけの価値があったって言うのよ！！！」

こんな物。
こんなただの石が。

彼女はその瞳を投げつけてやろうと思った。自分にもし、万物を壊す力があれば、この瞳を砕いてやったのに。
そこに居る全ての人間が敵に見え、全ての人間が憎かった。

エジプトが憎かった。

“死”を意識した時、その瞳は脈打って、命を灯す。

「！！！？」

急に光を放ち始めた、憎い瞳。
ルナシーは目映い光を全身に浴びて、彼女がそれを手放す暇を与え

ず、

彼らがここに居た事が全て幻であったかのように、二人は跡形も無く消えた。

「……消えた……」

言葉の出ない中庭で、そう呟いたのはアンケセナーメン王女。

彼女はこの光景を、きっと一生忘れる事は無い。

ぱさりと、半分崩れかけた花の王冠が大地に落ちた時、教えてくれた。

彼らはここに、確かに居たのだと。

その時、神様が押したのは、ｄｅｌｅｔｅのキーだったのか、ｅｎｔｅｒのキーだったのか。

自分たちの役目は何だったのか。

意味があったのか。

ldraw

49：エジプトプラン31～呪い～

宝石の導きは

幸か不幸か

タハールが焼けただれたオアシスを後にしたのは、奇襲があった二日後であった。
彼は押し寄せるあらゆる葛藤の中、ついにやるべき事を見いだしたのだ。

彼はルナシーが落としたトパーズのブローチを握りしめていた。

「どんなに考えたって、答えなど見つからないのならば、答えを探しに行くのだ。あの二人が何者であったのか。黄金のマスクとは何

なのか」

彼は馬に乗って、荒れた大地を駆け抜け、砂に身を隠す。
きっともう、ここには戻ってこないだろう。

「……お元気で、長……。私が息子であった罪をお許しください」

あの二人に出会ってしまった事が、私の運命であり、私の使命に繋がっているのだ。
そう思えてならない胸騒ぎを、決して裏切りたくないから。

どこへ行く当ても無く、ただ思いのままに馬を走らせた。
何だか、懐に入れているあの黄色い宝石が、彼を導き、急かしているように。

暑い昼と、寒い夜を越え、ほとんど休まないで彼は向かっていた。
その、どこか分からない場所へ。

いつしか、彼は朦朧とした意識の中で、トパーズの冷たい鼓動を感じ取っていた。
その石は、彼に何度も何度も責め立てる。

急げ、急げと。
休ませようともしないのだ。

「……ここは……」

オアシスを出て、月が三回顔を出した晩。タハールは、砂嵐を突っ切って、その寂れた神殿を見つけた。
灰色の風が、うなりを上げてまで守っている、廃墟と化した神殿。

よく見たら、そこら中に散らばっている、“何か”の像の手足。顔面の欠片。
もう、いったい何の神様の神殿であったのかも分からない。

タハールはもはや、ただ何かに動かされる人形であった。
自分でも分かる。この大いなる力の前では、抵抗は無意味。そして、それが運命であると。

彼は、何も見えない神殿の中に入った。
暗い、暗い神殿の中に。

外の砂嵐が嘘のように、中は物音一つしなかった。
暗闇を歩く自分の足音と、ただ、導かれるままの足取り。
どれだけ歩いたのか分からなかった。タハールはいつの間にか“そこ”に着いていたから。

「……」

彼は意識せずに足を止めた。

「……よく来たな。お前がここに来る事は、分かっていたよ」

「……？」

暗闇の中、彼は声を聞いた。
ブワッと、小さな炎の揺らめきが、彼の瞳に色を灯す。
目の前に居た声の主は、一つの小さなたいまつを持って、彼が来るのを待っていた。
黒髪の、王宮の神官。あの二人をさらい、黄金のマスクを持ってくるように言った、あの敵の神官だった。

「……お前……」

「ふっ……今のお前にはあの時のような威勢の良さは見られんな。……まるで生気が抜かれてしまったようだ」

黒髪の神官の持つたいまつは、風もないのに、一度大きく揺らめい

た。
彼は瞳を細め、そのたいまつを掲げた。

「……」

炎の先にある、その黄金に輝く物を、タハールは見つめた。暗闇に浮かぶ、伝説を。
疲れきっていた彼ですら、それが何か分かった時、一度瞳を大きくさせた。

「……黄金のマスク……」

「そうだ。貴様が今目にしているのは紛れもない“黄金のマスク”。この神殿は、かつて“セト神”を祭っていた神殿だ。今では、あのアクエンアテンによって破壊され、ここに居たセト神官団も皆殺しにされた。外の砂嵐はその怨念である」

彼の言葉は、今までよりも重く、耳ではなく心に響いてくるような気がした。
目の前に居るその人物が、どうしても人に見えなかった。

「……まさかお前は……いえ……あなたは……“セト神”か……？」

「……」

黒髪の男は相変わらずのせせら笑いで、しかし瞳は笑っていなかった。

「“ラーの神官団”は、この砂嵐に守られた神殿に、黄金のマスク

を隠した。これがアクエンアテンに渡れば、このエジプトを築いた、ラーの太陽神、オシリス神、イシス神、ハトホル神、ホルス神……そして私……神々ですら、奴に消されかねないからな……。神とは絶対的な力を持っていたとしても、信仰無くしては存在し得ないものなのだ」

セト神はゆっくり瞳を閉じると、再び鋭く開いた。それは、黒い獣のように、恐ろしい眼差しだ。
タハールはそれでも、その場を離れようとはしなかった。

「……お前の村は滅んだ。仲間は皆、死んでいったではないか。裏切り者も居た。……もっとも、あの裏切り者は私が処分したが……。いい事を教えてやろう……」

「今日、あの少年と少女は死んだよ」

ふわり。

また、風も吹いてないのに、たいまつの炎が揺らめいた。
何だか、先ほどより炎が大きくなっている気がする。

タハールはオアシスが崩落した時と同じ感情が、心の奥を蝕んでいるのに気がついていた。

セト神は、そんな彼の憎しみに、何度も息を吹きかけては、その炎を大きくしている。

「……お前はちゃんと、ここに辿り着いた。七日間のうちに……」

セト神はゆらゆら揺れるたいまつのその向こうに、先ほどまでは廃人のようであったのに、憎しみに燃える恐ろしいまでのタハールを見た。

「お前の望みを叶えてやろう」

「……」

タハールは相変わらず、黒いオーラを纏って、憎しみに身を任せている。

「……全てを奪った王家を呪う。アクエンアテンを呪い殺してやる。……それが可能ならば、私の命などくれてやる！！！」

彼がそう言葉を放った時、セト神はわずかに口を緩めたかと思うと、手に持つたいまつの炎が一層大きな火の柱となって、タハールを包込んだ。

「ぎゃあああああああああ！！！！」

その悲鳴は全て、呪いの糧となり、憎しみは力となる。

炎はやがて黒い影となり、神殿いっぱいに広がった。

「ふふ……ははははは！！！！　これでいい！！！　お前自身が呪いとなり、奴らを焼き尽くす憎しみの炎になるのだ。その命を犠牲にした呪いは、王家を祟るであろう！！！！」

セト神は高笑いのをこしてその場から姿を消した。

呪いは神殿の天井を突き破り、空高くに昇って、そして流星のように王宮に向かった。

タハールと言う人物は、邪悪な呪いとなってしまったのだ。

やけたタハールの体は、見る見るうちに白骨化して、それでも変わらず傷一つついていなかったのは、ルナシーのトパーズである。

空いた天井から覗く月はちょうど満月で、優しく怪しい月の光は、まっすぐにトパーズを照らす。

キラキラ、誰も、何も知らずに、トパーズは秘密めいた力を宿していったに違いない。

それからこのトパーズの宝石は、時空を超え、“空白の十年間”を、このエジプトで費やす事になる。

誰も知らない、静かな時の中で。

l
d
r
a
w

50：エジプトプラン32～クレハと鳥と鳥～

落ちていく感覚の中でさえ

きっと俺は楽しんでいた

ここはどこだろう。
水越しに揺れる太陽の光があんなに遠い。

クレハは勢いよく大河に落ちたので、全身をこそばゆい泡に包まれていた。早い流れに攫われて、一直線に水のもっと奥に吸い込まれているみたい。しかし、彼はそんな状況を楽しむかのように、意識をしっかりと持って上へ上へと足を動かした。

「ぷっは！！！」

彼が水面から顔を出した時、そこは既に穏やかな流れであった。
気がついた時には、足が水底に着いてたし。

「えええええ?」

彼は意味が分からないと言うように、疑問を口に出した。さっき、
あんな高さでナイル川に落とされたと言うのに、元気なものだ。

クレハは、もう小川としか言いようの無い川を横切って、とりあえ
ず陸に上がる。
全身びしょびしょで、大地を踏みしめる度に、彼のブーツが音を出
す。

しかし彼は、そんなのおかまい無しに、キョロキョロあたりを見渡
してぽかんとしていた。

「そりゃ無いよ!!　スノーってば俺が不死身だとでも思ってる
んだ!!　おい、隠れてないで出てこいよ!!」

彼は急に大声で叫んで、まるで元気な様子で走り回っていた。
しかしその開けた土地では、彼の声が一方通行に響くだけだった。

だって、崖自体が無いんだから、そこが先ほどの場所であるはずが
無い。
クレハはそんな事おかまい無しに、その草がちょろっと生えた大地
を駆け回って、皆を探していた。

と、その時、上空からの大きな影が大地に映って、クレハは驚いて
空を振り返る。

「鳥！！……てかデッカ！！！」

クレハが瞳を大きくさせたのも無理は無い。太陽を中心に円を描いて飛ぶ大きな鳥が、雄々しい姿を讃えて飛んでいた。クレハは頬を輝かせて、嬉しそうに手を振る。

「おーい！！　ハゲワシ、　お～い！！！」

鳥はその声に従うように、その大きな翼を羽ばたかせ、砂を撒き上げるような風とともにクレハの前に舞い降りた。
クレハは顔に吹きかける砂を避けるように、きつく瞳を閉じたが、すぐにわくわくしたような顔をしている。

「すげー！！　このハゲワシでか過ぎだぜ、　俺の身長を軽く超えてやがる！！」

クレハがそう言った時、この鳥は鋭い瞳をギョロッと彼に向けると、

「失礼な小僧だ。私はハゲワシではない。ハヤブサだ」

「……」

何と、口をきいたから驚きだ。しかしクレハは一瞬固まったものの、先ほどより一層瞳を輝かせて。

「すっげー、すげーよ！！　このハゲワシしゃべるんだ！！」

「だから、ハヤブサだ」

「なあ、お前、俺仲間を捜してるんだけど知らない？」

「……」

クレハの肝の大きさと、ずば抜けた適応能力に驚かされたのはむしろハヤブサの方だった。

偉大な姿のハヤブサは呆れた口調で、羽を一度振る。

「小僧。いったい自分がどういう状況に居るのか分かっているのか」

「そんなの、俺が知りたいよ。崖から落とされて、気がついたらこんな所に居た。ねえ、頼むから俺をスノー達の所に連れてってくれよ。ねえったら」

クレハはハヤブサの首もとの羽をワッシと掴んで揺さぶった。

「おいハゲタカ！！　それだけでかかったら、俺を乗せて飛んでくれよ！！」

彼はハヤブサの返事を待たずに、その背中に飛び乗ってまたがった。

「おい、ハゲワシからハゲタカに変わってるぞ！！そして、どっちでも無い。ハヤブサだ！！！」

ハヤブサは広く大きな翼を広げ、クレハを乗せたまま空高く飛んだ。

クレハもクレハで、それに全く動じる事なく満面の笑みで、風を切る事を楽しんでいた。

「おおおおおおおお！！！！」

「楽しんでる場合じゃないぞ。お前は特別な役目があるのだから」

ハヤブサがそう言ったのも、クレハは全く聞いていない様子であった。浮かれてハイテンションで叫びまくっている。ハヤブサは半ば諦めた口調で、

「……全く……こんな子供が、ギリシアの聖なる血を分けたもうとは……」

独り言を呟くように言った。

ハヤブサはどんどん高くまで飛んで行った。無限なる空の、その先へ先へと、彼を乗せて。

「おい！！　いったいどこまで飛んで行くんだよ！！！」

「母なるナイルが細い木の枝となるまで。お前達のギリシアが見える所までさ」

低い雲ならば手が届く所までやってきたようだ。クレハはその雲を触ろうとして、手を伸ばしてみた、掴めるものは結局空の細かい霧だけ。

やがてエジプトの大地は遥か下の見えるようになり、ナイル川は、枝の先に緑の大地という葉をつけた大きな樹のようだ。かれた大地の多い国だからこそ、たくましく見える。

クレハはナイルの流れを沿って見て、その先の海を見た。そして、さらに向こうのギリシアを見つける。

「あれがギリシアだ。分かるか？」

「言われなきゃ分かんないよ。そんなもん」

「……彼の国の運命の子供とは思えないな。……お前の祖母が聞いたら、泣いて悲しむぞ」

ハヤブサは高い空を飛びながら、ため息まじりだ。

しかしクレハは、その言葉に慌てて反応する。ハヤブサが話せると分かった時以上の驚きっぷりだ。

「お前、ばあちゃんを知ってんのか！？」

「もちろんさ。もっとも、最後に会ったのはお前が生まれる前だったけどな」

「嘘言うな！！　バカブサ！！　俺がいくらアホでも、そんな嘘にだまされないぜ。スノーが、ここは大昔のエジプトだって言ってた。ばあちゃんが来れるはず無いんだ！！！」

クレハはハヤブサの首根っこの羽をぎゅっと掴んで、大声を張り上げた。それに驚いたのか、ハヤブサの飛行が若干乱れたのだが。

「……何言ってるんだか。お前がここに居るんだ。お前のばあさんがここに来れたって、何らおかしくないだろ。そもそも、お前のばあさんは偉大な人物だったんだからなおさらだ…」

「……」

クレハは相変わらずむすっとしていたが、それ以上は何も言わなかった。今までの明るさが嘘のように、複雑そうな顔をしている。

ハヤブサはそれでも雲を突っ切って飛んでいた。

「ギリシアの大地をよく見ておけ。いずれ、世界をいくつ巡ろうとも、辿り着く場所だ」

クレハはゆっくりと顔を上げ、再び青い海の向こうにあるギリシアを見た。
キラキラしたブルーの宝石に守られた、尊いもののように感じる。
胸の奥から沸き起こる、悠久の思いはいったい何だろう。

「ギリシアも、エジプトも……国が、宗教が違えば、それだけ神が存在する。しかし、神々の境界ってのは何なのだろうか……。そんなものあるならば、争いは起きないと言うのに」

「……でも人は神様を求めるくせに、人と違う力を持った人を、まるで化け物のように扱うよね。それなら神様と化け物の違いは、一体何だっていうんだろう……」

クレハは遠いギリシアの大地から瞳を逸らさず、苦しいほどに懐かしいと思う胸の内に、そっと問いただす。
ギリシアを見つめる瞳の奥は、海のブルーとは裏腹の、悲しい真っ赤な炎が覗く。彼の赤毛のような、その色。

ハヤブサは急に側の雲の上に降り立った。
それは科学的にあり得ない事なのだろうけど、でも雲の上に乗っていたのだ。

「背中から降りてみろ。この雲の上は歩けるんだ」

クレハは言われるより早く、その白くて綿菓子みたいな雲の上に飛び降りた。幼い頃に誰もが夢見た、漫画のような世界。

しかしクレハは雲の上で転がって遊ぼうとした時、雲の上で輝く存在を見た。
さっきまでは雲に気を取られていたのに、それ以上に意識がそちらへ持って行かれてしまうほどの、輝かしい存在感。

「……」

翠はまるで、気高いエメラルド。碧はまるで、純粋なるラピスラズリ。扇形に広がる豊かな尾の羽は、息を飲むほど美しく、美しすぎるとなぜか、悲しくなる。

雲の上に、穏やかに佇んでいたのは、

慈しむようにクレハを見つめていたのは、輝く一羽の孔雀であった。

“雲の巣”

エジプトの雲の上をお借りします。

太陽神よ、暦を創り、時代に時を刻みし大いなる砂の国よ。
海を越え、時空を超えやって来るその者が、いつか私に気がつくまで。

羽の先にあるアルゴスの瞳が、絶えずあなたを見つめ続ける。

／つづく

それは本当に短すぎるメッセージ。
孔雀の眼差しの、語る言葉。

クレハは一度瞬きしたと思ったら、いつの間にか再び真っ逆さまに落ちていた。
瞳にはいまだに、雲の上にいた孔雀が映っているのに。

「そりゃ無いよ！！　つづくって何だよ！！！」

クレハは真っ逆さまに落ちている事にもおかまい無しで、一言そう叫んだ。

彼の赤い髪が、落ちて行く力に逆らえずに流されている。

そりゃ無いよ。

ハヤブサと孔雀が二羽で俺をはめたんだ。

「ばあちゃんのバカやろおおおおお！！！！！！！」

ただ、この時起きた普通でない現象が、全て祖母の仕業である事だけが、今のクレハに唯一分かっていた事だ。

クレハは何がそんなに腹立たしく、何がそんなに悲しかったのか分からなかったけど、この「落ちている」と言う感覚の中で、遠くなるあの雲を見ていた。

あの孔雀はいったい、何なのだろう。

ハヤブサは何者だったんだろう。

彼がエジプトに招かれた意義は、他のヴィライアーとは少し違う。
本筋にはちっとも噛んでいない、茶番とも言える一幕。
ただ、彼は既に、これからに続く新たな物語への招待状を手にしていた。

彼はいまだに気がついてなかったが、固く握りしめていた手の中で、

小さな卵が、一度、どくんと脈打った。

ｌｄｒａｗ

51：エジプトプラン33～そこはピラミッドか～

暗闇に映るのは真実

大切な人の、血だまりの行方

灯の無い空間なのに、何も見えない訳ではなく、ただ薄暗い不思議な場所。
どれくらい歩いただろうか。彼らは、その時空の歪みをさまよっていた。

「歩いても歩いても何の変化も無い。いい加減飽きてきたよ、俺は」

レッドはわざとらしいため息をついて、肩をすくめた。

「何よ、さっきまでは、俺今インディー・ジョーンズみたい？とか言ってたくせに。全く……」

レッドの隣を歩くナギは、呆れた顔で笑っていたが、やはり多少の疲れが見える。

ここは、古代エジプトでも、さっきまでいた王家の谷でもない。閉ざされた遺跡のような場所。古代エジプトに招かれなかった者達が閉じ込められた場所だ。とは言っても、本人達はそれすら分かっていないけれど。

レッドを先頭に、彼らは延々と続く細長い空間を歩き続けているのだ。

「文句言ってないで、さっさと進みなよ、リーダー……」

「相変わらず手厳しいね、ティアン……」

レッドは遠い瞳で、何かを諦めたような微笑みを造る。ティアンは相変わらず眼鏡を光らせてレッドの後ろを歩いている。

ずらずらと長い列を作って、探検とは名ばかりの生死のダンジョン。生きて帰れる保証があったなら、まだ楽しい気持ちで挑めただろうに。

ティアンよりも後ろを歩いていたリオが、何やらさっきからキョロキョロしていた。

彼氏の異変にすぐ気がつくのは、腕を組んで歩いていたシーダだ。

「……どうしたの、リオ。気になる事があるの？」

「いや……大した事じゃないんだけど、僕たち少しづつ上へ昇ってる気がするんだよね……。さっきから左方向の曲がり角ばかりだし……気のせいかな……」

「……」

シーダは首を傾げて、足下を見たり、後ろを振り返ってみたりする。その時、ちょうど後ろに居た三年生のカイ・ヴォストンと目が合った。

「ねえ、カイ、どう思う？　この道、上に向かってると思う？」

「……？」

カイは今まで悶々と考え事をしていたせいで、道の事など気にしていなかった。しかし、シーダの言葉に何かピンと来た様で、急に横の壁や道を目を凝らして観察し始めた。

鋭く研ぎすまされた観察力は、やはり鑑定士の瞳のもの。彼はカバンから懐中電灯を取り出すと、壁や床を照らす。

「……やっぱり……荷台を引いたような跡がある……」

「と、いいますと？　先生…☆」

「やめてくださいレッド先輩。先生なんて」

レッドは無駄に考え込むように、自分の顎に手を添え、

「な〜にを言ってるんだいカイ。君は優れた鑑定士じゃないか。先生と呼ぶ人の方が多いだろ」

無駄にウインク。彼がウインクすると、星が飛んでくるようだ。
カイは半ば諦めたように息をつく。

「リオ先輩が言ったように、この道が上に向かって行ってるのは間違いないと思います。少しずつですけど……。多分ここ…ピラミッドの中ですよ…。俺は考古学者じゃないんで、断言できませんけど」

「まあ…そんな事よく分かったわね」

「この床の、線みたいなの分かりますか？　右側と左側に、台車を引きずったような跡があるでしょう。ピラミッドの作り方っていまだに解明されてないんですけど、こういった、内部に螺旋を描いて組み立てていく作り方があるんじゃないかっていう学説をどこかで読んだ気がします。だんだん、曲がり角に出くわす間隔が狭くなってきた気がしますし……」

カイは、ずっと向こうに続く二本の線の行方を、視線で追った。

ここがどこかなんて、正直どうでも良かった。ただ、その先にある、自分の追い求めている物に触れられるのならば。

その時だった。
今まで黙って先輩の後をついてきていたレイが、急にふらついたので、側に居たヘルが慌てて支えた。しかしヘルは小柄なので、共に座り込んだと言う感じだ。

「レイ先輩！！」

「まあ……レイ!!大丈夫?……そうよ、どうして私、気がつかなかったのかしら」

シーダはリオの腕から離れて、レイの元へと駆け寄った。
レイは「……大丈夫です。すいません。」と言っていたものの、顔色が悪い。

「そうよ。片目なんですもの。平衡感覚が上手く取れなくて、誰よりも疲れるわ」

今まで彼女が普通にしていたため、皆彼女が片目しか無いのを意識していなかった。
しかし、この時誰もがそれを意識し、そして、ルネ・コンで起こった悲劇を思い出す。

「大丈夫ですか?　ここで、少し休みましょうか。…レイさん、お辛そうですもの」

副団長のメルベリーが心配そうにレイの顔を覗く。

「いえ……違うんです」

「……?」

違うんです。

ただの疲れとは違う気持ち悪さに、レイは気がついている。
レイは右目を眼帯の上から抑えて、定期的に襲う痛みと、その奥に見える“何か”に戸惑っていた。

レイは、そのヴィジョンに戸惑っていた。

『何なの……これ……』

何も見えないはずの右目の暗闇。その向こうに何かが見える。

青い空。砂の王国。

血……。

血だまりの中に横たわる、その人。

「……フォルテ……！？」

彼女は急に立ち上がり、一度あたりをキョロキョロ見渡すと、そのまま細い通路を駆け上り始めた。

「ちょ…　おい！！！」

カイは側を横切ったレイを呼び止めたが、むしろそれ以上言葉が出なかったのはカイだ。

カイは見た。彼女の眼帯の奥が淡く光っているのを。

しかし、それはカイにしか分からない事だ。カイにしか見えないもの。

「……うっそ。この期に及んでまだ走れるとは……」

「若さね……」

レッドとナギは何をのんきにしているのやら。
シーダは慌てて、周りに反応を求める。

「ど、どうしちゃったのかしら。さっきまでふらふらしていたのに」

「お、俺、追いかけます！！」

カイは一度振り返って、そのままレイを追いかけて行った。

「……おお。さすがは体力のあるカイ先生だ。仕事と学業の両立で、さぞ鍛えられたんでしょう」

「私、今更走れないわよ……」

レッドは暗闇に消えていった二人を、特に心配するでもなく見送った。ナギなんて自分がバテている。
しかし、ティアンは胡散臭そうに、二人が消えた通路の先をじっと見ていた。何を言うでも無く。

そんなティアンの様子に気がついたメルベリー。

「……どうかしましたか……？　ティアン……」

「……いや……何でもないよ」

何でもないなんて言葉ばかりに、意味深な笑みを浮かべて眼鏡を押し上げた。

レイは右目を抑えながら、ただ前を見ていた。
先ほどのヴィジョンはもう見えなくなったけれど、あれは、あの血だまりの中に居たのは確かにフォルテだった。

「……フォルテ……」

どうしよう。

心の中がもの凄くざわついている。
彼に何かあったらどうしよう。

血の色が、瞳の奥で固まっているみたい。

「ち、ちょ……君！！」

カイはレイを追いかけながら、勢いつきすぎて曲がり角でぶつかりそうになるのをあつかましく思う。
それにしても、片目が無いと言うのに足が速いな。あの子は。

やっとレイに追いつきそうになったと思った時、その空間が現れた。
言葉を失いそうな、三角錐型のホール。

「……」

レイはその空間につくと、息を整えながらその場に座り込んだ。
どれだけ走ったか分からないが、肺がキリキリする。カイも同様に壁に手をついて息を整えていたが、

「……いったいどうしたんだ……急に走り出して……」

やっとの事でレイに声をかける。
レイはその時、カイの存在に気がついたようだ。

「……先輩……フォルテが……」

「……？」

レイは立ち上がって、あたりを見渡すが、そこに居て欲しい人は居なかった。

「どうしたんだ……フォルテが何だって？」

「……フォルテが……血だらけで……」

レイは右目の眼帯を抑えて、その向こうで見えたヴィジョンを思い出す。カイはハッとして、彼女が抑える右目をじっと見つめる。今は、彼が見た所で光っていないが、さっきは確かに……。

「私……さっき一瞬右目が痛くなって、傷が痛むのかと思ったら……見たんです……青空が……」

「……それは……」

「そしたら、何だか昔のエジプトの風景が浮かんできて、そして今度は、血を見ました」

レイは、思い出すだけでゾッとする、あの血だまりの中の彼を、再び右目の奥で見たような気がした。
フォルテが苦しんでいる。

不安で心が凍るみたいだ。

「先輩……フォルテは、皆はどこに居るんですか！？　フォルテが……血だらけで……苦しんでいるのに……」

どうしてあんなものが見えたんだろう。
レイは泣きそうになりながら、カイの腕を掴んで揺さぶった。

カイはどう答える事も出来ずに、瞳を逸らす。

きっと、彼らは扉の向こうの世界に居る。
鍵をかけて閉まっていた、封印された歴史の世界に。

ただ、この子はその、扉の向こうの世界を垣間見たと言うのだろうか。
そんな事、可能なのだろうか。

閉ざされた三角錐の空間で、カイは思った。

やっぱりここは、ピラミッドの中なんだろうなと。

それが、現実のピラミッドなのか、あるいはそうでないのか、それは我々には理解出来ない、与り知れない話だ。

ldraw

52：エジプトプラン34～ボーイ・ミーツ・ガール～

少年と少女が出会った

彼女が連れてきたものは、生と死の鍵

メンフィスの王宮の一角で、ファラオ、アンケセナーメン、宰相アイ、団長……そして、太陽神ラーの神官長であったカーロンが話し合いをしていた。その中で、カーロンは知りうる限りの昔語りをしていたのだった。

「オアシスを出て行った息子を探しに行って、私はある神殿に行きました。我々が“黄金のマスク”と言うものを隠した神殿です」

「……！？」

「彼は……息子タハールは無惨な骸となって発見されたのです。……私はすぐに、その場に満ちた気で気がつきました。息子は、その身をもって、王家に呪いをかけたのだと……。呪いの力は大きく、王家への反乱は勢いを増しました。何よりすぐに、当時のファラオであるアクエンアテンが謎の死を遂げました。……宰相アイ、お前なら分かるだろう。呪いを恐れて、すぐにアマルナ改革を取りやめる様働いたのは、お前だったからな」

カーロンと宰相アイは、静かな睨み合いの中に居た。団長は椅子に座って、しびれを切らしたように、

「で、その長話がスノーと、一体何の関係があるって言うんだ。あいつが生かされているって」

「先急ぐのは良くないぞ、ラーの使徒。……たとえアクエンアテンが死んでアマルナ改革が崩壊しても、その呪いが解ける事は無かった。テル・エル・アマルナの地は呪いの化身で満ちあふれ、元王妃であるネフェルティティ様はその呪いを解きたがっている。どこで知ったか分からないが、その呪いを解くのに必要なものが、“黄金のマスク”なのだ。ネフェルティティ様はラーの使徒を人質に、黄金のマスクを要求してくるでしょう」

「だったら!!　その黄金のマスクとやらをさっさと渡せ!!
スノーを無傷で返してもらえるなら、それにこした事は無い!!」

団長は大理石のテーブルを思いっきり叩いて、いささか焦った様子だった。

スノーはヴィライアーにとっても、美術界にとっても大切な人材だ。こんなくだらない事で失うわけにはいかない。

しかし、ふと思い出す。黄金のマスクと言うフレーズ。

『……待てよ……』

確か、黄金のマスクって、ツタンカーメンのミイラが冠っていたのを発見されたんじゃなかったか？

彼はチラッとツタンカーメンを見る。

ツタンカーメンは指を組んで、困惑した事態に戸惑っているようだった。

歴史を変える事は許されない。

ならば、それならば、ツタンカーメンって……。

「ラーの使徒。残念ながら、黄金のマスクを取りに行くのにも時間がかかります。王家の者はその神殿には入れない様になっているのです。固い封印を解き、神々の恩恵にあずからなければ……」

カーロンの言葉で、団長はハッと我に戻った。

「あ、ああ……」

やはり、自分たちでスノーを取り返すほか無いだろう。

彼はツタンカーメンを見た後、宰相アイを見た。

歴史を変える事が出来ないのならば、ツタンカーメンの死後、ファラオになるのはこの宰相アイだ。

俺は、この男が陰謀を企てているのを知っていながら、それをどうする事も出来ないのか。

皮肉にも、それが歴史だ。

キクマサは一人、中央のキオスクで相変わらずぼんやりしていた。
ぼんやりしていたと言うか、考えようにも分からない事だらけでどうしようもないと言うか。

自分の知らない所で、色々なことが起こっている気がする。
スノー先輩だって、クレハだって。助けたいのに、時代も国も違うこんな場所で、自分に出来る事はいったい何だろう。

「悩んでるねえ～新人。初めての研修はいかがお過ごしで？」

「……フレイ先輩……」

いつの間にか背後に居たフレイが、誰もいないのに柱に手をついて

格好つけている。

「大丈夫なんですか？　先輩達、長旅でだいぶお疲れなんじゃないですか？」

「あんな固っ苦しい所で寝てられるかよ。むしろストレス溜まるって」

「……はあ」

キクマサは胡散臭そうに、でもそう思っている事を悟られない様に頷いた。

フレイはキクマサの隣に腰を下ろすと、悠々とタバコを吸い出した。

カトレアさんのアトリエで、タバコには免疫のあるキクマサなので、どうってこと無く受け入れられたけれど。

フレイは一度、長く煙を吐いて、

「ま、こんな研修そうそうないから。初めてがこれってかなり可哀想だけど。まあ、ヴィライアーに選ばれちゃったから仕方ないか」

片腕を背もたれの後ろに回して、空を見上げる。

キクマサは、何か急に絡んできたこの先輩をチラッと見た。

フレイ・レステヴァン先輩。ルネ・エメラルドでいらっしゃる。

彼の噂はそこそこ聞く。良いも悪いも、色々。

少し長めのアッシュ・ブラウンの髪に、チャラチャラした風貌。こんな人でも絵を描くんだな、と言ったような。

「お前みたいな奴でも絵描くんだなー……」

「……先輩が言いますか、それ……」

今まさに、フレイに対して思っていたことを自分に言われ、何だかやるせない気持ちで泣きたくなった。
フレイはおかまい無しに笑って、いけしゃしゃあとしている。

「ま、俺は意欲的に沢山作品を造るタイプではないけどな。描きたいと思った時に描く。芸術っちゃそんなもんだよ……。沢山描いて開拓する奴も当然居るけどな、リオみたいな」

「……はあ」

彼は片足を、もう片方の膝の上に乗せて、空を仰いで煙を吐く。
チャラチャラした風貌に惑わされていたが、やはりどことなく感じる、芸術家の空気。

「……で、お前、モテるだろ」

「……はい！？」

さっきまでの話はどこへ行ったのやら。キクマサは聞き間違えたかと思って慌てて彼の方を向く。

「初めて見たときから思ってたんだよ。……なんか来ちゃったぜって。……ヴィライアーの色男担当は俺だけで十分なのにって。ま、レッド先輩がいるけど？　あの人は遊び人ってタイプでもないし？」

「……いや……ちょっと待ってください。自分で言うのもあれですけど、俺も別に遊び人ってわけじゃ……」

「リオは残念な彼女を持ってるせいで、戦線離脱だし……」

「いや、……残念な彼女て……」

なんか一人で、どんどん話を進めるフレイに追いつけそうにないキクマサ。

フレイはわざとらしくため息をついたりして。

「俺、ピーンて来たんだよ。似たような何かを感じるって。……お前、昔荒れてただろ」

「……え……」

キクマサはその言葉の瞬間、目を斜め上に逸らした。

フレイは「は～ん」と、これ見よがしに、

「図星かよ。やっぱすげーや、俺」

うんうんと満足そうに頷いている。

いままで隠しきたわけでは無いけど、あんまり気がつかれなかったことだけに、キクマサは気まずかった。

「ま、気を落とすな、新人。……いや、キクマサだっけ？　仲良くしようぜ……あ、タバコいる？」

「結構です。俺、もうやめたんで」

「へえ～すげ～。禁煙したんだ。俺には無理だな」

彼はそう言いながら、短くなったタバコを携帯用の吸殻入れに入れた。

「……そういう所はちゃんとしてるんですね。……何ていうか……」

「意外？……ちゃんとしとかないとシーダがうるさいんだよ。……母親かよって、なあ？」

「……はあ」

なんか、この人のことがよく分からない。

不良かと思ったら、思いの外に見直す所もあって。かといったら、の繰り返しだ。

その時だった。

風の流れが急に変わったと思ったら、キオスクの周りの草花が勢いよく流される。池の水面も、その風の方向に。

キクマサとフレイが、吹きつける風に目を閉じた一瞬だった。

目を開いた時、キオスクの前のスミレの沢山生えた場所に、金髪の少女が倒れていた。

キクマサは、彼女を見た時、驚きのあまりすくっと立ち上がった。

「……え……ルナ……っ！！」

彼は彼女に駆け寄って、倒れたまま動かない彼女を抱き起こした。
それは、間違いなくルナシーであったのだが、キクマサは彼女が着ている服が、真っ赤な血で染まっているのを見て、心臓が止まりそうになった。

「おいおい……マジかよ」

「先輩！！　おねがいします！！　誰か呼んできてください！！」

「あ、ああ……」

キクマサは、とにかく彼女を助けたいと思った。
フレイが急いで人を呼びに行った後も、キクマサは彼女の名を呼び続ける。

「ルナ！！　おい、ルナ！！……いったい何があったんだ……」

彼女は、白い顔が一層白く、細い体は一層細く見えた。
手と足は鎖で繋がれ、その姿は見てられないほど痛々しい。

どれだけ会っていなかっただろうか。久しぶりに会えたって言うのに。

「……ルナ……」

彼がもう一度、彼女の名を呼んだ時だった。
ルナシーが小さな声を上げ、目をうっすら開いたのだ。

しかし、彼女は目を覚ました瞬間、何かとんでもなく恐ろしいもの

を見た様に青ざめ、キクマサを確かめると、震えながら涙を流した。

「……キク……」

そして、すがる様に彼の胸元の服を握りしめ、強く強く、顔を埋めた。

キクマサは少し驚いたが、彼女が、自分の知らない所で大きな恐怖を抱えたことに、胸が痛かった。手や足の小さな傷が、それを物語っている。

「ルナ……ルナ、もう大丈夫だ。もう……」

キクマサは彼女を安心させたくて、強く抱きしめた。

「いったいどうしたって言うんだ……ルナ……」

「キ、キク……フォルテが……」

ルナシーの声が、一層涙声になる。彼女は、涙の溜まる瞳を見開いて、あの時の、あの惨劇を再び思い出してしまった。

フォルテが倒れる、その瞬間を。

「フォルテが……死んでしまったわ……。殺されたのよ……っ」

彼女の言葉は、嘘偽りでは決して出せないような、嘆きの声だった。

キクマサはその言葉を理解した時、

目の前の世界が、まるでモノクロ写真の様に色を失い、何が何だか分からなかった。

ldraw

53：エジプトプラン35～健闘を祈る～

失ってからでは遅いのだと

今更ながらに思い知った

ずいぶん夜も更けた頃、それでも俺は眠らずにルナシーについていた。彼女はずいぶんと衰弱していたので、あの後、再び気を失ったのだ。

彼女が目覚めるまで、キクマサは眠れそうになかった。

「……寝ないの？　キクマサ君」

「……シャルロ先輩……」

いつの間にか背後にいたシャルロ。彼女は複雑そうな顔でルナシーを見ていた。

「この子、ずいぶんひどい目にあった様ね。……可哀想に」

「……」

キクマサは無言で、ただただ悔しかった。自分が今まで、いかに平和の中に居たかを思い知る。
フォルテのことだって……。

「……先輩……。この世界で死んでしまったら、どうなるんでしょうか……」

「……？」

キクマサは椅子に座ったまま、気力の無い言葉で問いかける。シャルロは腕を組み、表情はあまり変えないまま、

「……分からないわ。全てが分からないんだもの。……ルネ・クリスタルが殺されたって言うのも、私たちが見た訳じゃない……」

「でも！！……でも、ルナシーは泣いてました……。彼女のあんな顔は、今まで見たことが無い……」

死と言うものを目の前にした時の、大切なものを永遠に無くしてしまった時の表情。
気づかされてしまう。納得させられてしまう。

彼が死んでしまったのだと。

その時、入口の壁をこんこんと叩く音がして、シャルロとキクマサは振り返った。

団長が、いつもながらに険しい表情で、そこに立っていた。

「すまないが、シャルロ……話がある。キクマサは彼女を見といてくれ……」

彼はそう言うと、シャルロを顎で促した。彼女は少し眉根を潜めたが、

「……キクマサ君。あなたもあまり、無理しないのよ」

と言って、軽く彼に笑いかけた後、再び険しい表情に戻してその場を後にした。

「明日、スノーを取り戻しに、テル・エル・アマルナへ行くぞ」

「！！？」

団長は、自分の部屋の壁にもたれかかって、落ち着いた様子でシャルロに言う。しかし、シャルロは彼を鋭い視線で見上げていた。睨むと言うよりは、もっと違う意味を含んだ視線で。

「……あんた……大丈夫？」

「何がだ」

「心ここにあらずって感じよ。……後輩を失ったかもしれないのが応える？」

「……はっ……」

団長は、バカにするなよと言わんばかりに、苦笑する。

「言っとくが、あまり関わったことの無い後輩が死んで、悲しむなんて逆に怪しいもんだぜ。俺は、今後の展開が気がかりだ」

「……何？」

シャルロは、話が長引きそうなので近くの椅子に腰掛け、足を組んだ。

団長は、いつものような俺様な態度ではなく、深刻に何かを考えていた。

「これが歴史の舞台なら、俺たちは覚悟しなきゃならないな……。ツタンカーメンはもうすぐ死ぬぞ。それは俺たちには変えられない事実だ」

「……」

シャルロは一度、瞳を大きく見開いたが、視線を床に落とすと、

「……そうね。私たちは分かっていたつもりなのにね。忘れていたわ」

「そうだ。そして、その後にファラオになるのが宰相アイ。皮肉にも、俺たちを殺そうとしている、テル・エル・アマルナとも通じている人物だ。やっとそれに辿り着いたのに、俺たちはあいつをどうすることも出来ない」

団長は舌打ちをして、拳で壁を叩いた。

「スノーは、歴史とは関係がない。あいつを助けることが、俺たちに出来ることだ」

今日、ルナシーがどこからどうやって現れたか分からないが、思い知ったことがある。

失ってからでは、もう遅いのだと言うこと。

「シャルロ。スノー奪還は、俺とお前と、ホルエムヘブで行く。あと……フレイとジェイルに、黄金のマスクを取りに行かせる。カーロンが案内してくれるそうだ」

「……何ですって……？」

シャルロは、急に出てきた“黄金のマスク”という単語に、少し面食らってしまった。しかも、フレイとジェイルを行かせるって。

「あ、あんた……その黄金のマスクが何なのかよくわからないけど、よくもまあフレイとジェイルを組ませようとしたわね……。あの二人は対極に位置する人種よ」

「仕方ないだろ！！　キクマサはこの王宮に長く居たんだ。ファラオや宰相アイを見張ってもらわないといけない。……それにあいつも、色々気がかりだろ。……そしたら残ったのがフレイとジェイルだったんだよ」

「……」

ぶっきらぼうに言っていたが、やはりなんだかんだ言って、団員のことを考えている所が団長らしいと言うか。
シャルロは吹き出しそうになった。

「何だよ……」

彼は不機嫌そうにシャルロを睨んでいたが、シャルロはツンとそっぽ向いた。

「俺は、宰相アイを許せない。でも、あいつが次のファラオになるのは歴史の事実だから、仕方が無いと思う。だが……あいつに黄金のマスクを渡すわけにはいかない。あれはツタンカーメンのものだ」

夜のロウソクが、閑静な空間に影を残す。
団長の言わんとしていることが、シャルロには分かるような気がした。

今の、無力な我々が出来ること。

この時代に呼ばれた理由。

それはきっと、歴史的には当たり前な、しかし、奇跡のような事実の中に隠されている。

「嫌です！！！　先輩たちは私を殺す気ですか！！！」

今朝起きたばかりのジェイルは、さっそく大声を上げていた。団長とシャルロは「やっぱりね」と言わんばかりに顔を見合わせる。

「死にはしないわよ。今までだって、一緒に旅してきたじゃない」

「死ぬ寸前でここについたんです。なんか文句ありますか」

ジェイルはしらっとして、当然のごとく断言した。シャルロは頭を抱え、

「お願いよジェイル。今はあなた達しかいないのよ。キクマサ君はこの王宮でやってもらわなければいけない事があるし、何より私たちが元の世界に帰るためよ」

頑固な彼女に言い聞かせるが、ジェイルは断固として聞き入れてくれない。

「……あのなあ、お前……」

団長も何か言いたげであったが、彼が口を挟むと火に油であることは明白だったため、シャルロは慌てて団長の足を踏みつけた。団長の声にならない叫び。

ジェイルは何と言うか、男関係意外ではとても良い子なのだが、この手の事情となると、驚くほど頑固なのだ。

まあ、それは分かっていたことであるが。

「私は、絶対にあの男と行動しません！！」

「なになに、俺と一緒に居たいって？　全くルネ・サファイアって本当に俺が好きだねぇ」

「……」

一瞬の沈黙。シャルロも団長もあんぐりして、いつ現れたんだと言う様に、ジェイルの背後にいる男を見る。
ジェイルなんて言葉も無い、と。

「さあ、行くぞ。ルネ・サファイア。向こうでカーロンのじじいが待ってる。……仕事放棄はす・る・な・よ」

フレイはジェイルの耳元で、勝ち誇ったような、不適な笑みを浮かべ、嫌味を呟く。
そして、固まってしまったジェイルを引きずって、

「じゃ、行ってくるぜ。スノーのことは頼んだぞ」

最後だけまともな事を言って、「ぎゃあああああああ」と叫んでいるジェイルを笑顔で連れて行った。
シャルロは、この時ばかりはあいつの“嫌がらせ”的な女子の扱いの上手さに感謝したが、

「……私はいまだに、あいつがモテる理由が分からないのよね……」

「俺、ルネ・サファイアが可哀想だって、初めて思ったよ……」

団長もシャルロも、この後味の悪さに、微かな罪悪感を感じたのだった。

シャルロと団長が、スノー奪還に向かい、

ジェイルとフレイが“黄金のマスク”を回収に行った。

キクマサは団長との別れ際に、団長に全てを話された。ツタンカーメンがもうすぐ殺される事。その後のファラオが宰相アイである事。黄金のマスクは、ツタンカーメンの死後に必要なのだと言う事。そして、その事がアンケセナーメンにばれてはいけない事。

「お前は、王宮で起こる事をちゃんと見張ってろ。深追いはするな」

「で、でも、俺はいったいどうしたら良いんですか。先輩達の帰りを待つだけなんて……！！」

キクマサの焦りは当然だった。

ルナシーはいまだに目覚めないし、フォルテの事だって分からずじまい。

団長は、キクマサの不安をちゃんと分かっていた。

「……正直言って、俺はこの王宮が一番ヤバい事になるんじゃないかって思ってる。キクマサ……お前は歴史を理解した上で、自分のやりたい様に行動しろ。……無駄に考えるな、多分とっさに出た行

動が答えだ」

彼は、相変わらず眉間にしわを寄せたような険しい顔だったが、言葉には重みと、後輩を気遣う優しさがあるような気がした。

キクマサは上手く飲み込めなかったが、

「……分かりました。……絶対、無事に戻ってきてください」

そう言って、彼らを見送った。

何か、全ての結末がそこまで来ている気がするのに、

“結末”自体が、まるで俺たちを飲み込もうとしている怪物みたい。

皆が、最後のピースを集めに行っている。

俺はここで、今まで拾ってきたパズルを組み立てなければならない。

どんな、悲しい絵が浮かんできても、それに耐えながら。

ldraw

５４：エジプトプラン３６～理想～

ファラオの理想のそのむこう

あなたの心の内を、誰が知らなくても俺だけが知っている

ルナシーがこの王宮に現れたとき、後からやってきたアンケセナーメンさんとファラオの驚きの顔が忘れられなかった。二人は彼女を知っていたのだ。

アンケセナーメンは涙をためて、彼女の眠る床の間にうずくまって、

「……生きていたのですね……ルナシー……」

涙声で、絞り出すような声を出していた。
ファラオはそんなアンケセナーメンの肩を抱いて、彼もまた暗い表情であった。

そのとき彼らが語ってくれた事は、とても信じられない事だったけれど、キクマサは受け入れるほか無かった。

ルナシーとフォルテは、十年前のエジプトに迎えられたのだ。
そこで、幼かったツタンカーメンとアンケセナーメンと出会い、ラーの使徒と呼ばれた。
そしてフォルテは、ルナシーとツタンカーメン、アンケセナーメンの前で刺されたのだ。

「あのとき、彼女達は光の中に、跡形も無く消えたのです。……私は今でも覚えています」

ルナシーも。動かなくなったフォルテも。
まるで、彼らの存在が幻であったかの様に。過ごした時間は夢であったかの様に。

そして今、十年の時を超え、ルナシーだけが再び古代エジプトの地にいるのだ。

腕時計が、意味の無い時間を刻み続けている。
眠るルナシーの前で、俺はただじっと、彼女が起きるのを待っているだけだ。

ルナシーは、レイに比べたらあまり感情を露にするタイプではない。
どちらかと言うと、いつも穏やかで、笑っている事の方が多いから、あまり意識した事が無かったんだ。

抱きしめた時、びっくりするほど彼女は小さかった。
弱っていた彼女の心が、そう感じさせたのだろうか。

キクマサが一人、悶々とそんな事を考えていた時、目の前の白い布が動いた。キクマサはハッとする。

「……ルナシー……起きたか」

ゆっくりと瞳を開けるルナシーを、キクマサは顔を覗き込む様にして見守った。
彼女の顔は青白く、まるで透けているみたいだ。

「……キク……」

「ルナ……大丈夫か？　ずっと起きないから、みんな心配してたんだ……」

ルナシーは目を覚ましてすぐに起き上がろうとした。彼女にかけていた白い布が、帯を作って落ちる。

「私はいったい……ここはどこなの……？」

「ここは王宮だよ。古代エジプトの……ツタンカーメンの時代だ。全部……聞いたよ、ルナ……。ここは、君たちのいた時代から、さらに十年経った世界だ」

彼女は、いまいち自分の置かれている状況が分からないと言う様に、おぼろげな表情だった。
心の中にあるあらゆる情報を整理しながら、彼女はやっとキクマサを見た。

キクマサは椅子から身を乗り出す。

「もう平気か？　どこも痛くないか？」

「……大丈夫よ、病気じゃないもの。……心配かけたわね……」

ルナシーは、いつものルナシーらしく軽く微笑んだ。
そして、ゆっくり目を伏せる。

「私だけがここへ来れたのね。……フォルテはやっぱり居ないんだわ……」

「……」

キクマサは、その事に関しては言葉が見つからなかった。自分がそ

の場を見た訳ではないし、実感も無い。しかし、目の前でその瞬間を見たルナシーに取っては、リアルな現実なのだろう。

「……フォルテだけじゃないよ。……クレハも行方不明で、スノー先輩なんて、敵に捕まってしまったんだ。……俺たちはいったい、いつまでここに居ないといけないんだろうか……」

「……キク……」

ルナシーは、事情も何も分かっていなかったが、少なくとも、自分がまだこの世界に居るのだと言う事はよくわかった。戦乱の時代の、混沌とした歴史の中に。

ふと、ルナシーは自分の寝床の傍らに置かれている、丸い石を見つけた。
つやつやした、玉眼。

「……そうだわ……これ、フォルテが“鍵”だって言ってたわ……。これがあれば、元の世界に帰る事ができるって」

「……鍵……？」

彼女は玉眼を手に取り、まじまじと見つめる。別に、何も変わった事の無さそうな石なのに、持っているとじんわり熱く感じる。逆に瞳に見られると、心の奥がヒンヤリする。

キクマサも感じたのだろう。その禍々しいのに、ピンと張りつめたような空気を。
しかし、二人とも頭いっぱいに疑問を抱えるだけで、それをどうすれば良いのかさえ分からなかった。

ファラオとアンケセナーメンは、静かな時間を過ごしていた。短い、二人だけでいられる時間を。

「……結局私はいつも、何もできずにいるね。国政もままならず、呪いだって……ラーの使徒に任せている。ここでじっと呪いが解けるのを待っているだけ、テル・エル・アマルナが落ちるのを待つだけだ……」

ファラオは、悔しいと言うよりはむしろ、何かに疲れたような精の無い表情だった。

ファラオとは何なのだろうと、幼い頃から考えて考えて、今でも答えは出そうにないのだ。

そんなファラオに、アンケセナーメンは微笑みかけた。

「あなたは頑張っていますわ。父、アクエンアテンの時代の責任をたった一人で受け継いで……。ラーの使徒が現れてくれたのも、あなたの国を思う心があったこそ。神が使わしてくださったのです……」

ずっと、ずっと一緒に、身を寄せあって生きてきた。
民が苦しんでいながら、何も知らずに幸せに暮らしていた無邪気な時代から、

父が死に、いきなり現実を突きつけられた、操り人形の時代まで。
あなたはやっと、ファラオとして、自分の理想を抱きつつある。

「……心配なさらないで。きっと、何もかもうまくいきますわ……」

アンケセナーメンは、愛しい夫を抱きしめた。
お互いの心にある不安に気がつかない振りをして。

「……アンケセナーメン……」

ファラオは、幼かった時の自分たちを思い出す。いつも彼女が手を引いて、その暖かさで導いてくれた。
あの、日だまりの向こうの世界を、もう一度走りたい。

自由だった、あの頃。
今度は私が彼女を、この国を導く番なのだ。

夕方の穏やかな空の色を見ていると、今朝、先輩達が旅立ったのが嘘のようだ。
キクマサはいつもの様にキオスクに来ていた。

中庭の、空の見える場所に居ないと、不安に押しつぶされそうだから。
ルナシーは王妃に呼ばれていた。きっと、つもる話があるだろうからと、キクマサは一人そこに来たのだ。

そして、今日はキオスクにファラオがやってきた。
二人は出会う事ができた時はいつも、そのキオスクで話していた。

「考え事かい……キクマサ。皆が心配なのも無理は無いが……」

ファラオは、やはり年の割に落ち着いた声音で、キクマサを気遣っていた。
キクマサも、彼を心配させてはいけないと、軽く笑って、

「大丈夫ですよ。みんな、凄い人たちばかりですから」

自分にも、そう言い聞かせる様に。

今日はやはり、お互い無邪気に、少年らしく語り合えない。
今まで考えない様にしていた、リアルな歴史がそこまで来ているから。

キクマサはふいにファラオに問いかけた。

「ファラオの理想とする世界って、どんな世界ですか？」

前に、そんな話をした事があった気がする。
ファラオとしての、こんな時代だからこそ望む、理想の国。

ファラオは少々驚いたようだが、真剣なキクマサの表情に少し笑って、少しずつ口にする。

「そうだな……。歴代に代表するような、名を語られる王ではなくていいから、やはり、皆幸せに」

優しい声で語る理想は、欲など無く、そしてやはり“理想”であった。

「今までの混乱など、誰もが忘れて、お互いの神を認めあい……反乱も無く……。ナイルの導きのまま、次の時代が重い責任を負わないように……」

訪れる毎日が、晴れ渡っているような。
この、エジプトの青い空の様に。

太陽の下の民であるのだから。

ファラオの呟く理想は、当然“理想”だと、ファラオ自身がよく分かっていた。
どうして今、俺はこの先の未来を知っているのだろうと、心の奥が痛くて仕方なかった。

「……きっと、あなたの理想は叶います」

キクマサが泣きそうに微笑んだのは、悲しかったからか。
いや、ツタンカーメンと言うファラオが、未来で最も名を残すファラオとして、ふさわしい人物である事が嬉しかったからかもしれない。

嬉しいけど、悲しい。
もうすぐあなたは死ぬんだと、いったい誰が言えただろう。

早過ぎた死が、あなたを悲劇の少年王と煽り、彼を有名にした。
彼の理想とは裏腹に。

ｌｄｒａｗ

55：エジプトプラン37～美術系をなめるな～

歴史なんかどうでもいいからって

全てをめちゃくちゃにできたらどんなにいいだろう

ラーの使徒奪還の名目で、テル・エル・アマルナに王宮軍が襲撃したのは、シャルロと団長が旧王宮へ侵入するためのカモフラージュだった。それかあるいは、襲撃こそが目的か。

「今ならホルエムヘブが兵士達を引き止めてくれる。……できるだけ急いでスノーを取り戻した方が良いな」

「分かってるわよ」

二人は風の様に、陰気な回廊を走り抜け、スノーが閉じ込められている牢を探していた。
こういう時に、ヴィライアーの研修着は本当に動きやすい。

突然の奇襲に、あちこちで鐘が鳴っている。兵士達はばたばたと、外の守りに向かっていたため、宮内での人の流動が激しい。
団長とシャルロは臨機応変に柱に隠れたり、息を殺しながら内部へと足を進めていた。

しかし、急いでいるためどうしても見つかってしまう時は、槍を持った兵士相手に、

「美術系を！！！」

「なめるな！！！！」

と、走っているついでに二人して飛び蹴り。
勢いのついた二人はもう誰にも手に負えない。やめられない、止まらない。

腕っ節の強さで言えば、ヴィライアーのツートップであり、それは新メンバー以外の中では当然の常識であった。
走っては、邪魔者に出くわし、殴る蹴るの好き放題の後、屍を乗り越え再び逃走。

「強いな、シャルロ」

「団長だって、なかなかやるじゃない」

いつもはお互い喧嘩ばかりしているのに、こういう時は息がぴった

り合う、謎の先輩後輩。団長はいかにもマフィアの跡取り息子なだけあって、力任せで乱暴で、容赦ない。シャルロは余裕のある無駄の無い動きで、たまに捕えた兵士をヒールで踏みつけ、恐ろしい微笑みを浮かべていたため、

「おい、ここで女王様スイッチを押すんじゃない！！」

と団長に怒鳴られていた。

自分たちの存在がだんだん明るみに出始め、向かってくる兵士が面倒くさいほどに多くなってきた。

「いたぞー！！」「あっちだ！！」の声が至る所から聞こえてくる。

こうなってくると二人は、こそこそするのが面倒くさくなったのか、行動が派手に、大胆になってきた。

向かってくる奴らは皆敵。と言わんばかりの猪突猛進っぷりだ。

「美術系なめんなよ。デスク囲ってるインテリと違って、体力勝負なんでね。お前らも一回、油の画材フルで運んでみろってんだ！！そしてキャンバスを貼ってみろ」

団長は、古代エジプト人に言っても何のこっちゃ、と言われそうな愚痴を叫んでいた。そして、目の前の兵士の槍を掴んで、兵士ごと振り倒す。

シャルロも目の前の男にグーパンチを食らわせ、

「そうね。生易しい世界じゃないの……よ！！」

膝でみぞおち。

この光景を見る限り、どっちが悪人なのか分からない。

彼らは前に進むことをためらわなかった。
どこへ行くべきなのか分からなかったけれど、この広い宮殿の内へ内へと、直感だけで進んでいると言った方が良い。

しかし、彼らは突然立ち止まらずをえなくなる。
今までは長い回廊が迷路のようだったのに、広い中庭に出てしまったからだ。

皮肉にも、そこはルナシーが、二人の子供に花の王冠の作り方を教えた場所。
急に訪れた花の香りに、団長とシャルロは戸惑ってしまったのだ。

「！！！！！」

団長は、この暗闇に紛れた敵を感じていたものの、この時、一瞬の隙ができてしまった。風をきる矢の音に振り返った時は、もう遅い。
その矢は団長の肩を貫き、彼は矢の勢いのまま、前に倒れた。

「団長！！！」

シャルロはキッと周囲に注意して、歯を食いしばる。
再び放たれた矢を避け、団長に駆け寄る。

彼の血を見たとき、彼女の中でガラスを突き破るような音がした気がした。

たった一瞬、彼女は団長の研修着の内ポケットを探り、一つの黒い銃を掴み、取り出す。きっとあるだろうと確信していた。

シャルロの乱れる髪の隙間から見えるのは、彼女の冷たい、氷壁の様な瞳。

その激しい銃声は、連なった一筋の赤い光。

さて、それは何だったのだろう。何がが起こったのだろう。

彼女は暗闇の中で、一斉に襲いかかってきた敵を連続で撃ち抜いた。

感覚と、殺気と、自らの衝動に任せて。一瞬の銃声の後、襲いかかってくるのは沈黙と虚無。

いま、そこに立っているのはシャルロだけだった。

彼女は立っていた。倒れた団長の傍らで、“死”を思わせるような殺気を纏って。

「……」

息を整えながら、銃を持つ手をだらんとたらし、もう片方の手で額を覆った。

「……やっぱり持ってるものね。マフィアの息子さんって」

一度息を息をつくと、シャルロは視線だけを右隣の池の前に向け、

いつの間にやらそこに立っている人物に銃を向けた。
黒髪長髪の、今までの兵士とは明らかに雰囲気の違う、いけ好かない男。
奴は、読めないすかした笑みを浮かべている。
鋭い視線の、睨み合い。
そう。この男は、シャルロ達には面識が無かったが、ルナシーやフォルテには多いにある。

「……あんた、何なの」

「……そう警戒するな。私はお前達の敵ではない」

シャルロは息を飲んだ。さっきまでこの中庭で立っていたのは、自分だけだったのに。
こいつは急に現れた。まさに、湧いて出たように。
黒髪の男は、と言うより、この国の呪いを促したあの“セト神”は、スッと団長の前に腰を下ろし、彼の傷を確かめる。
そして、黒いアンクを取り出し、傷口にそれをかざした。

「……！？」

シャルロはその光景に、息を飲んだ。セト神が唱える不思議な呪文は、ヒエログリフの螺旋となって、彼の傷を全て癒したのだった。
驚いていたのは当然だが、銃を急いで団長の上着の内ポケットに入

れなければとむしろ焦った。
だって、彼が今目覚めたら、シャルロが無断で銃を使った事がばれてしまうから。

何とヒヤヒヤする事か。

「……あんた、何者なの……？」

「……ここをまっすぐ進み、右へ曲がると地下牢への道がある。……お前達の仲間はそこだ……」

「……無視ね」

シャルロは、まるで一方通行な疑問に諦めをつけ、ため息をついた。
セト神は彼女に小さな鍵を渡す。

「これ……牢屋の鍵……？」

「急いで連れ出した方が良いだろう……。じきにここは焼け落ちる……」

やはりシャルロの問いは丸無視で、彼女から見れば謎の、胡散臭い男は立ち上がった。
彼は、暗い夜の空に上がり始めた炎と煙をじっと見ていた。シャルロも、この時やっと戦争と言うものを意識する。

そうだ。王宮軍にとっては、このテル・エル・アマルナの圧制こそが目的なのだから。
セト神は炎を睨むシャルロを横目に見ると、

「……ギリシアの運命の娘よ。その力は先の未来にもご健在のようだ」

意味深な言葉を残して、シャルロが聞き返す暇すら与えず、この神様は消えてしまった。

「……は？」

彼女からしてみたら、何の事かさっぱり分からない、意味不明の言葉だった。

すっかり傷が治ったくせに気絶したままの団長を、シャルロは両頬を挟む様に思いっきりビンタした。
ここで贅沢に寝ていてもらっては困る。

「いってえええ！！！」

やはり団長は、それだけで起きる。さっきまで大怪我を負っていたとは思えないような、寝起きのような反応にため息が出そうだ。

「ちょっとそこの使えない団長さん……」

「何だ！！　いや、何だじゃねえや。何だと！？」

団長は若干、混乱気味。
シャルロはますます、「こいつはもうダメだな…」と思わずにはいられなかった。頭を抱え、

「スノーを迎えに行くわよ…。あの子、きっと待ちくたびれてるわ」

チラッと、周りに倒れている兵士を確かめる。
団長がどうか、こいつらの傷のありように気がつきません様に。

殺してはいないが、しばらく触れていなかった銃の感覚に、今でも心がざわついている。

スノーは、地下牢に閉じ込められていた。
ここに来てどれくらい経っただろう。

人間の三大欲の中で、円グラフにしたらほとんどが睡眠欲に支配されているスノーだって、そろそろいい加減牢屋の中は飽きてきた。
拷問でもうけるだろうかと思っていたが、結局ネフェルティティに殴られた程度で、正直何がしたかったのか分からない。

「気高いと言うか、意地っ張りと言うか……」

きっと彼女は、楽な道を選ばずに自分の信念を貫きたかったのだろう。

それがたとえ、非難されるものだったとしても。

彼は石の台の上に座って、もう十分寝たくせに、まだあくびが耐えないようだ。

そろそろ、誰かが来てくれるだろう。

何となくそう直感的に思っていたから、彼は見事に何もしないでいた。自分が行動を起こすと、何かと効率が悪いし。

「スノー……全く、捕まってるのにあくびとは余裕ね」

ほら来た。

彼は牢屋の目の前に居るその人を、特に驚いた様子も無く見上げ、

「だってほら、君が来てくれると思ってたし……」

珍しく少し笑った。

淡い茶色のカラメル色の瞳。

信じてたというより、それはお約束だった。

彼女は鍵を開け、のんびり起き上がろうとしているスノーの手を引いた。

行くわよ、と言わんばかりに、相変わらず勝ち気な微笑みで。こう

いう所を見ると、ああやっぱりシャルロだなって思う。

「おい、　急げ！！　敵がくるぞ！！！」

牢屋へと続く階段の下で見張っていた団長の声がする。
シャルロは急いで、スノーの手錠と足枷を外した。試してみたら、
案の定牢屋の鍵と同じだったから。

「へえ～、団長も来てるんだ」

「へえ～、じゃ無いわよ。ほんと、あんたってがむしゃらに生きる
タイプじゃないわよね……」

ガシャンと、鉛の鈍い音がして、手足の鎖が解かれた。
二人は急いで牢を出て、団長と合流する。

「よお、大した事無さそうじゃねえかスノー」

「ええ……。自分でもびっくりするくらい、居心地よかったですよ、
正直」

団長は相変わらずだなと鼻で笑って、それでも彼を救い出せた事に
安心しているようだった。
スノーは、今ばかりは一生懸命走って逃げている事を嬉しいと思う。

そんな自分に、少し驚いた。

崩落寸前のテル・エル・アマルナの、玉座のある場所で、ネフェルティティは一人、王座の後ろにあるアテン神の壁画を見つめていた。

その、アマルナ改革の象徴を。

「……ファラオよ……。我々のしてきた事に、意味はあったんでしょうか……」

彼女はそっと、誰もいない玉座を撫でた。

かつて、アクエンアテンが座っていた玉座を。

「その答えは、遠い未来に分かる。ラーの使徒こそが、答えであったのだよ」

いつの間にかネフェルティティの背後に、黒髪の男が立っていた。

エジプトの偉大なる神の一人、セト神が。

ネフェルティティは彼を見た後、皮肉に笑い、

「ふふ……ラーの使徒とはよく言ったものだ。……お前こそが、真に“ラーの使徒”ではないか。偉大なる太陽神の使いとして、あの小僧達を導いたのであろう……。呪いの化身を操る神官として、わざわざご丁寧に、こちらの味方の振りまでなさって……。セト神よ……」

くすくす笑っていたかと思えば、宮殿を包む炎が大きくなる様に、高々と笑い声をあげている。
彼女は、ただただ笑っていた。

“美しきもの来たる”

彼女の名前は、ある美術品によって、この先の未来に知れ渡る。
彼女もまた、時代に翻弄された、呪われた時代に生きた王妃だと。

その胸像を見たものは、涙するのである。

ただ美しいと。

l
d
r
a
w

56：大時計

歴史を司る者よ

時の支配者よ

ゴーン……ゴーン……

チッチッチッチッチッチ……

チック……チック……チック……

規則正しく時を刻み続ける。その音はいったいなんだろう。

世界が動いている限り、たとえ人間が滅びようと時は進む。時代は常に動いている。

誰がどこで、何をしていようと。宇宙にとっては地球はちっぽけで、地球にとっては、人の歴史なんてくしゃみしてたら終わってしまうほど短い。

そんな人間が、この世の理を全て理解出来るはずも無いのだ。

行った事も無い宇宙の果てを夢描いて、与り知れない未来を計算する。

世界の範囲ってどこまでだろう。人間達の手の届く所までだろうか。

そんな事を考えていたら、無限ループして戻ってきてしまってきりがない。

もしかしたら、それは神様の領域で、

自分たちには手に負えない事なのかもしれない。
ある時から俺はもう、宇宙や時間は哲学だと思う事にした。

耳の中に広がる時計の針の音。
フォルテは、長い長い夢を見ていた気がした。

早送りの時代を漂っていたような、銀河の果てまで行っていたような。

自分じゃ解決出来ない事に、支配されていたような。

ゴーン……

大きな時計台が奏でるような鐘の音がした。

彼は目を覚ます。

「……ここは……」

うつろな瞳で、地に足の着かない不思議な空間を見渡した。

空が下に見える。海が上にある。流れてくる小さな色の粒子が、彼にぶつかるとクスクス笑ってはじける。

目の前には、大きな大きな、時を刻み続ける時計。

何本あるのか分からないけれど、長さやデザインの違う針が、それぞれのペースでリズムを打つ。

もしかして、俺は死んだんだろうか。

何となく、エジプトで刺された事を思い出す。

痛みは無かったけど、自分の脇腹から血が流れている。

あのとき意識が飛んで、気がついたらこんな、全く見覚えのない、不思議な空間にいた。

不思議と言うか、あり得ないと言うか。

やっぱり死んだんじゃないか、俺。

「こっちへおいで……」

そのとき、目の前の大時計から、自分を呼ぶ声がした。
時計の方を見ても、何一つ変わりなく、針は時を刻んでいる。

「……？」

フォルテはゆっくり、時計の方に足を運んだ。
宙に浮かんだ、大きな円形時計は、その目の前まで行くともっと大きく見える。

「こっちへおいで……」

しわがれた老人のような、深く響く声。恐ろしいとは思わなかったけど、不思議と引きつけられる。

「……誰だ！！？」

フォルテは時計の目の前で声を張り上げた。姿も見せないその声に向かって。

「選択せよ。お前の時のありようを」

時計から、再び声が聞こえた。
フォルテは当然、その質問の意味が分からなかった。

「生きたいか、死にたいか」

「知りたいか、知りたくないか」

細かい粒子の粒が、足下で溜まっている。
時計の針の音が、耳につく。

謎の質問に、フォルテは顔をしかめるしか無かった。

「……知りたいか…だって？　いったい何を？」

「知りたいか、知りたくないか。時の理を。歴史の意味を。０の前の世界を。２４の向こうの世界を。生きる事は知りたいと同じ。知りたくないは死ぬ事と同じ」

誰もが解き明かす事のできない、時間の答え。
フォルテが、考えても考えても、考えれば考えるほど、遠くなっていった真理。

彼は一度、時計を睨んだ。

「俺は、生きているのか？」

「それを選択するのだ……」

声は、目の前にありそうで遠くからも聞こえる。
選択する余地もない。生きる事ができるのならば、俺は生きていたい。

まだ、もっと沢山、知りたい事がある。
やらなければいけない事があるのだから。

「生きたいに決ってる。こんな所で死ぬほど、俺は意味の無い事をしてきたつもりは無い！！」

彼の答えは、目の前の時計、周りの粒子、その空間をわき上がらせた。
歴史の大時計は、一番大きな黒い針を回転させ、一度大きく高らか

に鳴った。
その針は、まっすぐに上を向いた所でピンと止まった。

カラン……

フォルテの背後で、金属の落ちるような、小さな音がした。
驚いて振り返ると、真後ろに金の聖杯だけが、静かに置かれてある。
張りつめた存在感が、こんな小さなゴブレットから伝わってくる。
その凛とした空気は、聖なるものの様に、近寄りがたいオーラを纏っている。
金の聖杯には、美しい彫刻が。

「その聖杯の血を飲むのだ。生きて、知るために」

時計が、秒、分、時間を刻む音が、まるで彼を急かしている様に。
何も入っていなかった聖杯に、空間を漂う粒子のミストが集まって、絞り出す様に赤い血を注ぎ込んだ。

フォルテは今、自分自身が何を考えているのか分からなかった。

ただ、時の流れに促されるまま、その聖杯を手に取り、注ぎ込まれたばかりの鮮血を口に含んだ。

飲んで、ただ飲み干した。

生きたいと願え。

知りたいと。これから目にする事になる、歴史のあらゆる姿を。

それを背負うと覚悟しろ。

これは、神様が与えてくれたチャンスなのだろうか。

それとも、生きて行く事を天秤にかけた呪いだろうか。

聖杯に刻まれていたのは、神話の時代の、運命の戦い。
悲しみのギガントマキア。

ギリシアの血を分けたもう、神々の造った最高傑作。
人の美術品よ。

l
d
r
a
w

57：エジプトプラン38～ログアウト～

水面越しの向こうの世界

限りある登場人物と、裏方の法則

「たまげたなあ。ここまで来ちゃったら行き止まりじゃないか。そして結局誰もいない……と」

レッド率いる取り残され組、もといピラミッド組は、その最上部の三角錐の空間に辿り着いていた。しかし、そのような空間のあるピラミッドなど実際の世界には無い。無いというよりは発見されていない。

やはりここは謎だらけの場所だ。

女子はみんなレイを囲って、彼女の様子をうかがっていた。

「大丈夫？　どこか具合でも悪い？」

「……いいえ。もう大丈夫です」

レイはそう答えながらも、いまだにうずく右目の傷を気にする。痛い訳では無く、ただうずく。さっきのヴィジョンを見てから。顔色の優れない彼女を案じて、とりあえずここで一時留まる事にした。

カイはこの空間の中心にある“棺”のような物を慎重に観察していた。

と言うより、ここに辿り着いて、これを気にしなかった人は居ないだろう。

古い、それなのに埃一つかぶっていない、長方形型の箱。

「……何だと思う？　これ……」

「いや……俺にはとても理解出来ません。」

ティアンの問いかけに、カイは控えめに答えた。ティアンは、その周囲をゆっくり歩きながら、

「まあ、これは鑑定士さんの領域ではないよねえ……。どうしようか、中にミイラでも入ってたら」

棺の様な物をこんこんと叩く。

カイは苦笑いして、

「やめてくださいよ、恐いじゃないですか」

満更でも無さそうに、ごくりと唾を飲み込んだ。ティアンはうんうんと頷くと、

「おーい！！　レッド、リオ！！　これ開けるから手伝ってくれ！！」

向こう側で話していた二人に、軽いノリで声をかける。

カイは当然耳を疑って、

「えええええええ！！　開けるんですか！！？」

「そりゃそうさ。こんな所にぽつんと置いてあって、開けてくれって言ってるようなもんだよ。……それとも何？　まさか国際鑑定士ともあろう御方が、こういう物に興味が無い訳？」

「……い、いや……それは……」

ティアンの言い方は、いちいち言葉に詰まるような鋭いものだった。カイは当然、先輩の言う事には逆らえない後輩なので、「分かりました」と小声で答える。

「まあ、君が慎重になるのも分かるよ。……だって、“鍵”が絡んだ世界だもん。……なにが起こるか分からないもんねえ……。君の瞳には何が映っているのやら」

「……！？」

カイは、ティアンの言葉に反応して、一瞬固まった。ほんとうにこの先輩は、いったいどこまで知っているのか。それか、俺が“鍵”のことをどこまで知っているのか、試しているような気もする。周りから見たら、ティアンの落ち着いた表情と言うのが、カイから見たら悪巧みをしている悪代官にしか見えない。本当に恐ろしい先輩。苦手な人だ。

「で、これ開けちゃうんだ」

レッドは「うわあ……」と、とても微妙そうな面持ちで、隣のリオの様子をうかがう。リオは青ざめていた。
しかし、ティアンは鼻で笑うと、

「……やだねえ、度胸の無い奴って。もっとヴィライアーとしての誇りを持ちたまえ。どうせここから出られなかったらみんな餓死するんだから」

やれやれと言った様に、目の前の“度胸の無い奴ら”を見下す。
誰も今まで触れなかった事をずけずけと言い放てるティアンを逆に尊敬する。

「餓死って……。もっと言葉をオブラートに包むとかな……」

「今更気を使ってどうするんだか。レッド、君今リーダーなんだからしっかりしなよ。ほら、開けるから!!」

「……リーダーの権限の無いリーダーですけどね……」

正直、全ての権限はティアンにあると言っても良い。ああ、団長の気持ちが今になって分かるよ……。と言いたい所だけど、ここは心を無にして従った方が良いだろう。

レッドは仏様のような笑顔で、棺に手を持って行った。

四人の大の男が頑張って、本当に渾身の力を込めて棺桶のふたをずり落とした。重いのなんのって、ふたを退けた時、四人とも中身を確認する前に、その場に崩れ落ちた。

重い石のふたは、下に落ちると、もの凄く大きな音を立てて二つに割れた。

「やっべ！！　割れましたけど！！」

「いいよそんなの……別に誰も見てないし……」

「いいの！？　めっちゃ価値の高い物だったらどうすんの！！」

レッドは座り込んだまま、同じく腰を抑えているティアンに。

ティアンは「ふう…」と一度息をつくと、眼鏡を押し上げ、自らも立ち上がる。

メルベリーがおそるおそる近づいてきて、

「それ……なんですか……？」

「これ？　さあねえ……どう思う？」

彼女の疑問に、逆に問い返す。ティアンとメルベリーはいとこ同士

だ。同じ髪の色が、印象深い。
棺の中は、まるで空っぽだった。本当に、綺麗なほどに何も無い。
あんなに苦労して開けたのに、そりゃ無いよと、レッドは大きくため息をつく。

それとは裏腹に、カイはホッと安心していた。
何が起こるか分からないこの空間で、やたらとアクションを起こすのは正直恐い。

向こう側で女子たち＋一年生のヘルが、何をやってるんだと言いたげな、冷めた視線を送ってくる。
ティアンは面白く無さそうな顔をしている。

しかしそんな、皆が安心したり拍子抜けしたりしている時、空の棺の中に、どこからとも無く水が沸き起こってきた。みんな唖然として、棺桶から離れ、何事かと様子をうかがった。

「ああー！！」

最初に声を上げたのはヘルだった。彼は、何に気がついたのか、ふわふわの白い髪を揺らして、水の溜まった棺桶に駆け寄った。

「クレハだ！！　クレハどうしたの！！！」

驚いた事に、棺桶の中の水、その奥から一年生のクレハ・ドルフォードが浮かんできたのだ。
その場に居た者は当然、嘘だろ…と青ざめ、でもそこに現れた少年を疑う事はできなかった。

「ちょっと……この子息してないわよ…っ！！」

棺から彼を引きずり出し、あわてて様子を見ていたシーダが、クレハの状態に気づく。いったい何があったのか分からないが、彼は青い顔をして、息をしていなかった。

皆がどうしていいか分からない中、シーダはためらわず、クレハに人工呼吸を施し始めた。

慣れた手つき、真剣な表情はまさに人助けを常としてきた彼女らしく、皆を驚かせる。

「……凄いやシーダちゃん……。素人じゃないね……」

レッドは素直に感心していたものの、隣からただならぬ気配がしてぎょっとした。

そして、「あちゃー……」と額に手を当て、

「あの……リオ。君は見ない方がいいと思うんだけど……」

「何言ってるんですか先輩……。僕がそんな心の狭い男に見えますか……？」

リオの顔は笑っていたが、目が笑っていなかった。当然、ここに居る誰よりも、複雑で仕方なかっただろう。

彼の心の中は、「このくそガキ、目覚めたらどうしてくれよう…」という正直なささやきと、「何言ってるんだ！！シーダは人助けをしてるんだぞ！！それを受け止められないなんて、何てクソな彼氏なんだ！！」という自らの良心が戦っている。まさに葛藤の絵。

さすがの女子たちは、真剣にクレハを心配していたが、男子達はリオが気になって、正直いたたまれなかった。

「クレハ！！　クレハ！！」

「……戻ってきなさいよ。あんた死ぬにはまだ早すぎるわ！！」

ヘルは彼の側で、クレハ以上に青い顔で、泣きそうになりながら彼の名を呼び続ける。
シーダがクレハに、何度目かの息を吹き込んだ、そのときだった。
彼は水をはいて、息を吹き返したのだ。

シーダはほっと胸を撫で下ろし、祈る様に見守っていたメルベリーも、「良かった……」と安心したようだ。
泣きそうになっていたヘルは、彼が頬の赤みを取り戻し始めたのに気がついて、むしろまた泣きそうになっている。

シーダも凄いが、クレハも凄かった。さっきまでは死人の様に動かなかったくせに、ゲホゲホと数回むせた後、まるでちょっとご飯が喉に詰まってさ、みたいな感覚で、

「あーっもう！！　何だよあのバカブサの奴！！！」

ぴょんと飛び起きると、周囲からしてみれば意味不明の事を叫んだ。
さっきまでの自分の状況をつゆ知らず、何をそんなに怒っているのか。

「……て、あれ？……どうしてみんなこんな所に居るの？ていうか

ここどこ？」

「……」

さっきまであんなに心配していたのが癪だと言うほどの、クレハのユルさ。彼は「何だよ、みんな目が点だぜ！！」とか言いながら、もう普通に元気だった。

リオが黒いオーラを放っていたから、レッドは「早まるなリオ！！奴はまだ子供だ！！」と、お怒りを抑えようと必死だった。

「だから、エジプトに居たの！！　ていうか俺は雲の上に居たっていうか。鳥に乗って、空を飛んだ、みたいな。」

「ダメだ……。もうちょっと会話の通じる奴が帰ってきてくれないと……」

クレハの話は、古代エジプトに皆が居るんだな、と言う事以外は、

全部意味不明だった。彼の身に起こったことは、彼自身もよく分かっていなかったのだから、当然と言えば当然であるが。

古代エジプトに行ってしまった、と言う事もにわかに信じられない事だ。

その時ふと、レイは眼帯の奥の右目が、再びうずくのを感じた。自然と、例の棺の方に視線が向かう。

さっきみたいに何かが見えた訳ではないが、訳の分からない不安が胸をかき立てる。

何だろう。

脳裏に焼き付いて離れない、血だまりの中に居たフォルテ。

彼の身に、何か起こったのではないだろうか。

不確かな情報のくせに、押し寄せる陰りに飲み込まれてしまいそう。

どうか、早く帰ってきて。

彼女は、沈黙の棺桶をじっと見つめた。溜まっている水の面は、何の乱れも無い。

帰ってきて。

何事も変わりなく、今までのあなたで、どうか早く帰ってきて。

ｌｄｒａｗ

58：エジプトプラン39～目をつむるための夜～

まだ君を許さない

耳を塞ぎ、目を閉じる

全てにシャットダウンしなければ、生きていけそうにないから

都を出て、軽く三日は経ったと思う。

砂と夜空だけを見て、昼との温度差に戸惑うほどの空気の冷たさ。

絶えず人工の光や、人工の音を耳にしている現代で、こういった何もない世界はなかなか無い。

フレイとジェイル、そしてカーロンは、黄金のマスクを手に入れるため、この砂漠を横切っていた。カーロンだけが、その場所を知っている。
どのくらいの旅人がその砂漠を横切って、その足跡を消していったのだろうか。徐々に強まる砂嵐は、生きているものを寄せ付けず、大地を削っていく。

「もうすぐ、忘れ去られたセト神の神殿に着きます。……前の改革で弾圧された神の神殿です」

タハールは、神殿に近づくほどに、険しい表情だった。

「よくもまあ、こんな砂と風しかないような場所で、もうすぐですとか言えるよなあ…。本当に位置分かってんのか？」

砂嵐で、なかなか声の届きそうにないお互いの間隔。
うっとおしいったらない。

カーロンの背中につかまっているジェイルは相変わらずむすっとした表情で、口数も少ない。
と言うより、フレイとは話したがらない。

「おい、大丈夫か！　ルネ・サファイア！」

「……」

と言った感じだ。フレイの一人ごとは空しく風にかき消されるばかりである。

カーロンはいったい何を頼りに、神殿に向かっているのだろう。我

々には分からない何かがあるのだろうけど。
大昔の時代は、それこそ科学、機械など、発達した技術のない時代だ。しかし、だからこそ我々の知り得ない古の力があるのだろう。

「見てください……。この荒れ果てた神殿を。神を祀る場所が、このようであっていいはずがないと言うのに……」

カーロンと、フレイ、ジェイルの目の前には、砂嵐に守られた寂れた神殿があった。
途中から折れてしまっているオベリスクや、そこにあったのだろう巨像の残骸。

そこは、神殿とは名ばかりの、岩屑の山だった。

「……やっと着いたか…。三日もかけて、こんな陰気な場所に」

フレイは、目の前の暗い神殿を、白々と冷めた目で見る。
どう見たって、歓迎されている様には見えない、その雰囲気。

「ここにあるのか……？　その、黄金のマスクって……」

ジェイルは、フレイとは違ってまっすぐな瞳で、その神殿を見つめている。
彼女の瞳には、この神殿はどう映っているのだろう。

「ええ。この神殿の最も奥に封印されているのです。我々ラーの神官団は、もう二度と黄金のマスクが日の元に出ぬ様にと、固く閉ざした扉の奥に隠したのです」

「はああ!?　それじゃあなんだ、俺たち取ってこれないじゃん!!」

フレイは、声に抑揚をつけて、ここまで来た意味をもう一度問いただす。

「三日もかけたのに、何言ってんだよカーロンのじいさん!!」

「いやしかし、私が思うにラーの使徒という御方が、真に求める心の内を神に示せば、黄金のマスクを見つける事が出来るのではないかと……」

「こんのくそじじい……。俺たちは便利な魔法使いじゃねえぞ。何夢見てやがる」

フレイの言い分は最もであったが、ここは文句を言っていたって仕方がない。

「いい加減にしろ!!　どうせ、黄金のマスクを持って帰らない限り、私たちも元の世界には帰れないのだ。やらないといけない事は決っているはずだぞ!!」

ジェイルは眉を吊り上げて、カーロンにつかみかかっているフレイに突っかかった。カーロンはニヤッと笑う。

「ちょ、おい。お前この前まであんなに嫌だ嫌だっつってたくせに。

急にやる気満々じゃねえか」

「今更何を言ってる。私が嫌だったのはお前と言う存在だ」

「……」

フレイは、もう何も言い返せなかった。
今まで、同じ年頃の女性に、存在まで否定されるほど嫌われた事がなかっただけに、ぽかんとなってしまう。

「お前が消えてしまえばいいのだ」

さらに追い打ち。
彼女はフンとそっぽ向くと、「さあ行こうか」とカーロンに促す。
男嫌いと言っても、その男にもレベルと言うのがあるらしい。

神殿の中は、たいまつの炎がなければ、きっと何も見えないのだろうなと分かるほどに暗かった。当然、今は夜だから仕方ないが。
ヒンヤリした空気、じめじめした雰囲気。生きている心地がしない。

「……昔、私たちの隠れ住んでいたオアシスが、王宮軍に襲われた事がありました。忘れもしません、あの時私は、大切にしていたものを沢山奪われたのですから……」

「……息子さんがここで死んでいたと……言っていたな……」

ジェイルは横目にカーロンを見ながら、ふいに問いかけた。
カーロンは少し瞳を大きくさせたが、髭に覆われた表情は、相変わらよく分からなかった。

「ええ。……オアシスが崩落した後、息子は突然姿を消したのです。どこへ行ったのか分からなかったのですが、虫の知られと言いますか……。何年か経った後、私はこの場所に探しにきたのです。根拠はなかったのですが、息子がここに来たんじゃないかと……」

カーロンの声は落ち着いていた。遠い昔を思い出しながら、彼の瞳はどこか、暗い泉のそこを漂っているようだった。

「ええ。息子はここに来たんです。しかし、見つかったのは息子と思われる白骨と、その持ち物だけ。すぐに分かりました、それが私の息子だと……。私は、息子の亡がらと、その形見を持って帰りました」

カーロンの息子、タハールにはまた、息子が居た。皮肉にも、彼が目にする事はなかった息子が。カーロンはその子供に、父と同じ“タハール”と名付けた。

よく似た面影、幼かった頃の記憶を、自分の孫に求めて。

決して平坦な道とは言えない、ガタガタした神殿の回廊を進む。くぼんでいたり、急に出ていたりと、引っかかりそうで嫌になる。

「本当にこんな所にあるのかねえ……。その黄金のマスクって……」

「文句が多いぞ。嫌なら一人で引き返せ」

「あいっかわらず、手厳しいねえ……」

フレイは、彼女との嫌味のやり取りが、だんだん普通の会話の様に感じてきた。何となくそれを面白いとさえ思う。彼女の頑な態度は勇ましいが、その態度は自身の何かを守っている様にも見える。そう言った意味では、非常に興味深い。

その、心の内を暴いてみたい。

フレイは一人、心の奥でほくそ笑んだ。

と、そんな風に淡々と、どこまで続いているのか分からない通路を歩いていた時、ジェイルは突然立ち止まった。

「……」

「……どうした？」

フレイは、様子のおかしい彼女に声をかける。しかし、ジェイルは止まったまま、何かにそっと、耳をそばだてている。

「何か聞こえる……。お前、聞こえないのか？」

「聞こえるって何が……」

フレイは、耳に手をあて、しんとした空気の、その向こうの音を拾おうとする。カーロンは黙って二人を見ていた。

沈黙の奥の、耳をかすめる声。
フレイは、音のような、声のような。泣き声のような、笑い声のような音を、微かに聞き取った。

『……何だこれ……』

ジェイルとフレイは顔を見合わせて、一度頷くと声のする方へゆっくり歩いた。
カーロンはその二人について行こうとしたが、その時、フッと、見えない誰かがたいまつの炎に息を吹きかけた様に、その唯一の火は消えたのだ。

ジェイルは、急に暗くなった視界に戸惑ったが、フレイは、

「いいから、声の方向にゆっくり歩くんだ。……足下に気をつけろよ」

特に臆する事もなく。

「ま、待ってくれ！！　わ、私は……暗いのがダメなんだ……」

ジェイルはガラにもなく、声が震えている。いつもは、痛いほどはっきりした物言いのくせに。
こういう所はやっぱり女の子だな。

「……そうかい。……じゃあ……」

フレイは、側に居る彼女の気配を頼りに、グイっと腕を掴んで引き寄せる。ジェイルは、何が何だか分からなくて、声も出ない。

「俺が引っ張っていってやるから、離れるんじゃねーぞ」

暗闇の中の彼の声は、いつもみたいに、嫌に勝ち誇ったような余裕のあるものだった。こういう時、いつもの彼女だったらその手を振りほどいてしまう所だが、今この手を離されると恐ろしいと思ってしまう。

彼女は黙って、彼の背中の服を握った。

さすがに手は握ってくれないのねと、フレイはこみ上げる笑いと、残念だと言う複雑な気持ちに、我ながらどうしようもない男だと思う。

しかしまあ、こういうのも可愛いじゃないか。

ジェイルはこの状況の中、複雑すぎる心境に、ただ唇を噛むしか無かった。

こういうのはずるい。

弱みに付け込まれたみたいで悔しい。

ジェイルは、自分のふがいなさに心底呆れたが、

今は、彼が目の前に居る事。その背中の温もりだけが頼りなのだと、

ちゃんと分かっていた。

ｌｄｒａｗ

59：エジプトプラン40～砂の亡霊～

水を探るような関係

人間と神の手のひら。固いその絡み

逃げる私の歩幅より、近づいてくるあなたの歩幅の方が大きい

自分がいったい、どこを歩いているのかさえ分からない暗闇の中で、その声は微かに、しかし絶え間なく聞こえた。
フレイとジェイルは黙って、声を聞き逃さない様に、出来るだけ足音を立てない様にして歩いている。

『……何て言ってるんだ？……ただのうなり声にしか聞こえねーけど……』

フレイは、徐々に慣れてきた暗闇の、その向こうの気配を探る。
ジェイルは相変わらず、フレイには出来るだけくっつかない様に、しかし彼の服を握りしめる手はもの凄く固かった。

『……ま、いーけどね……別に……』

フレイは背中にいるジェイルを、何だか愉快に感じた。
男嫌いで、学校ではクールビューティーって言われてるけど、こういう弱点があるからこそ可愛いというか何と言うか。

「おい、どこへ行っている……そっちじゃないだろう……」

「え……マジで？　あれ、どっち？」

フレイは考えながら歩いていたせいで、完璧に声を聞き失った。
ジェイルは、彼の服を引っ張って、

「こっちだ！！」

「いや、こっちって言われてもどっちだよ……」

「こっち……だ！！」

彼女はイライラした様子で、彼の腕を探って、その手を持って方向を示した。フレイは、これには正直驚いたが、

「ほ、ほお……。今のちょっといいじゃん……。俺そそられるよ、

手つきとか……」

「バカかお前は！！　ふざけた事言ってないで、もうちょっと真面目に進め！！！！」

彼女は掴んでいた手をそのまま思いきりつねった。それはもう爪を立てて。

「いっっ……つーーー……てめえ……」

彼はその痛みに、天を仰いだ。さすがにこの時は、これ以上相手を刺激させるような事は言わない方がいいかなと、背中を取られている状況にヒヤヒヤする。

ここでこいつに殺されても、誰も見つけてはくれまい。

彼は素直に、彼女が示してくれた方向へと足を進める。

「お前のせいで、声が聞こえなくなった！！」

「俺のせいかよ！！」

二人は相変わらず言い争いながら、暗い中、細かい足取りを刻む。

声は、さっきまで確かに聞こえていたのに、なぜだ。

聞こえそうで聞こえない。自分たちがその声を負っていた様に、声も逃げていたのだろうか。

いや、声は確かに、俺たちを呼んでいたはずだ。

「……？」

ふと、足下がふわりと地面を抜けた。
心臓がひやりとする、ジェットコースターでよくある落ちるときの感覚。

「う、うわあああああ！！！！」

「きゃあ！！！」

まず、フレイが落ちて、彼につかまっていたジェイルが引き込まれた。
暗闇で何がどうなったのか分からなかったが、とにかく“落ちたのだ”と言う事は分かった。

浮遊した感覚は、不確かな現実の様に。

落ちていくのは我々か、リアルか。

柔らかく、くすぐったい感触は細かい砂の、もっとそれを砕いたようなものだった。
落ちていく時間が長く感じられた様で、とても短かった気もする。

「……あー……こりゃあ、まいったな……」

フレイは、勢い良く突っ込んだ砂の中から顔を出し、見るからに嫌

そうな、うっとうしそうな顔をしていた。
口の中を転がる砂の感触に嫌気がする。巻き起こる砂埃を手のひらで払おうとするが、それも結局あまり意味がないようだった。
砂の深さはそうでもなかったが、あまりのも細かくさらさらしていたので、そこから出る事もままならない。

「おい、お前大丈夫か？」

すぐ側で砂埃にむせていたジェイルは、涙目で何も答えられない。
服の中に入った砂を振り落とそうとしていたが、結局自分たちがその場から出られないので、どうしようもない。

さあ、とんでもない所に落ちてしまったぞ。

フレイは暗い天井の穴を見上げた。そりゃあこれだけ古い神殿だ。どこかにボロが出たって仕方がないだろうけれど。

ふと、その時気がついた事がある。
さっきまであんなに視界が暗かったのに、今は薄くぼんやりしているが明るいと言う事。

「お、おい……ここ明るくないか？」

「……？」

ジェイルもやっと、その事に疑問を示した。お互いの存在が見えると言う事の違和感。ここには明かりがないはずだ。彼女は周囲を見

渡す。

腰元までつもっている細かい砂と、この広い地下の空間。
古くて形も曖昧だが、高い壁や柱には、祭られている神々の像や壁画が。

きっと、ここは神聖な大広間。

「……あまり、荒らされた跡が無いな……。この場所は見つけにくい所にあるのだろうか……」

「かもな。……もしかしたら、現代でも見つかってないのかもしれない。この神殿自体残ってないかもしれないが、俺たちが第一発見者？こりゃいいネタだな」

「……」

ジェイルの冷めた視線が痛い。
彼女はフレイに言葉を返しもしないで、再び周りの様子をうかがった。

光源は分からないが、受け入れやすい淡い光に、それはもう、理屈ではない何かなのだと思う事にする。
あえて言うのなら、神の居る間の神聖な明かり。その空間自体が、信仰と言う名の水色の光源なのだ。

「！！！！！」

それは、突然の視界と聴覚の変化。

徐々に見え始め、聞こえ始めた光景。
笑い声、祈り、崇拝の言葉、そこに生きた者達の残像。

「お、おい……」

フレイはジェイルの側に、砂を横切ってやってきて、自分たちを囲む“彼ら”の様子を見ていた。

驚いた。
これは現実なのか。

「何だこいつら……」

彼らはフレイやジェイルを気にとめず、側を通りすぎたりそれぞれの営みをかわす。
最も驚いたの、彼らは“触れられない”と言う事だ。いきなり走ってきた子供が、フレイの体を通りすぎ、目の前の母親に駆け寄っていったから。

ジェイルは瞳を細め、この穏やかで澄んだ空気の彼らの営みを見つめている。
にぎやかなのに、どこか奥ゆかしく、神を信じ信仰してきた時代。

その穏やかさが逆に訴えかけてくる。
今や誰もいなくなった神殿の空しさ。悔しさを。

彼らはきっと、ここに念を残す亡霊。

権力に滅ぼされてもなお、この場所を守り続けているのか。

「こんなものを見せられて……我々はどうしたらいいんだろうな……」

ジェイルは目を伏せて、悲しそうに笑っていた。彼女の心に訴えかける亡霊の念は、あまりにも重い。

時代を超えて、国を超えて、彼らの訴えたい事は何だ？

フレイは彼女を横目に見て、ガラにも無くそのような事を思った。

腰ほどにある砂まで、過去のヴィジョンには映らないのに、我々の歩みを鈍られるその感触は確かにあるのだ。

笑顔で通りすぎていく残像に追いつこうと思っても、我々の進む速度は遅いのだ。

「……進歩していく時代が、逆に失っていったもの……か。痛いねえ……」

ポツリと出てきてしまった言葉は、素直にそう思った本心だ。

責められている訳ではないが、心が少し痛い。痛いのは切ない寂しい感じに似ている。

彼らは便利な世界こそ持っていなかったが、精神の奥の世界を知っていた。

それが正しいと言う訳では決して無いだろう。

技術の発展は人間の本能。文明のあるべき姿。幸せになるための手段。

ただ、今はその方向が分からなくなっているだけ。

ただしそれは、人類の大きな罪。

ふと、再び何も無い、砂と我々だけの空間になった。

急に訪れた静けさが怖い。

「……」

「……消えた……。何だったんだ、今の……」

二人は顔を見合わせて、再び周りを見渡す。

声も、神聖な音も、もう聞こえる事は無かった。

ここまで導いた彼らの強い念は、二人の心に、大きな衝撃を残して、その場からはすっかりいなくなってしまったのだろうか。いやもしかしたら、まだここに、ずっとここに居続けるのかもしれない。

それだけ強い思いがあったのだろうから。

辺り一面砂だらけの中で、ジェイルはふと、その砂に半分沈んでいる“何か”を見つけた。

「!?」

さっき、過去の記憶を垣間見る前までは、その場に無かったもの。

彼女は砂をかき分けて、まるで引き寄せられる様に必死にそれを求めた。

「お、おい！！」

フレイも彼女に必死になってついていく。

“何か”は少しずつ砂に沈んでいっている。と言うより、砂がそれを中心に、砂時計の砂に吸い込まれるように下へ向かっているみたいだ。

「時間がないんだよ」と、彼らを急かす様に。

待って。

沈んでしまわないで。

ジェイルは、抵抗感のある砂を煩わしく感じながら、それに手を伸ばす。

「おい！！　そっちへ行くな！！　巻き込まれるぞ！！！」

フレイはジェイルを追いかける。ジェイルは“何か”を追いかける。見え隠れする“何か”の瞳は、常に我々から視線を逸らさない。

彼女が“何か”を捕まえた時、今までは安定していた足下が急に安定感の無い物に変わったのが分かる。砂の渦に引き込まれ始めた彼女を、フレイは必死になって捕まえようとした。

彼に気がついたジェイルは、その手を伸ばし、その手を求めるフレ

イが、吸い込まれていく砂の海に身を投じ、
ただ二人は、下へ下へと流されていく砂の中で、固く手を取り合っていた。
その息苦しさは、砂による物理的なものではないと思う。

気がついた時、そこは既に神殿の外だった。
この神殿に来る前までは、あんなにひどかった砂嵐が、嘘の様に止んでいた。
そこは、とても静かで穏やかな砂漠と廃墟。月と夜。

「気がつきましたか……？」

気を失っていた彼らは、カーロンに見守られていた。
彼は、驚いた様子も無くただ穏やかに。

「よくぞ、黄金のマスクを持って帰られました……」

彼の視線の先には、ジェイルが腕に抱える“何か”に向けられてい

た。

夜の月明かりでも、それの輝きは見て取れる。
表面が輝いているとかではなく、それ自体、“黄金のマスク”と言うものが持つ、内面的な輝き。

秘めたる力。

“黄金のマスク”

顔を隠す意味など無い。

それは、死んでもなお、先の時代を見張るための瞳。

叱るための口。

嘆きを聞くための耳。

／終わり

フレイとジェイルは、ただあっけにとられていた。
身の上に起こった、あり得ない現象についてでは無い。

ただ、あっけにとられていたのだ。

何か、とても大きな存在の御心に触れた様に。

カーロンは、そんな二人に優しく声をかけた。

「……我々がこの神殿をマスクの隠し場所に選んだのは、それだけ神と彼らの結びつきが強かったからです……。他神だとしても……彼らの存在は否定出来ない。亡霊達は、いつまでもここを離れないでしょう……」

そして、悲しそうに笑った。

「彼らがここに居たと言う事を、どうか忘れないであげてください……」

l
d
r
a
w

60：エジプトプラン41～それは一瞬のレクイエム～

あなたの理想は叶います

俺が最後に、あの人に言った言葉は嘘なのか

真実なのか

ルナシーは夢を見た。

あの、崩落していくオアシスの炎を。彼らの悲鳴を。

十年と言う月日の流れを知らずに、私はあれから十年後の世界にいる。この不自然さ。

彼女にとってあれは、たった十日ほど前に起きた出来事だ。生々しく覚えている。今の時代ではだいぶ過去の出来事だ。

朝だ。
今日はよく晴れた、穏やかな日になるといいと思う。

ベットからの景色しか知らない彼女は、そっとベットを抜け出し、廊下に出た。渡り廊下から見える中庭は、彼女の心を、二人の子供に花の冠の作り方を教えていた日々を思い起こさせる。

「ここの中庭は、あの王宮の中庭より小さいわね……」

そっと呟いた言葉にどういった意味があったのかは、今の自分には分からない。
彼女が中庭の、中心のキオスクに目をやった時、小さな人影に気がついた。

「……あの子……」

彼女はすぐに、その小さな子供が誰なのか分かった。
キクマサが昨日、話していた。私たちが、あのオアシスでお世話になっていたタハールさんの子供が、この王宮にいるって。

横顔しか見えないが、その子はとても彼に似た面影がある。

「……どうしたの？」

ルナシーは声をかけてみた。この、小さな子供が、朝早くからキオスクで一人、とても寂しそうにしていたから。

「ここで……なにしているの……？」

ルナシーの声に気がついたタハール少年は、子供らしいあどけない顔で、驚いた様に彼女を見ていた。
浅黒い肌と大きな瞳に、タハールと言う存在を見いだしてしまう。

「……お姉ちゃん……誰……？」

「私……？　私はルナシーよ……」

彼女はゆっくりと、タハールの隣に腰を下ろした。
タハール少年は、側にいる人の温かみと言うものに安心感を抱いた様に、小さな体に入れていた力を抜く。

「……どうしたの…？　こんな朝早くに」

「……だって……皆いないから……」

「……？」

ルナシーには、よくわからない事だったが、その時ふと思う。彼の父親、タハールは、ずいぶん昔に亡くなったと言うが、いったいどうして亡くなったのだろう。

「旅の途中で、みんな居なくなっちゃったし……今はおじいちゃんも居ないんだ……。僕は一人だ……」

「……」

タハール少年は足をぶらぶらさせながら、とても不安そうな顔をし

ている。当然だろう。
こんな小さな子供が一人、知らない場所に置いていかれる気持ち。

ルナシーは眉根を潜めた。

「なら、私と遊びましょう？　このキオスクで……」

何だかこの子を見ていると、今のファラオとアンケセナーメンの子供の頃を思い出す。とは言っても、私の中であの子達は、最近出会ったばかりの子供達と言ってもいいが。

タハール少年は、何だか嬉しそうに頷いた。

さっきまでのしょんぼりとした空気が、いつの間にか暖かい。
子供って、感情が素直で、それでいて引きずらない。

何とも爽やかなものだ。

「……」

キクマサは唖然としていた。ルナシーに会いにきたら、部屋に居なかった。それはともかく、キオスクに向かったら彼女が、小さな子供と一緒に花の冠を作って遊んでいる。

「何やってんだ……ルナ……」

キクマサはなぜかおそるおそる近づいて、様子を見てみる。隣にいる子供は、例のカーロンさんの孫だろう。ルナシーやフォルテがお世話になった人の子供。話には聞いていたが、実際関わった事は無かった。

「あら……キク。この子、タハールさんと同じ名前なのよ。……ふふ、あなたも冠、作ってみない？」

「え……俺、作り方分からないけど……」

キクマサはとりあえず、二人が座っている草原の上に座った。そこには、スミレや矢車菊、シロツメ草などが生えていた。カーロン少年は、さっきから黙々と冠を編んでいる。

「キク、あなたにも出来ない事があったのね…」

「俺には出来ないことだらけさ。……へえ、綺麗に出来るもんだな……」

キクマサは、もうすぐ編み終わるタハールの“作品”を覗き込んで、素直に感心していた。

タハールは「出来た！！」と、嬉しそうに声を上げる。

そして、今更キクマサに気がついた様に、彼をきょとんと見て、ルナシーに問う。

「……このお兄ちゃん……誰？」

「この人はキクマサって言うのよ。変わった名前でしょ？　私たち

は仲間なのよ」

彼女はキクマサに、矢車菊を一輪渡しながら、軽くウインクする。
キクマサは、“仲間”と言う言葉に、よくわからない安心感を覚えた。友達と言うより、確かに仲間と言った方が近い様に思う。

タハールは「ふうーん…」と、彼の方をじっと見ていた。純粋な、だからこそ何を考えているのかまるで分からない瞳で。

キクマサは、子供と言うものに免疫が無い。
自分が一人っ子だったし（父親の再婚相手の子供は別として）、このくらいの子供とのふれあいは無かった。

だから、ちょっとどうしていいのか分からなくなる。

「ふふ……ふふふ……っ」

そんな彼を見て、ルナシーは堪えきれずに笑っていた。

「……何かなルナシー」

「いや、ごめんなさい。…あなたの反応があまりに面白くて」

キクマサの何とも言えない表情に、彼女は顔を背けていまだに笑っていた。何がそんなにおかしいんだか、当の本人は分からなかったのだが、そこまで笑わなくてもいいだろうと。

タハールは、そんな二人を交互に見渡し、一生懸命もう一つの花冠を造り始めた。
誰かと一緒にいるという喜びを、この子は知っている。

穏やかな時間と、胸の不安が混ざりあう。

居心地がいい所が、どこか安定しない。

まるで、一枚の薄い水彩画の様に、儚いものの様に感じる。

夕方近くまで、キオスクでタハールと一緒に三人で過ごした。彼は子供ながらにとても気配りの出来る、しっかりした子供だ。大変な目にもいっぱいあってきたし、辛い事もあったのだろう。そう言った経験が、このようにたくましく優しく育つ要因になったのはいささか切ない。

タハールは、久しぶりに誰かと一緒に遊んだ事がとても嬉しかったのか、常に動き回ってはしゃいでいた。だいぶ年の上の二人に好かれようと必死なのだ。

それが健気でいたいけで、小さな感動を得てしまうのは言うまでもない。

はしゃぎ回っていたタハールは、気疲れしたのと、普通に疲れたのとで、こっくりこっくり眠そうにしていた。

ルナシーとキクマサは顔を見合わせる。

「……どうしましょう。私の部屋で寝かせてあげましょうか」

「…そうだな。俺、おんぶして連れて行こうか……」

キクマサは立ち上がると、眠そうなタハールに「ほら」と声をかけて、小さくて軽い彼をおぶった。

ルナシーはそっと、おぶさった彼の背中を優しく撫でる。

「ふふ、キクそうやってると、お父さんみたいね」

「……どうだか」

照れているのか、本気で複雑なのか、キクマサは苦笑い気味だった。

タハールをルナシーのベットまで連れて行って、ふと思う。

父親と言うものを。

キクマサにとって、父親とはあまり良い印象のものではない。

タハールにとっては、父親とは“分からない”ものだ。

『世の中の父親が……全て良い父親とは限らないよ……』

キクマサは、眠るタハールを見つめ、誰に何を言いたいのか、一人そんな事を思っていた。

ルナシーがタハールを見ていると言っていたから、彼は一人、あのキオスクに戻った。

夕暮れの寂しさが、静かになった現実を告げているみたい。

今日はファラオが来るだろうか……。

何だろうう。さっきまでの明るく穏やかな気分は、“父親”と言うものを意識したせいで、暗くも明るくもない無の感情に陥る。

ファラオの父親の話は聞いた事が無いが、アンケセナーメンさんの父親が、前ファラオのアクエンアテンだとは聞いている。

彼女は、この争いを引き起こした父親をどう思っているのだろうか。

父親と言うだけで、血のつながりが恨む事を許さず、葛藤の中にその存在を置いているのだろうか。

『……そんな事は無い……。血の繋がりがあったって、父を恨む事は出来る……』

キクマサは、ふと瞳を細めた。

彼の瞳は、静かで寂しい色をしている。さわさわ、草花の揺れる音が、夕方のオレンジに語りかける。

こんな所で、いったい何を考えているんだ……。

額に拳を置き、今はそれどころじゃないだろうと頭を小突く。それに、今の俺に父親なんて必要ないはずだ。

俺の存在を認めてくれる場所を、手に入れたはずだ……。

その時だった。

オレンジの空は、いつの間にか紺色の波を運んで、星の瞬きが目立つ様になっていた、そんな時だ。

それは、闇の訪れる象徴だったのだろうか。

「きゃあああああああああああああ！！！！！！！！」

宮殿の離れまで聞こえた、その悲鳴。

悲鳴の後に訪れた、人々のざわめき。

ここまで届く混乱の声。

「ファラオ！！！ファラオ！！！」

分かる。

聞こえる。

誰かが泣いている。ファラオの名を呼んでいる。

キクマサは、心の奥のざわめきと、血の気が引くような、お告げに似た確信を抱いていた。
後ろから追い立てるような強い風が吹く。

『ああ……そうか……』

彼は、こみ上げる涙を、どうしようもなく抑えられなかった。震える手で頭を抱え、自分の無力さと、やるせなさと、どうしたって変える事の出来ない歴史の流れを憎く思う。

そうか。

とうとうその時がやってきたのか……。

地面に落ちる涙は、目の前がひどく歪んでいたから見えもしない。分かっていた事なのに、こんなにも早く“この時”が訪れるなんて。いや、それすら分かっていた事だ。

紙の上の歴史なんて、所詮文字。
本当の事は結局、その時になってみないと実感出来ない。

ザワザワしている。

誰もが悲しんでいる。

その、雰囲気だけで伝わってくる何かが、キクマサの心をひどく痛めつける。

ファラオ。

歴史上名高いツタンカーメン。

あなたの死を知っていながら、俺はそれを受け入れがたい。

見てなくても伝わってくる、“死”と言うものの絶望感を。

それは一瞬のレクイエム。

ｌｄｒａｗ

61：エジプトプラン42～神のみぞ知る～

苦しかった

この十年間、白と黒の世界しか見えなくて

宰相アイについて話そう。

彼は、アクエンアテンより前の、アメンヘテプ三世の時代から官僚として王族に仕え、アクエンアテン亡き今もツタンカーメンの摂政として、彼が幼い頃から仕えてきた。

彼は、今やかなりの高齢である。

何度となく訪れた王宮の危機は、このアイが居たからこそ乗り越えられたと言えるだろう。彼はそれほどに政治的実力と権力があり、人望があった。

「……」

アイは肩からズレ落ちそうになった白い布を、ゆっくりかけ直した。

十年前から感じていた、ファラオと国政と、突然現れた“ラーの使徒”といういかがわしい存在への妙な苛立ち。

ラーの使徒は、この国の厄災に違いないとずっと思ってきた。だから、亡き者にしておこうと色々働きかけてきたのに。

結局ファラオも王妃も、前ファラオのアクエンアテンと同様に、奴らを祭り立てる。この国を救ってくれる奇跡の存在だと信じて。

ばかばかしい。そんなものに頼ろうとする時点で、国の王である事を放棄しているようなものではないか。

「ファラオよ……」

アイはそっと、誰もいない部屋でその名を呼んだ。それが、彼にとっての、いつの時代のファラオなのか分からなかったけれど。

あの時もそうだった。
私の言う通りにことを運んでおけば良かったのに、ファラオは自分の意志で“アマルナ改革”と言うものを強制した。
前のアクエンアテン王は、ファラオとしての存在感は持ち合わせていたものの、王としての我慢強さを持ち合わせていなかった。

先に進もうとしすぎたのだ。
それが徐々に、私に不信感を抱かせた。

今のツタンカーメン王。
幼い頃から私が導き、見張ってきた。今度こそ、間違った方向へと国を連れて行かない様に。

そのままでよかった。
そのまま、私に導かれていれば。

アイは自分の中に見え隠れする不信感や疑いの念に、失笑した。なんだろう。
あの時、あのアクエンアテンが亡くなる前も、こんな気持ちになってしまった気がする。自らがファラオになれない事を、どうしようもなく恨めしく思う。

黒い影が、私に覆いかぶさり、言い聞かせる様に。
彼は一度瞳を閉じて、そしてもう一度開いた。

そして、その数十分後に、全ての終わりと、何かの始まりが訪れる。

キクマサは、こみ上げる悲しみに閉める蓋は無いのかと、本気で思っていた。
こんな所で泣いてる場合じゃない。

「……行かなきゃ……」

団長に言われたじゃないか。全てを見届けろって。
彼は、歯を食いしばって、必死でこみ上げる何かを押さえつけていた。怪我をした訳ではないのに、胸が痛い。キリキリする。

これが、誰かの死を突きつけられた痛み。
涙を拭って立ち上がり、渡り廊下のそのむこう。王宮の本殿に向かう。

それは、本殿の奥の、フェラオの部屋であった。
ここに来るまでにも、混乱や嘆きがあちこちから飛び交い、自分がどうかなってしまいそうだった。

人々をかき分け、目にしたもの。

「ファラオ!!　ファラオ、どうして……っ!!!」

アンケセナーメンさんの嘆きの声。
ファラオの横に立ち尽くす、老人の姿。

目の前がくらくらしそうなほどに、ファラオの周りには血だまりが出来ていた。頭から流れる赤の色は彼の顔を半分隠す様に毒々しく、半分見える顔は白い。

「……」

言葉が出なかった。
出そうと思っても、のどのずっと向こうで詰まってしまう。

つい昨日の夕方、彼に会った時の顔と今の顔が、脳裏を交互にちらついて。
“死”というものが、一文字で言い表せるものではないだろうと痛感する。

アンケセナーメンはずっとファラオの名を呼び続けていたが、勢い良く立ち上がり宰相アイを睨み上げ、指を突きつける。

「お前が!!　お前がファラオを殺したのだ!!」

「い、いや、待ってくだされ、王妃！！」

アイは何が何だか分からない様に、青ざめた表情で立ち尽くしていた。

アンケセナーメンは、彼のそんな言葉はおかまい無しで、

「何を言うか！！　ここにはお前とファラオしか居なかった。私は見たのだ！！」

「王妃！！　私も何が何だか分からないのです！！　気がついたらファラオが血まみれで……っ！！！」

宰相アイの言葉は曖昧で、到底信じられるものではなく、それでいてとても嘘の様には見えなかった。

しかし、ファラオが殺された事に嘆き、憎しみでいっぱいのアンケセナーメンは、既にアイを犯人と決めつけていた。

彼女のこんな表情は見た事がない。

王妃としての品格を絶やさなかった彼女が、今や恐ろしいまでの憎しみにあふれている。

「前から、そうでないかと思っていたのだ……。お前がファラオを狙っているのではないかと……」

彼女は、夫であるツタンカーメンの亡骸を、いまだに信じられないというような瞳で見下ろしている。このような事になるのではないかと、常に抱いていた不安と恐れ。

彼女は寂しそうに笑うと、懐から小さな短剣を取り出した。

「！！！！！！」

誰もが、その短剣の向かう矛先を知っている。
王妃の短剣が高々と掲げられた時、キクマサは無意識に駆け出していた。さっきまで声も出なかったのに、今自分がするべき事、見届けなければならないもの、それらはしっかりと彼の中にあって、彼を動かす。

宰相アイは、その短剣が振り下ろされるのを呆然と待っていた。

「……キクマサ……」

ポタポタと、地面に血の落ちる音。

キクマサは宰相アイの前に立ち、自らの肩に、その短剣を受け止めていた。
彼は歯を食いしばって、それでもアンケセナーメンをしっかりと見つめて。

「ど……どうして……」

彼女は混乱している。訳が分からないと、ゆっくり後ずさる。手に握っていた短剣が落ちる、その金属音。

「……ダメなんです……。この人を殺したら……」

キクマサは、自分でそう言いながら、悔しさと悲しみで泣いてしま

いそうだった。
その言葉は、きっと自分にも言い聞かせている。

肩の痛みが襲ってきたのは、すぐその後。彼が片膝をついて、温かい血の流れる傷口を、震える手で押さえた。
宰相アイは、ヘタンと座り込み、目を見開いたまま何も言わない。

ダメなんだ。
たとえこの人がファラオを殺したとしても、歴史はそれを裁かない。

俺だって悔しい。悔しすぎる。

彼は、気を失いそうな意識を、気力で何とか保っていた。
血まみれの手で、座り込んだアイの肩にかけている布を、片手で掴み、

「……王座なんて……くれてやる……っ。そんなもの、ツタンカーメンは……ファラオは望んじゃいなかった……っ！！！」

途切れそうになる言葉を必死で紡ぐ。
ファラオの望みも理想も、全てがこの男に引き継がれるという空しさを噛み締めて。

やるせない気持ちを押し殺した。

「……次にファラオになるのはお前だ。おまえしか居ないんだ……っ！！　それでもツタンカーメンは“黄金のマスク”を手に入れる。……ずっと先の未来まで、何者にも邪魔されず眠りにつき……」

「伝説になるんだ……っ！！！」

ファラオ自身が望んでいた未来とは大きくかけ離れた未来。
死してなお存在を知らしめる少年王。

誰もがその名を知っていて、誰もが知らない本人自身を。俺だけが、俺たちだけが知っている。

キクマサは、頬を伝う涙を、今ばかりは拭おうとしなかった。
アイは、自分の周りで起こった全てが信じられないというような、それすら通りすぎた表情。滑稽だが、それでもこの男が、ファラオの死に何かしら関係があるのだろうなと思う。

アンケセナーメンは、もう力無く座り込むだけで、怒る事も話す事もなく、ただファラオの亡骸を見つめていた。

誰もが動けずに、見守るしかない行方。
それでも、明かされる事のなかったツタンカーメンの死。

そう。

たとえ我々が古代エジプトに訪れ、歴史の一端をまかされたって、ツタンカーメンの死は、誰にも分からない不透明な死。

神のみぞが知る、隠蔽された死。

それでいい。

だからこそ彼は、伝説であるのだ。

ｌｄｒａｗ

62：エジプトプラン43～会いにいきます、未来で～

結局歴史と言うものは、混沌とした、濁った白い水の中
見えてくるのは、ほんの少しの沈殿物

血のような夕焼けの後の、深い紺色の夜。
タハールが眠る傍らで、ルナシーもまた、疲れからうたた寝をしていた。
生暖かいような、少し涼しいような風が心地よい。

「……」

その様子を、じっと見守る様に、黒い気配のような存在が入口を漂っていた。
何だか、禍々しい存在のはずなのに、どこか寂しい。
黒い霧のような、その存在は、ゆっくり部屋に入ると寝るタハール

の前で静止した。
その顔を、その寝息を全て、愛おしいような、複雑な念で見ている。
霧の向こうの瞳。

黒い霧のような塊から、淡く透けた黒い手が出てきて、そっとタハールの頭を撫でる。

「……！？」

その時、タハールの懐が淡く光った。黒い霧は少々驚いた様に揺れ、手は懐の小さな袋を取り出した。

「……そうか……」

布かなにかを隔てたような籠った声。

「……お前が、これをここまで持ってきてくれたんだな……」

取り出したのは、いまだに淡い光を内に秘めた、ルナシーのペンダント。
ヴィライアーの印。トパーズの宝石。

それは十年前の世界で、なくしてしまったはずのものだった。

「……それを……返してやろうな……。この人の所へ……。
そのペンダントの事は忘れた方が良い……」

黒い手は、そのペンダントをルナシーの手のひらにのせる。
冷たい感触に、彼女は一瞬顔をしかめたが、すぐにまた安らかな表情に戻った。

トパーズの宝石は、早くもとの所有者の元へ返りたかったと言う様に、淡く籠ったような輝きはゆっくり消えていった。

これで、何もかも全てが終わったような気がした。
自らの存在意義も、役割も全て。

私はもうすぐ消える。そのための、最後の命を、若きファラオが捧げてくれた。
呪いを全て引き受けようと、彼は言ってくれた。

この十年間、人から醜い呪いと成り果て、憎しみの魂が集いこのような姿となった。
それももう、終わりだ。

この国の呪いは、一人の若きファラオによって解かれたから。

どこからか、嘆きの声が聞こえる。

黒い呪いの化身は、ゆっくりと部屋から出て行った。
一度だけ、もう一度だけ我が子の寝顔を振り返り、そして、音もなく消えていった。

しんとした、だけどピンとした、今の空気をなんて言ったらいいだろう。
ルナシーの手のひらに乗ったトパーズの宝石だけが、“彼”の全てを知っている。

こうして見たら、終わりなんて実にあっけなく、そして空しく。
今まで自分たちがしてきた事の、いったいどこに意味があったのかさえ分からない。

結局、たかが未来から来た人間が、歴史を変える事すらままならず翻弄され、その事実を改めて痛感させられただけじゃないか。

「……無茶をしたわね。私は寝てたなんて……情けない話だわ……」

「……君はタハールの側に居てあげたんだ。それに……」

それに、あの場面を見るのは俺だけでいい。
結局何も分からなかったんだ。俺だけが、その場面を覚えておけば、それでいい。

キクマサは、痛む肩を包帯のような布で巻かれ、すっかり治療されていた。
幸い傷は深くなく、「このくらい平気だよ」と言う彼の顔色は悪くなかった。

全てが、こうやってあっけなく終わる。

ファラオが死んでからアンケセナーメンさんを見ていない。宰相アイも。今は色々忙しいだろうから、俺たちはこうやって、自分たちの部屋でじっと療養するしかない。

キクマサはベットの上から、ルナシーの胸に光るペンダントを、少し驚いた様に見つめた。

「……あれ……そのペンダント……あったのか？」

「……いえ、無くしてたはずなのよ……。でもね、ファラオの亡くなった夜に、目が覚めたら手の上にあったの……。まるで、誰かが置いてくれたみたいに……変でしょう？」

「……」

理屈では分からない事がこの世界では起こる。

いや、もしかしたら、どんな世界でもそうなのかもしれない。

無くなっていたペンダントも、きっと意味があったに違いない。役割を終え、“誰か”がそっと返してくれたのだろう。

次の日、団長とシャルロ先輩が帰ってきた。スノー先輩を連れ戻して。
ファラオが亡くなった事実を知って、団長もシャルロ先輩も複雑な表情だったが、誰より嘆き悲しんでいたのはホルエムヘブであった。

信じられないと言う様に、いつもの精悍で何事にも動じない彼は、そこには居なかった。
それだけファラオを慕い、仕えてきたのだ。

一時、この人は敵なんじゃないかと思っていた時期があった。今では、それが本当に申し訳ないと思う。
ファラオをを恨んでいた人が、本当はどれほど居たと言うのだろう。

彼が死んでしまった今、王宮は華やかさを控え、彼の死後の世界を祈るばかりだ。

それからまた数日たって、フレイとジェイルが帰ってきた。
この二人はそれほどファラオと関わりがなかったが、人の死と言う物の悲しみは、それを感じている人を見るだけでも辛いもの。

彼らが持って帰った“黄金のマスク”は、結局この時のためにあったのだから。

久しぶりにアンケセナーメンさんを見た。

「……ごめんなさい、キクマサ……。ごめんなさい……」

彼女は我々の前に現れるや否や、まずキクマサにすがって謝った。
彼は

「良いんです……大丈夫ですアンケセナーメンさん……」

そう言って、謝る彼女をしっかり立たせる。彼女はそれほどにふらふらと、足下が覚束なかったから。

王妃はだいぶ、弱っているようだ。
大切な人が死んで、元気なはずはないが、その様子は痛々しい。

彼女はそれでも、彼らの前では王妃であった。

フレイ達が持って帰った“黄金のマスク”をじっと見て、その顔がとてもファラオに似ていると、静かに笑っている。
確かに、まるでファラオのために作られたのではないかと思うほど、沈黙の表情は、彼の少年王を彷彿とさせる。

「……ファラオの遺体は、あなた達が集うまでは手を付けないと決めていました……。彼の顔を最後に見てやってください……」

死後の世界を重んじる彼らの宗教観。
たとえ死んだとしても、死後の世界で彼は生きている。

キクマサ達はアンケセナーメンに連れられ、王宮の地下へと。
ツタンカーメンの遺体が置かれている間へと案内された。
冷たい石の台の上に、彼がいる。

「……」

皆、何も言えずに、ただじっと黙っていた。
それぞれがそれぞれ、何を考えているのか分からなかったが、沈黙の空気が悲しいのは、皆共通である。

少年王のくすんだような青白い顔は、何だか穏やかに見える。

ふと、団長が口を開いた。

「……安心しろ……。ツタンカーメンは、ずっと先の未来で発見されるまで、墓を盗賊に荒らされる事も無く静かな眠りにつく事が出来る。発見されてからは、この世で最も有名で、愛された偉大なファラオだ……」

「……」

団長はいつもの様にしかめっ面であったが、声は落ち着いた淡々としたものだった。

アンケセナーメンはそれを聞いて、一時驚いた様にしていたが、

「……そうですか……」

何か、今まで彼女を縛っていたものが、静かに彼女を解放した様に穏やかに笑った。
そして、手に持つ黄金のマスクをそっと見つめる。

ファラオ。

これが受け入れるべき運命なのだと。

「……みんな、帰るぞ……」

団長はそっと、その場に居るヴィライアーに呟いた。
彼には分かっていたのだ。“黄金なマスク”が、元の時代に戻る最後のピースだと言う事が。

アンケセナーメンがそのマスクを、亡きファラオにかぶせた時、

どこかで、カチッと時計の針が動く音がした。

来た時と同じ、目映い光と、目まぐるしく流れる時の風。
ぐるぐる回る、輪廻の狭間を、我々は漂っている。

ああ、これが本当に最後なんだ。

それを理解したのは、光の隙間から見えた、アンケセナーメンさんの姿。彼女は少し驚いた様にしていたが、消え行く我々にそっと、お辞儀をしていた。

ありがとうと聞こえた気がした。
それが悲しい。

俺たちが出来た事なんて、結局何も無いじゃないか。

「……さようなら……」

キクマサは、消え行く視界の、亡きファラオとその王妃、古代エジプトに向かってさよならを。
別れと言うには奇妙だけれど、この出会いはきっと、一生無かった事には出来ないから。

この世界で出会った人たちが、順番に脳裏を横切っていく。別れの挨拶をしているみたいに。彼ら一人一人に、きっと意味があり役割があった。意味の無い出会いなど、そもそも無いのだろう。

時代があなた達を、どんな風に想像したって、俺たちだけが、あの世界を、

あなた達を知っている。

だから、帰らなくちゃ。

次の時代に、その意志を持っていくために。

会いにいきます。

未来で。

draw

63：エジプトプラン44～鍵と扉～

出口の扉のその向こう

手にした鍵の、その重み

長かった、本当に長かったと思う一方で、それは一瞬のようであったとも感じる。

ファラオがどうやって死んでいったのか。
何を思って殺されたのか。

アンケセナーメンさんが、あのとき受け入れた事。
諦めたもの。

古代エジプトの歴史を垣間見て、触れ合って、その闇を知って、昔も今も変わらぬ愛を知った。

「うそ……何でいきなりみんな帰ってきたの……？」

レッド率いる、待機組のヴィライアー達は、いきなり帰ってきた残りのメンバー達に、驚いたのは当然。まばゆい光が三角錐の空間を照らし、目を開けたら、いきなり全員がそこに倒れていた。

そう。帰ってきた彼らの中には、フォルテも居たのだ。

レイはフォルテに駆け寄り、彼を揺すって声をかける。

「フォルテ……フォルテ……っ！！」

さっきまで不安でいっぱいだった心が、彼女に焦りをもたらす。彼に何かあったのではないかと、そればかりを考えていた。

フォルテは、レイの声に答える様に、ゆっくり目を開けた。

「……レイ……俺……」

「フォルテ！！　気がついたのね……！！」

それぞれ、いろいろな所で皆を起こしにかかっていたので、フォル

テだけではなく、メンバーが意識を取り戻しつつあった。
フォルテは頭を抱えて、なぜ自分はここに居るのだろうと考える。

体中がじんわり痛い。
古代エジプトに行った事は覚えているが、自分が刺されて、それからどうなったのかが曖昧だ。何だか、大切な事を忘れている気がする。なんか傷も治ってるし。いろいろ分からない。

レイが泣きそうな顔でこっちを見ている。そんなに心配する事かと、ちょっと笑いそうになった。不謹慎にも。

そのとき、少し向こうでルナシーとキクマサが倒れているのが目に入った。
そうだ。あのとき彼女は、ルナシーはどうなったんだろう。
彼と共に行動していたのはルナシーだけだから。

「ルナシー……！！　キク……っ！！！」

フォルテは病み上がりの体を起こして、急いで二人の元に駆け寄った。レイは一瞬「……？」と、疑問を抱いたが、彼について二人に駆け寄る。

キクマサとルナシーは、声をかけられるとすぐに目を覚ました。
二人で顔を見合わせて、ぽかんとしている。

しかし、フォルテを顔を見るや否や、ルナシーは驚きを隠せずに、いよいよ涙を堪えていた。

「……フォルテ……あなた生きてたのね……っ！！」

「ああ。この通りさ……。すまない、心配かけただろ……」

「当たり前だわ！！　私、あなたはもう死んでしまったとばっかり……っ！！！」

ルナシーはそれ以上、何も言えなかった。ここに、彼も一緒に生きて帰ってきている事に、どれほど救われただろう。キクマサも当然、彼を心配していたので、安心するばかりだ。

フォルテは何度も「……すまない……ごめん……」を繰り返していた。

ただ、レイだけは、そんな二人を複雑そうに見ていたけれど。

いつの間にか、この二人にしか分からない結びつきが出来ている気がして。

「何ですかね、あれは。……二年生修羅場なフラグが立ってますね、ナギさん」

「ええ、まさかの二年生ですね。二年生がこんなにおいしい関係に

発展しているとは思っても見ませんでしたね、レッドさん。そしてイケメンのキクマサ君が、まさかの蚊帳の外ですね」

ひそひそと、二年生の様子を陰ながらに見ていた五年生のミーハー二人は、勝手に妄想を膨らまして盛り上がっていた。

そんな二人の間を割って、今しがた起き上がった団長はフォルテの前にやってきた。

そして、彼を見下ろすような、睨むような視線で。

「よお。元気そうじゃねえか……。こっちはお前が死んだって聞いてたけどな」

「……あ、はは……。生きてますねなぜか……」

フォルテは団長に恐れを成して、妙に声が小さい。キクマサにとっては、団長はもうこれが普通なのだと分かっていたが、あまり関わっていないフォルテにとっては、怖い存在なのだろう。

団長は相変わらず鋭い目つきで、疑問を口にする。

「……時間軸がおかしくねえか？　お前が殺されてから、だいぶ時間が経ったと思うんだが……。そこのルネ・トパーズと一緒に戻ってくること自体おかしくねえか？」

「……はい？」

そもそも、フォルテはキクマサ達の物語を知らないので、何の事やらと。ルナシーは自分が殺された時に一緒に戻ってきたものだと思っている。

しかし、それ以前に、あの世界での時間軸なんて曖昧だ。

「……まあ、何が起こったっていまさら、驚かねえけどさ……」

団長は、笑いこそしなかったが、ちょっと安堵の表情を見せた気がした。それは、共に長く居たキクマサだけが気づいた事だ。
あまり関わらなかった後輩だとしても、気にならなかった訳じゃないだろう。

そして、団長はその後、クレハの所へ。

「お前……俺たちよりだいぶ早く帰ってきたようだな」

「うん。なんか帰ってた」

「そうか……それは良かった……うん」

団長は、クレハにだけは視線が泳いでいた気がする。
それもそのはず。クレハが勝手に帰ってきていたからよかったものの、お前を忘れてたなんて今更言えない。
キクマサもシャルロも、フレイもジェイルも、なんかいたたまれなかったと言うか、遠い目だった。

「皆、再会に喜んでいる所悪いんだけど、君たちと共に出現した“これ”には突っ込まないねえ……。頭大丈夫？」

ティアンは眼鏡を、相変わらず無機質に光らせ、浮ついている団員に現実を突きつけた。
それは、例の棺の側に現れた大きな扉。

ファルテはとっさに「……あ！！」と叫んでしまった。急いで口を抑えたが、その彼の態度に注目したのが何人か。ティアンはニヤニヤしているし、もっぱらカイは彼をじっと観察していた。

それは、歴史の扉。

来た時も、その入口の扉を知らずに通ったのだから。

我々が元の世界に帰るための扉。
その扉の出現条件が、最後のツタンカーメンが“黄金のマスク”を冠る事だったと、気がついていたのは団長くらいだろう。

「……鍵が無いわよ……」

ふいに、シャルロが口にした“鍵”と言う単語に反応したもの達が、何人居ただろう。
シャルロは顔をしかめて、

「……何よ。だって鍵穴があるじゃない……。鍵が無くても開くものなの……？」

「……」

団長は彼女をいかがわしそうに見ていたが、彼女は至っていつも通りだった。
確かに、来た時も、案内人のセティさんが鍵を持っていた気がする。
団長は試しに扉を押してみたが、びくともしない。

「……やっぱり“鍵”が必要らしいねえ……」

ティアンはわざとらしく、隣のカイに問いかける。カイは黙っていた。
ただ、フォルテだけが何かにピンと来た様に。

「ルナシー……ネフィルティティの瞳はどうなった……!?」

「え……？　た、確か持ってきたはずよ……」

彼女は、そう言えばと言う様に、研修着のポケットを探った。
しかし、ポケットの中にあったものは、瞳の丸い感触ではなかった。

「……うそ……」

取り出したのは、細長くて少し大きめの金の鍵。
アンクのような装飾に、細かいヒエログリフが刻まれてある。

キクマサも息を飲むほどの、“鍵”と言うものの存在感。威圧感。
それは、ネフェルティティの瞳であった頃に感じたものより、凄まじく洗練されたものだった。

「鍵じゃないか……」

「やっぱりそうだったんだ。俺の考えは正しかったんだ……」

フォルテは、胸の奥で今にも爆発しそうな考古学者魂にうち震えているようだった。瞳の輝きが違う。

その様子に気がついた団長は、ルナシーからピッと鍵を取ると、それをまじまじと見る。

「これ……どうしたんだ……」

「あー……話せば長いと言うか……」

フォルテは相変わらず、団長の前では態度が小さくなる。

団長はじっと、フォルテを見おろしていたが、まあいいやと言う様に、鍵を扉に持って行く。

ティアンもカイも、その鍵には多いに瞳を丸くさせた。

彼らはその鍵の価値を、十分に理解している者達だったから。

「……やっぱり世界的に有名な考古学者の息子さんだな、ゴッドバルトは……。ちゃんと見つけてくれたみたいだ……。あの子も“鍵”の事知ってるんじゃない？」

「先輩……。あまり鍵について、深追いしない方が良いですよ。この世の中の、どういった者達が“鍵”を狙っているのか知っていますか……？」

「……覚悟の上さ。どういった者達って……僕たちだってその、“どういった者達”の一員じゃないか。そうだろ……？」

ティアンはそう言って、ゆっくり眼鏡を押し上げた。笑う口元は、いったい何を意味してのものか。カイは、自分たちが、深追いしてはいけない“鍵”を巡る渦の中に巻き込まれている気がした。

団長が、その鍵を鍵穴に押し込むと、それはちょうどピッタリ合うようだった。彼は息を飲み、一度皆の方を振り返る。

「いいか……開けるぞ……」

「いいから早く開けなって。みんな帰りたくて仕方が無いんだから。そんなもったいぶるとか激しく要らないから」

「……」

ティアンの容赦ない突っ込み。団長は一度、とても残念そうな顔をした様に見えたが、再び扉に向き合った。鍵をしっかりと握りしめ、息をつくと、ゆっくり回す。

カチ……

それは、鍵の開く音だったのか、もしかしたら、歴史の大時計の針の音だったのかもしれない。
再びリセットされた物語。

開かれた扉は、出口の扉でもあり、
“鍵”を巡った物語の、始まりの扉でもあった。

彼らはその扉から順番に出て、そして、皆が出てしまった時には、
その扉は音も無く消えてしまっていた。
団長の手に残る、出口の鍵だけはそのまま。

皆を驚かせたのは、その出た先だった。やはりと言うか何と言うか、
そこはピラミッドの高い場所。
段々に積まれたブロックの、踊り場の様になっている所だった。

視界がもの凄く高い。一瞬足が竦んでしまいそうだった。

「……あー……ここはギザの三大ピラミッドですね。……クフ王ですね、位置的に」

「さすがはフォルテ君。すぐ分かるね」

フォルテとカイは、隣でお互い、専門的な話をしている。きっとこの二人は気が合う。
そう、彼らが現実の世界として放り出された場所は、世界でも有名な、ギザの三大ピラミッドの一つ。最も名高いクフ王のピラミッド。

王家の谷から、このような所にご丁寧にと、団長はため息をついた。
そんな団長を、ティアンは愉快そうに見て、

「ま、要するに、入口の扉は王家の谷に隠され、出口の扉はここ、三大ピラミッドに隠されたと言うだけの事。ツタンカーメンの時代には既に、このピラミッドは存在してたからね……。深い意味は無いよ多分」

「そうか？　嫌がらせだろ……これ……」

団長は腕を組んで、より一層眉根を潜ませる。
これ、どうやって降りるよ……と言わんばかりに。

時間帯は、太陽が眩しい昼下がり。
熱い空気に、光る砂漠。
激しい温度差に目眩がしそうだ。

ただ、やはり実感としては、戻ってきたんだと言う嬉しさが大きい。
それは皆、当然思っている事だった。

ピラミッドの下から、観光客が不審そうに見上げている。
どんどん集まってきている。

やばい、これは監視の人に怒られるぞ、と。

団長は長いため息をついて、やっと電波の届く様になった携帯を取り出した。

そして、疲れきった声で言うのだ。

「……先生、ただいま戻りました。研修終了です。……だから、助けてください一刻も早く！！！」

６４：エジプトプランＦＩＮＡＬ～ドラマチック～

歴史を垣間見る事の際どさを痛感した

それでも、出会えてよかったと、いつの日かそう思える様に

「チェックメイト……ですね」

アプリコットブラウンの髪の青年、彫刻科団長のパリス・ヴァレリーは、目の前のチェス版の、キングの駒をコトリと倒す。そこは、クラシックな雰囲気の漂う、彫刻科ヴィライアーの会議室。

「……二日……か。まあ、イマジン・ヒストリアの世界なら二ヶ月弱……。素人の割には早く終わったな」

「どうだか。俺たちだったら半日で終わってる」

彫刻科四年生のフィル・レグールは、彼ら絵画科のエジプト攻略を割と評価したが、アルマ・カイザードは相変わらず皮肉が多かった。

パリスはいつもの様に軽く微笑んで、チェスの相手を見た。目の前の少女を。

彼女は一年生のスカーレット・マリーニ。長い白髪に、無表情を讃えている。

「君はどう思う……スカーレット」

「……分からない……。イマジン・ヒストリアは所詮バーチャルの世界。我々は簡単に攻略する“テクニック”を知っているまで……。彼らが何も知らずに攻略出来たのならば、評価すべきだと思う……」

掠れるような、小さな声だったが、彼女の言葉はしっかりとしていた。

アルマは「けっ…」と、まだ納得のいかない様子だ。

「アルマ兄さんは自分が活躍出来なかったからひがんでるだけよ。じっとしていらんないの」

ソファに座って、お茶とケーキを食べているおかっぱの三年生。ブリジット・バルーンは、アルマを見てはプッと笑っている。

「おい。それ以上食べたらさらに太るぞ、ブリジット」

彼はさりげなく、横目で彼女に嫌味。しかし彼女はおかまい無しで、二つ目のケーキに手を付けていた。

ブリジットの前のソファーで、紅茶を飲んでいた二年生のシャトー・オークランは、にっこりと笑うと嬉しそうに。

「でも、良かったですね、パリスさん。これでまた鍵の封印が解けたから……」

「ええ。安心しましたよ。……でも、ゆっくりしている暇は無い様です。……鍵はまだ、いくつも封印されている。とはいえ、後でセティさんにお礼を言わなくてはいけませんね……」

パリスの視線は、皆を見ている様で、もっと遠くの最果てを見ていた。これから、彼ら絵画科を巻き込んでしまった責任を取らなくてはいけないだろうから。

それでも、彼らは進まなければならない。

扉の向こうの世界と、この現実の世界では、どうやら時間の進み方が違うらしい。

あんなに長く感じられた古代エジプトの生活。それはたったの二日間の出来事であった。

色々気になる事も多いし、それぞれの物語を語りたい所だが、まず

はみんな、眠くて仕方なかったのは言うまでもない。
ホテルに帰るや否や、全員死んだ様にぐっすり眠った。

ただ、キクマサだけは、向こうの世界でもらった傷をそのまま持って帰ってしまったので、一人病院に連れて行かれた。幸い現代の医者が診ても、たいした事は無いと言われたので安心だ。

数週間で治るらしい。

「お疲れだなあ、キクマサ。やっぱり、キツかったかな、新人には今回の研修」

リース先生はお気楽そうに、軽々言ってくれる。
そして彼の運転は荒い。

「……正直すっごく辛かったですけど、まあ終わってしまえば何とやら、ですよ。というか、これからもこんな研修ばっかりなんですか？」

「……いやいや、こういうのは本当、稀だから。次回からは普通に、現地の遺産見たり、美術館行ったりだよ。……まあでも、何事も無く全員帰って来れたみたいで良かった良かった」

「……何事も無くって……俺、肩ばっさりだったんですけど……」

「あはははははは！！！」

先生……。

キクマサは、これがルネ・ヴィルトンの教員なのかと、正直不安に

思ったが、そうしなければ手に入れる事の出来ないものを知っているのも、やはりここの教員であった。

彼らは容赦ない。
これからも、何が起こってももう、そう言うものなんだと受け入れられる気がする。

久しぶりの現代の食事を、誰もがありがたいと神に感謝した。柔らかいベットを嬉しいと思った。
そう思えるのも、あの経験があったから。

目まぐるしく展開していった物語を、忘れてはならない。
そこで見た景色、出会った人々、感情を。

「やっと普通の研修らしい所に来たね……カイロ博物館だ……」

フォルテは、今まで何度となく来た事のあるその博物館を、まるで始めてきた様に目を輝かせている。
今までと見え方が違う、と彼は言っていた。

「ここは、古代エジプトの遺産が多く展示されている。展示されてなくても、収容されているものはもっと多いよ。それに、ツタンカーメンの縁のものも多い……」

カイロ博物館は、世界でも有名な、エジプトの遺産を扱う博物館だ。何だか、懐かしいとさえ感じてしまう、その展示品の数々。

フォルテは、ふとあるパネルの前で立ち止まった。それにつられて、キクマサ達も立ち止まる。

そのパネルには、ツタンカーメンについて。
ツタンカーメンとアンケセナーメンについて書かれている。

ハワード・カーターが発見したツタンカーメンの墓。そのミイラ。
その黄金のマスク。
パネルによって紹介されたのは、それらについてだ。

何だか、最近までこの世界に居たのが嘘の様に、説明のパネルを見ていると遠く感じる。
自分たちがこれらに関わっていたなんて、夢のようだ。

「知ってる？……ルナシー」

フォルテは急に、隣のルナシーに声をかけた。ルナシーは「何を？」と、聞き返す。

「アンケセナーメンは、ツタンカーメンの棺の中に、矢車菊の花の冠を添えたんだよ。君が教えたからだね……」

「……」

パネルの下の方には、黒く炭の様になった矢車菊の冠の写真が。あのとき、彼らにずっと教えてきた花の冠の作り方。こんな、何千年も経って、その鱗片を見る事が出来るとは。

彼女はどんな思いで、その花冠を添えたのだろう。

彼女がそれを備えた事で、ツタンカーメンとアンケセナーメンは悲劇のファラオと王妃として、多くの者に感動を与えた。幼いファラオを見守り、ずっと支え続け、そして見送った。

我々は、その歴史の流れを手伝っただけだ。

キクマサは、あの中庭で、彼女が花の冠を作っていた事を思い出す。

「……うれしい……？」

ふいに、ルナシーに聞いてみた。

彼女はとても、穏やかな瞳だった。

「…そうね……私たちのした事って、本当に小さな事だけれど……それでも、私たちがあの世界に行った意味は、あったのかしら。たとえ、何を変える事が出来無くったって……」

「……ここで、彼らに会える事。誰もが彼らに、彼らの居た証を見に来れる。その存在を知る事が出来る。そういう事に意味があるんだよ……。きっと……」

キクマサは、ずっと心に思っていた事を、自分に言い聞かせる様に。

ルナシーは、少し意外だと言う様にキクマサを見上げる。
彼はあの、まばゆい光の中、彼らに別れを告げるとき、約束した。

また、会いにいきますって。

それは、この現代だからこそ分かる、彼らの歴史的価値。
誰もが知っている、博物館に行けば会いにいける。彼自身じゃなくても、その存在に。

それはきっと、永遠に。

「ツタンカーメンのミイラは、ハワード・カーターの意志で、彼の墓に置かれている。ここで見る事は出来ないけど、黄金のマスクは展示されてるんだ。行こうよ」

フォルテは、じっと動かない二人に、博物館と言う事で小声で誘導。
しかし、あの世界で“黄金のマスク”には、嫌と言うほど付き合わされた。

呪いを解くと言われていた“黄金のマスク”
結局呪いはどうなったのだろう。

そんな事をふいに考えた時、ファラオの死が頭をよぎる。
彼の、解き明かされる事の無かった“死”

「おい、キクマサ。早く来いよ」

フォルテ達はとっくに、黄金のマスクの展示してあるその前に居た。
周りを見てみたら、先輩達もそれぞれ興味深そうに見ている。

「……」

皆、黙ってそのマスクを見上げる。長い年月を、静かに墓の中でフ
ァラオと共に眠っていた。それなのに、凛とした品格と、古代の深
みを思わせる風格。その空気は相変わらずで、当時から伝説と言わ
れていた産物なだけはある。
しかし、それを巡る物語を知っているのも、我々だけだ。
そのマスクはいまや、あの時のマスクではなく、“ツタンカーメン
”であるのだ。

お久しぶりです。

キクマサは心で呟いた。

今こうやって、長い年月を隔てて、再びあなたの面影を見る。
あなたがこの“黄金のマスク”を冠る事こそに、全ての意味があっ
たから。

あなたの死を知る者は居ない。

でも、あなたが死んで、その黄金のマスクを冠った事で、あの時代のエジプトを救った“何か”であったと信じたい。

ツタンカーメンが崩御した後、そのファラオの座についたのはやはり、“宰相アイ”であった。アンケセナーメンは王家の血を引く者として、彼と再婚させられ、それ以降の彼女の消息は不明である。

しかし、宰相アイも高齢であったため、その治世は四年と持たず終わりを告げる。

その後のファラオとなったのが、将軍であった“ホルエムヘブ”である。

三代前から続くアメン神とアテン神の権力抗争によって乱れたエジプトを、実質立て直したのが彼だと言われている。

彼がどんな思いで、混沌としたエジプトと向き合ったのかは分からない。

結局歴史とは、長い繋がりで出来ているもの。
どこが終わりで、どこが始まりなのかも分からない。
そもそもそんなもの無いのかもしれない。

ただそこにあるのは、紙の上では知り得ない、様々な、一人一人の、
誰が主人公でもかまわないドラマだけである。

我々が“歴史”と言うだけで、ただ、それだけである。

エジプトプラン

—draw

＊ｄｒａｗコラム～エジプトプラン登場人物～

＜エジプトプランについて＞

絵画科ヴィライアーの研修でエジプトにやって来たキクマサ達。しかし、エジプトの王家の谷で、案内人のセティさんが開いた謎の扉は、古代エジプトへの扉であった。ヴィライアーがバラバラになり、それぞれの時代や場所で物語を展開し、出口の扉を見つけようとしている。舞台は１８王朝、ツタンカーメンの時代。太陽神を巡る、混沌とした時代であった。

《メンフィス側》

＊ツタンカーメン

かの有名な少年王。十年前にフォルテとルナシーに出会い、今はキクマサや団長、シャルロをかくまっている。若干１０歳でファラオとなり、今まで高官たちに言われるがまま政治を行ってきた。先代ファラオの残した混乱を沈めようと勤しんでいるが、なかなかうまくいかないようだ。理想とする世界がありながら、高官の言いなりになってしまう自分に腹が立っている。キクマサとは気が合う様で、同じ年頃の初めての友人として、よく話しに来る。妻のアンケセナーメンとは仲がよく、お互い幼い時から唯一信じられる者として、

肩を寄せあって生きて来た。先代ファラオの都、テル・エル・アマルナの残党と対立している。国を守るために何をしたら良いか、それを考える毎日である。

＊アンケセナーメン

先代ファラオの娘。ツタンカーメンと結婚して、王妃となった。ツタンカーメンより四つ年上の姉さん女房であり、彼のためなら何だって出来ると言うほど。行動力があり、芯の通った女性。基本的にファラオ以外誰も信用していないが、十年前に“ラーの使徒”と出会い、それからラーの使徒だけが唯一この国を救える者だと信じている。同じ女性であるシャルロに好感を抱いている様で、よく相談を持ちかける。

＊ホルエムヘブ

ツタンカーメンの時代の将軍。彼は先代の時代から名を馳せるほどの名将で、ツタンカーメンやアンケセナーメンを幼い時から見守って来た。二人が唯一信頼している家臣で、頼れる存在。雄々しいたくましい青年で、武術に優れている。

＊アイ

ツタンカーメンの時代の宰相。元々先代アクエンアテンの時代から宰相であり、国を左右してきた人物でもある。すでにかなりの高齢で、王宮でもかなりの権限がある。実はラーの使徒の命を狙い、黄

金のマスクを探している。

《テル・エル・アマルナ側》

＊ネフェルティティ

先代王妃。アンケセナーメンの継母。アテン信仰に熱心で、アマルナ改革を押し進めていた人物の一人。夫であるアクエンアテンを今でも慕い、彼とアテン信仰を蘇らせ、呪いを解こうと黄金のマスクを狙っている。“ネフェルティティの胸像”という有名な美術品があるが、彼女がモデルである。

＊アクエンアテン

ツタンカーメンの前のファラオ。アテン神を唯一神とした“アマルナ改革”を実行し、従わない他神の神官団や民に罰を与え、反感をかった。人類最初の個性と言われたほどの変わり者。写実性（あるがままの姿）を重んじた。

《ラーの神官団》

＊タハール

若きラーの神官。都から逃げ、オアシス都市でラー信者を守りなが

ら暮らしていた。大柄で乱暴そうな性格のため、最初は盗賊だと間違えられた。

＊カーロン

元太陽神ラーの最高神官。タハールの父親。元々冷静沈着な性格だが、ラーの神官団が滅んでからはキャラバンの長老として優しい老人になっている。孫にタハールと名付け、可愛がっている。

＊ｄｒａｗコラム　～エジプトプランに出て来た世界遺産～

＜世界遺産の豆知識１＞

世界遺産とは、世界遺産リストに登録されている自然遺産、文化遺産、複合遺産の事です。

文化遺産……記念物や遺跡、文化的な背景からなる。（例：アテネのアクロポリス／メンフィスのピラミッド地帯
自然遺産……地質や地形、生態系や景観からなる。（例：グランド・キャニオン／知床／ガラパゴス諸島

複合遺産……文化遺産と自然遺産の、二つの特質を備えたもの。（例：泰山／マチュ・ピチュ

＜エジプトの世界遺産＞

今回、エジプトプランで取り上げた世界遺産を紹介します。

「古代都市テーベと墓地遺跡」／文化遺産／１９７９

エジプトプランで一番お世話になった王家の谷を含む、世界遺産で

す。カルナク神殿、ルクソール神殿、王家の谷、王妃の谷などが残る、“アメン神信仰”の中心として栄えた古代エジプトの都です。王家の谷では、あらゆるファラオや王妃の墓、ミイラ、装飾品などが見つかっています。しかし、かなり盗賊に荒らされていたため、謎の多い墓も多々あります。

「ヌビアの遺跡群」／文化遺産／１９７９

本編でも取り上げた、世界遺産始まりのきっかけとなった遺産、アブシンベル神殿を含む世界遺産です。古代エジプト新王国時代と、プトレマイオス朝時代に建てられた建築物群です。その中でもやはり重要視されるのは、ラムセス二世が建設したアブシンベル神殿です。この神殿の入口には、高さ２２ｍのラムセス二世の像が四体並んでいます。内部の一番奥の部屋には、太陽神ラー・ホルアクティ、国家神アメン・ラー、メンフィスの守護神プタハ、ラムセス二世が並んでいます。

「メンフィスのピラミッド地帯」／文化遺産／１９７９

エジプトプランの最後に、出口の扉があったのがギザのピラミッドです。そのギザのピラミッドを含む世界遺産となっています。メンフィスは言わずと知れた、エジプト古王国の首都です。ナイル川西岸に、ギザからダハシュールまで３０ｋｍに渡る墳墓群があります。「ギザの三大ピラミッド」とは、クフ王のピラミッドを中心に、カフラー王のピラミッド、脇に王妃のピラミッドのあるメンカウラー王のピラミッドを合わせた総称です。カフラー王のピラミッドの側に、スフィンクスが建っています。ピラミッドの建設目的や運搬技術などはいまだに謎が多く、世界七不思議にも数えられています。

エジプトには現在、六つの文化遺産と一つの自然遺産を有しています。

古く優れた文明を持っていたからこその、興味深い遺産が多いです。

65：オーディールの箱庭

このルネ・ヴィルトンという存在を
考えた事はあるだろうか

「ありがとうございました…。我々のわがままを聞いていただいて」

「いいえ……“鍵”に関する問題は、あなた方に委ね、判断されるのが一番でしょう。しかし……どうしてまた絵画科のヴィライアーを使おうなどと思ったのでしょうか……。私には、それが分からない」

絵画科の棟の離れた客間で、エリーゼ先生とパリス・ヴァレリーは密談をしていた。
というのも、先日エジプト研修で手に入れた“鍵”を、彼ら彫刻家

に引き渡すためである。

パリスは「……そうでしょうとも…」と一度頷き、口元を緩めると、

「確かに、我々彫刻科が攻略に向かえば、すぐに済んだ話かも知れません。……しかし、これから起こりうる未来に、我々だけの力で出来る事など、予想がついてしまう。……僕は、予想外の力と言うものを見つけたいのですよ」

例えばそれは、まだ発見されていない原石のような、と彼は言った。エリーゼ先生は、特に表情を変えなかったが、

「……絵画科の中に、そのような者が居りましょうか」

「それは分かりませんが、少なくともエジプトを攻略出来たのです。……何かを得て帰ってきてくれているかもしれません。神々の力が反映されるイマジン・ヒストリアの世界です。恩恵を受けていてもおかしくはない……」

「……」

緩やかな口調だが、あまりにも落ち着き余裕のある態度の中で、彼の本心を探る事は出来ない。

今まで、割と保守的であった彫刻科も、大胆な行動に出る様になったものだ。

「……少なくとも、絵画科の皆さんには、本当に感謝しています。“鍵”は、我々が責任をもって、あるべき姿へと還しましょう……」

パリスは、目の前のテーブルに置かれた、小さな箱を開き、その中

に収められた鍵を見つめた。せっかく手に入れた鍵だと言うのに、何とも言えない表情をしている。エリーゼにはそう見えた。

鈍い金色の、沈黙の鍵。その、見えない光に反発するような、パリスの瞳。

エジプト研修が終わって、約一週間が経った。

あの研修のせいだろうか。その前のルネ・コンのせいだろうか。二年生になって、一日一日が長く感じられるような事ばかりだったから、実感が無いが。

まだ二年生になって、たった二ヶ月ほどしかたっていない。

他の同級生は、いつもと変わらない授業を退屈に感じているようだが、キクマサにとってはこれほどありがたい事は無いと思った。

午前中は机に付いて、教養教科の授業を受け、午後は実技の授業。

「明日は裸婦画だぜ。楽しみだなあ～」

「あ、ああ……」

と言うような普通の男子の会話。いや、普通ではないかもしれないけれど。

エジプトのカラッとした暑さにも慣れてきてたのに、やはりギリシアの空気は心地よい。

肩の傷も、驚くほど順調に治ってきている。今はぶつけたりしない限り、痛みはそれほど無い。

「次の研修っていつなんだろうな……。てか、どこなんだろう」

放課後の事だった。キクマサとフォルテは自分たちがよく使っている実技室で、課題のためのキャンバスを貼っていた。キクマサはイーゼルの前で四角い椅子に座って、フォルテの質問に頭を傾ける。

「さあね。でも、団長が言ってたけど一時は無いらしいよ」

「なーんだ。つまらないなあ……またすぐどこかへ行けるんだと思ってたのに」

「あの研修の後に、よくもまあそんな事が言えるな……」

キクマサは、「お前死にかけたんだぜ?」と、軽いノリのフォルテに。

しかしフォルテは、両手を頭の後ろに持っていって、何だかいまだに納得出来ない事でもあるように。

「だって、結局死ななかったもんなあ。……あれ？　何で死ななかったかな……お前は残念な事に傷を持って帰っちゃったけどな」

「ああ……。残念な事に」

キクマサは、確かに不公平だぞと。だって、こいつも刺されたって言うじゃないか。なのにどうして全くの無傷で帰ってきてるんだか。まあ、いまさらあの世界の事について言っても仕方ないだろうけれど。

フォルテは、自分の画材箱を探って眉根を寄せる。

「ああ！！　ジェッソきれてる……まいったぜ、買ってこなきゃ」

「俺の貸そうか？」

「いいよ。どうせ絵の具買い足したいと思ってたし……。あ、今日女子たちは遅くなるらしいよ。何でか知らないけど……」

フォルテは財布をズボンのポケットに入れ、軽い足取りで、散らかった実技室を抜ける。

「……分かったよ」

そこら辺に並ぶキャンバスの間から、彼が見える隙間を見つけ、聞こえるくらいの声で返事をした。

フォルテが居なくなったとたんに、しんと静かになる実技室。

温かい空気。

開かれた窓辺から見える青い空と雲の流れ。

こんな時間は好きだ。

彼は出来立てのキャンバスをとりあえずイーゼルにかけて、窓辺に寄り添って、風を感じる。
ここから見える景色は、緑と青と、中央棟。

ルネ・ヴィルトンはアテネ郊外の小高い丘の上にある。敷地も大きいから、学校以外の景色を見るには、それこそヴィライアーの会議室がある最上階まで行かないといけない。

何だか眠い。
平和ぼけもいいけど、次の作品をどうしようか、それもちゃんと考えないと。

柔らかい空気の中、実技室の前の廊下から、誰かの足音が近づいてくる音がした。
あれ、フォルテだったら早いお帰りだな。ルナとレイだったら、今日は遅いはず。

キクマサは、何だか急いでいる様にも聞こえる足音に気を止め、何となく窓辺から、視線を廊下に向けた。

その足音の正体が分かったとき、これほどキクマサが驚いた事は無

い。

「すまない！！　しばらくここに匿ってくれたまえ！！」

小走りで実技室に入ってきたその男は、紳士的な格好の中年の、この学園に居る者なら誰だって知っている人。

「……！！？　り、　理事長！！？」

「しいっ！！　静かに！！……って、おや、君はルネ・アメジストじゃないか……」

その男、ルネ・ヴィルトン美術学校の理事長である、エリック・オーディールである。

彼はキクマサと直接関わりを持った事はないが、キクマサからしてみたら勿論知っている人。理事長も当然、現ルネ・ヴィライアーである彼を知っていた。

「……理事長……こんなところでいったい何を……」

「ん？……ま、まあ……話せば長いと言うか……ね……」

彼は入口から顔を覗かせ、誰もいないのを確かめると、キャンバスの立ち並ぶ実技室の奥へ、画材を乗り越えて入ってきた。キクマサはぽかんとして、理事長の行動を見守る。

彼は濃い茶色の髪をちゃんと整えた、見るからに立派な紳士。優男の風貌で、中年男性だろうけれど、年齢がいまいち読めない。エリーゼ先生のお兄さんであるから、先生よりは年上だろうけど。

ん？　ていうかエリーゼ先生はいくつなんだ？

そんな無限ループの考えを巡らせて、彼は頭がこんがらがっていた。
理事長は「よっ……ほっ……」とかいいながら、やっとキクマサの居る、窓辺のスペースまで辿り着くと、一番近くにあった木の椅子に座る。

ええっ！！　まさかここに居座る気ですか！？
キクマサは微妙に緊張する。

「すまないねえ。はは……エリーゼに追いかけられていてね……。いやはや理事長と言うのもなかなか大変大変」

「……は、はあ……。エリーゼ先生が追いかけ……る……？」

いつもは冷静沈着で、多少の事なら眉一つも動かさない厳格なエリーゼ先生が、追いかけるというのもなかなか想像出来ない。
それに比べて理事長は、思っていた以上に愛想良く笑う人だ。彼はキクマサをじっと見る。

「君、確か母さん……いや、カトレア・オーディールの弟子だよね。どう？　あの人元気そう？」

「……あ……えー……そうですね、俺が最後に会ったのが一年と少し前なので、今どうなのか知りませんけれど、当時は元気でした。嫌ってくらいに」

「あはははは。そりゃそうだね。あの人が元気じゃないって言うのも考えられないね。でもまあ、もう年だからさあ、気になるものだよ……」

理事長は組んだ手をじっと見て、自らの母を思う。いったいどんな感情なのか分からないが。

「あの……カトレアさんって、いつから居ないんですか？　昔はこの学校に居たんでしょう……？」

「……そうだね。確かに昔は居た。……いつからかな、父が死んでからかな……学校に縛られず、自分の絵のその先を見てみたくなったんだよ……。ここを出て行きたくなる気持ちも分からなくはないが……」

「……」

彼は言葉の節々で、少しため息のような、微笑のような息をついていた。何だか、理事長としてはだいぶ若い彼に、重くのしかかるルネ・ヴィルトンと言う存在を見た気がした。

理事長は顔を上げると、

「で、あの人は怖かったかい？」

「！？」

急に明るい表情でキクマサに質問。キクマサは驚いたが、顎に手を添え考え込むと、まともに答える。

「いや……嫌味は多かった気がしますけど、基本的にひょうひょうとしてましたね。常に高見にいるって感じの人でした。怒る事なんてあまり……無かった気がしますね」

「おやそうかい。我々にはもの凄く厳しかったんだけどな。……あの人も丸くなったかな？　年をとって悟りの領域に入ったかな……。何にしても、君と言う存在をこの学校によこしてくれたのだから、あの人もここを忘れた訳ではないのだろう……」

理事長はカトレアさんの実の息子だ。確かに見覚えのある目元と、面影。

キクマサは遠い昔のような、最近のような、カトレアさんと過ごした日々を思い出す。あの人はギリシアを忘れてなんかいない。いま、ここに居るから分かる事だが、あの人の描く絵画は、どことなくこの土地の空気を思わせる。

あの人は、ギリシアを忘れていない。

「キクマサ君……きみはこの学校をどう思う？」

ふいに理事長が、さりげなくだが彼にとって、一番重要である事を彼に問うた。

キクマサは目の前にいるのが理事長なんだと言う事をあまり意識せずいたせいか、気軽に考え込むと、

「……楽しいですよ。楽しい事ばかりではないですけど、そこが楽しいです。……確かに行き詰まることもありますし、これからもあると思いますが……少なくとも俺にとって、ここは居場所だと思っています。……カトレアさんの所に居た時よりも強くそう思えるのは、あの人も……」

その先の言葉に、少し戸惑ったが、今ならそうだと信じられる。

「あの人にとっても……そうだったからだと思います……」

理事長にとってのカトレアさんと、キクマサにとってのカトレアさんは違う。それでも、あの人の独特の生き方に引かれているのはお互い同じだと思う。

彼女にとって、ルネ・ヴィルトンとはいったいどういう存在なのだろうか。

“大切な場所”と一言で言うほど単純なものではなかったのだろう。

それでも、彼女にとって居場所であったに違いない。

いま、ここにいなくたって。

理事長は彼の言葉に、少し目を驚かせていたが、ゆっくり笑うと頷いた。

「……そうか。……そうだね……」

ギリシアの空気は温かい。

カラッとした風が我々に語りかける。

理事長は何を思っているのだろう。

その時だった。

「……理事長……」

一人の厳格な、女性の声。静かなのに、耳から直接伝わるような声。
その声を聞いて、理事長はあからさまにビクッとした。おそるおそる振り返り、

「……や、やあ……エリーゼ……」

「……」

沢山のキャンバスの間、理事長のすぐ後ろで、音も無く佇んでいたのはエリーゼ先生。キクマサも驚いた。彼女はいったいいつここへ来たんだ。

そして、この氷つくような修羅場な空気に息を飲む。
彼女は冷ややかな瞳で理事長を見おろしていたが、キクマサの方に目を向けると、

「ごきげんよう、ルネ・アメジスト。……大変ご迷惑をおかけしましたね……」

「い……いえ……そんな……」

彼は小刻みに首を振ったが、エリーゼ先生は相変わらずの無表情で、

「さあ理事長……行きますよ」

「……ああ、はい」

と言う感じで、小さくなっている理事長をその場から連れて行った。
連れて行かれる時の理事長が、少しキクマサを垣間見て、「じゃあね」という口をしていたから、彼も小さく頭を下げた。

「……」

いったいなんだったんだと言うような、さっきまでの出来事。まさか、理事長がここまでやって来るとは。そして、あの二人の意外な面を見たと言うか。

さらに、エリーゼ先生ってやっぱり怖いなと。

再び静かになった実技室。本当に何だったんだろう。

「嫌でも、あなたは理事長なのです。……上との会議には出ませんと話になりません……」

「……君はたくましいね、エリーゼ」

理事長は、自分の立場を戒める席に座って、目の前の資料を憂鬱そうに見ていた。

彼の背負う、このルネ・ヴィルトンと言う大きな箱庭。

ルネ・ヴィルトンを相手にすると言う事は、世界を相手にしている
も同じ事。それだけ重要な“箱庭”であるのだ。
そして、それ以前に、この学校の奥深くで背負い隠している、本当
の存在理由を。

「……母さんは、この学校の裏の闇が、どうしようもなく嫌になっ
たんだろうね……。あの人は純粋に芸術を愛していたから……」

理事長はため息をつくと、自分の首を絞めているようなネクタイを、
少しばかり緩めた。

「だからこそ、私たちがこの学校を守っていかなくてはならないの
です。……嘆いている暇はありませんよ、お兄様」

エリーゼは相変わらず、淡々とした口調だったが、その瞳は強く、
固い決意を感じられた。
理事長もまた、文句は言っていたものの、この学校を守らなければ
いけないと言う思いは強く、そしてそれが自分に与えられた運命だ
と分かっていた。

この学校をどう思う？

その質問をした時に、“居場所です”と答えてくれる生徒が、一人
でもいる限り。

この学校を、ただの“箱庭”としないために。

ldraw

＊ｄｒａｗコラム　～絵画科教師陣～

＜ルネ・ヴィライアー教員＞

ルネ・ヴィライアーには、五つの科それぞれに、優秀な教員陣がいる。常にルネ・ヴィルトンに居る教員と、外部から招くアーティストの講義や授業を取り入れ、教育も幅広く展開。一般教養の教師は別として、学科指導の教師は、制作活動を行う作家も多い。

エリック・オーディール

＊ルネ・ヴィルトン理事長

＊現在４０歳

特徴／短い焦げ茶の髪を紳士的に整えてある。常に疲れていそう。

備考／現在ルネ・ヴィルトンの理事長で、カトレアの息子。エリーゼの兄。前の理事長が亡くなり、カトレアまでいなくなって、彼がこの学校を任された。彼にはそれほど作家的な才能は無く、どちらかといえば世界の歴史に興味があり、他の学校を卒業した。その後アメリカの大学で働いていたが、前理事長が亡くなり後を継ぐ。いい年頃が一番忙しかったせいで婚期を逃し、いまだに独身。父親譲りの温厚で小心な性格のため、学校のあらゆる問題に頭を抱え、たまに理事長室から抜け出す。その度にエリーゼに怒られている。

エリーゼ・オーディール

＊ルネ・ヴィルトン絵画科ヴィライアー主任／四年生実技指導教師の一人
＊現在３６歳

特徴／外ハネの肩までの茶髪。眼鏡をかけていて厳格そうな無表情。
備考／絵画科のヴィライアー主任であり、四年生の実技指導。常に厳格そうで、ちょっとやそっとでは笑わない。元々ルネ・ヴィルトンの学生で、ルネ・エメラルドであった。絵画の才能に恵まれ、将来を期待されていたが、自ら教師の道を選びそれに専念した。兄のサポートもこなし、この学校を取り巻くあらゆる問題にも深く関わっている。母カトレアがキクマサの師匠であるように、エリーゼもまたシャルロの師匠である。兄と同じく独身である。

リース・ラヴィーニ

＊ルネ・ヴィルトン絵画科ヴィライアー副任／一年生実技指導教師の一人
＊現在２４歳

特徴／常にジーンズとラフな格好。白に近い髪色。ヘルほどではないが軽く癖っ毛。
備考／去年まで助手であった新米教師。元ルネ・アクアマリンで今の五年生とは学生時代が一年かぶっている。そのためいまだに「先輩」と呼ばれる事がある。ヘルの叔父にあたり、有名なラヴィーニ家出身。しかし、兄弟の中で最も末っ子であり、甥っ子達と年代が近かったため、ラヴィーニ家としての注目はそれほど浴びる事は無かった。それでも彼は、それも自分の運命だと諦め、画家の道は選ばず教師になる事を選択。いまでは最も若い人気のある先生だ。しかし、女生徒の恋の悩みは多く聞くが、自分とのフラグが全く立たないのを嘆いている。

ガイル・アンドリュー

＊ルネ・ヴィルトン絵画科総主任
＊現在５６歳

特徴／ダリのような髭に、細長い体。丸い眼鏡に薄い頭。
備考／「よろし」「ですぞ」といった口調が目立つおじいちゃん先生。現場に出てくる事はあまり無くなってきたが、長くこの学校に居る実力者。リースと違って常に英国紳士的正装。影で“髭長おじさま”と呼ばれている。年の割に目新しいものにやたらと興味を示し、旅好き。ヴィライアーの主任であった遥か昔は、自身が一番研修に張り切っていた。妻がいたが、「ついていけない」と出て行かれる始末。

ネイリー・ドールマン

＊絵画科二年生実技指導教師の一人
＊現在３３歳

特徴／落ち着いた栗色の髪を下の方で結っている。
備考／キクマサ達の担任。上品で優しい、生徒思いの教師。日頃は穏やかだが、ルネ・コンの事件の時には身の危険を顧みずジェシカを取り押さえたり、いざと言うときは教師としての強さを見せる。今年、二年生から多くのヴィライアーが出た事を誇りに思っている一方で、ジェシカがあの様になって、酷く悲しんでいた。元ルネ・オパールで、今も作家活動を展開している。

＜生徒から、先生達への質問＞

Q1：どうして先生達って独身が多いんですか？

A1：「……何でって……何でって……ねえ？」（理事長）

A2：「……」（一同）

Q2：リース先生には彼女いますか？

A1：「堂々と答えたまえ。リース先生。」（理事長）

A2：「はい！！いません！！募集中です！！！」（リース）

A3：「……学校の生徒に手を出したら即刻退職です。分かってますね、リース先生。」（エリーゼ）

A4：「……（´・ω・`）」（リース）

Q3先生達ってどこに居るんですか？

A1：「理事長は中央棟の理事長室に居るけど、基本的に絵画科の先生は絵画棟の職員室にいます。」（ネイリー）

A2：「他の科の先生方も、それぞれの科に居られるのであって。

それは誠に、全然会う事がないのであって。そしてあまり仲良く無いのであって……。」（ガイル）

A３：「……ガイル先生、それは禁句です……」（ネイリー）

～まとめ～

絵画科だけでも、もっと多くの教師が居ますが、今の所表に出てきているのはこれくらいです。他科の先生達もいずれ出てくると思います。

ｌｄｒａｗ

66：我らが麗しきメルベリー嬢〈上〉

立てば芍薬座れば牡丹

歩く姿は百合の花

絵画科ルネ・ヴィライアーの副団長、メルベリー・セレネームを知らない者は居ない。

彼女の優雅な身のこなし、穏やかな口調、清楚で美しい姿は目を引く。そして、絵画科でありながら頭脳明晰、ピアノとヴァイオリンも得意。どこに出しても恥ずかしくないレディーであり、

誰もが認める“ミス・絵画科”である。

「あまりにお嬢様すぎて、お高い壁を感じるよ。一般庶民は」

ある連休の初日、二年生の男子で集まった寮の一部屋。同級生のレミオがそんな事を言っては、ルネ・ヴィルトン新聞に写るメルベリーの写真を見ていた。団長もいたけれど、とりあえずレミオの目には写っていなかった。

「ルナシーは？」

キクマサはＴＶと新聞を交互に見ながら、さりげなく質問。フォルテはもっぱらＴＶに集中している。

「そりゃあ、我らがルナシーちゃんも負けずにべっぴんだけど、メルベリー先輩は見た目だけじゃなくて、全てが清廉潔白と言うか。お育ちがいいんだよ、分かるかい？その態度とか、姿勢とか、教養とかね、お嬢様なんだよまさしく。ルナシーちゃんはもうちょっと親しみやすいだろ？とてもじゃないけど、ぼくぁ話もかけられないね、あの方には」

「……そういうものなんだ」

レミオの独特のいい分はさておき、確かにキクマサやフォルテも、それほど彼女と関わった事が無い。ルネ・ヴィライアーの副団長と言えど、彼女は基本的に団長の後ろで、静かにサポートをしている感じだ。

前のエジプトプランでも、この人と関わる事は無く終わった。

何と言うか、第一印象は“白”って感じの人。派手な感じではなく、まさに清楚というか。

いったいどういう人なんだろう。

絵画科棟の最上階、ルネ・ヴィライアーの大会議室の隣にある準備室が、実質ヴィライアーの幹部室となっていた。

団長ことハク・リュオンは、次の研修をどうやって進めようか、どこへ行って、どうしようかなどを、その部屋で模索するのである。五年生になると、卒業するための単位はだいたい取ってしまっている人が多く、割と時間に余裕がある。なので団長、副団長、団長補佐の三人は、授業が無かった時は基本的にここにいて、作業をしているのだ。

「次の研修は、ヴィライアーを二手に分けてか……。四、五年生が“中国研修”で、一、二、三年生が“日本研修”……。まあ、アジ

アだね」

「そうだ。だからこそ、次もカイには戻ってきてもらわねえと、誰が日本研修の指揮をとるんだか。あいつにはしっかり言っとけよ」

ティアンと団長は、次の研修について確認をしていた。その時、今までこの部屋にいなかったメルベリーが戻ってきて、

「先生との確認が取れました……。プランはこの通りで大丈夫だそうです」

そう言うと、資料をそっと団長の目の前に置いた。

団長は彼女をチラッと見て、「ご苦労」と一言だけ。

メルベリーは団長が資料を読み終わり、横に置くのを見計らって、いつもの様に紅茶を入れにいった。

彼女の入れる紅茶はおいしく、そこら辺のそれとは違う。団長はそれほどお茶にうるさくないが、彼女が入れるお茶はやはり格別だと思う。身内びいきだろうか。

今日はアールグレイのストレート。

「……あの……」

ふいにメルベリーが、お茶を飲んで休憩している団長とティアンに、

「少しよろしいでしょうか……」

「……何だ……」

いつもはまったく臆せず話しかけてくるのに、今日は少しためらいがちだ。ティアンも団長も、彼女の方を見る。

「明日、お二人は支部の方へ行かれるのですよね。」

「……ああ。親父が来ているからな。……お前は来ない方がいいぞ、あいつに絡まれるから」

「……」

何て事無く言う団長に、メルベリーは少々様子を伺っている。

「あの、それなら明日、お暇を頂きたいのですけれど……」

「……？　そんなの、俺たちに言わなくったって、好きに時間を使えばいいじゃないか」

「では、私一人で街へ出てもいいでしょうか……」

彼女がそう言葉にする直前、ティアンも団長も、ちょうどアールグレイを口に持って行った時だった。その上品な香りに満足して、優雅な気分に浸っていた時だ。

二人は、彼女の「一人で街に出る」と言う言葉に、せっかくのアールグレイを思いきり吹き出してしまった。

「だ、大丈夫ですか！？」

「ちょ……ゲホッ……おま、一人って……」

団長は器官に入った紅茶にむせつつ、苦しそうに声を絞り出す。ティアンなんて胸をドンドン叩いた後、血相を変えて。

「ダメダメ！！　何考えてるんだメルベリー！！　君、自分がいかに箱入りお嬢様か分かってるの！？」

「そ、そこまで言わなくてもいいじゃないですか……。私はもう子供じゃないんですよ…？　二人とも過保護過ぎじゃないですか……」

メルベリーは控えめに、彼ら二人の様子を伺った。二人はまだ苦しそうにしてたけれど、ティアンは気を取り直し、ハンカチで口を拭く。

「ダメだね。君に何かあったら、君の父親に怒られるのはこの僕！！　僕はね、君の父上を尊敬しても居るけれど、“苦手な人間ランキング”の五本指にも入るのだよ」

「私もです」

メルベリーは、自分の父親について言われているのにあっさり肯定。彼女の父親は、ティアンの叔父に当たるが、娘への溺愛ぶりは相当凄まじく、それは恐ろしいほど。あのティアンですら苦手と豪語するほどだ。

団長もメルベリーの父親については勿論知っている。その人のことを考えればやはり、メルベリーを一人で外に出すことは難しい。それでなくても彼女はお嬢様。どこで誰が狙ってくるかも分からない。

「……何も一人じゃなくてもいいじゃないか」

「最初はナギを誘おうと思ってたんですけど、彼女は今個展を開いているので……。忙しいのです」

「……ったく、あの女もつくづく使えねえな。……じゃあレッドは。あいつは暇だろ」

団長は腕を組んで、何とか彼女を一人で外出させまいとしていた。
とりあえず、誰でもいいからせめて誰かと一緒に。
しかし、メルベリーは“レッド”と聞いて、急に頬を染める。

「そ、そんな……レッドさんに迷惑はかけられません……！」

「……」

口では否定しているものの、何だその乙女の表情は。
団長もティアンも口を半開きで妙に冷めた目になって、

「あ、レッドはダメだな。うん。何かすっげえむかついたから」

「君は本当にレッドへのコンプレックスの塊だね」

こそこそ、二人で作戦会議。
メルベリーはゆっくりため息をついて、視線を落とす。

「……分かりました。一人では行きません。……だれか友人についてきてもらいます」

「そうしろ。ていうか、何の用があって街まで出るんだよ……」

「……それは……秘密です……」

メルベリーは団長から視線を逸らし気味に、小声で言った。団長は「何じゃそりゃ」と、かなりいかがわしそうだったが、メルベリーは長い髪を耳にかけながら軽く微笑むだけ。

「で、では私、そろそろ取っている授業があるので。……では……」

彼女はいつもの様に落ち着いた口調では無く、どこかよそよそしい。そそくさと逃げる様に、幹部室を抜ける。

これには団長もティアンも「……は？」と顔を見合わせ、

「何だあれ。……絶対なんか隠してるよな、あいつ」

「よそよそしいねえ。男でも出来たかな」

ティアンは冷静に、眼鏡を上げつつ考え込む。

しかし団長はそれこそ、再び冷めた紅茶を吹き出す勢いで、猛否定する。

「はあああ！！？　ダメだそんなの！！　そんなの俺が許さねえ！！！」

「何で君が怒るのさ。君は父親か。……ていうか、それが本当なら実の父親に殺されるな、僕ら……」

「……確かに……」

二人はメルベリーの出て行った扉をいまだに見つめながら、大きくため息。とはいえ、彼女ももういい年なのだから、当然プライベートに干渉する訳にもいかない。

悔しいが、ここは様子を見るしか無いだろう。しかしティアンはケータイを取り出し、

「……あ、ジャン？　明日、メルベリーが街へ行くかもしれないからさあ、とりあえずつけといて。……？　いや、送ったりしなくていいから。ていうかバレない様にね」

ためらいも無く、隙もない。団長は顔をしかめて、彼の行動に物申す。

「……おいおいマジかよ。……つーか誰だよジャンって」

「仕方ないだろ。明日彼女が誰とどこへ行こうが、何かあった後じゃ遅いだろ。……そしてジャンは僕んとこのボディーガードの一人です」

ティアンはケータイを閉じ、ひょうひょうとしている。

「ていうか、君はメルベリーの心配をしてる場合じゃないでしょ。明日君んとこの支部に行くんだから」

メルベリーのことに気を取られていた団長だが、彼ら二人にとっても明日は正念場だ。

「……ああ。……中国研修は親父の支援無しには実現しないからな。……はあ～頭痛い。本当最近思いやられることばかりだよ」

彼は椅子の背もたれに寄りかかり、天井を見上げた。四角いパネルの秩序の取れた視界は、やたらと気がめいる。

「……エジプト研修も結局、何だったか分からないしね。帰ってきたらガイドのセティさん雲隠れしてたし。先生達はしらばっくれてるし。……おまけに“鍵”まで没収されるとは……」

ティアンはわざとらしく首を振り、嘆いている割に諦め状態の薄ら笑い。

「結局“鍵”はどこへ行ったのやら。僕の情報力を持ってしても、途中からぷっつり……。お手上げだね。相手が見えてこないけれど、強大だってことは分かったよ」

机に肘を立て、指を組んでうなだれる。彼のこんな態度はあまり見ない。

「……僕らの努力とは何だったのか……」

「ぶっちゃけお前は何にもしてないけどな。言っとくけど」

エスカレートするティアンの文句に歯止めをかける様に、団長が突っ込みを入れる。エジプト研修で、団長は色々あったにしても、ティアンは結局取り残された側。

鍵を取ってきたのも二年生の活躍あってこそ。結局あの研修はきっかけにすぎないと言うことだ。

「ま……どうせすぐ次の研修あるしな。正直俺は、エジプト研修より遥かに心配だ、次の研修は」

「だから、明日の会合は大切ってことだろ……」

二人は、目の前の資料の束に記されている“中国研修”の文字を、

敵でも睨むような視線で。
団長、ティアン、メルベリーにとって、縁深い中国の地。ヨーロッパとは全く違う文明を築き上げ、文化を育んできた。
ヴィライアーとして、興味深い研修の地であるのは確か。

「……それにしてもメルベリー……気になるなあ……」

「まだ言うか。……むしろ僕たち、ストーカーに近いんだけど。過保護のレベル？　これ……」

団長は、空になったティーカップを視界に捕えて、淡々と人差し指で机を叩いていた。その、特に変わった所も無い資料の上から。
資料の文字は、あまりにもシンプル。
シンプル過ぎて想像もできない。次の研修がどうなるかなんて。

「中国ばかりに気を取られないでよ。日本研修だってどうなることやら。低学年しかいないし……心配心配」

ティアンはパソコンを操作しながら、次の“日本研修”の計画に取りかかり始める。中国がまとまった所で、日本もある。次の研修まで一ヶ月はあるが、もたもたしてられない。

心配と言っていた声が、あまりにもどうでも良さそうに聞こえたのはとりあえず流すとして。
団長は、指で机を叩くのをふいに止め、真剣なまなざしに戻す。
気を引き締めなければ。

ここでしっかりしなければ、団員全てを危険に晒すことになる。
俺の、俺たちの判断のせいで。

エジプト研修のような、誰かが死んだかもしれない、殺されたかもしれない、と言うような思いはもうまっぴらだ。

それでも、危険の先に美しいものがあるのなら、

そこに行かなくてはならないのも俺たちだ。

l
d
r
a
w

67：我らが麗しきメルベリー嬢〈中〉

大切なものを考えた時

それは何かを得て、何かを捨てた時

団長のことを、今回ばかりはハク・リュオンと意識しよう。

彼は約二十年前、中国の大きな会社の一人息子として生まれ、手塩をかけて育てられた。

会社と言うよりはいわゆる“マフィア”な組織で、表向きは海運業者。しかし裏の世界では名の知れた力のある組織である。そして、何といっても有名なのは代々社長が美術品好きと言う所にあり、目を付けたお宝は何が何んでも手に入れる。いわゆるコレクターなのだ。

組織の名を“黒龍会”

中国の由緒ある家柄の出自である。

たかが美術品。されど美術品。

美術品のコレクターをボスに持つマフィアは意外に多い。それは敵の数でもある。様々な理由でマフィア間の抗争は起こるが、黒龍会にとっては美術品の流動においての抗争が最も多い。オークションにおいて金を積みすぎて自爆する組織もあれば、手に入れた美術品を裏で横取りされることもある。一つの美術品は、時に人間より重い扱いを受け、時に淡い喜びと、深い絶望を与える。

リュオンとティアンは、共に引き締まった表情だった。

今ばかりはヴィライアーの幹部ではなく、やはり、裏の世界の関係者なのだから。

学校の中に居ると分からなくなる。

自分たちの未来が。

「で、君たちが私に言いたいことはそれだけかい？」

二人の目の前に居る、背が高く黒髪オールバックの東洋人は、目元にしわを絶やさず、終始ピリピリしていた彼らを観察しているようだった。

「ああ…。俺たちの用件はそれだけだ」

リュオンは目の前の、自分にそっくりなその男を警戒しながら、淡

々と話を進めていった。しかしその男は頷きながら、胡散臭くもにっこりと笑う。

「リュオンの頼みだったら、何だって聞くさ。それにしても、見れば見るほど私にそっくりだねえ、さすが我が息子。ティアン、君もそう思わないかい？」

「ええ。瓜二つですよボスと」

ティアンは至って冷静に、眼鏡を粋に光らせて肯定。

リュオンはあからさまに嫌そうにしているが、どう見たって彼らはそっくりだった。違うのは表情くらい。

ここは黒龍会のギリシア支部。何の用があるのか知らないが、ボスはここを訪れた。

リュオンの父親である、ハク・リュウエンだ。

「ところで今日はメルベリーさんが見えないね」

「……あまり、あいつを関わらせない方がいいと思ってな。ティアンのいとことはいえ、普通のお嬢さんだ」

「……もったいないねえ」

ハク・リュウエンは、何が言いたいのか意味深に頷いて、席をゆっくり立った。

「すまないが、そろそろ私も忙しい。君たちの用件は分かった。改めて連絡させよう」

彼は側の御付きと共に、彼らの横を通りすぎた。御付きの者は「では…失礼しますリュオン様」と頭を下げて、静かに退出する。

ボスのいなくなった部屋は、緊張感の籠ったお香の香り。

リュオンにとってはなじみ深い香りだった。

メルベリーは一人、アテネの都心に来ていた。彼女は元々友人と来るつもりは無く、一人でこの街へ来てみたかった。

彼女のことを話すとすれば、ティアンのいとこ。しかし、ティアンの家の会社と、彼女の家の会社は、同じ系列とはいえ違う。セレネーム家にお嫁に行ったのが、彼女の母親と言う訳だ。

レーゼス家とハク家の繋がりは、三代ほど前から。ティアンとリュオンの繋がりは、生まれた時からと言っても良い。しかしメルベリーとリュオンの繋がりは、ルネ・ヴィルトンに入学してからだ。

たまたま、彼女がティアンのいとこであったにすぎない。

彼女は、ここ最近思う所があった。幼い頃から両親に大切に育てられ、何不自由無く行きてきた自分は、これからどう生きていけばいいのか。一人の人間として、どう自立していけばいいのか。

今はもう五年生。卒業後のことを考えなければならない。

彼女にとって、ルネ・ヴィルトンの生活は斬新極まりなく、ティアンやリュオンの手伝いをすることで、自分にも出来ることがあるのだと知った。それがいったい、どんな事だとしても。

人々が行き交う都会のにぎわい。一人でこんな所へ来るなんて、昔の自分だったら考えもつかなかった。

彼女はどこへ行きたかった訳では無い。目的は無くても、どこへ行きたいか、見つけたかったのかもしれない。

歴史を感じさせる空気は、ギリシア独特の物。そこに多く存在する人々を、当たり前のような不思議な感覚で見送る。我々の営み、発展、衰退。

その時ふと、彼女は目的の場所を見いだした。

今、とても行きたいと思った場所がある。

今まで穏やかだった足取りが、急に早くなった。

リュオンとティアンは、黒龍会のギリシア支部の、とある別室でゆっくりしていた。さっきまでピリピリしていたからかもしれない。

出されたジャスミンティーが、体にしみる。

「それにしても親父、全然元気そうだな」

「ええ。それはもう。いつもリュオン様のことを気にかけておいでです」

「それはそれで気持ち悪い気もするけどな」

ティアンとリュオンにお茶を出した、品のある老人は、リュオンにとってもなじみのある人物であった。彼らが生まれた時から世話になっているマ・コクセイという。

「それにしても、ボスは一体何の用事でここに来たんだろう。中国まで行く手間が省けたからいいんだけど」

「さあな。どうせ、欲しい物でもあったんだろ」

「ボスだってそんな、遊んでばっかりな訳じゃないんだから……」

ティアンですら、それを探ることは自重する。

跡取りであるリュオンですら、〈黒龍会〉という組織が、今、いったい何をしているのか分からないのだから。

そんな、とりあえず一段落の付いた時だった。

ティアンのケータイのバイブ音が聞こえる。彼は「はいはい」と面倒くさげにケータイを取り出し、耳に当てる。

「なに、ジャン。……はい？」

「……？」

ティアンの顔色が、急に変わった。険しいような、あっけにとられたような顔をしている。

「……なにいいい

案の定彼女は、今日1日は雲隠れしたいらしい。

「あいつもたまに変なことするよな。いいじゃねーか、もう放っておいてやれよ。子供じゃねーんだから」

「ダメダメ！！　嫁入り前の彼女に何かあったら大問題だ。リュオン、君なら分かるだろ。大きな会社の行く末のために、僕らに自由は無い。メルベリーはね、卒業したら、知らないような男と婚約させられるんだ。会社の為にね。そしてそれが運命だ。」

「……会社の為に…かい。それってお前の会社だろ」

リュオンは、彼の思惑を否定出来るような立場では無かった。自分だって一企業の跡取りだ。恋愛結婚なんて夢の話にすぎない。そしてそんなもの、望んですらいないから。

リュオンとティアンは、急いで車に乗り込んだ。運転手付きとかにしたら、安全性がどうとか言い出してキリがないから、この際自分たちで運転。

「僕はね、普通免許は持ってるんだ」

何の免許も持っていない、取る必要も無いと思っていたリュオンは、この時ばかりはティアンの上から目線に歯を食いしばる。

「いいから早くしろよ!!　てかどうやってメルベリー探すんだ」

「ふっ。見くびらないでくれたまへ。メルベリーのケータイにはＧＰＳ機能がついている。僕には彼女がどこにいるのか、常に分かるのさ。そしてその事を彼女は知らない」

「怖あああ!!　お前めちゃくちゃ怖いぞ!!　ストーカーのレベルを超え始めた気がする!!」

悪寒の走る背筋をピンとさせて、リュオンは助手席で、やむを得ずＧＰＳ機能を扱っていた。ティアンのケータイで。

それにしても恐ろしいまでの執着心だ。どこのどいつがどうなろうと知ったことかと、いつもの彼なら言うのだろうが。いとことなると、こうも扱いの違うものなのか。

それともただ単に、自分の利益に関わる存在だからだろうか。

勢いよく発車された、優雅な扱いとは程遠い黒ベンツ。

「見よ!!　僕のドラテクを!!」

荒いが巧みなテクニックで、高層ビルのジャングルを抜ける。

いったい、何を考えて、何を思ってメルベリーが一人街へ出向いたのかは分からない。

しかし彼女が、愚かな行動をしているとも思えない。

ＧＰＳが示す場所は、ここからそう遠くない、でも近いとも言えない場所であった。リュオンが驚いたのは、その場所が、予想外でありながら思い当たる事もある場所だったから。

夕日が、傾き始めた時間。太陽と共に吸い込まれていくような雲の流れ。

あの場所は、自分達の始まりの場所と言っても良い。

―ｄｒａｗ

68：我らが麗しきメルベリー嬢〈下〉

自分が探しに来たもの

過去に望んでいたものと、今の願いの類似点

アクロポリス展望台から見下ろすアテネの街と、たくさんの歴史の跡。

彼女の視線はそれらを熱心に見下ろすというよりも、焦点の合わないそのむこうを見ているようだった。

観光地なだけあって、人の流動が激しい。しかし、メルベリーの耳に入ってものは何もなく、ただじっと考えていた。

考えるために、ここへ来たのだから。

四年前。自分たちが入学したてのころ、私は初めてここへ訪れた。

ギリシアという国をこの時まで何一つ分かっていなかったのだと思い知らされた瞬間。

衝動的な感動を今でも感じ取れる。

それは、私だけではなくリュオンもティアンも。あの時、ただ何となく訪れたこの場所から、何一つ分かっていなかった私たちの五年間は始まった。

絵を描くのが好き。それを極めたい。という時、最高峰の学校として候補に上げられるのは、いくつかある。ここ、ギリシアのルネ・ヴィルトンと、パリのシャトールル美術学校。そしてアメリカのグリーベイル美術学校だ。

その中で、このルネ・ヴィルトンを選んだのは些細なきっかけだった。いとこのティアンに勧められた、ただそれだけ。

ただ、それだけだったのだ。

「メルベリーは何のつもりでここへ来たのだろう」

展望台を昇るエレベーターの中で、ティアンは不思議そうな顔をしていた。

「こんな所へ一人で訪れることに、彼女はどんなメリットを求めているのだろう。そもそも彼女らしくもない」

「そんなこと、メルベリーにしか分からないだろ」

リュオンは腕を組んで、落ち着き払ってそう言うものの、やはり彼女の思考が気になった。今まで、自ら何かの行動を起こそうとしたこともなく、またその必要もないのがメルベリーである。ではなぜ、俺たち二人を騙してまでここへやってきたのか。

「……やはり男だろうか…ここで逢い引きしているんじゃないだろうか」

「もしそう言う場面に出くわしても、取り乱すなよティアン」

頭を抱え出しそうなティアンを横目に、リュオンはため息をついた。ここで何を言っても仕方がないが、“男ができた”説が有力な気がする。そもそもメルベリーに、今までそう言う話が出てこなかったことが不思議なのだ。

それでも彼女に、恋愛結婚は無いと決められている。

「ああ……どこぞの馬の骨がメルベリーをたぶらかしているとしたら、それは一族総出の大問題に発展しかねない。いや、と言うより僕がそうする。間違いない」

「妄言がすぎるぞ、おい。大丈夫か？」

高い展望台を昇っていく、その浮遊した感覚の中で、ティアンもまた淡々とした怒りを高めていた。何の根拠も無いのに、心配故か、

執着故か、妄想で先を読む。

相変わらず、ティアンにとってメルベリーはどういった存在なのか分からない。

リュオンだって、もしメルベリーに男でもできていたら、何ともいえずに寂しい気持ちになるのだろうなと予感はしている。

夕日のよく映えるこの街を、いつまでも見ていられたらいいのに。

そして、吸い込んでしまえばいい。

私を。

私を取り巻く、私の世界を一緒に連れて。

あと一年足らずで終わる、今の生活を、私は仕様がないと思いたくはなかった。

ティアンやリュオンと共に居ると、今まで何もなく生きてきていた私自身が嘘だったみたいに、今の私が好きになれた。

ただ、御綺麗のまま、何不自由無く生きているより、少し闇のある世界に片足をつけて、それでも見失わない彼らの信念を、私も共に担うのだ。

大企業の跡取りでありながら、リュオンを立てるティアン。
そして、率いるものとしての才能、カリスマ性を持ち合わせ、それでも奢らず努力するリュオンに魅せられた者はきっと多い。少ないけど、多い。

多くの者に評価され無くったって、少しの者が、それでも彼のために動くのだ。

私はきっと、卒業したら、またあの平和で不自由の無い生活に戻されるのだろう。

ガラス張りの展望台を、手のひらをつけて強く押す。
微動だにしないのは当然だが、私は力を込めていた。

ここに来たのはいうまでもない。

心の中にある、卒業への恐れを確実にしたかった。
確実にして、だからこそ私が何をしたいのか見つけたかった。

ああ。
夕日が沈んでいく。

「メルベリー！！！」

突然、時を止めるような、私の名を呼ぶ声。
メルベリーはガラスに付く手を離し、近づいてくる足音の方を振り返った。

「リュオン……ティアン……！」

当然、自分が彼らを騙してここへやってきたことを今更否定はしないが、まさか。
まさか彼らがやって来るとは思わなかった。

メルベリーは、もの凄い形相で近づいてくる二人から、スー…と斜め下に視線を逸らす。

「どーゆーことですかね、これは」

ティアンはわざとらしく、眼鏡を押し上げつつ問いかける。

「まさかまさか？　君が？　この僕を欺くとは心外っていうか？　さあ言うんだメルベリー！！　君はいったい誰とここに居るんだ！！」

「……え！？」

「お、おい、ティアン。あまり熱くなるなよ」

リュオンはとりあえず、周りの目を気にしつつ、珍しくと言うか相

変わらずと言うか熱くなってる彼に忠告する。
メルベリーは目をぱちくりさせ、首をそっと傾ける。

「す、すいません。…私、誰とも一緒に来ませんでした。すいません」

「なあんだとおお!!　うそをつけ!!　探すんだここら辺で怪しい男を!!」

「だ、か、ら!!　うるせえんだよ貴様はさっきから!!」

あたりを険しく見渡しているティアンは、なんかもう色々残念だが、この域まで来るともはやなんなのだろう。リュオンは、自分がこんなにまともなポジションを担当していることに違和感を感じながらも、ドン引きしているメルベリーに向き直った。

「おい。お前、本当に一人で来たんだな」

「え?……は、はい。……そのことを怒っているのではないのですか?」

「……い、いや……ははっ……」

リュオンは何かを誤摩化す様に、彼女から視線を逸らし、まさか自分たちが勝手に“男ができた”などと妄想していた事を言えるはずがなかった。メルベリーの、このきょとんとした顔と言ったら。こいつは本当に一人で来たのだろう。

ただ、だとしたら彼女は、なぜこのような場所に来たのだろう。
リュオンは、ガラス張りの窓からのぞく、このギリシアの一瞬を垣

間見た。

“過去の残像”

この先ずっと、切れない縁を保ちたいと思う者だけが、

そう心がければいい

偶然見た、この世界の一瞬の美しさを、永遠に忘れないと言うのなら

／終わり

「……あ……」

リュオンは、めくるめくオレンジの空気の色に、ほんの少しの間、四年前の事を思い出していた。
まだ、入学して間もないあの頃の自分達。メルベリーとは出会ったばかりで、何ともたどたどしい関係であった時。

自分がここで、いつかの俺に誓った事は何だっただろう。

「……懐かしいと思いませんか。あの日も、こんなに美しい夕日だった。私はあのとき、直感的に感じたんですよ。きっとまたいつか、ここで、私たち三人で同じ物を見る日が来るだろうって」

「……」

さっきまで騒がしかったティアンは、いつの間にか落ち着き、静かになっていた。
メルベリーの頬をそのオレンジに染める、夕日の煌めきを、ただ三人で見ている。

「私は、まさかあなた方がここへ来るとは思っても見ませんでした。それでもやっぱり、私たちはここへ来るのですね……」

あのとき、ここで、それぞれの胸の奥に語り、誓った事を今更ほじくり返し、そして戒める。

私たちの関係に、再びうねりを生み出すために。

「何だ。結局僕らはただのピエロじゃないか」

「お前が一人踊らされて、無駄にテンションが高かっただけだがな」

三人は、並んで駐車場まで歩いていた。メルベリーはくすくす笑っていたが、多分本人は色々分かってないだろう。

「ティアンが運転してきたんですか？」

「そうだよ。この中で免許を持っているのは僕だけだからね。全く、本当に君は、いったい何しにここへ来たんだい」

「……はっきりとした目的がなくても、足が向かう場所ってあるでしょう？　一人で考えたい事があったんです。とても一人にはさせてもらえませんでしたけど」

「はいはい。悪かったね、ほんと」

きっと、ティアンは悪かったなんて微塵も思っていないだろうが、彼女は俺たちがどうしてここへ来て、ストーカーみたいな真似までしたのか聞かなかったし、それを責めもしなかった。

いつも通りの関係だ。

「すっかり夜だ。どこか良い所で飯でも食って帰ろうぜ」

リュオンは助手席に座ると、窓を目一杯開けた。

夜の街に飛び出す、一台の車と、車内に流れ込むとても生温い風。

生温いけど少し冷たい。

ここらへんのネオンの光は、大都会の摩天楼と言うほどではないが、十分に心ざわめく。

夜の訪れは、タイムリミットを感じさせる。

ldraw

69：お茶の間のカイ・ヴォストン

いつからだろう

“美術品”が見える様になったのは

メルベリー嬢への憧れを云々と語るレミオをよそに、キクマサはそろそろ、フォルテが熱心にテレビの画面に食いついているのが気になった。

「どうした。今日何かあるの？」

「え？　そりゃあ、今から、特番があるんだよ。“秘宝・鑑定団スペシャル”だ」

「……」

キクマサは、一瞬「はい？」という反応であったが、すぐにピンと来た。いま、このギリシア、はたまたヨーロッパをまたぐほどの鑑定ブーム。そして、それを引き起こした若き鑑定士。

「カイ先輩！！」

「ピーンポーン。今日はカイ先輩、五人の鑑定士の一人として呼ばれてるんだ。ほんと、忙しいお人だよね」

フォルテは、何だか瞳をキラキラさせて、番組が始まるのを今か今かと待っている。

エジプトプラン以来、フォルテはすっかりカイ先輩に憧れを持っている様だった。お互い美術品や歴史に詳しいし、何かと話が合うのだろう。

レミオは、猫っ口をフニャンとさせると新聞をぱらぱらめくった。

「カイ・ヴォストンか。先輩っていうか、もう一芸能人の域だから、どうも遠い人に思えて仕方ないけど。ほら、新聞にも載ってるよ。“鑑定王子の素顔に迫る”ってね」

キクマサは、“鑑定王子”という、一種のブームを引き起こした単語を、まじまじと見ていた。

厳かな音楽とともに始まった、その特番のメンバーに彼はいた。もともとこの番組の準レギュラーなのだが、何しろ彼は忙しいし、他の番組にも出ている。本だって出している。そして、ここルネ・ヴィルトンの学生であり、ルネ・ヴィライアーなのだ。かろうじて両立している彼の毎日を考えるだけで、胃が痛くなりそうだ。

「はい、　今週も始まりました、秘宝・鑑定団！！　　今夜は二時間スペシャルでお送りしております！！」

司会の軽快な挨拶から始まり、ゲストの芸能人が紹介される。しかし、その見目麗しい芸能人でも、見た目はどこにでもいそうな青年のカイにはＣＭのギャラが遠く及ばない。カイ・ヴォストンとはそれほどにお茶の間に浸透している一種のスターなのである。

「今夜は何とですね、カイ先生にもおこし頂いてるんですよ。メリアちゃん、本物のカイ先生ですよ！！」

司会の男が、芸能人サイドにいたアイドルらしい女の子に、カイについて投げかける。そのとき抜かれたカイの映像が、何だか苦笑いしている様に見えて面白い。

「私、もうほんっっっとうにカイ先生に会いたかったんですよ～。だって、カイ先生って、私と同じ歳なのに“先生”なんですよ。もうかっこいいじゃないですか～。何っていうか、もう背景がミントグリーンの風、みたいな～。それに私、美術館とか行くの好きで～、本当に一度会ってみたかったんです！！」

必死なのか、天然なのか、やたらとオーバーな発言っぷりに芸能人サイドは盛り上がっているが、厳格そうな鑑定士サイドは冷ややかな笑いだった。このようなアイドルが美術品になど興味が無いのは百も承知だが。

カイは居たたまれないような表情だった。

紺のスーツを着て、席の前の机で指を組むそれが、そわそわしい。

「カイ先生聞きました？　メリアちゃんみたいな可愛いアイドルがこんな風に言ってくれたら、正直嬉しいでしょう？」

「……あ、は、はい。そりゃあ……ねえ」

「何ですか、その反応はー！！　メリアちゃん泣きそうですよー！！！」

すかさず悲しそうな顔を作るメリアに、会場は大爆笑だったが、カイは慌てて、

「いいや、びっくりしただけです。本当に。だって、ほら、芸能人の方達なんて雲の上の人たちですから」

一間置いて「眩し過ぎて」と付け加えた。

さすがにＴＶ慣れしていると言うか、カイ先輩は相変わらずカイ先輩であったが、選ぶ言葉が差し障りなく絶妙。

謙虚な態度と清潔感が、彼の売りだ。

ＴＶの中のカイ先輩は、やはりオーラがあった。引きつけられるスター性が。

番組の中盤、贋作と本物を見極めるコーナーで、カイの本領発揮をみる事ができた。

「毎回このコーナーがあるけど、今回どなたがします？」

「やはりここは、エースのカイ先生でしょう」

「えええええ！！！　ミハエル先生！！　僕ですかあああ！！？」

割と壮年の、眼鏡をかけた四角い顔の名物鑑定士ミハエル先生が、一つ越しのカイを指名した。他の鑑定士もニヤニヤ笑いながら、「ほらほら」と若いカイを促す。

「カイちゃん若いんだから、私たちの荷物を持たなくてはね」

紅一点の中年女性鑑定士が、フリルの付いた扇子をはためかせ、カイをいじる。

この、いわゆるベテラン鑑定士の中で、カイが孫のような扱いを受ける関係性も、“鑑定番組”のブームを手伝った。

微笑ましいとか、見ていて和むとか。

カイは渋々前へ出て、カーテンのかかって見えない“何か”と向き合った。

「では、カイ先生、本物を当ててくださいね。これいつも皆さん手こずるんですよねえ」

「普通、鑑定って言うのは時間をかけてやりますからね。ベテランの鑑定士でも、早見は難しいですよ」

ミハエル先生は前のめりになって、前もって補足。

赤いカーテンが、すっと降ろされた時、その場にあった物は二つの絵画。
それを目にした瞬間、何だか、カイの瞳が色を変えた。

いつものカイ先輩ではない。鑑定士の瞳だ。
キクマサは、ＴＶ越しであれ、初めて見るこのような表情のカイに息を飲んだ。

「右が贋作です。まるで違います」

たった、数秒、これらの絵画を見比べただけだった。カイは、何も問題はないと言うような穏やかな口調でそう言いきった。一般人が見ても、何も変わる所が無さそうな、その二枚の天使の絵を。

他の鑑定士達も、生唾を飲む様に、彼をじっと見ていた。

「……正解です。驚きの早さですね。信じられません」

司会の男は、瞳を輝かせている。

「ウィリアム・ブグローの絵画は繊細です。贋作とはいえ、タッチの流れや光の違いを読めば分かります」

カイは、そう説明した後、再びまじまじとその絵画を見つめた。一般人から言わせれば、そんな事言われてもって感じだろうが、さすがにプロだ。

しかし、カイを送り出した鑑定士達も、あっけにとられたり、流石と頷いたり、険しい顔をしている者も居る。

カイはその後も、五つほど早見鑑定を行い、全問五秒以内で正解した。そして、それぞれを細かく説明する。

その姿を見ると、やはりカイが、こうも人気を博した理由がよくわかる。

「凄すぎるぜ、カイ先輩。ヴィライアーの中じゃあ目立とうとしないけど、やっぱりプロは違うなあ。ＴＶの中の先輩の方が生き生きしてるよね。天職なんだろうなあ……」

「……先輩、どうしてあんなにすぐ分かるんだろう」

関心しきっているフォルテをよそに、キクマサは、鑑定を行う前のカイの表情を思い返していた。

確かに、鑑定する上での知識や技術は持っているのだろうが、それ以前に彼は、“美術品”に何かを見いだしている様に思えた。

彼の瞳は、それを目の前にした時、やはり一瞬色を変える。光を得る。

「流石はカイだ。あれには美術品が克明に見えている」

今日、同じ番組に出演したミハエル先生は、楽屋で、冴えない準レギュラーの鑑定士とタバコを吸っていた。

「あれ、本当に分かってたんですか？　ＴＶサイドが番組を盛り上げるために、答えを教えてたんじゃないですか？」

「……はは……」

ミハエルは、灰皿にこんこんとタバコをたたき、再び口へ持って行く。

とても、残念そうな顔をして。

「君には何も見えてはいないようだね。それでもいっぱしの鑑定士なのだから、相当な努力をしたのだろうけれど。それもある意味素晴らしい事だけれどね」

「……見えるって……何がですか？」

「……」

冴えない鑑定士は顔をしかめる。

何も答えないミハエルは、やはり残念そうに首を傾げると、短くなったタバコをじりじりと灰皿に押しつぶした。

微かにくすぶる火の粉は、立ち上がる煙を見送る。

「カイは紛れもなく天才さ。生まれ持った、その瞳故にね」

そう。

それは、鑑定士の世界では、昔は当然の様に知られていた瞳の力。

熟年の鑑定士の中には、ほんの微かだが“それ”を見いだせる者も多いと言うのに。

名作

一流の作家の作品

美術品の持つ魅惑のオーラ

その、内に秘めた魔力を見いだす事ができる彼の瞳は、間違いなく“特別”だった。

ldraw

70：二人の天才の起承転…

目標とは何だろう

高見とはどこまでだろう

目に見える結果を求めるより

君と共に、その先まで行ってみたい

「号外!!　ルネ・オパールが最優秀新人賞受賞!!　ルネ・アンバーは新人賞!!!!」

そんな新聞が出回ったのは、キクマサ達がちょうどお昼を食べてい

た時だった。食堂がざわつき、新聞を配っている少年に群がる。

「ヒュー、すっげえ！！　ルネ・ヴィルトンですら二十年前に取った新人賞が最高なのに。さすがこの学校の二枚看板だ」

二年に一度の世界規模のコンテスト。ヨーロピアン・アート・グランプリは、それだけ注目される、アート界のオリンピックであった。初めて受賞する者たちは必然的に新人賞までであるので、ルネ・ヴィルトンの生徒にとっては、最優秀新人賞は最高の称号である。そもそも、学生が取れるような賞ではないのだ。フォルテはパンプキンパイを飲み込む前に、興奮を抑えられないようだった。

「羨ましいなあ。これには四、五年生からしか出せないから、私たちはまた二年後なのね」

レイは、一気に沸騰した食堂を、恨めしそうに見流す。
ギリシアの小さなコンテストで賞を取ったりするニュースは、ヴィライアーであれ、そうでなかれたびたび耳にするが、今回のコンテストはとりあえず規模が違う。

スノー先輩。シャルロ先輩。

この二人はやはり、ヴィライアーの中でも群を抜くアーティスト。特にスノー先輩はこの学校の歴史を塗り替えたとも言える。

「素晴らしいわね。こういうとき、やっぱり同じヴィライアーでも圧倒的差を感じてしまうわ」

「仕様がないよ。あの二人は“別次元”だもん。それより、悔しいだろうなあ、他の先輩達。学生なんだから、一次選考落ちが当然と

言えば当然なのに、側に賞取っちゃう人がいたらね」

ルナシーが、憧れ混じりのため息をつく。それはそうだ。いくらヴィライアーと同列に並べられても、外に出たら差が出てしまう。

黄金期と言われた四年生のうち、それでも賞を取れたのは二人だ。

四、五年生のヴィライアーのうち、応募したのがティアン以外の九人で、最終審査まで残ったのが四人。ノミネートまで残ったのが三人。そして、賞を取ったのが二人である。

しかし、ここ五年間誰一人ノミネートに残らなかった事実をふまえ、それだけでも大変価値のある事である。

学生の身なのだから、ほとんどが一次にふるい落とされるのが当たり前であるのに、まさかの二人が受賞した。

今回、最優秀新人賞が一人で新人賞が五人であるが、その中の学生は三人である。

「ま、俺たちの中で間違って受賞があるとしたら、まああの二人だろうなとは思ってたけど。その通りでした」

授賞式の客席に、惜しくも受賞しませんでした四・五年生のメンツが並んで、式が始まるのを見ていた。

「だから、そう気を落とすなってリオ。お前は最終審査までは残ったんだから。俺とシーダなんて一次落ちだぜ」

フレイは、どよんとした暗いオーラを纏ったリオに、気のきかない慰めを。

リオはしらっとフレイを見て、あっさりとした言葉を作る。

「僕だって満足しているさ。勿論、今の実力で受賞出来るなんて思っていなかったし…。ただ、やっぱり実力の差を思い知ったっていうか。どう頑張ってもなかなか、あの二人を超えるのは難しいらしい……」

「……」

それは、リオだけでなく、他の全員が思っていた事だった。

ノミネートまでこぎ着けたレッドだって、当然その素晴らしい実績は変わらないが、受賞者が居るだけでそれは霞み、悔しさになる。

彼は特に、悔しさを全面に出してはなかったが、当然悔しかったのだろう。

悔しくない者なんていない。自分の分身であり我が子である絵を、はっきりとした判断基準のない世界で、それでも必ず評価される。

順位がつけられる。

「見なよあのシャルロの不服そうな顔。ありゃ、よっぽど悔しかったんだね。スノーが自分より良い賞を取ったから」

「相変わらず、シャルロはスノーに負けたくないんだね…」

「贅沢な話だわ。まあ、負けず嫌いのあの子らしいけど」

四年生の、フレイ、リオ、シーダは、授賞式の様子を小声で語る。きらびやかな祭典の、その表彰台の上で、彼らは順番に表彰されていく。表彰された者たちは、少なからず嬉しそうだが、シャルロだけはむすっとしていた。せっかく頂いた名誉ある賞なのだから、愛想良く笑っておけばいいものの。

新人賞シリーズ最高タイトルである、ヨーロピアン・アート・グランプリの最優秀新人賞として、最後に表彰されたのはスノーだった。彼は、今までも数々の賞を受賞してきただけに、名の知れた一画家だ。当然彼を贔屓にしている愛好家も居るし、スポンサーだっている。そもそも彼は、ロズベルト美術学院という最大のパトロンが付いている。彼の家が営む美術予備校だった。

しかし彼は、その賞をいつもの様に、淡々と受け取るのだ。嬉しいのか嬉しくないのか、全く読めないその表情で。会場は拍手に包ま

れ、誰もが彼を讃える。シャルロだってむすっとしていたが、最優秀新人賞が自分でないならば、スノーであるべきだと、彼女だからこそ思っていたのだろう。

たかが賞、されど賞。スノーにとって、受賞すると言う事がどのような価値を持っているのか。

授賞式が終わり、専門家による講評会が行われた。この絵画が、なぜ受賞に至ったのかを説明される貴重な場である。

褒められたり、批判されたり、場合によっては不本意な事を言われたりもする。たとえ受賞していたって、専門家の中には批判が好きな人だっているから。

シャルロやスノーは受賞してきた回数も多いし、それなりに名の知れた若手である。しかしその分、批判される事だって少なくはなかった。何と言っても、見る人によっては見方の変わる、万華鏡のような美術の世界である。見る人の趣味もあるし、素人目に受けの良い絵画、玄人目に受けの良い絵画も違ってくる。

答えの無い世界であり、答えを創っていく世界なのだ。

だからこそ色々な意見を聞いて、考えていかなくてはいけない。

まず始めに、スノーの最優秀賞作品「月面」についてだった。ぼこぼこしたテクスチャーの中に、薄く細かい描写部分のある、淡い斬新な絵画。特に何を描いたと言う訳ではないが、その表面は題名の様に月の表にも思える。

最初の専門家はそこを指摘した後、この絵画が魅せる空間性と、今後の展望について語る。

「たった、この四角の中だけの世界なのです。しかし、我々はその先の、そのもっと広い範囲の“空間”を見ている様な気になる。というのも、この表面のマチエールと、薄く描き込んだ部分の高さの差が、周りに響いてきていると言う事ですね。計算された構図です。こうでなければこの技法は生きなかったと、言い聞かされるほどの説得力がこの絵にはある」

彼の講評は面白いものだった。簡潔であるが、自分の気持ちだけでなく、客観的に絵画を見ている様に思う。スノーは褒められても特に表情を変えずに、いつもの様に淡々としていた。

続く講評もとても実のある内容であった。褒める所は褒め、厳しい所は理由をつけて指摘をする。

そうであればとても、聞いていて納得のいくものである。

ただ、問題は四人目の講評であった。

「では、次はブライエン・マルティン先生です」

この評論家の名前が出てきた時、その場にいたルネ・ヴィライアーは皆一同に身を強ばらせた。

「……でーたーよ。マルティン……」

フレイは小声で、隣にいたリオに耳打ちをする。とても良いイメージを浮かべるとは思えない、嫌そうな声で。

リオも、ゆっくり頷き、心配そうな表情で彼の言葉を待った。

ブライエン・マルティンは、丸々した体を揺らし、獲物を捕らえるような瞳で、スノーを視界に収める。スノーはしれっとしたまま、相変わらずの態度だ。

「えへん。……ま、こうなる事は予測していましたよ。彼が今まで積み上げてきた実績と評価を見ればね。スノーフリーク・ロ　ズ　ベ　ル　ト　ですからね。有名なロ　ズ　ベ　ル　ト　家のお坊ちゃん。たとえ今回の彼の絵画が月並みであろうと、その結果は変わらなかったでしょう。確かに彼の絵画は素晴らしかった。しかしね、正直に言うと、果たして最優秀新人賞を取るほどの作品であったかは疑問なのですよ」

彼は半分身を乗り出して、ねっとりとした口調で語り出した。

その言葉に、他の評論家は眉根を潜め、会場は心無しかザワザワしている。スノーだけが最も落ち着いていたのかもしれない。

「ほらきた。ヴィライアー嫌いのマルティンが。最近スノーを目の敵にしてるからな。自分がシャトールルの出身なもんだから、ヴィライアーに何らかのトラウマがあるんだぜ」

「……でも今は一様、あれで有名な評論家なんだから。美術界の重鎮の一人さ。彼に逆らったらこの世界を生きていけないとも言われてるよ。スノーだって割り切って聞いてるだろ。……いや、聞いてないのかもしれないけど……。耐えるしか無いんだよ」

リオはそんな事を言いながらも、かなりハラハラしているようだった。無理も無い。

ここに居るヴィライアーは何かしら、このマルティンに酷評をされ、苦い思い出を植え付けられてきたからだ。

スノーなんて、これで何回目だ、と言うくらいだ。

しかし、そんな酷評を受け入れながら、それでも制作をしていかなければいけないのだ。

他の評論家だって、他人の評価に口出しは、早々出来やしないから。

「そもそも、強いインパクトを感じないし、技法が殺されている様にも見えるのでね。いや、これが良いと言う人もいるようだが、私には死んだ絵にしか見えやしない。これなら新人賞のセルギー・ブレジナの方がよっぽど魅力的だ。彼の方が最優秀賞にふさわしいインパクトと情熱を感じる。君のその淡々とした物静かな姿勢には、何かと気になってね。いや失礼、別に“暗い”と言っている訳ではないのだよ。それか、その余裕は今までの栄光故の余裕かね？奢りかね？」

「……」

マルティンの酷評は終わりを見せなかった。会場がしんとしているのを他所に、答えづらそうな質問を投げかける。その時初めて、ス

ノーが視線だけをマルティンに向けた。

ステージには、評論家五人と、最優秀新人賞、新人賞五人と、司会だけがスポットライトを浴びている。さっきから、新人賞受賞者の中からシャルロが、ガンとマルティンを睨んでいるのが客席の皆には分かっていた。

「……めちゃくちゃ空気悪……。何でマルティンってあんなにＫＹなんだ？」

「ああ……。スノー可哀想に……」

シーダはもう、必死に祈りのポーズを取っていた。四年生の隣にいたエリーゼ先生は、ただじっとその場の行方を見つめている。

スノーはいっとき沈黙を作ったが、小さく息を付くと何かを言おうとした。

その時だった。

「良いでしょうか、マルティン先生……」

スノーが何かを答える前に、ものすっごく殺気を隠しもしないシャルロが、薄ら笑いを浮かべて質問を投げかけた。しかし、マルティンもマルティン。以前シャルロとは壮絶な討論をした事があるので「来たか、シャルロ・グレディア」と言わんばかりに白々しく彼女を見る。

「何かね。グレディア君。私は君に、何の質問もしていないがね」

「いいえ。これはきっと、この会場に居る皆が思っている事ですわ。先生のおっしゃる“インパクト”の意味がよくわからなかったので。確かに、そこのスノーフリーク・ロズベルトの“月面”は、派手で強さのある絵画では無いでしょう。しかし、じわじわと引きつけられる、目の離せない作品になっていると思うのです。それってインパクトではないのですか？　あと、さっきどさくさに紛れて“死んだ絵”って言いましたよね。あれって……」

「どういう意味ですか？」

シャルロの言葉はいちいち嫌味がかっていたが、誰もが聞きたい事を代弁はしてくれていただろう。他の優秀者達は確かに、よけいな事を言うな、と言いたげなものもいたけれど（セルギー・ブレジナなど）。しかしシャルロは自分の事を言われた訳ではないのに、無性に腹が立っていたのだ。

自分がいつもいつも、スノーより上の評価をもらえないと悔しがる以上に。

マルティンは口を、ニヤリと言葉で言うように動かす。

「どういう意味かだって？　そのままに決っているだろう。死んでいるのだよ。彼は今までがよっぽどうまくいきすぎて、どんな絵を描いたって受賞すると、そう思わずにはいられなかったのだろう。私には思いつきで描いた様にしか写らない。怠惰で、堕落し、“ロズベルト”の名に守られ、ルネ・ヴィルトンの名に守られ、可哀想に勘違いをしてしまった少年。才能がある者は沢山いるのに、いつも彼のせいで評価されない！！」

熱のこもったその口調は、もはや講評ではない様に思えた。
さすがに司会も戸惑っているし、他の評論家も「それは、思い込みでは……」と。それでも控えめだ。

シャルロは拳を握りしめ、自分の席を立つと、一直線でマルティンの席に突き進みその机を叩いた。

「ちょ、グレディア君!!　席に戻りなさい!!」

司会が慌てているが、一番端の、最初に講評をした専門家が、視線で司会の男を止める。良いから見ていろと言う様に。
シャルロは飛び出しそうな拳を必死に抑えていた。ここで手を出せば、自分は、スノーは、確実にこの世界を生きていけない気がして。
彼女の睨む瞳に、冷たい恐れを感じたマルティンだが、相変わらず嫌味に笑い、彼女を煽る。

「どうした、グレディア君。別に、君の絵を否定している訳ではないと言うのに」

「いえね、どう見たって、あなたがスノーの才能を恐れている様にしか見えないから」

しんとした会場。無理も無い。まさか、授賞式でこんな修羅場を見る事になるなんて、誰が思っただろう。四年生はさっきからハラハラしているし、シーダなんて泣いている。

五年生は腕を組んでぽかんと言った所だ。
エリーゼ先生だけが、さっきから相変わらず冷静に見ている。

スノーは、シャルロの取った行動を、黙って見ていたが、会場がしんとなって、二人が睨み合っているこのタイミングで、

「いい加減にしなよ、シャルロ」

「……スノー……」

シャルロは、今まで膨らんでいく一方だった怒りが、この時初めて緩くなった。
スノーはシャルロを、その茶色い澄んだ瞳でじっと見ている。

ただ、マルティンだけが、その一瞬の隙を待っていたかの様に、

「ほう？　同じヴィライアー同士庇いあいかね？　これだからルネ・ヴィルトンはダメなのだ。シャルロ・グレディア君、君はさっき私に『彼を恐れている』と、そう言ったね。それは君自身だろう？　君は、いつも、いつまでも彼には勝てない。彼を超えられない。そうだろう？　現に、今だって最優秀新人賞と新人賞だ。彼がいる限り君は一番になれない。明確に、君が彼より劣っていると言われているからだ。たとえ彼が誰かに負けたとしても、それは君ではないだろう。なぜなら、君はさらにその下に居るからだ。グレディア君、君は彼より、明らかに下だよ！！」

シャルロに指を突きつけ、勝ち誇った様に。
シャルロは、これに対しては否定のしようがなかった。悔しかったが、それは心の奥で，自分自身思っていた事だったから。

歯を食いしばり、拳を握りしめ、それでも何も言えなかった。あの

シャルロでさえ。

その時だった。

じっと、じっとその言葉を聞いていたスノーが、席を立ち上がった。
立派な赤い刺繍のされた椅子が、ふいにぎしっと音を立てる。

「……では僕は、この賞を辞退します」

「！！！？」

「！！！！！？」

たった一言だけだったが、その言葉は会場を今一度ざわめかせた。
さすがに、この言葉にはマルティンも驚きを隠せないようだ。まさか、この最も栄誉ある賞を、しかも最優秀新人賞を辞退する者が、果たして今までいただろうか。

何を言われたって、賞だけは譲らない者がほとんどであり、それが画家にとっての誇りとプライドであると、信じていたからだ。

その場の勢いで言ったにしてはあまりに冷静な口調で。
しかし、彼の瞳には、今まで見た事も無いほどの熱情を感じ取れる。

賞を放棄しているのに、この矛盾は何だ。
何が彼を、ここまで言わせているのか。

「ああそうか。そんなんだ……」と彼を理解出来たのは、この場に置いてはシャルロしかいなかっただろう。彼女は今までの事をすっかり忘れた様に、彼女らしい不適な笑みに戻って、

「では、私も辞退します。“彼が”辞退した事で、私にとっても意味の無い賞になったので……」

ただ一言そう言って、マルティンを小馬鹿にした様に見下した。
流石のマルティンも、もう何も言えなかった。言いようが無かったのだ。

スノーとシャルロは、唖然としたステージを降りて、二人してその会場を出て行ってしまった。

気まずかった会場は、彼ら二人が出て行った後、なおただならぬ空気が漂っていた。しかしマルティンが何かを言い出そうとした時、どこからか拍手が巻き起こった。それは怒濤の津波の様に会場を包み、大きくなりすぎた風船が割れた様に。

ヴィライアー達はその様子を驚きの表情で見ていたが、お互い顔を見合わせると小さくハイタッチ。
当然渋い顔をしていた者達もいたが、五人の評論家のうち三人が納得した様にぽつぽつと拍手をしていたから、もうどうしようもない。

ただ、その事をスノーとシャルロは知らない。多分興味も無い。
彼らはそんなものを望んでいた訳ではない。

だが、それが、良くも悪くも人々の心をつかんだのだ。

良くも悪くも。

悪くも良くも。

やはり、そこには一般常識を超えた、何か特別な“才能”にも似た
魅力があると言う事だろうか。

l
d
r
a
w

71：二人の天才の…結

どうしようもなく

今はただ、開放感に浸っていたい

会場を抜け出したスノーとシャルロは、大きな川沿いのフェンスから、二人して身を乗り出し、大きな流れを見送っていた。逆らえない川の流れに、見いだす現状と立ち位置。

それでも今、彼らは清々しい気分だった。

「やってしまったわね」

「……やってしまったね」

「私たちこれから、どうなっていくと思う？」

シャルロは小気味に笑って、身を任せるフェンスから離れ、背の高いスノーを見上げた。

「……どうなるかって？　何にも変わらないさ。いつも通り絵を描いていけばいい。それだけの話だよ」

「あなたって本当、物欲がないわね」

シャルロは、先ほどの大舞台を思い出す。私たちのやってしまった事はきっと、世界中で問題になるだろう。それでもスノーは、“いつも通り”を貫くのだろうけれど。肝が据わっているのか、天才故の感性か。

スノーは、ぼんやりとした視界に、向こう岸の摩天楼を映す。いつの間にか、あたりは紺色に染まり、建物の明かりが並び始める。芸術の街、パリの黄昏。戻ってこない今日。

「僕、君が僕より劣っているなんて、一度も思った事ないよ」

「……何よそれ。私を慰めているの？」

「そうじゃない。僕がそう思っているから、そうなんだ。たまたま、この時代に評価されるのが僕なだけで。長い歴史を考えた時、僕らに果たして差なんてあるのだろうか……」

スノーはフェンスに腕を任せて、ずっと向こうを見ていた。決してシャルロを見てはいないが、彼の瞳の向こうには、彼女の絵だけがあったのだ。

「君の絵が無かったら、今の僕の絵は無い。さっき、あの評論家が言ってたよね。僕には余裕があるって。そんなものあるはずも無い。いつも、君の絵を意識してしまう。君に勝つとか、負けるとかいう次元の話じゃないんだ。君が“良い絵”を描くと、僕はそれに応えなければと思ってしまう。触発されてしまう。……どうしようもなく、絵が描きたくなってしまう……」

彼の声は、いつもの様に単調な物だったが、いつもの彼にしては言葉が多く、それが彼の本心だった。
シャルロはそれを、ただ静かに聞きながら、生温い夜風に長い巻き毛を任せる。

「今日はよく喋るわね」

「だって、言っとかないと。君に嫌われたくないからね」

スノーはフェンスを背もたれにして、まっすぐに立った。彼とシャルロの身長差が、二人並んで立つと、際立ってしまう。

「よーく言うわよ。いっつも私より一歩前にいるくせに。私は悔しくて仕方が無いのよ」

「そんな事言わないでよ。シャルロが描いてくれないと、僕はきっと描き続けられない気がするんだ」

「……そんな事言って。私が絵を描かなくなったら、あなたどうするのよ」

シャルロは腰に手をあて、白々しくスノーを見上げた。

彼は、瞬き始めた星に気がつき、純粋な瞳でそれを数えたりして、一時の沈黙は、二人にとってとても大きな意味を持っている。

「僕は逆に聞きたいよ。君は、僕がいなくて絵を描いていけるかい？」

「……」

シャルロは彼の質問に、鼻で笑って「はいはい、降参です」と。答えは、あの時、二人で賞を辞退した時に分かっていた事だ。

この学校に入学してきて、お互いの絵を見たときから始まっていた。二人の天才の物語。

天才と一言で言えるなら苦労しない。

ただ、お互いの絵を見て、関わって、ヴィライアーになって。

賞を目指したり、競い合ったり、意識しあったり。

共に響きあい、大きな波紋を築き上げてきた。そんな存在が、すぐ側に現れてくれた事。

「……とても良い夜ね。ずっとここで、波の音を聞いていたいわ。絵の事を少し忘れて、この空気に浸っていたい。今日の事なんて、この川の流れに捨ててしまって、海まで連れて行ってくれれば良い。…そして、また明日から私たちは、絵を描いていくんだわ」

「……肩書きなんて無い方が、かえって身軽さ。僕たちを止められる者なんて居やしないんだ」

川を渡る船の、チカチカと光る二つのライトサイン。
あの船は僕らを、きっと限界の向こうの川岸に連れて行ってくれる。

ゴールの無い芸術の世界で、答えなんて無いのにそれを探しながら、
何度も何度も繰り返し、自分の表現者としての意志を示す。

きっと見つかる。

二人はそれから、ちゃんとホテルに戻って、こっぴどくエリーゼ先生に叱られた。その後団長にも叱られた。

後々、あらゆるところで波紋を呼び、色々な所で叩かれ、ルネ・ヴィルトンにも大きな迷惑をかける事になったが、彼らは後悔していなかった。マルティンなんてあらゆる所で、隙あれば彼らを批判し

ている。

それでも、彼らは絵を描き続ける。
その事実は変わらないし、その絵が今まで以上に進化発展を続ける事も変わらない。

あの事件のせいで、今まで以上に彼らの絵画は注目される様になる。
もう二度と、最高峰のあの賞を取れなくなったとしても。

二人が目指す物は、そんな簡単な物じゃない。
そんなもの見ていない。

二人の天才はお互いだけを見ていたら、たまたま、

周りよりもずっとずっと先に行きすぎていて、世界中の誰もがついて来れてなかっただけの話。

皆が追いつくのは、きっとまたいつかの時代。

彼らが発展を止め、それにやっと追いつくと言う事。

誰よりも先へ行く。

それが芸術なのだと、彼らは生き様に示したのだ。

ｌｄｒａｗ

72：涙

きっと一生

私は“私”を被り続ける。

ギリシアのカラッと晴れた天気は、日常の事だった。空を見れば、今日もいつもの様に穏やかで愉快で、そして、自分のやりたい事について悩む。そんな日常が待っていると思っていた。

時間はいつもの様に流れているのに、非日常は突然やって来る。

「……はい？明日の午後ですか？……日本の外務大臣が訪問ですか？」

「ええ。驚く事ではありません。四年前も来ているでしょう？ルネ・テクタイト……」

「それはそうかもしれませんが……そうですか、日本の……」

団長は、いきなり呼び出された事は置いといて、その事情に驚いた。エリーゼ先生はいつも、突拍子の無い事をしれっと告げるから、こちらも聞き流してしまいそうだ。そして、ワンテンポ遅れて事の重大性に気がつく。

理事長室の椅子に座ったままの理事長は、

「まあ、君たちヴィライアーが何をすると言う訳ではないんだが。それぞれの科のヴィライアー幹部には色々手伝ってもらうだろうから。訪問って言ったって、ほんの少しの時間だ。絵画科は四年生の授業を見学していただく」

「……そうですか」

「突然ですまなかったね。何しろ、最近日本の内閣が変わったからね。どうなるか分からなかったものだから……」

団長は視線を斜め上に流して、そう言えばそうだったと世界の情勢を思い出す。ここギリシアに居ると、自分の国の動きだって現地に居るより疎くなるのに、ましてや日本の事となると。

そうだった。確か日本の内閣は最近新しくなったんだった。

「そう言う訳です。明日の事は追ってお知らせいたします。どうか、日本の外務大臣に、この学校の素晴らしい部分を見ていただける様全力を尽くしてください。くれぐれも、問題を起こさない様に」

エリーゼ先生はこれまたしれっと言っていたが、ついこの前、ある大きなコンテストで“あいつ”と“あいつ”が問題を起こしたこともあり、多少警戒しているようだった。

「言っておきます。特に四年生に」

団長はきりっとした表情で、真剣に。当然ですと言わんばかりに。エリーゼ先生はこくんと頷き、

「そして、もう一つ言っておきたい事があります。……とても、重要な事なので。……二年生のオノダ・キクマサ……ルネ・アメジストの事です」

「……え、あいつ何かやらかしたんですか？」

団長は、意外な奴の名を聞いたと言う様に、らしからぬ様に目をぱちぱちさせる。

エリーゼ先生は少々、複雑そうだった。少なくとも、団長にはそう見えた。

「いいや、あの子がどうと言う訳ではない……。ただ、明日の“訪問”に関わる事なのだ……」

理事長は机の上にある新聞を指差した。

そこには、“ギリシアに降り立った日本の外務大臣”と言う記事。今日の新聞だ。
団長は、まじまじと記事を読み始め、すぐに表情を一転させた。そう、読み始めたすぐの事だった。
彼が驚いたのは、その記事の内容でも何でも無い。
もっと、単純な事であり、そしてもっと複雑な問題だった。

ルナシーは一人、学校の林の大きな樹の裏側に座って、ぼんやり考え事をしていた。
心地よい風がさわさわ木の葉を揺らす度、彼女の長い髪がその方向へ流される。
それでも彼女はじっと座って考えていた。
昨日、レイの描いている絵を一生懸命見ているキクマサの姿を見つ

けた。彼女が居ない時に、じっと食い入る様に。顎に手を添え、ただじっと見ていた。焦がれるような瞳で。

すぐ側にあった私の絵なんて気にもしないで。

キクマサがああなのだから、フォルテなんて当然。もっと柔らかい表情で彼女の絵を見ている。

レイは、片目を失い、とても苦労しながら絵を描いている。昔の様に描ける訳が無い。いまだにその事を苦悩して、自分の思う様に描けない、上手くいかないと歯を食いしばりながら、時には一人で泣きながら絵を描いている。

私は一番側で、その姿を見てきたし、それはキクマサやフォルテだってそうだ。

確かに、彼女の絵はがらっと変わった。昔のような正確さは無く、どこか飛んで見える絵。

しかし、彼女はやはり選ばれた才能を持っている。それすらも武器にして、新しい境地の絵を描こうとしている。

輝かしさは一層増して、何だかもっと遠くへ行ってしまったような気がした。私たちには理解出来ないような、もっと遠くへ。

まだ彼女は進化するのかと、私たちは身震いするのだ。

キクマサもフォルテも、彼女の絵に言い様も無い魅力を感じてしまうのだろう。どうしようもなく、見てしまう。

「……私はいったい、何なのだろう……」

昨日ほどそう思った事は無い。フォルテは前から、レイの絵に憧れと尊敬を感じていたのは百も承知だったが、キクマサもそうなのだと思い知ったあの時、私はとてつもなくレイとの差を感じた。

何がショックだったのだろう。

私は悔しくて泣きたくなった。

レイの絵をじっと見るキクマサに、忘れ去られた私の絵。

あの空間に、あの部屋にどうして入れると言うのだろう。

私が廊下を歩いていると、たいていの男子生徒は振り向いたり囁いたりする。割と仲良くしている男子だと無駄に話しかけてきたりする。顔も見た事無いような奴に告白されるなんて日常だ。

だから何だって言うの。

私が美しいなんて、そんな事知っている。

それが、全く持って無意味だと、本当の意味で思い知った。

少なくとも、自分はそこに意味を見いだしてはいない。やりきれない空しさだけが突き刺さる。

「今ならきっと、泣けるわ。……一人だもの」

結局私は、本当の気持ちを誰にも知られたくないからと、人前では笑っている。いつもニコニコしていて、気を使って。それがルナシーなのだと植え付ける。

だってそれが、誰もが求める“私”だから。

だったらそうで居てあげようと、私は仮面を被るのだ。それをこれからも止める気なんて無い。

さわさわ、風に身を任せ、一生懸命悲しい気持ちを思い出しても、結局私は泣けなかった。何かを失った訳でも、誰かに酷い事をされた訳でもないのに。どうしてこんなに情けないのだろう。惨めで切なくて、空しい。

こんなに空しいのに、ただここに居るだけ。

「ルナのやつ、今日描きに来ないな」

キクマサは、いつもなら彼女の居るはずのイーゼルを見た。
普段と違う景色に見えるのは、彼女の揺れる金の髪が無いからか。

「昨日も遅くに来たよな。何かあったのかな。」

「あら～しらないの～キクマサ君。ルナは昨日、三年生のエドワード先輩にプロポーズされたのよ。もしかしたら、今日はデートでもしてるのかしら」

レイは筆を止め、くるっと椅子の向きを変えた。
とてもわざとらしい口調で、知ったかぶりの表情だ。

「えええええ。マジで？エドワード先輩って言ったら、絵の才能はからっきしだけど、プレイボーイでイケメンの。」

フォルテもその話題に思いっきり食いついて、椅子の向きを変える。
前のめりになって、目をキラキラさせて、何か楽しそうだ。こうなったらもう、休憩。お茶の時間だ。

「今日の授業ではいつも通りだったのにな。」

キクマサは授業中の彼女を思い出す。特にいつもと変わらず、穏やかそうにニコニコしていたっけ。

「ほんっと、ルナさんってモテるよね。あれだけプロポーズされたりしながら、今まで何ともなく俺たちといたってことは、要するに断ってきた訳だ。それも凄いよね」

「そりゃあ、あれだけ美人だったら当然だわ。ああ……どんな感じなのかしら、日常的にプロポーズとかされるのって……」

「今までそんな経験無いから……レイには分からないよね」

フォルテが小馬鹿にした様に、わざとらしく「可哀想に」とか言っている。レイはフォルテに黒くなった練り消しのボールを投げつけた。

キクマサは何と言っていいのか分からなかった。

今まで、ルナシーがそんなに人気があると意識した事が無かったから。常に四人で居る、それが普通で、これからもそうなのだろうと勝手に思っていたからだ。

でも、もし彼女が他の男性と付き合ったりとかそう言う関係になると、もう四人では居られない。

「そっか……。もしかしたら、そのエドワード先輩と付き合っちゃうのかな……」

「あれ～気になるの？キクマサ君気になってるの？」

レイがなぜか、とてもワクワクした表情で、しつこいくらいに聞いてくる。

キクマサは首を捻って、

「いや、もしそうなら応援するけど。そうなったら四人で遊んだり出来ないからなあ」

「え～…ルナさんがあんな男と付き合うか～？」

フォルテは「どうかな～」と腕を組んで、大きく体を揺らす。
キクマサにはその意味さえ分からなかった。

「どうしてそんな事言いきれるんだよ」

「どうしてって……。だってルナさんだよ？　興味ないでしょー…
そこら辺の男なんて」

「分からないわよ。エドワード先輩ってとても美形なのよ。ちょっ
とナルシストな気もするけど。絵になると思うけどなあ……。それ
とも何よあんた、ルナシーに彼氏が出来るとまずいって言うの？」

レイが妙に怖い口調で、フォルテをいかがわしそうに見ている。フ
ォルテは顔を歪ませて、

「は　い　？どうしてそうなるんだよ…ルナさんの性格を考慮した
上での分析を」

本人がここに居る訳でもないのに、ルナシーの話題でとても盛り上
がる三人。
キクマサはフォルテの発言に多少の違和感を覚えたが、それが何な
のかも分からなかったから追求出来ない。

フォルテはキクマサを見る。

「お前はどう思う？」

「どう思うって？　何が？」

「……まさかとは思うけど、お前達の抱くルナシー像って、いまだに“可愛くて”“優しくて”“気の効く良い子”とかじゃないよな？」

フォルテは、ちょっと白々しい口調で、何だかキクマサとレイを試す様に目を細める。

しかし二人は考えもせずに、

「その他に何があるって言うんだよ。良い子じゃないか、ルナは」

「あえて付け足すなら、天然で運動神経が微妙って所かしら。でも、言うときは言うのよね、あの子」

レイなんて、私が一番あの子を知っていると言ったような自信だ。

フォルテはその時、ふと気がついたのだ。自分と、この二人の違いに。

「……なるほどねえ。……ま、いっか」

ある意味、とても興味深い事に気がついた。

この二人は、本当の意味でルナシーを分かっていない。でも、それが当然なのだ。なぜなら彼女自身が頑にそうである様振る舞っているからだ。

フォルテとこの二人の違いは、ルナシーへのイメージ。

他人を観察する癖のある自分と違って、この二人は素直なのだ。素直だから、普段の彼女を本当のルナシーだと思っている。

「……なるほどねえ……」

もう一度、小さな声で繰り返し呟いた。
そして、今回の件について相変わらず語っているレイ、それを聞いているキクマサを遠い目で見て、困った様に笑った。

こりゃあ、ルナシーだってやりきれないかな。

でも、本当の友達、仲間を目指すならここは、自分たちで本当の彼女を見つめなければ。きっとそれはとても難しい事だろうけれど。
彼女自身が知られる事を望んでいないから。
でも、今は静かにしておくしかないか。

フォルテは、もしかしたら自分だって何一つ分かっていないのかもしれないと思って、とりあえず保留にした。しかし彼はそうやって“疑う”事をするから、レイとキクマサとは違うのだ。

キクマサは夕方になって、ふと林を散歩してみようと思った。
こんなに心地の良い美しい夕方なのだから、一人でふらふらするのも悪くない気がする。

彼は何も持たないで、スケッチブックすら持たないで林に来てみた。
オレンジの強い夕方だ。整えられた林の、きめの細かい芝生を踏んで、背の高い木々を見上げながら歩く。

その時、ある木の根元から、見覚えのある金の髪を見つけた。キクマサは、今日の話題の人を見つけたと思って、何だか嬉しくなって駆けつけ、ひょいと覗き込んだ。

「……」

そこにはルナシーが居た。木の根元に背をつけ寄りかかり、顔を傾けて眠っている。座り込んだ膝の上には、小さな手が力無く添えられている。

「こんな所に居たのか。しかも眠ってるよ……全く……」

キクマサは何だかおかしくて吹き出しそうだったが、彼女の横に膝をついて、肩を揺さぶった。

「起きろよルナ……こんな所で寝てたら風邪を……」

ふと彼は、肩を揺さぶる手を止めた。彼女の顔を直視した時、うっすら頬を伝わる涙を見てしまったから。

夕暮れがだんだん遠のいていく。
透き通った風が、一瞬強く吹き抜けていった。

「……ん……」

ルナシーはその、風が木々を揺らす音で目を覚ました。膝の上にあった手で目を擦り、まるでさっき見たものが嘘だったかの様に、頬の涙を拭いてしまっていた。

「……キク……？」

彼女はキクマサを見ると、一瞬不思議そうにしていたが、すぐにいつもの可愛らしい表情に変えると、

「ふふ…私寝ちゃってたのね。……とても気持ちがよかったから。」

「……あ、ああ……」

彼女は本当に“いつも通り”だった。
キクマサはさっき見た、あの彼女の涙をいまだに忘れられず、それは心に大きなしこりを残していた。

ルナシーは背伸びをして、ひょいと立ち上がると、

「キクは散歩でもしていたの？良かったら一緒に帰りましょうよ…

…。そろそろ夜がやってくるわ。」

夜がやってくる。
とても彼女らしい表現だ。

いや、待てよ……。彼女らしい……？
そもそも、ルナシーらしいって何だ？

「……？どうしたの？」

「い、いや……」

キクマサは動揺していた。自分の中で、彼女に対して大きな疑問が生じてきているのが分かる。でも、それを言葉にしろと言われても無理だ。

ただ、前を歩く彼女の背中を見つめながら、

今、ルナシーが何を考えているのかも分からなかった。

l
d
r
a
w

73：レイニーブルー・ノスタルジア『父』

雨の音がいつまでも消えない

いつまでも、どこまでも

レイニーブルー・ノスタルジア

激しい稲妻が、暗い窓の向こうを走った。一瞬遅れてから聞こえる激しい音は、キクマサを深い眠りから連れ戻した。

「……」

稲妻の音と雨の音。ただそれだけの午前三時。

昨日はあんなに天気がよかったのに、夜になって急に雨が降り出したようだった。

彼は、胸をよぎる激しい衝動に気がついていた。雷の音に驚いたのだろうか。

もう一度、今度はもっと近くで稲妻が光った。窓全体を包む光は、起きたばかりのキクマサには眩し過ぎて、それでも彼は目を見開いていた。光の向こうに何かを見つけた気がして。

「……雨……か……」

雨の音。

自分はいつも、こんな雨の強い日に、人生において重大な壁とぶつかっている気がする。

人生において、一つの区切りとなるような何かと。

上手く眠れない、そわそわした心のまま朝を迎えた。
キクマサはいつもの様に起きて、フォルテを引きずり起こす。朝食を食べ、一時間目の講義に出なければ。

「あら、おはよう。今日は嫌な天気ね」

「おはよう、ルナ……」

食堂で、いつもの定位置に座る。そこにはレイもルナシーも居る。だいたい決って女子の方が早くやってきて、既にパンやスープを選んでしまっているから、彼女達は時間に余裕がある様に優雅な朝を迎えるのだ。

ルナシーは今朝も、相変わらずだった。

「知っている？　昨日、ギリシアに日本の外務大臣が来たじゃない？」

「え……そうなの？……ふーん……」

「キクマサ君。君の国の事だよ？　本当に世の中の事に疎いなあ君

は」

フォルテは、当然知っていると言う様に、得意げな表情だ。バターロールを半分くらい一気に口へ詰め込む。

「で、それがどうかしたの……」

「いや、さっきレミオが面白そうに新聞を持ってきたのよ。これ、見てよ……」

レイは傍らの新聞を広げ、レミオがおもしろがっている部分を指差した。

ただ、その記事はキクマサにとって、ここ何年かで最も驚いたニュースであったが。

「……日本の新たな外務大臣“オノダ・キクジ氏”の手腕やいかに。……ねえほら、日本ってあなたみたいな名前が多いのかしら。この大臣、そっくりな名前だわ。」

「……」

キクマサは一瞬、その名前を聞き流しそうになったが、じわじわと現実が飛び込んでくる。

言葉も出ない、目もそらせない、その新聞トップの写真。

「……」

心の奥で、何かがざわついている。驚き以上の焦り、トラウマにも近いその人物の顔。

間違いない。

「……どうしたの……キク……？」

ルナシーはすぐに、彼の様子がおかしい事に気がついた。
どう見たって明らかに動揺している。表情が固まって、顔がとても青白い。

「……い……いや……」

キクマサは写真から逃げる様に顔を背け、額に手を置いた。
なぜだ。

なぜ今、今こんな所で、あの男を見なければならないのだろうか。
もう、忘れたかったその顔を。

「どうしたんだよ、おいキク……真っ青だぞ」

「……い、いや……いや、何でも無いんだ……。ちょっと驚いたから……。何でも無い、大丈夫……」

とても大丈夫には見えなかった。キクマサは一度深呼吸して、不審がっている皆に向き直った。

「……そいつ、俺の親父なんだ。……そっか……外務大臣になったんだ……出世したんだな」

「……うそ」

皆の反応は、予想以上に単純なものだった。大げさに驚くよりはむしろ、驚きすぎて言葉が出ないと言うような。

キクマサは今まで、極力家族の事は口にして来なかったから。

「いやまて。……え、マジで？　お前じゃあ、経済大国二位の日本の、しかも外務大臣の息子なの？　何それ初耳にもほどがあるぞ」

「いや、俺が親父と最後に会ったときは、あいつは普通の国会議員だったんだ。まさか、大臣になれるような奴だとは思っていなかったけど……。こんな遠い国まで来たのに、そいつの顔を見る日が来るなんて……」

小さく笑いながら、彼は呟く様に言った。しかし表情はとても強ばっていて、キクマサらしからぬ弱々しい瞳だった。彼の顔を見ただけで、フォルテ、ルナシー、レイは、その事に軽く触れられないと悟った。突っ込む事も出来ずに、モヤモヤした疑問だけを抱えて、恐ろしいほど静かな朝食を済ませる。

キクマサは押し黙ったまま、常に何かを考えているようだった。

今日の授業は、まるで上の空だった。午前中の講義授業が何だったのかすら分からない。

昼食を食べようと言われたが、とてもそんな気分にはなれなかった。

「おい、お前大丈夫か？　今日らしくないぜ。」

「……いや、大丈夫だ。……大丈夫なんだ、気にしないでくれ」

余裕の無い彼の言葉は、より一層心配になる。しかし、ぴりっとした空気を纏っていたため、何も聞く事が出来ないし、どうしようもない。

キクマサは、自分が周りに心配をかけている事は百も承知だったが、

「……ごめん……。俺、今日どうかしている。……ごめん、頭冷やしてくるよ……」

今彼らとともに居たら、頭がパンクしてしまいそうで。

一人になりたかった。

「……」

「……」

キクマサは一人で、ふらふらと寮に戻っていった。

「……大丈夫かしら。あんなキク、初めて見たわ！！」

「……うーん……。これはいったい、どうしたものか……」

レイは彼が遠のいたのを確認したら、その事にすぐ突っ込んだ。フォルテは目一杯眉間を寄せ、顎に手を添え唇を噛む。

誰もが、キクマサを“変”だと思った。当然、その通りだから。

「……何だか苦しそうね…キク……」

ルナシーは、今まで見た事も無いくらい動揺し、沈んでいるキクマサをじっと、じっと見送った。彼の背中はいつになく寂しい。うっとうしい今日の雨を、物語っている様に。

キクマサにとって、“父親”と言う物が何かしらキーワードになっている事は、誰にでも分かる事だったが、それが果たして何なのか。答えを知るには、時間がかかりそうだ。

「嫌な雨だねえ。まいっちゃうよ」

「珍しいわね。最近ずっと晴れていたのに」

五年生のレッドとナギは、並んで寮のフロントに居た。今から絵画棟に向かう、そんな所だろうか。

「団長は大変だね。日本の外務大臣のお相手もしなきゃいけないんだから。それにしても、こんな雨の日に訪問とはついてない。この学校の美しさが伝わらないじゃないか。……と言うか君は日本人だったね。外務大臣が誰だか分かるかい？　ナギさん」

レッドはニヤニヤしながら、隣のナギをつつく。

「はあ～？　そんなの分かるわけないじゃない。いったい何年ギリシアに居ると思っているのよ。総理が誰だかすら危ういわよ。そもそも日本はすぐに内閣が変わるから」

「ま、もともとそういうのに疎いしね。君が大臣の案内役じゃなくてよかったよ」

レッドは鼻歌を歌いながら、フロントの角を曲がる。その時だった。フロントのガラス張りの談話室に、たった一人で佇むキクマサを見つける。

激しい雨が、ガラスを網目の様に伝う。それをじっと見ていた。

「……あれ、キクマサ君じゃない？　どうしたのかしら……こんな時間にここに居るのって珍しいわね……」

ナギはレッド越しに、ひょいと彼を覗く。キクマサは先輩二人に見られている事も気がつかず、ただずっと、うつろな瞳で大きなガラス窓の側に立っている。

「なんか……様子がおかしくない？」

「……う、うん……」

二人はお互い頷きあって、いっせーのーせで、

「あれ、キクマサ君じゃない！！　どうしたのこんな所で！！」

「いけないなあ授業をサボるなんて☆おっと、俺が昨日の色彩学を

サボった事は内緒だから！！」

いつものノリ以上のテンションで、キクマサに近づき、どうだと言う様に。

「……」

「……」

「……」

キクマサは振り返り、彼らに気がつくと小さく頭を下げた。

「……こんにちは先輩」

「……ん？　反応が薄いぞ！！　具合でも悪いのかい？」

レッドは滑った事はさておき、キクマサがあまりに淡白な反応だったので焦る。ナギは前のめりになって、彼を覗き込む。

「本当。凄く辛そうよ。無理して起きてなくていいんだから、ちゃんと横になった方が……」

「いえ……別に体調が悪い訳ではないんです。すいません……なんか気を使ってもらって。何でも無いですから……大丈夫ですから……。」

キクマサは小さく笑った。きっと本当はいつもの様に、違和感無く笑おうと思っていたのだろうが、見ているこっちからはとても寂しく、痛々しく感じる。

レッドとナギは言葉に詰まった。

「……先輩達……今からどこかへ行くんですか？」

「……え？…あ、ああ……。うん、今日ね、この学校に日本の外務大臣が訪問してるんだよ。……公にされてないから知らなかったかもしれないけど。……そろそろ帰る時間だろうから、団長に頼んで覗きにいこうかなーって……」

「……！？」

一瞬、ひやりと背筋が凍る思いだった。
瞳に驚きの色を隠せず、頭の中に色々な雑念が飛び込む。一瞬で、過去の古傷が疼き、震えそうになる。

あいつがここに居る。

キクマサはレッドとナギが何か言う前に、彼らの側を風の様に抜けて、誰もいない廊下を走った。

「え！！　き、キクマサ君！！！」

ナギが呼び止める声もまるで聞こえないで、今自分が何を考えているのかも分からないで、ただ走っていた。
心の奥の何かが、走る自分自身を止めようとしているのに、それでも足が止まらない。

ただ、必死だった。

ルナシーはキクマサが心配だった。今まであんなキクマサを見た事が無かったからだろうか。彼は昨日のような穏やかさは無く、何かに追いつめられた、理解しがたい恐れを抱いているようだった。

ルナシーはそっと授業を抜け出していた。絵画の授業はもともと甘く、先生すら居ない。期限までに提出出来れば良いのだ、という緩いスタンスだ。

寮へ向かって急いで歩いていたら、曲がり角で何かとすれ違う。勢いのある彼は、ルナシーに気がつきもせず、驚いて目を閉じた彼女を通りすぎた。

「……え……!?」

ルナシーは慌てて振り返った。あれはキクマサではないか。彼はあんなに必死になって、いったいどこへ行こうと言うのか。

「き、キク……!!」

彼女は慌てて追いかけた。なぜか彼を追いかけなければと思ったのだ。寮を抜け、雨の中中央棟へ向かって走る。水たまりを何個も蹴って、それに写る灰色の空を踏んで、びしょ濡れになりながら二人は走った。

速いキクマサのペースにドンドン引き離されるルナシーだが、彼女は待ってと声をかける事もせず、彼を見失わない様に一生懸命追いかけた。

濡れた髪が顔に引っ付いて、とても煩わしく気持ち悪い。服がドンドン重たくなっていく。

「このような天候の中、わざわざ我が校まで足を運んでいただき、誠に光栄な事です。……日本のますますの御発展をお祈り申し上げます」

理事長はかしこまった様に、中央棟の玄関の前で頭を下げた。他の先生方も深々と頭を下げている。

日本の外務大臣は先ほど軽く訪問を終え、本題の方を理事長と話し、ＳＰに囲まれながら、今しがた帰ると言った所だった。

「……オーディール理事長。この学校はある意味で世界の要だ……。ますますのご発展を」

オノダ外務大臣は硬い表情で、よくある口上をのべ、彼と握手をした。白髪混じりだが清潔感のある、きりっとした出で立ち。五十代半ばの落ち着いた風格がある。

「……大臣……そろそろ……」

「ああ……」

オノダ大臣はエントランスの前にとめられたリムジンに乗り込もうと、雨を避けながら、一瞬車の向こうを垣間見た。

そう、それは偶然、視線が車の向こうに至ったのだ。

キクマサは走るのを止めた。

中央棟のエントランスの前に居る人物に気がついた時、足はそれ以上動かなくなった。

「……」

何でだろう。
どうして自分はここへ来てしまったのだろう。
あいつの顔なんて見たくもないのに。

強い雨は一層強く、心の中の葛藤は一層複雑になった。

理事長と話しているあの男は、まさしく自分の父親だった。いつからか全く会っていない父親。俺がこの学校に居る事を、おそらく知っているのだろう父親。でも多分、そんな事に興味は無い、あの男。

ずっと走ってきたから息が荒い。
肺が痛い。息をする度に、雨を吸い込んでしまいそうだ。

「……父さん……」

彼は呟く。雨の中、自分にしか聞こえないくらいの声で。いつぶりに父の姿を見たのだろう。
会いたくなんか無い。会ってしまったら、忘れたかった全てをもう一度、思い出す事になるから。

ならなぜ、どうしてここへ来てしまった。

「……」

それは、オノダ大臣が車に乗ろうとした時だった。キクマサは奴が車に乗るのを、どうしようもなく見ていたときだった。

たった、一瞬のコンタクト。

お互いの視線が、ほんの数秒、それでも数秒、確かに交差した。父は一瞬とても驚いた様に瞳を見開いた。それはキクマサも同じ。似た面影を感じる瞳には、その時確かに、お互いの存在が写っていた。

「……と……」

父さん。

キクマサは、そう言葉で発するつもりだった。それでも、言葉が全然出て来ない。のどの奥で詰まって、何かが邪魔をしている。

オノダ大臣は確かにキクマサに気がついていたが、ふいに顔を背けると、大した事無さそうに車に乗り込んだ。

相変わらずの硬い表情で。さも、気がつかなかったと言う様に。

「……」

車がドンドン遠ざかっていく。
キクマサは、先ほど視線の交わった、その一点をいまだに見つめながら、

やっと、夢から覚めた様に視線を落とした。

こんなものだ。俺たちの関係なんて。
そんな事、ずっと前から、何度も何度も思い知らされてきた事なのに。

いつから居たのだろう。ルナシーが少し離れた所で立っていた。
キクマサより、五メートルくらい後ろで、じっと彼の背中を見ている。

雨が、現実へと打ち付ける、その容赦のない事。

「……キク……」

ルナシーはそっと、彼の背中に声をかけた。
キクマサは視線を落としたまま、彼女の声のする方を振り返った。

ルナシーは、その小さな体を、激しい雨の中に置いていた。

彼はふと笑う。視線の先には、灰色の泥水が。

どうしてだろう。何で会いにきてしまったんだろう。
全てを忘れるつもりだったのに。

「……どうしてだろう……。日本に……全てを置いてきたつもりだったのに」

過去も、トラウマも、罪も、全て。
家族さえも、思い出さえも忘れて、大切なものだけのために生きていけると信じていたのに。

キクマサは片手で、目を覆った。
悔しさとやるせなさ、この惨めな気持ちはどこから来るのだろう。
今更、家族に戻れる訳も無いし、そんな事望んでなんかいないのに。

震える口元からは、食いしばる歯だけが見えた。
ルナシーはただ瞳を見開いて、初めて見る彼のこんな姿に、胸の奥が痛むのを感じた。

何も、言葉が出ないのに。彼の痛々しい姿だけを目に焼き付ける。
雨の中佇む二人は、同じだけ雨に打たれている。

全てを日本に、置いてきたはずだった。

何もかも、忘れたつもりでいた。

ｌｄｒａｗ

74：レイニーブルー・ノスタルジア『五年前』

忘れる事なんて出来なかったんだ

心の奥深くに埋めた、トラウマの絵

あれは、キクマサが小学六年生の時だった。と言う事は、今から約五年前。

父の名をオノダ・キクジ。母の名をオノダ・サキコ（カツキ・サキコ）と言った。

その頃の父は、一国会議員で、母は日本ではそれなりに有名な画家であった。

父と母の馴れ初めは知らない。どこかのパーティーで知り合ったと言うくらいだ。

父がなかなか家に帰らなくなったのはいつからだろうか。元々忙しく、家を空ける事の多かった父だが、あからさまに家を避ける様になったのは。

しかし母はそんな事を気にせず、自らの制作に没頭し、キクマサを育てる日々だった。キクマサも小学六年生で、地域の野球チームに入っていたからそれなりに忙しく、家族のサイクルはそれぞれで、皆で居る事はほとんど無かったと言っても良い。

でも、それが当たり前だったから、何の不満も違和感も抱いていなかった。

家に帰れば母が居るし、父が居ないのは仕事のせいだと思っていた。

キクマサは野球が好きだったが、同じくらい絵を描く事も好きだった。キクマサが生まれて、一番始めに習った事が絵だと言ってもおかしくない。母が画家であった事が大きいのだろうが、字を習う以前に、絵を描く事から学んできた。

「キクマサ。あなた中学はどうするの？今更勉強したくらいで、良い私立に行けるとは思わないけどね」

「普通に、ここの中学に行くよ。小学校でお受験したんだ。そのままエスカレーターで行くのが筋だよ」

「あら、生意気ねえ。まあ、私の子だから、頭の良さに期待はしてないわ。でも一応お父さんの子でもあるのよ。可哀想に、あまりあの人には似なかったのね」

母は、夕食の時間に、一人ワインを飲んでいた。元々母はお酒が好きだが、夜に一杯飲む程度だった。
キクマサは白いご飯となんかよく分からない野菜炒めを食べながら、

「別に良いよ。父さんみたいな政治家になる訳でもないし」

「じゃあ、あなたこれから、何をしたいの？」

「……野球と絵」

キクマサは、ぽりぽり固いキャベツを噛み切って、きっぱりと答えた。勉強だって人並みには出来るし、野球だってレギュラーだし。絵はこれからも描きたいし。

「……そろそろ、どっちを選ぶかしないと。どっちも楽な道じゃないわよ。母さんだって、画家になりたいって思って、それだけのために学校を選んで受験して。そして、その学校の中でも頑張って上を目指して、いまここにいるんだもの。私の両親には反対されてたから、家出してやったわ」

「いつから画家になりたかったの？」

「……いつからかしら。今のあなたくらいよ」

母は、ワインのグラスをくるくる回しながら、何だか昔に浸っているようだった。
キクマサはその時の母の顔を、今でも覚えている。

母はやはり、画家と言う事もあって、普通の母親とは違っていた。

茶髪は元々だが、首元で切りそろえられたボブカットに、眉上に円を描くような前髪。目鼻立ちははっきりしていて、唇はいつも、濃いサーモンピンクのルージュがひかれていた。

奇抜であったが、美しかったんだと思う。背も高く、存在感があった。

彼女が描いていた絵は、今思えばやはり凄いものだった。艶やかな色使いに、透明感のある空間。彼女が個展を開けばそれなりに注目されるし、彼女が画集を出せばそれなりに売れる。当時はそれが当たり前だと思っていたが、今となっては、それがいかに難しい事だったか分かる。

実を言えば、はっきりと彼女の描いていたものを覚えていない。母が死んでから、“カツキ・サキコ”という画家の絵を見ない様にしている。避けている。

しかし、今でも覚えている絵が、一つだけある。

キクマサのトラウマとも言える、彼の過去を全て象徴するような絵。

母が変わってしまったのは、ある夏の日だった。
キクマサは夏休みで、野球仲間と共に遊んでいたような、そんな当たり前のある日。

キクマサが家に帰ってきた時、自宅からスーツを着た女性が出てきた。キクマサは、お客さんでも来たんだろうかと思っていたが、その女性とのすれ違い際に、激しく睨まれたその視線の意味を、その時は知らなかった。

「ただいま……」

キクマサは泥だらけになった靴を脱いで、玄関を上がる。
静かだった。いつもなら母が返事をしてくれるのに。

彼は手を洗って、何かつまみ食いでもしようと思ってリビングへ。
母は、頭を抱えてダイニングテーブルに座っていた。

「……どうしたの？」

「……」

キクマサは冷蔵庫からコーヒー牛乳のパックを取り出して、大きなグラスに注ぐ。母は相変わらず頭を抱えていたから、おかしいなと思って手をとめた。

「ねえ、どうしたの？」

「……」

「……母さん？」

キクマサはいよいよ心配になった。母は無言で、何も答えてくれない。

目はうつろで、どこを見ているのかも分からない。

そのとき、母は急に立ち上がり、自らのアトリエに向かう。何を思っていたのか、母は大きな白いキャンバスを取り出し、ただぶつぶつ、何かを呟いていた。

それが、全ての始まり。

母と、キクマサと、父と……平和だったはずの生活に訪れた、突然の終わり。

母は、何を考えていたんだろう。

何を思い、何に絶望していたんだろう。

キャンバスを見つめる母の顔は、狂気にも似た、激しい憎しみと絶

望を。
そして、それを一枚の絵画として描くという、そのインスピレーションを得られた事への興奮と愉悦を。
その時の顔を忘れられない。

母は知ってしまった。
今まで、父が家へ帰って来なかった理由を。一人の女性が突然現れ、父との関係を告げる。
その女性の名を、ミチコと言う。

父の秘書であり、母よりもずっと前から父を知っている。
というよりも、母と結婚する前から繋がっていたと言ったも良い。
何しろ、父にはキクマサより年上の隠し子が居たから。そのミチコとの間に生まれていた、本当の長男が。

母は、そんな事微塵も知らなかった。
まさか、自分と結婚する以前から、既に浮気が始まっていたなんて。
しかも、子供まで居たなんて。

キクマサは小学生だからといって、その事の重大さに気がつかなか

った訳ではない。母が日に日にヒステリックになっていき、浮気を知られた父と喧嘩をする日々。

父は、別れてくれといつも母に頼んでいたが、母はそれを受け入れなかったから。

家に帰ってくるのも、“離婚してくれ”と言うためだと、母は知っていた。キクマサは両親の喧嘩に絶えきれず、ヒステリックになりやつれていく母を見ていられなかった。

「あの人はねえ……私をずっと騙していたのよ。私よりも愛している人が居ながら、どうして私と結婚したと思う?……あんな女より、私の方がずっと美しいのに……っ」

母は、一日中、絵を描くか酒を飲むかしていた。

大きなキャンバスは、日に日に色を増し、皮肉にも素晴らしい絵が仕上がっていたと思う。

たった一枚の絵を、母は描き続けていた。

父と母の喧嘩は、日に日に激しさを増す。

浮気相手のミチコは、時に訪れて早く別れろと言ってきた。

賢い人だったのだ、そのミチコと言う女は。国会議員の秘書と言う事もあり、父と政治について語り合う事も出来る。いろいろな苦労、当選の喜びも、もしかしたら母よりずっと理解していたのだろう。

母は圧倒的に不利だった。

たった一人だったし、ミチコに言い返せるほど口が強くない。

それ以上に、どうして父がこの人を愛しているのか、話せば話すほど分かってしまう。
キクマサは可哀想でならなかった。母が、こんなに悲しそうにしているのが。

「父さん、行かないでよ!!　母さんをこれ以上、苦しめないでよ!!!!」

一度、父に向かって言った事がある。母が泣いていて、父とミチコが帰ろうとしていた時だ。
父はキクマサを、久しぶりに見たと言う様に驚いていた。

「……キクマサ……」

「ねえ、どうして!!　俺たちの事は、もうどうでもいいっていうの!?」

父は少し、困ったような顔をしていた。ミチコはわざとらしくため息をつき、面倒くさそうにキクマサを見ている。見ていると言うよりは、睨んでいる。

「……キクマサ……父さんと母さんが別れたら……お前はどちらについていく?」

「……そんなの……母さんに決ってる……っ」

「……だろうな」

父は分かっていたと言う様に、小さく笑った。

そして、キクマサの言葉を聞かなかったかのように、自らの家を出て行った。

扉が閉まる音で理解した。ああ、この人はもう、俺たちの事なんてどうでも良いんだって。

母が父の浮気を知ってから、もう四ヶ月は経った。今はもう、木枯らしの止まない冬。それは同時に、母がある一枚の絵を描いてきた月日であった。

キクマサと母の会話量も、今では乏しいものだった。と言うより、母はアトリエにこもってばかりで、キクマサの顔を見ようともしない。それは、父に裏切られた悲しみを紛らわすためだろうか。それともただ、画家としての本能が、今のこの絵を完成させよと言っているのだろうか。

取り憑かれた様に、母はその、不思議と禍々しいのに、どこか美しい絵を描き続けた。

キクマサは、そんな母を見ていて、何とも言えない不安と胸騒ぎにかられていた。

自分は今、たった一人なのだと、寂しさも感じながら。

どうしてこんな事になってしまったのだろう。

いままで、何て事無く幸せな、父が居なくても幸せな日々を送っていたのに。

どうしてこんな事になってしまったのだろう。

その本当の意味を知る事になったのは、母が描いていた“その絵”が、完成に至った時だった。

l
d
r
a
w

75：レイニーブルー・ノスタルジア『母、最後の傑作』

母はきっと、その絵で知らしめたのだ

自分と言う存在を

「……」

「……起きないわね、二人とも」

フォルテとレイは、保健室で並んで寝ている、キクマサとルナシーを交互に見た。あの、雨の中を、二人はどんな思いで帰ってきたのだろう。そもそも、この二人に何があったのかを知らない。

キクマサが凄い熱を出して、倒れた。

それをルナシーが知らせにきて、その後彼女も寝込んだから。

「まったく、バカだよ！！　あんな雨の中何やってんだか！！」

「……それだけ、キクが思い悩んでいたって事よ」

フォルテは複雑そうに、壁にもたれかかって腕を組んだ。キクマサの苦しみに、本当の意味で気がついていたのはルナシーだけなのかもしれない。

「……ったく……」

やるせないのは自分自身。
こんなことになるなんて思っていなかった。

レイも、丸い椅子に座って、静かに寝ている二人を見つめながら、今の自分に出来る事が何も無いのを、改めて思い知った。

キクマサは何も言ってくれなかった。
彼はそう言う人だ。今まで自分から、“自分”の事を話した事が無い。

何も知らなかったんだ。彼の事を知っていた様で、何にも。

キクマサは深い深い眠りについていた。
過去を行き来しながら、再び全てを実感するために。
忘れる事なんて出来ないんだと、思い知るために。

それは、クリスマスの日の事だった。
家に殺伐とした空気が流れ始め、キクマサ自身ももう、誰を頼る事も出来ず、不安を抱えながら生きる日々。そんな時にクリスマスなんて意識出来なかったけれど、それでも少しは期待しながら家へ帰ってきた。

いつもなら、クリスマスにごちそうを用意する母。決して料理は上手でなかったけれど、キクマサにとっては、“母”が一生懸命造ってくれた事が嬉しかったのだ。

そう、今までなら、家に帰れば母が居て、一緒にクリスマスを祝ってくれていたんだ。

「……」

家へ帰った時から、何だか嫌な気がしていた。
扉を開けた時から漂ってくる静けさと寒気。不気味なまでの。

「……母さん……」

キクマサは母を捜した。カバンを玄関に置き去りにして、居間を覗くけどそこには居ない。そこに居ないと言う事はアトリエに居るのだろう。彼は階段を上り、母がいつも絵を描いているアトリエへ向かった。

階段を上る足取りの重い事。何でだろう、こんなに胸がざわめくのは。

キイイイイイ……

彼はゆっくり扉を開いた。
開いた時には、もう全てが理解出来た。

もう、何もかもが終わったのだと、理解出来た。

“ホール”

共に行きましょう

このくらい穴の中へ

共に生きましょう
この暗い水底で

血が、その黒い点に吸い込まれながら私を誘う
そこは、私を突き落としたあいつらを引きずり込むための大ホール

／つづく

「……はっ……か、母……さん……」

目の前にまず、天井からぶら下げたヒモに、首を吊った母の姿が。
その、母の下に敷かれた、彼女の大きな絵。まるで、暗い穴を描いたような、中心が漆黒に描かれた油絵。

母は、その穴の中に吸い込まれているようだった。

キクマサは、瞬きすら出来なかった。
自分は母の亡骸に、一種の芸術性を見いだしてしまったのだ。

空間、絵、母は全てを取り込んで、今ここに、一つの美術品が完成していた。母はそれを完成させるために、自らを死に追いやった。

そのイマジンストーリーを、幼かったキクマサは直で聞き取ってしまった
母の怒り、憎しみ、恨みが全て、この美術品の中に含まれている。
震えが止まらない。

文字通り、母は飲み込まれてしまったのだ。自ら描いた美術品に。

これほど、何かを恐ろしいと感じた事は無かった。

キクマサは美術品を、母を恐ろしいと、こんなにも恐ろしいと思ってしまったのだ。

悲しみ以上に、怖くて、血が凍り付きそうだ。

ぶらぶら、くるくる

ゆっくりと、母は回転していた。

暗い世界へ落ちるために。

それは、一種の大スキャンダル。世間を騒がせたニュースとなった。父は母をしっかり弔った。これでもかと言うくらい盛大に。きっと父にはこれくらいしか思いつかなかったのだ。

死んでもなお、母が何かしてくるのではないか、と。父もきっと、あの絵を見たとき痛感したのだろう。
母が怖くて仕方が無かったのだ。そういう意味では、母の思惑は上手くいったと言っても良い。

キクマサは、気持ちが切れてしまいそうだった。
あの絵を、母の死体を見つけた時から、自分の中で何かが終わったんだと確信する。

母の死体は、沢山の菊の花で包まれている。
単に、葬式だからだろうか。母の好きな花だったからだろうか。それとも、自分の夫と息子の名だからだろうか。

葬式の日も、雨だった。

「オノダ議員、隠し子がいたそうよ……」

「奥さんはそれで自殺を……？」

「まだ若い、これからの画家だったと言うのに……惜しい人を亡くしたものだ……」

色々な所で、それぞれが噂を囁く。
父は母の自殺の性で、一時マスコミの餌食であった。正直、キクマサにはどうでもいい。このまま父が叩かれ、議員を辞めざるを得なくなったとしても、それならそれで、ざまあみろだ。

でも、そんな事はほんとうはどうだってよかったんだ。

母は帰ってはこない。

この先父がどうなろうが、母は帰って来ないのだ。

母の葬式が、どのように進められ、父が何て言ったのか、そんなのが頭に入ってくる余裕なんて無かった。

ただ、母が死んだと言う事実が、自殺したと言う事実だけが、頭の中で巡っている。母はなぜ、自殺した？

誰のせいで？

それは、葬式が一段落ついた時だった。

キクマサは相変わらず、椅子に座って呆然としていた、そんなとき。

彼がある意味、目を覚ますきっかけとなったのは、父の方へ、あのミチコが挨拶に来た時だった。

「……」

キクマサはドッと、心の中で言いようの無い怒りが沸き起こるのが分かった。

それは胸を通って、口に達し、自分でも止めようも無く言葉となった。

「……これで……満足かよ……」

彼はゆっくり立ち上がり、爪が手に食い込むくらい、拳を握りしめた。

「これで満足かよ！！　お前ら二人して、まんまと母さんを殺したな！！！　母さんを……っ！！！」

勢いは止めようも無かった。キクマサはミチコがどうしても許せなくて、憎くて、彼女につかみかかろうとしたのだ。
その時、ミチコの前に、まるで彼女を庇う様に現れた青年。
彼はキクマサの腕を取り、彼を止めると、

「……止めろ！！……これは母さんのせいなんかじゃない……っ……！！」

はっきりとした口調で言いきった。キクマサを見おろし、彼を強い瞳で睨んでいる。
キクマサは瞬時に理解出来た。この青年が何者であるかを。

「……」

キクマサより、五つは上であろう、その青年。それはまるで“父”であった。父の若い頃を知っている訳ではないが、あえて言うならそう。彼はとてもとても、父に似ていた。

ああ、そうか。こいつが父の隠し子。

ミチコと父の間に生まれた、キクマサよりもずっと前に生まれた子供。

その青年の名を、キヨシと言った。とても真面目そうで、父に似た優秀な青年。
自分なんかより、よっぽど父に似ていた。息子の俺が言うんだから、本当にそうなんだと思う。

父は母が死んでから、とても忙しそうにしていたが、いくら世間が反対しようとも、ミチコと再婚するようだった。
何となくそうなのではないかと思っていたが、予想は的中。
父はキクマサに言い聞かせる様に、彼を説得しようとしていた。

「……キクマサ……頼む、認めてくれ……！！」

「嫌だ！！　どうして、どうして今更再婚なんか出来るんだよ！！　母さんは父さんが浮気していたせいで自殺したんだぞ！！！」

キクマサは父の要望を一向に受け入れられなかった。
どうしてだよ、何でだよ、と言う気持ちが大きくなりすぎて、これでは母があまりに可哀想だと思った。

「……どうしてだよ……何で再婚なんか出来るんだよ……」

母さんがどれだけ悲しみ、どれだけ嘆きながらあの絵を描いたと思っているんだ。

これでは、母さんが自殺した事が、とても都合が良かったと言っているようなものだ。

父は、頑に再婚を諦めようとはしなかった。
どうしてだか分からないが、まるでそれが、とても正しいみたいに。

「……あんな女……母さんを殺したあんな女と……」

「……ミチコが殺した訳じゃない……サキコが自殺したんだ。あれは画家の性だ」

「違う、　違う違う！！　　母さんは殺されたんだ！！！　　あの女に！！！」

キクマサがそう、思いのたけを全部吐き捨てた時だった。
父はギリと歯を食いしばると、キクマサの頬を思いきりぶったのだ。
父の瞳は悲しそうで、それでいて煩わしそうだった。

キクマサは何が起こったのか、一瞬理解出来なかった。

「いい加減にしろ、キクマサ！！！……今まで……今までミチコやキヨシが……いったいどんな気持ちで居たか、お前に分かるのか……っ！！　父のいない、父を名乗れない…あの惨めな気持ちを……」

父は、いったい何が悔しかったんだろう。
初めて見た。この人が泣いている所なんて。

父がこんなにも、ミチコとキヨシの事を思っている。今まで自分のために、あらゆるものを我慢してきた愛人とその息子を、今度こそ幸せにしたいと。

ただ、キクマサにとってそんな事、どうでも良かった。
頬を抑え、憎い気持ちを我慢出来なかったのだ。どうしてお前がそんな事言えるんだと、父を睨んだ。

「……じゃ何で、何で母さんと結婚したんだよ……。何で……何で俺を……っ…」

何で俺を生んだりしたんだ。
そんなに可愛い、自分にそっくりな息子がいながら。

キクマサは溢れる悔しさに耐えきれず、そのまま階段を駆け上り、自分の部屋に閉じこもった。
扉を閉め、崩れる様にベットに顔を埋め、その布団を握りしめる。

母さん……

今俺があいつらを受け入れたら、母さんがあまりに可哀想だ。

キクマサは、この悔しさと悲しみを、どこにも、誰にも受け止めてもらえず、ただ布団にすがりついていた。
こんなのって無い。こんな、理不尽な事、あってはならない。

悲しくて、胸が痛かった。

自分は今、本当に一人だった。

母さんはもういない。

あいつらに全てを奪われた。

そう思わなければ、今のキクマサの心を繋ぐものは、何も無かった。

l
d
r
a
w

76：レイニーブルー・ノスタルジア『カザマと言う男』

きっと、誰の中にも言い訳と言い分があった

誰かを責めなければ、やりきれなかったから

父は再婚した。
キクマサはもう、彼を止めるほどの力も存在も無いのだと、改めて痛感した。

自分が何を言っても、彼にとって自分が、ミチコやキヨシほど大切でないならば仕方が無いなと、力無く考えていた。
父はずっと前から、こうなる事を望んでいたのかもしれない。

母が死んで、一ヶ月経ったくらいだった。

ミチコやキヨシが、この家へやってきたのは。本当は新しく家を用意したかったらしいのだが、今、父が政治家として危うい立場にいるのを考慮し、ミチコがそう提案したのだ。

早すぎるだろ。

キクマサは、自分がまだ母の死を受け入れられていないと言うのに、こんな憎しみの対象でしかないこいつらを、どうやって受け入れられると言うのか。

早すぎる。父は、母が自殺した事を悲しんではいないのか。

ミチコは、不安定な父を献身的に支えているようだった。
彼女自身、とても賢い人だから、このようなときどうすれば良いかよくわかっていたし、辛い立場に耐える根性もあった。キヨシは、キクマサにはとても届かないような名門高校に通っていて、このまま東大を目指し、父のような政治家になりたいようだった。

まるで、父の行った事が正しかったような、キクマサの周囲のサイクル。
今の自分が、間違っていると言いたげな、彼らの視線。

このような奴らと共にすごし、上手くいくはずも無かった。
ミチコは、キクマサをとても扱いづらいように、いつも彼を警戒していた。最初は上手くやっていこうと、彼に優しく接していたようだが、キクマサが彼女を激しく受け入れなかったから、彼女も諦めたようだ。

キヨシは始めから、キクマサを嫌っているようだった。それはお互い様だが、彼にはやはり、今までの、長い長いキクマサへの妬みがあったのだろう。

会話らしい会話はしなかったし、キクマサはより家へ帰りたくなくなった。

家にいたって、彼らに煩わしい顔をされるだけだ。今まであの家にいたのは自分と母さんなのに、そんな事無かったかの様に、我が物顔で暮らしている。あの、母さんと過ごした空間で。

徐々に、母さんのいた面影は無くなっていった。

当然、向こうはそんなもの見たくなかっただろうし、母のアトリエは閉じられたまま。誰もあそこに近づこうとしない。キクマサだって、母に会いたいと思う一方で、母が自殺した場所へのトラウマは大きく、扉を開けようとすると震えてしまう。

そして、最も大きく失ったものは、キクマサ自身の絵を描く気持ちだった。

居間にいたら、あいつらの顔を見なければいけない。だから、絵を描こうと思っていた。

でも、描けないのだ。

筆を取ってみても、キャンバスを目の前にしてみても、いざ描こうとしたら苦しくなる。吐き気がしてくる。その油絵の具の香りが、彼を酔わせてしまう。

母がどこかで、それを見ている気がする。

絵が怖いと、彼は心からそう思ってしまっていた。

母を失った事で、彼は絵すら失ってしまっていた。

「……そんな……」

母を失い、父を奪われ、自分の居場所すら無くして、そして今自分に残っているものを考える。
何も無いじゃないか。

「くっそ……」

キクマサはイーゼルの前で、キャンバスに筆を投げつけた。しゃがみ込んだまま、拳で床を叩き、自分に絶望する。

この孤独を理解出来る者は居ない。
絵を描けなくなった恐ろしさを、この気持ちを理解出来るのは、きっと母だけだった。

家族は分離していた。

キクマサが居ない時の、父とミチコとキヨシは、とても楽しそうで、“良き家族”を絵に描いたようだった。キクマサはだんだん、本当の意味でアウェイになっていった。あんなもの見たくない。奴らが幸せそうにしている所なんて見たくない。

部屋にこもったまま、ミチコの用意した食事も食べないでいる。どうせ、俺が食卓の場に行ったら気まずくなって、嫌がられる。だからこれでいいだろ。こうであって欲しいだろ。

彼と三人の間には、そうやって深い溝が出来ていった。

そんな、ある日の事だった。

「……何だって……」

キクマサは、信じられない事実を告げられる。

ミチコと父の間に、新たな命が芽生えたのだ。色々な事に諦めがついていたキクマサだが、これには激しいショックを受けた。

この期に及んで、まだ母を侮辱するのか。

キクマサはもう、我慢の限界に来ていた。

幸せそうな二人。お前らにそんな権利、あるはずも無いのに。

「……何が嬉しいんだよ……。父さん……お前、母さんを何だと思ってるんだ。母さんを死に追いやったくせに……殺したくせに！！！」

「いい加減にしなさい！！……あなた……いつまでもいつまでも、自殺したような母親を、私たちのせいにして……！！」

ミチコはいよいよキクマサに言い返した。

ほら。本音がでた。キクマサはもう、鼻で笑うしか無かった。

「嬉しいくせに……母さんが死んでくれて、嬉しいくせに！！！」

「……キクマサ……よせ……！！」

父は頭を抱えた。ミチコの肩を抱いて、お腹の子供を気にかけながら、まるで腫れ物を触る様にキクマサを見ている。

何だよ、その目は。

「……俺が居なくなれば、完璧なんだ、そうだろ。……父さんの理想の家庭が実現するじゃないか……っ」

キクマサはもう、何がどうなろうと、どうでも良かった。むしろ、どうにでもなれと。

彼らの前で泣きたくない。

こんなに悔しくて、やるせなくて、悲しいのに、彼らの前で泣いたら負けたみたいだ。

泣くもんか。

キクマサは家を飛び出し、当ても無く走った。

今の父さんに、俺は必要ない。

新たな子供が居る。キヨシだっている。

だってそう言う事だろ。頼むからこの幸せを壊さないでくれ。彼らの瞳はそう語っていた。

空がもう暗い。とっくに夜だって言うのに、キクマサは走った。走りながら、この胸の痛みに耐えていた。

目の前が潤んで、声も無く泣いている。

一人にならなければ泣けない。誰も俺を助けてはくれない。

帰る場所も無い。

空の星は、キクマサの涙よりずっと潤っている。
河原の土手の、気持ちのいい草の上で、キクマサは寝転がっていた。

今は何時だろう。
もうずいぶんここで泣いていた気がする。

「……このまま、何もかも無くなってしまえば良いのに……」

このまま俺が居なくなっても、誰も悲しまない。
誰かに殺されたって、誰も悲しまない。

さわさわ、冬の寒い風が、キクマサを包んでいる。

寒さに凍えた自分が惨めだ。胸に温かい物は何も無いまま、いっそ
このまま死んでしまいたい。

冬の空の下、沢山の星に見守られながら、たった一人で。
胸にあふれる、切ない悲しみを誰にも渡さないで。

俺が死んだって、あいつらは胸の内できっと「ああ、良かった」って思うに決っている。
母さんの時と同じ様に。

もう、それで良いよ。
そんな事を考えていたら、また涙が溢れてきた。

お腹も空いた。寒くて凍えそうだ。

その日、キクマサは一日、その川辺で眠った。
怖くなんか無かった。小学生が夜中ずっと川辺に居たなんて、本当は大事だろうけれど。

あの家に居る方がよっぽど怖い。
孤独を突きつけられるから。

朝方、川辺で寝ていたのを巡回していた警官に見つかる。

「……君、こんな所で何をしているんだ……」

ハッと目を覚ましたキクマサは、目の前の大柄なお巡りさんに、多少驚いた。怒られるかなと思ったけれど、そのお巡りさんは凍えた彼の体に自分のジャンパーをかけてやり、

「こんなに冷えきってしまって。家はどこだい？送っていくよ」

優しく声をかける。しかし、家を訪ねられ、とっさに首を振った。

「……い、嫌だ……帰りたくない……」

「……そんな事言ったって」

「嫌だ！！！」

キクマサはガタガタ震えていた。寒さの中で寝ていたからかもしれない。体が冷えきっていたからかもしれない。
それでも彼の表情には鬼気迫る物があった。

警官はじっと彼を見て、

「……そうか……。とりあえず、この近くに交番があるからそこ

へ行こうか。……何か温かい物でも食べよう」

困った様に笑うと、キクマサの体を起こして、交番へと促した。
キクマサは不思議と、この警官の柔らかい空気に懐かしさを感じていた。

「私の名はカザマだ。君の名前は？」

「……キクマサ。……オノダ・キクマサ」

キクマサは交番の椅子の上で、温かさに身を預けながら、周りを観察していた。淡白で狭い交番だが、家よりずっと落ち着く。名乗ったその男は、自分の父よりは若く見えたが、体格の良い、爽やかな警官だった。
カザマはカップラーメンにお湯を注ぎ、フォークを持ってキクマサの前に置いた。

「こんなものしか無くて悪いね。……これ、食べな。体が温かくなるよ」

「……」

キクマサは昨日の夜から何も食べていなかった事に、今更ながら気がついた。

彼はカザマの顔色を伺いながら、そろそろカップラーメンのふたを剥がし、一口食べた。

その、温かい香り、湯気、カザマさんの視線。全てがどうしようもなく懐かしかった。そして、自分がこんなにも空腹だったんだと、こんなにも侘しかったんだと思い知る。

目の奥が熱い。

胸がキリキリする。

「……キクマサ君……」

キクマサはゆっくり、泣きながらカップラーメンを食べていた。

たまには涙を拭いながら、それでも彼は食べていた。こんな風に、何かの温かさに触れたのはいつぶりだろうか。

カザマはただ、その姿に深くショックを受けていた。

事情も、何も知らなかったけれど、彼の胸の痛みが十分に伝わってきたから。

これが、警官カザマとの出会い。

これから、キクマサにとって深い縁のある人物となっていく。

崩れそうだったキクマサの心を、当たり前のような優しさでつなぎ止めてくれた。

この人の息子はどんなに幸せだろう。

キクマサはゆっくり目を覚ました。
長い夢を見ていた気がする。目の前には白い天井しか見えない。

ザアアアア……

雨の音がする。
頭が痛い。体が熱い。

自分の状況を理解するためにベットの中から周りを見回した。
すると、隣のベットにルナシーが寝ている。頬を少し赤くさせて、
何だか苦しそうだ。

「……」

そうか。
俺は父さんに会って、熱を出してぶっ倒れたんだ。なんて情けない。
ここは、ただの保健室じゃないか。

「……ごめん……ルナシー……」

俺を追いかけてくれたんだね。
あの時、雨の中、じっと俺を見守っていてくれた。そのせいで彼女
まで熱を出して……。

ごめん。

自分がこんなに情けないと思った事は無い。
過去の、あの胸をえぐるような気持ちを、再び思い出してまで、父さんに会おうと思ったのは、俺自身の弱さだ。

きっといまだに、何かを期待していたんだ。あの人に。

「……ごめん……ルナ……。ごめんな……」

夢を見た。
どうしようもない、真実の夢を。

もういい加減、俺を解放してくれ。
俺にはもう、仲間が居るんだ。やるべき事があるんだ。

今の俺に、お前達は必要ない。

それなのに。

思い出とは無情だ。

夢は、容赦なく突きつける。あのとき味わった、深い闇を。

ldraw

77：レイニーブルー・ノスタルジア『清』

本妻の息子

愛人の息子

どちらに分があり、どちらに非があるのだろう

どちらも平等なのだろうか

キクマサは再び眠りについた。

頭が朦朧として、体が熱い。

カザマに家まで送ってもらったキクマサであったが、本当は家に帰りたくなんかなかった。
家に帰った所で、何も変わらない。今まで以上に、自信の居場所が無くなる予感しかしない。

カザマは家の玄関の前で、小学生らしからぬ深い不安そうな表情のキクマサに、そっと話しかけた。

「……何か、困った事があったらいつでも会いにおいで。おじさん、あの交番にいつも居るからさ」

彼の声が心に沁みる。カザマさんは良い人だ。胸が痛くなるくらい。

家に帰ると、そこに居たのは継母のミチコ、そしてキヨシだけだった。父は仕事で既に居ない。
キクマサが出て行った事など、もはやどうでもいい事だったのだろう。

「……どこへ行っていたのよ。……あなた……っ」

「……」

「……もしあなたに何かあったら、全て私たちのせいになるのよ……。どうしてそう、キクジさんの足を引っ張るような事ばかりするのよ！！」

「……」

ミチコの言葉は苛立ちに震えていたが、キクマサは何も答えなかった。

ああ、これが現実の世界なんだと、冷たい心で受け流す。

キヨシはミチコの少し後ろから、じっとキクマサを睨んでいた。視線が刺さりそうなほどに、彼の感情は、父ともミチコとも違う。

ミチコは震える拳をぎゅっと握りしめ、今にも泣きそうな勢いでキクマサの前から離れた。彼の前に居ると、どうしても罵声を浴びせてしまうと思ったのだろうか。彼女は冷静さを見失わない様に、頭を抱えたまま居間から出て行った。

キクマサは鼻で笑うと、そのまま階段を上り、自分の部屋に向かう。昨日からずっと外に居たせいで、予想以上に疲れている。そんな気がする。

彼が、部屋に入ろうとした時だった。

「……おい」

低い、自分を呼び止める声を聞いた。それがキヨシのものだとすぐに分かったが、キクマサは無視して部屋に入ろうとした。

「おい！！……お前！！」

キヨシは今度は声を荒げ、キクマサの襟元に掴み掛かった。

「お前……ふざけんなよ。昨日、お前が出て行った後、父さんがどれだけ心配したと思ってる…っ！！」

「……」

「お前があんな勝手な事ばかりして、それどころじゃないんだぞ、父さんは！！」

「……父さんが俺の心配なんかするもんか……。それに、今あいつが大変なのだって身から出た錆じゃないか」

キクマサは、面倒くさそうにキヨシに答えた。
どうして俺が、今のあいつの状況を心配してやらなければならないんだ。筋違いにもほどがあるだろ。

「自分の父親を、あいつ呼ばわりするな」

キヨシはギリと歯を食いしばり、キクマサに対して怒りを露にしていた。全く変な感覚だ。自分に取っては他人同然のこんな奴と、自らの父だけは一緒なのだから。

「今更……母さんを殺したようなあんな奴を、素直に父さんと呼べる奴が居たらおかしい……っ。お前に……お前に分かるもんか！！」

母を失った悲しみを。
居場所を奪われた空しさを。この侘しさを。

そのとき、キヨシはいったい，何が気に入らなかったのか、キクマサを思いきりぶった。キクマサよりも、五つも上なキヨシは、彼より頭一つ分背が高いのに、目に一杯涙を溜めて。

キクマサは一瞬、何が起こったのか理解出来なかった。
驚きの瞳で、彼を見上げる。

キヨシはキクマサをぶった手を強く握って、

「……いつまでも、自分一人が不幸だと思うなよ…。今まで、何の努力をしなくても、お前は父さんの息子だった。……今だってそうだ!!　父さんに認められる努力もしないくせに、だだをこねやがって!!……母さんも俺も、今の今まで、お前達の陰に隠れて、我慢して生きてきたんだ。父さんに認められたくて、必死に勉強して、お前に負けない様に……。それなのに……」

「そんなの!!　そんなの父さんが悪いんじゃないか!!　あいつが全て悪いんじゃないか!!!」

「違う!!!」

キヨシは大きく首を振った。何か、心の奥にしまいこんだ物を、吐き出したいかの様に。

「父さんが悪いんじゃない!!　最初に、母さんから父さんを奪っ

たのは、お前の母親なんだ！！！　お前の母親なんだよ！！！」

キヨシは先ほどキクマサをぶった手で、今度は壁を殴った。
なんなんだ。こいつはいったい、何をそんなに悔しがっている。

「嘘だ！！」

「嘘じゃない！！　俺は……この時をずっと待っていた。こうやって、母さんがもう、惨めな思いをせずに、父さんの隣で歩める日を、ずっと待っていた。……やっと、やっと夢が叶ったんだ！！！」

キクマサはキヨシの勢いに押されて、のどの奥の言葉がまるで出て来なかった。
どうしてこいつが泣いているんだ。泣きたいのはこっちだと、言いたかったのにそう出来ない。それは何でだ。

キヨシは「くそっ…」と呟いて、キクマサから顔をそらし、腕で涙を拭った。

「……父さんの息子にふさわしいのは俺の方だ。父さんが必要としているのは俺の方だ。俺の方がずっと、ずっと父さんを慕っている！！　父さんを愛しているっ！！！……お前は一生そうやって、一人でいじけてろ。父さんの迷惑になるような事をするくらいなら、この家を出て行けばいい。無理してここにいることなんかない、そうだろ……」

キヨシの瞳は、もう当然の様に「出て行け」と言っていた。
キクマサは腹の底から沸き起こる怒りに震え、

「……この家は母さんと俺の家だぞ！！」

「いい加減にしろ！！　お前の母親はもう居ないんだ！！！　居ないんだよ！！！！」

その言葉が、全てを物語っていた様に。
ここにいたって、母親が帰ってくる訳でもなく、父親に愛される訳ではない。

そうだ。

ここにいたって、別に誰も相手にしない。必要とされている訳ではない。
むしろ疎まれ、煙たがられている。

キヨシは一度舌打ちすると、乱暴に階段を下りていった。
キクマサは一時呆然と立ち惚けていたが、頭をだらりと下げたまま自分の部屋の扉を開けた。

キヨシの言っていた事は、きっと正しい。
今の父に必要なのは、キヨシのほうだ。

キヨシの方が、ずっとずっと父さんを理解してあげられる。父さんの支えとなってくれる。
そういう息子を望むのは当たり前だ。

「……っく……」

キクマサは扉を背につけ、顔に拳を当てたまま、声を殺して泣いた。
自分だって、こんな風に父さんを憎みたかった訳じゃない。父さんを愛していなかった訳じゃないのに。

だって、どうしたら良かったんだ。
母さんを忘れてまで、父さんを許す事なんて、俺には出来ない。

それから数日後の事。
二月の下旬。卒業の近いこの季節の事。

予感は、きっと心の奥にあった。

「……このまま、お前を苦しめるだけの家族ならいっそ、共に居ない方が良いのではないだろうか。」

父はそう言って切り出した。キクマサは、その言葉から全てを悟っていた。
もうすぐ俺は中学生になる。条件は、まるでそうある事が正しいかの様に揃っている。

「……中学校に進学する際、私はお前が望むなら、その近くのアパ

ートに部屋を借りよう。勿論、お前がここに居たいと言うのなら、当然ここに居ていい。しかし、ここに居るのが辛いと言うのなら、私はお前が一人でもやっていけるような環境を揃えようと思う……。」

父の語り方は、とても慈悲深い物の様に聞こえる。まるで、自分がキクマサの事を、一生懸命考えたんだと言いたげだ。しかし、そうじゃないだろ。俺がここに居たら、迷惑なだけ、そう言う事だ。

キクマサはもう、大声で言い返すほどの気力は無かった。
ああ、やっぱりね。そりゃあそうだ。半分納得出来る、それでいてこの虚無感。

とうとうお前達は、ここから俺を追い出す訳だ。
母さんを、追いつめた時の様に。

「……分かってる。……出て行くよ」

「……キクマサ……」

キクマサは、父を決して見なかった。
もう、父に期待なんてしない。自分はこれから、一人で生きていく。
父の用意した、四角い箱の中で。

「……一つだけ、頼みたい事があるんだ。……中学校を、変えたい。……もう、この街に居たくない」

「……そうか」

今まで過ごしてきた町並みを、母さんと共に生きた町並みをもう見ていたくない。

もう、あのお金持ち私立に行く必要も、見栄も、もう張らなくて良い。誰も、自分が父の息子だと分からない所へ、母の面影の無い所へ行きたい。

父はそれを受け入れた。ここから、隣の市にある、ごく普通の中学校へ。

父の借りたマンションの一部屋で、キクマサは何も残されていない自分と生きていく。

この時は流石に涙も出なかった。

空しいぽっかり空いた心だけ。してやられたなと言う、寂しい笑いだけ。

もう、どうにでもなればいい。

その気持ちが、心の奥でくすぶっていた気持ちが、このときっと吹き出した。

自分の中の葛藤すら、もうどうでもいいと思ってしまったから。

だからきっと、落ちていったんだ。
母さんが落ちた、あの暗い穴の中に。

ldraw

78：レイニーブルー・ノスタルジア『雨上がり』

長い夢が覚めたら

まず、君に謝ろう

キクマサはゆっくりと、半分目を開いた後一度瞬きをして、息を吸う。

静かな保健室の中。ああ、やっと……やっと目を覚ます事が出来たのか。あの、抜けられないかと思うような記憶の中から。

丁度いい所で目を覚ました。これ以上記憶を遡るとたまらない。ここからは、自分の弱さが露呈した時代だから。

悪い事を理解した上でしていた。何度も何度も、何だって。

カトレアさんに出会うまで。

キクマサはゆっくり右側のベットを見た。さっきまでルナシーが寝ていたのに、今はもう居ない。綺麗にベットが整えられ、窓の光に照らされている。

「……謝らないといけないって……思ってたのにな……」

彼女は自分を、あの雨の中追いかけてくれた。たった一人の孤独の象徴は、彼女が追いかけてくれた事で成立しない。それだけが、どれほどに意味があった事なのだろう。

それなのに、俺は父さんの事ばかりで、彼女にありがとうも言わなかった。

温かいベットの中。いや、自分の体が温かいのだろうか。起き上がろうと思ったけれど、上手く体が動かないのでもう少しこのままにしておこうと思った。

長い夢だった。

今の頭では、すぐに処理出来ないような感情を、沢山沢山思い出して、まるでパンクしてしまいそうだ。

ただ、何となくだけど、今なら、悲しみや憎しみの向こうに、少しだけ後悔があったのを知る。どうしてあんなに頑だったのだろう。

幼かったからだろうか。

それとも、時が経ってしまったから、そう思えるのだろうか。

「なーんーで。ヴィライアーには問題抱え込んだ奴ばっかりが集まるのかね」

「人生山あり谷ありの方が、頭おかしい創造ができるんだよ。それすなわち美術」

団長は机の上に足を乗せて、キクマサの父、オノダ・キクジの記事を見ていた。キクマサに似ているかと言われたら、そんなに似ていない。

ティアンは、口を歪めて記事を読んでいる団長を尻目に見る。

「ま、ヴィライアーの中に財閥の御曹司はいても、日本の大臣はいないからねえ。貴重な人材だよ彼は。しかも、彼の母親はカツキ・サキコだ。有名な自殺をした画家だよ。僕らはあんな風にならない様にしないとねえ」

「縁起でもない事言うなよな」

団長は新聞を机に放り投げると、大きくため息をつき、頭をかきむしった。

「キクマサの奴、父親に会っただけで高熱出したって話しだぜ。どんだけトラウマなんだよ。これであいつ、日本研修行けるのかよ！！」

「……日本がトラウマな訳じゃないでしょ。今更研修プラン変えるなんてごめんだよ」

ティアンは眼鏡を光らせて、パソコンで研修のしおりを作っていた。あと、一週間弱で新たな研修が始まる。エジプトプラン以上に計画を立ててきた研修だ。

今更変更なんて出来る訳が無い。

「別に変更する気はねえよ」

団長は机の隅に追いやられたティーカップを口に運んだが、悲しい事に一滴も残っていない。

仕様がないから自分で湯沸かし器に向かって、ティーパックを開ける。

いつもならメルベリーが気を利かせて、茶葉から入れてくれるのに、今日は彼女がいない。

色々な空しさが、お茶の表面の色に見える気がする。

「子供は親を選べない。それは、俺が一番分かっている事だ……」

「何それ。君、マフィアの……ボスの息子が不服な訳？とても良い御身分だと思うけれど……」

「ほんの一例だ。俺は別に、親父が嫌いな訳じゃないし、そんなに仲が悪い訳じゃない。……奇跡的にな」

彼は最後に、自分でも顔をしかめつつ頷く。

ティアンは特に興味も無さそうに「……あ、そーですか……」とか言っている。

何だか、いまだに信じられないのだ。

最も平凡な人生を送っていそうだと思っていたキクマサが、よりによってこんなにシリアスだったとは。

もうすぐ、彼の生まれた日本に、彼は再び降り立つ事になる。

彼の育った、あの国に。

時計の針の音の、何と大きい事だろう。
静かな空間だと、こうも聞こえてくるものなのだろうか。

ダメだな。
この４年間、出来るだけ考えないようにしてきたのに。

中学に上がって、父さん達ともうほとんど会わない様になって、カトレアさんの元で描く力を取り戻し、そして探していった。自分の絵と言う物を。

今、父やミチコ、キヨシがどうなっているのかは知らない。きっと、新しい子供も生まれて、俺の存在すら知らないでいるだろう。
別に、それはどうでもいいし、彼らが上手くいっていようと、いってなかろうと、俺はもう別の人生を歩み始めたのだから。彼らにそれを、知ってもらおうとか、理解してもらおうとは思わないし、向こうだって俺の事を忘れたいだろう。

それを、嫌だとか、悲しいとは思わない。
ならばなぜ、俺は父さんに会いにいってしまったのだろう。

「……起きた？　キク……」

「……ルナ……」

そのとき、音も無くルナシーが、保健室の扉近くに立っていた。もしかしたらずっとそこに居たのかもしれない。

キクマサは起き上がろうとしたが、ルナはそれを止めた。

「……気分はどう？……まだ、寝ていて」

彼女は小さく微笑むと、キクマサのベットに近づき、横の椅子に座る。

キクマサは何か、不思議なものを見るような表情で、彼女を見つめた。

「……どうしたの？」

「いや……さっきまで君、寝てなかったかい？　隣で……」

「……ええ。でも、私はすぐに良くなったのよ。……というか、今日が何日か分かってる？　あなた、丸一日寝ていたのよ」

キクマサは「ええっ」と、声に出すほどではなかったが、慌てて時計に目を向ける。時計を見ても何ら意味は無かったのに。時間は夕方。それは、昨日の夕方ではなく、一日を挟んだ夕方だった。

「私は今朝には良くなっていたわ。あなたはずっと……ずっと寝ていたの。……みんな心配しているわ」

「……そうなんだ……」

力が抜けていく。なんて情けない、みっともない男なんだ俺は。

せっかく熱が下がったって言うのに、恥ずかしさでまた熱が上がる。

「……あー……ダメだな俺……」

彼は手のひらで顔を覆って、恥ずかしさに堪えていた。

「どうしたのよあなたらしくもない」

ルナシーは少し吹き出して、顔を背けてくすくす笑っている。いっその事、もっと多いに笑い飛ばしてくれ。キクマサの切実な思いだった。

「……ルナシー……君には本当に…悪かったと思っている。だって、俺のせいで風邪までひかせちゃって」

「どうして？　私がそうしたくてあなたを追いかけたんだもの。あなたが謝る事なんて……」

「違うんだ…」

キクマサは急に、彼女の言葉を遮った。

「違うんだ。……本当は、追いかけてくれて嬉しかった。あのとき、俺は本当にいっぱいいっぱいだったんだと思う。……父さんを見て、何て言うか……胸の奥に隠していた物が、色々溢れてきて……どうしようもなかったんだ……」

彼は布団の中で、その拳を握りしめた。

父と目が合った瞬間に、鍵までしめていたはずの扉が、いきなり開かれた。そんな気がした。

あのとき、たった一人で雨の中に、果たして立っていられたのだろうか。

ルナシーはじっと、黙ったままだ。

「……俺はあのとき、きっと孤独を思い出していたんだと思う。そんな時に、君がいてくれたから必然的に、孤独ではなかった」

「……それでもあなたは寝込んじゃったわ」

ルナシーは口を開いた。

「俺が……弱いからだよ。……ごめん……」

「どうして謝るの？」

「……ごめん。……謝りたかったんだ。ただ、君に会ったら、謝ろうって思ってた。……君がいてくれたのに、どうして俺は、あんな風になっちゃったんだろう……」

君が側にいてくれた事を、そのときもっと意識出来なかったんだろう。感謝出来なかったんだろう。

どれだけありがたくて、昔の俺から考えたら奇跡みたいな、そんな瞬間だったのに。

ルナシーは何か、とても複雑そうにしていたが、顔をそらし気味で、

「……キクは……お父さんと仲が悪いの？」

ずっと、昨日からずっと聞きたかった事。

キクマサは困った様に笑う。

「……仲が悪いっていうか……多分もう、親子として成り立っていないんだと思うよ。……ずいぶん前に、全然会わなくなったしね」

「……」

ルナシーはその時の一瞬の、キクマサの表情を見逃さなかった。
さりげなく言っているつもりなのだろうが、瞳の向こうに見える濁った暗い色。

白い天井をただ一点に見つめ、彼はゆっくり話していた。
全てを話した訳じゃなかったが、何だかルナシーには、事情を話しておく必要がある気がした。

「……色々あって……短い間に色々ありすぎて、頑になりすぎちゃったんだ……。もしかしたら、誰が悪くて、誰が可哀想だったなんて、そんなもの無かったのかもしれない……。今なら、そう思えたりするんだ……。父さんを全部許した訳じゃないし、あのとき、黙って現状を受け入れるべきだったとは思わないけれど。……でも、俺にも言い分があったみたいに、キヨシやミチコさんにも……色々あったんだろうね」

キクマサはそう口にしながら、自分がそんな事を言える、その事に驚いていた。
時間が経ったから、だろうか。あの時の感情を忘れているのだろうか。

そう言う訳ではない。だって、さっきあんなに思い知った。夢とはいえ、俺は昔の自分と父に、母に会った。
それでも、深呼吸を置いてイメージしてみる。あの時の皆の立場と、その感情を。

「……俺もやっぱり、若かったんだなって思うんだ。……今、こ

んな風に落ち着いて、あの時の事を考えれるなんて……当時の俺では考えられない」

「……それってきっと……視野が広がったのよ。絵を描く様になって、色々な方向から物事を考えられる様になったのよ……。だって、絵ってそう言うものじゃない。対象を色んな角度を見て、表現しようとするじゃない。……それにしても、あなたは寛容すぎると思うけれど。今でも十分怒っていてもいいわよ」

ルナシーは肩をすくめた。彼女は今のキクマサしか知らない。彼の話を聞いていて、とても信じられないけれど。

でも、納得した所もある。

彼はエジプト研修の時、父親と言う物に若干反応していたときがある。まさかこのような事情があったなんて思わなかったけれ。

夕方の、日の傾き始めている窓辺。キクマサはやっと気がついた。

雨が降っていない事に。

「あれ……あんなに雨が降っていたのに……」

「……そうよ。……昨日の夜のうちに、いつの間にか止んじゃっていたわ。私も、あなたも気がつかないうちに」

気がつかないうちに。

キクマサは、何か新しい空気みたいな、清々しい気持ちだった。
ベットから起き上がって、夢中で窓辺に向かう。

何て事無い、いつもの夕焼け。
閑静な時間。

知らなかった。

本当はもう、きっと自分の中で、何かが終わり、何かが始まっていた。

氷がゆっくり、溶けていくみたいに。

悪夢は結局、きっかけだった。
雨は既に止んでいるよと。それに気づかせるための。

目覚めさせるための。

解放されるための。

ｌｄｒａｗ

79：次の舞台へ

全てに、納得のいく答えが出た訳じゃない
それでも、希望を見い出そうとしている
そんな自分が居る

行かなければ

次の舞台へ

キクマサが完全に風邪を治してしまって、約一週間が経った。
何一つ変わらない日常に、キクマサは戸惑いすら覚える。しかし、この場所に当たり前みたいに居れる事、側に仲間が居てくれる事、その日常に感謝をしたい。

父と再会してから、過去を思い出してから、より一層そう思う。

絵画科ルネ・ヴィライアーの会議が開かれたのは、よく晴れた六月下旬。もう夏みたいに暑い日が、ちらほら目立ち始めた季節。

前回のエジプト研修から一ヶ月くらい経っただろうか。いまだに生々しく、あの時の研修を思い出す事が出来るのに。

「次の研修が決った。まあ、噂で聞いた奴も居ると思うが、今回は四・五年生が中国研修。一・二・三年生が日本研修だ。……何で二手に分けるかって？……毎年恒例だからだ。特に意味はない」

団長はぶっきらぼうに、でもいつものノリで説明をしている。会議室の大きなモニターには、中国と日本あたりの地図が拡大され、団長は説明を加える。

「研修のシオリを見てくれ。今回の研修は、そんなにスパンは長くない。中国研修は主に上海と北京。日本研修は主に京都と東京だ。……あー……前回みたいな研修とは違って、かなり真面目な研修になると思う。……断定は出来ないが、“真面目でまともな”研修に」

団長はチラチラエリーゼ先生と、リース先生を見ているが、二人はあからさまに知らん顔。

ヴィライアーは皆、お互い目を見合わせてくすっと笑ったりしている。

キクマサは“日本研修”と言う今回の研修地に、ついてないなと思っていた。どうせなら他の国に行きたかった。しかも、この時期に何で、よりにもよって日本なんだ。

何で東京なんだ。

ついてないなと思っていたが、顔をしかめる程度で、本気でめちゃくちゃ嫌だと言う訳ではなかったが。

メンバーは、シオリをぱらぱらめくったり、研修地に上げられている有名なスポットの写真を見たりして心躍らされているようだった。

「まあ、今回の研修のコンセプトは、その土地の古い文化と、現代の文化の違いみたいな物を感じてもらいたい。美術においてもそうだ。それぞれ目的を持って挑む様に。特に低学年だけの日本研修は、俺にとっては気がかりでしかないんだが、まあカイにリーダーを任せようと思う。……肝心の本人がここに居ない訳だが……」

カイの席は今回もいつもながらに空席だった。

あの人は本当に忙しい人だ。学校で見るより、テレビで見ることの方が多い気がする。

その後からは、淡々と研修の説明が。何だか、前回のエジプトよりスパンが短いとはいえ、かなり充実した、考え込まれた研修のようだ。

「俺、日本って一回しか行った事無いんだよね」

「一回でも行った事あるんだ。初耳だけど」

「そりゃあ俺、沢山の国に行ってるからなあ」

キクマサとフォルテは、部屋で研修のシオリを読みながら、次の研修地に思いを馳せていた。キクマサとしては、高学年の中国研修が羨ましいと思うけれど、他の人たちは日本も中国も、同じように“外国”何だろうなと思う。

研修は一週間後に控えている。
日常なんてあっという間にすぎていくものだ。次から次へと、違う世界の扉を開いていく。

それがヴィライアーとしての義務。

「それにしても、中国と日本かあ…。どんな研修になるのか全く持って見当がつかないね。中国は団長の母国。日本はお前やナギ先輩の母国。ヴィライアーの中に、一応三人も居るのにね」

「……そう言えば……そっか。……あんまり意識してなかったや。ここに居ると、皆がどの国の人かなんて分からなくなっちゃうな」

キクマサはそっと、机の上に飾ってある、ヴィライアーの集合写真を見た。この前のエジプトで、あのギザのピラミッドの前で撮った写真を、リース先生が焼き増ししてくれたのだ。

ここに居る18人のヴィライアー。

それぞれが、それぞれの物語を持っている。それは、自身の美術感や、表現方法にも影響して、きっとこれからに繋がっていく。

俺が、俺自身が抱え込んだ過去だって。

それは、一種の予感。

この学校に来て、何だかずいぶん時間がたった気がするけれど、俺はまだ二年生なんだ。

これから、長い長い、芸術と向き合う五年間は続いていく。

世界を知る機会を与えられる。

表現を追い求めるための、きっかけとなる一瞬を、見逃す事なんてできない。

誰も、誰にも分からないこの先の未来。
次のステージ。

希望はあった。

まだ、皆がずっと一緒に居られるんだって。
絵を描いていく事を、当たり前な事なんだって思っていた。

誰がどんな過去を背負い、いまだにそれを抱え込んでいようと、この学校に居る事は変わらないと。

エジプトで撮った、皆の集合写真。

太陽の下で笑い合えた。

きっと、それが当たり前なのだと思っていた。

draw

＊番外編～ｄｒａｗバトン総集編～

『瞳に☆降るルネ・ルビー、お前はそれでもギリシア男児か！！』

今週のルネ美新聞には、このような煽り文句が書かれていて、キクマサは一瞬何事かと思った。ルネ美新聞のしつこさとねちっこさ、そして煽り文句のセンスの無さは有名だが、ここ最近はおとなしい記事ばかりだったのに。

今度のターゲットはレッド先輩なのか……

キクマサは恐いもの見たさに、新聞を手に取った。

（インタビュアー：デイヴィット・カール（デザイン科四年）

Q1有名なあなたを知らない奴は、この学校にいないとは思いますが、他科の新入生のために、自己紹介をお願いします。まず、お名前や所属をお願いします。

「ああ、はい。レッドリー・ヘッドバーンです。絵画科の五年生！称号はルネ・ルビー！もう一つの肩書きは、絵画科男子寮の寮長っ

てとこかな。」

Q2あなたはどんな人ですか?どのような性格だと言われますか?

「自分で言わせてみたら、明るい、うるさい、落ち着かない、ですかね。他人にはマメ男って言われますけどね。まあ普通だと思いますよ。」

Q3生年月日、身長体重、スリーサイズを、許される限り教えてください。

「11月12日生まれのA型です。身長は180、体重は毎日違う。……え?スリーサイズ?それって男子に聞くものなの?需要があるの?」

あなたに興味のある女子は、この学校に沢山いますからね。それなりの需要はあります。

「デイヴィット君……君は本当に立派なインタビュアーだよ……」

Q4兄弟はいますか?

「……あー……うん。……お姉さんが居るかな」

Q5ルネ・ルビーには前々から色々な噂が飛び交っていますが……例えばルネ・ダイアモンドとの交際疑惑とか……今、好きな人はいますか?もしくは付き合っている人は?

「ま　た　そ　の　は　な　し　か。だから、ナギさんとはマブダチ。親友!!男女とはいえ、色めかしい関係以外の関係って言うの

もあるんだよ」

Q6二日前、ダイアモンドのアトリエでのお泊まり疑惑が浮上していますが、そこの所、寮長としてどうお考えですか？

「……どこネタ？それどこネタ？……え？……てか、それ言いたかっただけでしょ。おかしいと思ったんだよね、今更俺の特集かよって。……え……？まあね、泊まったっていうか、日を超したって言った方が早いよね。共同制作をしてたら、そう言う事もあるでしょうよ。……残念ですが、皆さんが期待してるようなめくるめく展開はありませんでした。二人とも屍の様に、ボロぞうきんの様に寝てたって話です。まあ、当然寮長としてはよろしくないかと思いますけど、これこそ美術系の醍醐味ですよね」

Q7……一緒に寝たんですか？

「だから！！そこ食いつくか！！あちゃー！！もう、ほんっと挙げ足取るの上手いね君は！！寝てた＝倒れてただよ。皆美術系なんだから、覚えはあるだろうけどね」

Q8では、今は彼女はいないってことですね。あなたに憧れている全校女生徒は、希望を持ってもいいってことですか？

「え？……そりゃあ、未来はどうなるか分からないからね。うん。みんな、青春するんだよ☆」

Q9……では、少し簡単な質問をしましょう。好きな食べ物ってありますか？

「最近はジャパニーズ・スシーにはまってるね。サーモンとアボカ

ドを巻いたやつ」

Q10嫌いな食べ物は？

「うーん……特に無いかなあ……。前、どっかの秘境でごちそうになった、名前も分からないような虫の姿焼きは、もう食べたくないなって思ったけどさ。」

Q11癖は何ですか？

「ウインク☆ですね。好きだったハリウッド映画の俳優の真似をしてたら、癖になっちゃったっていうか」

その、星が降るようなウインクにやられた女子は多いと思いますよ。

「本当かい？全然モテないけどね」

Q12口癖は？

「神様が俺にウインクという設定を与えた様に、他のキャラクターには口癖の設定がある……。でも俺にはそんな口癖はもらえなかった様です」

Q13ルネ・ルビーと言えば、人物画ってイメージですが、絵画以外に特技ってありますか？

「家事、料理……ん？料理は家事に入るのかな？あとは、どんなアルバイトの面接にも受かるって事かな。今じゃ何でもできる様になったよ」

Q１４趣味は？

「世界の映画、ドラマ、日本アニメを朝から晩まで見る事です！！」

趣味がルネ・ダイアモンドと被ってますね。もしかして一緒に鑑賞会してます？

「……そうですけど……。何！？なんか文句ある！？なんか文句あるか！？」

いえいえ別に（笑）

Q１５実は自分は○○です。の、○○に当てはまる事ってあります？でも、秘密とかって無さそうですよね。

「実は自分はシスコンだ。サービスカミングアウトしますよ。もうどうにでもなれ」

Q１６へえ～……って、凄い事聞いちゃった！！（メモメモ）

「ははっ。そんな慌ててメモるような事でもないさ。ゆっくり書きたまえ」

Q１７明日のルネ美の掲示板はこの話題で持ち切りでしょうね……

「うん☆覚悟の上さ。俺は絶対にパソコンを開かないっ！！」

Q１８あ、最後に一つ良いですか？

「……何だい？」

Q19正直、ヴィライアーの中で苦手な奴、嫌いな奴っていますか？

「はは！！いた方が良かったかい？残念ながら、今のヴィライアーには居ないなあ」

Q20団長との不仲説が噂されていますが、真相は？

「それもどこネタですか（笑）別に、団長を仲良しって区切りにできないなあ。どっちかって言うと、仲間って感じ。団長はリーダーだからね」

Q21ルネ・テクタイトより、あなたの方が団長にふさわしかったのではないかってもっぱら話題ですが、どうお考えで？

「……ふーん。じゃあ君は、俺が団長の方が良かったって思う？俺はそうは思わないなあ。ヴィライアーの団長をしていける器じゃないよ。寮長は適任だったと思うけどさ。ヴィライアーの団長ってね、ほんと、なるべき人がなる様にできてるんだよ。きっとこれは、ヴィライアーにしか分からない。個性的な、自己主張の激しい人たちの集まりなんだから、リュオンくらい亭主関白じゃないと、誰もついていけないよ。……ま、そう言う事かな」

Q22そうですか……ま、もうちょっとネタと証拠を掴んでから、改めて伺います。俺は諦めません。

「君ってほんとたくましいよね……」

Q23では、最後に作者へ一言！

「神様……俺たちを手のひらで転がしまくる神様……扱いやすいイケメン枠で造ったはずの俺と言うキャラクターを、どうしてこんなに空気にしてるんですか！！」

Q25……おつかれさまでした。

「……あ、はい。……おつかれさまでした」

ーーーー〈終〉

「……」

キクマサはその新聞を立ち読みしていたが、買って永久保存しておこうと、レジに持って行ったのだった。

＊＊＊

『ルネ・ヴィルトンに乱入☆現代のターザン噂のルネ・コーラル！！』

相変わらず煽り文句のくどいルネ美新聞だな……とか思って通りすぎようとしたが、キクマサはその衝撃的写真に新聞を取り上げた。

これは一年生のクレハじゃないか。

クレハは赤毛のやんちゃな少年だが、正直キクマサはあまり知らない。しかし、この写真の彼は、絵画棟の二階から、「ようこそサントリーニ島へ」と書かれた布をマントにして、猛烈な笑顔で飛び降りている写真。

こいつバカだろ！！！

しかし、彼が骨折したとかいう噂を聞かないので、無事だったと言う事だろう。

写真の下には彼へのインタビューが載ってあった。

というより、新聞部はよくこの瞬間を激写したな……。

（インタビュアー：デイビット・カール（デザイン科四年）

Q1今、二階から飛び降りましたね。いったい何をしようとしたんですか？ほら、あなたの存在を皆さんに教えてあげてください。お名前と、その胸に輝く称号を！！

「え？誰お前？……俺？俺はクレハだよ。クレハ・ドルフォーーード。……絵画科の一年生さ。称号はルネ・コーラル！！知ってる？コーラルって珊瑚なんだよ！！今のは……なんだろう、ただ、風を感じたかっただけだよ」

Q2あなたに興味のある読者は多いでしょう。今の写真を撮ってますからね。あなたはどんな人ですか？ルネ・コーラル。

「……どんなって……健康的？……野生児ってよく言われるけど。でも別にゴリラに育てられた訳じゃないよ（笑）」

Q3生年月日、身長と体重を教えてください。

「あははは。１０月３１日に爆☆誕したよ！！身長は１６０、体重は４９～」

Q4あなたがロズベルト家の養子って話がありますが、かの四年生の大天才、ルネ・オパールがお兄さんになる訳ですよね？

「うん、そうだよー。血は繋がってないけど、スノーは兄ちゃんだ。スノーの上には二人また兄ちゃんが居るよ。皆ここのルネ・ヴィライアーだったんだぜ！！どーだ！！」

Q5うーん。……この手の話は、あなたにはまだ早いかもしれませんが、好きな人って居ます？

「……（ポカーン）」

ですよねーーーー！！！

Q6じ、じゃあ、どんな子が好みかな？

「……（ボケー）」

で、ですよねー！！そうですよねーーー。見るからにそう言うのに無縁そうですもんねーー。あ、失礼……（汗）

Q7あ、え、えっと、好きな食べ物ってあります？

「チョコーーーーー！！！俺チョコレート中毒だからさ、ヘビーチョコラーだからさ！！この前お医者さんに、これ以上チョコ食べるとヤバいよって言われたけど仕方ないよね。だって食べないと死んじゃうし」

Q8嫌いな食べ物は？

「何でも食べるよ」

Q9癖ってありますか？

「癖？……飛び降り癖かな。……とにかく風を感じたいんだ。あと歯ぎしり」

Q10……。あ、じゃあ、口癖ってあるかな？

「ないよ。あるかもしれないけど、俺知らない。分からない」

Q11一年生でルネ・ヴィライアーに選ばれるのってもの凄い事なんだけど、選ばれた時どうだった？

「……？……わーい……って感じ」

Q12……。野性派な絵画を描くそうですが、好きな色ってありますか？嫌いな色は？

「好きな色はねえ、カドミウムグリーンとセピア！！嫌いな色はライトレッドとカーマイン」

Q13他に特技ってある？

「俺ねえ、授業中にねえ……木を掘って筆箱とか作ってるの。リース先生にうるさいって怒られたけど、筆箱は褒めてもらったよ。」

Q14……流石ですね。じ、じゃあ、趣味を教えてください。

「……飛び降りる事かな。風を感じたいんだ」

Q15実は自分は○○だ！！

「……うわあ、これ、マジで物語に影響でちゃうよ。俺メインの話って、もろこの質問じゃん！！だからみんな、本編まで待っててくれよう！！」

Q16そ、そうなんですか。なら無理に聞けませんね。神様に怒られますね。

「そうだよ。最悪君、首になっちゃうよ！！次から別の人がインタビュアーになってるよ！！」

Q17怖い物知らずなルネ・コーラルだけど、苦手な物ってある？

「……月かな～満月だな～……気分悪くなるから。あと火もダメだな……気持ち悪くなるから」

Q18へえ、意外ですね。

「そう？君もトノサマバッタ苦手そうな顔してるよね（笑）」

Q19じゃあ、最後に作者へ一言！！

「俺の卵のフラグはどこへいったの？このままだったら卵食べちゃうよ？生まれる前に食べちゃうよ？目玉焼きにせざる終えなくなるよ？」

Q20……お、おつかれさまでした。引き止めてすいません。

「どーも。……ってあああああああ。会議に遅れちゃう！！団長に怒られる！！！」

ーーーー終

「……」

スッゲエや。

キクマサは、あのインタビュアーさえもドン引きさせるクレハのカオスっぷりに、改めて感心させられたのだった。

＊＊＊

【フォルテでバトン】

普通の天気の日。

ヴィライアーになりたての頃、新人はそれぞれ集められてルネ美新聞の取材を受けた事があった。

勿論その中にフォルテもいたわけだが、インタビュアーの、この興味の無さそうな顔。

そんなに俺がどうでもいいですか！！

フォルテは用意された破れたパイプ椅子の、その破れた部分を避けながら座り、失礼きわまりない新聞部の態度にイラッ☆としていた。

しかも、インタビュアーは、そばかすだらけのぽっちゃりした、何かを間違ったようなチャラ男だ。見ているだけでとてつもない憤りを感じざるをえない。

チャラ男は気怠そうな口調で、適当な質問をする。

Q1『んでは～あなたの事を簡単に自己紹介してくださいっす』

「……俺はフォルテ・ゴッドバルトです。二年生の推薦ヴィライアー。称号はルネ・クリスタル。父が考古学者で、幼い頃からくっついて世界中を見てきました。趣味は研修と、宇宙の端について思いめぐらせる事です。そしてー」

『あ、もういいっすいいっす。時間ないっすから～次行きます』

「……」

【ノーマルな質問編】

Q2『あなたの特技を～一つ自慢してくださいっす』

「特技か……美術系の俺たちには難しい話ですね。……一般的に見て、そりゃ絵画って言えるだろうけど、ここにいる限りそうも言えないから。……うーん、雑学が多いって事じゃないかな……考古学しかり、政治しかり、この学校にいる人じゃ珍しいタイプなんじゃないかな」

Q3『いつものメンバーで集まって王様ゲームをやったところ、貴方が王様のクジを引きました。この王様ゲームでは、命令する人を王様が自由に選ぶことが出来ます。あなたは、誰に何を命令しますか？』

「……へ？」

『いやだから、王様ゲームで～』

「あ、分かった分かった、わかりました。……うーんそうだな……普通王様ゲームっていうのは、合コンなんかで女子といちゃつくための理由をつけるためのものだけどね。……ここはっ……やっぱりそういったたぐいの方が良いのだろうかっ……だったら、メルベリー先輩に膝枕してもらうのも捨てがたいけど、シャルロ先輩にボロぞうきんのように踏みつけられてみたいとも思う！！ザ・男のロマン！！」

『……！！　いいっすねえ！！』（キラキラ）

「食いついたっ！？お、おい、そこだけ一生懸命メモしてんじゃねえよ！！」

Q4『あなたがもし一日だけ誰かと入れ替われるとしたら、誰と入れ替わって何をしたいですか？』

「……キクマサと一日変わって、あいつの記憶力の無さのメカニズムを検証してみたい」

Q5『あなたのオフの日の過ごし方を教えてください』

「基本的に寮にいるときは絵描いてるよな。キクマサ達と。……ロングバケーションは実家に戻って、親父の奴隷のように働かされてる。バイト代出るから良いけど……」

【シリアスな質問編】

Q6『あなたの一番大切な人は誰ですか？　その人に対する気持ちも語ってください』

「！？」

『こっち的には好きな人って解釈してもらいたいんですけど～。良いネタ無いと、この記事カットされかねないんで～。ルネ・ペトリ

ファイウッドとの関係が噂されてんですけど、そこんところどうなんでしょうか』

「……ん……ん？……え？？……あ、レイは何て言うか、お隣さんだったから幼なじみっていうか。なぜか行くとこ行くとこあいつがいるっていうか。てか、噂なんか無いでしょう！！どっちかって言うと仲悪いよ俺ら！！……まあ、癇癪持ち出し、面倒のかかる奴だけど……絵の実力は尊敬してる。……画家としては一番好きって言えるかもしれないな」

『……ふ～ん……』

「……なんだよ、そんな目でこっちを見るな」

Q7『もしも明日世界が滅んでしまうとしたら、大切な人に何を言いたいですか？』

「それほど大切な人いたっけか？……もし世界が滅びようものなら、この素晴らしい歴史と文明も無くなってしまうってことだろ？だったら、そうならないように、まず命張るね、俺は」

Q8『恋愛感情のない相手で、あなたがパートナーとして一番信頼している相手は誰ですか？　その理由も教えて下さい』

「そりゃあ、二年生の皆だろ。あの４人でいるときが最高に楽しいし、落ち着けるね。まあ、ルナさんやレイは女の子だから、たまに距離を感じるけど、キクマサはルームメイトだし気もあうからね。……ただ、あいつ本当にアホだからな……記憶力ないし。でも、すっごい良い奴だよ、俺の話ちゃんと聞いてくれるし」

『……笑』

「……おい、今の笑う所じゃないぞ。お前本当イラッ☆とくるなー」

【他の作家さんのキャラクターと絡もう編】

Q9『他の作家さんの作品のキャラクターで、付き合ってみたいキャラクターは誰ですか？　理由も教えてください』

「良い質問だ。そりゃあいっぱいいるけど、『蒼い空、赤い花』（作：風花様）の巴さんかな。強く清らかかつ、女性としての品を持っている。理想的だね。ふー、うちの女子たちも見習って欲しいものだね。何かと不完全だからね。」

『……何かちょっと偉そうっすね』

「てめえが言うなよ！！！」

Q１０『他の作家さんの作品のキャラクターで、友達になってみたいキャラクターは誰ですか？　その理由も教えて下さい』

「そこはやっぱり、『睡蓮の書』（作：あやめゆうき様）のケオル様でしょう。エジプトについて聞きたい事がたんまりあるっていうか、神様社会を垣間見てみたいっていうか。知神だから、良い事お話ししてもらえそうじゃないか！！宇宙の端っこがどうなっているのか、時間に終わりがあるのか教えてくれるかもしれないじゃないか！！！」

『……結構くだらない事気にしてるんっすね……熱くなってやんのーダッセー……ププッ』

「何ーーくだらないだとーー！！（怒）貴様表に出ろ！！考古学は真理の泉チョップを食らわしてやる！！！」

フォルテが暴れ始めたので、取材は中止になったそうです。
当然この記事はカットされ、お蔵行きとなりました。

l
d
r
a
w

＊番外編～見れない夢一夜～

ここ最近良い夢を見てなかったせいで、眠るのが少し恐かった。
でも人はきっと眠らなければ、明日へ向かっていく事は出来ない。

＞ｉ８７７７―９４９＜
（猫乃鈴様作　キクマサ）

晴れた夜が好きだった。
黒より少し明るい紺色の空が、煌煌と光る月を引き立てる。それは平面的な絵画のよう。

自然物なのに、こうも引き立てる要素のある色身には驚かされる。
やはり世界の創造主は芸術家であったに違いない。

眠れなかった。
フォルテはいびきをかいて寝ていたが、キクマサは眠れなかった。

父と会った後、長く眠りにつきすぎたのかもしれない。
あの時見た夢は、いったいどのくらいの時間を巻き戻っていたのだろう。消せない過去の記憶を、どんなに時間が経っても無くならないトラウマを、たった一日で振り返る事が出来る。あの夢という不思議な現象。

窓から眺める景色に、彼は夢を見いだした。
超現象の許される、時間でさえも越えていけるあの世界。目に見えるこんな美しい世界もきっと、いつか夢の要素になる。

夢って一体何なのだろう。

「……何かフォルテみたいな事考えてないか……俺……」

キクマサは、前にフォルテが、時間がどうだの宇宙がどうだの言っていた事を思い出す。
彼いわく、人間の力で解決出来ないような事は、もう哲学だと考えた方がいいらしい。あいつは頭がいいから、そういう意味不明な事を深く考えすぎているのだろう。きっとそれが楽しいのだ。

夢もそうかな。
でも夢は確か、医学的に証明されている。自分の頭じゃきっと理解

出来ないだろうけど。

彼はふと、窓辺から下界に見える人影を発見した。

「……？」

生温い初夏の風に、彼女は導かれるように森へ向かっていた。

「……ルナ……？」

キクマサは目を凝らした。

きっとそれは、いつも一緒にいるキクマサだろうから分かる、その姿形の輪郭、雰囲気、歩き方、彼女にしかない空気。金髪の女子なんてこの学校じゃ沢山いるから。

キクマサは緩い紺のカーディガンを羽織って、静かに自室を出た。

ルナの事が分からないと、一度だけ疑問を持ってしまった事がある。

彼女はとにかく感情を露にしないし、いつも穏やかそうにしている。

そういう子なんだろうとずっと思っていたが、どうしてだろう。最近彼女の笑顔に違和感を覚えてしまう。

ルナシーはルネ・ヴィルトンの敷地内の森を歩いていた。
本当は夜、あまり寮から出ないようにいわれている。しかし、ここルネ・ヴィルトンは基本的に放任主義で縛りが無い。束縛は創造を促すときもあるが、自由な発想に結びつかない。

そんな事はどうでもいい。

今日は眠れない。
やたらと明るい月が、心地よい森のささやきが、そうさせるのか。

憂鬱な事ばかりを胸に秘めて、どうにかなってしまいそう。

何でこんなに、言い様の無い不安と気持ち悪さを抱き続けているのだろう。
こんな時に絵の事なんか考えたくないのに、やはりこの憂鬱は絵に対するものなのだろうから。

彼女は森の、一番月の光の当たっている開けた場所に出た。

ザアアアアアーーー……

夜なのに、古い噴水の流れる音がする。
この学校の噴水は、意味があるのか無いのか、よくわからない所に点在している。

「……夜なのに……」

夜なのに、水を送っている。
昼に見る太陽の煌めきをいっぱいに受けた水とは違う。

月と共鳴しているように、水しぶきはダイヤモンドみたいに厳かに輝く。

ああ。どうして美しいと言う概念がこの世に存在するのだろう。
そんなもの無ければ、芸術だって生まれなかった。

人を美しさで判断したり、美しいものとは何か、こんなに悩んだりしないのに。

私はなげやりになっているのだろうか。

「……ルナ……」

後ろから声がした。

それは、思っても見なかった事。

キクマサはルナシーを追っていた。

彼女がこんな夜中にうろついてたら、なんか危ないと思う。そんな考えもあったが、ハタと気がついた。

というか俺が危ない奴じゃないか？

これってストーカーって奴じゃないか？この前もこんな風に森で、彼女を見つけた。

もしかしたら、彼女に変な疑いを向けられるんじゃないか？

それってまずくないかな？

一時こそこそついていってたけれど、それもなんか危ない奴みたいに思えて、彼は足が動かなくなる。

どうしよう。戻ろうかな。

彼女だって子供じゃないんだ。もしかしたら男子寮の誰かと会う約束でもしてるのかもしれないじゃないか。

「……はっ……！！」

キクマサはこの前、レイが「ルナシーはエドワード先輩に告白されたのよ」って言ってたのを思い出した。

それだ！

彼は自分の腕よりも長いカーディガンの袖をぶらんとさせて、がっくりと項垂れた。

きっとそうだ。そうに違いない。

「……ルナは何も言わないからな……」

なんか自分が悲しくなる。馬鹿みたいだ。

帰ろう。

「……」

彼は月に背を向けようとした。

しかし、そう出来なかった。噴水の音、その噴水の前に立つ彼女に、何だか言いようの無い懐かしさを感じた。

どこかで、こんな光景と出くわした事がある気がする。

俺がこの学校に来た時、初めてこの学校に足を踏み入れた時に出会った、最初の美しいもの。
それが彼女と噴水だった。

止まったような時間は、あの時のデジャブ。
水しぶきは彼女から放たれている光みたいで。

「……ルナ……！」

思わず声をかけてしまったのだ。

「こんな夜に何してるんだ」

「その言葉は……そのままあなたにも言える事なのよ？」

ルナシーはクスクス笑った。いつもみたいに。

二人は噴水の側の木の根元に座って、その場に落ち着く。

ルナシーのオリーブ色の瞳は、空に浮かぶ月をまっすぐに見ている。

「……寝れなかっただけよ。今日は明るいし、外に行こうと思ったのよ」

「……外が好きなの……？君は前にも外にいたよね」

確か、夕方頃だったとおもう。あの時も彼女は一人で森にいた。

ルナシーは笑っていたが、どこか遠くを見ているような、それは寂しい気持ちにさせるような微笑み。

「……なんでかしら。建物の中って、ちょっと苦手なの」

「……初耳だな……」

「言う程の事でもないわよ。……でも、そうね……いつだって私は外に出られるんだって事を……確かめてしまうのかもしれないわね……」

「……」

どういう意味だろう。

キクマサは、少し理解に困ったような顔をしている。

もともと不思議な感性を持った子だなと思っていたが、ここ最近の彼女は少しおかしい。笑っていても心ここにあらずと言うか、何かに不安を抱えているように見える。それに気がつく事が出来たのもここ最近だけど。

「……ねえ、何か悩んでる……？」

「……え……」

ルナシーはあからさまに驚いていた。

今まで崩す事のなかった笑顔は引きつって、何と言うかぎょっとしている。

「……ルナシーってさ……あんまり自分の事話さないよね……」

「あなたにそれを言われたらおしまいね。……お父さんとの事、全然教えてくれなかったくせに」

「まあ……ね……。それはそうかもしれないけれど……」

キクマサは視線を逸らし、つい先日起こった、父との事件を振り返る。事件と言っても、ただ自分が一方的に悩んでいただけだが。

ルナシーはそんな彼を上目で見上げ、ただじっと見つめた。月の光を宿した瞳で。

「……ねえ……キクは、絵を描くの好き？」

「……そりゃあ……」

キクマサは質問されるがままに素直に答えそうになったが、突然す

ぎる問いかけに、そしてその内容に目を瞬かせる。

「……って、何それ……。ルナは絵描くの嫌いなの……？」

「嫌いな訳無いわ。嫌いだったらここにいないわよ……」

「……そうだよな……」

彼はホッと胸を撫で下ろす。嫌いだって言われたらどうしようかと思った。

しかし彼女は、その笑顔を少し曇らせて、目の前の噴水の流れを見ていた。その水面に何を思うのか。

「嫌いではないけれど……嫌になるときはあるわ……」

「……それは違うの……？」

「……どうかしら。人によっては同じかもしれないけれど、私にとっては違うわね。……あなたはそう思う事は無いのかしら。いつもとても楽しそうに絵を描いているものね……」

探るような視線は、いつもの彼女とは違うような強いものだ。

しかしキクマサは、そんな彼女の視線に気づきもしない。素直に考えて、「そうだなあ……」とか言っている。

ほんと、この人は。

彼女は呆れたように小さく息をつく。

「……うーん……嫌になるっていうか……。描けなくなった事はあったな……」

「……！？」

「……母さんが死んだ時にね。絵が恐くなったんだ……」

芸術が導きだす答え、その際どさを知った日。
母が自殺した、その時完成した美術品。その絵。

ルナシーは瞳を揺らす。

「……そう……」

私とこの人の違いは、きっとここにある。
私がこんな風に、自信を無くしたり、絵が嫌だって思ってしまうのは、絵が描けなくなる恐さを知らないからだ。それは想像した所で理解出来ない感情だと思う。

キクマサが、自分より上の人の実力を素直に受け止め、それでも希望を持ってただ純粋に絵画を楽しめるのは、絵が描けなくなる恐さを知っているからか。

「……どうしたんだルナ。君はそんな風に悩む程仕方のない絵を描いているようには見えないけどな。迷走しているのは俺の方だ…」

「……よく言うわ……」

彼女はクスッと笑った。

よく言うわ。
あなただってレイの絵の方が好きなくせに。

「あなたは迷走したって、きっと出口を見つけられるでしょう。私はそうもいかないわ」

「……そうかな」

「……そうよ。……私たちはタイプが違うわ」

タイプが違う。

あなたはレイに近い。今はまだレイに及ばなくったって、持っている物がある。

私は限界を知っている。

芸術は才能と言うものに忠実で、残酷だ。努力や苦悩に恩恵を与えるが、才能の壁だけは越えさせてくれない。

どの分野より、それが色濃い。

絵が好きだった。だからこそ極めたいと思ってここへ来た。

ルネ・ヴィライアーになった。

「……好きだからこそ、嫌になるんだよ。それは俺にだってあるさ……」

「……」

「……悪い事じゃない……と思う」

彼は星を数えているように、夜の空の向こうに視線を向けていた。
その言葉自体が、ルナシーにはどうしようもなく遠く感じる。そんな事が言えるから、あなたは凄いのだ。

キクマサは冴えた頭の奥で、全く眠たくない理由を考えた。

「……眠れないんだ。俺だって……」

「……寝付けないの……？」

「……いや、夢が恐くてね……」

彼は、長い夢を見た一夜の事を、今でも思い出す。たった一夜で味わった絶望の感覚を、恐ろしいと思っている。
噴水の繰り返し流れる音は、切っても切り離せない過去との繋がりみたい。

「夢が恐いの……？」

「……どうしてだろう。俺はこの歳になってもよく夢を見るんだ。そしてそれを、鮮明に覚えていたりする」

忘れていたいと思っていたり、思い出したくないと思っている事程、タイミング良く夢に現れたりする。
そういう事は昔からあったような気がする。

ルナシーは不思議そうにしていた。

「……変な人ね……」

「君は恐い夢とか見ないのかい……？」

キクマサは改まって聞き返す。ルナシーは首を傾げ、

「……私、ここ最近何年も、夢を見たこと無いのよ……」

あっさりと凄い事をカミングアウトした。それはキクマサが驚愕するに値する事だ。

夢、夢とは言うけれど、それは現実の事ではない。

ルナシーは夢を見ない分、彼の悩みがよくわからなかった。

そして、キクマサもまた、ルナシーの悩みが分からない。

風が少し冷たくなってきた。今は一体何時なのだろう。

「……そろそろ寮に戻ろうか……。眠れないって言っても、明日も授業があるんだし。もうすぐ次の研修だってあるんだ。」

「……そうね……。眠らないときっと、次へは進めないわね……」

ルナシーは、自分に言い聞かせるように、選んだ言葉で繕った。

眠らないで悩む人。

眠る事が恐い人。

二人は共通の事をしている様で、全く別の悩みを抱えている。

お互いが失った焦がれるものを、お互いが持っている気がする。

月が随分と明るい。
まだ夜は明けない。

噴水の音はいつだって変わらない。
時間を感じさせない。

二人はまだ分かりあえない。お互いが謎で疑問を抱く。
それは当然だ。

絵が大好きで仕方が無いのに、その感情の方向性ですら違うのだから。

良い夢が見たい。

出来れば、二人にとって気の晴れるような、明日に希望を見いだせるような夢を。

ldraw

＊番外編～見れない夢一夜～（後書き）

猫乃鈴様にファンタートを描いていただきました！！
キクマサ君をありがとうございます！！

＊番外編～ルネ美ランキング〈上〉～

いつも側にいてくれる人について

考えてみよう

『今年始めの大一番☆ルネ美ランキング祭り結果発表!!ギリシアの神に愛されたのはどいつだ!!』

今週のルネ美新聞の発行部数はいつもより多く、それなのに売店から速攻姿を消したのは、今日の新聞がいつもと少し違うから。天使と悪魔の微笑むような、誰もが気になる内容なのである。ルネ美新聞部は今日のために、ひと月前からアンケートをとっていた。

ルネ美新聞と言えば、しつこさとねちっこさ、そして煽り文句のセンスの無さで有名だが、デザイン科発の長い歴史のある部活で、今ではこの学校の生徒にとって深く浸透している新聞とも言える。ただ、内容は少し乱暴な所もあり、やれどこの科の誰が、誰と付き合っただの、誰と別れただの、有名人であればある程どうでもいい内容でさえ記事になる。ルネ・ヴィライアーにとっては最も注意すべき相手と言っても良い。ルネ・ヴィライアーと言うだけで注目されるし、新聞部も情報を得るために追っかけ回す。くだらない噂でさえ聞き逃さない。

そんな新聞部が毎年二回程行っているルネ美ランキングとは、この大きな学校にいるあらゆる人物に、募ったアンケートを元にランキングを付け発表すると言う、非常にいかがわしい人権を損ねかねない無情なランキングである。しかし、これが学園の生徒にとって需要があると言うのも事実で、この発表を心待ちにしていた人たちは多い。ある種のお祭りと化し、そのランキングに上がった者は必然的に注目される。

ランキングには数種類ある。以下である。

〈全学科共通〉

＊この学校で全てにおいて最も輝いている男子ランキング（最高ラ

ンキング）
＊この学校で全てにおいて最も輝いている女子ランキング（最高ランキング）

＊この学校で最も彼氏にしたい人ランキング
＊この学校で最も彼女にしたい人ランキング
＊この学校で最もカリスマ性のある人ランキング
＊抱かれたい人ランキング
＊抱かれたくない人ランキング

ｅｔｃ．．

以上と同等のものが、学科別に別れてランキングされているものもある。

〈ルネ・ヴィライアー編〉

＊今一番輝いているヴィライアーランキング
＊今最も気になるヴィライアーランキング
＊今年ブレイクするヴィライアーランキング
＊この人誰？ヴィライアーランキング
＊ヴィライアー好感度ランキング
＊ヴィライアー良くも悪くも話題性ランキング
＊最もイケメンヴィライアーランキング
＊最も美人ヴィライアーランキング
＊性格の良さそうなヴィライアーランキング
＊性格の悪そうなヴィライアーランキング

etc..

被っていそうな内容もあるが、それがランキングと言うものである。ルネ・ヴィライアーにとって、このようなランキングは脅威であったが、上学年になるほど、もう慣れたと言うようにもっぱら話題のネタである。

「ほーら、今回も〈この学校で全てにおいて最も輝いている男子ランキング〉の一位はリオだぜ。お前すげえな、彼女持ちで四回連続一位って……」

食堂に四年生ヴィライアーが集まっていた。フレイは今日の新聞を広げ、最も栄誉あるランキングの一位となったリオの名前を見つけた。しかしリオはあまり良い表情をしていない。微妙に疲れたような目をして、飲んでいるアイスコーヒーのストローをもてあそんでいた。

「理由：「何といっても顔がいい」「微笑みは妖精の国の王子特権」「キラキラオーラ半端無い」「金髪碧眼はもはや正義」……意味わかんねーてか恐い」

フレイは何がそんなに楽しいのか、凄く笑顔だ。

シーダはそんな、この学校で最も輝いていると名高いリオを彼氏に持っている訳だが、

「何よそのランキング。そんなのでリオの全てが分かってると思ってるのかしら」

何が気に入らないのか、机に置く握りこぶしは固そうだった。

「安心しなってシーダ。お前は今回もどのランキングにも入ってねーよ。あ、でも性格の良さそうなヴィライアーランキングの15位だ……ビミョー……」

「結構よ!!話題に上がる方がうっとうしいわ!!」

彼女は一度、その拳で机を叩いた。皆の昼食のトレイがガタガタ言う。

「フレイ……あんた自分の心配しなさいよね。……見なさい、〈抱かれたい男子ランキング〉の三位よあんた……そして、〈抱かれたくない男子ランキング〉の三位でもある……」

シャルロは新聞を覗きながら、彼の名前を指差した。

良くも悪くも話題に出やすい有名なプレイボーイ、フレイだ。彼はこの学校にファンと同じ数だけアンチを抱えていると言っても良い。

「はは。流石俺!!見ろよ……〈ヴィライアー良くも悪くも話題性ランキング〉でも六位……って、えええええええ!!!!今回の〈ヴィライアー良くも悪くも話題性ランキング〉の一位がスノーで、二位がシャルロだとおおおおお!!!!」

フレイは新聞を一度はためかせ、その名前を食い入るように見た。

しかし、冷静に考えてみると思い当たる節もある気がする。

「……そりゃそうさ。だってついこの前、ユーロピアン・アート・グランプリの賞をとって、しかも辞退したから……」

リオは顔を上げると、あの時の事を思い出すようにフッと笑った。スノーとシャルロは知らん顔をしているつもりだが、どことなく冷や汗気味だ。

「ま、あれは今後伝説になり、反面教師的な良い例として語り継がれるだろうよ……」

「……うるさいわねえ、もういいのよその事は……」

シャルロは話題を変えようと、他のランキングを見る。

「……スノーは相変わらず、〈この学校で最もカリスマ性のある人ランキング〉の上位に食い込むわね。一位になれないのはレッド先輩みたいな愛想が無いからかしら……でもレッド先輩、今回は二位だわ」

「一位は？」

「映像科の団長よ。……ほら、あの気取った感じの……ジーク・ウィリアムズ先輩……」

「……あ～ね……」

フレイははいはいと頷きながらも、多少小首をかしげる。まあ、納得出来る部分と納得出来ない部分はあるが、あの誰にも真似出来ないテンションは確かに、カリスマ性といえるのかもしれない。

フレイはあるランキングを見て、プッと吹き出した。

「シャルロ～お前また〈性格の悪そうなヴィライアーランキング〉にいるぞ。……しかも前回より順位を上げて、なんと三位だ」

「……なんですって！！前回は五位だったのに」

シャルロはそのランキングを恨めしそうに見て、ムカムカと湧いてくる腹立たしさに舌打ちした。

「シャルロは誤解されやすいよね……」

スノーはそういいながらも、顔を背けて笑っている。

シーダは口を丸くさせて、

「良いんじゃない？もう褒め言葉よ」

アイスティーのストローを口に運ぶ。透き通った氷が音をたてるのが涼し気だ。

今日はこの新聞のせいで、何かと視線が突き刺さる。

ヴィライアーを発見してはこそこそくすくすと笑っているような。

良いランキングに昇ったのならまだしも、ネタ的なものだったら恥ずかしいし、一週間はこのランキング熱は冷めないだろうから憂鬱だ。

リオは最も輝かしいランキングに昇ったのに、やたらとため息をついている。

彼にとってこのランキングはあまりに辛い。

だってこのあと、〈この学校で全てにおいて最も輝いている男子ランキング〉一位の人は新聞部に追い回され、しつこいインタビューを迫られる。

「ま、頑張れ」

フレイはポンと、軽快にリオの肩を叩き、ニヤッと笑った。
そして、斜め後方に視線を流し、

「ほーら来なすった！新聞部の連中だ！」

腕を組む。
しかも今年は、ルネ美チャンネル（校内テレビ）との協力体制にあるらしく、カメラまで連れてきた。

「みなさんお昼の中継です！！今日は大盛り上がりのルネ美ランキングですが、何と今目の前に、〈この学校で全てにおいて最も輝いている男子ランキング〉一位の、ルネ・ガーネットこと、シャンデ

リー・リオールさんがいまーっす！！」

名物キャスターとして名高い映像科４年生のアドリアン・キャロルが、高いテンションそのままで、こちらの了承も得ずにカメラを回す。リオは当然、「来たよ…」と言わんばかりに憔悴している。

「おいこら、ちょっとちょっと、カメラ回すならシーダお母さんを介してもらわないと」

フレイはカメラ目線をいちいち気にしながら、チャンネル部と新聞部たちにもの申す。シーダは腕を組んだまま、彼らを睨んでいた。その光景は全て、この学校のお昼のチャンネルで回っている。どこかで二年生達もぽかんとして見ている。

アドリアンはニッコリ笑顔を崩さずに、

「きっとこの学校で一番幸せな女子と言えば、あなたであろうルネ・カーネリアン。今回の結果、彼女としてどうですか？」

シーダにマイクを向ける。

彼女はむすっとした表情だったが、ここで落ち着いていられるのも彼女の性である。

一度ため息をついて、

「……良いことだと思いますわ。彼は見た目“だけ”では無く、絵画においても、また私生活においても尊敬出来る所がありますし。そういった意味で輝いていると言うのは納得です」

当たり障りが無いような、しかしまた皆に思い知らしめるような言

葉を選ぶ。
シャルロとスノーは顔を見合わせ笑いを堪えていたし、フレイにいたっては「まじめすぎる……」とか呟いている。これはきっとマイクに拾われた。
リオなんて顔を真っ赤にさせている。

「どうです、ルネ・ガーネット。彼女このように言ってますが」

アドリアンは眉を一度ピクッとさせて、今度はリオにマイクを向ける。

「彼女持ちのあなたが今もまだダントツで支持されていると言うことは、きっと女性陣は諦めていないと言うことでしょう。好みなど聞いてもよろしいでしょうか」

「……」

質問攻めの中、リオはたじろいでいた。
そんな質問されたって困る。彼女がいる時点で、好みがどうとかいわれても、だってシーダがいるし……。という無限ループの中にいる。

「……好みですか？……ここ数年考えても見ませんでした、シーダがいますから……」

カメラの前で言ってしまった後にボフッと顔を真っ赤にさせる。
シャルロとスノーはいよいよ顔を伏せて笑っている。

たぶんこれは、彼らチャンネル部や新聞部の期待していた答えでは

ない。

その時だ、彼らの側を、ファッションデザイン科三年のステファニー・ランドールという、非常に可愛い女子が、友達と通り過ぎようとしていた。肩までのふわふわの髪に、ぽってりとした唇が印象的な、可愛らしさと色気を共に持っているような最強女子。彼女が今回の〈この学校で全てにおいて最も輝いている女子ランキング〉一位である。

アドリアンは彼女を見逃さなかった。

「なんとなんと、〈この学校で全てにおいて最も輝いている女子ランキング〉一位のステファニー・ランドールではないですか！！ちょっと待てください！！」

彼は彼女の腕を掴んで、是非に是非にとカメラの前まで連れてくる。ステファニーはきょとんとしていた。彼女が近づいてきたことで漂う良い匂いと半端無い清潔な色気。フレイは大きく息をつき、首を振る。

「たまらんねえ……小悪魔な香りが……」

「……なんなのあれ……オーラ……？覇気……？」

シャルロは煙たそうに、お花が咲き乱れてそうな空気をはたく。

「ちょっとお二人並んでみてください！！」

アドリアンはステファニーとリオを無理矢理並べ、拍手をする。

「素晴らしい！！何と絵になることでしょう！！みなさんの憧れが今、タッグを組んでいますよ」

何のタッグだよ、と言いたくもなるが、新聞部は二人が並んでいる所を今だと言わんばかりに写真に撮っているし、この映像は学校中で流れている。食堂の野次馬からも変な喝采が上がっていたりする。また、ステファニーもノリの良い女子であったため（そこが人気の一つでもある）リオの腕に手を回し、しっかりとポーズをとっている。

「ほら、リオ先輩もカメラの前では笑わなくては」

とか言って、輝かしい微笑みで彼を見上げる。

何だか、これにはシーダはもう、どうしようもないと言うか出る幕が無いと言うか。

嫉妬とまでは行かないが、ぽかんとしてその光景を見つめるだけである。

だって、ステファニーがいることでリオはよけいに輝いて見える。

今までは自分が隣にいたから、彼の輝きと言うのをそれほど意識したことは無かったが、こうやって客観的に見ることで、いかに彼が輝いているのか分かる。

そうか、リオに憧れる女の子って、このように見えていたのね。

なるほどと思う反面、カメラのフラッシュの光の中にいる、リオや

ステファニーが遠く感じる。

フレイはぽかんと突っ立っているシーダの肩に腕を乗せ、

「ま、あれだ。……良い機会だから、リオが他の女と一緒にいる所を見とけよ……」

「どういう意味よ。私は別に嫉妬なんかしてないわよ」

「分かってるって。……二度とないだろうからって意味だよ。それにしてもお似合いだな」

彼なりに気を使っているのだろうか。

最後の言葉がよけいだが、お似合いだと私でも思うから仕方ない。

シャルロはシーダ以上にイライラした表情だったし、スノーにいたってはもうこの話題に飽きている。

「なあにあれ。まるで新カップルたんじょ～うって言いたげな空気は。……いいのシーダ！」

「なんでお前が怒ってるんだよ、たまにはシーダお母さんの懐の大きさを見習えよ」

「何だかとってもむしゃくしゃするのよ……あの女、ここぞとばかりに腕組んで……シーダが彼女ってこと知ってるくせにね！！」

シャルロは腕を組んで、インタビューやカメラのフラッシュの塊から少し離れ、文句を言っている。

「お前ってほんと性格悪いよな……」

フレイは丸めていた新聞紙を開いて、「あながちこのランキング間違ってねえな」と笑っている。女子なら普通このようなのだろうけれど、それでもだまって、嫉妬もしないでいられるシーダが凄すぎるのか。

お昼休みが終わりに近づき、やっとチャンネル部と新聞部の輩が消えてくれた。

リオはげっそりした表情で、大きくため息をつく。

「おつかれさまでした、リオ先輩」

ステファニーは笑顔で小首をかしげ、リオに挨拶をする。その仕草までもが可愛らしく、完璧である。

「……あ、ああ。……君も大変だったね」

「そんなこと無いですよ、リオ先輩ったら緊張されてるんですもの」

彼女は上目使いでクスクス笑っている。

イラッ

シャルロのイラッとバロメーターが三つ上がる。
シーダは普通に、机に放置されっぱなしの食器を片付け始めた。
ステファニーがこの場を去ろうとした時、シーダの存在を確かめ、
「あっ」と呟くと、

「すみませんシーダ先輩。私、馴れ馴れしくリオ先輩と腕を組んだりして」

深々と頭を下げる。
その瞬間、再びオーラと言うか、色気みたいなものがブワッと漂ってくる。彼女はいったい何から創られているのか。

「ん？いいのよ、ランキングの日だもの、みんなあなた達のこと知りたがっているのよ」

茶碗を片付ける手を止め、ステファニーにちゃんと笑い返すシーダの精神力に拍手を送りたい所だ。
ステファニーは顔の前で指を絡め、

「わ、ありがとうございますっ！！」

と、これまた可愛らしいお花のような笑顔で。
そしてそのまま小走りで友人達の所へ駆けて行った。まるで妖精さんだ。

「なーにが『ありがとうございますう～』よ。……あんな女……あ

んな女……絶対わざとよ……」

「とりあえず涙ふけよ。しかたねえよ、男ウケする可愛い子なんだから。仕草から愛されオーラもりもりだったろ。ありゃ確信犯だぜ、シーダは完璧に下に見られたな」

フレイは顎に手を置き、女子らしい彼女の背中を見送る。
小悪魔っぽい可愛らしさに男共がやられるのは無理も無く、わざとなのか天然かを見極めるのが難しい。

シャルロは手を握ったり開いたりして、納まりのつかない苛立ちを体中に纏っていた。

「シャルロだって十分オーラあるよ」

「種類が全く違うがな。こりゃ殺気だ」

スノーはあくびを一つして、フレイの答えに珍しく頷く。

リオはシーダと共に食器を片付けながら、彼女の様子を伺っている。

「なんか……ごめんねシーダ」

「……どうしてリオが謝るのよ。リオは何も悪くないじゃない」

シーダは顔を上げ、謝るリオに笑いかける。

シーダはいつもそうだ。このような事態でもすんなり認め、全てを許し、受容する。

信頼してくれていると言えば聞こえはいいが、

「……怒ってくれてもかまわないんだよ……？」

「……リオ……」

リオはむしろ、それが恐かった。

彼女がそのように出来た人だと知っているが、自分が逆の立場だったらきっと嫉妬してしまうのに。

いや、違う。

自分がちゃんとカメラの前で言えたら良かったんだ。

僕にはシーダがいますから、他の誰にも興味はありません、見込みもありませんって。

シーダは食器を片付ける手を止め、少し困った顔をしている。

ごめん。

君を困らせたかった訳じゃないのに。

「……ごめん……。もうすぐ授業始まっちゃうね……行こうか……」

リオは向こうでヒソヒソ話をしているフレイ達を呼んで、自分の食器をちゃんと持たせた。

こうやって、また明日からいつもの関係に戻って、自分が彼女にした仕打ちは無かったかのようになる。

ちゃんと謝ることさえ出来ない。

罪悪感は溜まっていく。

ちゃんと愛しているのに、それだけでは解決出来ない何かが邪魔をする。

l
d
r
a
w

＊番外編～ルネ美ランキング〈中〉～

不安はきっと、お互いにあったのかもしれない

信じていたって、愛故にそれは仕方の無い事

リオとシーダの関係はランキング騒動の後も特に変わり無く良好である。
ただ、リオの中で何かもやもやした焦りがあったのと、シーダの中で何か気になる不安のようなものがあっただけ。

でも二人はお互い、そのようなそぶりはまるで見せなかったし、傍目からすれば、あのときのことは無かったかのようになっている。

しかし、そうだ。
事件の起爆装置は着々と完成しつつあった。

男が一人、ある部室の隅の机に脚を投げ出し考え込んでいた。
彼の名前はデイビット・カール。デザイン科四年生の新聞部エース。インタビューすることからネタを拾ってくるまで、自画自賛できるしつこさで追及を止めないマスコミ魂を持っている。ドレッドヘアーが少し悪そうに見える、でもそこが素敵！コミカルな言い回しも楽しい！ともっぱらランキングにも顔を見せるほど、ある意味ヴィライアーとは違う方向で有名である。

デイビットは少し面白くなかった。
今回のランキングも滞りなく、いつものように盛り上がったが、何かが足りないと思っていた。大きなネタに欠けたのだ。

話題になったのはやはりシャンデリー・リオールとステファニー・ランドールのツーショット。あのような大物同士でくっつかなければ話題性に欠けるという証明になった。シャンデリー・リオールとシルフィーダ・ケイドが付き合いだしてはや二年。あのときの衝撃はいまだに覚えている。学校内はその話題で持ちきりになるくらいだった。

そりゃね、当時は良い話題をありがとう、という気分だったよ。

でも、あれから何事も無く二人の関係は変わらない。
仲が良いことは普通に考えれば良いことだが、こちらにとっては何も面白くない。

変化が無ければネタにもならない。

デイビットは新聞部の机に、ランキングの記事とネタ帳と、シャンデリー・リオールとステファニー・ランドールのツーショットの写真を並べ、新聞部らしい思考を展開していた。

そもそも、なぜシャンデリー・リオールとシルフィーダ・ケイドは付き合っているのだろう。何があって、どうにもつりあっていないように見えるあの二人が。確かに二人ともヴィライアーであるが。そもそも、今も上手くいっているのだろうか。

「……ネタが無いなら作るまで……」

彼は厚い唇をにんまりとさせて、リオの写真に指を突き立てる。まるで、銃を撃つような真似をして、何か悪巧みを思いついたような、小気味良い顔をしている。

そう、いつだって時代を動かしているのはマスコミなんだよ、と言いたげに。

それはリオの失態であった。自分の人気なんて考えたくも無い、そういった彼の心が、彼に警戒を鈍らせていた。
それはほんと、些細なことだった。たとえばリオが一人になる時間を、誰かが確認していたのかもしれない。彼だって別に、いつもシーダと一緒にいるわけではない。

そんなピンポイントで、例のファッションデザイン科のステファニーが、彼に会いに来た。ステファニーは〈この学校で最も輝いている女子ランキング〉一位の、とびきりモテる可愛い子だった。仕草も男子との関わり方も、女子友達との付き合い方もそつの無いような凄い子だ。

ステファニーの様子は、偶然リオを見つけたというようだった。

「リオ先輩！！」

彼女は先日少々知り合ったばかりのリオに、気さくに駆け寄ってきた。少し息を切らしながら、胸元にそっと手を添えて。

「……君は…」

「……はあ……先輩が見えたので走って来ちゃいました」

彼女はけなげな様子で、きらきらした汗をほほに浮かべ、首をかしげ笑う。
そう、普通ならこの様子でほとんどの男子はやられる。

「私、コレを先輩に渡すようにって言われたんです」

「……？」

彼女は一枚の写真を取り出した。
その写真は、先日取材を受けたときのリオとステファニーの写真だった。

「新聞部の人たちが、せっかくの記念だからってコレをくれたんです」

「……へえ」

正直、別に欲しいとは思わないけれど、この子がせっかく持ってきてくれたのなら受け取らないわけにもいかない。リオは、記憶に新しい実に不愉快な、その写真をしらっと見た。

いらないこんな写真。
持っていたって何の足しにも思い出にもなりやしない。

「ほら、見てください。隅に少し、シーダ先輩が写っているじゃないですか？」

ステファニーは写真の右下のほうを指差した。
そこには無表情なシーダが伺える。

彼は彼女を見つけたとき、やはり少しうれしくて、「ほんとだね」とステファニーに笑いかけた。
シーダへの思いがあったからこその笑顔だったはずだ。

しかし、その様子ははたから見れば楽しそうに談笑しているように

も見えるかもしれない。

ふと、リオは写真を見て気が付いた。
シーダの存在だけでうれしがっていたが、どうにも彼女の表情が気になる。別に笑っているわけでもないし、怒っているわけでもない。そう、ただ無表情なのだ。

彼女は自分が他の女の子と並んでいたって平気なのだろうか。

リオの中に、そっと沸いてきた妙な焦り。

「……先輩？」

ステファニーはリオの様子がおかしいことに気が付き、彼を覗き込んだ。
リオはできるだけ彼女の接近から遠ざかるように一歩離れ、それでも考える。

今みたいに自分が他の女子との接近に気を遣おうが、何も気を遣わなかろうが、シーダにとって特に意味は無いのかもしれない、と。
彼女は立派だ。芯がしっかりしていて、同じ年なのに広い心と包容力がある。そういうところに惹かれたのは事実だが、何だろう。

何なんだろう、この虚しさと焦りは。

「……ごめん……ありがとう、この写真」

リオはステファニーに軽く微笑むと、じゃあねときびすを返してそ

の場を立ち去った。
ステファニーはきょとんとしていたようだが、今のリオにそれはどうでもいいこと。

なんだろう、凄くシーダに会いたいと思った。
でも今日はきっと、もう彼女に会えない。

リオとシーダが付き合うことになったのは二年前だ。彼らが二年生のとき。
もともと二人はそれほど仲が良かったわけではなく、どちらかといえば微妙。出会ったころ、リオはシーダをあつかましく思っていたし、シーダは別にリオに恋心を抱いていたわけでもない。

そんな二人が、いろいろな事情を経てお互いに惹かれていく。
今ではバカップルとまで言われている。

しかし、どうだ。
リオは、自分にとって彼女がどれほどに必要かを考える。

きっと、自分にとって最も必要としているもののほとんどを、シーダが占めている。もちろん絵も大切だが、彼女の存在は絵と同等かきっとそれ以上だ。
しかし、彼女にとって、自分はどれほどに必要とされているのだろ

う。

もしかしたら他の四年生ヴィライアーより少し上、くらいかもしれない。いや、彼女ならありうる。彼女の平等精神ならありうる。

寮の自室のベットの上で、彼はここ最近悩んでこなかったようなことに、頭を抱えていた。

完璧すぎる王子とか言われてたって、ちっとも悩みは減らないし、自分からしてみればいやみにしか聞こえない。

同室のユリウス・デニスは今いない。胃腸炎で入院している。彼はストレスに弱い。

別にそれはどうでもいいが、彼は部屋で一人、開け放たれた窓から、夏が近い季節のからっとした風を受けて、どうしようも無いようなループする考えを巡らせていた。

まさか、こんなことになるなんて思わなかった。

『学園の王子、浮気疑惑!?相手は学園のアイドル!!』

その記事は新聞のトップに大きく掲載されていた。使われている写真はリオとステファニーの二人がにこやかに談笑している写真。

この新聞に驚愕したのは本人たちだけではない。

キクマサは何度も目を疑ったし、団長は飲んでいたモーニングティーを噴出した。四年生にいたっては朝から表情が険しい。

生徒たちの話題はもっぱらコレ一本だった。

「どういうことよ、リオ！！」

シャルロは朝ごはんを食べる前に男子寮の前で待ち伏せし、リオの前に新聞を突きつけた。

ぎょっとしたのはフレイも。その新聞に書かれている内容には驚かされる。

リオは新聞を凝視して、昨日の状況と照らし合わせてみる。

「ちょ……えええええ！！」

何だこれ。

彼は確かに昨日ステファニーに会ったが新聞に書かれているような事は何一つしっくりこない。

新聞にはこのように書かれていた。

「ランキング一位に輝いたおなじみのシャンデリー・リオールが、放課後お忍びでステファニー・ランドールと会談していた様子～！？ランキングのインタビューで二人は知り合い、意識し合ったか？？何じゃこりゃ。デザイン科の写真合成技術もここまで来るとキモ

過ぎるな」

フレイは気まずそうにしながらも、リオのフォローを入れようとするが、視線がチラチラ漂っている。スノーは朝起きたばかりで寝癖を立てたまま、あくびを一つした。

「……シ、シーダは？シーダは何て？？」

「あの子はまだ知らないわ！！新聞が売店に並ぶ前に、当番でモチーフ台のシーツを取りに行ったから」

「……」

リオはこんがらがっていた。
この写真はどう見ても昨日ステファニーから写真を受け取ったときの様子だ。どのタイミングでシャッターを押したのか、確かに写真の中の二人はとても仲よさそうに顔を見合わせて笑っている。
コレでは「この二人怪しい」と思われても無理は無いレベルだ。

「……いや……この写真は合成とかじゃなくて……」

「……は　い　？」

一瞬そばにいるシャルロ、フレイ、スノーが固まった。
リオの次の言葉を待っている。

「……なんだと？お前身に覚えがあるのか？」

フレイは「おいおい」と、冷や汗ながらに笑っている。シャルロは徐々にリオをにらみ始めた。スノーは何も変わらない。

もちろん、昨日のことは偶然で、この記事に書かれていることなんてぜんぜん真実じゃない。あのステファニーという子に魅力を感じたことなんて無い。

「……で、でもコレは……」

リオが必死になって否定しようとしたときだ。

男子寮の前の植え込みのところに、シーダが立っていた。

白いモチーフ用のシーツと、どこから手に入れたのか新聞を持っている。

彼女の表情は穏やかだった。

きっとリオのことを信じきっていて、このようなスキャンダルなんて気にならない。

そう思っているのだろう。

「……シーダ……」

リオは表情をゆがめた。この後の展開はここにいる四年生ヴィライアーには容易に想像できる。

きっと、リオが必死になってシーダに釈明をし始め、シーダは何もかも分かっていたわよ、というように彼を信じ許す。それが今までの彼らであり、そういうカップルだった。

しかし、リオの態度は今までとは少し違った。

彼はシーダの落ち着いた表情を見て、何かとてつもなく不安に駆られたのと、言いようの無い苛立ちに襲われた。こんなことになったってシーダはきっと自分を許すし疑いもしない。嫉妬なんてしないしショックも受けない。自分が逆の立場だったら気が狂いそうにな

るのに。

「……その写真は、真実だ……」

「……！？」

「……僕は昨日、その子に会ったんだ。……もしかしたら僕は、その子が気になっているのかもしれない…。あんな風にキラキラしている子はそうそういないから…」

リオは一瞬シーダから目を逸らした。
自分の中で何かがささやく。自分たちの愛は本物なのか、ただのごっこなのか。それを確かめたくはないか、と。

シーダは決して僕を怒らない。
嫉妬して欲しいなんて、もしかしたらでたらめな愛なのかもしれない。
もし僕が他の子を好きになっても、君はそのまま僕を諦めるのかい？焦ったりしないのかい？

リオの心情は複雑な念が渦巻いている。

「……」

静かだった。
リオは顔を逸らしたままだったが、思いのほかに誰も反応を見せないので顔を上げてみる。

「……あ……」

顔を上げてみて、自分がやってしまったことの、言ってしまった事の愚かさを思い知る。
誰もが目を真ん丸くさせてシーダを見ていた。

彼女は目からいっぱいの涙を流して、口を真一門に結んで泣いていた。
声を出さなかったからなかなか気が付かなかったが、彼女はぼろぼろ涙をこぼしていた。

リオは青ざめた。
一番やってはいけないことをしてしまったのかもしれない。

シャルロ、スノー、フレイも、この二人の間で固まったまま、シーダの泣き顔に言葉も出ないまま立ち尽くす。そして、チラッとリオの様子を伺ったりしている。

でも誰も動けない。何も言えない、どうしたらいいか分からない。

そんな、三つ巴みたいな状況の中、シーダは手に持つモチーフ用の布を胸にぎゅっと抱きしめ、新聞を目の前に投げつけて走って去って行った。
伺える横顔は涙にぬれ、ずっと長い間見てこなかったくらい、激しく胸を痛めているように見える。

その表情を見たとき、リオもまた胸の奥がズキンと苦しくなった。
彼女のあんな顔が見たかったのだろうか、自分は。

「……ま、ご愁傷様」

一時の沈黙の後、フレイがリオの肩に手を置いた。確実に憐れみを表して。

「大人げねぇことするなよリオ……。知ってたか？シーダだってお前と同じように、不安だったんだと思うぜ…」

「……」

ああ。

リオは頭から、シーダの泣き顔が離れない。

彼女を酷く傷つけた。

やってしまった。

やってしまった。

—draw

＊番外編～ルネ美ランキング〈下〉～

どんなに余裕を装ったって
きっと私たちが不釣り合いなのは変わらない

愕然としていたリオがすぐさま立ち上がり、シーダを追いかけて行ったのはその後だった。
その場に残されたフレイ、シャルロ、スノーは一時の沈黙のあと、お互いに顔を見合わせる。

「……っびびったあ～。シーダが泣くところなんていつぶりに見ただろ」

「……ほんと、いつぶりかしら」

そもそも、そんなに泣くことなんて無かった気もするが、いつも一

緒にいながら誰かの泣いているところを見ると焦ってしまうのが彼らである。

ふいにスノーが口を開いた。

「……シーダの両親が、戦場の武装組織に捕まったとき……」

彼は淡々とした口調だったが、そこにいる誰もがぴんと来る、はっとするようなことだった。それは二年前の、シーダとリオが付き合う前の出来事だった。

いつも元気でおせっかいで、笑顔の絶えなかった彼女の、その明るさを奪った事件。

医者であり、戦地でボランティアとして活動していたシーダの両親が、その国の武装組織に捕らえられた。その事件は世界中でニュースとなり、誰もが息を呑んで見守った。

この時代、荒れた戦場で捕らえられた者が、必ずしも生きて戻ってくる保障なんて無かった。殺された者もたくさんいたから。

フレイとシーダは視線を落とした。

「……そうだった」

そうだった。あの時彼女が泣いていたのをはじめて見て、そしてそれ以降見なかった。

今回のことが、よっぽどショックだったのだろうか。

「…馬鹿だなあ。どう見たってリオの嘘って分かるのに」

「多分シーダにも分かってたわよ。それでも、リオの口から出た言葉だって思うとショックだったんだわ」

あの二人の関係は、浅い恋愛を繰り返しそうになる学生の中でも、本物だと思える。それだけのきっかけと下積み時代があったし、お互いを大切にしているのが手に取るように分かる。

「あれだよね…。リオって、完璧とか言われてるけど、一番人間味があるよね。上下が激しいって言うか…」

「……自身が一番をれを分かってるぜ……そして後悔するんだよな、青春じゃねーか。シーダは……そういうところをちゃんと受け入れてるんだろうけどさ……」

誰かを一直線に好きでいられるのは凄い。

シャルロは視線を斜めに流すフレイをまじまじと見て、鼻で笑う。

「……あんただっていつまでもふらふらしてないで、早く良い一人を見つけなさい。そして、今度こそ出遅れないようにするのね……」

その言葉に、スノーはプッとふき出す。フレイは「はあ～？」と円を描くように振り返ったが、その眉間のしわが少しそわそわしい。

そう、誰だって、心の奥にある感情に結末をつけることができるのは、

タイミングを知っていた者だけ。

シーダは分かっていた。
リオが嘘を言っている事。それはすぐにお見通しだった。

何であんなに悲しくなったんだろう。泣いてしまったんだろう。
きっと、自分が今まで抱いてきた、自信の無さが突き刺さったのだ。
刃物みたいに、心に。

だって、私はリオのことを一番理解している。それは自信があるし、
リオに大切に思われている。
それも自信がある。

何に自信が無かったのか。それは自分自身だ。
リオの輝き、あのステファニーの輝き。あのようなものは自分には
無く、もしかしたらリオの横に立っていること事態間違いなのでは
ないだろうか。そう思ってしまう。
もちろん、恋人同士に答えなんて無いとは思っているが、一度意識
してしまったことで、すっかり自分に自信がなくなってしまった。
あの、ランキングの発表があった日、リオとステファニーが並んで
いたとき、思い知らされたのだ。

人間の輝きについて。
人々がこぞって、ルネ・ヴィルトンで最も輝いていると言うだけあ
って、それは確かにシーダにも見えた。みなに認められ、ひきつけ
られる一種の“オーラ”のような魅力。

ただ、見た目が麗しい人なら沢山いる。
そうでは無く、体中からあふれる魅力のようなもの。

そう。
ただたんに悔しかったのだ。

それだけだ。
ただの嫉妬だ。

シーダは走って走って、絵画科の女子寮の裏手に隠れた。リオならきっと追いかけてくるから、だから隠れた。今は一人になりたい。

レンガ造りの壁に背をつけ、一度涙をぬぐう。手に持つ白い布を顔に押し当て、声が漏れないように。
ゆっくりしゃがみこんで、一人で、ただひとつの単純な悲しみに浸っていた。

すぐにリオはやってきた。

「……シーダ！！シーダごめん……！！」

「……」

「……っごめん！！……ごめん！！」

彼はしゃがみこんだ彼女に合わせて、その乾いた芝生に膝をつく。
シーダは声を押し殺し、それでも上下に震える肩を抱えるように、白い布で顔を隠していた。
リオは焦っていたのと、彼女をこのように悲しませてしまった罪悪感と、自身の胸の痛みを堪えて、彼女と向き合っている。シーダの顔が見たくて、それでも白い布を無理やり引き離すこともできない。
中途半端に二の腕らへんにそっと触れて、何度も謝っている。

「……ごめん……シーダ、さっき言ったのはまったくの嘘だ。嘘なんだ……」

「……」

「……ごめん……。僕は馬鹿だ、大馬鹿だ。君を試そうとしたんだ、愚かなことに。自分だけのために……自己中心的なんだ、僕は……」

リオは、何度も何度も言葉に詰まらせ、何度も言葉を考えて、今の気持ちを伝える一番有効なワードを探していた。でも、そんなものは無かった。

「……何が完璧だ……何が一番輝いている、だ。そんなもの何の意味も無いのに……こんなとき、一番大切なことさえ見えてこない。……どう言えばいいのかさえ、分からないのに」

知っている。
シーダならこんなとき、人を包み込むような言葉と態度を知っている。

自分はそんな彼女に、何度となく救われ、癒され、そしてすがって

きた。
なのに、今自分は彼女を悲しませ、しかもそこからどうにもできない。結局自分だけが彼女に依存していて、彼女を癒す存在になれない。
情けない。
本当に情けない。くだらない。
所詮僕はこの程度なのだ。あのようなランキングでは分からないだろうけれど、これが僕なんだ。

「……知ってるわ……」

急に彼女が言葉を発した。
いつの間にか、震える肩は少しおとなしくなっていて、彼女は白い布越しに、くぐもった声を伝える。
リオははっとして、息を呑んだ。

「……あなたが本気で言ってないことくらい、分かっていたわ。……それでも悲しくなったのよ。多分、ずっと恐れていた言葉だった……」

あなたは、ステファニーが“輝いてる”と言った。
当然その通りなのだが、リオの言葉ではっきりと言われると、とても辛かった。やはり、どうしたってリオとステファニーはお似合いに見えるし、輝いている人に魅力を感じてしまうものだから。

「……酷いわ……リオ……。どうせ私にはあの子の様な魅力は無いわ……」

「……シーダ……」

リオは何度も首を振った。

自分が適当に並べた言葉が、彼女にとってとても突き刺さる言葉だったのだ。

輝き、魅力……そんなもの、自分にとってまるで意味の無いものでも、彼女はそこに大きな不安を抱えていた。

「……何言ってるんだ……僕にとって、そんなランキングなんかで騒がれる魅力より、よっぽど君のほうが輝いているように見える。……僕は君を尊敬しているし、君に劣等感を感じる……。君は僕をずっと信じてくれていたのに、僕は疑うことしかできなかったんだ……」

リオは、今まで彼女が自分を疑わずにいてくれたことの貴重さを思い知る。それが、どれほど自分を思っていてくれたことなのか。

そして、自分はやはり彼女以外を愛することはできないと知っていたのに、他の人の名前を出してしまった。彼女が許しても、自分で自分が許せない。本当に、どうしようもない男だ。

シーダは黙っていた。

少しだけ肩の力が抜けたように思えたから、リオは思い切って、顔をうずめる白い布を取り上げた。

彼女は少し驚いたように目を真ん丸くしていたが、リオの顔を見ると、再び涙をいっぱいにためた。

涙と汗にぬれた横の髪が、顔にくっついている。

「……違うの……私がもっとリオにふさわしくならないといけないのに……あなたの優しさの甘えていつまでもこんなだから……。ごめんなさい……もっと、魅力のある人になるよう頑張るから……」

「何でそんなこと言うんだよ。君はもう十分に魅力的過ぎるんだ。頼むから、これ以上僕を引き離さないでくれ……」

リオは、彼女にそんなことを言わせてしまった自分が情けなくて、必死になって彼女を抱きしめた。

こんなに、今のそのままの彼女が好きなのに、それが伝わっていなかったというのか。

シーダはまだひくひく泣いていたが、熱い彼の背中のシャツを強く握り締め、彼の肩に顔をうずめる。

「知っていて？私はあなたをとっても愛しているのよ。本当よ。あなたがいなくなったら私はきっともう誰も愛せないと思うわ。あなたが他の人を好きになったら、きっと私、生きていけないわ。そんな自己満足な愛を、あなたに押し付けたくなかったの。でももう、我慢できないわ」

「……シーダ……」

いままで、自分よりはるか高みから見守っているように感じていたシーダが、今ばかりは自分の腕の中で小さく泣いている。強い人だと思っていたのに、弱く見える。そしてそれを、いとおしいと思える。

リオは、なんだか目が覚めたような気持ちだった。

「知っているかい、シーダ。僕はぜんぜん不完全の、わがままで器の小さな男だ。だけど君をちゃんと愛している。君がもし僕に愛想をつかして逃げたくなっても、多分僕は君を手放さない。なぜなら僕には君しか愛せないからだ。愛する人のいない人生を送るつもりはないし、耐えられない。昔の僕なら、一人でも生きていけると粋がってもいたけれど、今じゃ到底そうは思えない。知っていたかい……人は一人では生きていけないと、僕に教えてくれたのも君なんだ……」

こんな初夏の暑い日差しの中、動かない彼らは熱に後押しされたように情熱的である。

しかし、お互い信じていたと思っていたのに、それが逆に裏目に出て分かり合えていない事もある。だからこそ人間愛は面白い。

リオは抱きしめている彼女をやさしく引き離すと、顔に引っ付いている髪を払ってあげ、ちゃんと確かめるようにキスをする。今までだって、何度となく何事もなく、愛を確かめてきたつもりだったけれど、今回は一種の誓いだと思える。

些細なことがきっかけだったのに、このように深く愛していると信じられる僕らなら、やはりこの恋は本物であると。

大切にしていけると。

「なんだよ、結局ただの“褒めちぎり合い”じゃねーか。くだんねーの」

「素直にうらやましいって言えば～」

「……」

どこかの茂みから、二人を覗く三人組が、今しがたの瞬間をデジカメで捉えていた。基本的に美術学生ならデジカメ、一眼レフカメラなど常備しているものである。

フレイは「くだらねー」とか言いながら、なんどもシャッターを切る。
あとでからかうネタにするのだ。

「……盗撮……」

「言っとくけど、おめーも共犯者だからな、スノー」

なんだかんだ言っても、あの二人には仲良くあってほしいのが本音である。

心配で追いかけてきたのだが、どうやら出る幕は無いらしい。
二人の邪魔にならないように、呆れたり安心したりしながら、その場を立ち去るのだ。

もう一人、茂みからリオとシーダの様子を見て、カメラを構えていた人物がいた。しかし、彼は写真を撮るのをためらい、いよいよ自重する。

少し、自分の考えていたあの二人の関係を考え直す。

所詮学生同士の気軽で身軽な、浅はかな恋愛だと思っていた。しかし、どうにもこの二人には自分の計り知れない繋がりがあり、誰かがそれを乱すことなど許されず、そもそも無理なのかもしれない、と。

悪いことをしたなと思いつつ、次のランキングには、“ベストカップルランキング”でも企画してみようかなと、すでに新しいネタを考えている。

その前に、いったいどうやって今朝の記事を話題から濁そうか。

いまここが、自分のジャーナリストとしての意地の見せ所だぞ。

デイビットはそんなことを慌ただしく考えながら、空を仰いだ。

ldraw

＊番外編～フレイのお使い〈上〉～

俺は女をモチーフとして見ることしかできない。

その体、顔、ある種の緊張した空気を描くため、最大限に愛でて一番美しい部分を探す。

フレイは自分の持っている才能がどういうものか理解している。シャルロやスノーというような天才型とは違い、またリオやシーダのような努力型とも違う。

絵画を愛しているが、常日頃描いていたいというタイプでもない。描きたいときに、描きたいものを描く。正直真面目では無いだろう。

しかし、彼の描く“女性”は艶めかしく美しく、危うい官能的な要

素を含んでいる。そこが評価され、彼もまた若手画家として注目されている。

「…あんたは女を愛せないタイプね」

五年生のエリザベータ・ワーグナーは、裸で仰向けになったまま、長い髪を無造作にかきあげる。

フレイのアトリエの、白いベットの上。

その少し離れた所から、フレイはイーゼルを立て、彼女をデッサンしている。エリザベータはフレイのモデルの常連であった。

「…俺は女を愛しているよ」

「それは女じゃなくて、モチーフとしての女よ。女の体のラインや肉感、構造…そういうのが好きなのよ。あんたはたったひとりの女を愛する事なんて出来ない。女を抱くのも結局、一番美しい姿を見極めるためでしょう?……でも、あんたはそれで良いのよ…誰も愛さなくて…」

「……」

フレイは黒いタイトなTシャツに、ジーンズというラフな格好で、襟足の長い髪をちょんと結んでいた。エリザベータの言葉に反論はしなかった。

イーゼル越しに彼女を垣間見る。

「……俺のためにいつも美しい体を保ってくれるお前の事は、良い女だと思っているよ…」

「光栄だわ」

エリザベータは口の端を上げて、意味深に微笑んだ。フレイは木炭デッサンと彼女を見比べたりして、手慣れた様子の、彼女のモデルっぷりに多少顔をしかめる。

「モデルに慣れるのも考えようだなエリザ。昔のお前はもう少し恥じらいがあって、それはそれで良い対象だったんだぜ」

「……」

フレイは一つ年上の彼女の側に近寄り、ベットの端に座った。タバコをくわえ、ライターで火を付ける。エリザベータは無言であったが、白い波打つ布の上を這って、フレイに近づくと、彼のくわえるタバコをひょいと奪った。

唇を一度舐め、そのまま彼にキスをする。しかしフレイはまるで動じない。

生々しい音以外はいたって静寂である。

「……あんたがもっと、私を良いモデルにしてくれるでしょう？」

乱れたワンレンの金髪を耳にかけるエリザベータ。フレイの瞳は覚めた灰色であったが、それは女を見ると言うよりは、向き合うモチーフをまじまじと見ているようであった。

そしてそのまま彼らは、白い布の波の中に身を委ね、泡のように昇ったり弾けたりしながら。

手でモチーフの距離感や手触り、重さ、質感を確かめるように、フレイは全身の感覚で、彼女の本質を知ろうとするのだ。フレイにとって女とはそのような対象で、彼がモチーフとして見初めた女性は、何もエリザベータだけではない。

気づけば夕方であった。とっくにエリザベータは居なくなっている。昼間の熱を閉じこめたアトリエは、思考を停止しかねないほど温い。

「っあ～…あの後寝ちまったんだな、頭痛ぇ…。シエスタってか…」

彼は汗だくの半裸のまま、背伸びをする。さて、自室に戻ってシャワーを浴びようか、どうしようかと考えながら、放置された椅子の背もたれに、無造作にかけられた制服を手に取る。学期間、校内はあくまで制服でいなければいけないので、面倒でも身につける。

いつもと変わらない学校の様子。自らインスピレーションを高める何かをしたり、どこかへ赴くかしないかぎり、平凡な毎日である。

男子寮へ帰ろうと思って、絵画科棟のロビーから渡り廊下へ差し掛かったときだ。慌ただしくフレイを呼び止めた人がいた。

「ルネ・エメラルド！！」

「……メルベリー先輩…」

なにやら急いでいる様子のメルベリーが、彼の前まで駆け足でやってくると、一枚の紙を渡す。

「ごきげんよう。もうすぐ次の研修が始まります。四・五年生は中国となります。説明会がありますので詳しくはそのプリントを読んでおいて下さい」

早口の彼女は、なんとも事務的な差し障りの無い、必要な事だけを並べるに止まる。よほど急いでいるようだ。

フレイは、そうそうお話する事のできないメルベリー嬢との、せっかくの機会なのだからと気を利かせる。

「何か忙しそうっすね。俺にできることあれば、あなたのために何だってしますよ」

にこやかに、あくまで親切そうに。

メルベリーは「まぁ」と瞳を大きくさせ、何だか嬉しそうに。

「そう言って頂けるなんてありがたいわ、ルネ・エメラルド。本当に困っていた所でしたから。よかったら、このプリントをヴィライアー全員に渡しといてほしいのだけれど……。もちろん、リュオンとティアンは結構ですけれど」

流石に、これにはフレイも「…え」と、クソ面倒くさそうだと思ったものだが、一度格好つけて言ってしまったのだから今更引けない。

メルベリー嬢のお願いを断ったらばちが当たるに決まってる。

「…わ…分かりました…」

フレイは、彼女の持つプリントの束を受け取った。丁寧にお礼を言った後、彼女は急ぐ様子でどこかへ行ってしまった。

「……さて……」

少し後悔していた。こんな面倒なこと、俺のやることじゃないぞ、と。メルベリー嬢に良い顔しときたかったからだが、どのみちあの手の女性と自分は一生縁が無いだろうから、放っておけば良かったものを。

頭の後ろに手を回し、まいったなぁと反省する。しかしまぁ、自分

の招いた仕事だから、文句も言ってられないか。

とりあえず、男子寮の奴らは夜にだって会えるから、今しか接触できない女子をターゲットにするか。そのついでに男子ヴィライアーに渡せたら儲けものだ。

「二年生ヴィライアーって、こんな所でやってたんだ～へぇ～」

「フレイ先輩!?」

当然、実技４４４号室に現れた先輩に、驚かなかった二年生はいない。みな立ち上がって、挨拶をする。素直に、うわ～できた後輩！と思う。

この中で、直接関わりを持ったことがあるのはキクマサだけだ。

「珍しいですね、フレイ先輩がこんなところにいらっしゃるなんて…」

「…ちょいと仕事を任されてね」

フレイは二年生が全員その場にいるのを、しめた！と思って、

「次の研修の説明会があるってよ」

順番にプリントを回す。当然二年生は、なぜにフレイ先輩が？と思う訳だ。

「今、何で俺が？って思っただろ」

「えっ…あ、はい…」

素直な後輩たちである。きょとんとした目でプリントとフレイを見比べたりしている。

そんなときだ。

この実技室に、予期せぬ人物が訪れた。

「あ、フレイだ。え、何があってここに？」

溌剌とした口調と、相変わらず爽やかな笑顔。やぁやぁと手を上げ割り込んで来たのは、おなじみの人だった。

「あ～レッド先輩。ちわ～」

緩い挨拶のフレイである。二人の様子を見る限り、それなりに交流があるように思える。

「先輩～♪この前言ってた例のブツ、手に入ったんで今度集まりま

しょうよ」

「でかしたフレイ君。再び“闇の視聴会”が開かれるのだね」

会話の内容はさっぱりであったが、なにやら二年生そっちのけで、お楽しみを計画中である。「夏休みのはじめにでも」と言うことで話は収まった。

「ところで、何だってフレイが二年生に絡んでるんだい？」

「…おっと…こんなところでぐずってる場合じゃなかった。もうすぐ夕飯の時間になっちまう…」

フレイは窓の外の夕焼け具合を確かめて、急に慌て始めた。

「レッド先輩、今日中にナギ先輩と会います？」

「そりゃ…もうすぐディナーだし、今夜は闇鍋しようかって言ってたから…」

「それはそれは！」

オーバーな反応を見せるフレイはレッドに、二枚のプリントを渡した。

「メルベリー嬢から頼まれたプリント、一枚はナギ先輩に渡しといて下さい！俺、今日中にヴィライアー全員分配らなきゃいけないんで！」

レッドは「いいとも」と、ウインクしたが、フレイはそれを見てい

なかった。とりあえず焦っている。
キクマサは空気を読んでみた。

「あの…俺たち多分一年生に会うんで、渡しておきましょうか？」

「…マジでか少年」

ここにきて、予期せぬ助け舟。一年生の生息地さえ分からないフレイにとっては、ありがたい申し出である。

キクマサが頷く前にすでに二人分のプリントを差し出していた。このようにして、一年生、二年生、そして五年生は片付いたのである。

「…四年生は後回しにして問題ないけど……山場は三年生か……」

柄にもなく下っ端のように学校中を駆け回っているフレイは、最後の壁にぶち当たっていた。

三年生は、カイ・ヴォストンと、ジェイル・クオーシャンである。二人とも、この学校であまり見かけないし、カイに至っては学校に来ているかも分からない。

しかも、ジェイルは男嫌いだ。

「…ルネ・サファイアには嫌われてるからなぁ…俺って」

自分で呟いて、自分で吹き出した。

エジプト研修でのことが思い出される。フレイとジェイルの二人は噛み合わない割に、お互いよく協力して頑張ったなぁという印象である。フレイにとっては割りと面白い経験であった。

しかし、あれで完璧に嫌われたのと、あれ以来全く絡んでいないのも事実である。

「……さぁて……」

彼は、もう大分弱々しくなったプリントの束をくるくるまとめて、ポンと手のひらに打った。

こみ上げる笑いはどこから来るのだろう。

少し浮かれている自分がいる。

何かを楽しみにしている。

なんでだろう。

—draw

＊番外編～フレイのお使い〈下〉～

死ぬほど男が嫌いな女

女を愛することが出来ない男

ジェイル・クオーシャンと言えば、男嫌いで有名なヴィライアーの一人である。可愛らしい顔をしているのに、常にきりっとした表情を崩さず、周りにはバリアを張っているようで、他人は近づきがたい。特に男子は半径１ｍ以上近づくことが出来ないらしい。

強気な口調と裏腹に、持ち物は女の子らしい物が多く、可愛らしいのが好きだったりする。

今日のカチューシャは白いレースのリボンが飾りの、最近手に入れたばかりのお気に入りであった。彼女は食堂へ続く渡り廊下の壁に掛かっている、大きな姿見の前で、そのカチューシャのリボンがヨレッとなっていることに気がつき、そそくさと直す。割とシンプルなデザインだが、派手すぎず地味すぎず、ジェイルの気を引く

には十分な魅力のあるカチューシャである。
彼女はそんな、お気に入りのカチューシャに夢中で気がつかなかったのだ。
背後に迫り来る脅威に。

「ルネ・サファイアっみーつけたっ！」

ポン

両肩に手を置かれ、ジェイルはあからさまにびくっと飛び上がった。
鏡に映る、自分の後ろにいる人物を、恐る恐る確かめ、そして一時の沈黙。

「……」

「……はは っ」

フレイの胡散臭い笑顔は、ジェイルにとって悪魔の微笑でしかない。
彼もまた、それを理解していたからこそ、あえてこのようにした。

「きゃあああああ！！！いやあああああ！！！」

突然の、耳をつんざく様な悲鳴を合図に、彼らの第1グラウンドスタートである。
ジェイルは肩を掴むフレイの手を、まるで蚊をしとめる様にバシィッと叩き払って、振り返ると彼を見もしないでみぞおちにグーパン

チ。必死なのか、きゃーきゃー叫びながら、そのまま風のように走り去っていった。

フレイは、彼女の猛反撃に動けず、膝をついた。

「……連打は無いだろ、連打は…」

しかしながら、どうにも楽しい気がする。果たして自分は、嫌がる彼女を見て楽しんでいるドSなのか、自分を否定されることを楽しんでいるドMなのか分からないが、何しろ新感覚である。

フレイの持っていたプリントは、彼女に渡ることは無かった。

「あんたって本当にしょうもない変態よね」

夕食の時間だった。四年生はフレイを待たずして、食堂に集まっている。後からフレイがやってきた、という感じである。

今までのいきさつをグチのように語って、四年生のメンツにプリントを配る。ジェイルに殴られた事を話せば、シャルロに変態ねぇと白けられ、その通りだなと自分でも思う。

「でもあれだね、君がそんなパシリみたいなことやってるなんて笑えるね」

「はぁ？やってらんねーよ、全く」

クスクス笑うリオの隣で、フレイは腰を落ち着かせ、大きなパンを取る。

「なぁ、もういっそ、お前たち女子がルネ・サファイアに渡してくれよ」

「ダメよ！あんたの仕事なんだから、あんたがしっかりジェイルに渡しなさい！」

「そんな～シーダお母さ～ん」

わざと泣き言のように言うフレイを、シーダは決して甘えさせなかった。少々面倒くさくなっていたフレイは、思うようにいかない事態に肩を落とす。

「ジェイルって、夕食の後は大抵温室に居るわよ」

しかし、シーダは彼に恩恵も忘れない。ヒントを与え、彼が仕事をしやすいようにしてあげる。

フレイはパンを全部食べてしまって、急いで立ち上がる。

「流石お母さん！」

と言い残し、もうくしゃくしゃの紙をむんずと掴んで、温室へ向かって一直線である。

「……なんか、フレイのキャラじゃないね、今回」

「あらスノー、あの様に走り回るフレイもたまには良いじゃない？いつもグダグダし過ぎなのよ」

フレイの背中が、食堂の人々の中に紛れるまで、彼らは目を丸くしていた。

「私ね、ジェイルとフレイって正反対のようで、少し似ている気がするの」

「それは…興味深い話だね」

リオは、ナイフとフォークを動かすのを止める。

「…言葉ではとても言い表せないけれど…」

その先を濁したシーダは、密かにクスッと笑みをこぼす。

フレイもジェイルも、そろそろお互いの価値観を壊してくれる存在が必要な気がする。

殻を壊してくれるくらいの、衝撃を求めている気がする。

託されたプリントは、残り二枚である。
いよいよ面倒になっていた彼は、そのプリントを丸めたり開いたり、手遊びをしながら温室へと向かっていた。

この学校にはいくつか大きな温室施設がある。

絵画棟の側にも、ガラス張りで、アーチ状の天井の温室植物園があった。生徒たちは、ここで絵の素材を見つけたり、写生したりするのだ。

夕食後の時間帯に、この場所へ来る者は少なかった。

正直、フレイはあまりここに来ることは無いが、ここがどのような場所かは知っている。

一歩入っただけで、まるで別の世界に来たようになる。温室植物園というだけあって暑いが、ひらりと目の前を飛び交う南国の蝶も本物で、花と土の香りを連れてくる。

造り物ではあったが、滝や池もあり、魚もちゃんと泳いでいるような立派な植物園であった。

誰も居ないのに、生命の気配はそこら中から感じる。

フレイは道に沿って歩いた。どこかにルネ・サファイアが居るのだろうか。期待感は半々である。

ジェイルは、池の周りを囲んである、木の柵にもたれて、憂鬱そうにしていた。
彼女の周りを飛び交う蝶は、肩にとまったり、カチューシャの飾りに擬したりしている。

彼女は少し反省しようとしていたのである。
先ほど、フレイを殴ってしまった。確かにあの男は苦手で嫌いだが、問答無用で殴ったのは良くなかった。

一応エジプト研修の時、助けてもらった事だってあった。いまでもそれは、鮮明に覚えている。
次会ったら、話くらい聞かなければ。

そう、まさにそのように考えていた時だった。

「あー！発見！！　次は逃がさねーからな！！」

温室の静寂をぶったぎる様な、第二グラウンドスタートを告げる威勢の良い声。
ジェイルが振り返ったときには、既にフレイが背後に迫っていた。
フレイは、ジェイルが逃げないように、彼女の後ろの柵に両手をかける。彼女を囲んでしまったのである。

「先ほどはど～も、ルネ・サファイア」

フレイはニヤリと、勝ち誇ったように笑う。ジェイルは見て分かるくらい青ざめていった。

「き、きゃあぁ！！」

「おっと！叫ぶなよ子猫ちゃん」

そんな軽いノリで、彼女の口を手のひらで覆ったが、何だか危ない男のようだと自分でも気がつく。
とりあえず腹筋に力を入れておく。

案の定、ジェイルは先ほどのように、彼に決死の覚悟でパンチを繰り出す。しかし、それを予期していたフレイには効かない。

「はい残念。さっきは不意打ちでまともにくらったけど、今回は予期してたから全然大丈夫でした～」

「！！？」

これにはジェイルも驚きである。フレイは、急いでプリントを彼女の前にかざす。

「俺はお前にヴィライアーとして、プリントを配りに来ただけだ。分かったか！　逃げないならこの手を離してやる」

「……」

プリントとフレイの顔を、疑わしげに見比べたりして、ジェイルはやっと、コクンと頷いた。

「…よーし、いい子だ…」

まるで懐かない子猫をあやすような口調で、彼はそっと手を離した。ジェイルはプリントを受け取り、すぐにそっぽむく。

「そんな用事なら、さっさと言えば良かったんだ」

「何も聞かずに、人の腹殴って逃げた奴の言うことじゃねーな。男ってだけでそんな態度なら感心しねーな」

「……」

彼女は思いの外に、気まずそうな顔をしている。「男なんてこの世界から消えて無くなればいい」くらい言ってのけるかと思ったのに。

「……さっきのことは……すまなかったと思っている……」

「……え……」

意外にも謝り始めたジェイルに、むしろ焦ったのはフレイであった。彼女の表情は、少し弱々しい。

「ダメなんだ…男というだけで拒否してしまう……」

自らの腕を抱え込むようにして、彼女はまるで、自分を守っているようであった。フレイは彼女から一歩下がって、頭をかく。

「……まさかお前から、謝罪が聞けるとは思ってなかったよ」

「私だって、罪悪感くらいある」

「……」

気まずい空気の中、滝の音だけは途切れない。音もなく飛ぶ蝶が、我々に群がるのは何でだろう。

「……何でそんなに男が嫌いなんだ。前にも聞いた気がするけどな」

「……」

「…言えないんなら、別に無理に聞いたりしないけどな…」

フレイにはまるで分からなかった。想像はいくらでも出来るが、どれも結局想像でしかない。彼女には、ここまで男を嫌いになるだけの理由が、ちゃんとある気がする。

「……きっと、お前には想像のつかない理由だ」

ジェイルは、フレイを見ないまま、それでも後からちゃんと答えた。決して内容は、理解できなかったけれど。

「……ふーん…」

瞳を細め、今のフレイにはその様に反応するしかない。淡白な、それでいて興味深さを匂わすような。

何だか、今まであまり出会ったタイプではない子だ。
強がっているくせに、どこか弱々しい。

しかしちゃんと、自分の非を認められる。それは凛とした強さである。

フレイは手を伸ばし、飛び交う蝶の群の中で、指を差し出した。すると、一匹の蝶がその指先にとまったのだ。

「おっ…さっきパンに塗った蜂蜜バターに気がついたな、こいつめ」

「……」

何やってるんだか、といいたげな視線のジェイルをよそに、フレイは指先の蝶と戯れている。

そして横目に、ジェイルに話しかけた。

「ま、男も女も所詮おんなじ人間だよ。良い奴もいれば悪い奴もいる。俺だっていけないお姉さんに何度騙されたことか…」

「……」

「でもま、美術系が偏った考え方じゃいけねぇよな。お前ならきっと、男とか女とかじゃなくて、ちゃんと“相手”と向き合えると思うけどな…」

俺が言うなよと思いながら、彼は指先の蝶に、軽くキスをする。その光景はキザっぽかったが、美しくも見えたのだ。

そのまま背を向け、彼は一度手を振る。その勢いで、蝶はひらりと、彼の指先から離れた。

「おやすみ、ルネ・サファイア」

ガラス張りの温室の外は、きっと暗い。
星と月の見ている下に、私たちはきっといる。

立ち去るフレイをただ見つめながら、「おやすみ」という言葉に夜空を見いだす。

ジェイルは何も答えられなかった。彼女は視線を心なしか落とす。

そんなとき、一羽の蝶が、そっと彼女に口付けた。
さっきの蝶だ。

「……！？」

色とりどり、沢山のビー玉が、一気に床にこぼれ落ちたような衝動。

目の前が開けるような感覚。

はっと目を上げたとき、すでに目の前には誰もいない。

それは一種の予感かもしれない。

あの女は思っている以上に興味深いかもしれない。

あの男は思うほど悪い奴ではないかもしれない。

そう思えるまでの、きらめいた夏を隠すことは出来ない。

ｌｄｒａｗ

＊番外編～強い男！～

もっと強い男になりたい

決して、家の力だけで自分を判断されないように

＞ｉ９９３１―８８６＜

（黒檀様作：一年生組です。左クレハ、右ヘル）

「てめえ、八百長してんじゃねえよ」

「……へ……」

誰も来ないような、空き教室に呼び出されたヘルは、自分より遥かに大きな体の同級生に胸ぐらを掴まれた。彼の側には狐目のお供も居る。彼は、学年で一番のいじめっ子であり、一番威張っているジャイアンである。

彼がヘルの胸ぐらを掴んで持ち上げるのは、簡単な事である。ヘルはぶらーんと地に足着かない状態で、言葉もでないくらい怯えていた。

「どうせ、お前がルネ・ヴィライアーになれたのだって、ラヴィーニ家の力だろう！　じゃなきゃ、お前みたいなへっぽこ野郎が一年生からルネ・ヴィライアーになれるのなんて、おかしいもんな」

「ですよねーですよねーマックス君」

金魚の糞みたいに、彼に賛同している、セコそうな小柄の男の子が、側で飛び跳ねている。

マックス・グリスビーというのが、この大きないじめっ子の名前である。

「……ち……違うよ……」

「ああん？　てめえ、俺様にいちゃもん付ける気か～？」

か細い震える声で、何とか反論しようとしたヘルであるが、マックスの恐い顔に睨まれ、再び口を紡ぐ。

マックスと言う男は、ジャンクフードを食べ過ぎたような体をして

いる癖に、これでも一応実力者である。彼だってヴィライアーを目指してここへ入学して来たのだから、一年生から軽々ヴィライアーとなったヘルが気に入らないのだ。

そんな時だった。

「あああああああ！！　いじめいけないんだぞおおお！！！」

パン！と軽快に扉が開かれ、赤毛の少年がそのままマックスに飛び蹴りを決め込んだ。

彼はヘルとルームメイトであるクレハ・ドルフォードである。

「げふうっ！！」

「マ、マックスく～ん！！」

ひょろっとしたお供だちは、青ざめたまま彼に駆け寄る。

クレハは仁王立ちで、倒れ込んだ彼を見おろしていた。

ヘルは、クレハの飛び蹴りの振動でついでに吹っ飛ばされ、マックス以上に遠くまで行ってしまってダウンしている。

しかし、クレハは得意げであった。

「おめえＭＡＸ！！　いい加減ヘルをいじめるのやめろよな！！」

「……出たな……野生児やろう……」

流石にマックスは、すぐに立ち上がった。蹴飛ばされた横っ腹を抑えながら、半ば無理矢理強気な笑顔である。

「どうせお前も八百長だろ！！　実力も無いくせに家の金で理事会を買ったんだろ！！」

「……は？　八百屋？　お前何言ってんだ？」

しかし、頭の弱いクレハには、難しい言葉は分からない。
マックスは拳を握りしめ、もどかしい気持ちをそれに込め、彼に殴りかかった。

大振りのパンチなんて、クレハには効かない。身軽な彼はヒョイと避けると、そのままマックスの背後に回り込んだ。

「奥義！！　かんちょーＭＡＸ！！　いざー！！！」

鈍い、痛々しい効果音が聞こえてきそうである。
クレハは邪道な技を用いて、彼に痛恨の一撃を食らわせたのだ。

「ぎゃあああ！！」

一メートルは飛び上がらんとする、巨漢のマックスは、そのまま教室を飛び出していった。
ヒョロ男はそんな彼に、必死になってついていく。

どんなもんだい！と言いたげな、クレハのどや顔をよそに、ヘルは相変わらす白目をむいてぶっ倒れていた。
せっかく、いじめっ子を追い払ったと言うのに。

「ヘルうううう！！　誰がこんな酷い事を！！」

それにやっと気づいたクレハは、彼に駆け寄って抱え起こす。ぐったりしたヘルをゆさゆさ揺さぶって、「死ぬなあああ」と叫んでいる。

悪夢にうなされているヘルの顔は、髪の毛と同じくらい白かった。さらに向こうまで吹っ飛ばされている黒いベレー帽が、妙に寂しい。

ヘルにとって、自分の家柄は重荷でしかなかった。

ラヴィーニ家といえば、イタリアのフィレンツェにある昔から力を持っていた名家であり、芸術家のパトロンとしても、歴史ある家柄である。

代々、跡継ぎとなる者はルネ・ヴィルトンに入学しており、その中でルネ・ヴィライアーとなった者は数えきれない。確かにラヴィーニ家はルネ・ヴィルトンを支援している。この学校とは切っても切れない繋がりが、創立時からあると言っても過言ではない。

もっぱら、ルネ・アクアマリンはラヴィーニ枠とも皮肉られる。

ヘル自身も、もしかしたら自分の称号は家柄によってもたらされたのかもしれない、そう思ってしまうときもある。

ルネ・ヴィライアーは基本授業料免除であるが、ヘルのようなお金を持った家の者がヴィライアーになった場合、その権利を辞退する事が多い。その分が奨学金として他の者へ回される仕組みだと言う。実際、今のヴィライアーの中にも、そのようにしている者は多いはずだ。

だから、そこを叩かれる事は無いのだが、やはり一年生からヴィライアーになったのは、他の生徒にとって面白くない事だろう。しかも自分はラヴィーニ家である。八百長だと言われても、否定出来ない自分がいる。

クレハと昼食を食べようと思って、学校の外に出た。相変わらずカラッと晴れた熱い日であるのに、クレハは外で食べたいからと、強引にそのようになったのだ。

ヘルはこう見えて、地中海の暑さには慣れているから、日差しの中でも平気である。
この学校の中には、沢山の猫を見かける事が出来る。一匹の黒猫が、じっと彼らの行方を見つめ、そのままレンガの道を横切って逃げてしまった。

大きな木の下に腰を下ろし、買って来たランチボックスを空ける。しかしヘルは、さっきの事もあり元気が無いようだった。一口ママレードサンドをかじって、それ以降食べようとしない。

「……打ち所が悪かったのか？」

「……そんなんじゃないよ……」

自分が吹っ飛ばしたくせに、遠慮なく聞いてくるクレハに、ヘルは力無く答えた。

再び、ゆっくりママレードサンドを口に運び、小さくかじる。

しかしまあ、このようにいじけている所も我ながら情けないように感じる。

クレハはほぼ二口で、そのママレードサンドを食べ終わってしまって、次のポテトサンドに手を伸ばしている。クレハだって同じような境遇であるが、このように毎日明るく、元気でいると言うのに。自分ときたら。

彼の無神経さ、鈍感さ、馬鹿さ加減が、この時は羨ましいと思う。

「ＭＡＸの言ってた事が、そんなに気になるのか？」

「ＭＡＸじゃなくて、マックスだからね、クレハ」

冷静な突っ込みの後、ヘルは大きくため息をつく。隣でクレハが、ぼりぼりリンゴをかじっている。

「……あ……」

突然、クレハが目の前を指差した。

暑い日差しの中、中央棟から絵画棟までのレンガ造りの道を、団長

がてくてく歩いている。暑いのか、胸元のシャツをハタハタさせて。

彼は脇の木の下で、クレハとヘルが昼食を取っているのに、すぐ気がついた。

そして、「おいクレハ！！」と、気づくやいなやご立腹モードであった。

彼がこちらにやってくるのを、クレハは何て事無さそうにしていたが、ヘルにいたっては恐怖で真っ青だ。

「おいてめえ！！　この前の中間テスト全部欠点って、何なんだよ！！　一桁って何なんだよ！！！」

彼は叫びながらズイズイやってきた。一度額の汗をぬぐって、切れ長のつり目を光らせて。

「……だって全然分からなかったんだもの」

「お前、このままだったら次の研修行けなくなるからな！！」

団長の焦りの表情ったら無い。クレハだって、流石にぎょっとしている。リンゴをかじるポーズのまま。

「さっき先生に言われたんだよ。次の追試で、お前がちゃんと合格しない限り、研修には連れて行けないってさ。どんだけ悪いのか見てやろうと思ったら全教科五点以下かよ！！」

「……」

ヘルは横目にクレハを見た。マジでそんなに究極に馬鹿であったと

は。

「……明日から、来週の追試に向けて特訓するからな。時間が無いんだぜ、研修は追試明けにあるからな」

「えええええ、やだあああああ！！」

「馬鹿もんが！！　お前、そんなこと言える立場じゃねえからな」

ぽかっと、クレハの頭を殴る団長。殴ったついでに、クレハがかじり始めていた板チョコが真ん中から割れた。なんだかんだ言って、この人も気苦労の絶えない人だなあと思う。恐いけれど。

「……そうそうヘル、お前はほとんど良い点数だったな、よくやった」

団長は、今度はヘルに向き直り、真顔のまま彼を褒めた。
意外であったため、ヘルは思いの外に照れくさくなる。

ここ最近、こんな単純な事で褒められたのは久しぶりな気がする。

しかし、嬉しさは先ほどの憂鬱に押しつぶされる。
もしかしたらこの人も、自分がラヴィーニ家の人間だから、とりあえず褒めているだけかもしれないと思って。

「……？」

団長は、様子のおかしいヘルに、顔をしかめる。

「……なんだ、どうしたんだ。そんな幸薄そうな面しやがって……」

「あのね、団長。さっきヘルが八百屋にお金がどうとかだって、MAXに言われたんだ」

クレハの意味不明な解説から、団長はすぐに理解出来なかったが、ピンときた。

「……なんだ、八百長って言われたのか」

「……」

「俺たち審査員が、金で買われたとでも思っているのか」

「ち、違います……！　でも……でも、分かりません……」

ヘルは一度否定したが、すぐに自信が無くなって視線を落とした。

団長はふうと息をつくと、何か探るように、ヘルをじっと見ている。

「……実際、俺もルネ・ヴィルトンは怪しいと思っているから、否定は出来ない」

「……」

「……でも、俺は今年のルネ・コンの絵の中で、お前のが一番好きだったけどな」

「……」

ヘルがふと顔を上げた時、団長は既に背を向け、立ち去ろうとして

いた。
再び日差しの中へ出た事で、暑そうに、手のひらで影を造りながら。

「……」

一番凄い、一番巧み、一番才能がある、このような言葉は一切使わず、彼は「一番好き」と言った。
しかし、ヘルにとってこれほど新鮮で、嬉しい言葉は無い。この言葉なら、信じようと思えるから。

なんだろう。今までずっとモヤモヤしていた心が、少しだけすっきりしている。あんなに恐い恐いと思っていた団長が、太陽の日差しの中でたくましく見える。

そして、自分の悩んでいた事に、たとえ答えは出なくとも、あのような人が団長であるならばルネ・ヴィライアーでいたいと思える。

あの人は、もしかしたら自分以上に家柄で苦労した人かもしれない。

なのに、他人を気遣う余裕すらある。

強くて、かっこいい。

―draw

＊番外編～強い男！～（後書き）

黒檀様にファンアートをいただきました。
本当に可愛らしい一年生コンビです！！ありがとうございます！！

＊番外編～テストは戦争だ〈上〉～

考える事が出来ないと、絵なんて描けない

芸術なんて出来やしない

クレハは誰もが知ってるアホである。
テストはいつも五点以下で、欠点ばかり。何しろ全てが意味不明な回答で、たまにある選択問題の数字なんかが合っていて数点取れると言う始末である。

「いいか、クレハ！！　一年生最初のテストだからって舐めてかか

ってたろ。美術系だから勉強いらねって、舐めてかかってたろ！！
　でもな、義務教養のあるうちはせめて赤点取らないくらいに勉強頑張ってねえと、この先いざと言う時に生きて行けねえからな。長く芸術をしていくって事は、考え続けるって事だぞ」

団長はクレハを机に座らせて、黒板の前でバンと教卓を叩いた。

クレハはぽかーんとしたものである。頭に花咲かせたこの阿呆に、どうやって追試まで勉強を教えれば良いか本当に悩む所。
正直団長だって全ての教科が得意な訳ではない。勉強は苦手な方ではないが、それが教えるのが得意かと言うと話は別だ。

「いいか、もうすぐティアンが来るから、奴に教わるんだ。あいつは勉強だけはやたらと出来る七三眼鏡野郎だからな」

「ぎゃははは☆」

クレハは何が面白かったのかお腹を抱えて笑ったりしている。ほんっとうにカオスな奴だな。
団長は目の前の一年生をＵＭＡでも見ているみたいに、不思議そうな末恐ろしそうな顔をしている。

「……誰が七三眼鏡だって」

いきなりに扉が開いて、いくつかプリントを持ってきたティアンが入ってきた。何と言う地獄耳であろうか。しらーっとした視線がちくちく突き刺さる様でかなり冷や汗ものである。

ティアンは持って来たプリントをバンと机に置いて、団長を多少ビビらせた後、

「これさえやってれば追試は合格すると思うよ。僕が一晩で全教科作ってあげたんだから、感謝したまえクレハ」

眠そうな顔は一切見受けられないが、流石のティアン、後輩に感謝を求めている。

「うん、ありがと先輩」

多分クレハは何の事か分かっていないが、椅子の上で揺れながらお礼を言っている。
しかしティアンはスタスタと扉の方へ行ってしまった。

「おい、ティアン、クレハの勉強は!?」

「何で僕がそこまで面倒見なきゃいけないんだい。それに教えるのは得意じゃないんだ、答えを無様に間違える所とか見たらイラッとするからね」

「……」

彼はやはり、涼しい顔をしていたものの、疲れからかいつもより嫌味に切れがある。後輩の為のプリントを作ってくれただけ彼にしては慈悲深い。

「だから、僕の代わりにリオを連れてきたよ」

彼は向こう側でげっそりしているリオを引っ張ってきた。「何で僕が……」とか言いながら、リオは引っ張られるままに教室に入ってくる。

団長は心の中で「すまない」と呟いて、そのまんま立ち去っていくティアンの背中を見送った。

「ほらみろ、先輩がこんなにいろいろしてくれてんだぞ。お前も頑張れよ！！　じゃないと次の研修、本当に連れてかないからな」

「えええええ！！　それだけは勘弁してよ団長」

「だったら頑張って追試に受かれ！！」

団長は人差し指みたいなものが先っちょについた棒を、ズイッとリオに渡して、

「頼むぞリオ」

「……なんなんですか、これは。何も聞かされずに連れてきたのですが」

「クレハが全教科赤点で、追試に受からないと次の研修に連れて行けないらしい。教えてやってくれ」

「……そう言う事ですか」

リオはいったい何だと思ってついてきていたのか、クレハの勉強を見ると言う事を聞かされた後は、普通に「なるほど」という顔をしていた。そして、にこっと笑って、

「で、クレハはどのくらいの点数で赤点を取ったんだい？」

「……んーとね」

聞いてくるリオに、クレハは自分の机をがさがさ漁って、ぐしゃぐしゃになったプリントをいくつか取り出し始めた。

一枚目、化学6点。

「……」

二枚目、ギリシア語9点

「……え」

三枚目、数学2点

「……（汗）」

その後続々とでてくる歴史やら生物やらのテストが、ほぼ全て一桁であった事に、リオは愕然とした。リオ自身、今まで努力してエリートな人生を歩んできた秀才であるがため、このような点数はまるで見た事がなく、世の中に存在する事が驚きで仕方がなかった。そもそもギリシア語が9点って、いったいどうやって話しているんだよ、と言いたい。

「……凄いだろ」

「ええ、予想外に驚きの点数ですね。追試まで五日しかないってのに、大丈夫なのでしょうか」

「それはお前次第だ」

「……」

さて、とんでもない事を任されてしまったぞ。リオはいつもの穏やかな表情を引きつらせ、何がおかしいのか「ぎゃはは」と笑っている目の前のクレハを、これまた謎の陳種でも見るようであった。

とりあえず落ち着いて、いつもフレイに教えるように接してもみようかと思った。何しろフレイも赤点の常連で、保健体育以外はほぼ苦手であると言う、生粋のアホ男子であるので。それでも赤点を取るのは多くて４教科くらいだろうか。全部一桁だなんて見た事はない。

今はシーダがフレイを見ている。クレハと同じように五日後の追試を乗り切れるように。

「……じゃあクレハ、ティアン先輩が持ってきてくれた問題、ちょっと解いてみようか」

「はーい」

リオがその数学のプリントを見て、「なんだこれは」と思うくらいに簡単な問題の羅列に、少々恐れすら感じる。

一体全体クレハがこれのどこを間違えるか気になるが、とりあえず渡して、様子を見てみよう。

しかしながら、こんな簡単な問題にクレハは頭をひねらせ、「わかんね」とプリントの端に落書きを始める始末。

「ちょ、何やってんのおおおお！！」

「だって、分からないもん分数なんて」

「分数は分数だよ。分数は所詮分数なんだよ！！」

リオも自分がいったい何を言っているのか、もう訳が分からなくなる程に驚きを隠せない。

小学生で習うような事が、そうクレハには意味不明なのだ。

団長は後ろの方から頭を抱えている。

「頑張ってリオ……」

「団長！！　人ごとだと思って！！」

リオはもう、どう手をつければいいのか分からなかったが、とりあえず黒板で解説から始めようと思った。

「流石に、３＋５くらいは分かるよね」

クレハは一時迷って（なぜ迷うのか分からなかったが）、大きく手を挙げ

「２」

と、自信満々に言いきった。なぜそうなる。

リオはもう泣きたくなった。

「何でそうなるのかな」

「だって、こうやって指を使うでしょ」

クレハは1、2、3と指を折って、そのまま1、2、3、4、5と追加して指を折った。しかし問題は、3以降を折り返した所にある。戻ってきて、2になった訳だ。

要するに過程を全く気にせず、出てきた答えをそのままどや顔で言いやがった訳だ。

「……」

「あってる！！」

「全く違います」

リオは一度深呼吸して、教卓にもたれかかった。ちょっと勉強はやめだ。この少年の生体を知らねば対策の打ち様がない。

きゃっきゃと笑っているクレハは無邪気で、端から見れば屈託のない後輩であるが、いざこうなると面倒くさくウザタらしい。しかしそれがクレハである。よくわかった。

団長は、どうしたものかと後ろの方で考えている。このままではリオの身が持たないと思って、そそくさと助っ人を呼びに行った。

「ねえクレハ……。君、今までどうやって生きてきたの？　買い物とか、どうしてるの？」

「買い物くらい出来るよ」

何言ってるの？と言いた気なクレハの視線に、リオは持っている人差し指のマスコットのついた棒をへし折りたくなった。

「数学も同じようなもんだよ？」

「……フーン」

「……聞いてないでしょ。もう、全く……」

リオは、なぜ自分がこんな惨めな気持ちにならなければいけないのか理解出来ないが、そもそもこの少年はアルプスの奥地でヤギと共にでも住んでいたのならともかく、有名なロズベルト美術学院の養子として育ってきているというのに、何と言うとんちんかん。今までいったいどういう教育をさせてきたのか。

スノーに聞いてみたいものだ。彼は一応クレハの兄ではないか。

「……そうだよ」

リオはクレハに背を向け、教卓に拳を打ち付ける。

「そうだ、そうに決まっている。スノーが面倒を見るべきじゃないか。あいつはそれなりに人並みに勉強はできるんだ、努力をしないだけで。出来るだけエネルギーを使わずにそれなりに点を取るやり方を知ってるじゃないか、あいつは！！」

しかし、スノーの事を思い浮かべたものの、とんでもない面倒くさがりの彼が弟の勉強を見る訳なんか無いという結論に行き着く。

大きなため息しかでない。

「どうしたのリオ先輩」

「……いや……なんでもないさ……」

リオは再びクレハの方に向き直った。

少し疲れきった顔をして、机にちょんと座る彼をまじまじと見おろす。

「君、いつもどうやって絵を描いているの？」

「何となく」

「……だろうねえ」

この答えには大きなため息しかでない。リオにとって感覚で絵を描く奴は苦手以外の何者でもない。この世の中、感覚で絵を描く奴は沢山いるが、そこから本当に天才的な奴って確実に居るのだが、数少ない。それ故に貴重とも言える。だから天才って言われるんだ。世の中には考えて芸術をする者の方が圧倒的に多いのだ。勿論、感覚もその中に必ずあるが、何も考えずに描いている奴って、実際には本当に本当に稀な能力者だと思う。

天才と言う言葉は、あまりに好きではない。

「僕はね、感覚とか、やってたら何とかなったとか、才能とか天才とかって、全然好きじゃないんだ。もちろんね、勉強とは全く頭の使いどころが違うから、頭良くなれとは言わないけどね。でも、必ず芸術って考えるんだよ」

「……」

「ま、君に何を言っても、何にも分からないだろうけど。君は感覚的なタイプだろうからね。僕は勿論そのようなタイプが居る事を認めているけど……」

そう言う奴は嫌なんだよね、と言う言葉の先を濁した。だって、これは結局自分に無い物への嫉妬でしかないから。

そのとおり、これは嫉妬なんだ。天才とか、才能とかへの。

「……まあ、聞いてよ。分かってなくてもいいからさ。……天才って、きっと色々居るんだと思うよ。感覚的に持っている物を持って生まれた人の事も言うだろうし、努力して同じ舞台まで上ってきた人の事も、評価されたならば天才だろうし。……でもね……」

リオは、クレハに言っているのか自分に言っているのか、もはやもう、分からなかった。

努力が偉い訳ではないこの世界、最初から才能を持った奴とそこまで這いつくばった奴の、どちらがどうであるとか、関係ないと分かっているが。結局は作品だから。

でも……

「……でもね……感覚だけで絵を描いている人ばかりじゃないんだよ。考えて考えて、考えて勉強して、研究して絵を描いている人だって、勿論居るんだ。クレハだって、いつかスランプや、自分の表現に迷った時に、頼れるものが感覚だけだったらきっと辛いよ。知識や思考能力は、そう言った時支えになってくれるから」

「……へえ……」

ポヤンとしたクレハの表情を見ていれば、彼が全くもって理解していない事は分かっているが、まあそれはそれで良い。クレハだって別になにも考えていない訳ではないだろうし。彼は才能肌だ。自分の嫌いな。それでも、欲しくてたまらなかった力。

クレハはニカッと笑って、前のめりになってリオに言った。

「リオ先輩って何でも出来るんだねえ。絵もあんなに凄いのに、勉強だって出来ちゃうんだもん！！　かっこいいしさー！！」

「……」

いきなり何を言っているんだと思ったが、彼の目を見ればそれが、彼の偽り無い言葉である事が分かるからかえって恥ずかしくなる。ゴホンと咳払いをして、教卓の周りを一度ぐるっと歩いたりしてみる。

馬鹿なくせに、やはり彼は普通の人とは感覚の違う、天才の逸材なのだろう。バカと天才紙一重とは、彼の為にある言葉か。

自分が何でも出来ると思わないし、絵だって努力でやっとヴィライアーに辿り着いたくらいのものだ。自分にあるのは感覚的な才能ではなく、努力して考える事の出来る力。

『でもそれも才能って言うのよ』

昔、シーダがそう言ってくれたのを思い出す。

少しだけ気持ちに余裕ができたような、優しい気分になれた気がする。
クレハは口をV字にさせて、足をぶらぶらさせていたりする。勉強する事に、文句を言っていないだけ彼は偉いかもしれないな。
もう少し付き合ってみるか。
リオは金髪を後ろに払って、自分に気合いを入れてみた。

そんな時、いきなりにガラッと扉が開いて、

「リオ！！　こうなったら団体戦だ。テストは団体戦だ！！」

団長がフレイとシーダを連れてきた。シーダはやる気満々であるが、フレイはだらしなく猫背で、「勉強やりたくねーよー」とか言っている。

「フレイとクレハ、一緒に勉強させるのよ！！　頑張りましょうリオ！！」

流石シーダである。人の面倒を見る事に関しては、誰よりもやる気と根気と技術がある。「ほら座りなさい！！」とフレイの尻を叩いて追い立てる。彼女はスパルタだ。

さて、凄い事になった。

問題児二人を相手に、どうしたものか。

―draw

＊番外編～テストは戦争だ〈下〉～

どんな分野の知識だって、

芸術においては発想の種となる

「いいこと、クレハ・ドルフォード。フレイ・レステヴァン。あなた達このままじゃ、次の研修に行けなくなるのよ」

「その話はもういーよシーダ母さん。お説教はいいから、とっとと始めてくれよ」

フレイは憂鬱そうにハッと笑って、机にだらりともたれている。
彼は今回、美術史と考古学を落としたのだ。3年生までの教養学科と違い、おおよそ自分の興味ある教科を選択出来る身分であるのに、彼は今回も懲りずに赤点を取ったのである。

「あんたの落とした教科って、ただの暗記物じゃないの。教える事なんてほとんど無いわ、覚えればいいのだもの」

「どうやったら覚えられるの？　脳内にメモ紙でも貼付けられればいいのに」

大げさにからかった口調で、フレイは言ってみせた。それにクレハは多いに大爆笑と言った所だ。団長は後ろの方でガクンと項垂れ、リオにいたってはため息しか出なくて、シーダはお冠であった。

握りこぶしを熱くさせて、彼女は目の前の生徒に隕石を投下したのだ。
割と潔い音が二つ鳴った。

「フレイ……あんたはもう落ちようが研修に行けなかろうが、どうでもいいわ。ほとほと愛想が尽きました。勝手に脳内にポストイットでも張ってなさい。でも、クレハは私が責任を持って試験に合格させます。ええ、私は一度言った事を決して曲げたししないわ」

「……ちょ……え、おかーさーん」

「じゃあクレハ、あなたの算数から見てあげるわね」

シーダはフレイの方をまるで見ないで、クレハの前ばかり立ってい

る。そして、彼の教科は数学であるのに、“算数”と言ってそこから教える気満々である。
リオもどうやらそっちが気になる様で、シーダの隣で顎に指なんか添えたりして、考え込んでいる。

「でもね、シーダ。クレハは凄いよ。フレイの中途半端などうしようもなさとは比べ物にならないくらい、それは清々しいよ」

「リオ、あなたが言いたい事は、これから私も分かるでしょうよ」

シーダは何やら持ってきたカバンから、数字の書いたチョコレートのファミリーパックを取り出した。それを大きく開けて、クレハの前に並べる。当然チョコレート中毒の彼は、目を輝かせるのだ。

「わああ」

「ダメよクレハ。これはね、勉強ができた子にしかあげられないのよ」

シーダの口調はぴしゃりとしたもので、いつもの少女らしい彼女と言うよりは、教え子の世話を焼いている教師に見える。リオには到底真似出来ない態度であろう。彼女は今度は、板チョコを取り出した。

「チョコレートの数ならば、数えられるんじゃないのクレハ。さて、この板チョコ、横に4粒、縦に3粒入っているのよ。だったらいったい、全部で何欠片あると思う?」

「12粒!!」

「ほら正解。あなた本当は出来るのよ」

彼女の思惑はあたった。クレハは数学の全てをチョコレートに置き換える事で、小学生レベルは出来てしまうのだ。様は考えようとするかしないかの問題で、チョコレートは彼にとって死活問題であるために、彼も必死になって考えるのだ。

シーダの教育は恐ろしくも効果的である。クレハがチョコレート中毒である事、定期的に口にしなければ、薬中の様に暴れたい衝動に駆られる事を知っていながら、問題が解けるまでそれを与えなかった。

一問解けたら一欠片、と言う具合に、アメと鞭戦法を貫いたのだ。クレハと言えど、これはシーダの思惑通りであろう。

問題はフレイである。奴はひねくれた勉強嫌いである。たかが美術史と考古学であるが、興味がなければおおよそつまらない分野なのであろうか。

「古代ギリシアの陶器画なんてクソどうでもいいって話だ全く。今後何の役に立つって言うのか、知ってたら教えてほしいぜ」

「……またそんなこと言って。嫌味が言えるなら勉強だって出来るだろ」

リオはシーダがクレハを見ている間、仕様がなくフレイを受け持った。美術史はちょうどギリシアの古代陶器画の部分で、暗記と陶器画の見方のこつを覚える意外は、このテストをパスする方法はない。記述と、論文、半々のテストである。古代ギリシアの陶器画とは、その名の通り、壺などに神話や文化を描いた絵の事である。学者達

は長年このような古い絵を研究し、神話の暗号を見極めてきた。して、神話から、絵を研究してきたのだ。

リオは数ある陶器画の資料集をぺらぺらめくりながら、今更これらをどのように教えようかと考えていた。

「ギリシア神話にもほとんど興味のない君が、いきなり陶器画を見ろっていたってね……」

ぶつぶつ文句を呟いたりしながら、めくる冊子の中で、リオはふと一枚の陶器画を見つけた。

自分自身少しハッとした作品であったのと、これは良い例として、陶器画の見方を教えられるのではないかと思って取り出す。

「ひとつ、見方を言うならね。この陶器画に描かれた人物ってみんな横を向いているだろう……」

リオはその冊子をフレイの机の上において、赤い下地に黒い人物の描かれた陶器画を指差した。そこに描かれていた人物は、全て横顔が見えるように描かれていた。

「基本的に古代ギリシアの陶器画に描かれた人物は横を向いている。真正面はタブーなんだ」

「……何でだよ」

フレイは少し、興味を示し始めた。

「古代ギリシアの絵画には、正面は“死”の意味を暗示していた。だから、こちらの女神アテナの持っている盾、“ゴルゴンの盾”は

可笑しいけど真正面を向いているだろう？　アテナの盾はメデューサの首が描かれている事が多いから、それに描かれているゴルゴン（メデューサ）は前を見ているんだ。メデューサの神話くらい知っているだろう？　少なくともその目を見たら石になるって」

「……まあな、そのくらいなら」

「だから、古代ギリシアの人はそこに“死”を見いだし、正面＝死を表したんだね」

沢山の人々が、どんなポーズを取っていようが横向きであるのに、メデューサだけ滑稽な事に正面を見ている。これは思いの外に笑える絵面である。

リオは再び、机の上に冊子を載せた。新しい写真には、ちょっと想像しがたい絵が載っていた。

「……これ、何してる絵だと思う？」

「……人間が目をばっちり開けたまま横になっていて、そのおでこに小さい羽の生えた妖精みたいなのが乗っている……と。何じゃこりゃ」

「眠りを示している絵だよ、これ」

リオはばっちり目を開けたままの人物を指差した。

「古代ギリシアの絵画形式に、目を閉じると言うのはないんだ。それは昔程にそうだよ。目を閉じて描くと言う事をしない代わりに、眠りを擬人化した神、ヒュプノスを頭上に描くんだ。それだけで、暗示的にこの人物は眠っていますよ、と言う事になる」

「……ほほー」

フレイは分かっているのか分かっていないのか、やけに熱心にその写真を見ている。

ヒビの入った古めかしい陶器に、堅苦しくて意味不明な絵が描かれていると、まあ今までは思っていた。しかし、リオの二つの例を聞いただけで、少々面白いのではないかと、フレイは珍しくそう思っていたのだ。

「よくみたら、結構ウケる絵とかあるな。このおっさんマツゲ凄すぎなんですけど」

「……それは“エウフロニオス”って言う画家の陶器画だよ。彼はやたらと睫毛を描くんだ」

陶器画の画家まで色々と居るのか。フレイは面倒そうな顔をしながらも、ちょいちょいと冊子をめくっては、思いの外食い入るように見ている。

「……なあ、背景が黒くて人間が白いのと、背景が赤くて人間が黒いのと二つあるけど、これは？」

「ああ……。“黒像式技法”と“赤像式技法”って言うんだ。黒像式が、背景が赤くて人間が黒い方さ。こっちが先に生まれて、その後背景が黒くて人間が白く描かれる赤像式が生まれたんだ。多分これは試験に出るから、覚えておいて」

「……はーん……」

フレイは試験と言う単語がでると、めっきりだらしなくなってしまって、耳を掻いたりしている。
隣でクレハが、チョコレート欲しさにもの凄い勢いでプリントを片付け始めているら驚きだ。

「凄いわクレハ！！　あなた、やれば出来るじゃない！！」

クレハは別に問題を理解したと言う訳ではないが、問題をほぼ丸暗記しているらしい。今更全てを理解させようとしたって無理であろうから、とりあえず数学は解き方の手順などを丸暗記させ、付け焼き刃でも無いよりはマシと言う具合で、がんがんやらせていた。

そんな日々が、約五日間。
クレハへのご褒美は日に日に豪華さを増している気がするが、何もしていないからと団長がそれを用意し、それを餌にシーダがクレハを見て、やる気のないフレイに、いい具合にどうでも良いリオがちらほら教えるくらいで、あっという間に追試の日になった。

さて、クレハとフレイはどうなったのであろうか。

それは、今後の中国研修と日本研修に彼らが居るか居ないか確かめれば、自ずと結果が知れると言うものだ。

draw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8468x/

-ｄｒａｗ-

2011年11月5日04時22分発行